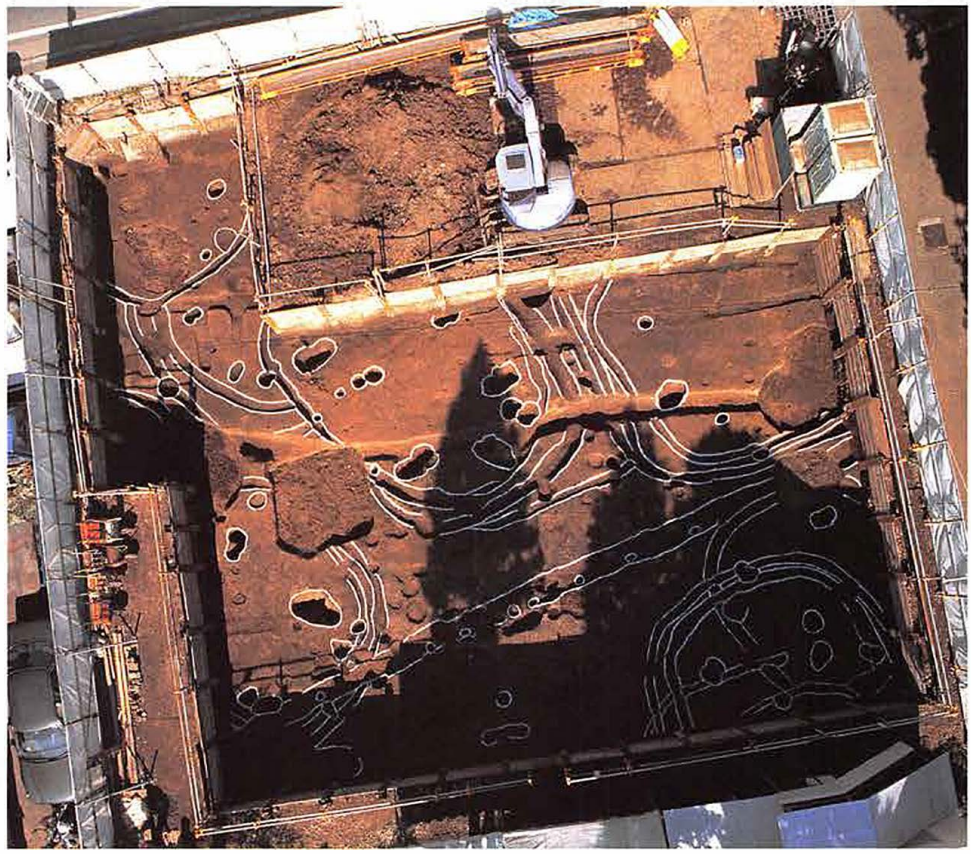
鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　14

平成９年度発掘調査報告

（第２分冊）

平成10年３月

鎌倉市教育委員会



大倉幕府周辺遺跡群

北条小町邸跡

総　目　次

（第１分冊）

序文……Ⅲ
例言……Ⅳ
平成９年度調査の概観……X

1　名越ケ谷遺跡（No.231）大町四丁目1736番２外地点
第一章　遺跡地の歴史と地理的環境……5
第二章　調査の経過と概要……9
第三章　基本層序……11
第四章　発見された遺構と遺物……12
第１節　第５面……12
第２節　第４面……15
第３節　第３面……28
第４節　第２面……42
第５節　第１面……47
第五章　まとめ……56
2　米町遺跡（No.245）大町二丁目391番１地点
第一章　遺跡地の概要……99
第１節　歴史的環境……99
第２節　調査地点……104
第二章　発見された遺構と遺物……105
第１節　中世・第１面……105
第２節　近世・第１面上層……128
第三章　米町遺跡の花粉化石……135
第四章　まとめ……142
3　北条時房・顕時邸跡（No.278）雪ノ下一丁目272番地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……159
第１節　鎌倉の地勢と遺跡の位置……159
第２節　遺跡地の歴史的環境……161
第二章　調査の経緯と成果の概要……167
第１節　調査の経緯……167
第２節　調査成果の概要……168
第三章　発見された遺構と遺物……173
第１節　遺跡の基本土層層序……173
第２節　第４面（古代）……174

第３節　第３面（中世）……177
第四章　自然科学分析 ……226
第１節　北条時房・顕時邸跡の中世以前の堆積層の粒度組成 ……226
第２節　土壙34の花粉化石 ……229
第３節　寄生虫卵からみた土壙34 ……233
第五章　調査成果のまとめと考察 ……236
第１節　遺構の変遷 ……236
第２節　若宮大路側溝と地割り ……240
第３節　中世と近世以降の便所出土遺物について ……245
第４節　柱穴底面に置かれるアワビについて ……246
4　北条小町邸跡（No.282）雪ノ下一丁目370番１地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……273
第二章　調査の経緯 ……276
第１節　調査に至る経緯 ……276
第２節　測量方眼の設定 ……276
第３節　調査経過 ……276
第４節　堆積土層 ……279
第三章　発見した遺構と遺物 ……282
第１節　Ⅰ面 ……284
第２節　Ⅱ面 ……286
第３節　Ⅲ面 ……289
第４節　Ⅳ面 ……292
第５節　Ⅴ面 ……295
第四章　まとめ ……299
5　円覚寺旧境内遺跡（No.434）山ノ内字瑞鹿山509番地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……321
第二章　調査の概要 ……325
１．調査の経過 ……325
２．測量軸の設定 ……325
３．堆積土層と生活面 ……325
第三章　発見された遺構 ……329
１．一面の遺構 ……329
２．二面の遺構 ……331
３．三面の遺構 ……339
４．最終確認トレンチ ……339
第四章　出土遺物 ……341
１．一面出土の遺物 ……341
２．二面出土の遺物 ……341
３．三面出土の遺物 ……348

４．その他の遺物 ……358
第五章　まとめ ……375
１．年代と変遷 ……375
２．建物の性格 ……376
３．遺物の様相 ……376
附　編　円覚寺旧境内遺跡の花粉化石 ……399
6　極楽寺旧境内遺跡（No.291）極楽寺三丁目348番２地点
第一章　遺跡の諸環境 ……415
第１節　遺跡の地理的環境 ……415
第２節　遺跡の歴史的環境 ……415
第３節　周辺の遺跡 ……415
第二章　調査の概要 ……418
第１節　調査に至る経緯と経過 ……418
第２節　基本層序 ……418
第三章　発見遺構と出土遺物 ……420
第１節　発見遺構 ……420
第２節　出土遺物 ……429
第四章　まとめ ……432

（第２分冊）

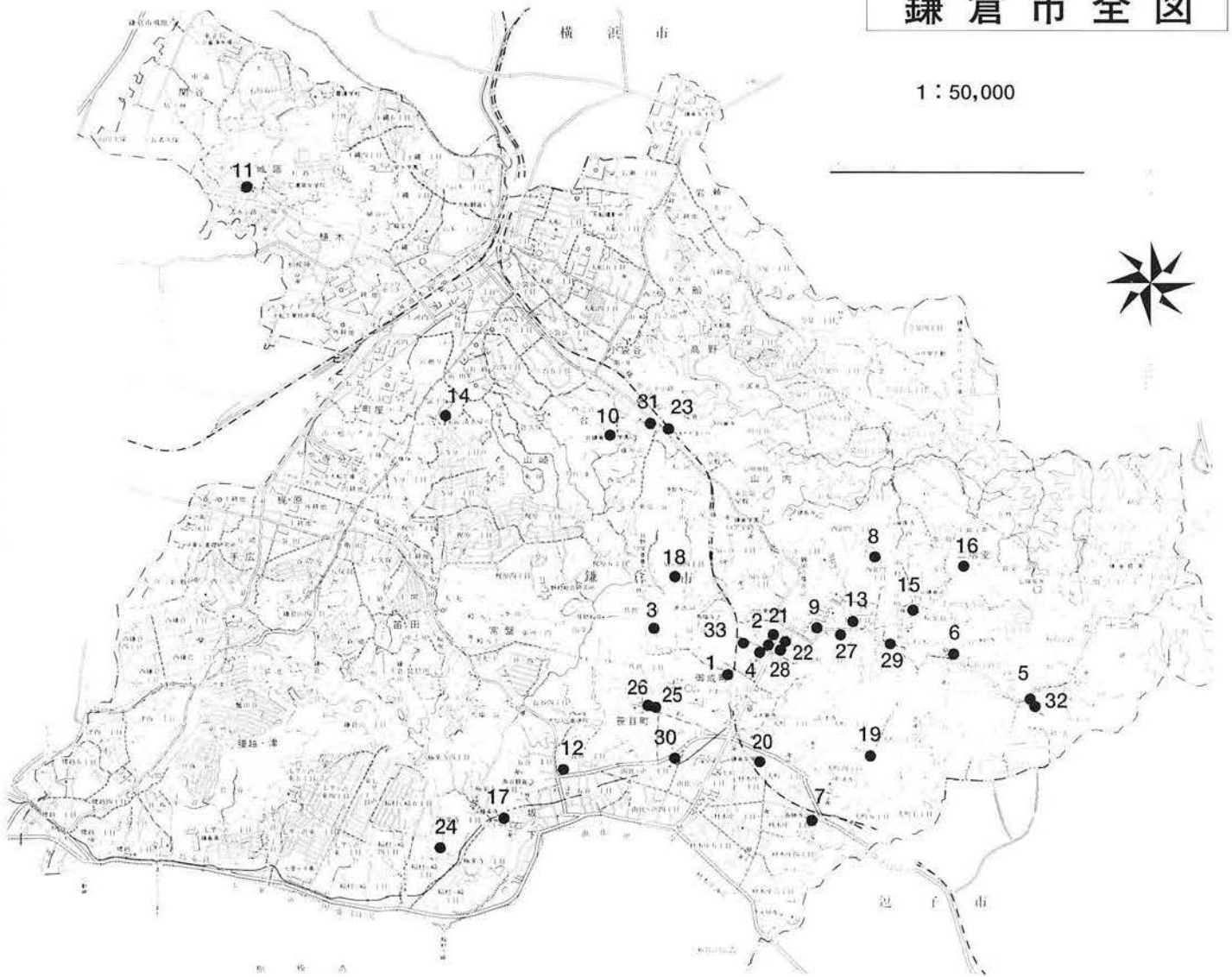
7　佐助ケ谷遺跡（No.203）佐助一丁目450番24地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……7
第二章　調査経過とグリッド配置、基本土層……9
第三章　検出遺構と出土遺物……11
１．現代地下構築出土遺物及び、表土層出土遺物……11
２．１面の遺構と出土遺物……15
３．２面の遺構と出土遺物……19
４．３面の遺構と出土遺物……26
５．４面の遺構と出土遺物……31
６．５面の遺構と出土遺物……35
７．５面下層確認トレンチ、中世層出土古代遺物……36
第四章　まとめ……37
8　佐助ケ谷遺跡（No.203）佐助一丁目450番25，27地点
第一章　調査経過とグリッド配置……80
第二章　検出遺構と出土遺物……81
１）１面の遺構と遺物……81
２）１Ｂ面の遺構と遺物……86
３）２面の遺構と遺物……92

4）3面の遺構と遺物 ……104
5）4面の遺構と遺物 ……113
6）4B面の遺構と遺物 ……120
第三章　まとめ ……123
附　編　佐助ヶ谷遺跡の花粉化石 ……126
9　大倉幕府周辺遺跡群（No.49）雪ノ下四丁目620番5地点
第一章　調査地点概観 ……185
1．位置と地勢 ……185
2．歴史的環境 ……188
第二章　調査の概要 ……190
1．調査にいたる経緯 ……190
2．方眼設定方法 ……190
3．調査経過 ……191
第三章　調査結果 ……193
第1節　概　要 ……193
第2節　各　説 ……195
第四章　まとめと若干の展望 ……255
1．弥生時代 ……255
2．鎌倉時代 ……255
3．中世後期 ……256
4．近　世 ……256
10　北条小町邸跡（No.282）雪ノ下一丁目369番1地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……291
1．遺跡の位置 ……291
2．遺跡の歴史的環境 ……291
第二章　調査の概略 ……296
1．調査の経緯と経過 ……296
2．グリット設定方法 ……296
3．調査の概要 ……296
第三章　検出遺構と出土遺物 ……299
1．近代・近世の遺構と遺物 ……299
2．中世の遺構と遺物 ……304
第四章　まとめ ……322
11　横小路周辺遺跡（No.259）雪ノ下五丁目557番1地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……347
第二章　検出された遺構と出土遺物 ……348
第三章　まとめ ……350
12　長谷小路周辺遺跡（No.236）由比ガ浜三丁目228番2地点
第一章　調査の概要と成果 ……359

第１節　調査に至る経緯 ……359
第２節　調査の成果 ……359
第二章　遺跡地の概要 ……361
第１節　鎌倉の地勢と遺跡の位置 ……361
第三章　発見された遺構と遺物 ……365
第１節　第１調査壙 ……365
第２節　第２調査壙 ……369
第３節　第３調査壙 ……370
第４節　第４調査壙 ……376
第四章　まとめ ……388
13　円覚寺門前遺跡（No.287）山ノ内字藤源治951番２地点
第一章　遺跡の歴史的環境 ……402
第二章　調査の概要 ……404
第１節　調査に至る経緯と経過 ……404
第２節　基本層序 ……404
第三章　発見した遺構と遺物 ……407
第１節　発見遺構 ……407
第２節　発見遺物 ……407
第四章　まとめ ……411
－附編－　鎌倉市円覚寺門前遺跡のテフラ（火山灰）分析結果 ……412
14　積善遺跡（No.440）十二所字積善952番６地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……426
第二章　調査の経過と層序 ……428
第三章　検出遺構と出土遺物 ……429
第四章　積善遺跡の花粉化石 ……448
第五章　まとめ ……454
15　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町二丁目28番３，５地点
第一章　調査地点の位置と歴史的環境 ……468
第二章　調査の経過と概要 ……470
第三章　検出遺構と出土遺物 ……472
１．第１トレンチ ……472
２．第２トレンチ ……475
第四章　まとめ ……480

鎌倉市全図

1：50,000



平成9年度の緊急発掘調査地点（1～18）
本書掲載の平成8年度調査地点（19～33）
※遺跡名は一覧表参照

佐助ヶ谷遺跡（No.203）

佐助一丁目450番24地点

例　　言

1．本報は、鎌倉市佐助一丁目450番24地点に於ける個人専用住宅建設に伴う緊急発掘調査報告である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は、平成８年５月20日から８月５日である。

3．本報の遺構、遺物の縮尺は次のとおりである。

①遺構配置図１／80・個別遺構図１／80である。

②遺構図の水糸高は海抜高を示す。

③遺物実測図は２／３・１／６の各縮尺を使用している。

4．遺物実測図には次の記号が使用されている。

釉の限界線－－－－－－使用痕の範囲

調整の変化点――――加工痕の範囲

5．本報の執筆・編集は高野昌巳が行った

6．本報の図版作成及び写真撮影は次のものが担当した。

①遺物図版　河内令子・宇賀神雅子・松田理枝

②遺構図版　高野昌巳・宇賀神雅子

③遺構写真　高野昌巳

④遺物写真　滝澤晶子

7．発掘調査に当たっては、以下の諸氏・諸機関にご協力を賜った。

・木村美代治（ＰＬ１－Ａ・Ｂ撮影）

・大成建設ホームズ南関東株式会社・㈱斉藤建設・社団法人鎌倉市シルバー人材センター

8．調査団編成

担　当　者　宮田　真

調　査　員　高野昌巳

調査補助員　安達澄代・河内令子・道山可奈子

調査協力者　池田義春・杉浦永章・長瀬充男・簑田孝善・渡辺久夫（シルバー人材センター）

本　文　目　次

例　言……3
目　次……4
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……7
第２章　調査経過とグリッド配置、基本土層……9
調査経過……9
グリッド配置……10
基本土層……10
第３章　検出遺構と出土遺物……11
１．現代地下構築出土遺物及び、表土層出土遺物……11
現代地下構築出土の中世遺物……11
表土層出土遺物……11
２．１面の遺構と出土遺物……15
土壙１、２、方形土壙……15
土壙１、２、方形土壙出土遺物……16
１面出土遺物……17
３．２面の遺構と出土遺物……19
土丹版築……19
鎌倉石切石列……19
輪花型火鉢……19
土壙３、４、５、６、７……19
２面土壙出土遺物……20
２面出土遺物……21
４．３面の遺構と出土遺物……26
柵列……26
柵列出土遺物……26
井戸……26
井戸出土遺物……27
土壙８……28
土壙９……29
土壙８出土遺物……29
３面出土遺物……29
５．４面の遺構と出土遺物……31
溝……31
溝出土遺物……32
柱穴列……32
土壙10～土壙13……32

土壙11出土遺物～土壙13出土遺物……32～33
4面出土遺物……33
6．5面の遺構と出土遺物……35
土壙14……35
土壙15……35
5面出土遺物……35
7．5面下層確認トレンチ、中世層出土古代遺物……36
5面下層確認トレンチ……36
5面下層確認トレンチ出土遺物……36
中世層出土古代遺物……36
第4章　まとめ……37

挿　図　目　次

図1　遺跡位置図……8
図2　グリッド配置……9
図3　基本土層……10
図4　現代地下構築出土遺物……11
図5　表土層出土遺物（1）……12
図6　表土層出土遺物（2）……13
図7　1面全体図……15
図8　土壙1、2、方形土壙……15
図9　土壙1、2、方形土壙出土遺物……16
図10　1面出土遺物（1）……16
図11　1面出土遺物（2）……17
図12　2面全体図……18
図13　土丹版築……19
図14　鎌倉石切石列……19
図15　輪花型火鉢出土状況……20
図16　2面土壙……20
図17　2面土壙出土遺物……21
図18　2面出土遺物（1）……21
図19　2面出土遺物（2）……22
図20　2面出土遺物（3）……23
図21　2面出土遺物（4）……24
図22　3面全体図……25
図23　柵列……26
図24　柵列出土遺物……26
図25　井戸……27
図26　井戸出土遺物……28
図27　土壙8、9……28
図28　土壙8出土遺物……28
図29　3面出土遺物……30
図30　4面全体図……31
図31　溝……32
図32　溝出土遺物……32
図33　横穴列……32
図34　土壙10、11、12、13……33
図35　土壙11、12、13出土遺物……33
図36　4面出土遺物……33
図37　5面全体図……34
図38　土壙14、15……34
図39　5面出土遺物……34
図40　5面下層確認トレンチ……35
図41　5面下層確認トレンチ出土遺物……35
図42　中世層出土古代遺物……35

写真図版目次

ＰＬ１　A.調査地より北東方面を撮影
　　B.調査地より北方面を撮影 ……41
ＰＬ２　A.調査前状況　B.重機による
　　表土掘削……42
ＰＬ３　A.現代地下構築（南から）
　　B.現代地下構築（東から）……43
ＰＬ４　A.１面土丹敷き（西から）
　　B.１面土壙１（北東から）……44
ＰＬ５　A.１面土丹敷き（東から）
　　B.方形土壙（南から）……45
ＰＬ６　A.２面輪花型火鉢出土状況
　　（西から）
　　B.２面全景（南から）……46
ＰＬ７　A.２面鎌倉石切石列（西から）
　　B.２面土丹版築（東から）……47
ＰＬ８　A.土丹版築（西から）
　　B.土丹版築（南から）……48
ＰＬ９　A.３面出土不明骨製品（北から）
　　B.３面柵列（南から）……49
ＰＬ10　A.柵列（北から）
　　B.３面土丹敷き凹状地（西から）……50
ＰＬ11　A.３面井戸１作業状況
　　B.３面井戸１セクション（東から）…51
ＰＬ12　A.井戸１頭蓋骨検出状況（東から）
　　B.３面井戸１半裁（東から）……52
ＰＬ13　A.３面井戸１（東から）
　　B.３面井戸１南壁 ……53
ＰＬ14　A.４面溝（南から）
　　B.４面溝（北から）……54
ＰＬ15　A.４面西部柱穴列（南から）
　　B.５面全景（南から）……55
ＰＬ16　A.調査区北西壁
　　B.４面全景（南から）……56
ＰＬ17　A.北東トレンチ北壁
　　B.北西トレンチ北壁 ……57
ＰＬ18　表土層出土遺物（１）……58
ＰＬ19　表土層出土遺物（２）……59
ＰＬ20　土壙１、方形土壙、１面出土遺物
　　……60
ＰＬ21　土壙３、４、２面出土遺物……61
ＰＬ22　２面出土遺物……62
ＰＬ23　２面出土遺物……63
ＰＬ24　２面出土遺物……64
ＰＬ25　２面出土遺物……65
ＰＬ26　２面出土遺物……66
ＰＬ27　土壙８、３面出土遺物……67
ＰＬ28　３面、溝１、土壙11、12出土遺物……68
ＰＬ29　４面、５面出土遺物……69
ＰＬ30　５面下層確認北東トレンチ……70
　　５面下層確認北西トレンチ……70
　　中世層出土古代遺物……70
　　井戸１出土頭蓋骨……70

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地は、JR 鎌倉駅西方にある佐助ヶ谷の開口部付近、佐助一丁目450番24に位置する。佐助ヶ谷は南北に長く、多くの小支谷を持った谷で南に向かって開口している。

佐助ヶ谷という地名に関しては、谷内に上総、千葉、常陸の三介の屋敷があり、三介ヶ谷と呼ばれていたものが転訛したという説がある。また、谷の北西奥にある佐助稲荷神社社伝には「佐殿源頼朝の夢に、当社の神が翁の姿で現れ挙兵を進め、佐殿を助けたので佐助という。」とある。このように地名の由来には言い伝えが多く、明らかではない。

谷内には前出の佐助稲荷神社のほかに、俗に銭洗弁天と呼ばれる銭洗宇賀福神社がある。銭洗宇賀福神社は鎌倉市扇ヶ谷にある八坂大神の境外末社であったが、昭和45年に独立している。隠れ里というご神体をまつる岩窟に銭洗水があり、それで洗ったお金を使うと二倍になって還ってくるという伝えがあり、巳の日には多くの人が参詣に訪れる。尚、神社参道のトンネルの上にはやぐらが見つかっている。

佐助ヶ谷の北には、七切通（ななきりどうし）の一つである化粧坂がある。この化粧坂の名の由来も討ち取った平家の武将の首を化粧し、実検した場所であるなど、種々の言い伝えがあるようだ。鎌倉の心臓部に近かったこの坂は、戦略上、重要であったようで、新田義貞が鎌倉に攻め入る際にこの化粧坂に一軍を向け幕府軍をやぶったといわれる。

佐助ヶ谷には、かつて国清寺、悟真寺、蓮花寺など幾つかの寺院が存在していたようである。国清寺（禅宗）は上杉憲顕が亡父憲房の菩提のために建立したといわれ、応永二十三年（1416）の上杉禅秀（上杉氏憲）の乱の際、禅秀の放火によって消失した。悟真寺（浄土宗）は、石見国の然阿良忠が、仁治元年（1240）鎌倉に下向し教化をしていたとき、北条朝直（大仏朝直）が良忠に帰依し、佐介谷に悟真寺を建てて住持とした。また、良忠が悟真寺に住し浄土宗を弘めていた時、鎌倉幕府第四代執権の北条経時が良忠を尊崇し、佐介谷に蓮花寺を建立し開山とした。蓮花寺は、後に光明寺と寺名を改め、寛元元年（1243）現在地の材木座に移転したといわれるが、確証はない。また、悟真寺が蓮花寺と改名し、さらに光明寺に発展したと考える説もあるようだ。そのほかに、佐助ヶ谷に存在していたと思われる寺院としては、松谷寺（谷の開口部付近の支谷松ヶ谷にあったといわれる。）、佐介谷禅房、七観音堂、天狗堂（佐助ヶ谷の東側丘陵南端付近を天狗堂山という。）、宝蓮寺、北斗堂、法界門、法性寺、薬師堂、等があったといわれる。

寺院以外では、北条時盛（父の時房は、佐介氏と称し、大仏殿と号した。）邸、上杉憲基邸があったとされる。上杉禅秀の乱の際には、足利持氏が憲基邸に逃げてきたようだ。憲基邸も禅秀によって焼かれている。

＜参考文献＞

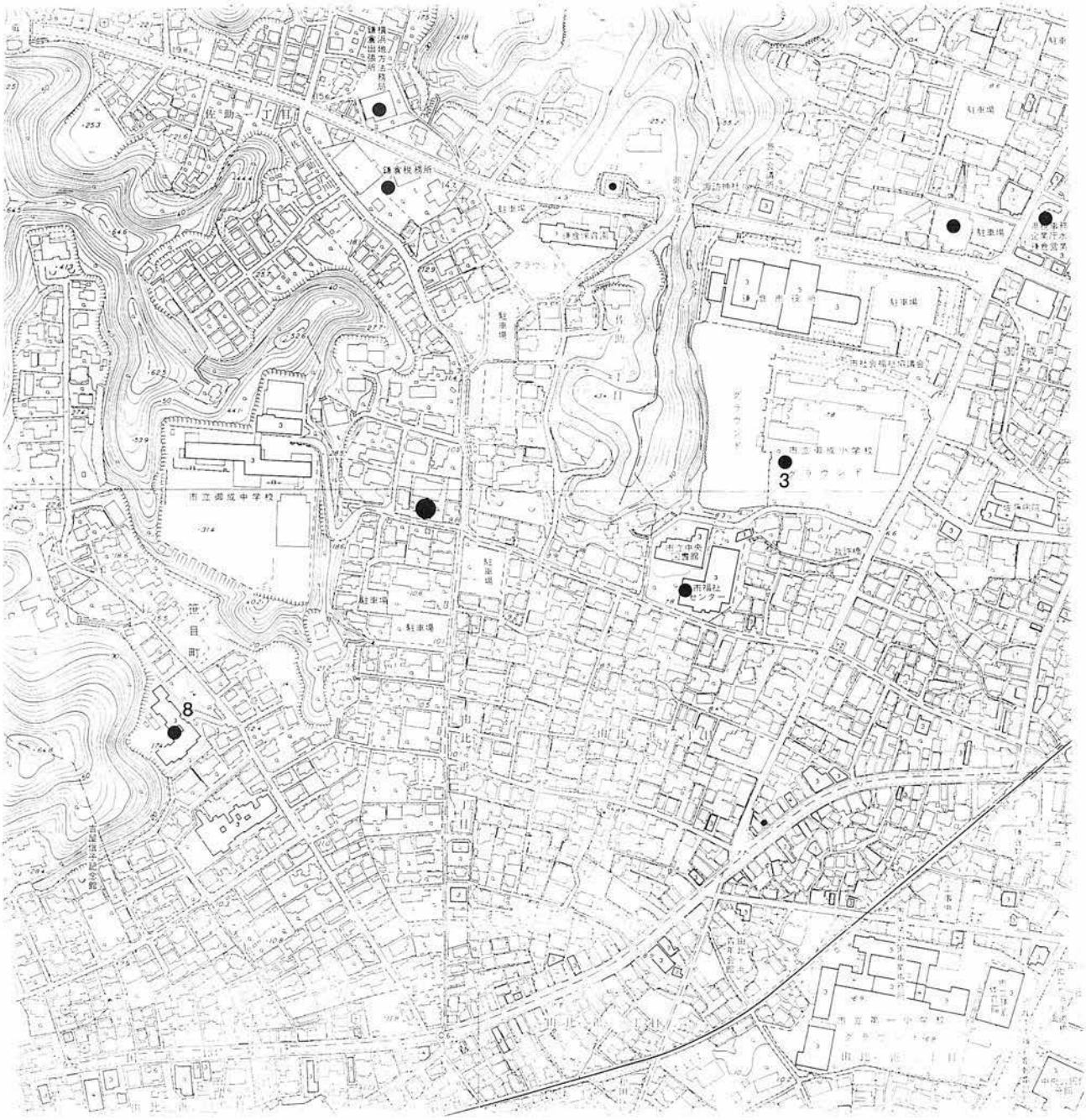
貫　達人『鎌倉市史』社寺編　1959年10月　吉川弘文館

白井永二編『鎌倉事典』1976年５月　東京堂出版

貫　達人・川副武胤『鎌倉廃寺事典』1980年12月　有隣堂

斉木秀雄『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務所用地）発掘調査報告書』第１分冊　1993年６月　佐助ヶ谷遺跡発掘調査団

手塚直樹他『佐助ヶ谷遺跡』1989年10月　佐助ヶ谷遺跡発掘調査団



1．本調査地点
2．今小路西遺跡（福祉センター用地）
3．今小路西遺跡（御成小学校内）
4．千葉地遺跡
5．千葉地東遺跡
6．佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）
7．佐助ヶ谷遺跡（横浜地方法務局鎌倉出張所用地）
8．笹目遺跡（笹目町330番－1地点）

図1　遺跡位置図

第２章　調査経過とグリッド配置、基本土層

本調査は、個人専用住宅建設に伴う緊急発掘調査として、平成８年５月20日から８月５日にかけて実施された。調査面積は、約80㎡である。

調査経過

平成８年

５月20日　重機による表土スキ取り　70～80cm

23日　重機による表土スキ取り終了

24日　１面精査、撹乱壙掘り下げ

25日　遺構の掘り下げ開始

６月３日　１面調査終了

４日　２面まで掘り下げ開始

15日　２面まで掘り下げ終了

17日　２面精査

19日　遺構掘り下げ

24日　２面調査終了、３面まで掘り下げ開始

図２　グリッド配置

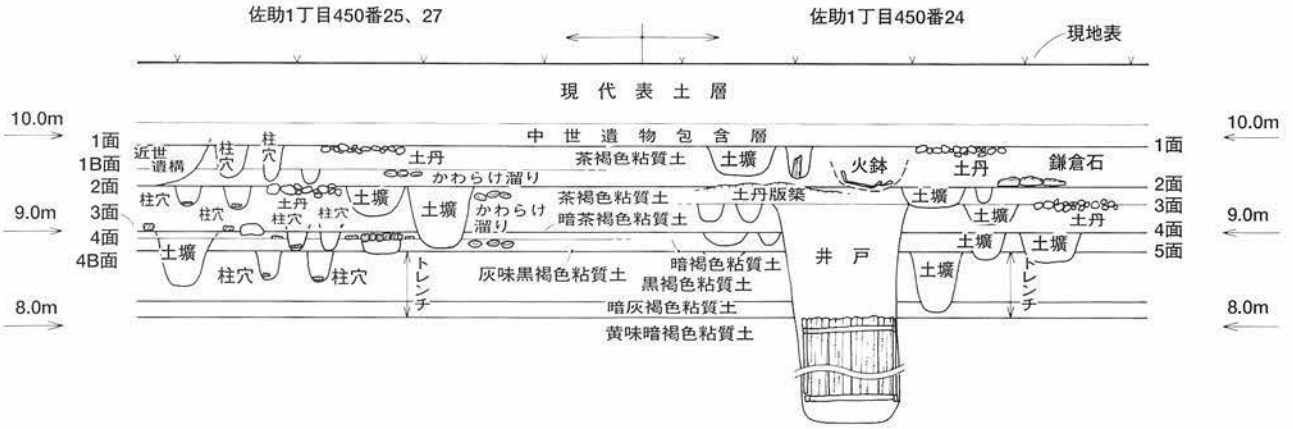


図3　基本土層

25日　3面まで掘り下げ終了

27日　3面精査、遺構を掘り下げる。柵列検出

29日　井戸検出

7月2日　井戸内から、人間の頭蓋骨検出

12日　3面調査終了

13日　4面まで掘り下げ

16日　4面まで掘り下げ終了、4面精査、遺構掘り下げ

18日　溝検出

24日　ポール写真による全景撮影

25日　5面まで掘り下げ、面精査、遺構掘り下げ

30日　5面調査終了

8月5日　調査終了

グリッド配置（図2）

測量の基準となるグリッドの設定は、調査地に任意の点を設け、その点で直行する東西、南北の軸線を設定し、それを基に2m×2mの方眼を設定した。南北の軸線方向は、磁北に対して、23°22′40″東に傾きを持つ。各グリッドの名称は、北西隅の杭名とする。市街地図との合成には、鎌倉市4級基準点の「D－254」「D－255」を用いた。

基本土層（図3）

本調査地は、おおよそ9層に分けられ、5期にわたる生活面を確認できた。尚、7層から下は、トレンチによる確認のみである。

第1層は、現代の表土層で、現地表下60～70cmの厚みで堆積していた。

第2層は、やや軟弱な、暗灰褐色土の中世遺物包含層で、1面上に20～24cm程堆積していた。

第3～5層は、やや軟弱な茶褐色粘質土で、それぞれ1～3面を構成している。土丹塊を多く含み、2面からは、良好な土丹版築地業が検出された。他にも、土丹塊が集中する箇所が、幾つか見られたが、整地に使われたかどうか定かではない。

第7層は、黒褐色粘質土で、極く僅かに遺物が出土している。第8層は、暗褐色粘質土の中世地山で、遺物は発見されなかった。第9層も、やや黄色味を帯びた暗褐色粘質土の中世地山で、やはり遺物は、発見されなかった。

第３章　検出遺構と出土遺物

１．現代地下構築出土遺物及び、表土層出土遺物

現代地下構築出土の中世遺物（図４）

現代地下構築は、１面検出時に発見され、現代の廃棄物を多く含んでいた。Ｉグリッドの南西に位置し、検出面からの深さは、約85cmである。用途は定かではないが、おそらく、物の保存などを目的とした室（むろ）のようなものと思われる。

図４－１～３は、瀬戸製品である。１、２は、灰釉卸皿の小片である。素地は、１、２共灰色で、１の釉は、灰緑色を呈し、一部剥落している。光沢はやや鈍い。２の釉は、灰白色で、外面下部から、外底部は無釉である。内面は気泡が多い。３は、無釉の入れ子である。素地は、灰色で、口縁部付近と内底部に灰緑色の自然釉がかかる。

４、５は常滑製品。４は、胴部片。灰色の胎土で白色小粒が混入する。焼きしまりは良好である。５は、底部片。胎土は、灰色で小石粒等が混入する。焼きしまりは良好

７～９は、糸切り轆轤成形のかわらけである。７は大皿である。胎土は、淡い橙色で、粉質であるが、多少微砂を含む。復元した口径は、14.8cmと大きい。８、９は小皿。８の胎土は、多少の微砂を含むが粉質である。色は、灰褐色を呈する。口径は、7.6cm。９は、砂質に近い胎土である。口径は、8.0cm。

10は、土製の鋳型と思われるが、明確ではない。軽く崩れやすい胎土である。

11は、泥岩製の砥石である。

表土層出土遺物（図５、６）

１は、染付皿で、近世の物と思われる。復元した高台径は12.0cmあり、大皿と思われる。内面には、民家や草木などが描かれる。体下部には一本の沈線、高台側面には２本の沈線が巡る。素地は灰白色で、割れ口はすっきりとし、精良で硬い土である。釉は、透明で光沢が良い。

２～10は、輸入陶磁器類である。２～５は、青磁。２は連弁文碗の口縁部小片である。素地は、灰色で緻密。釉は、淡い灰緑色で、気泡が多いため透明度は良くない。３は、折腰小鉢。素地は、明灰色、釉は、灰色味のある黄緑色で、光沢、透明度は良好である。復元した高台径は6.0cm。２、３は龍泉窯系の製品と思われる。４は、皿の底部である。内面には、櫛掻が施される。復元した底径は4.6cm。同安窯系の製品であろうか。５は、青磁香炉の口縁部小片である。胎土は灰色を呈し、釉は、灰色味を帯びた黄緑色で、透明感にやや欠けるが、光沢は良好である。６～９は白磁。６、７は口兀碗である。６は内面に、花葉文の型捺しが施される。釉、素地共に灰色味のある白色で、釉には透明感がある。復元した口径は、14.2cmである。７の素

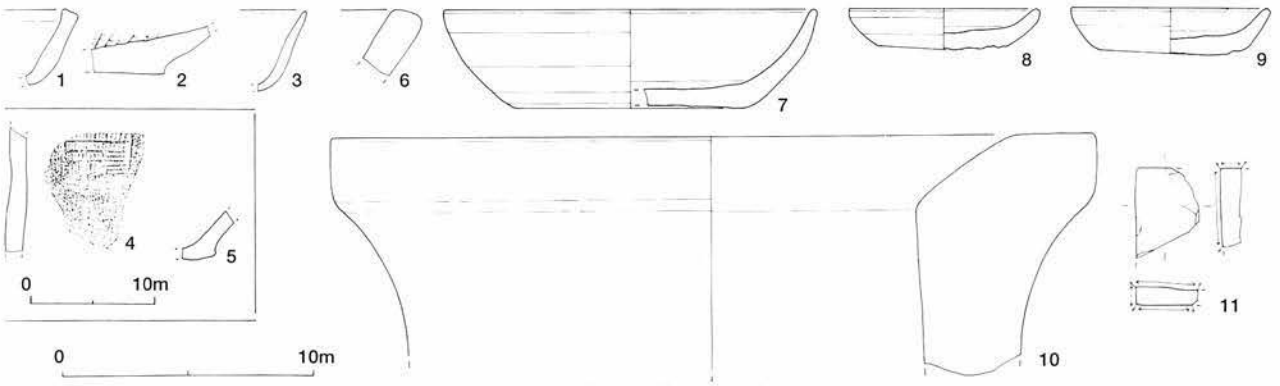


図４　現代地下構築出土遺物

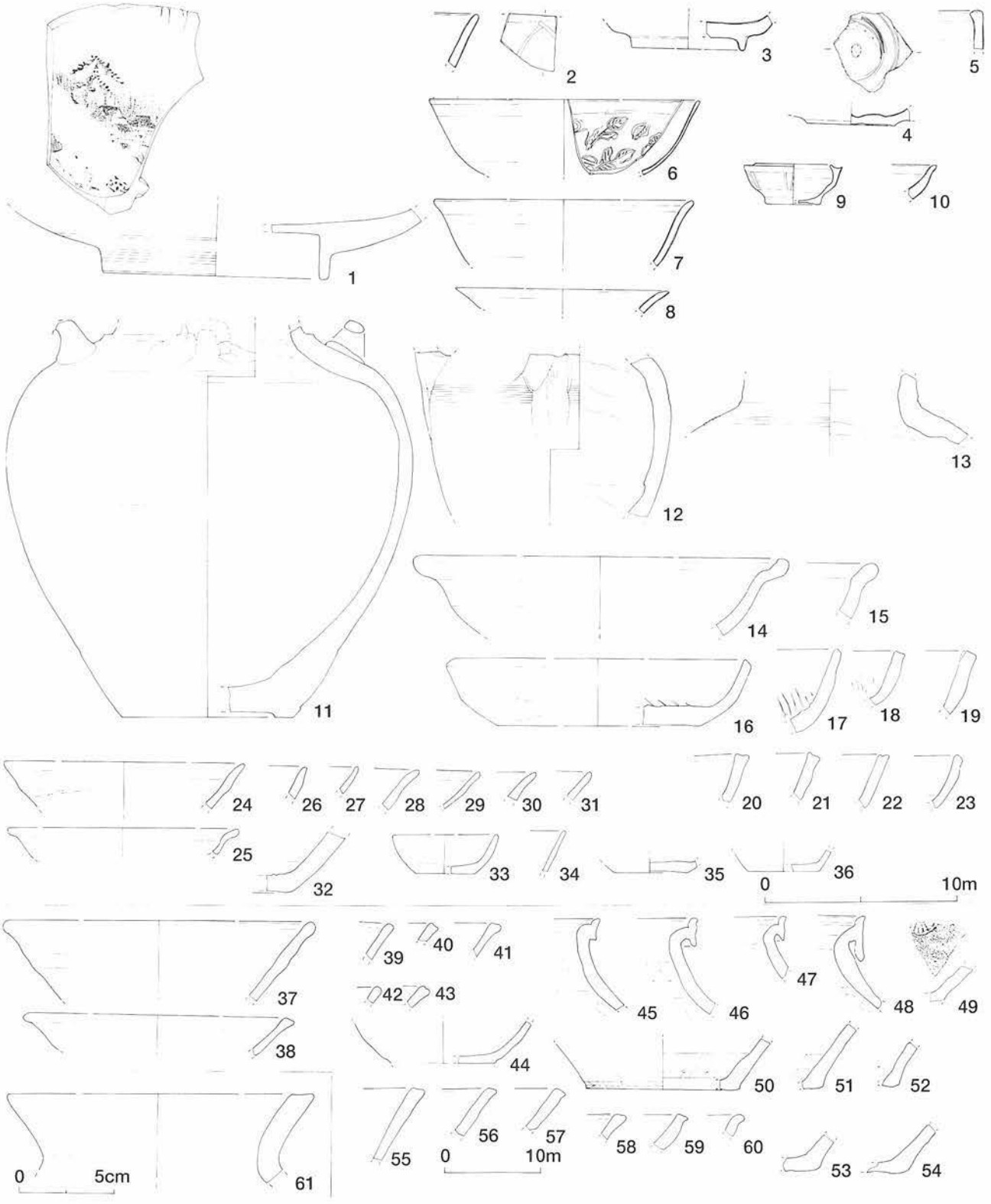


図5　表土層出土遺物（1）

地は、やや茶色味を帯びた灰色で、釉は灰白色を呈し、透明感、光沢共に良好である。復元された口径は、13.6cmである。8は、口兀皿。素地は、青味のある灰色で、釉は、淡い黄緑色を帯びた灰色を呈する。光沢は良好だが、透明感にやや欠ける。復元された口径は、11.2cmである。9は合子の身。素地は、灰白色で、釉は、淡く青味を帯びた白色を呈する。透明感、光沢共に良好である。復元された口径は、4.0cm、器高は、2.1cmである。10は黒釉の天目茶碗の口縁部小片である。素地は、灰色で、やや粗い。釉は、口縁部が薄く

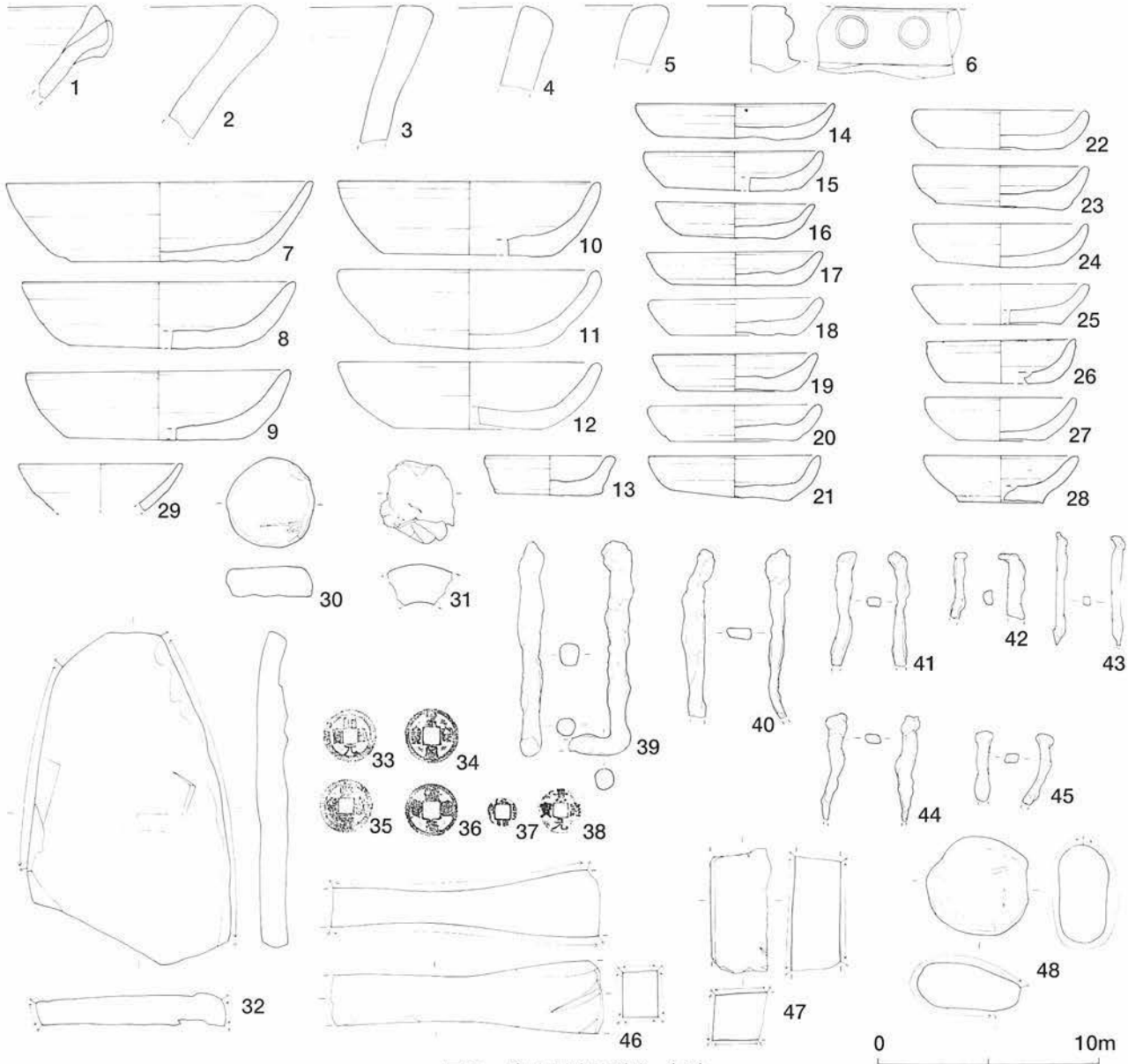


図６　表土層出土遺物（２）

かかり鉄色になる。口唇端から2.3㎜下は、茶色に発色する。光沢はやや鈍い。

11～36は瀬戸製品。11は、灰釉の四耳壺である。素地は、灰色で、黒色の粒子がやや目立つ。硬く、割れ口はすっきりとしている。釉は、暗緑色で、肩から上位には、降灰の痕跡が残る。内面にも施釉されている。光沢は鈍い。復元された高台径は、8.9cm。また、肩付近の最大径は、21.2cmである。12は、灰釉水注の胴部片である。素地は、灰色～肌色で、やや硬く、割れ口には多少の凹凸が見られる。釉は、灰緑色で薄めに施釉される。光沢は良好である。復元された胴部の最大径は、12.6cm。把っ手部分が僅かに遺存する。また、把っ手の付け根の高さには、４本の沈線が巡る。13は、おそらく、灰釉四耳壺の頸部片と思われる。素地は、灰色で、12同様やや硬く、割れ口には多少の凹凸が見られる。釉は、灰緑色で内面にも施釉される。光沢、透明度共に良好であるが、外面は再火を受け肌荒れがひどい。肩部には、４本の沈線が巡る。14、15は灰釉折れ縁Ⅲ。14の素地は、肌色で、やや軟質である。釉は、灰緑色で、光沢、透明度共に良好である。目立たないが、細かい貫入がびっしりと入る。復元された口径は、19.4cm。15の素地は、淡い肌色で、やや軟質である。釉は、薄い灰緑色で、光沢、透明度共に良好である。16～23は灰釉卸しⅢ。16の素地は、淡い肌色で、粒子はやや粗く、やや軟質である。釉は、灰緑色

で、光沢、透明度共に良好である。貫入は、あまり目立たない。復元された口径は、15.8cm。17～23は小片のため口径の復元はできなかった。素地は、淡い肌色～灰色である。釉は、剥落して殆ど残っていない物もあるが、概ね灰緑色で、光沢、透明度共に良好である。24は、灰釉の縁釉皿である。素地は、褐味灰色で、やや砂っぽい。釉は、淡い灰緑色で、光沢、透明度共に良好である。細かい貫入が、びっしりと入る。復元された口径は、12.6cmと、やや大きい。25は、灰釉折縁の小皿であろうか。素地は、淡い灰緑色で、黒色の微粒子が混入する。釉は、灰緑色で、口縁部と、外面の一部に、降灰の痕跡が残る。光沢は鈍く、透明度も、あまり良くない。復元された口径は、12.0cmである。26～31は、灰釉の碗の口縁部小片である。素地は、灰色～褐味灰色で、黒色の微粒子が混入する。釉は、灰緑色であるが、29は、発色不良で茶色くなっている。32は、灰釉折縁鉢などの底部片と思われる。素地は、淡い肌色で、砂っぽい土である。釉は、発色不良で茶色くなり、光沢、透明感共に悪い。33～36は、無釉の入れ子。33の素地は、硬くしまりの良い土で、やや褐味がかった灰色である。内面は多少黒ずみ、降灰が見られる。外面も、疎らに降灰が見られる。34は、口縁部小片である。素地は、やや硬くしまりの良い土で、淡い灰色である。内面の口縁部付近に、降灰が見られる。復元された口径は、5.4cm。35は、底部片である。素地は、硬めで、淡い灰色である。底径は、4.0cm。36も、底部片である。素地は、硬く、灰白色である。外底部は、糸切り後にヘラで調整される。復元された底径は、3.6cm。37～44は、山茶碗窯系こね鉢である。概ね灰白色の胎土で、白色の粒子や小石粒等を多く含む。37の内面下部は摩滅する。復元された口径は、32.5cm。38は、口縁端部が外へつまみ出される。復元された口径は、28.2cm。40、41、43は、口縁端部が凹む。44は、体下部から底部にかけての破片で、高台部分が剥落している。やや砂混じりの胎土で、軽く感じられる。内面の摩滅は、著しい。

45～61は、常滑製品である。45～54は、甕の口縁部または、底部である。胎土は、灰～橙色で、長石、石英、小石粒等を含む。49は外面に、菊花文の押印が残る。50の復元された底径は、16.0cm。55～60は、こね鉢である。胎土は、灰～橙色で、長石、石英、小石粒等を含む。61は、壺の口縁部の破片である。胎土は、灰色で、長石、石英、小石粒等を含む。復元された口径は、16.0cm。

図６－１は、魚住窯産こね鉢の口縁部で、ちょうど注ぎ口部分である。

２～６は、火鉢である。６は、瓦器質の物で他は瓦質である。２～５は、灰色～淡い肌色で、小石粒や雲母片などを含んでいる。６の胎土は、極く淡い肌色で、表面には磨きが施される。

７～28は、糸切り底のかわらけである。７～12は、大皿で、口径は、７が、14.0cmと大きく、他は、12.0cm前後である。胎土は、橙色から肌色で、白針、微砂、雲母などを含んでいる。13～28は、小皿で、口径は、6.0～9.0cmである。26は、口縁部に煤が付着しており、おそらく灯明皿に転用されたと考えられる。28は、炭化物が厚く付着している。再火を受けたのではないだろうか。

29は、白かわらけである。黒色の微粒子を含み、きめ細かく、焼成は良好である。復元された口径は、7.4cm。

30は、土製円盤で、かわらけからの転用品と思われる。用途は不明。31は、鞴の羽口の小片である。32は、すり常滑、33～38は、銭。33開元通宝、34、37皇宋通宝、35、36熙寧元宝、38聖宋元宝39～45は、金属製品。39は、鎹と思われる。40、44は、楔であろうか。他は、釘と思われる。いずれの製品も、錆や欠損のため、本来の寸法は定かではない。32は、研磨痕のある常滑片である。甕の胴部片を転用した物と思われる。黄茶色の胎土で、小石粒を含む。頻繁に使用されたと思われ、割れ口は、摩滅が著しい。46、47は、石製品で砥石である。46は、泥岩製の仕上砥、47は、材質は、不明であるが、中砥と思われる。48は、軽石。

2．1面の遺構と出土遺物

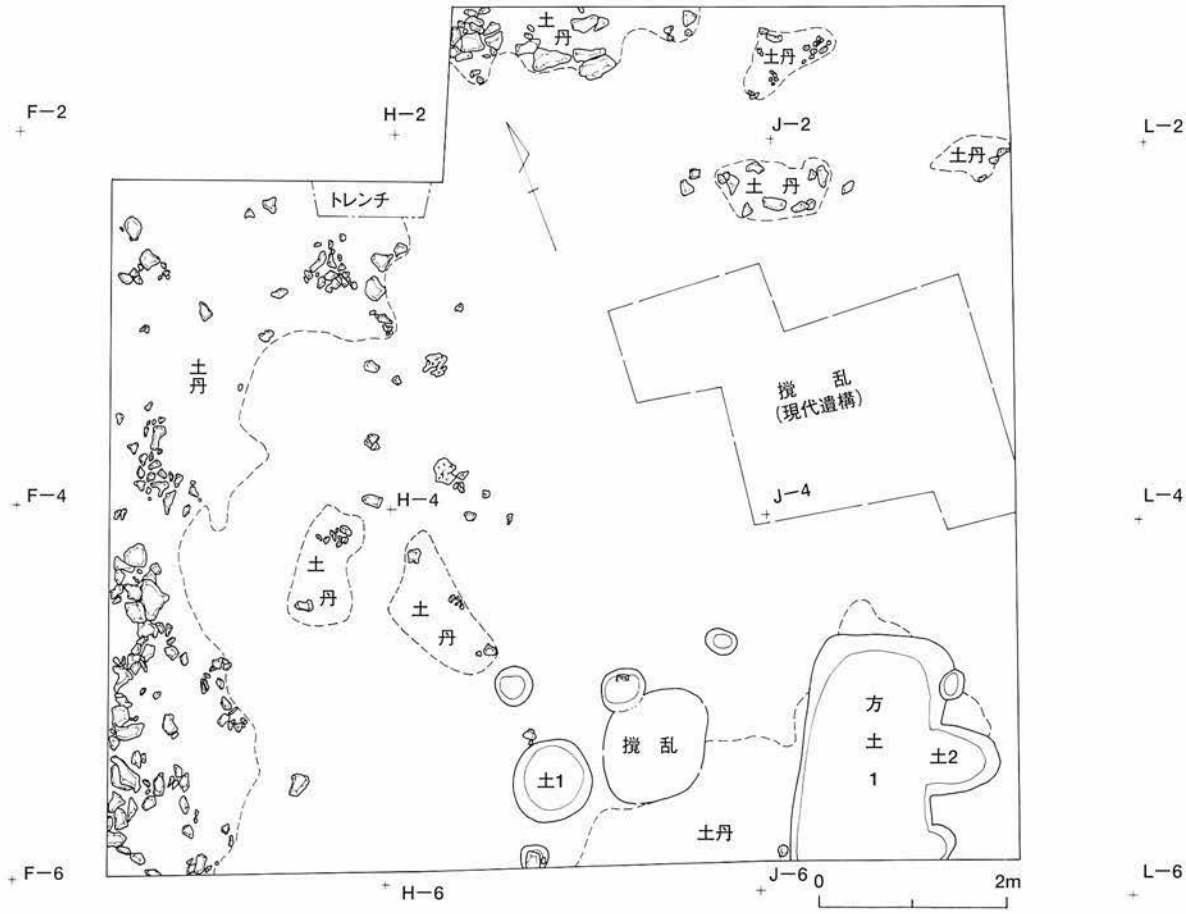


図7　1面全体図

第1面は、現地表下約90cm（海抜約9.9m）で検出された。第1面の遺構は、土壙2基、方形土壙1基、ピット数口と少なく、調査区の南東から集中して検出された。また、面上には土丹塊、土丹粒が多く、整地に利用されたものかもしれないが定かではない。

土壙1、2、方形土壙（図8）

土壙1は、調査区南壁際Ⅰ－5グリッド杭付近で検出された。径は、85cmで、平面形はほぼ円形である。検出面からの深さは、25～30cmを測る。底面の海抜レベルは、約9.5m。覆土は、主に暗灰褐色粘質土で、炭、土丹粒などを含む。

土壙2は、K－5グリッド杭の南で検出され、この後に説明する方形土壙と切り合い関係にある。新旧関係は、残念ながら掴めなかった。検出された南北の幅は、80cmを測り、平面形は楕円形であったと思われる。検出面からの深さは、25cmで、底面の海抜レベルは、9.6mである。覆土は、主に暗灰褐色粘質土で、鎌倉石片、土丹粒、炭化物などを含む。

方形土壙は、土壙2の西側J－4～5グリッドで検出された。検出された幅は、東西140～150cm、南北240cmである。検出面からの深さは、約25cm、

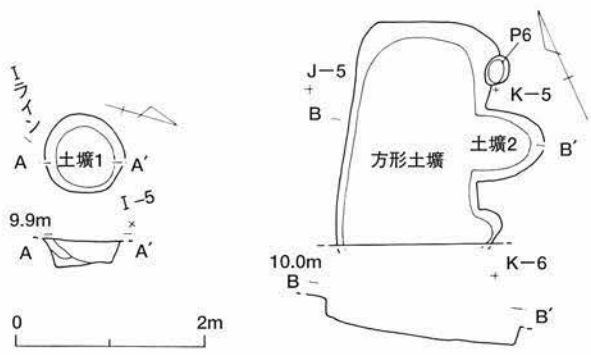


図8　土壙1、2、方形土壙

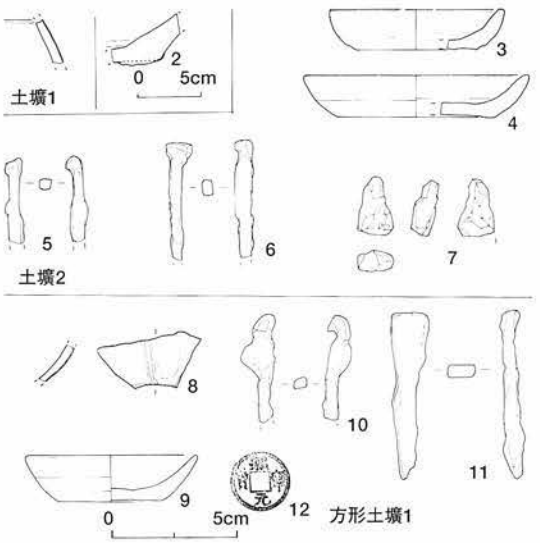


図９　土壙１、２、方形土壙出土遺物

底面の海抜レベルは、9.55mである。南北の軸線方向は、N－30°－Eである。覆土は土壙２と同じである。

土壙１、２、方形土壙出土遺物（図９）

図９－１、２は、土壙１出土遺物である。１は、青白磁の小片で、器種は不明である。素地は、やや灰色味のある白色で、ガス孔が目立つ。釉は、灰色味のある青白色で、気泡が多少あり、透明度はやや落ちるが、光沢は良好である。

２は、常滑甕の、底部小片である。胎土は、黄色味のある土で、長石粒、石英粒等を含み硬く焼きしまっている。

３～７は、土壙２出土遺物である。３、４は、糸切り底の、かわらけ小皿で、３の復元口径は、7.0cm、４の復元口径は、9.0cmである。胎土は、３が、淡い茶色で、４が、やや茶色味のある灰色である。３、４共、多少の微砂を含むが粉質である。３の体部は、多少の丸みを持って、立ち上がり、口径と底径の差は少ない。４は、体部の中位に弱い屈曲を持

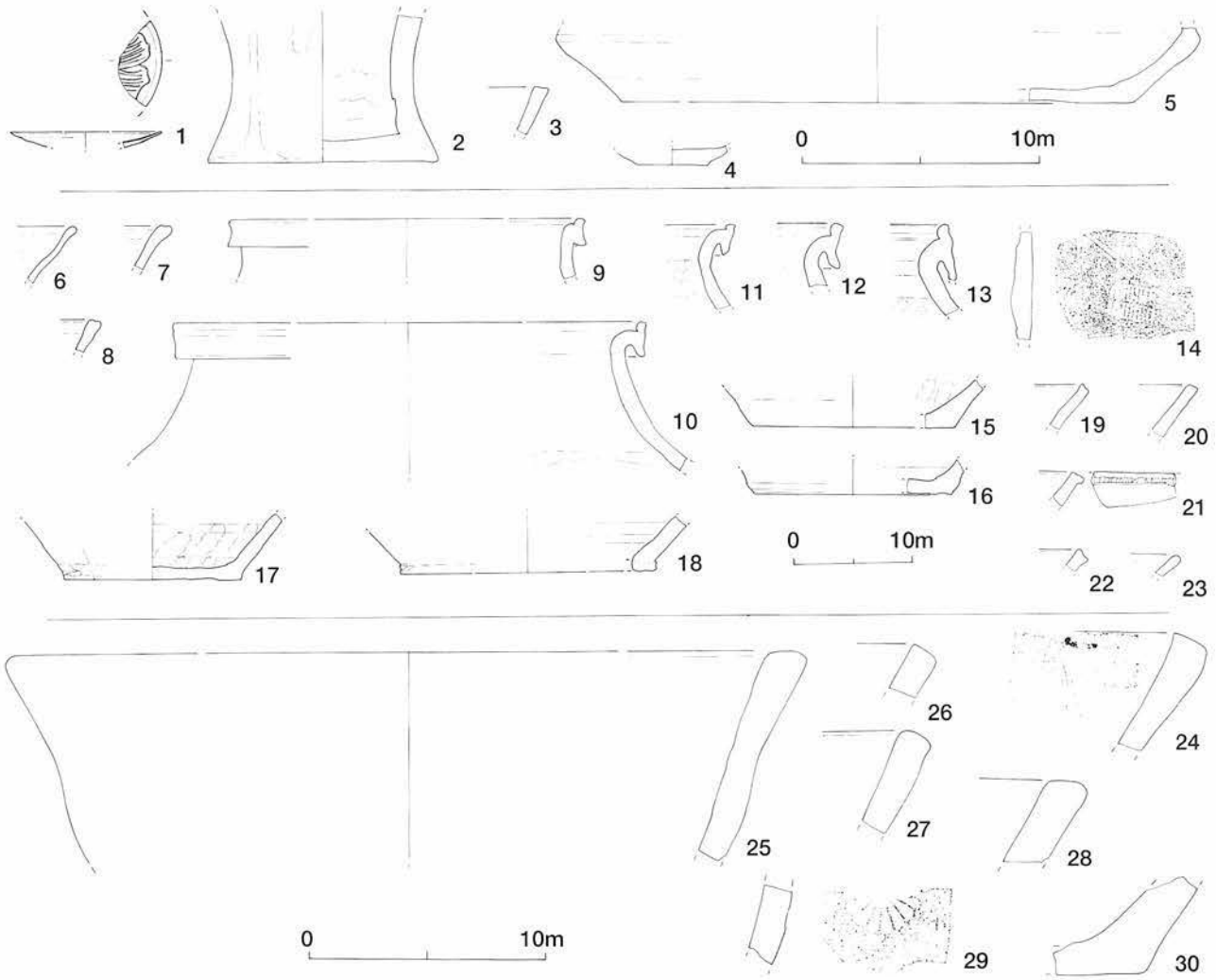


図10　１面出土遺物（１）

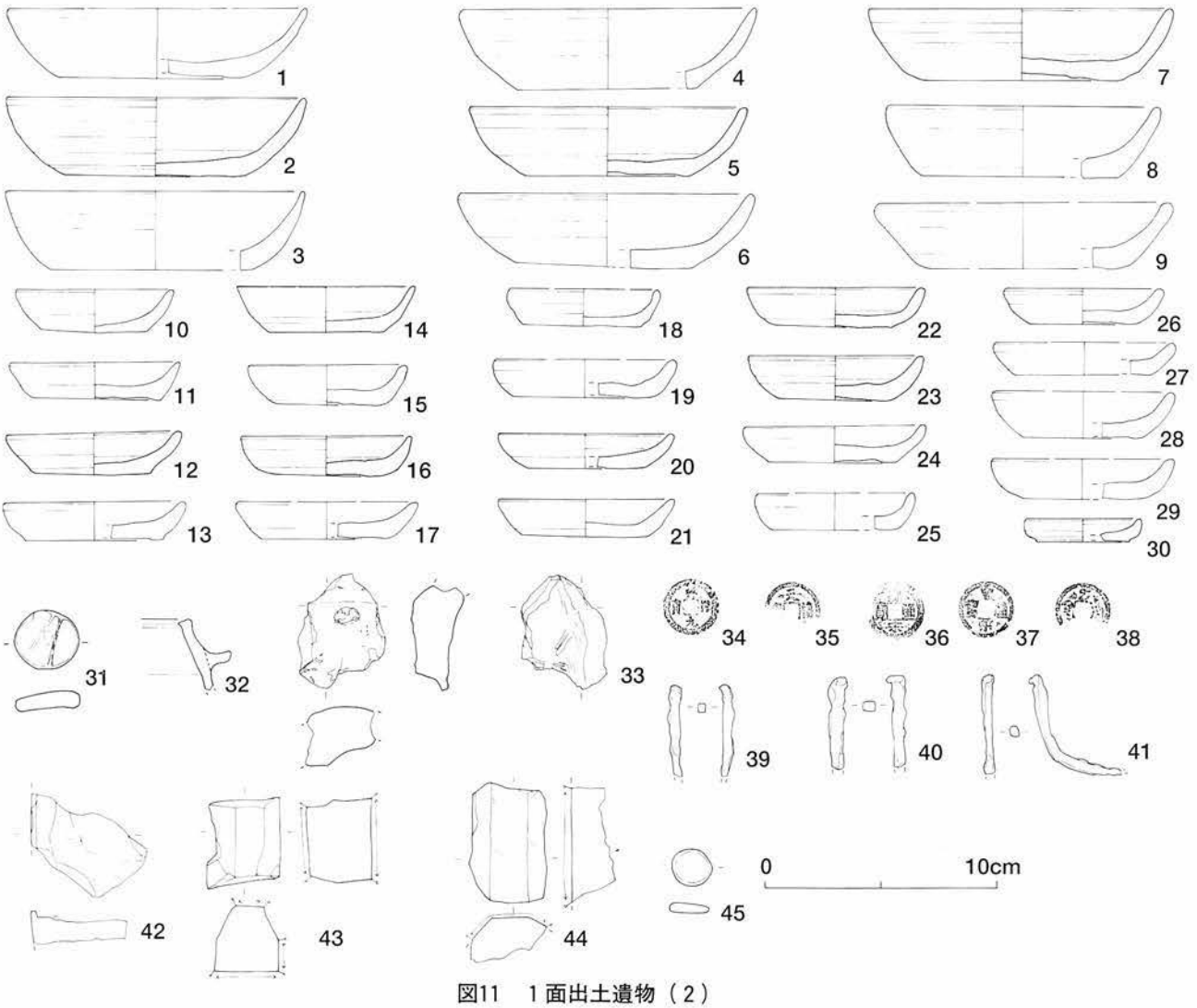


図11　１面出土遺物（２）

ち緩やかに立ち上がる。口径と底径にやや差がある。５、６は、鉄製品で、釘である。欠損のため長さは不明である。７は、火打ち石で、材質は、石英である。

８～11は、方形土壙出土遺物である。８は、青白磁の輪花型（六弁？）合子の破片と思われる。素地は、灰白色で緻密。釉は、青白色で、釉中の気泡のため透明度はやや落ち、光沢もやや悪い。

９は、糸切り底のかわらけ小皿である。胎土は、明るめの灰色で、微砂を多く含み、やや砂質に近い。復元された口径は7.0cmで、体部は、弱い丸みを持って立ち上がり口唇端は多少尖っている。口径と底径の差がややある。

10、11は、鉄製品で、10は、釘。11は、楔である。10、11共に欠損しているため長さは不明である。

12は、銭で、熙寧元宝である（北宋）。

１面出土遺物（図10、11）

図10－１は、白磁の印花文皿である。素地は、白色で緻密。釉は、やや青味を帯びた灰白色で光沢は鈍い。釉の表面は、ガス噴出孔により、やや肌荒れする。復元された口径は、6.4cmである。

２～５は、瀬戸製品である。２は、の灰釉瓶子の底部である。素地は、淡い褐色味を帯びた灰色で、ガス孔がやや目立つが、硬く焼きしまり重みがある。釉は、灰緑色で、細かい貫入がびっしりと入る。透明感があり、光沢も良好である。一部剥離する。底径は、9.8cmである。

３は、灰釉卸皿の口縁部小片と思われる。素地は、褐色味を帯びた灰色で、１㎜大の石英粒の混入が

見られる。釉は、淡い灰色で、透明感、光沢共に悪い。

4は、無釉入子の底部である。素地は、灰色で、精良な土である。内面は摩滅し、なめらかになっている。

5は、灰釉の洗であろうか、素地はやや粗く、灰色味のある肌色である。釉は、灰緑色で、光沢、透明感共に悪い。細かい貫入がびっしりと入る。復元された底径は、21.8cmである。

6～8は、山茶碗窯系こね鉢の口縁部小片である。胎土は、灰～灰白色で、白色や黒色の粒子を含んでいる。

9～23は、常滑製品である。9～14は甕。9は、復元された口径が30.0cm、10は、39.5cmである。11～13は、小片のため復元できなかった。14は、胴部で、あまり定かではないが「〆」らしき窯印が見られる。15～18は底部。15、17はこね鉢に転用されている。復元された底径は、15.0～21.8cmである。19～23は、こね鉢の口縁部小片である。胎土は、灰～灰褐色で、いずれも長石粒、石英粒等を含み、焼きしまって硬い。

25～30は火鉢。25、27、29は瓦質で、胎土は褐色味のある灰色である。29には菊花のスタンプが押される。26、28、30は土器質で、灰橙色の胎土である。

図11－1～30は、糸切り底のかわらけである。1～9は大皿。1、2、4～5は、口径と底径の差がややあり、器厚は薄い。体部はきれいな曲線を描き立ち上がる。8、9は肉厚で、体部は直線的な傾斜を持つ。

口径は、12.0cm～13.2cmである。胎土は、肌色の物が多く、粉質である。5、8は、内面に煤が付着

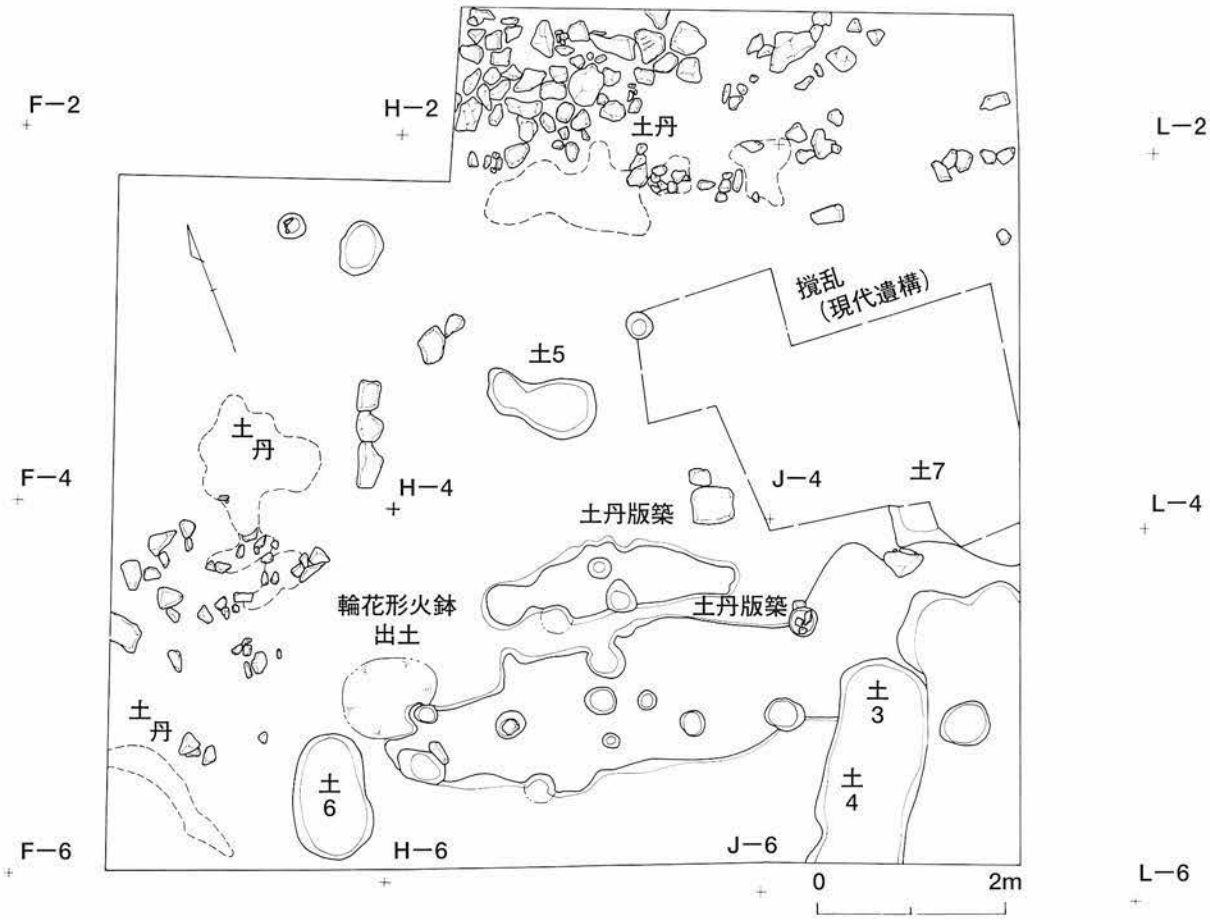


図12　2面全体図

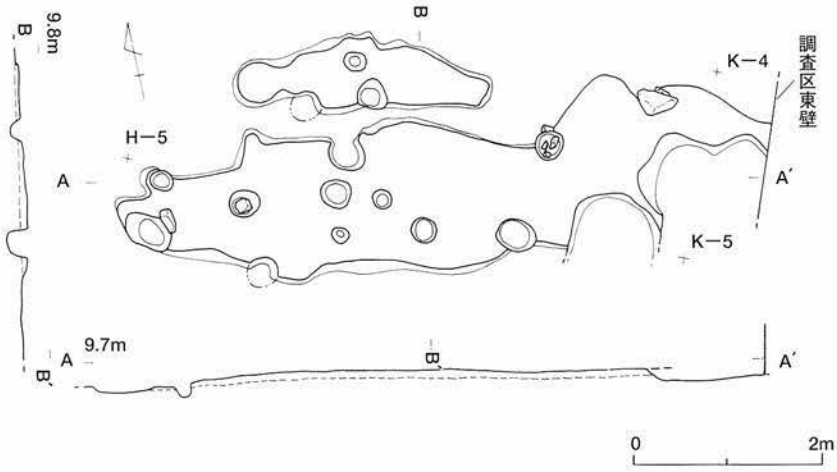


図13　土丹版築

する。10～30は、小皿。30は、内折れかわらけで、復元された口径は、5㎝である。胎土は、明るい茶褐色で粉質である。10、14は薄手で器高が深い。他は、肉厚で、浅いものが多い。口径は、6.6～8.0cm。

胎土は、10、11、13、15、17、18、20、21、24～29は、砂質で他は、粉質である。色は、肌色の物が多い。31は、かわらけから転用した円盤である。用途は不明。

32は、土製の羽釜である。微砂を多く含んでいる。

33は、鞴の羽口。34～38は、銭。34祥符元宝、35天禧通宝、36、37皇宋通宝、38聖宋元宝。39～41は、釘。42硯。43、44砥石、45碁石。

3．2面の遺構と出土遺物

第2面（図12）は、現地表下120～130cm（海抜約9.5m）で検出された。第2面からは、よく突き固められた土丹版築地業、土壙5基、ピット17口等が検出された。また、土丹版築地業以外に、1面同様、土丹粒や、土丹塊が多く集中する場所があるが、その性格は定かではない。

土丹版築（図13）

土丹版築は、H～K－4～5グリッドで検出された。検出された規模は、東西約7m、南北約1.5mである。厚さは10cm前後である。北側は、溝状の掘り込みにより分断される。東側は、土壙などにより、切られているが、おそらく調査区外へ続いていると考えられる。版築上には、ピット状の小穴が掘り込まれているが、土丹版築に伴うものであるかは、定かではない。東西の軸線は、およそN－95°－Eである。

鎌倉石切石列（図14）

鎌倉石切石列は、H－3グリッドで検出された。鎌倉石の切石が3個、南北方向に整然と並び、偶然、並んだとは考えにくかったため、石列として扱った。また、この石列に伴う遺構があったのであろうが、残念ながら確認できなかった。尚、南北の軸線はN－30°－Eである。

輪花型火鉢（図15）

輪花型火鉢は、1面から2面へと下げていく過程で、H－5グリッドの東側から検出された。土丹版
築のやや上で出土しており、おそらく2面以後の時期に廃棄されたものかも知れない。破片の接合の結果、ほぼ完形に近く復元された。

土壙3、4、5、6、7（図16）

土壙3は、調査区南東のJ－4～5グリッドで検出された。検出された規模は、東西100cm、南北210cmを測る。平面形は、長円形である。深さは、検出面から20cmで、底面の海抜は、9.4mである。南北の軸線方向は、N－30°－Eである。覆土は、主に暗茶褐色粘質土で、土丹粒、炭などを含む。

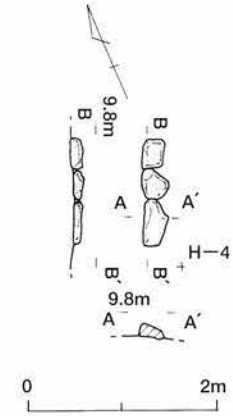


図14　鎌倉石切石列

土壙４は、Ｊ－５グリッドで、土壙３に北側を切られる形で検出された。検出された東西の幅は、110cmを測る。深さは、検出面から10cmで、底面の海抜は、9.35mである。覆土は土壙４とほぼ同じであるが、ややしまりが悪い。

土壙５は、調査区中央北寄りのＨ－３グリッドで検出された。東西80cm、南北40～65cmである。深さは、検出面から20cmで、底面の海抜は、9.3mである。土壙５は、その平面形状から、ピット状の小穴が２つ切り合ったものであろう。覆土は、主に灰色味のある黄褐色粘質土で、土丹粒、かわらけ細片、炭化物を含む。

土壙６は、調査区南西のＧ－５グリッドで検出された。検出された規模は東西80cm、南北65cmを測る。深さは、検出面から20cmで、底面の海抜は9.25mである。南北の軸線方向は、Ｎ－20°－Ｅである。覆土は、主に灰色味のある黄色粘質土で、土丹粒、かわらけ細片、炭化物を含む。しまりはやや悪い。

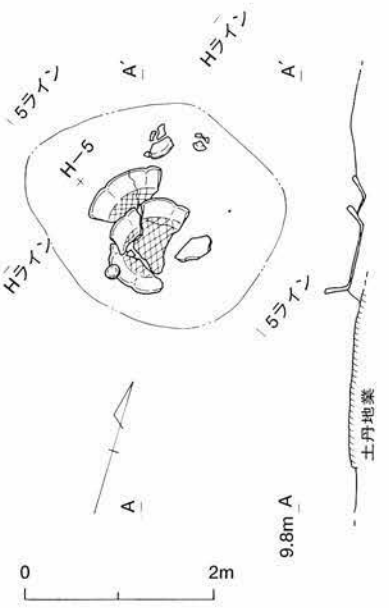


図15　輪花型火鉢出土状況

土壙７は、Ｋ－４グリッド杭の南西で検出された。殆どは、撹乱により破壊され、検出部分は、あまり残っていない。深さは、検出面から25cmで、底面の海抜は9.2mである。

２面土壙出土遺物（図17）

１～７は、土壙３の出土遺物である。１は、瀬戸製品で、無釉の入子の口縁部小片である。胎土は、精良で、硬い。

２～７は、糸切り底のかわらけである。２は大皿で、口径と底径の差がややあり、体部は、上位と下位に僅かな屈曲を持って立ち上がる。復元された口径は、12cmである。胎土は、濃いめの肌色で、微砂を含み、焼成は良好である。

３～７は、小皿。器形は、２の大皿と似た印象を受ける。口径は、7.4～8.0cmで、胎土は、茶色味のある肌色のものが多く、白針、微砂等を含む。

８～16は、土壙４出土遺物である。８～14は、糸切り底のかわらけである。８は大皿である。厚手で、復元された口径は、13cmであるが、器形は土壙３－２のかわらけと似ている。胎土は、肌色で、微砂を含み、焼成は良好である。

９～14は、小皿。口径は、7.6～8.2cmで、胎土は、肌色のものが多く、白針、微砂等を含む。15、16は、釘。

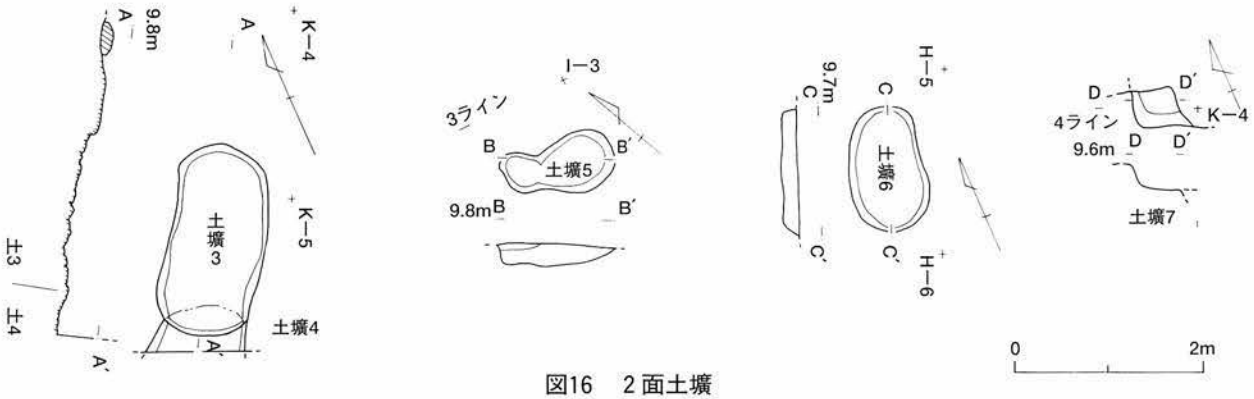


図16　２面土壙

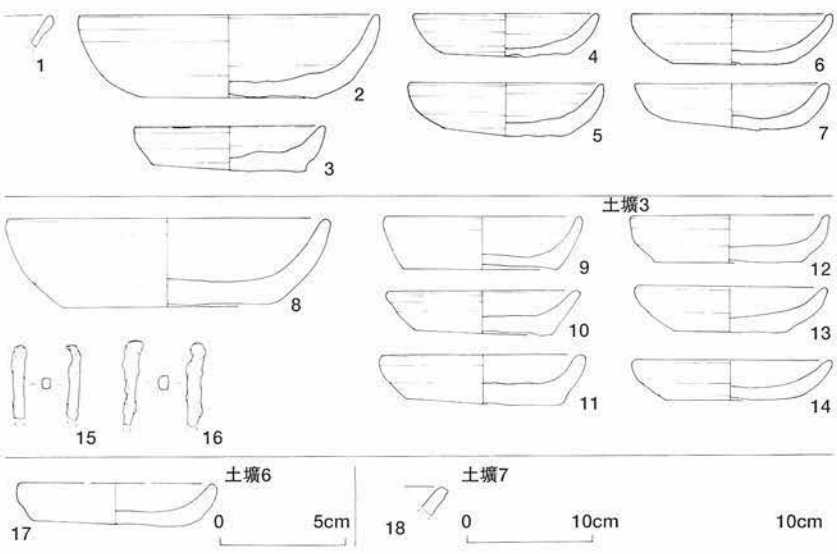


図17　2面土壙出土遺物

17は、土壙6出土の、糸切り底のかわらけ小皿である。復元された口径は、7.7cmである。胎土は、肌色で、微砂、雲母等を含み、焼成は良好である。

18は、土壙7出土の常滑こね鉢の口縁部小片と思われる。

2面出土遺物(図18、19、20)

図18－1～19は、輸入陶磁器類である。1～9は、青磁。1～4は、鎬連弁文碗である。素地は、淡灰色～灰色で緻密である。釉は、淡緑色～灰緑色。1は、再火を受けたのか、釉の表面が、白っぽく濁り、透明感も悪い。2は、透明感、光沢共に良好で、細かい貫入が目立つ。3は、光沢は非常に良好であるが、釉中に細かい気泡が多く、透明感はあまり良くない。4は、光沢、透明感共にやや悪い。5は、小型の折縁鉢の口縁部と思われる。素地は、灰白色で緻密。釉は、灰緑色で光沢がよい。釉中に気泡が多く生じ、透明感に欠ける。外面には、連弁文が施されるが、はっきりと確認できない。復元した口径は、13.6cmである。6は、無文の碗の口縁部小片である。素地は、淡灰色で、緻密である。釉は、灰緑色で、透明感がある。表面に、細かな傷が多く、光沢は鈍い。7は、壺類の底部片と思われる。素地は、灰色で、緻密。釉は、灰緑色で、光沢はやや鈍く、透明感も釉中の気泡のため、あまり良くない。復元した高台径は、9.5cm

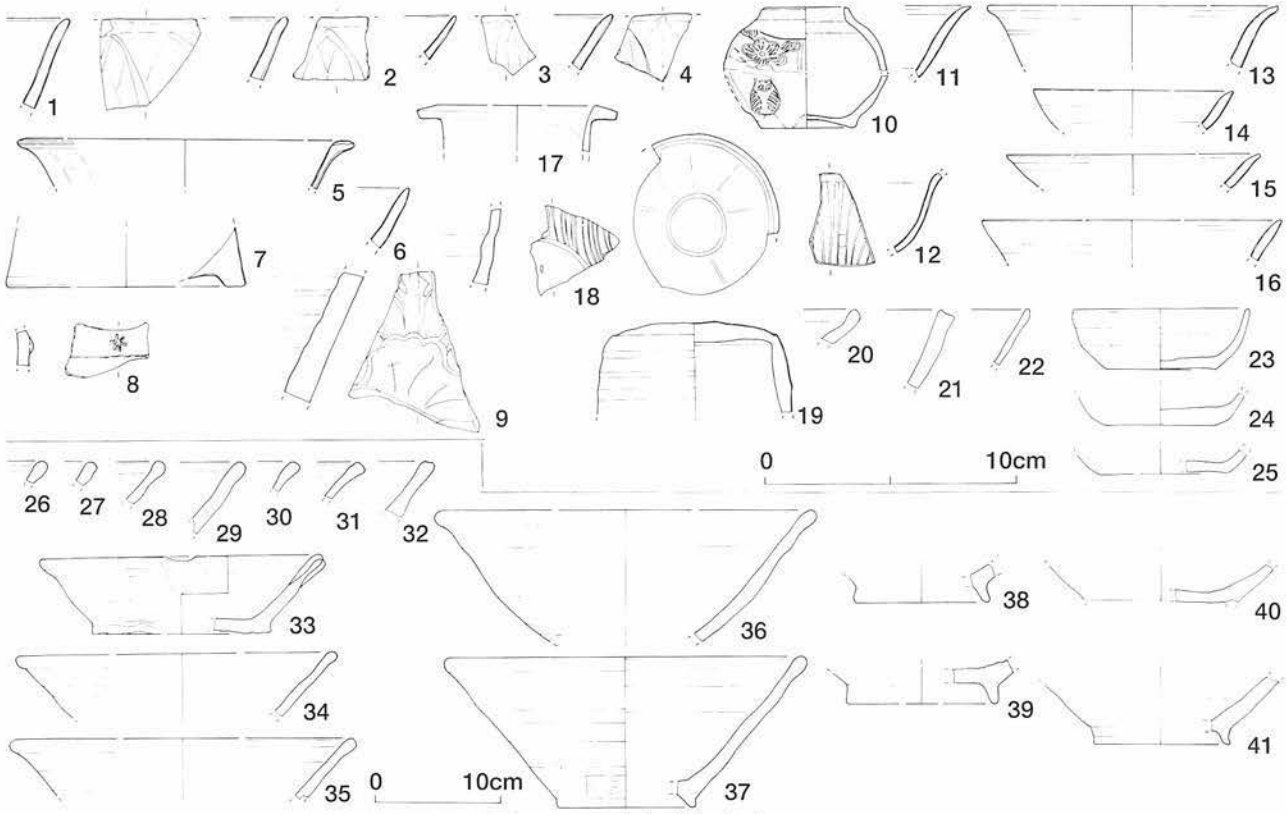


図18　2面出土遺物（1）

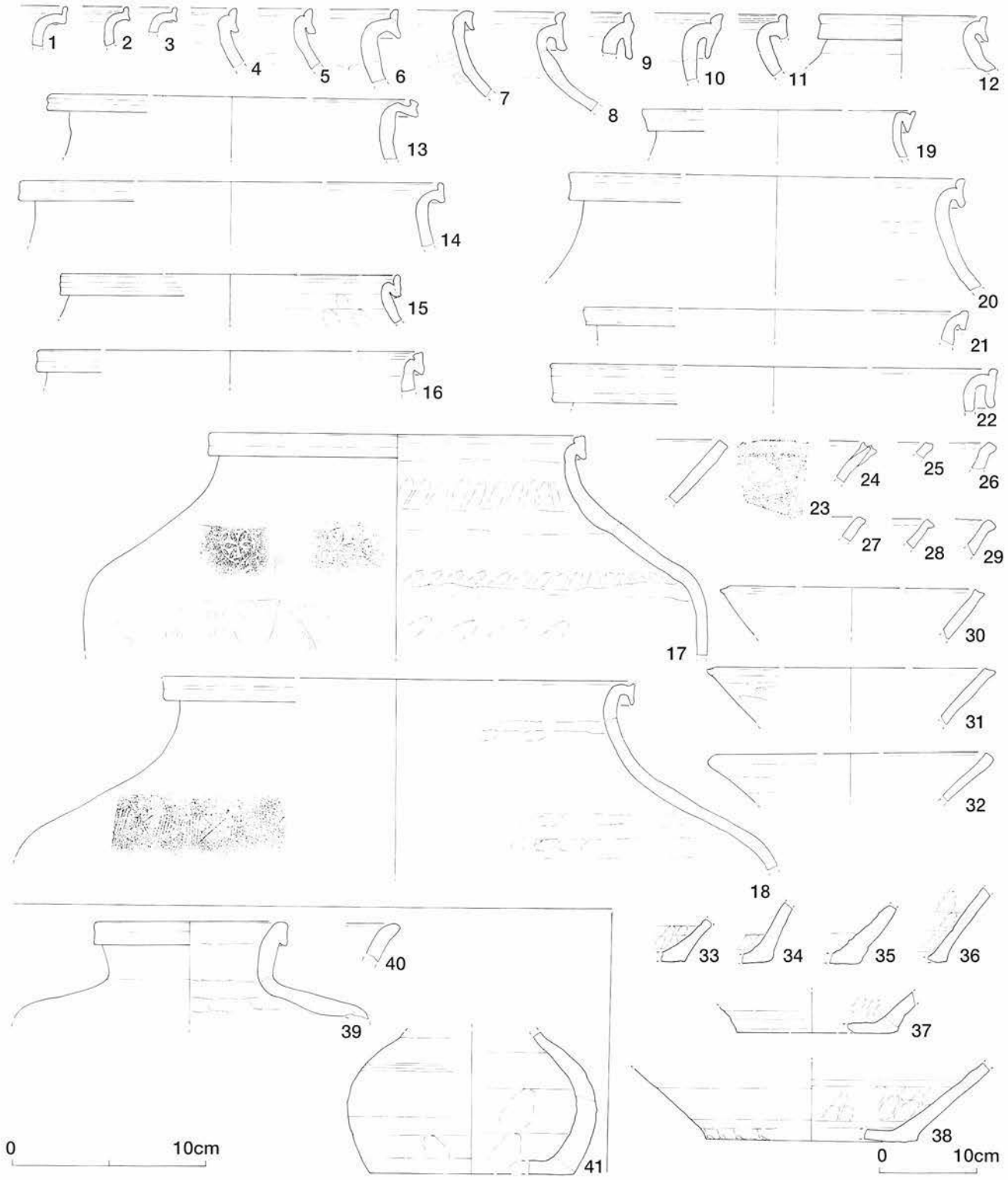


図19　2面出土遺物（2）

である。8は、外側面に貼花が施される。素地は、灰白色で、緻密である。釉は、灰緑色で、光沢、透明感共に良好である。9は、外面に、草花の文様が施される。壺類の胴部片であろうか。素地は、灰色で、ガス孔が目立つ。釉は、外面が、くすんだ灰緑色で、大きく貫入が入り、透明感は、あまり無い。内面は、明るい灰緑色で、光沢があり、透明感も優れる。一部に細かい貫入が入る。10～16は、白磁。10は、印花文小壺。体部に、梅花文の型捺しが施される。素地は、灰色味のある白色で、ガス孔が目立つ。釉は、緑味のある灰白色で光沢がよい。釉中の気泡により、透明感は失われる。11～16は、口兀皿。

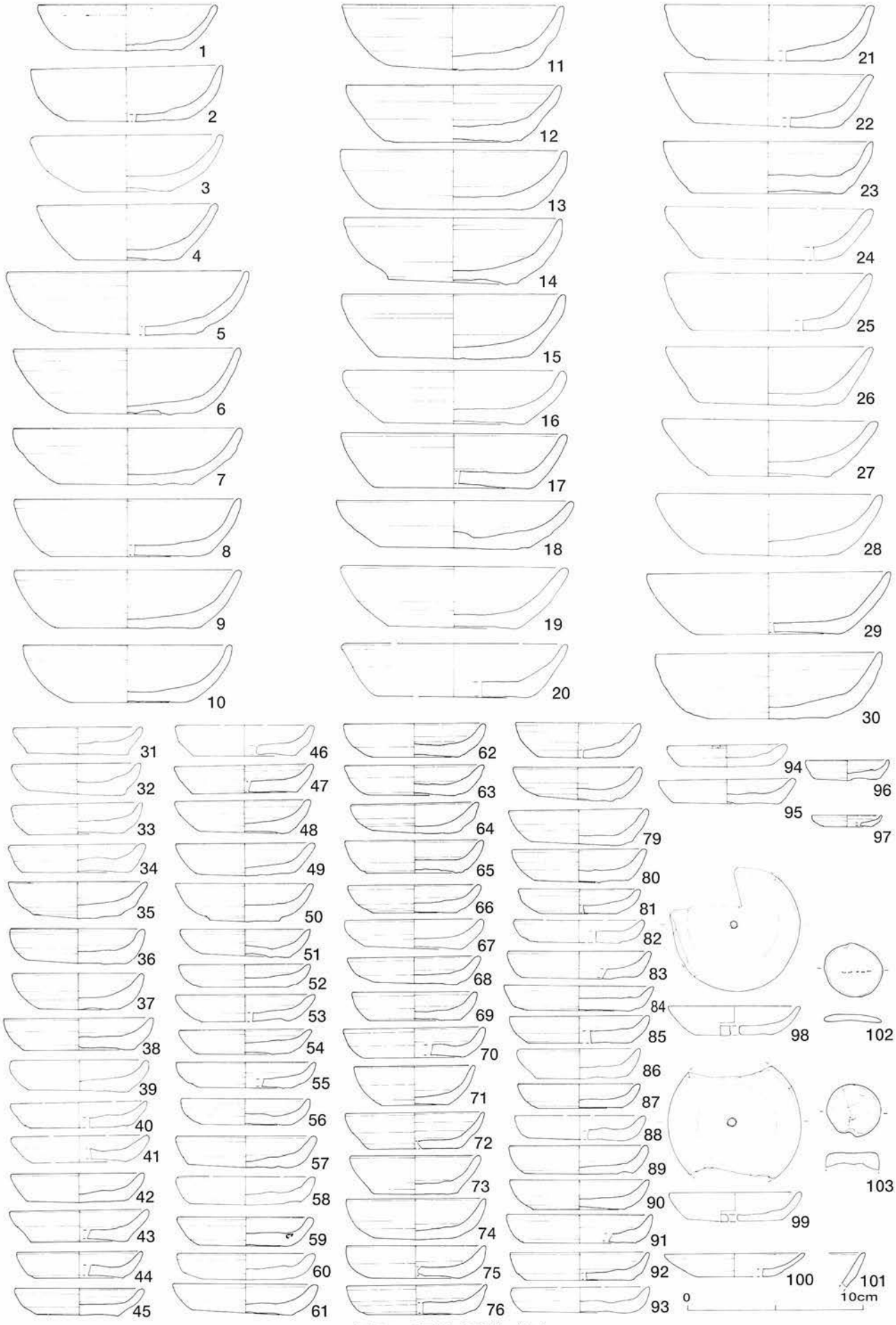

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
0
10cm

図20　2面出土遺物（3）

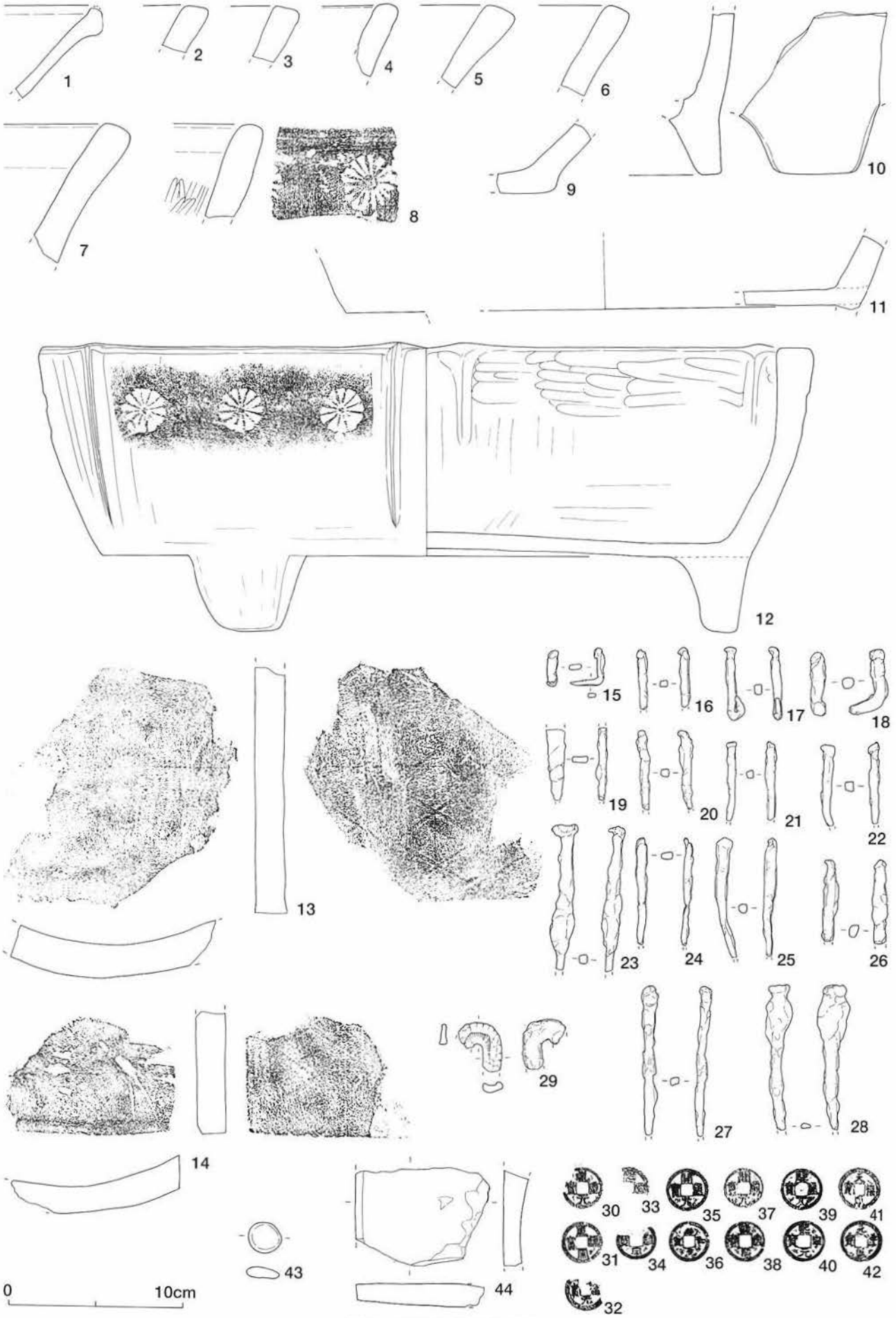

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
10cm

図21　2面出土遺物（4）

素地は、白色または、灰白色である。釉は、概ね、灰白色であるが、14は、やや青味を帯びる。12の内面には、放射状の文様が見られる。17～19は、青白磁。17は、瓶、あるいは水注等の口縁部であろうか。素地は、灰白色で、ガス孔がやや目立つ。釉は、淡い青色であるが、再火を受けたようで、表面は荒れており、本来の釉調は失われている。18は、梅瓶の胴部片。19は、梅瓶の蓋である。素地は、淡い灰色をしており、緻密で、重みを感じる。釉は、淡い青緑で、光沢、透明感共に優れている。

20～25は、瀬戸製品。20は、折縁皿の口縁部と思われる。21は、卸し皿。22～25は、無釉の入子である。23は、口径７cmで、胎土は、精良で硬い。

26～41は、山茶碗窯系こね鉢である。胎土は、灰色～淡灰色で、長石、石英粒などを含んでいる。33は、注ぎ口を有し、復元した口径が、22.6cm、器高が、6.2cmとやや小型である。

図19は、常滑製品。１～22は、甕である。胎土は、灰色～淡灰色のものが多く、長石粒、石英粒、小礫等を含んでいる。17は、６弁の花と思われる叩き文が残る。33～38は、甕の底部である。23～32は、こね鉢。39～41は、壺である。41は、鳶口壺であると思われる。

図20、は糸切り底のかわらけである。１～４は、口径10.3～11.0cmの中皿である。１、４は、煤が付着しており、灯明皿に転用されたものであろう。５～30は、大皿。５～10の体部は、薄手で、緩やかな丸みを持って立ち上がる。口径は、12.0～14.0cm。胎土は、肌色～橙色を呈し、粉質である。11～14.21.28は、比較的厚手のもので、体部に、屈曲あるいは、稜を持つものが多い。他は、直線的な立ち上がりを見せるものが多い。31～97は、小皿。71は、２や５などの中皿、大皿と同じ系統の小皿であろう。97は、極小のかわらけで、口径が4.0cm、底径が2.5cm、器高が0.7cmである。98、99は、穿孔かわらけ。100、

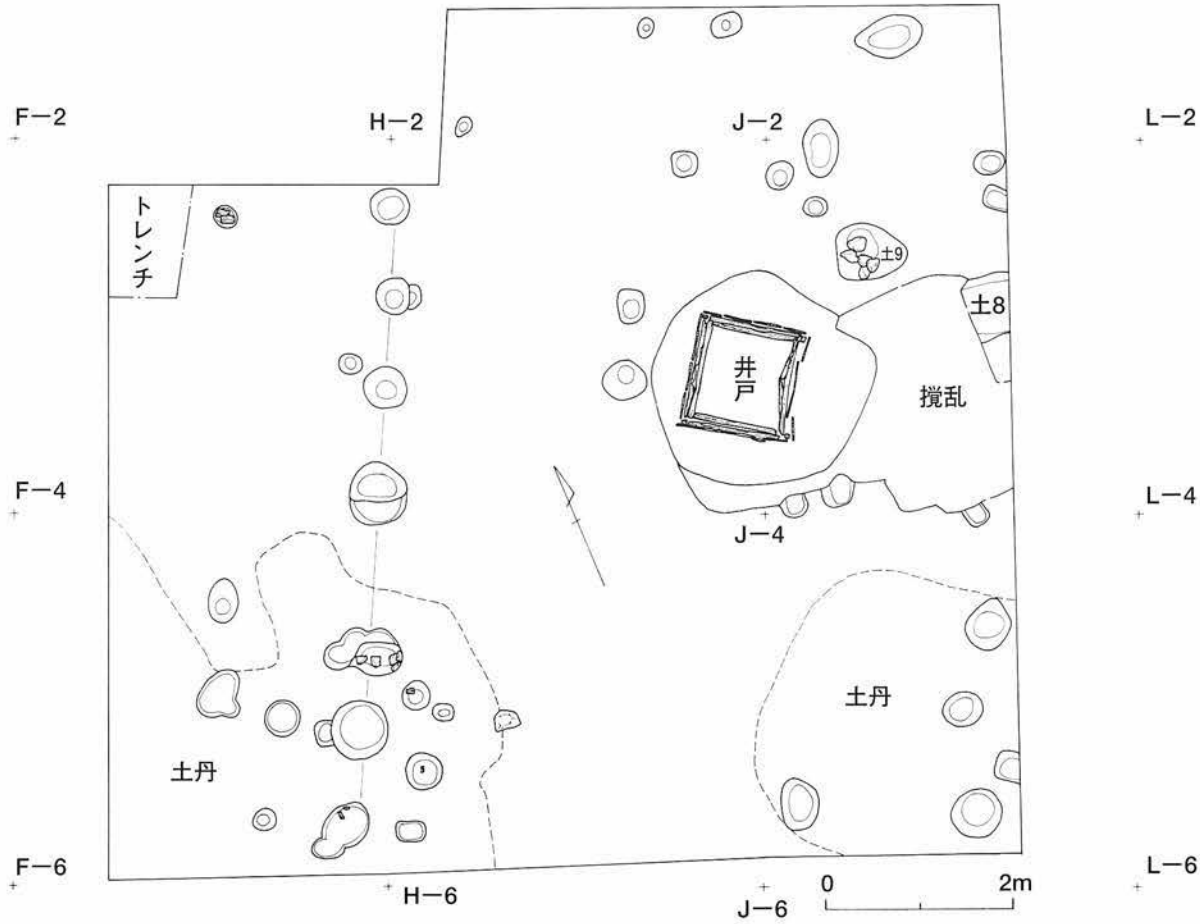


図22　３面全体図

101は、白かわらけ。102、103は、かわらけ転用と思われる土製円盤で、用途は不明である。

図21－1は、魚住。2～12は、火鉢。2、3は土器質。それ以外は、瓦質である。12は、13頁でも少し触れた、六弁の輪花型火鉢である。破片の接合では、3脚ある内の1脚が欠損しており、残念ながら見つけることができなかったが、ほぼ完形に近く復元できた。器表は、磨きがかけられ、炭素吸着により、やや薄目の灰黒色を呈する。外面には、一つの花弁に3個づつの菊花文スタンプが施される。内底見込みには、格子状の文様が刻まれている。胎土は、灰褐色～灰色で、砂、小石粒などを含む。口径は、44.5cm、底径は37.5cm、器高は16.3cmである。

13、14は、平瓦。15から28は、鉄製品。15、18は、鏃であろうか。19は、楔。他は釘である。29は、不明銅製品。30～42は、銭。30乾元重宝31、34皇宋通宝35、37、39開元通宝36至和元宝40熙寧元宝38、41天禧通宝42元豊通宝である。32、33は、不明。43は、碁石。44は、硯。

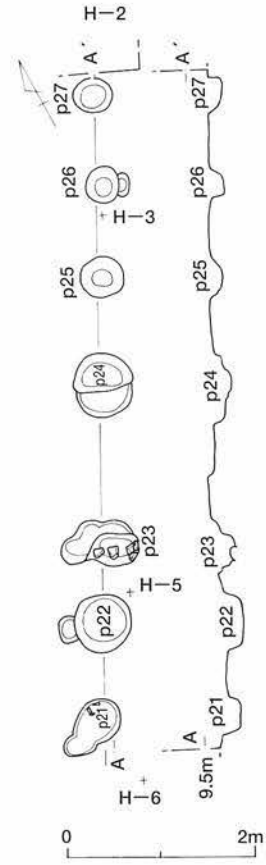


図23　柵列

4．3面の遺構と出土遺物

第3面は、現地表下約140～150cm（海抜約9.3m）で検出された。第3面の遺構は、土壙2基、井戸1基、柵列1列、ピット数10口が検出された。また、面上には、2面同様、土丹塊、土丹粒が、調査区南西隅と、南東隅に集中している。整地の痕跡かもしれない。

柵列（図23）

柵列は、Hグリッドライン下に位置し、南北約7mの間に、7口の柱穴が検出された。柱穴は、径が、40～60cmで、平面形は、円または、不整円形である。検出された深さは、20cm前後で、底面の海抜レベルは、9.05～9.20mである。柱穴間の中心距離は、約100cmであるが、p22とp23の距離は約80cm、p23とp24の距離は160cmとバラツキがある。南北の軸線方向はN－27°－Eである。

柵列出土遺物（図24）

図24は、柵列を構成するピットから出土した遺物である。1は、p21出土の山茶碗窯系こね鉢の底部片である。胎土は、灰色で、小石粒などが混入する。2～4はp22出土の遺物である。2は、糸切り底のかわらけ小皿である。胎土は、砂質に近く、灰褐色を呈する。体部は、緩やかな丸みを持って立ち上がる。復元された口径は、8.0cmである。3、4は、銭である。3は、元豊通宝、4は、皇宋通宝。5は、p24出土の瓦質火鉢である。底部角は面取りされている。6は、p25出土の銭で、元豊通宝である。

井戸（図25）

井戸は、J－3グリッド杭下から検出された。一辺が120cm前後の方形横桟支柱式のものである。検出面からの深さは、約3.5mで、井戸底の海抜レベルは約9.5mである。掘り方は、南北2.3m、東西2.4mである。横桟には、7×10cm角前後、支柱には、6×8cm角前後の角材が使用されている。中段の横桟の上には、一回り小さな枠組みが乗っている。補強のためであろうか。検出された板材は、長さ約2m、幅

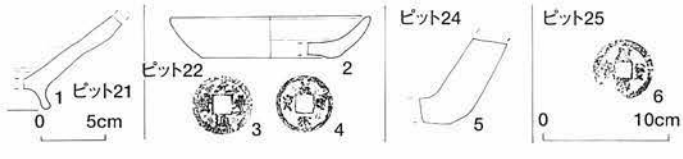


図24　柵列出土遺物

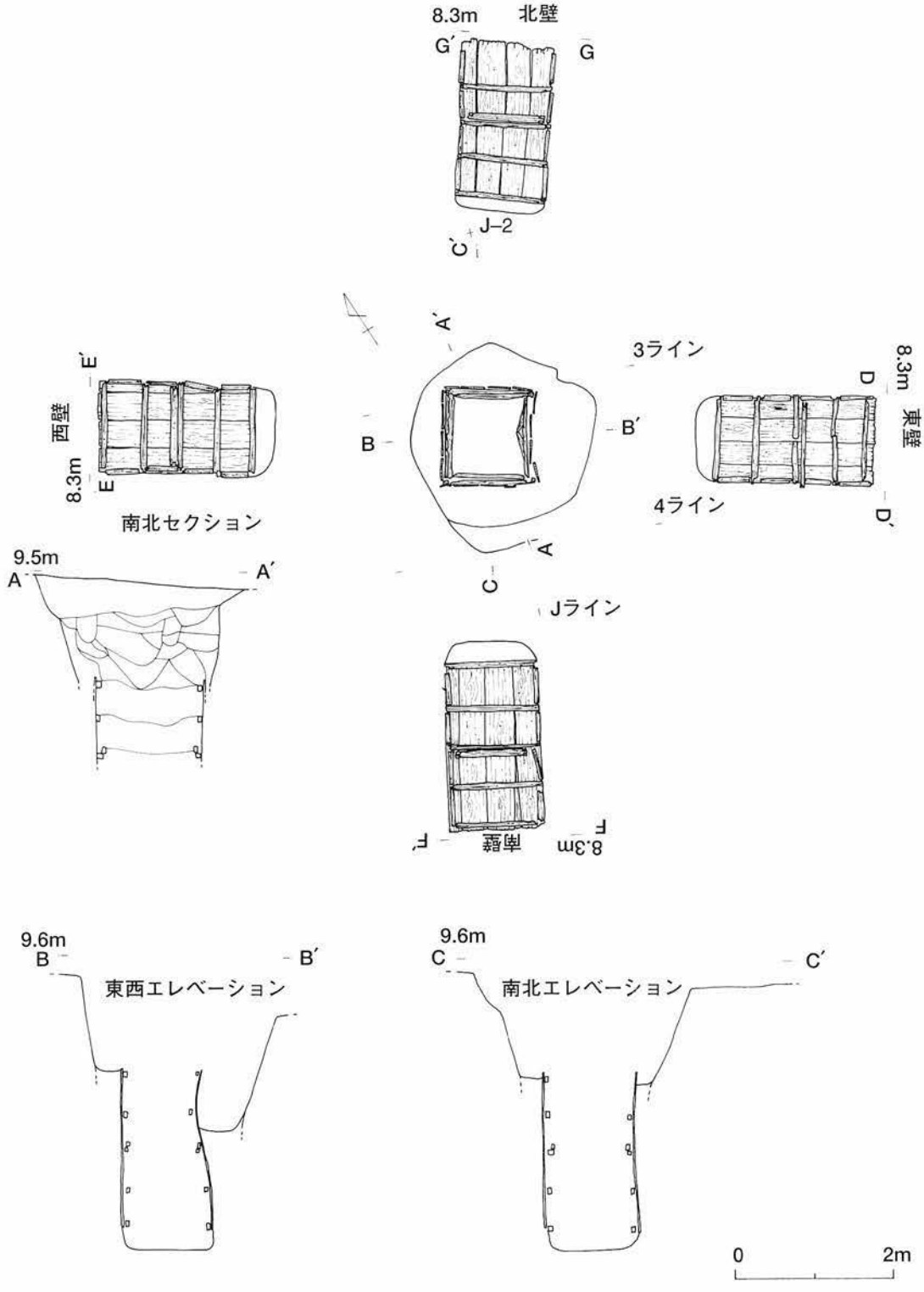


図25　井戸

14～36cm、厚さ約２cmで、１辺に、４枚使用されている。南北の軸線方向は、N－35°－Eである。覆土は、上層が、主に暗茶褐色粘質土で、かわらけ辺、土丹粒、炭化物等を含む。粘青灰色粘質土で、かわらけ辺、土丹粒、木片などを含む。粘性があり、しまりは悪い。

井戸出土遺物（図26）

井戸からは、図26で図示した遺物の他に、検出面から約２m程下げた位置（海抜約7.389m）から、人間の頭蓋骨が発見された（ＰＬ－12Ａ・ＰＬ－30）。

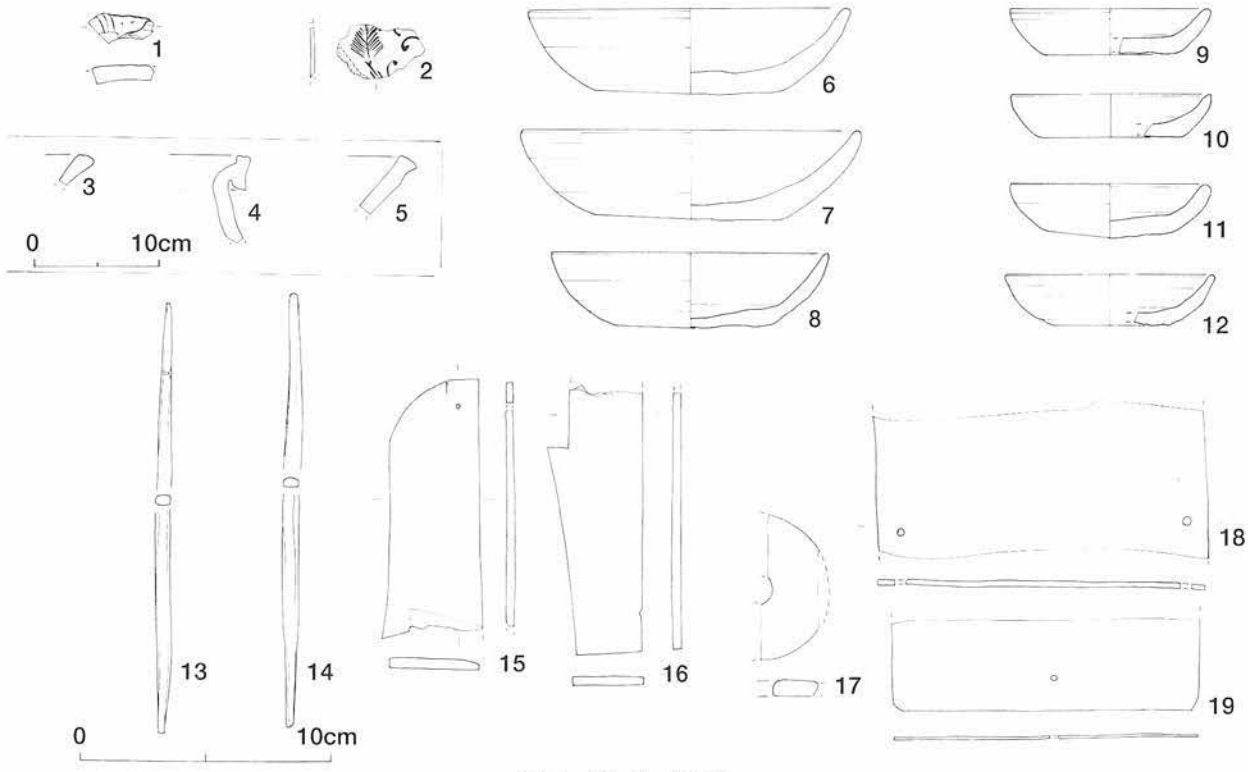


図26　井戸出土遺物

図26－1は、緑釉あるいは、三彩等の破片と思われる。極く小さな破片であるため、器種、器形等については不明である。釉の表面には銀化が見られる。素地は、灰白色を呈し、褐色や、肌色の粒子が多く混入している。

2は、漆器で、おそらく皿であろう。黒色の漆が全体に塗られ、その上に、朱色で植物の文様が描かれる。3は、山茶碗窯系こね鉢の口縁部小片である。4、5は常滑製品。4は、おそらく、甕の口縁部と思われる。胎土は、灰色を呈し、石英、小石粒等を含む。5は、こね鉢の口縁部小片。胎土は、甕と同じく、石英、小石粒などを含む。

6～12は、糸切り底のかわらけである。6、7は、大皿。8は、中皿。大皿は、比較的厚手で、体部は綺麗な丸みを持ち、やや緩やかな角度を持って立ち上がっている。6の胎土は、茶褐色の粉質で、多少の微砂を含む。口径は、12.8cm。7の胎土は、肌色で粉質、きめが細かい。口径は、13.6cm。中皿は、比較的薄手で、体部の立ち上がりは、大皿に比べややきつい。胎土は、変色したのか、灰色味が強い。口径は、11.1cm。小皿は、復元された口径が、7.0～8.4cmで、たいどは、9淡灰色、10、11褐色、12橙色で、いずれも粉質である。12は、他の小皿に比べ、比較的薄手で、8の中皿と器形が似る。

13～19は、木製品。13、14は、箸。15、16は、板草履で、接合はできなかったが、おそらく、同一製品と思われる。17は、用途不明の円盤。18、19は、折敷と思われる。

土壙8（図27）

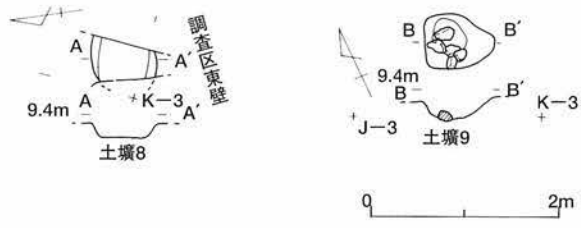


図27　土壙8、9

土壙8は、K－3グリッド杭東の、調査区東壁際で検出された。検出された規模は、東西50.0～30.0cm、南北70.0cmである。検出面からの深さは、約15.0cm、底面の海抜レベルは、約9.1mである。

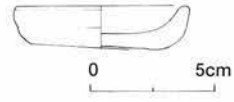


図28　土壙8出土遺物

土壙９（図27）

土壙９は、Ｊ－２グリッド内で検出された。検出された規模は、東西75.0cm、南北65.0cmで平面形は不整円形である。検出面からの深さは、約25.0cm、底面の海抜レベルは、約9.1mである。土壙内には、土丹塊が数個はいっていたがその性格は不明である。

土壙８出土遺物（図28）

土壙８、９共、常滑、かわらけが数点出土したが、図示し得たものは、土壙８のかわらけ１点のみである。

図28は、糸切り底のかわらけ小皿である。胎土は、肌色粉質で、多少の微砂を含む。体部は、厚く、立ち上がりは急である。口径は、7.5cmである。

３面出土遺物（図29）

１～17は、輸入磁器類である。１～５は、青磁蓮弁文碗である。素地は、褐味のある淡灰色～灰色で、いずれも緻密で硬い。釉は、淡灰緑色～灰緑色で、いずれも光沢がよい。６は、釉中に気泡が多く透明感に欠ける。他は、透明感がある。６、７も青磁。碗類の高台部分である。６、７共に、素地は、淡灰色、緻密で硬い。釉は、６が、灰緑色で、光沢がよい。釉中に気泡が多く、透明感に欠ける。７は、やや褐味がかった灰緑色で、光沢はやや鈍く、内底面には、細かい傷が多い。６よりも透明感はある。８は、折腰の小鉢の口縁部と思われる。素地は、褐味がかった灰色で、緻密で硬い。釉は、緑味のある灰色を呈し、光沢はやや鈍い。透明感も、釉中の気泡により、失われる。

９～14は、白磁の口兀皿である。素地は、白色～灰白色、10は、灰褐色を呈する。いずれも、緻密で硬く、黒色の微粒子が混入する。釉は、９、10が、灰白色、11、12、14は、緑味灰白色、13は、青味灰白色を呈する。光沢は、10、11がやや鈍く、他は良好である。透明感は、概ね良好である。復元された口径は、11が、10.4cm、12が、11.0cm、13が、11.2cmである。14の復元された底径は、6.0cmである。

15、16は、青白磁の梅瓶の身である。15の素地は、灰色で、黒色の微粒子を含む。釉は、淡青緑色で、透明感はあるが、光沢は鈍い。再火を受けたようで、所々肌荒れしている。器高は推定で、26cm。肩部付近の最大径は、推定18.5cmである。底径は10cm。16の素地は、灰色で緻密である。釉は、青白色を呈し、透明感、光沢ともに良好である。再火を受けたようで、所々肌荒れしている。復元された器高は、約27.0cm、肩部付近の最大径は、18.7cm、底径は、10.2cmである。15、16共に、渦文が刻まれる。

17は、褐釉の壺と思われる。素地は、赤茶色を呈し、緻密で硬い。所々に長石と思われる白色の粒子が見られる。釉は、暗茶色を呈し、光沢は、あまりない。

18、19は、瀬戸製品。18は、碗の口縁部小片である。素地は、灰色で、灰緑色の釉が極く薄くかかっている。19は、瀬戸の灰釉瓶子である。素地は、灰色で、磁器のように緻密で硬い。釉は、灰緑色であるが、所々刷毛塗りによる発色不良で褐色の部分が見られる。光沢は鈍く、目立たないが細かい貫入が入っている。器表には、焼成時にできたと思われるひびが、数本は入っている。

20は、山茶碗窯系こね鉢の口縁部小片である。胎土は、灰色で、長石、石英などの粒子を含む。

21～30は、常滑製品。21は、小壺の底部と思われる。胎土は、濃い灰色で、長石、石英などを含む。復元された底径は、8.2cmである。22～30は甕である。胎土は、灰色から茶褐色で、石英、長石、小石粒などを含む。26は、復元口径36.0cm、27は42.0cmである。29は、底径17.0cm、30は、15.0cmである。30は、こね鉢に転用されたようで、内面に摩滅が見られる。31は、こね鉢。胎土は、赤茶色で、小石粒などが混入する。

32は、瓦質火鉢。雲母辺を多く含む。33は、白かわらけ。胎土は、焼成良好で、きめが細かい。黒色

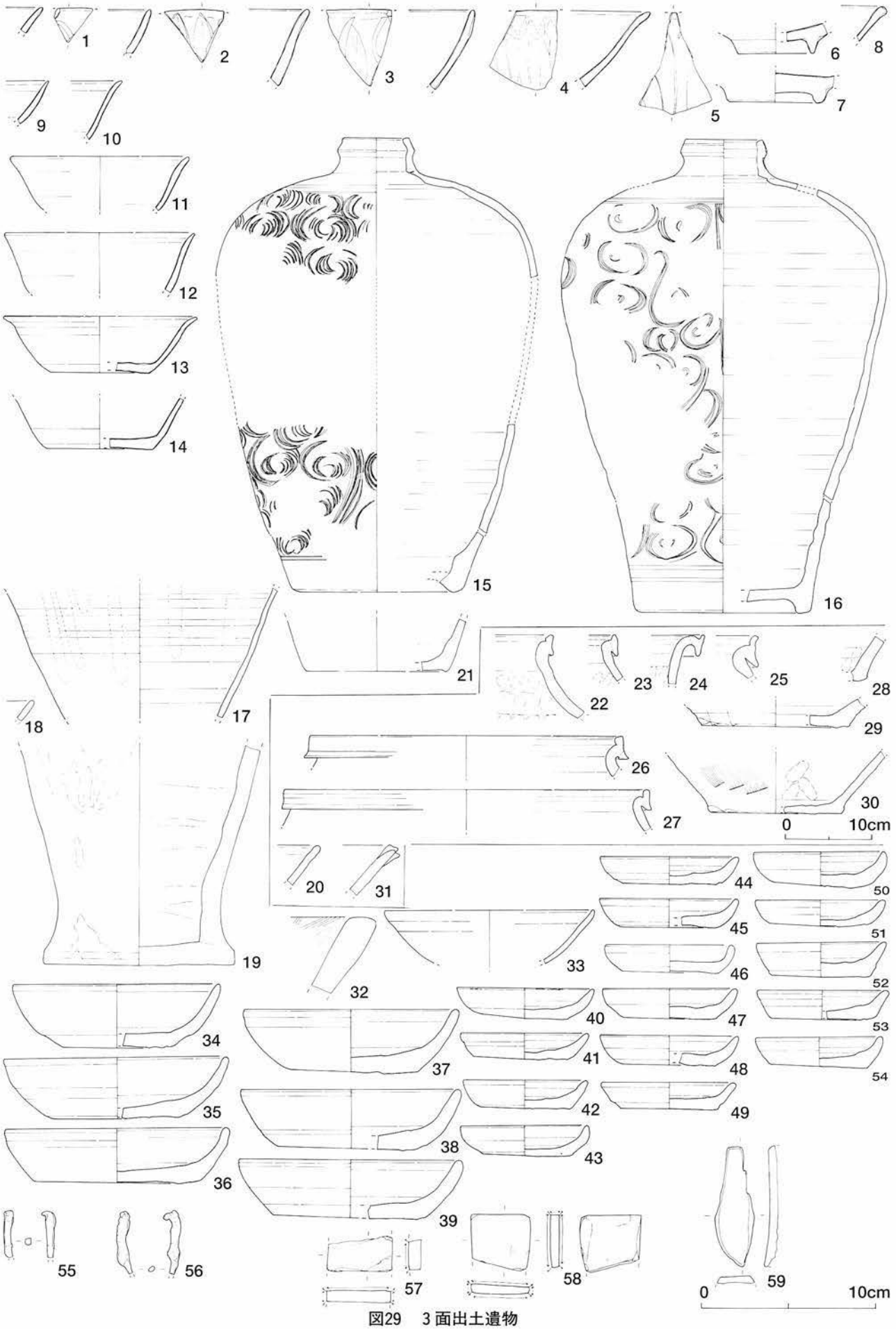

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0
10cm
0
10cm

図29　3面出土遺物

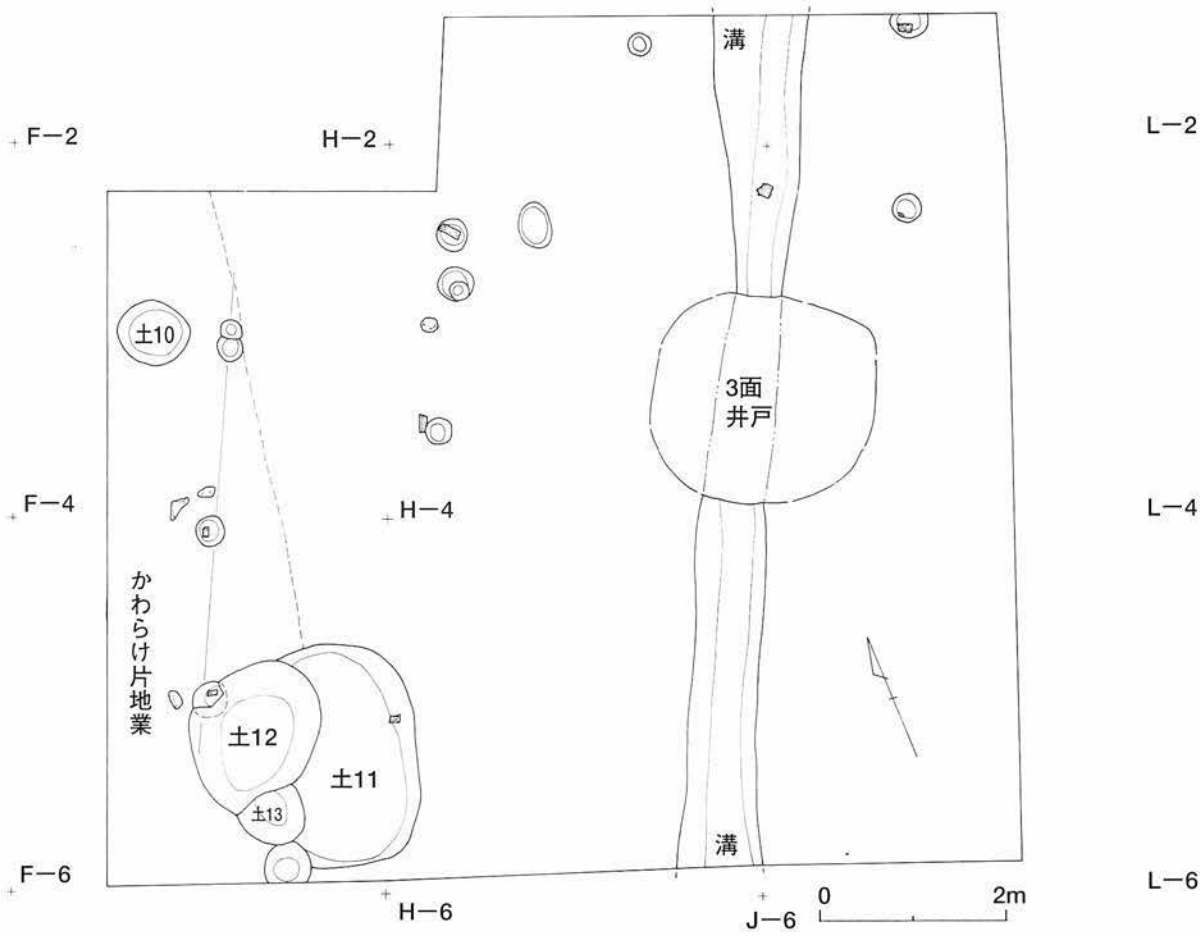


図30　4面全体図

の微粒子を含む。復元された口径は、12.0cmである。

34～54は、糸切り底のかわらけである。34～39は、大皿。胎土は、肌色～茶褐色で粉質、微砂を含む。復元された口径は、12.0～13.0cmである。34、35は、薄手で、器高やや深めである。40～54は、小皿である。胎土は、肌色～橙色で粉質のものが多い。口径は72.0～80.0cmである。52、53は、厚手で、体部は、直線的な立ち上がりを見せる。40は、煤の付着が見られ、灯明皿に転用されたものと思われる。

55、56は、鉄製品で、釘である。57、58は、石製品で、砥石である。泥岩質の仕上げ砥と思われる。59は、骨製品で、用途は不明である。

5．4面の遺構と出土遺物

第4面（図30）は、現地表下170～180cm（海抜約9.0m）で検出された。第4面からは、溝1条（3面井戸に切られる）、土壙4基、柱穴列等が検出された。調査区西側には、かわらけの破片を敷き固めた地業が見つかっているが、これは、西隣の調査地（図2－②）3面にも広がっている。

溝（図31）

溝は、Jグリッドライン下で検出された南北に伸びる溝である。中央は、3面溝により切られる。検出された溝の長さは、調査区の北端から、南端までの約9mであるが、さらに調査区外に延びていると考える。幅は、50～100cm、検出面からの深さは、10～25cmである。底面の海抜レベルは、8.70～8.77mで南端の方が、7cm低い。溝の覆土は、主に暗茶褐色粘質土で、土丹粒、かわらけ細辺などを含む。溝の南北軸線方向は、N－27°－Eである。

溝出土遺物（図32）

溝からは、かわらけ、常滑などが、少数出土したが、図示し得たものは、図32のかわらけ１点のみである。

出土したかわらけは、糸切り底の物で、小皿である。厚手で、体部は、丸みを持って立ち上がる。胎土は、砂質に近く、赤茶褐色を呈する。口径6.4cm、底径5.4cm、器高1.7cmである。

柱穴列（図33）

柱穴列は、調査区西側のＧグリッドライン付近に３口の柱穴が南北に並ぶ。柱穴の径は20～30で、平面形は、円形である。検出面からの深さは、10～15cmで、底面の海抜レベルは、8.8～8.85mである。柱穴間のスパンは約190cmである。南北の軸線方向はＮ－28°－Ｅである。この柱穴列は、図２－②の調査地３面で検出された掘立柱建物と平行関係にあり、何らかの関連が考えられる。

土壙10（図34）

土壙10は、調査区西側Ｇ－３グリッド杭の西に位置する。径が70～80cmで、平面形は円形に近い。検出面からの深さは、20cmで、底面の海抜レベルは、8.8mである。

土壙11（図34）

土壙11は、調査区南西隅に近いＨ－５グリッド杭下で検出された。検出規模は、南北2.4mで、平面形は、楕円形であったと思われる。検出面からの深さは、10cm前後で、底面の海抜レベルは、8.93mである。

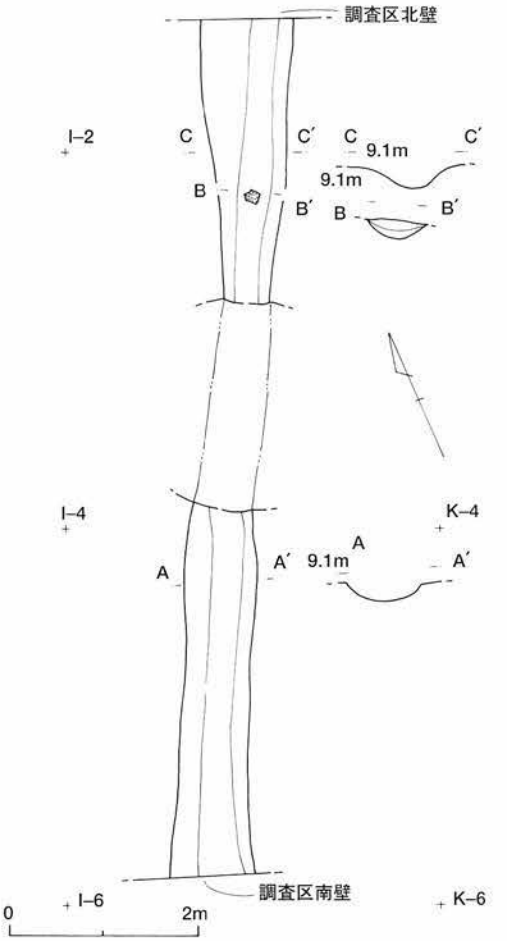


図31　溝

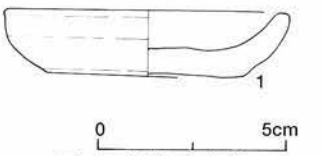


図32　溝出土遺物

土壙12（図34）

土壙12は、Ｇ－５グリッドで検出され、土壙11の北西部を切る。径140cm前後の不整円形で、検出面からの深さは、約34cm、底面の海抜レベルは、8.72mである。覆土は、主に、赤茶褐色の有機質粘土であった。

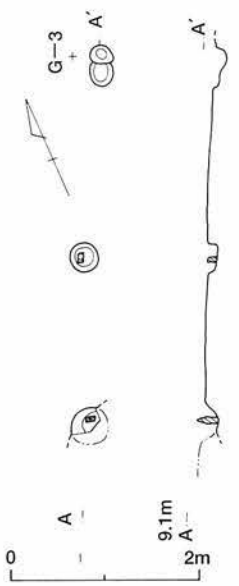


図33　横穴列

土壙13（図34）

土壙13は、Ｇ－５グリッドで検出された。土壙12に切られる。東西の幅は、約70cmで、平面形は円形に近かったと思われる。検出面からの深さは、約24cm、底面の海抜レベルは8.8mである。覆土は、主に暗茶褐色粘質土で、かわらけ細辺、土丹粒、炭化物などを含む。

土壙11出土遺物（図35）

図35－１は、土壙11出土の青白磁梅瓶の蓋である。素地は、淡灰白色で、黒色の微粒子を含んでいる。釉は、淡い青白色であるが、再火のためか、表面は、肌荒れし、本来の釉調は失われている。復元された径は、4.9cmである。蓋上面には、唐草文が施される。

土壙12出土遺物（図35）

図35－2は、土壙12出土の糸切りかわらけ小皿である。胎土は、粉質で、橙色を呈する。白針、微差などを含んでいる。体部は厚く、多少丸みを持って立ち上がる。口径7.5cm、底径5.4cm、器高1.9cmである。

土壙13出土遺物（図35）

図35－3は、土壙13出土の糸切りかわらけ小皿である。胎土は、粉質で、灰色味のある淡茶色を呈する。白針、微差などを含んでいる。体部はやや薄く、器高浅めである。復元口径9.0cm、復元底径7.0cm、器高1.6cmである。

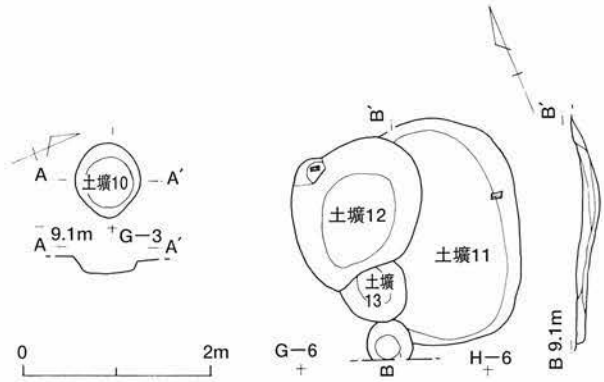


図34　土壙10、11、12、13

4面出土遺物（図36）

図36は、4面出土の遺物である。1は、青白磁である。花瓶などの脚部であろうか。素地は、白色で、やや粘りを感じる。釉は、淡青灰色であるが、再火のため肌荒れし、本来の釉調は失われている。細かい貫入が入る。

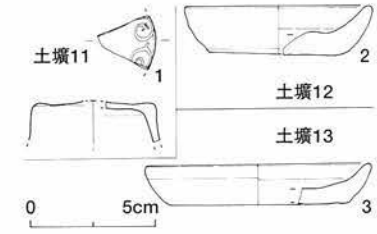


図35　土壙11、12、13出土遺物

2は、山茶碗窯系こね鉢。胎土は、灰色で、長石などの白色の粒子が含まれる。復元高台径は、13.0cmである。

3は、常滑こね鉢の口縁部小片である。4は、土器質の火鉢である。5は、かわらけ転用のとりべである。

6～34は、糸切り底のかわらけである。6～13は、大皿、14～33は、小皿、34は、内折れかわらけで

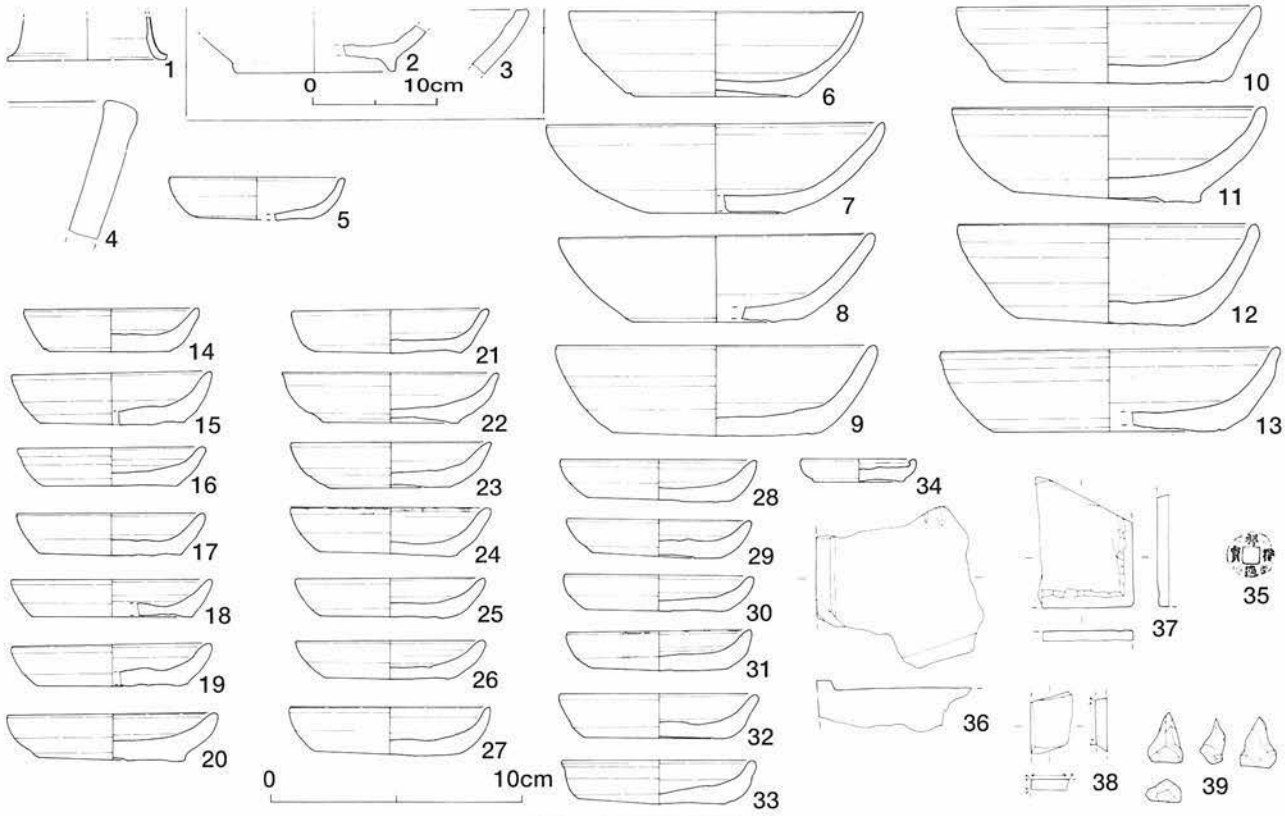


図36　4面出土遺物

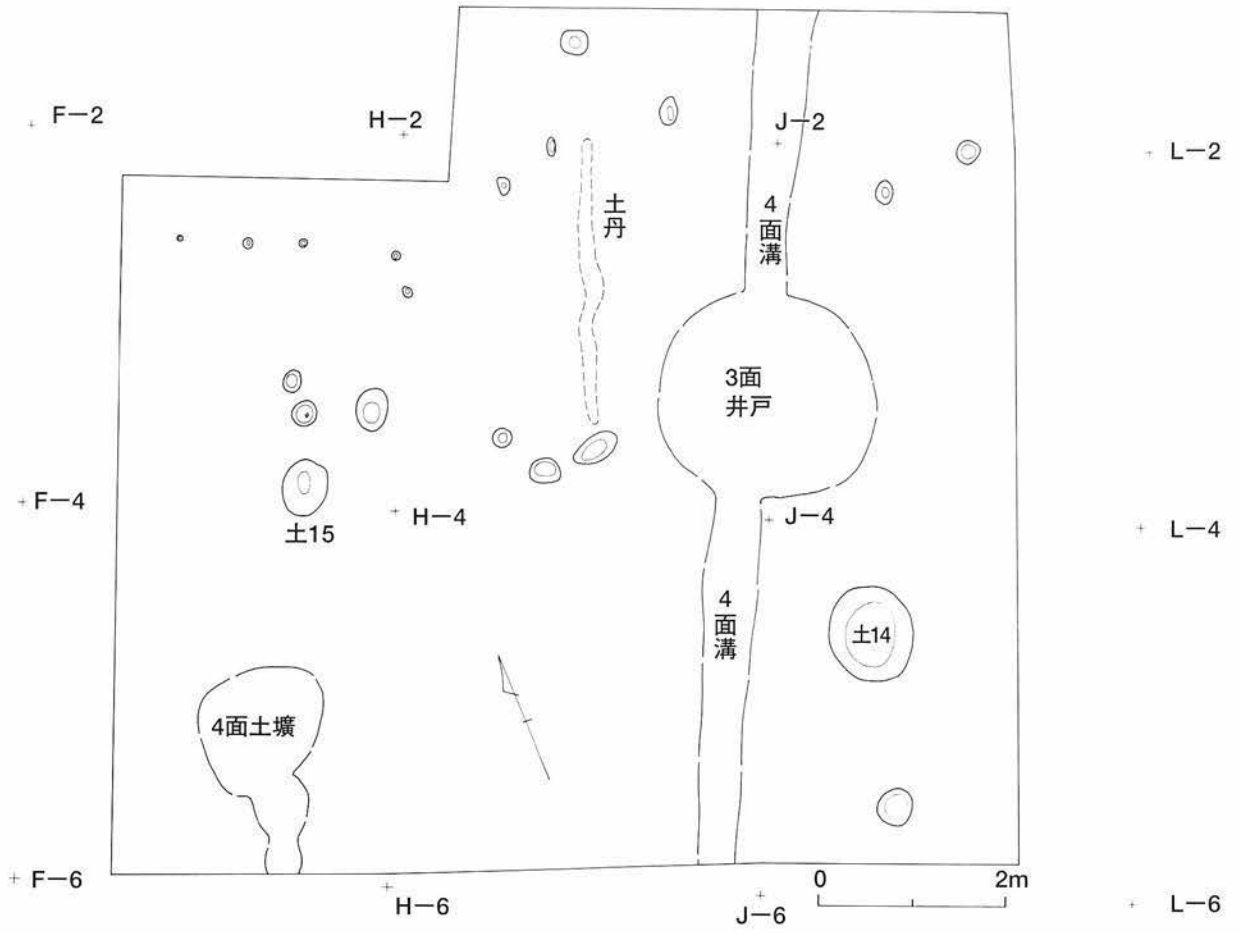


図37　5面全体図

ある。

大皿は、口径11.8～13.6cmで、胎土は、肌色～茶褐色の粉質である。特に6、7はきめ細かい胎土である。比較的薄手で、体部に綺麗な丸味を持つ物が多い。6は、他の大皿に比べ、口径がやや小さい、中皿であろう。13は、小破片であったため口径その他がやや不正確であるかもしれない。

小皿は、口径7.0から8.6cmで、底径は、4.8～6.1cmである。口径と底径の差が比較的ある物が多い。胎土は、褐色または、橙色の物が多く、粉質である。24、31は、煤の付着が見られる。灯明皿に転用した物であろう。

内折れかわらけの胎土は、橙色を呈し、雲母、白針、赤色の微粒子などを含む。口径は、4.6cm、底径は3.6cm、器高は0.9cmである。

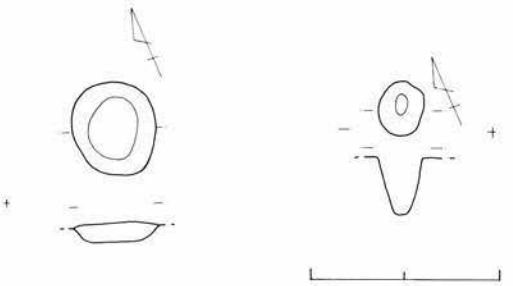


図38　土壙14、15

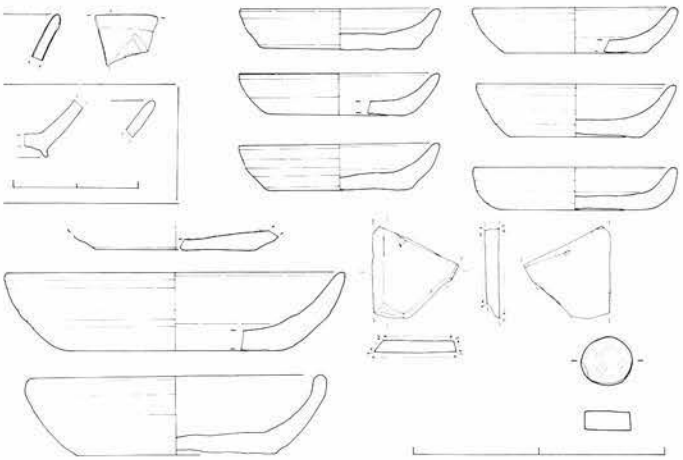


図39　5面出土遺物

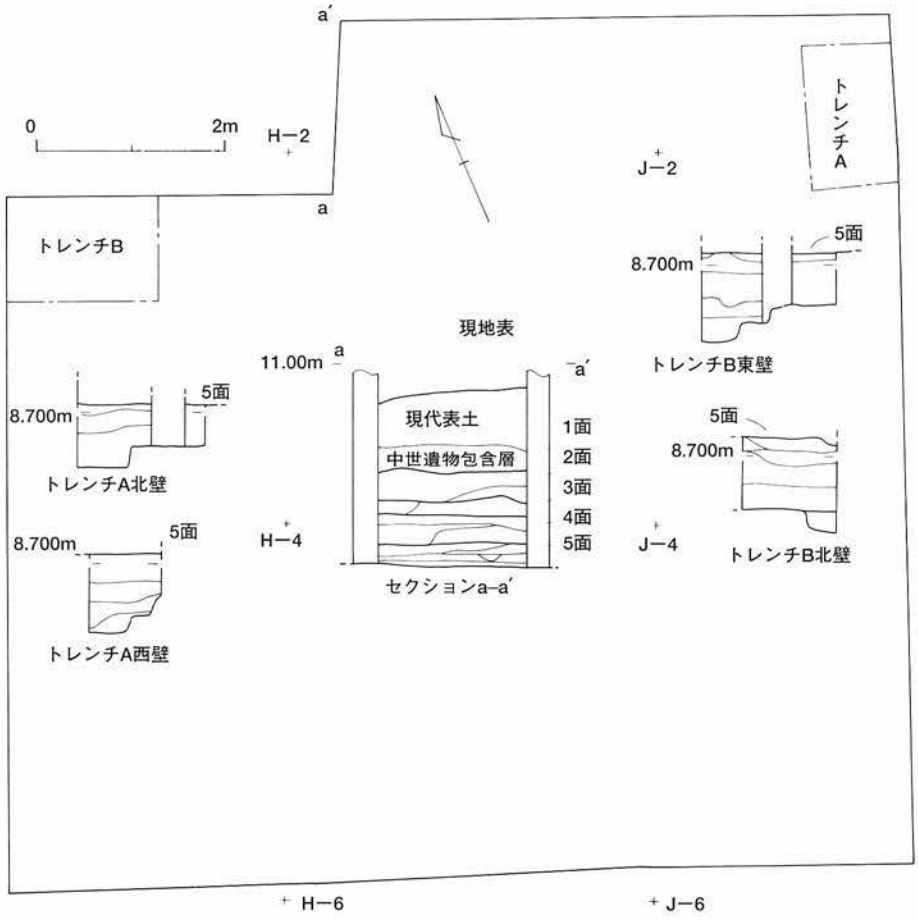


図40　5面下層確認トレンチ

35は、銭で、祥符通宝である。外縁が削られている。36～39は、石製品。36、37は、粘板岩製の砥である。38は、泥岩製の砥石。39は、石英で、火打ち石である。

6．5面の遺構と出土遺物

第5面（図37）は、現地表下190～200cm（海抜約8.8m）で検出された。第5面からは、土壙2基、ピット10数口が検出された。

土壙14（図38）

土壙14は、調査区南東のJ－4グリッドで検出された。径は、90～105cmで、平面形は、円形に近い。検出面からの深さは、約20cmで、底面の海抜レベルは、8.7mである。覆土は、主に、黄茶褐色砂質土で、土丹粒を少量含む。ややしまりがある。

土壙15（図38）

土壙15は、調査区西側のG－3グリッドで検出された。径は、50～60cmで、不整円形である。検出面からの深さは、64cmで、底面の海抜レベルは、8.17mである。覆土は、主に暗灰色粘質土で、粘性があり、しまりはなかった。

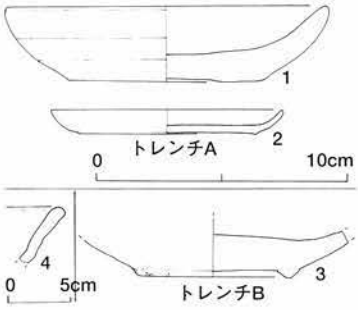


図41　5面下層確認トレンチ出土遺物

5面出土遺物（図39）

5面は、全体的に遺構も少なく、遺物の出土もあまり見られなかった。図示し得た遺物は、図39の14点のみである。

1は、青磁蓮弁文碗である。素地は、灰白色を呈し、黒色の微粒子が混入する。釉は、淡い緑灰色を呈し、光沢がある。釉中の気泡により、透明感は失われる。口縁端部には、焼成時に生じたと思われる、微少なガス噴出口が、幾つか見られる。

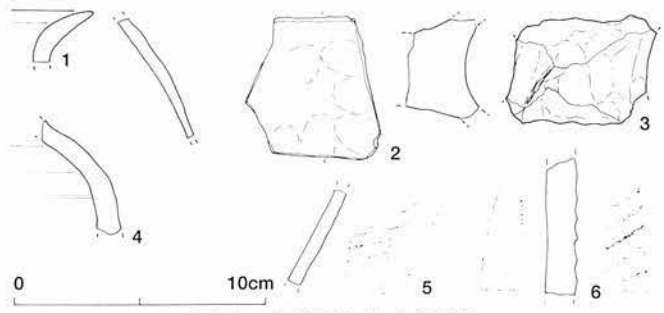


図42　中世層出土古代遺物

2は、山茶碗窯系こね鉢。胎土は、灰色で、石英、長石などの白色の粒子や、黒色の微粒子が混入する。3は、常滑こね鉢。胎土は、褐色で、山茶碗窯系こね鉢同様、石英、長石などが混入する。

4は、白かわらけ。粉質で、雲母などが混入する。焼成は良好である。

5～12は、糸切り底のかわらけである。5、6は、大皿。5は、厚手で、器高浅めである。胎土は、粉質で、肌色を呈す。口径は、13.6cm、底径は、8.6cm、器高は、3.2cmである。6は、5に比べ、体部はやや薄く、上位部分がほぼ垂直につまみ上げられる。胎土は、粉質で、暗茶褐色を呈する。口径は、12.0cm、底径は、8.0cm、器高は、3.1cmである。

7～12は、小皿である。口径は、8.0または、8.2cmである。底径は5.2～6.0cm、器高は1.7cm前後であるが、11は、やや深めの皿で、器高2.1cmである。体部は、7、9が、中位に屈曲を持つ。

8は、やや直線的な立ち上がりを見せる。10、11は、緩やかな丸味を持つ。

12は、下位に、強い丸味を持つ。

13は、砥石。おそらく仕上げ砥であろう。14は、滑石製品である。双六の駒であろうか。

7．5面下層確認トレンチ、中世層出土古代遺物

5面下層確認トレンチ（図40）

5面下層の確認トレンチは、調査区北東隅（トレンチA・東西160cm×南北110cm・5面からの深さ85cm）と、北西隅（トレンチB・東西95cm×南北155cm・5面からの深さ95cm）の2カ所設定した。遺物は、5面に極めて近い上層から数点出土したが、下層からは出土しなかった。

5面下層は、4～5層に分かれるが、それぞれ、面を構成していたとすると、全面的に広げてみないと確実なことはいえないが、遺物の出土状況から見て、遺構は希薄で、短期的な面であったと思われる。

5面下層確認トレンチ出土遺物（図41）

図41－1は、トレンチA出土の糸切りかわらけ大皿である。厚手で、器高は浅く、側面に綺麗な丸味を持つ。胎土は、粉質で、茶褐色を呈する。口径は、13.0cm、底径は8.0cm、器高は3.0cmである。口径と、底径の差がやや大きい。

2も、トレンチA出土の遺物で、漆器皿である。黒漆塗りの浅い皿で、文様は描かれていない。口径は、9.4cm、底径7.0cm、器高0.9cmである。

4は、トレンチB出土の、山茶碗窯系こね鉢の口縁部小片である。胎土は、淡灰色を呈し、石英、長石粒等を含む。

5も、トレンチB出土の遺物で、美濃系の山茶碗である。胎土は、灰色を呈し、精良で硬く、よく焼き締まっている。復元高台径は、6.1cmである。

中世層出土古代遺物（図42）

図42－1～4は、土師器である。1は、4面出土の甕の口縁部と思われる。胎土は、やや粗く、器表はざらつく。2は、器種不明の遺物。4面から出土。甕の胴部であろうか。全体に、微細な雲母片を多く含む。外面には、指頭痕が確認できる。3は、高坏等の脚部であろうか。5面から出土。胎土は、濃肌色～赤茶色を呈し、白色、黒色の微粒子、微細雲母辺、白針などを含む。4は、甕の肩部であろうか。2面から出土。胎土は、淡灰褐色を呈し、微砂、黒色の微粒子を多く含む。

5、6は、須恵器小辺。器種は不明。甕などの胴部片であろうか。5は、4面から出土した。胎土は、明灰色を呈し、きめ細かく、混入物はほとんどない。6は、2面から出土した。胎土は、灰黒色で、混入物はほとんどない。

第４章　まとめ

今回の調査では５時期に渡る生活面が確認された。本調査地は、ほぼ同時に実施された西隣調査地（図２－②地点）との関連を踏まえ、各面を捉えていかねばならないが、これについては、②地点の報告に詳しくあるので、そちらを参照願いたい。ここでは、本調査地の各面についてのみ若考を加えたい。

第１面と２面は、出土したかわらけに時期差は認められず、連続した生活面であることが窺える。１、２面の年代は、出土かわらけの編年感から14世紀中葉～15世紀前半頃が充てられよう。

第１面は、検出された遺構は少なく、遺構同士の関連も見出せなかった。検出された遺構は、調査区南東に集中しており、調査区南外に関連遺構の展開が予測される。

第２面Ｊ－４～５グリッドで検出された鎌倉石切石列は、鎌倉石が３個整然と並んでおり、石垣などの名残であろうと思われるが、関連遺構も検出されず、検出規模も小規模であるため、確定はできない。

第２面上から出土の輪花型火鉢は、鎌倉出土の火鉢の分類によると、Ⅲ類に属すると思われる。Ⅲ類は、火鉢の編年から、14世紀中葉に普及したようである。ほぼ完形に近く復元でき、好資料となり得た。

第４面検出の溝と柱穴列は、それぞれの軸線方向が、溝はＮ－27°－Ｅ、柱穴列がＮ－28°－Ｅで、ほぼ平行関係にある。その方向性から、柱穴列は、西隣の調査地で検出された掘立柱建築址に関係すると思われ、溝は、その区画を意味するのではないだろうか。また、第３面検出の棚列も、４面の溝、柱穴列とほぼ同一の軸線方向で、関連遺構は検出されなかったが、おそらく区画を表していると思われる。第３面の年代は、出土かわらけの編年感から、14世紀前葉頃、第４面は、13世紀末葉頃が充てられよう。

第５面の遺構の展開はやや希薄で、出土遺物の量も少なく、活発な人々の活動もあまり感じさせない。第５面は、この地で人々が、中世に於ける土地利用を展開していった、初期の段階と考えられる。第５面は出土かわらけの編年感から、13世紀中葉～後半代頃が充てられる。

本調査地で、人々が活発な活動を展開したであろう時期は、区画を示すと考えられる遺構が検出された第４面から比較的遺構密度の高い第２面までの時期（14世紀前葉～14世紀末頃）が充てられよう。

本調査地は、第５面以外の各面に整地の痕跡が窺える。第１面は、土丹（破粋泥岩）粒丹塊の集中箇所があるが、上層からの撹乱を受け、全面に広がりを見せない。第２面からは、良好な土丹版築が検出されているが、やはり全面に広がっていない。第３面は、第２面の土丹版築ほど良好ではないが、土丹を突き固めた痕跡が見られる。第４面は第１～第３面とは違い、かわらけの破片をよく突き固め整地している。これは、西隣の調査地でも確認されている。

本調査地は、西隣の調査地と今後の調査の成果も合わせ、第１章で述べた、寺院や屋敷との関連を明らかにしていくことが、今後の研究課題である。

《参考文献》

河野真知郎　1986年　「鎌倉における中世土器様相」　『神奈川考古』21号

河野真知郎　1993年　「中世鎌倉火鉢考」『考古論叢　神奈河』　第２集

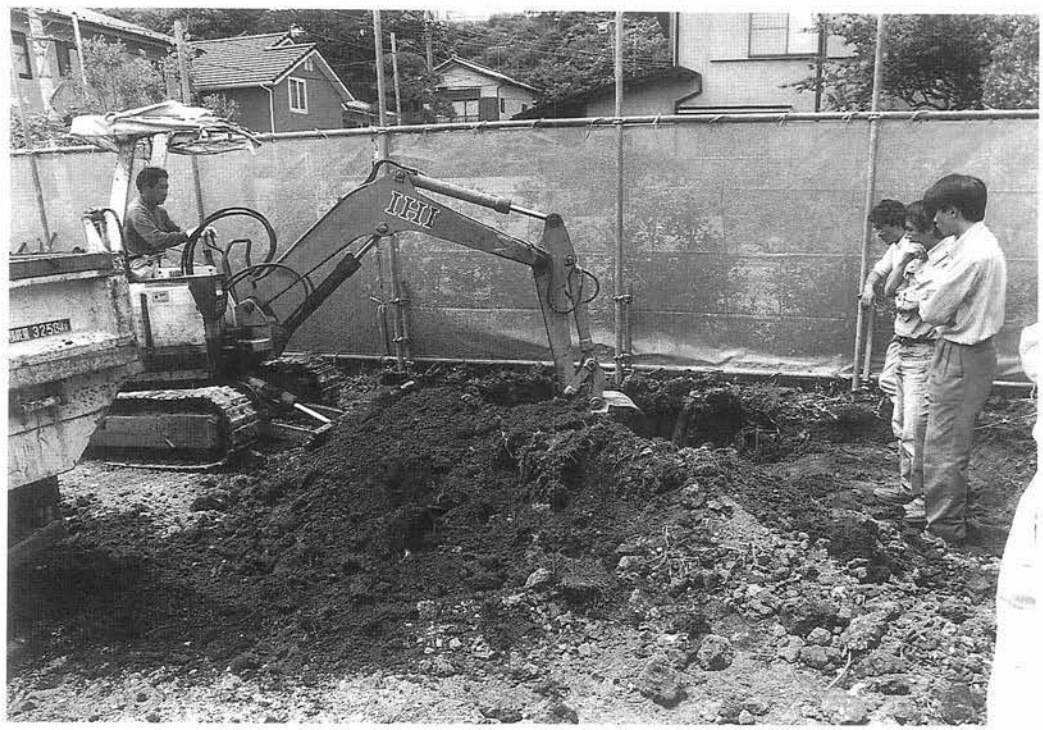
写　真　図　版

A▲　調査地より北東を望む

B▲　調査地より北を望む

PL 2

A▲　調査前状況



B▲　表土掘削

A▲　現代建物（南から）

B▲　同上（東から）

PL 4

◀A 1面土丹敷（西から）

◀B 1面土壙1（北東から）

◀A 1面土丹敷（東から）

B▶ 方形土壙（南から）

PL 6

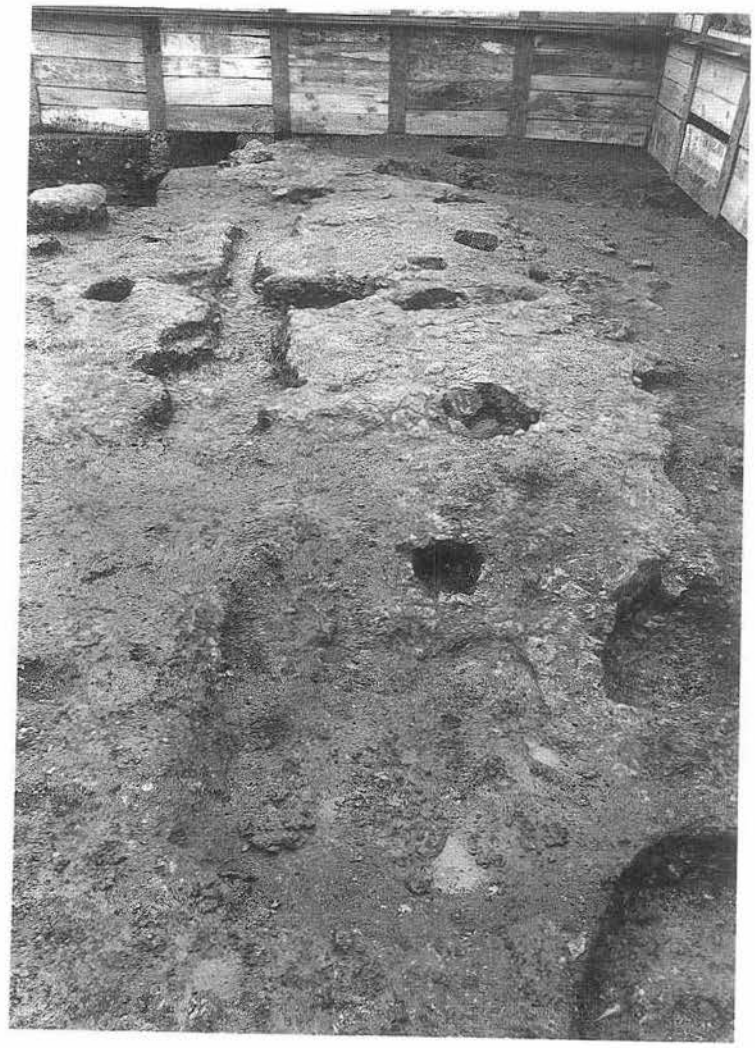
A▲　2面出土火鉢（西から）

B▲　2面全景（南から）

A▲　2面鎌倉石列（西から）

B▲　2面土丹地業面（東から）

PL 8



◀A 土丹地業（西から）

◀B 同上中央ピット群（南から）

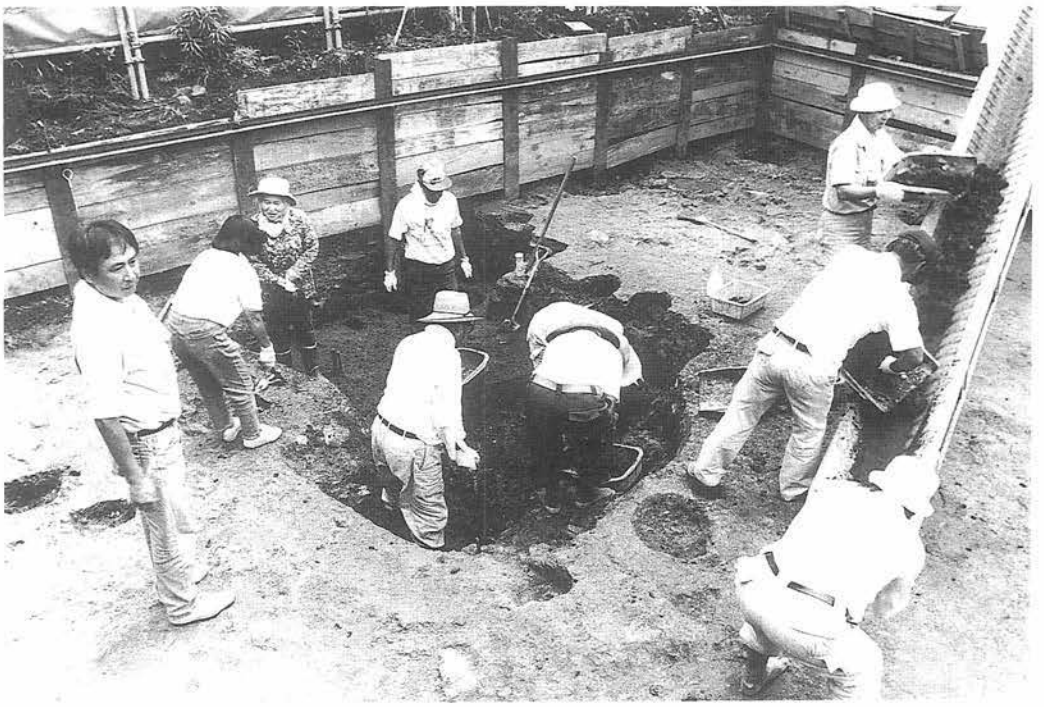
◀A 3面出土骨製品（北から）

◀B 3面柵列（南から）

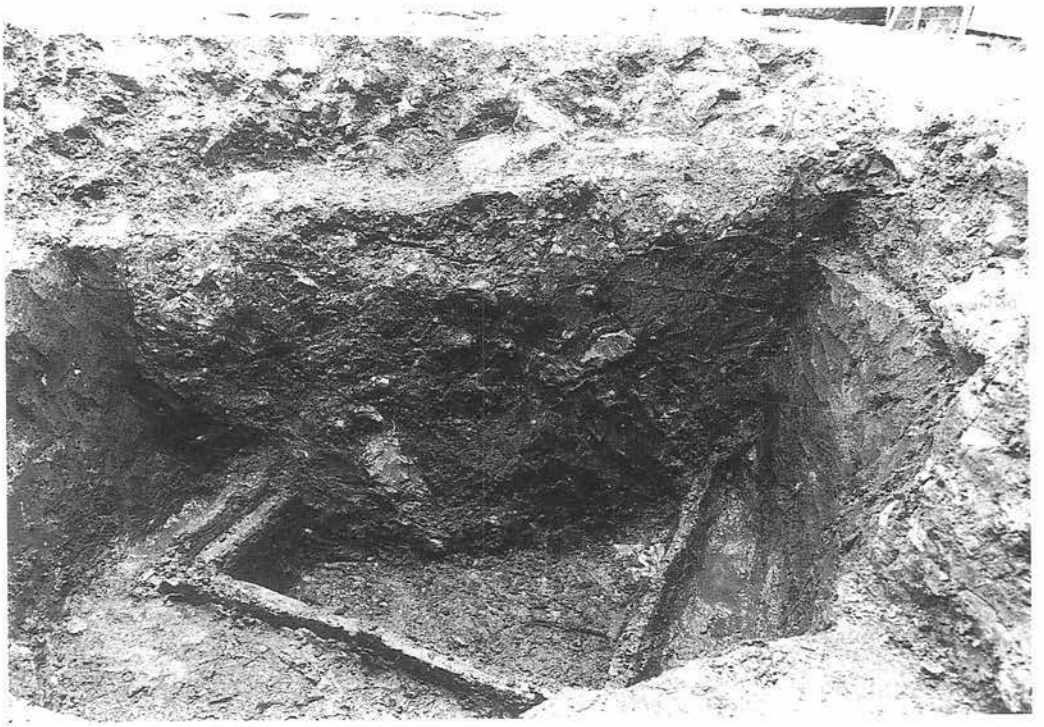
PL10

◀A 3面柵列（北から）

◀B 3面土丹敷凹地（西より）



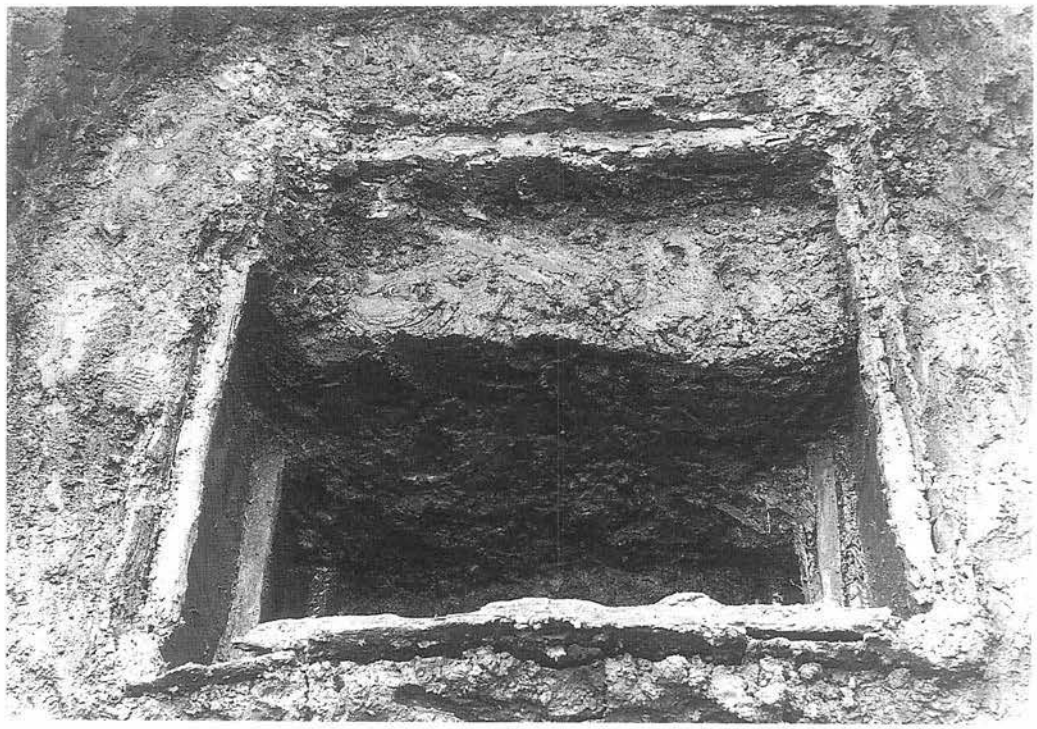
A▲　3面井戸1　作業状況（北から）



B▲　井戸1　セクション（東から）

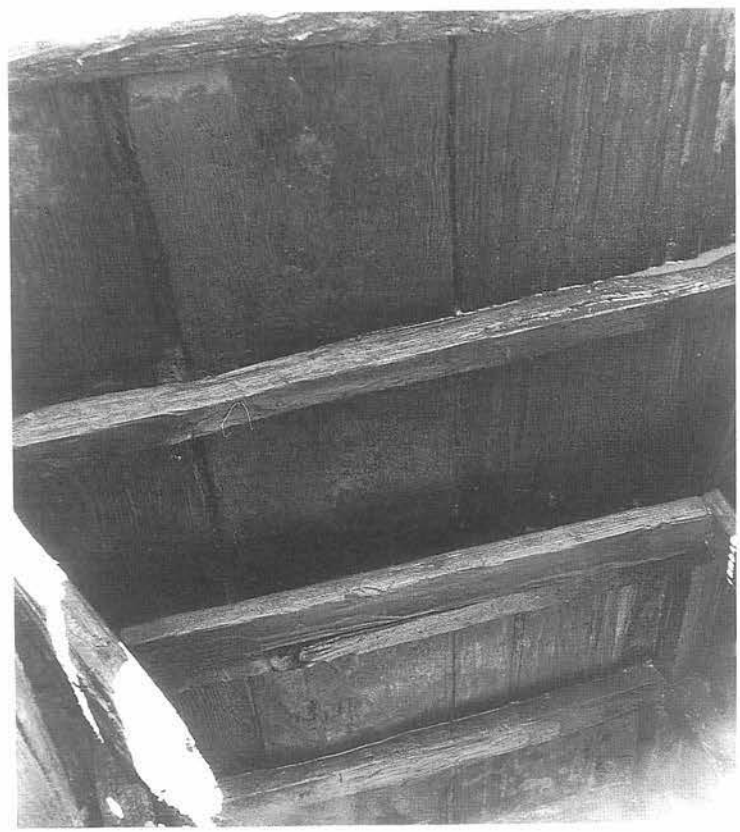
PL12

A▲　3面井戸1　頭蓋骨出土状況（東から）



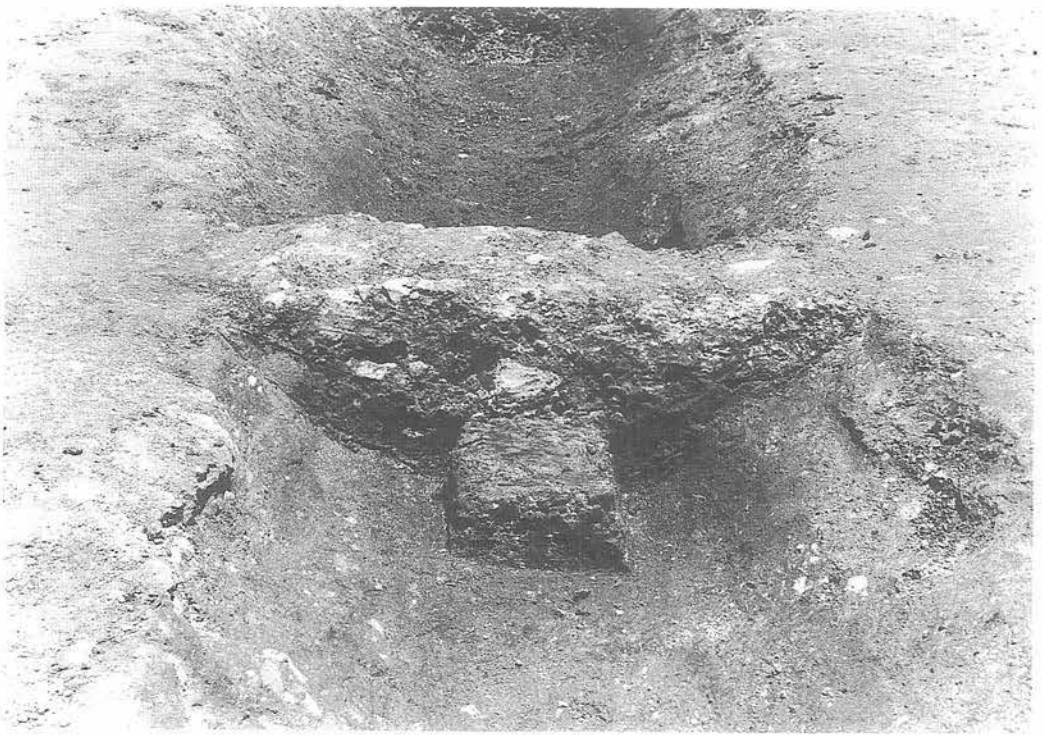
B▲　同上　半裁（東から）

A▲　3面井戸1　（東から）

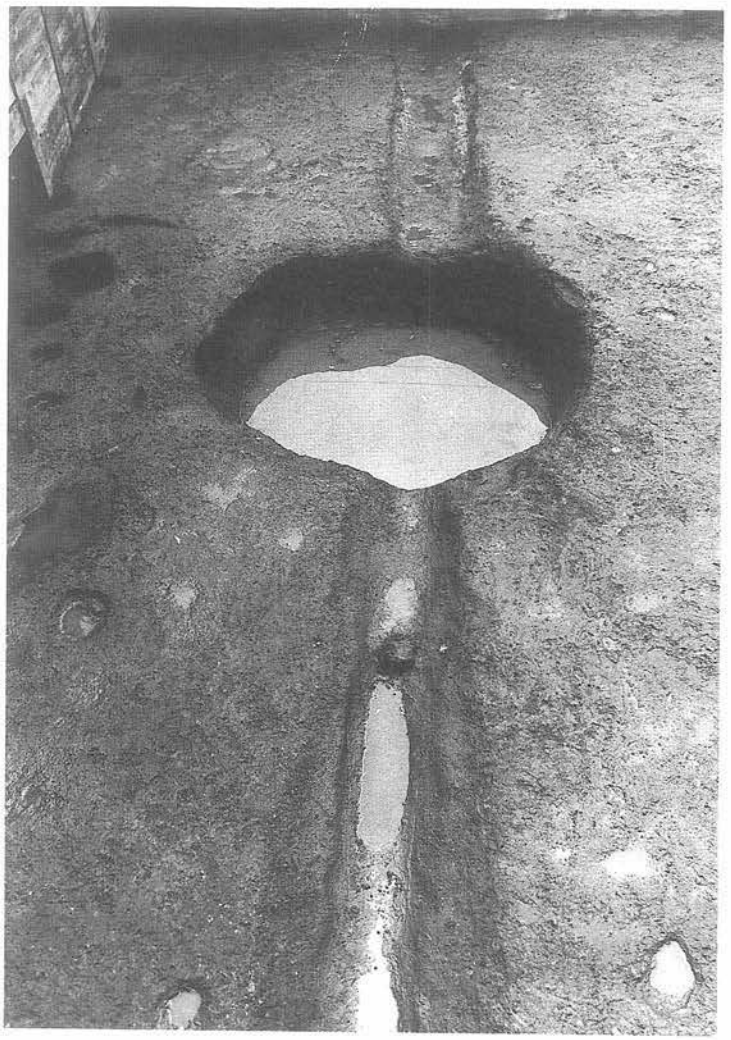


◀B　同上　南壁横桟補修状況（北から）

PL14



◀A 4面溝1（南から）



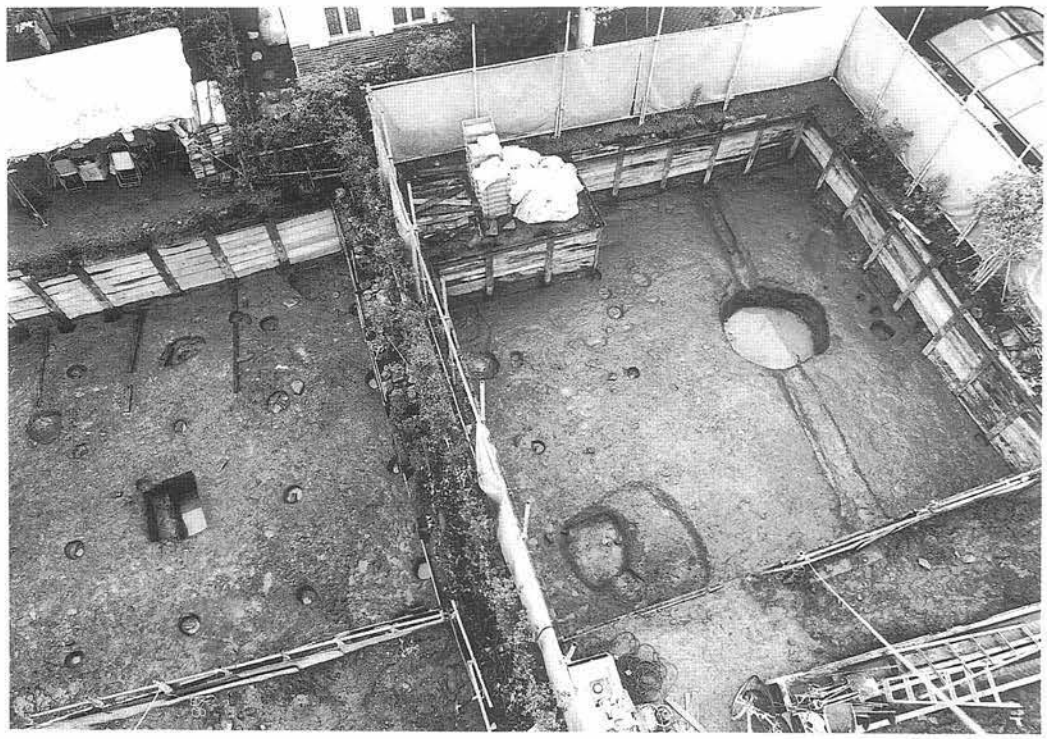
◀B 4面溝1（北から）

◀A 4面西部柱穴列（南から）

◀B 5面全景（南から）

PL16

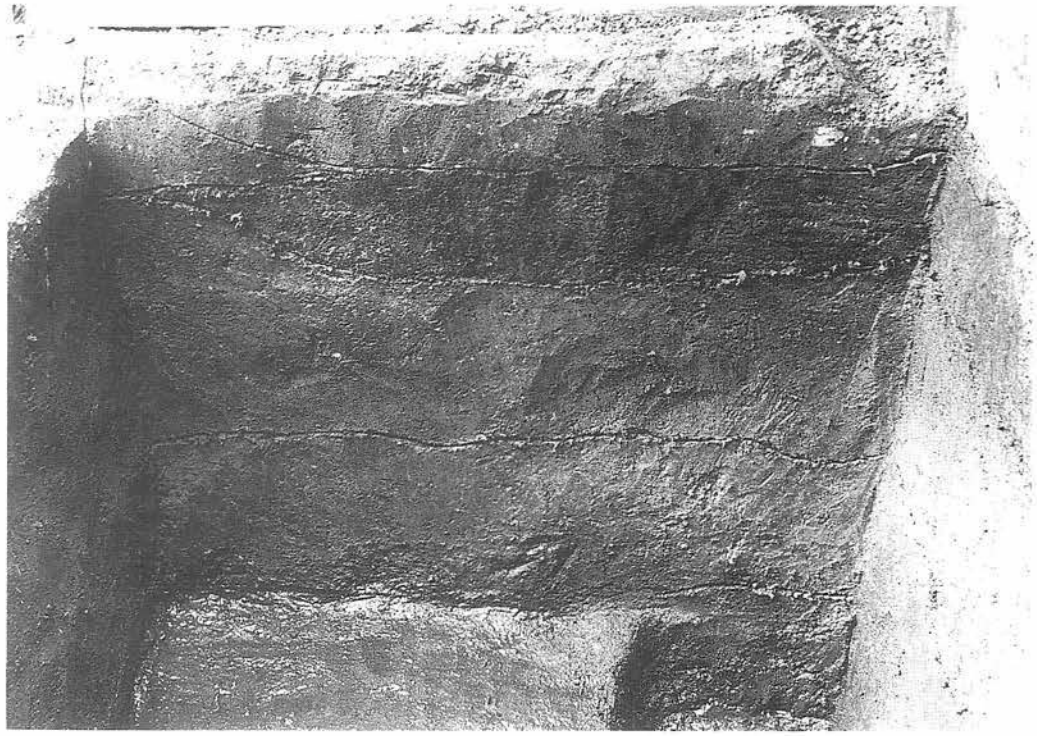
◀A 調査区北西壁



◀B 4面全景（南から）

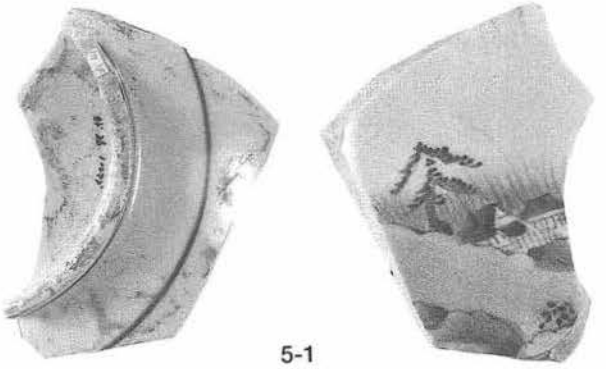
PL17

◀A 北東トレンチ北壁



B▲ 北西トレンチ北壁

P L 18

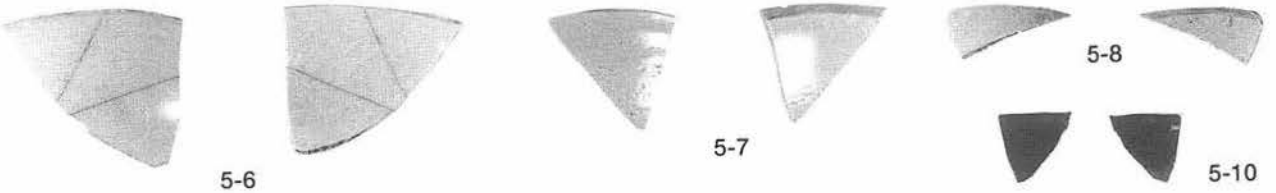


5-1

5-2

5-4

5-9

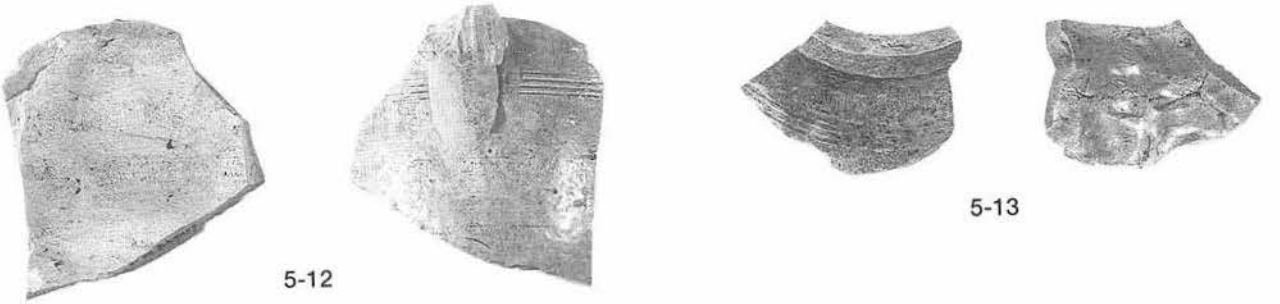


5-6

5-7

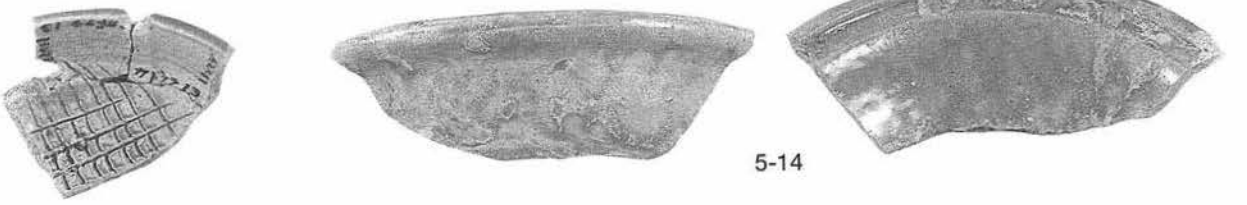
5-8

5-10



5-12

5-13

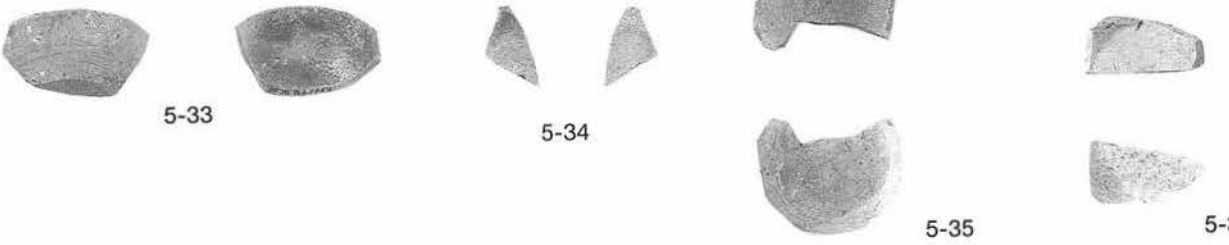


5-16

5-14

5-18

5-17

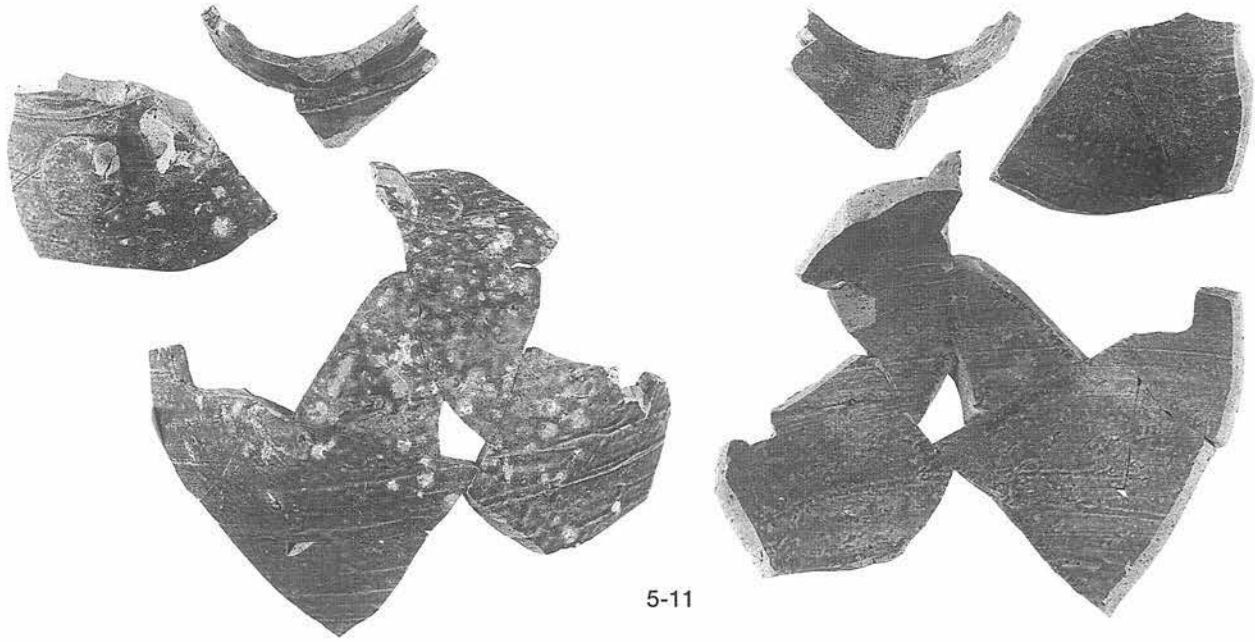


5-33

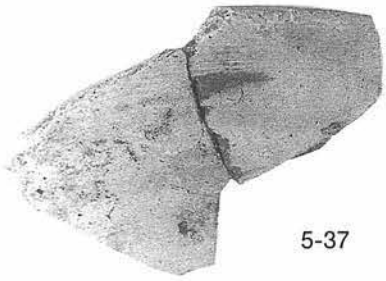
5-34

5-35

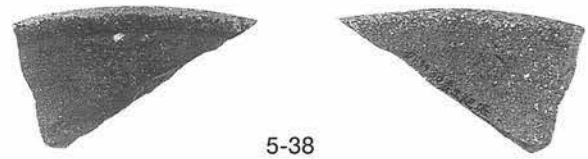
5-36



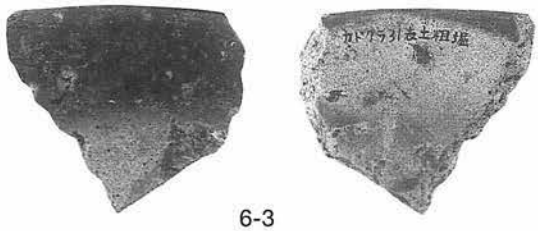
5-11



5-37



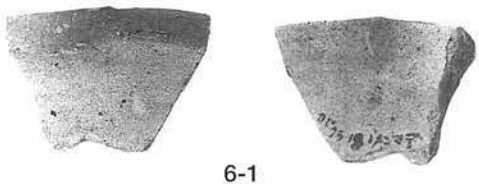
5-38



6-3

6-4

6-6



6-1

6-29

6-40

6-31

6-46

P L 20

9-1

土壙1

9-8

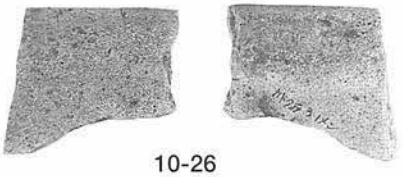
9-9

方形土壙1

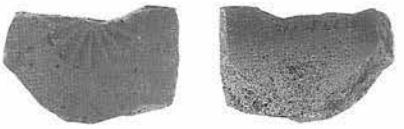
10-1

10-2

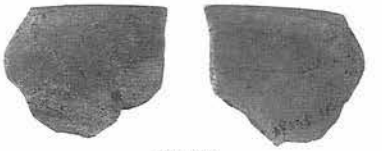
10-27



10-26



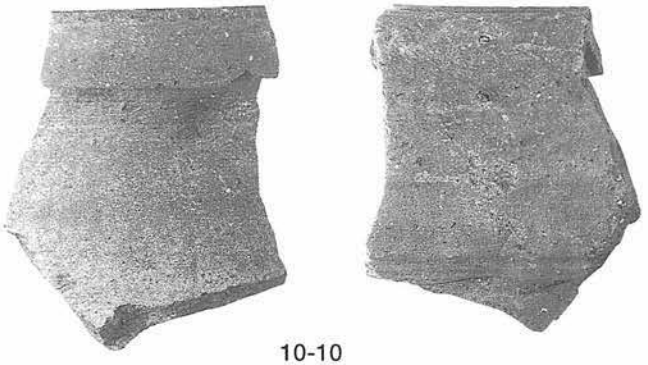
10-29



10-28

10-4

10-17



10-10

1面

11-32

11-42

11-31

11-33

17-2

17-3

17-5

土壙3

17-7

17-8

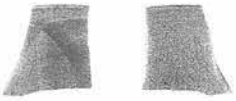
17-9

17-10

土壙4

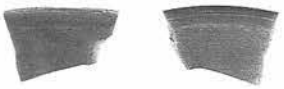
17-11

18-1


18-2

18-3

18-4


18-5

18-6

18-8

18-9

18-10

18-11

18-12

18-13

18-14

18-15

18-16

18-17

18-26

18-27

18-29

18-19

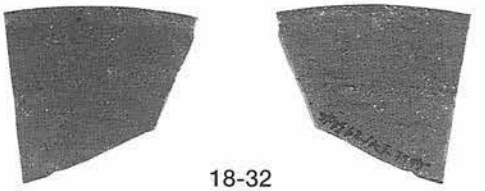
18-23

2面

P L 22

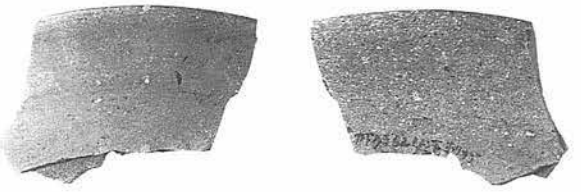
18-30

18-31



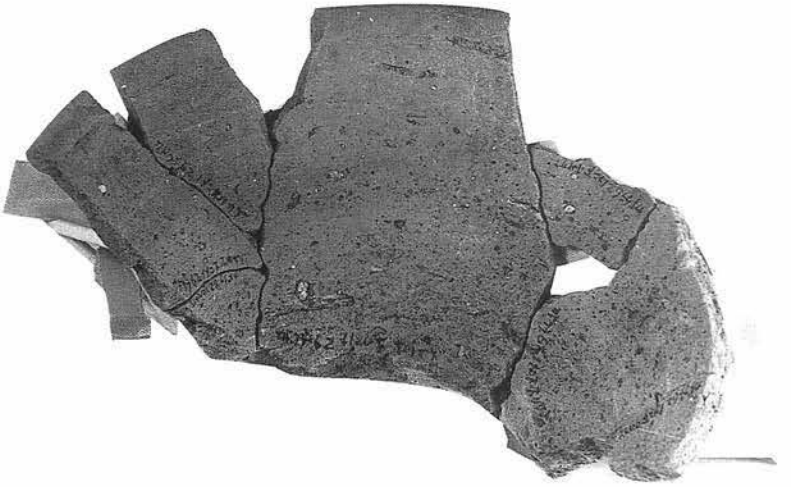
18-32

18-34

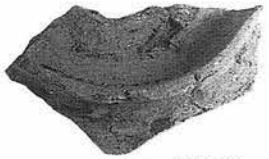


18-35

18-33



18-36



18-39

18-37

19-17

19-18

19-20

19-41

19-37

P L 24

20-2

20-11

20-13

20-7

20-16

20-27

20-32

20-37

20-54

19-39

20-57

20-61

20-64

20-67

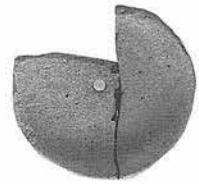
20-68

20-71

20-73

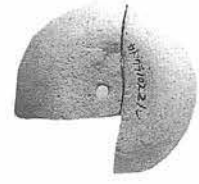
20-79

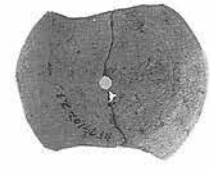
20-86



20-96

20-97

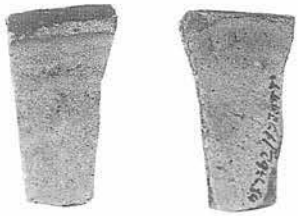




20-98

20-99

20-100

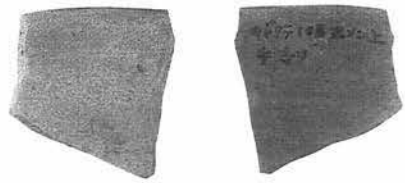


21-1

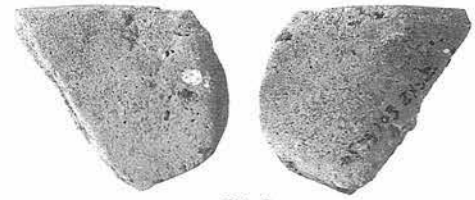
21-2

21-3

21-4



21-5

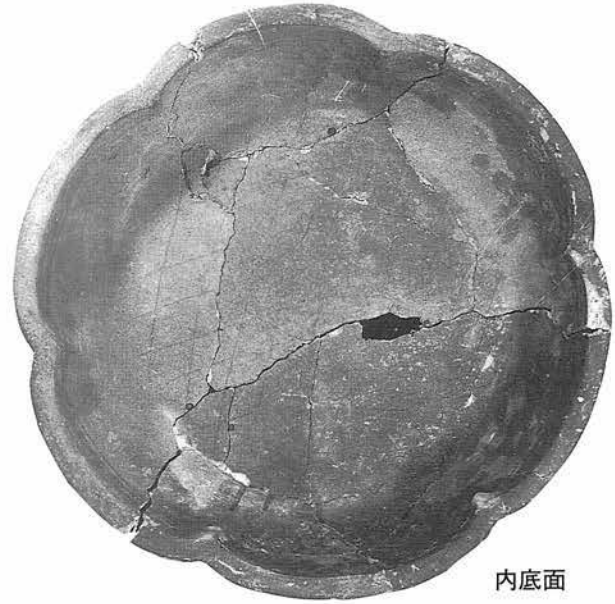


21-6

21-7

21-8

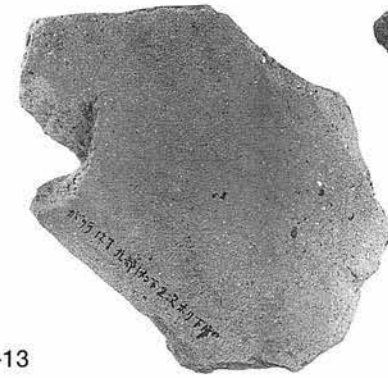
外底面



内底面

21-12

P L 26

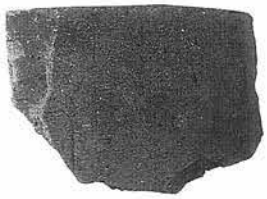


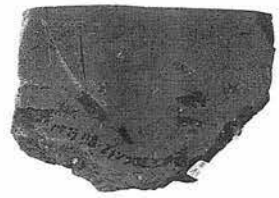
21-13

21-29

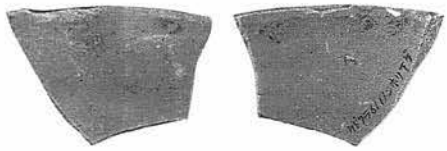
21-43

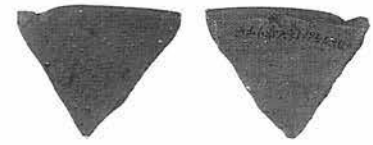
21-44

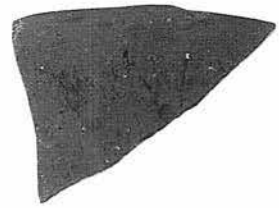


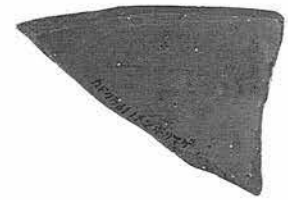


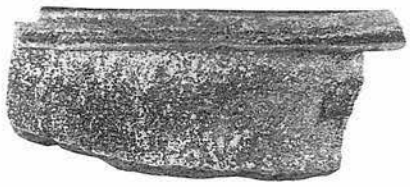
21-14

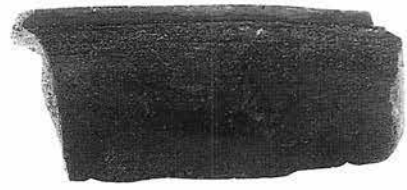


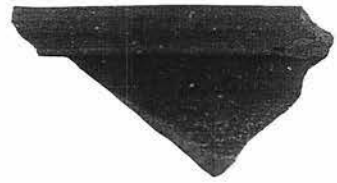


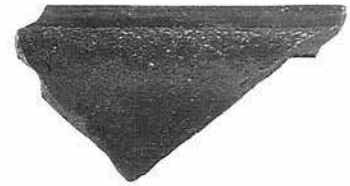












28-1

土壙8

29-1

29-2

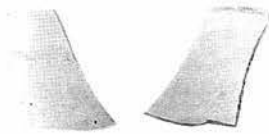
29-3

29-4

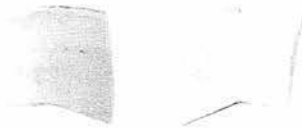
29-5

29-8

29-9

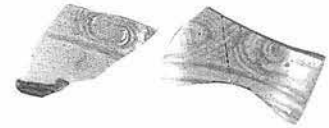


29-10

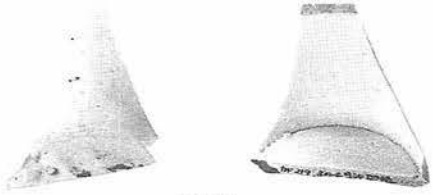


29-11

29-12



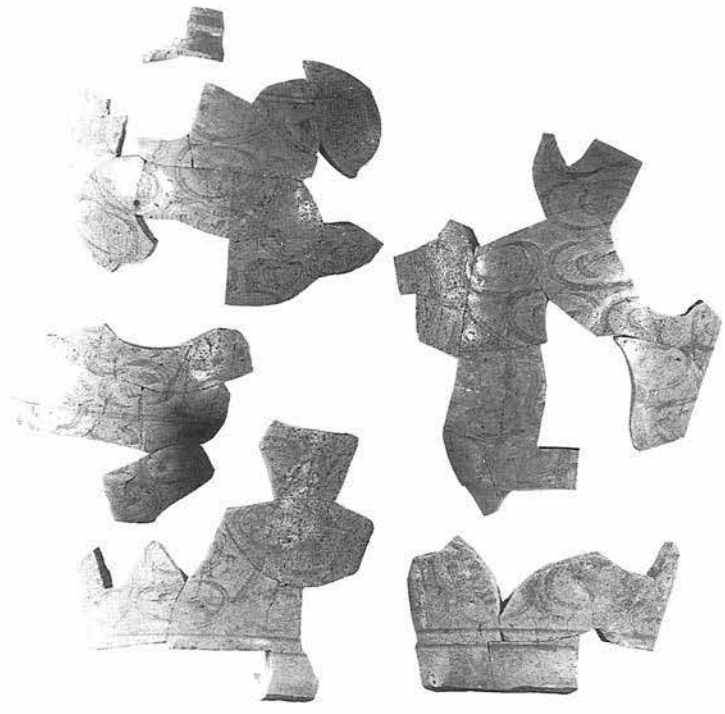
29-15



29-13

29-14

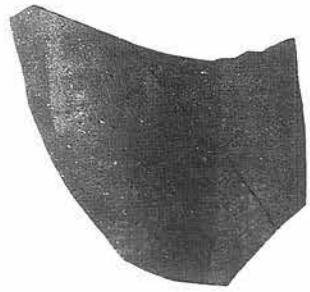
3面



29-16

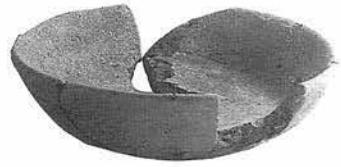
P L 28

29-17



29-33

29-37



29-38

29-42

29-43

29-46

29-53

29-57

29-58

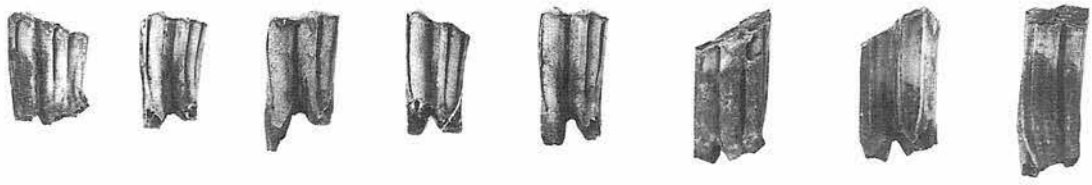
29-59

29-19

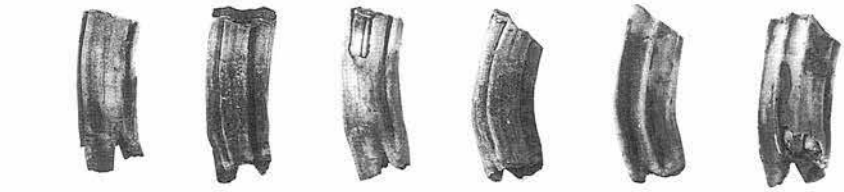
3面

32-8

溝1



35-1



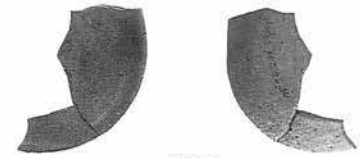
土壙11

35-2

土壙12

36-1

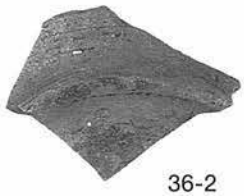
36-4



36-6

36-9

36-12



36-2

36-36

36-37

36-34

4面

39-1

39-5

39-6

39-7

39-12

39-4

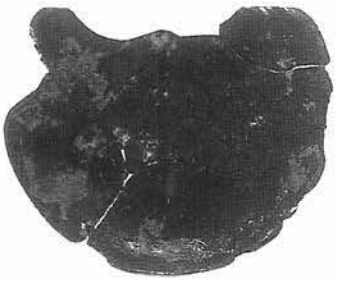
39-13

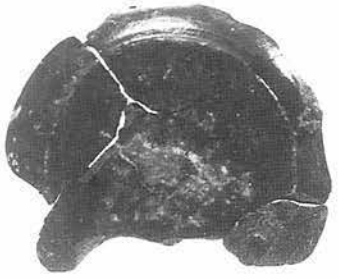
39-14

5面

P L 30

41-1





41-2

北東トレンチ

41-3

41-4

北西トレンチ

42-1

42-2

42-3

42-4

42-5

42-6

中世層出土古代遺物

井戸1

26-4

26-19

井戸1最下層

26-17

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	かながわけんかまくらしさすけ 神奈川県鎌倉市佐助一丁目450番24	204	No.203	° ′ ″	° ′ ″	1996520 ～ 1999.8.3	80.06	個人専用住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐助ヶ谷遺跡	中世都市	鎌倉時代～室町時代	土丹版築 井戸 柵列 溝 土壙	かわらけ 常滑窯製品 瀬戸窯製品 山茶碗窯製品 人骨（頭蓋骨） 銭 鉄製品 石製品 舶載品	

佐助ヶ谷遺跡（No.203）

佐助一丁目450番25・27地点

例　　言

1．本書は鎌倉市佐助ヶ谷遺跡（鎌倉市佐助一丁目450番25・27地点）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は個人専用住宅建築に伴い、国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会がこれを実施した。

3．発掘調査は本調査に先立つ試掘調査を実施した後、平成８年６月８日～同年８月５日にかけて実施した。出土遺物に関しては鎌倉市教育委員会がこれを保管している。

4．本書の遺構・遺物の縮尺は次のとおりである。

①遺構配置図１／80・個別遺構図１／80。

②遺構図の水糸高は海抜高を示す。

③遺物実測図は１／３・１／６の各縮尺を使用している。

5．遺物実測図には次の記号が使用されている。

釉の限界線---使用痕の範囲 ←→ 調整の変化点---真真加工痕の範囲 ←—→

6．本書の執筆は次のものが分担した。

第１章～第３章　滝澤晶子

編集は宮田・滝澤が担当した。

7．本書の図版作成および写真撮影は次のものが分担した。

①遺 物 図 版…宇賀神雅子・河内令子・滝澤晶子・松田理枝・吉原真智子

②遺 構 図 版…高野昌巳

③遺 構 写 真…高野昌巳・滝澤晶子

遺構ポール写真…木村美代治

④遺 物 写 真…滝澤晶子・宮田眞

8．発掘調査および出土遺物整理にあたっては、以下の諸氏・諸機関に御教示・御協力を賜った。

（順不同・敬称略）

鈴木　亘（文化学院講師）・河野眞知郎（鶴見大学教授）・鎌倉市教育委員会文化財課・鎌倉考古学研究所

9．近世田に関する土層の分析はパレオ・ラボに依頼した。

10．土工事等に関しては菊地工務店に御協力いただいた。

11．調査体制は以下のとおりである。

調 査 主 体　鎌倉市教育委員会

調 査 担 当　宮田　眞

調　査　員　滝澤晶子

調査員補助　吉原真智子・宇賀神雅子

調査協力者　岸　親男・岸名富雄・高井真一郎・沼上三代治・森　芳郎（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

本　文　目　次

第１章　調査経過とグリッド配置……80
第２章　検出遺構と出土遺物……81
　１）１面の遺構と遺物……81
　２）１Ｂ面の遺構と遺物……86
　３）２面の遺構と遺物……92
　４）３面の遺構と遺物……104
　５）４面の遺構と遺物……113
　６）４Ｂ面の遺構と遺物……120
第３章　まとめ……123
附　編　佐助ヶ谷遺跡の花粉化石　　鈴木　茂（パレオ・ラボ）……126

挿　図　目　次

図１　遺跡周辺図……79
図２　グリッド配置……80
図３　１面全体図……81
図４　近世田出土遺物……82
図５　土壙１・２……82
図６　土壙１・２出土遺物……82
図７　かわらけ溜り１……83
図８　かわらけ溜り１出土遺物……83
図９　表土層出土遺物……84
図10　１面出土遺物……85
図11　１Ｂ面全体図……86
図12　かわらけ溜り２……87
図13　かわらけ溜り２出土遺物……88
図14　１Ｂ面出土遺物（１）……89
図15　１Ｂ面出土遺物（２）……90
図16　１Ｂ面出土遺物（３）……91
図17　２面全体図……92
図18　掘立柱建物１……92
図19　掘立柱建物１出土遺物……93
図20　柱列１……93
図21　柱列１出土遺物……93
図22　土壙３・４・５・６・７・８・９・10
……94
図23　土壙３・４・５・６・７・８・９・10
出土遺物……95
図24　かわらけ溜り３……96
図25　かわらけ溜り３出土遺物……97
図26　かわらけ溜り４……97
図27　かわらけ溜り４出土遺物……97
図28　２面出土遺物（１）……98
図29　２面出土遺物（２）……99
図30　２面出土遺物（３）……101
図31　２面出土遺物（４）……102
図32　２面出土遺物（５）……103
図33　３面全体図・掘立柱建物２……104
図34　掘立柱建物２出土遺物……105
図35　土壙11・12……105
図36　土壙11出土遺物……105
図37　かわらけ溜り５……106
図38　かわらけ溜り５出土遺物（１）……106
図39　かわらけ溜り５出土遺物（２）……107
図40　３面出土遺物（１）……108
図41　３面出土遺物（２）……109
図42　３面出土遺物（３）……110
図43　３面出土遺物（４）……111
図44　４面全体図……113

図45　土壙13・14・15 ……114
図46　土壙13・14・15出土遺物 ……114
図47　板囲い状遺構 ……115
図48　板囲い状遺構出土遺物 ……115
図49　かわらけ溜り7 ……116
図50　かわらけ溜り7出土遺物 ……116
図51　かわらけ溜り6 ……116
図52　かわらけ溜り6出土遺物 ……117
図53　4面出土遺物（1）……118
図54　4面出土遺物（2）……119
図55　4B面全体図・掘立柱建物3・4 ……120
図56　掘立柱建物3出土遺物 ……121
図57　掘立柱建物4出土遺物 ……122
図58　4B面出土遺物 ……122
図59　遺構変遷図 ……125

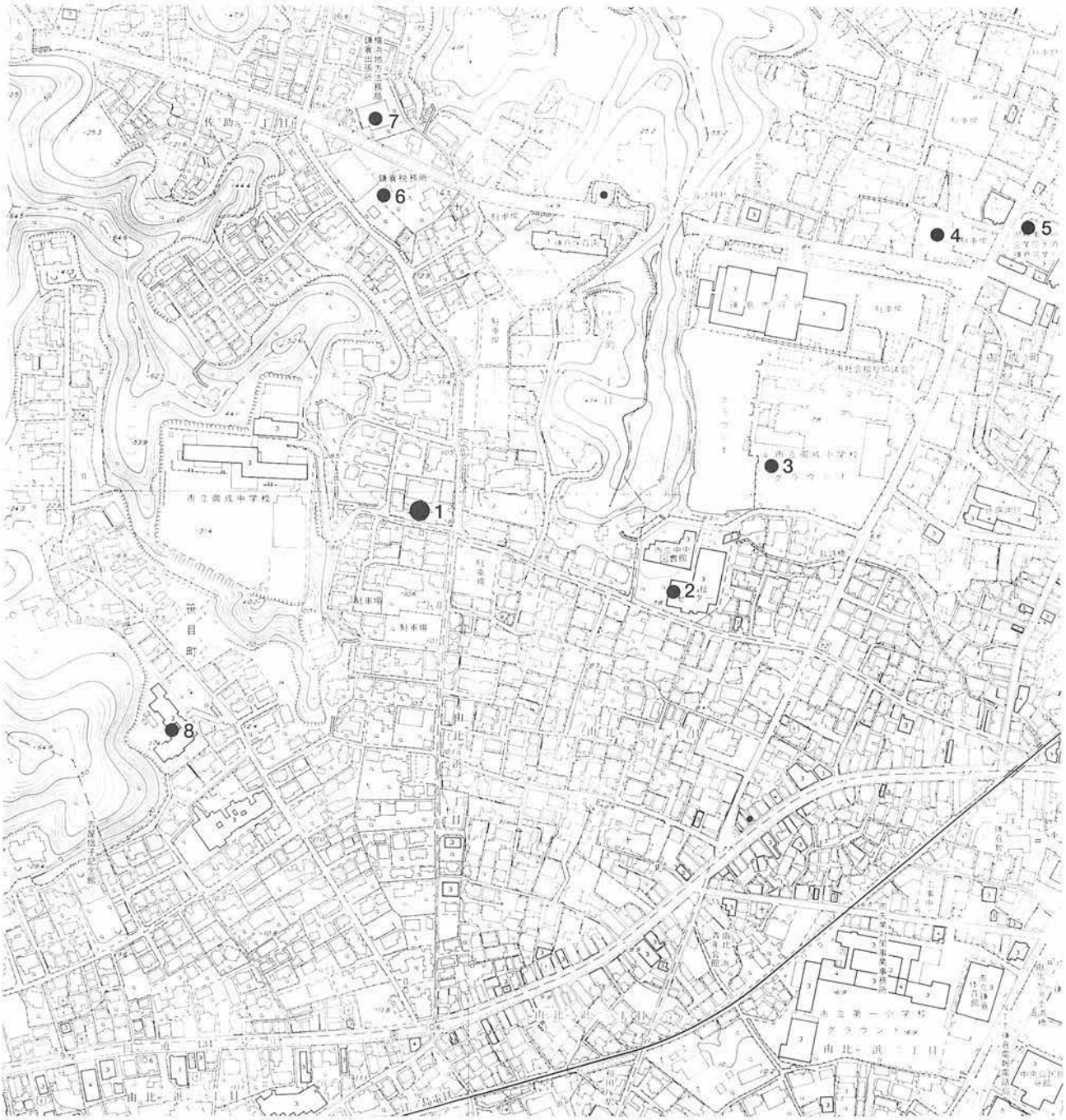
表　目　次

表1　佐助ヶ谷遺跡の産出花粉化石一覧表 ……127
図A　佐助ヶ谷遺跡の主要花粉化石分布図 ……128
表2　試料1g当りのプラントオパール ……129
図B　佐助ヶ谷遺跡のプラントオパール分布図 ……129
図版Ⅰ　佐助ヶ谷遺跡の花粉化石 ……132
図版Ⅱ　佐助ヶ谷遺跡のプラントオパール ……133

写真図版目次

PL1：A.近世田（西から）
B.1面全景（北から）……137
PL2：A.1B面かわらけ溜り2（南から）
B.2面青白磁香炉出土状況（北から）
……138
PL3：A.2面土丹敷（北から）
B.2面かわらけ溜り3（北から）
……139
PL4：A.2面かわらけ溜り4（西から）
B.2面土壙5・7・9（南から）…140
PL5：A.2面土壙3（南から）
B.2面土壙4（北から）……141
PL6：A.2面北部柱列（西から）
B.2面全景（南から）……142
PL7：A.3面かわらけ溜り5（北から）
B.3面曲物出土状況（東から）
C.3面下駄出土状況（西から）……143
PL8：A.3面掘立柱建物2（南から）
B.3面全景（南より）……144
PL9：A.4面礎石建物（西から）
B.同上全景（北西から）……145
PL10：A.4面板囲い状建物と礎板列
（西から）
B.同上（南から）……146
PL11：A.4面板囲い状建物（南壁）
B.同上（東壁）……147
PL12：A.4面板囲い状建物（北壁）
B.4面かわらけ溜り7（北から）…148
PL13：A.4面かわらけ溜り6（北から）
B.同上　近景（北から）……149
PL14：A.4面土壙13・14・15（西から）
B.4面土壙13（北から）……150
PL15：A.4面土壙14（北から）
B.同　セクション（西から）……151
PL16：A.4面土壙15（北から）
B.同　セクション（東から）……152
PL17：A.4面柱穴77（北から）
B.4面全景（南から）……153
PL18：A.4B面掘立柱建物4（柱穴99）
B.同上（柱穴100）……154

ＰＬ19：Ａ．４Ｂ面掘立柱建物３（柱穴82）
Ｂ．同上（柱穴76）……155
ＰＬ20：Ａ．４Ｂ面掘立柱建物３（柱穴88）
Ｂ．同上（柱穴96）……156
ＰＬ21：Ａ．４Ｂ面掘立柱建物３（北から）
Ｂ．４Ｂ面全景（北から）……157
ＰＬ22：Ａ．北東トレンチ（北壁）
Ｂ．同上（東壁）……158
ＰＬ23：表土層・近世田・土壙１・２
かわらけ溜り・１面（１）出土遺物
……159
ＰＬ24：１面（２）・かわらけ溜り２（１）
出土遺物……160
ＰＬ25：かわらけ溜り２（２）１Ｂ面（１）
出土遺物……161
ＰＬ26：１Ｂ面（２）出土遺物……162
ＰＬ27：１Ｂ面（３）出土遺物……163
ＰＬ28：１Ｂ面（４）・掘立柱建物１・
柱列１……164
ＰＬ29：２面土壙・かわらけ溜り３・４
出土遺物……165
ＰＬ30：２面（１）出土遺物……166
ＰＬ31：２面（２）出土遺物……167
ＰＬ32：２面（３）出土遺物……168
ＰＬ33：２面（４）出土遺物……169
ＰＬ34：３面土壙・かわらけ溜り５
出土遺物……170
ＰＬ35：３面出土遺物（１）……171
ＰＬ36：３面出土遺物（２）……172
ＰＬ37：３面出土遺物（３）……173
ＰＬ38：かわらけ溜り６・７出土遺物……174
ＰＬ39：４面出土遺物……175
ＰＬ40：掘立柱建物３・４・４Ｂ面
出土遺物……176



1．本調査地点
2．今小路西遺跡（福祉センター用地）
3．今小路西遺跡（御成小学校内）
4．千葉地遺跡
5．千葉地東遺跡
6．佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）
7．佐助ヶ谷遺跡（横浜地方法務局鎌倉出張所用地）
8．笹目遺跡（笹目町330番－1地点）

図1　遺跡周辺図

第１章　調査経過とグリッド配置

発掘調査は個人専用住宅の建築に伴う事前調査として、鎌倉市教育委員会（調査担当宮田眞・鎌倉考古学研究所）が平成８年６月８日～同年８月５日にかけて実施した。調査面積は約60㎡である。

測量の基準となるグリッドは調査区内を２ｍ×２ｍの方眼を設定し、市４級基準点と合成した。（図２）また、グリッドの南北軸線方位はＮ－23°22′40″－Ｅである。

調査経過

平成８年６月８日　重機による表土層掘削・表面精査
６月10日　遺構確認
６月13日　グリッド設定
７月24日　ポール全景写真
８月１日　中世面下トレンチ
８月２日　４Ｂ面掘立柱建物検出
８月５日　終了

図２　グリッド配置

第２章　検出遺構と出土遺物

１）１面の遺構と遺物

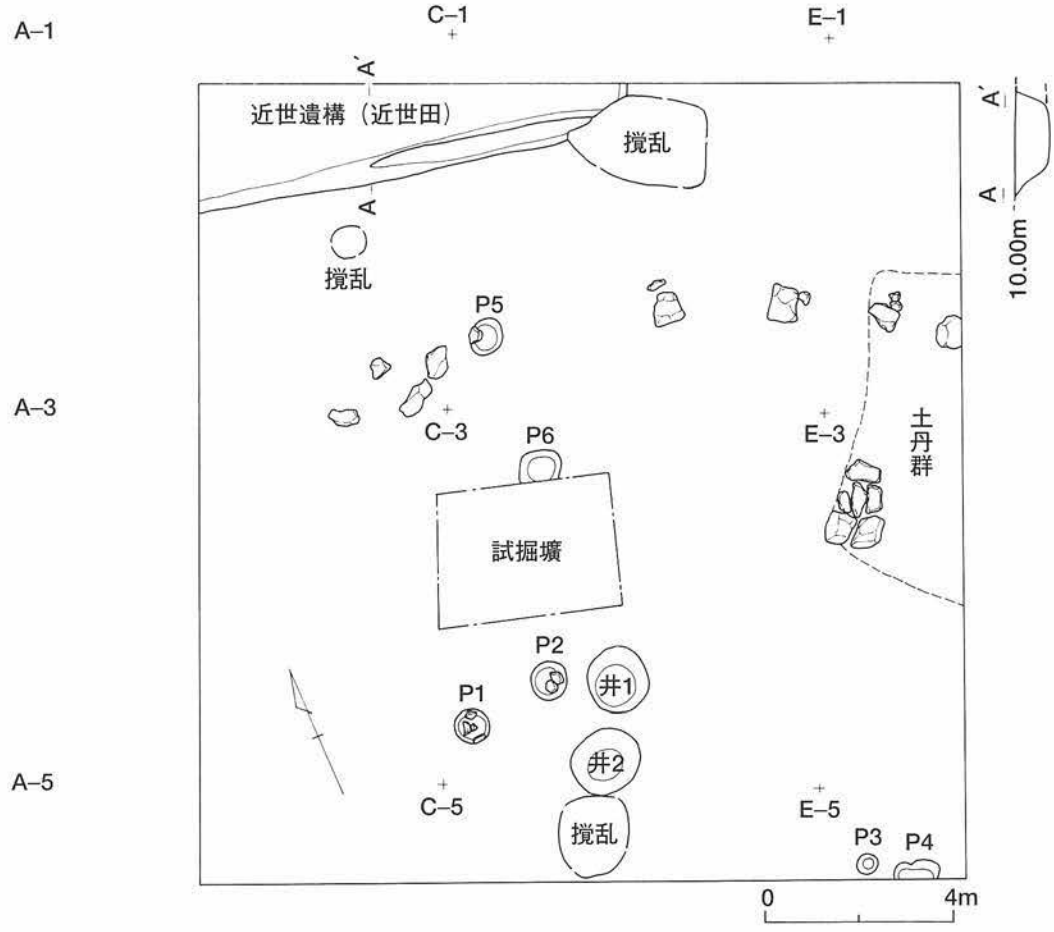


図３　１面全体図

１面の遺構群は、現地表下約80cm（海抜≒9.9m前後）から検出された。この遺構面は近世以降の撹乱を受けており、近世の田圃址が検出された。また、中世に属する遺構として土壙２基・小規模なかわらけ溜り１址・調査区東部に１個の大きさが30～80cmの土丹群・ピット６口が検出されたが、これら遺構の展開密度は調査面積から検討しても疎であり、当遺跡の性格を位置付けるような遺構の検出はなかった。

以下に個別の詳細を報告する。

近世田（図３）

近世田は調査区の北部、Ａ～Ｃ－１～２グリッド付近に検出された。その規模は大部分が調査区外に拡がるため不明である。深さは検出面から40cmを測る。暗褐色の粘質の高い土層が検出され、その覆土については附編に詳しく、分析結果を報告する。

近世田出土遺物（図４）

１～３は近世の磁器の破片である。いずれも小破片で詳細は不明である。４は白磁の口兀皿の口縁部片である。釉調は灰白色を呈す。５は青白磁の印花文の型作りの皿である。釉調は青白色で光沢に優れ、

微気泡のため若干透明度に劣る。

6～10はかわらけである。6・7は大皿である。各々口径は12.8cm・13.6cm、器高は3.5cm・4.0cmを測る。胎土は概ね橙色を呈し、微砂を含み粉質である。また、6の器表は再火を受け、変色しており、灯明皿であろう。8～10は小皿である。口径は、各々7.7cm・7.0cm・6.3cmを測る。8・9は器高が1.7cm前後と浅く、器壁は緩やかに立ち上がる。10は器高が2.2cmと深く、器壁はやや垂直気味に立ち上がる。いずれも胎土は明肌色を呈し、微砂を含み、粉質である。

11は嘉定通寶で背文は六である。初鋳は1208年。

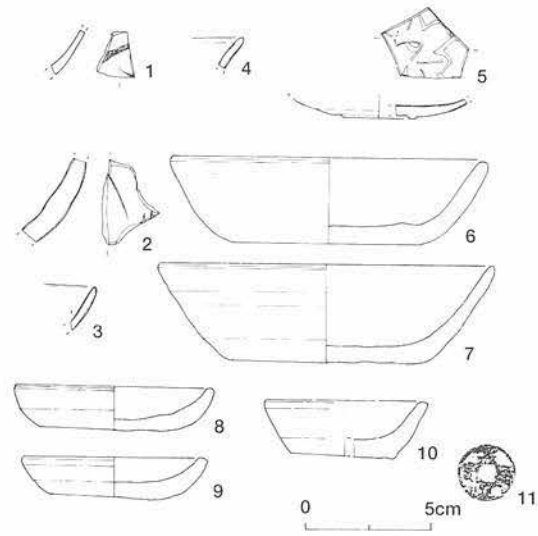


図4　近世田出土遺物

土壙1（図5）

土壙1はB－4グリッド付近に検出された。平面形は円形を呈し、深さは検出面から32cmを測る。断面形は逆台形を呈す。

土壙2（図5）

土壙2はB－4グリッド付近、土壙1の南に検出された。平面形は円形を呈し、深さは検出面から32.0cmを測り、西部は段状に掘り込まれている。

土壙1・2出土遺物（図6）

図6－1～6は土壙1出土遺物である。1は白磁の壷である。釉調は再火のため肌荒れ著しく詳細に乏しい。

2は美濃系の山茶碗である。底径は復元で6.7cmを測る。胎土は灰白色を呈し、堅緻である。高台は貼り付けで、三角形を呈し、端部には籾殻痕が認められる。

3～5はかわらけである。3・4は大皿で口径は12.0cm・13.0cmを測る。器壁はやや緩やかに立ち上がり、内底部には強く指撫でが施される。5は小皿で口径が7.2cm、器高は2.2cm、底径は4.3cmを測り、深い。胎土は概ね肌色を呈し、微砂を含み、粉質である。焼成は良好である。

図6－7は土壙2出土のかわらけである。口径は復元で13.2cm、器高は3.5cm、底径は7.0cmを測る。体部器厚は0.6cm前後で、薄手である。胎土は肌色を呈し、微砂をやや多く含む。焼成は良好。

かわらけ溜り1（図7）

かわらけ溜り1はD－2グリッド付近に海抜約9.8mで検出された。復元実測の遺物を含め、かわらけの大皿2枚・小皿12枚・青磁1点がま

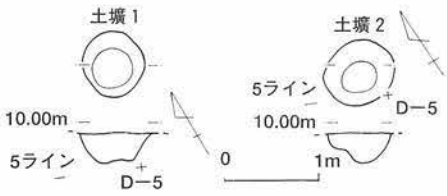


図5　土壙1・2

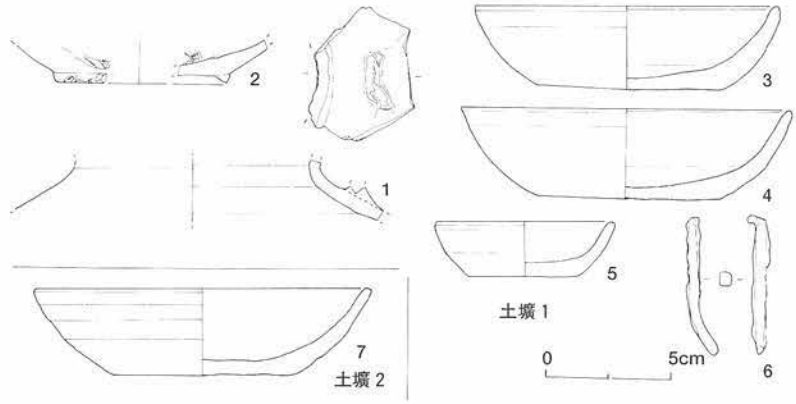


図6　土壙1・2出土遺物

とまって出土した。ごく小規模な遺構である。

かわらけ溜り１出土遺物（図８）

図８－１は青磁の蓮弁文碗である。口径は復元で16.6cmを測る。釉調は緑灰色を呈し、光沢に優れる。貫入が入り、若干気泡が多い。素地は灰色で微細粒やや多く含む。

２～15はかわらけである。２・３は大皿で口径は各々、12.7cm・13.0cm、底径は7.3cm・7.7cm、器高は2.8cm・3.5cmを測る。また、器壁はやや丸味を持ち、緩やかに立ち上がる。２の胎土は暗肌色を呈し、大粒の微砂が含まれる。３は明肌色を呈し、粉質が強い。４～15は小皿である。４～13は口径が7.2～7.8cm、器高が1.5～1.8cm、底径が5.2～5.8cmを測る。器形は厚手で、浅い。胎土は概ね肌色を呈し、やや大粒の微砂が、多く含まれる。焼成はほぼ良好だが、４は胎芯が黒く残る。14・15は口径が6.8cm、器高が2.2cm・2.0cm、底径が4.3cm前後を測る。器形は深く、薄手で、器壁はきれいな丸味を持つ。胎土は明肌色を呈し、粉質が強く、微砂を含む。

16・17は鉄製の釘である。

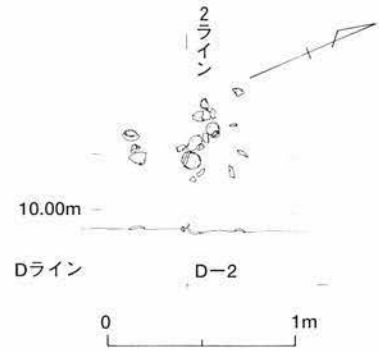


図７　かわらけ溜り１

表土層出土遺物（図９）

図９は表土層出土遺物である。１・２は瀬戸の入れ子である。１は輪花状を呈し、器高は2.7cmを測る。胎土は灰色を呈し、堅緻で焼成は良好である。口縁端から内面にかけて光沢のある自然釉がかかる。２は底部片である。底径は2.6cmを測り、小型である。胎土は灰白色を呈し、白色微粒を含む。また、内底面には紅が残る。

図９－３はとりべである。器表に溶融物が付着している。図９－４は火鉢の口縁部片である。胎土は土器質で淡橙色を呈し、小石粒を含み粗い。

図９－５～７はかわらけである。５は戦国かわらけである。口径は11.5cm、器高は4.1cm、底径は7.5cmを測る。器形は体部器厚が厚く、口縁端は細身になる。側面観は逆台形を呈する。胎土は明橙色を呈し、粉質が強く、やや大きめの微砂を含む。６の口径は13.8cm、器高は3.8cm、底径は7.5cmを測る。体部器厚は薄手で、器壁は緩やかな丸味を持って立ち上がる。胎土は淡肌色を呈し、微砂を含み、粉質である。７は小皿で口径は復元で7.7cm、器高1.5cm、底径5.5cmを測る。器壁中位に屈曲が認められる。

図９－８・９は石製品である。８の用途は不明だが、完形であれば球体を呈す。９は仕上げ砥である。図９－10・11は鉄製の釘である。

１面出土遺物（図10）

図10は１面出土遺物である。１～６は舶載品である。１・２は青磁の蓮弁文碗である。釉調は緑灰色を呈し、光沢・透明度共に劣る。特に２は気泡多く失透している。３は青磁の算木文の香炉である。釉調は青緑色を呈し、釉層厚く、大きめの気泡が目立つ。光沢は良い。素地は灰味白色で緻密である。４

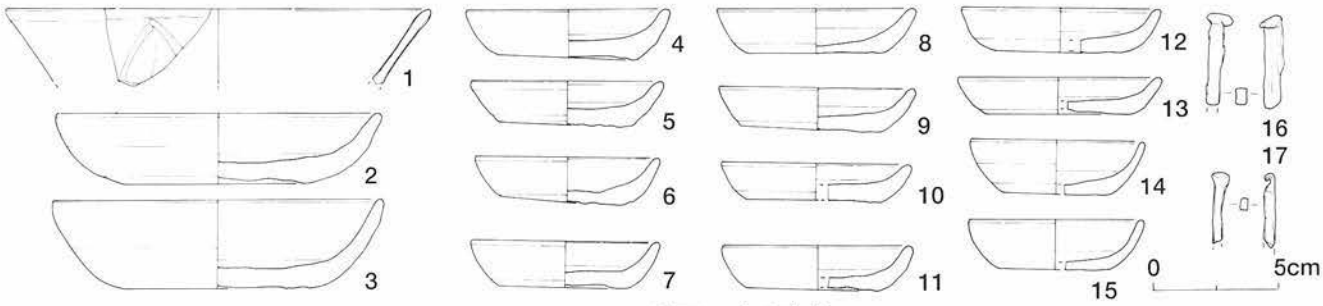


図８　かわらけ溜り１出土遺物

は青白磁の梅瓶の胴部片である。釉調は青白色を呈し、光沢はない。素地は灰味白色を呈し、黒色微細粒を含む。５は白磁の小壷の底部片である。釉調は白色を呈し、胴部には梅花文が施される。素地は白色で緻密である。４は三彩の破片である。花台等の透かし飾りの一部だが、その完形は小破片のため不詳である。釉は緑釉と褐釉が認められ、光沢に優れ、透明である。また、裏面には施釉されない。素地は乳白色で、緻密だが、微石粒が含まれる。

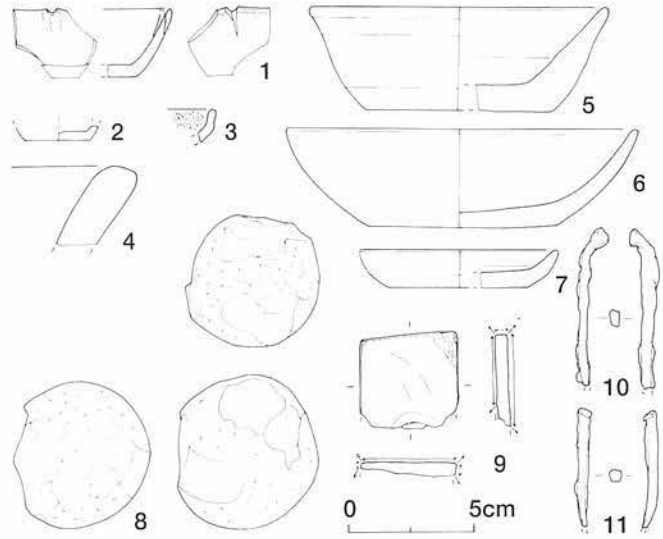


図９　表土層出土遺物

図10－７～９は瀬戸の製品である。７・８は折縁鉢の口縁部片である。灰釉が施され、８はごく薄く刷毛塗りされている。素地は乳白色で白色の微石粒を含む。９は仏華瓶の胴部である。胴部最大径は4.0cmを測る。灰釉が薄く施される。素地は灰白色で微石粒を含む。図10－10は美濃系の山茶碗である。底径は復元で4.0cmを測る。細身の逆三角形の貼り付け高台がつき、端部には籾殻痕が認められる。胎土は灰白色を呈し、硬質で緻密である。焼成はとても良い。内面には自然釉がかかる。

図10－11・12は山茶碗窯系こね鉢である。いずれも口唇部は肥厚し、11の口縁端には沈線が入る、胎土は概ね灰色を呈し、白石粒を含み粗い。

図10－13～19は常滑の製品である。13は壷の口縁部片である。口径は復元で11.5cmを測る。胎土は灰色を呈し、0.1cm大の白色石粒を多く含む。器表の釉は剥離している。14～16は甕である。15・16は口縁部片。15の口径は復元で21.2cmを測る。16は底部片である。転用してこね鉢として利用されているため、内面は若干磨滅している。いずれも胎土は灰色で石粒が多く含まれ、粗い。14の口縁部から外面にかけては緑灰色の自然釉が厚くかかる。17～19はこね鉢である。19の口径は復元で19.5cmを測る。18・19の胎土は橙色を呈し、0.1～0.5cm大の石粒を多く含み粗い。また、19の内側面は著しく磨滅している。

図10－20は魚住のこね鉢である。口縁部は角張り、かすかに内側に折れる。胎土は灰色を呈し、0.1cm大の砂粒を多く含み、砂質が強い。図10－21・22は火鉢である。土器質で砂粒を多く含み、粗い。

図10－23～43はかわらけである。23～30は大皿である。口径は11.8cm～12.8cmを測る。23～25は下方１／３位に、屈曲を持ち、立ち上がる。26～30は器壁がやや外向きに緩やかに立ち上がる。胎土は概ね肌色を呈し、粉質で、微砂を含む。焼成は良好。31～40は小皿である。口径は6.8cm～8.0cmを測る。31は器高が2.2cmを測り、深い。32～38は器高が1.6cm前後で浅く、器壁は外向きに立ち上がる。39は器壁中位に屈曲を持って立ち上がる。40は体部器厚が薄く、器壁はきれいな丸味を持つ。胎土は31～38は肌色～暗橙色を呈し、粉質で微砂を含む。37・38は微砂が多く、器表はざらつく。39・40は橙色を呈し、粉質で、微砂を含み、比較的滑らかである。41は極小のかわらけである。口径は復元で4.8cmを測り、胎土は橙色を呈す。42は内折れかわらけである。復元で口径は3.8cm、底径は2.6cm、器高は0.7cmを測る。43はとりべである。口縁端から内側前面に金属の溶融物が付着している。

図10－44・45は金属製品である。44は鉄製の釘。45は筒状の銅製品である。46～49は銭である。46～48は開元通寶である。49は至道元寶である。

図10－50は研磨痕のある常滑片である。

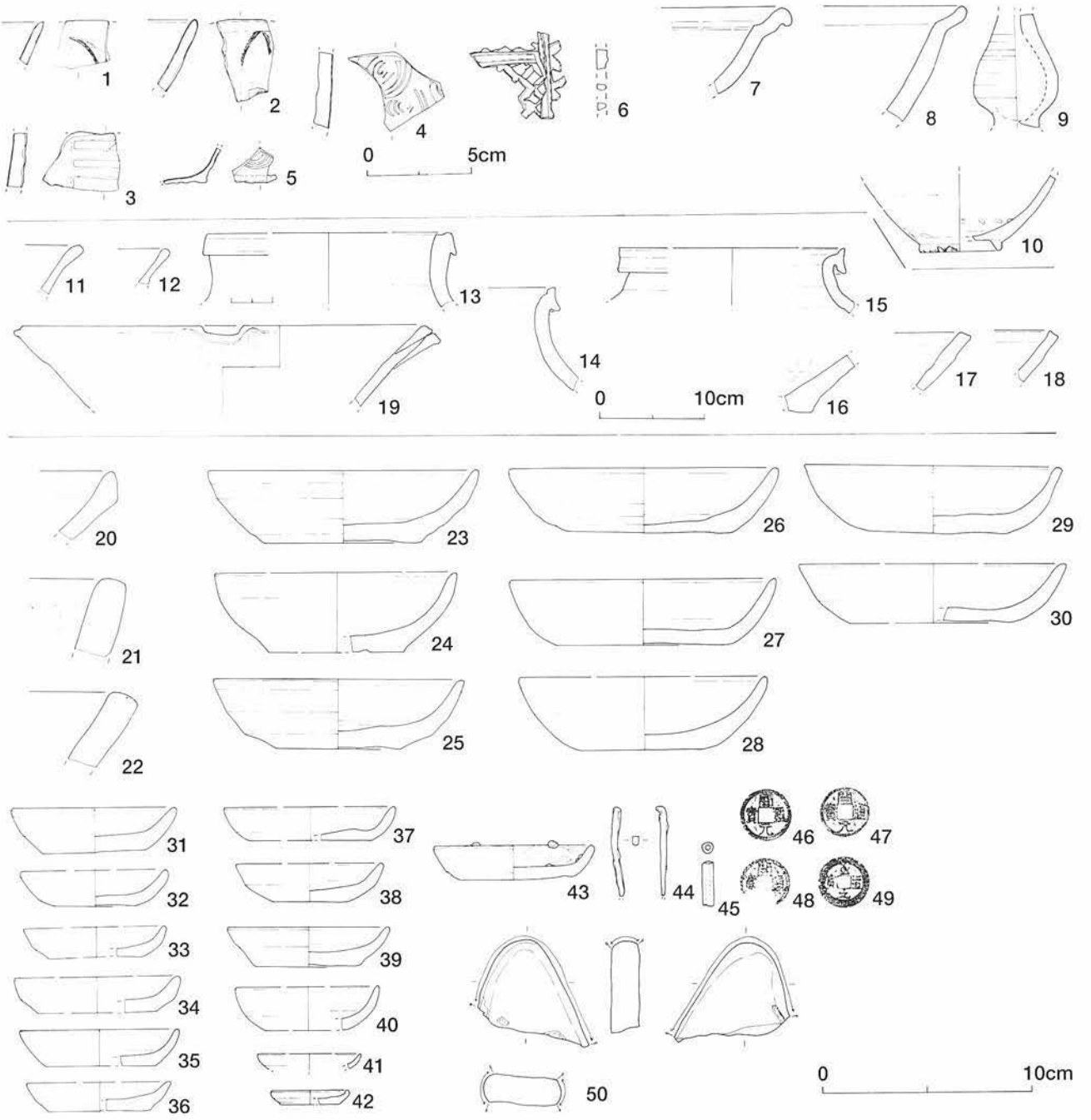

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
0
5cm
0
10cm
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
0
10cm

図10　1面出土遺物

2） 1 B面の遺構と遺物

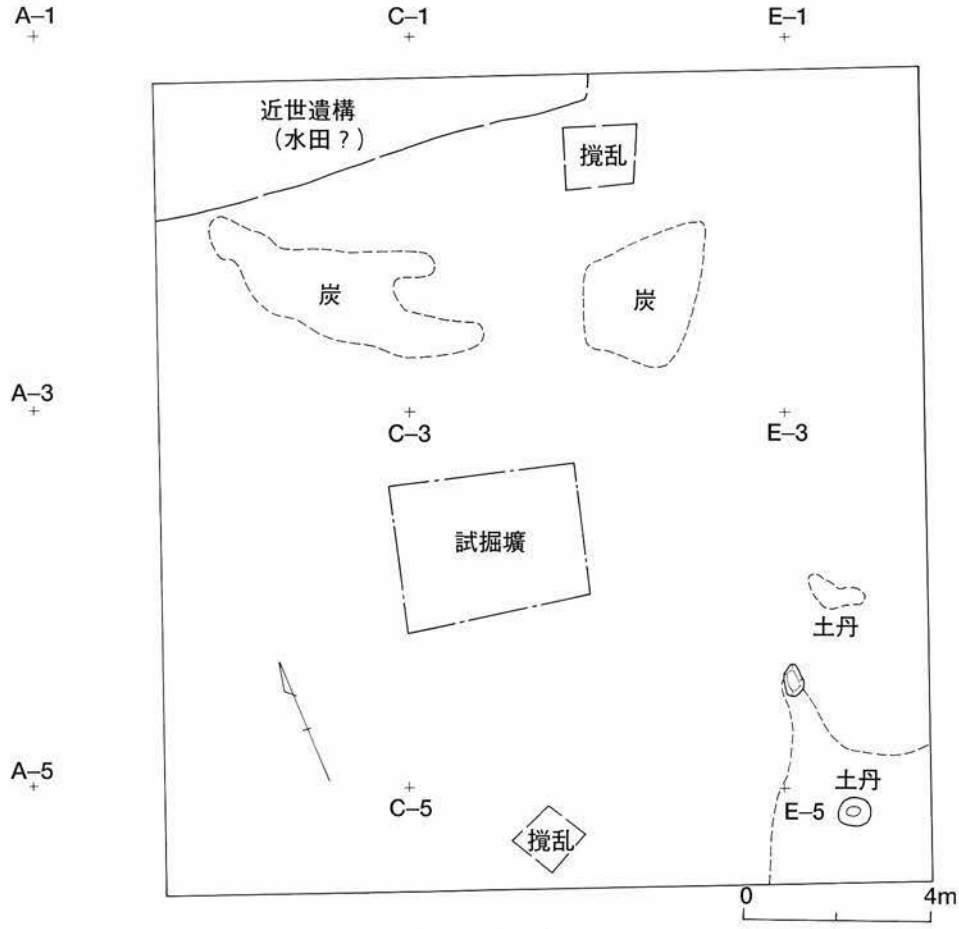


図11 1 B面全図

1 B面は1面の下約25cm前後に検出された炭化物の広がる面である。検出レベルは海抜≒9.65mである。炭化面は調査区北部を中心に広がりをみせ、木片の燃え差しも多数確認された。しかし、遺構はかわらけ溜り1址を確認したのみであった。

かわらけ溜り2（図12）

かわらけ溜り2はD－4グリッド付近、海抜約9.6mに検出された。かわらけは1.8m四方にまとまって検出された。かわらけの総点数は図示しえたもので59枚を数える。

かわらけ溜り2出土遺物（図13）

図13はかわらけ溜り2の出土遺物である。1～59はかわらけである。1～36は大皿である。1～14は口径が11.3cm～13.3cm、底径は6.0cm～7.5cm、器高は3.4cm前後を測る。器壁は若干の丸味を持って立ち上がる。胎土は1～5は淡橙色、6～14は肌色を呈し、共に、粉質で、微砂を含む。焼成は概ね良好である。15～33は口径が13.0cm～14.8cm、底径が7.0cm～8.5cm、器高が概ね3.7cmを測る。器壁は直線的に立ち上がる。体部器厚はやや薄い。胎土は赤味のある肌色～肌色を呈し、粉質で、微砂が混じる。焼成は良好である。37～59は小皿である。37～41は口径が7.5cm～8.0cm、底径が5.0cm前後、器高が2.0cm～2.4cmを測る。器形は底部を厚めに切り離し、器壁中位に屈曲が入る。胎土は肌色を呈し、粉質で、微砂を含む。焼成は良好である。42～48は口径が8.0cm前後、底径が5.3cm前後、器高が1.6cm前後を測る。器壁は緩やかな丸味を持って立ち上がる。胎土は肌色を呈し、粉質で、微砂を含む。45は橙色を呈し、やや粗い。49・50は口径が7.5cm前後、底径が5.7cm前後、器高が1.7cm前後を測る。器形は底径が広く、器壁はやや垂直気味に

立ち上がる。胎土は肌色を呈す。51～55は口径が7.5cm～8.0cm、底径が4.8cm～5.5cm、器高が1.4cm～1.6cmを測る。器形は浅く、器壁は外向きに立ち上がる。56～59は口径が6.8cm～7.7cm、底径が4.2～5.0cm、器高が1.8cm～2.3cmを測る。器形は深く、器壁下位で屈曲して立ち上がる。体部器厚は薄い。胎土は明肌色を呈し、粉質で、比較的細かい。焼成は良好である。また、38・51は口縁を中心に煤が付着し、灯明皿として使用されている。図13－60は瀬戸の入れ子である。復元で底径が4.0cmを測る。胎土は灰色を呈し、堅緻である。内底面に小量の自然釉がかかる。図13－61は鉄製の釘である。図13－62は天聖元寶である。

１Ｂ面出土遺物（図14～16）

図14－１～14は磁器である。１～８は青磁である。１～６は蓮弁文碗である。１の口径は復元で16.8cmを測る。釉調は黄褐色を呈し、光沢・透明度に優れ、細かく貫入が認められる。素地は乳灰白色を呈し、緻密である。２～６の釉調は灰味青緑色を呈し、光沢は良いが、気泡のため透明度は劣る。素地は灰白色を呈し、微細粒を含む。４・５は蓮弁の幅が細いタイプである。７は大皿の底部片である。魚文が貼りつけられている。釉調は青緑色を呈し、気泡のため不透明である。素地は灰白色で、黒色微細粒を多く含む。８は壷の底部である。灰味青色の釉がごく薄く施される。素地は灰色を呈し、堅緻である。９～11は白磁である。９は壷のおそらく把手。器表は再火のため肌荒れ著しい。10は口丸皿の底部片である。器表には煤が付着している。釉調は灰味白色で、細かく貫入が入る。素地は灰色を呈し、堅緻である。11は皿の口縁部片。釉調は灰味白色を呈し、大粒の気泡多く不透明である。12～14は青白磁である。12～14は小壷の蓋である。13は八角形を呈す。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度は良い。素地は灰味白色を呈し、微細粒を含む。

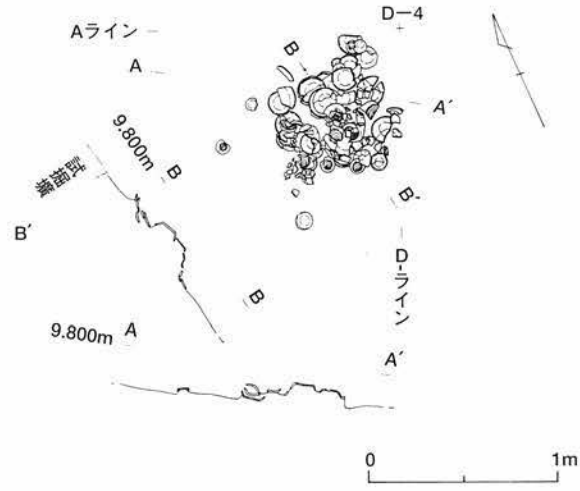


図12　かわらけ溜り２

図14－15～17は瀬戸の製品である。15は壷の頚部である。口径は復元で8.3cmを測る。灰味緑色の釉が施されているが、口縁端から外面にかけては剥離している。16はおろし皿である。17は入れ子の底部で、底径は3.5cmを測る。器表には自然釉がかかり、外面は黄褐色を呈す。いずれも素地は灰白色を呈し、石粒・微砂を含む。

図14－18～20は同一個体で黄釉の盤である。18には把手の一部が、20の断面は研磨の痕跡が認められる。外面中位まで灰黄褐色の釉が施される。釉層はごく薄く、細かく貫入が認められる。素地は灰色を呈し、白色石粒・微砂を多く含む。また、同一個体の破片が「佐助ヶ谷遺跡(佐助一丁目450番25地点)」の１面～２面に出土している。図14－21は褐釉の壷である。底径は復元で27.0cmを測る。釉調は茶褐色を呈し、光沢があり、不透明である。素地は焼きが甘く、重い。白色微粒・微砂を多く含む。

図14－22～44は常滑の製品である。22は壷の胴部である。胴部径は最大で25.0cmを測る。24～29は甕の口縁である。口径は復元で27が23.2cm、28が32.0cm、29が44.0cmを測る。いずれも胎土は灰色を呈し、0.1cm大の微石粒を多く含む。口縁の器形は縁帯が然程幅広にならない。また、29の断面は研磨され、すり減っている。30～44はこね鉢である。30は全体の約70%が遺存し、幅が広く、張り出しが弱い注ぎ口が３箇所につく。30～39の口縁の器形はいずれも端部が角形に仕上げられている。40～44は底部片である。いずれも内面は磨滅している。胎土は30・31・34・36～38・40・42・44が灰色を呈し、32・33・35・39・41・43は赤茶褐色を呈し、いずれも0.1cm～0.3cm大の石粒を多く含み、粗い。

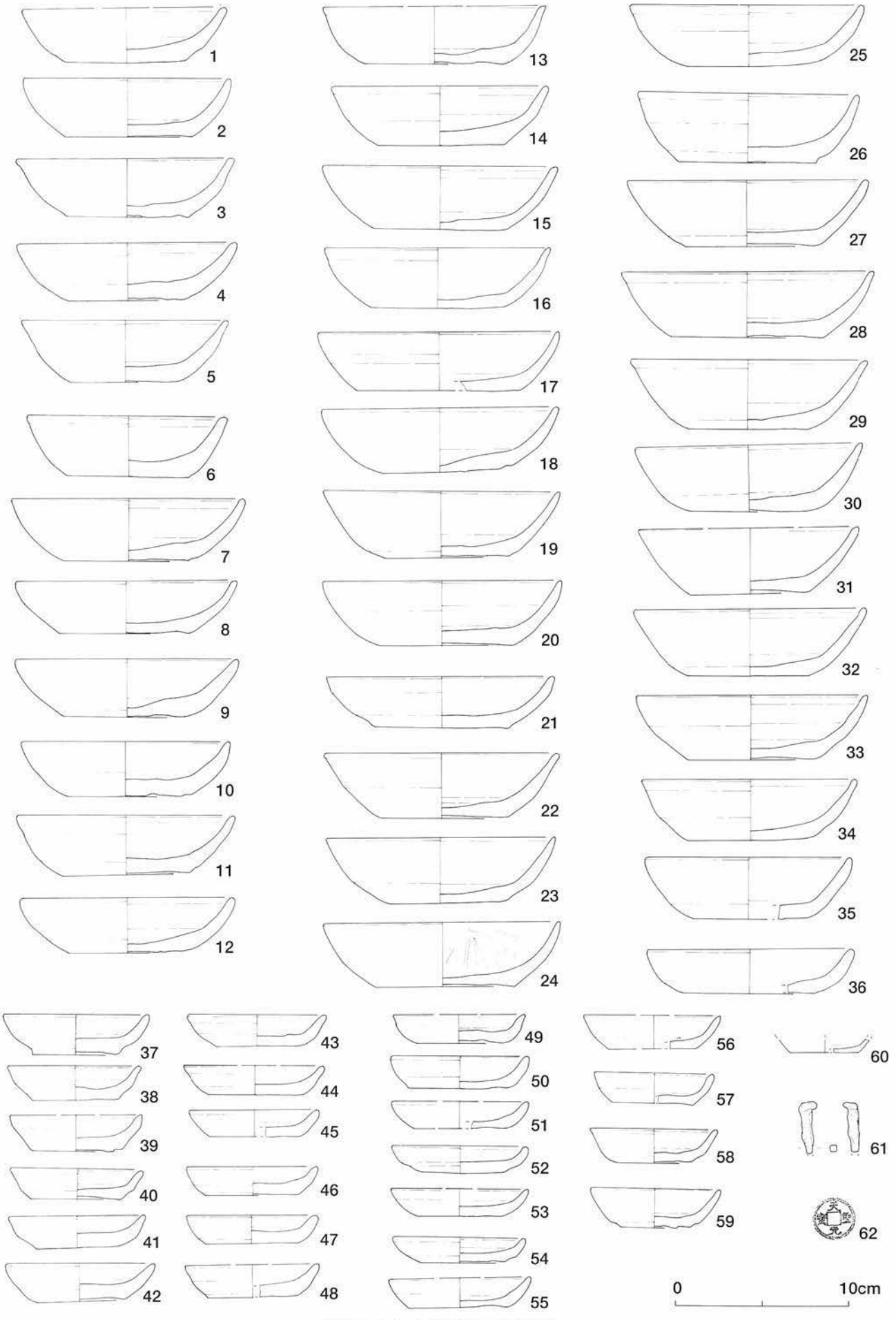


図13　かわらけ溜り２出土遺物

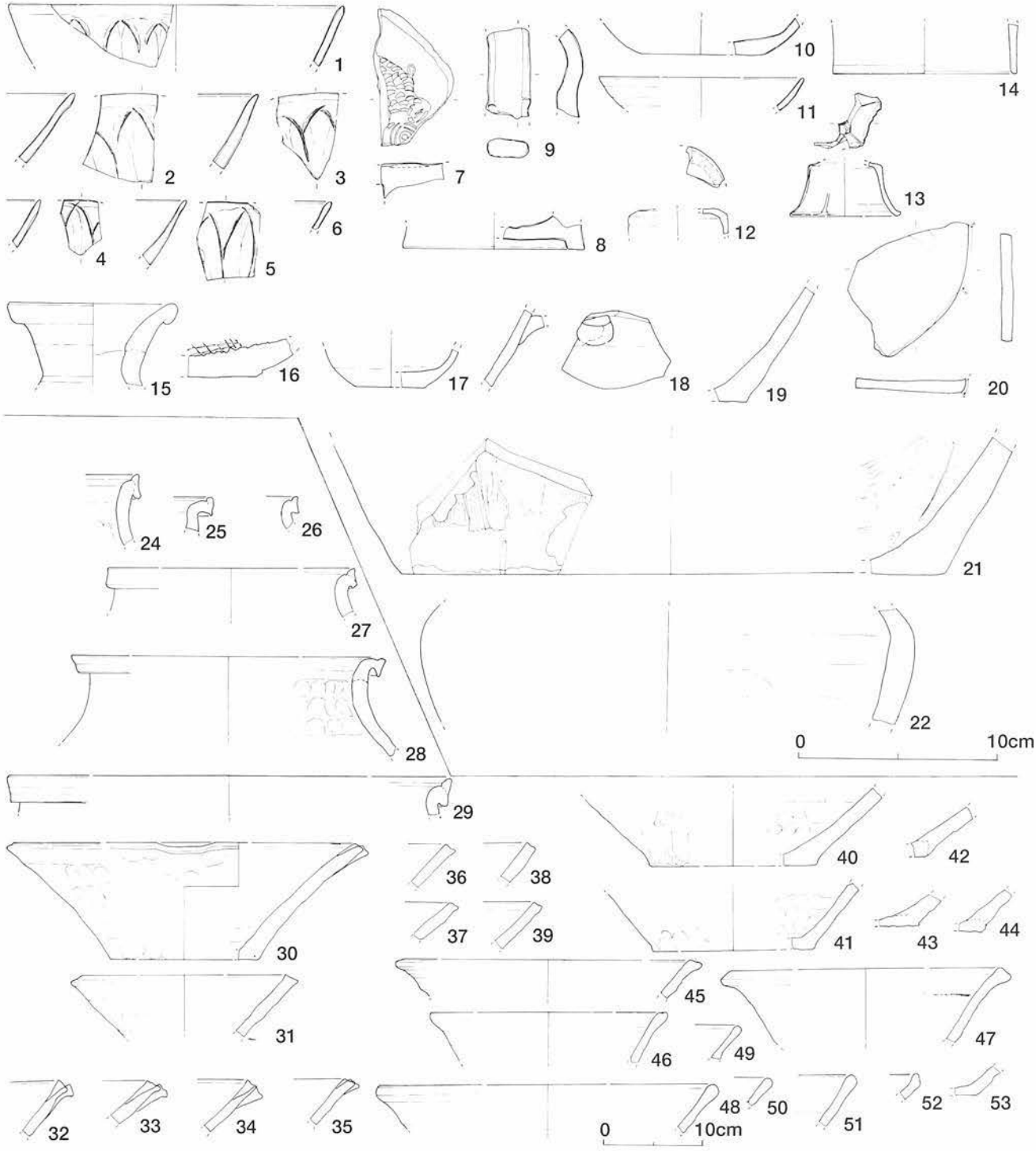


図14　１Ｂ面出土遺物（１）

図14－45～52は山茶碗窯系こね鉢である。45～51は口縁部で口径は復元で45が31.0cm、46が24.0cm、47が29.6cm、48が34.8cmを測る。45・47・51は口唇部が肥厚し、外反する。46は口縁端に１条の沈線が入る。48～50は口縁は丸味を持っておわる。胎土は概ね灰色を呈し、0.1～0.5cmの白色石粒を多く含む。

図15はかわらけである。１～24は大皿である。１～17は口径が12.0cm～12.8cm、底径が7.0cm～8.5cm、器高が3.5cmを測る。胎土は１～12が橙色～淡橙色を呈し、13～17は肌色～淡肌色を呈す。いずれも粉質が強く、微砂を含む。18～24は口径が13.0cm～14.0cm、底径が7.0cm～9.0cm、器高が概ね3.5cmを測る。器形は器壁が外に開き気味に立ち上がり、薄手である。胎土は肌色を呈し、粉質で微砂を含む。25は戦国かわらけである。復元で口径は13.5cm、底径は9.5cm、器高は4.0cmを測る。側面観は逆台形を呈する。口

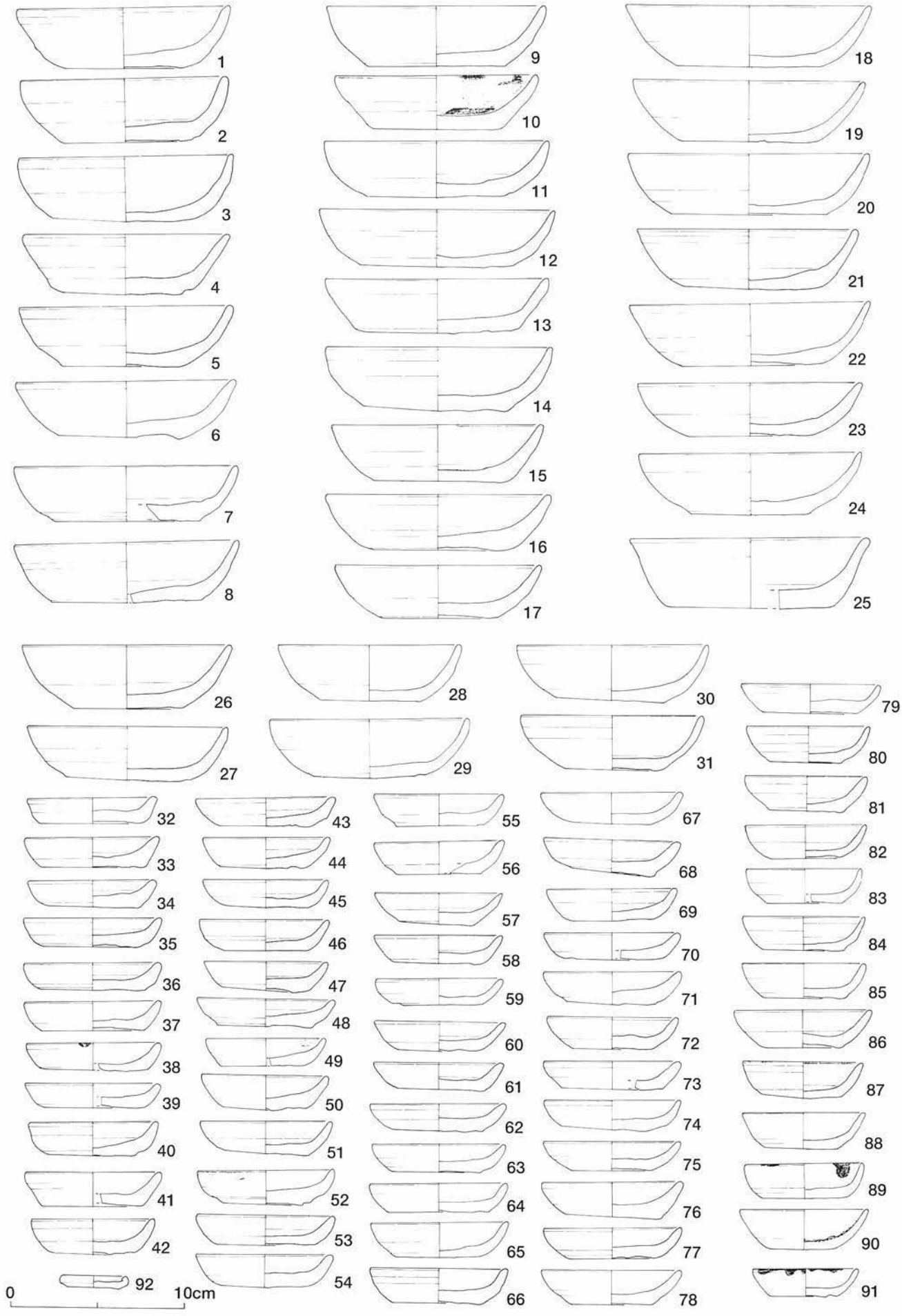


図15　１Ｂ面出土遺物（２）

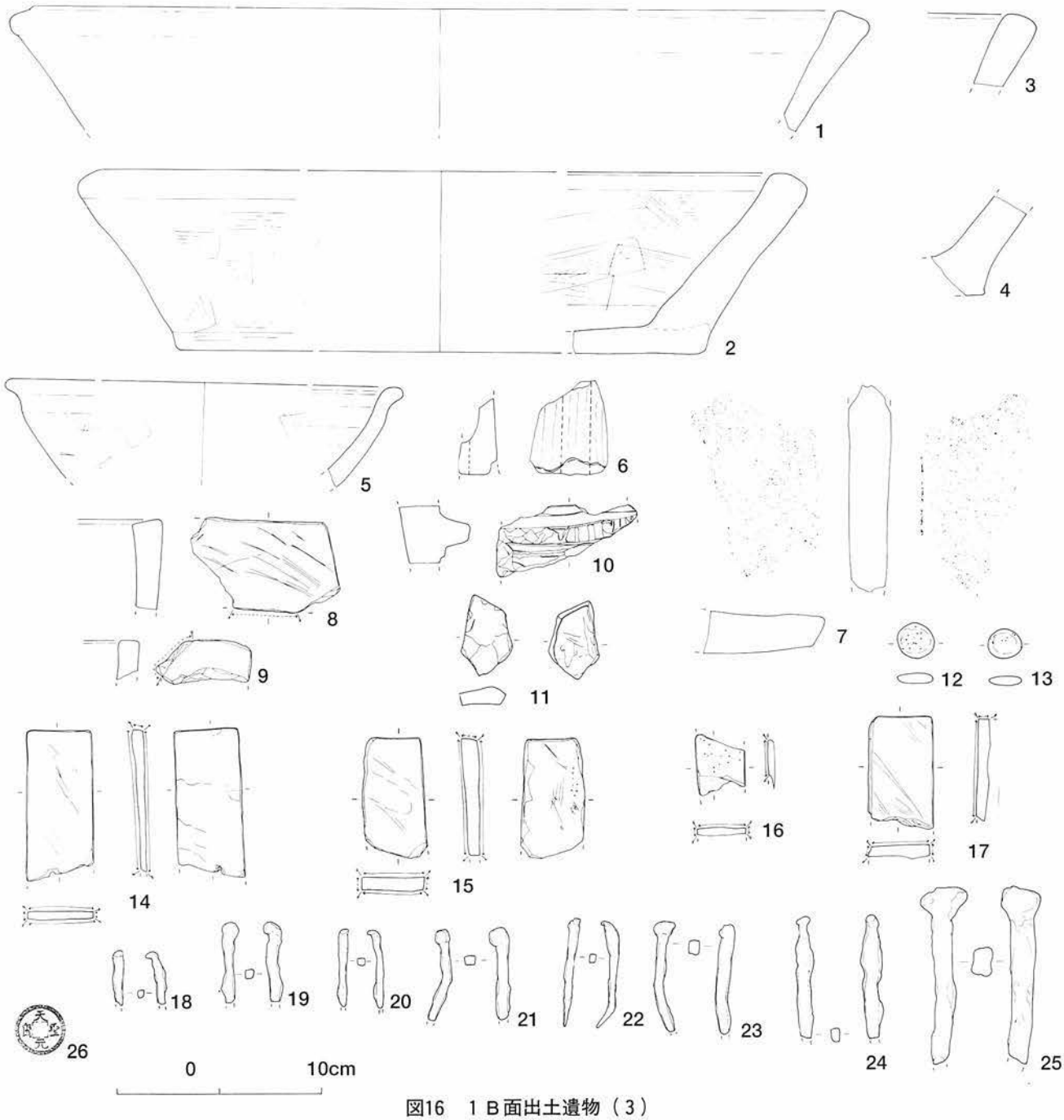


図16　１Ｂ面出土遺物（３）

縁端は外に屈曲する。胎土は肌色を呈し、粉質で、微砂・0.5cm程度の礫を含む。26～31は中皿である。口径が10.5cm～11.5cm、底径が5.8cm～7.0cm、器高が3.3cm前後を測る。胎土は26が橙色、27～31が肌色～明肌色を呈す。26は微砂が多く含まれ、砂質が強い。27～31は粉質である。32～91は小皿である。32～39は口径が7.0cm～7.8cm、底径が5.5cm～6.0cm、器高が1.5cm前後を測る。底径の広いタイプである。40～79は口径が7.0cm～8.0cm、底径が4.5cm～5.5cm、器高が1.6cm～2.0cmを測る。器壁は緩やかに立ち上がる。80～90は口径が概ね6.8cm、底径が4.0cm～4.5cm、器高が2.0cmを測る。91は口径が5.8cm、底径が4.0cm、器高が1.6cmを測る。器形は深く、薄手で、器壁は垂直気味に立ち上がる。胎土は橙色～明肌色を呈し、粉質で微砂を含む。92は内折れかわらけである。また、10・15・31・38・48・52・54・77・87・89・91の器表には煤が付着し、灯明皿として使用された痕跡が認められる。90は漆皿に使用している。

図16－１～４は火鉢である。いずれも土器質である。５は小型の火鉢。６はかわらけ質のおそらく燭台の一部。７は平瓦。８・９は滑石鍋の転用品で用途は不明。10は滑石鍋の鍔部片。11は火打ち石。12・13は碁石。14～17は砥石。18～25は鉄製の釘。26は天聖元寶である。

3） 2面の遺構と遺物

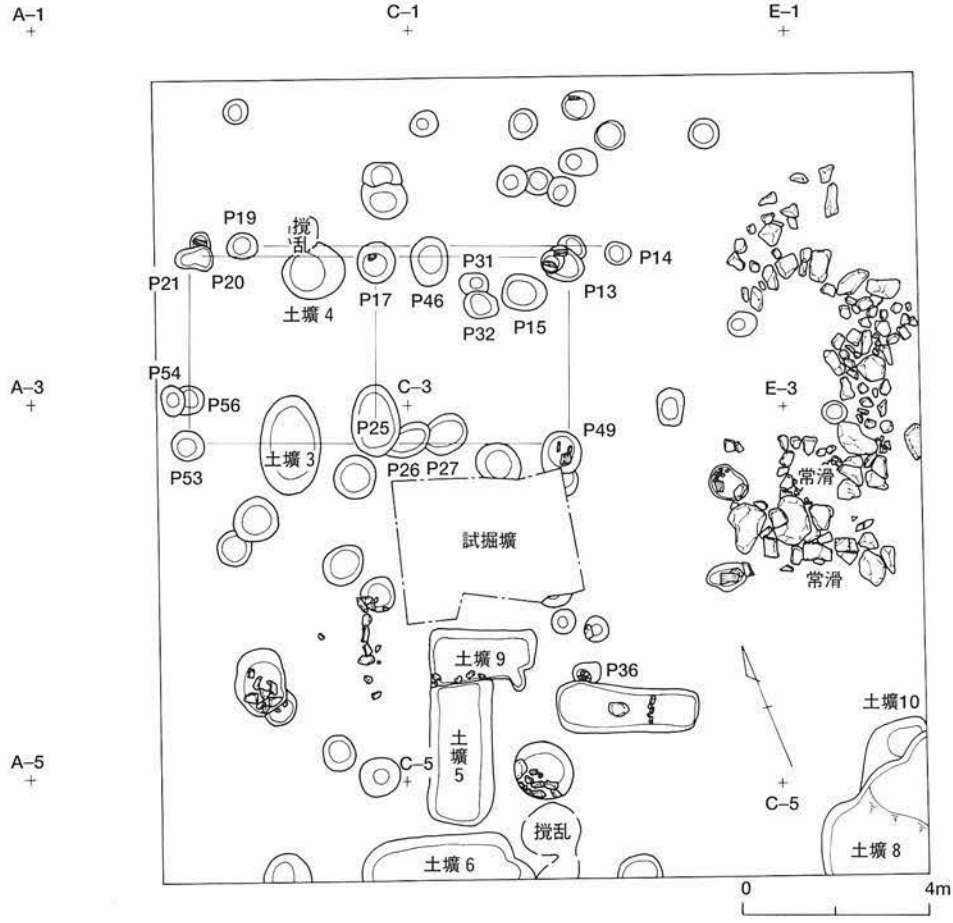


図17　2面全体図

2面は1B面下約20cm、海抜≒9.45m前後に検出し、ほぼ平坦である。調査区北部には柱穴群が広がり、南部には長円形の土壙群が展開される。また東部においては20～50cm程度の土丹群が検出された。北部の柱穴群のなかに、掘立柱建物と柱穴列が確認され、1面・1B面とは様相を異にして、遺構の分布度が密になり、人跡を感じさせ、生活跡が顕著になる。

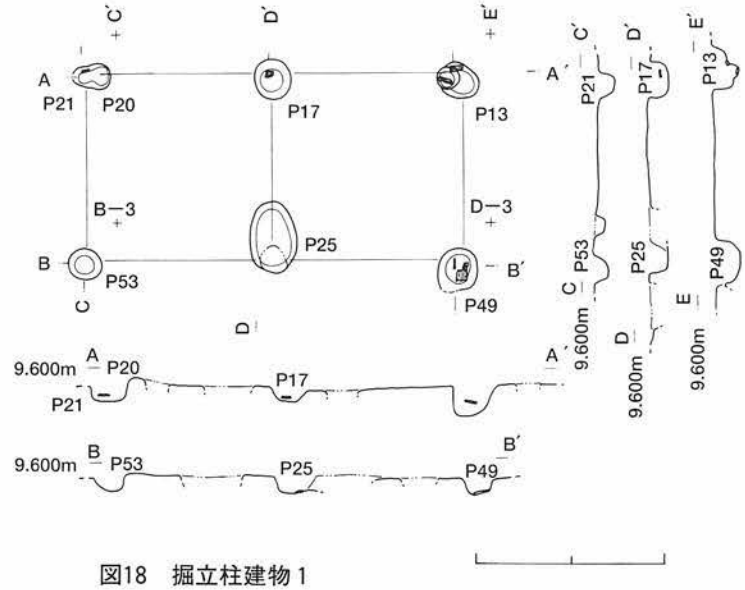


図18　掘立柱建物1

土丹群（図17・図59）

調査区東北部に約4.2m×2.0mに渡って検出された。20～50cm程の土丹塊が敷かれ、その隙間に常滑の甕の胴部片が検出された。また、この土丹群の東部は調査区外に広がり、隣接する「佐助ヶ谷遺跡（佐助一丁目450番24地点）」の2面・調査区西部に同様の様相を呈し、展開している。

掘立柱建物1（図18）

B～D－2～3グリッド付近に検出された。検出レベルは海抜9.48mを測る。柱間は1間×2間が検出されたが、北方および西方に広がる可能性が考え得る。柱穴はほぼ円形を呈し、その規模は直径が36～45cmで、深さは検出面から16～20cmを測る。また、6口の内、4口に礎板が検出した。柱穴間の距離は芯々で200cmを測る。南北軸線方位はN－24°－E

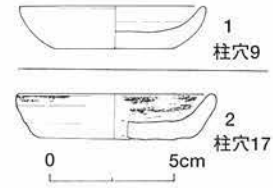


図19　掘立柱建物1出土遺物

掘立柱建物1出土遺物（図19）

1は柱穴9から出土した。かわらけの小皿である。口径が7.2cm、底径が4.8cm、器高が1.7cmを測る。胎土は肌色を呈し、粉質で微砂を含む。外底面は薄く焦げ跡が認められる。器壁はきれいなカーブを描いて立ち上がり、浅いタイプである。2は柱穴17から出土した。口径は復元で7.5cm、底径は6.0cm、器高は1.8cmを測る。胎土は肌色を呈し、微砂を含む。器表には煤が付着し、灯明皿として使用している。

柱列1（図20）

柱列1はB～D－2グリッド付近に検出された。検出レベルは海抜9.48mを測る。3口の柱穴からなり、柱穴間の距離は芯々で200cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、直径は30～40cmを測る。深さは検出面から、16～20cmである。また、柱穴列1は掘立柱建物1を形成する北側の柱穴の東隣にそれぞれ検出している。

柱列1出土遺物（図21）

図21は柱穴19から出土した。手づくねの白かわらけである。復元で口径は12.7cmを測る。胎土は褐味白色を呈し、0.1cm程度の白色石粒・黒色微細粒を含む。

土壙3～10（図22）

土壙3

土壙3はB－3グリッド付近に検出され、確認レベルは海抜9.5mを測る。平面形は楕円形を呈し、長軸は104cm、短軸は72cmを測る。深さは検出面から18cmを測り、浅い。覆土には10cm程の土丹を含む。

土壙4

土壙4はC－2グリッド付近に検出され、確認レベルは海抜9.5mである。平面形は円形を呈し、直径は68cmを測る。深さは検出面から32cmを測る。

土壙5

土壙5はC－5グリッド付近に検出され、確認レベルは海抜9.5mである。北部を土壙9と切り合う。平面形は隅丸の長方形を呈す。長軸は南北方向に遺存部で152cm、短軸は東西方向に72cmを測る。深さに検出面から32cmを測る。長軸の軸線方位はN－23°－Eである。

土壙6

土壙6はD－5グリッド付近に検出され、確認レベルは海抜9.5mである。南半は調査区外に広がる。平面形はおそらく隅丸の長方形を呈す。長軸は東西方向に180cm、短軸は南北方向に遺存部で48cmを測る。深さは検出面から32cmを測る。長軸の軸線方位はN－113°－Eである。

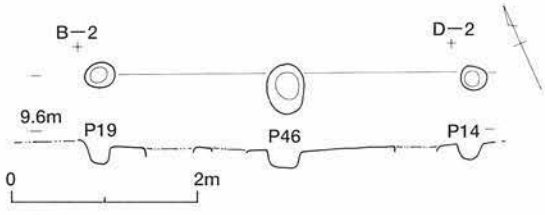


図20　柱列1

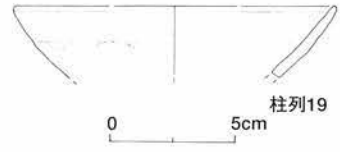


図21　柱列1出土遺物

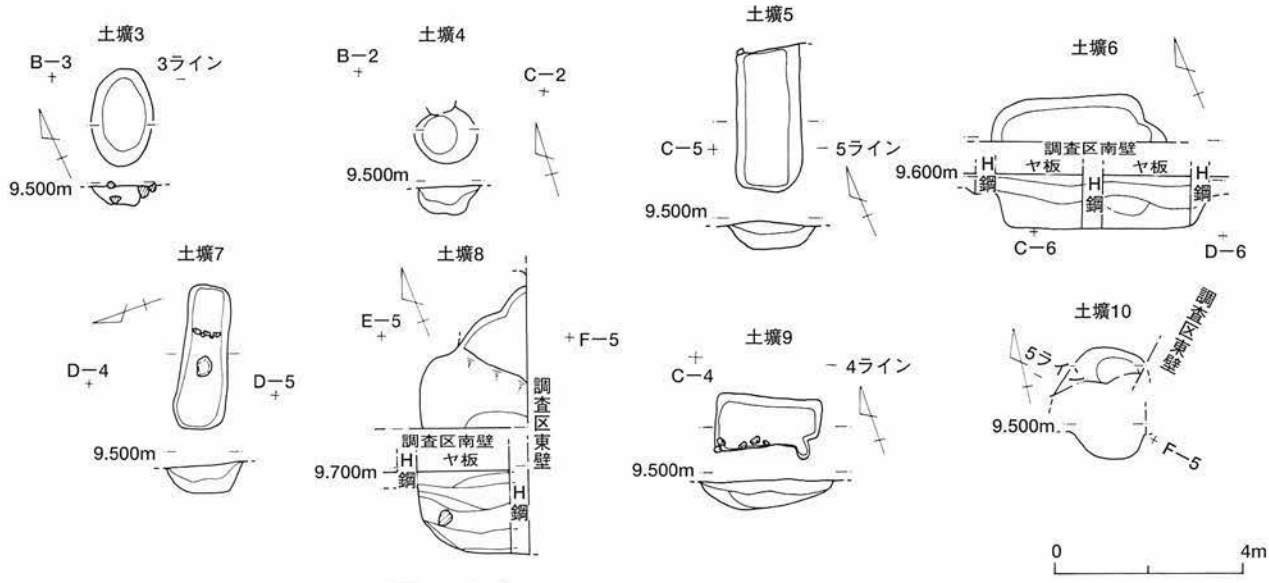


図22　土壙３・４・５・６・７・８・９・10

土壙７

土壙７はＤ－４グリッド付近に検出され、確認レベルは海抜9.35ｍである。平面形は隅丸の長方形を呈す。深さは検出面から32㎝を測る。底部には24㎝～12㎝大の土丹が数個検出した。長軸は東西方向に156㎝、短軸は南北方向に48㎝を測る。長軸の軸線方位はＮ－113°－Ｅである。

土壙８

土壙８はＥ－５グリッド付近で検出され、確認レベルは海抜9.5ｍである。東部と南部が調査区外のため平面形は不明である。深さは検出面から64㎝を測る。

土壙９

土壙９はＤ－４グリッド付近に検出され、確認レベルは海抜9.4ｍである。南壁は土壙５と接している。平面形は隅丸の長方形を呈す。長軸は東西方向に112㎝、短軸は南北方向に52㎝を測る。深さは検出面から32㎝を測る。長軸の軸線方位はＮ－112°－Ｅである。

土壙10

土壙10はＦ－５グリッド付近に検出され、確認レベルは海抜9.5ｍである。南部は土壙８に切られているため平面形は不明である。深さは検出面から32㎝を測る。

２面検出の土壙５・６・７・９は近似する形態を呈し、土壙６・７・９は長軸の軸線方向をほぼ同じくし、土壙５はそれらにほぼ直交している。他の土壙とは違った使用目的で作られたものであると考え得るが、その性格を位置付けるような遺物等の検出は今回なかった。

土壙３～10出土遺物（図23）

土壙３出土遺物（図23－１・２）

１は常滑のこね鉢である。口径は復元で27.0㎝を測る。口縁部は角張り、若干外に摘み出される。胎土は灰色を呈し、0.1～0.5㎝程度の石粒を多く含み粗い。２はかわらけである。復元で口径が7.8㎝、器高が1.6㎝、底径が5.3㎝を測る。胎土は肌色を呈し、微砂を含み、焼成は良好である。

土壙４出土遺物（図23－３）

３はかわらけである。口径が7.5㎝、底径が6.0㎝、器高が1.7㎝を測る。胎土は肌色を呈し、粉質で、微砂を含む。焼成は良好である。

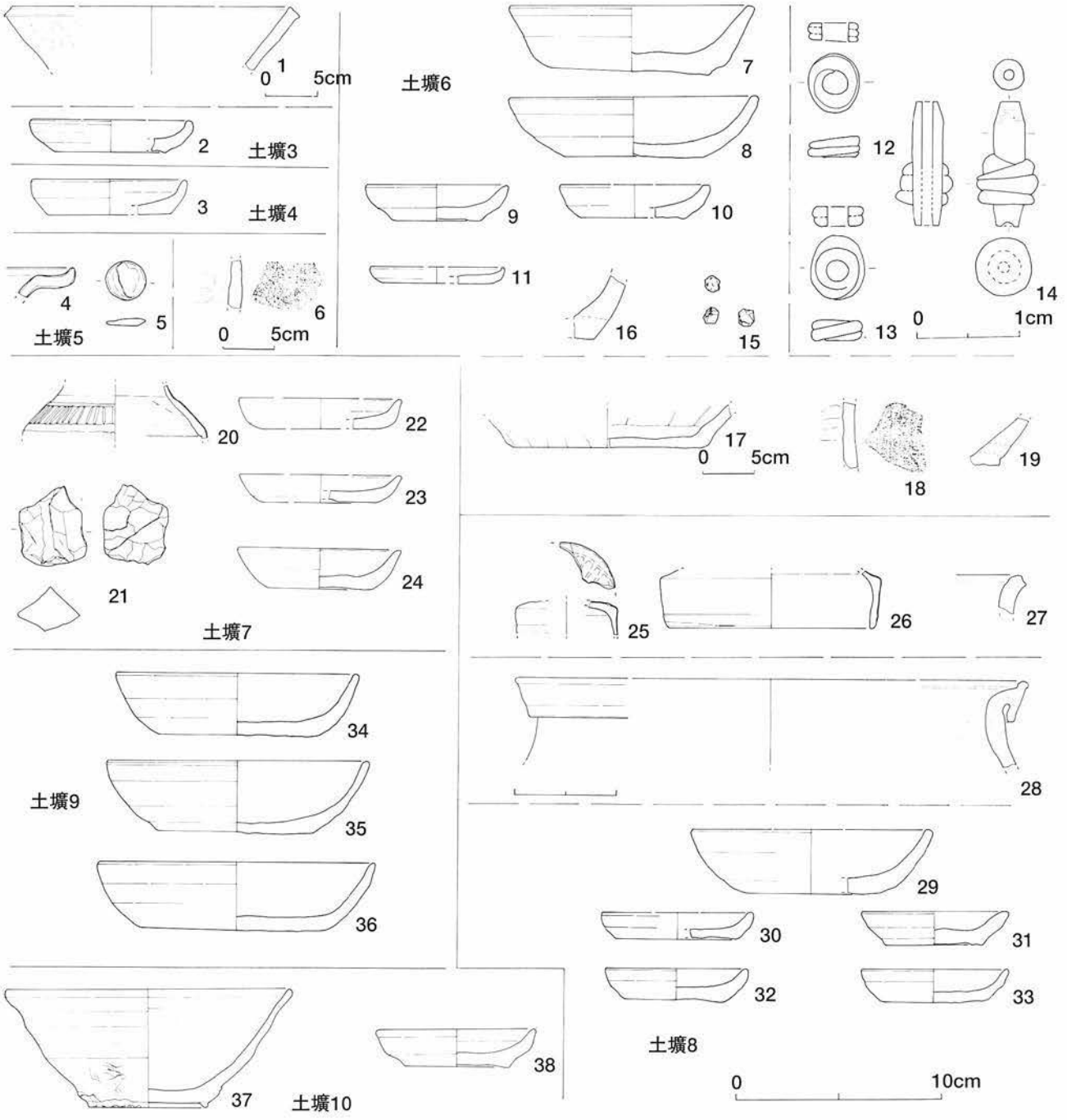


図23　土壙３・４・５・６・７・８・９・10出土遺物

土壙５出土遺物（図23－４～６）

４は青磁の折れ縁鉢である。釉調は灰味緑青色を呈し、釉層厚く、気泡多いため不透明である。光沢は良い。素地は灰白色で黒色の微細粒を含む。５は碁石である。６は滑石の甕の胴部片である。他にはかわらけ片が出土している。

土壙６出土遺物（図23－７～19）

７～11はかわらけである。７・８は大皿で口径が11.8cm、底径が7.8cm・6.8cm、器高が各々3.2cm・2.9cmを測る。７は底径が広く、雑な作りである。器壁は急な角度で立ち上がる。胎土は７が橙色、８が肌色を呈し、粉質で、微砂を含む。９・10は小皿である。各々、口径は6.8cm・7.0cm、底径は4.2cm・5.0cm、器高は1.7cmを測る。胎土は明肌色～肌色を呈し、粉質で、焼成は良好である。11は内折れか

わらけである。口縁部が磨耗している。復元で口径が6.3cm、底径が5.2cm、器高が0.8cmを測る。

12～14はガラス製のビーズである。12～14は同一個体のパーツである。長さ1.2cm・直径0.3cmの筒状製品に紐状のガラスが螺旋に巻き付く。不透明のトルコブルーを呈し、光沢に優れている。15は銅の小塊で、ビーズとともに出土した。

16～18は常滑の製品である。16は壷の底部。17～18は甕である。17の底径は復元で19.0cmを測る。19は山茶碗窯系こね鉢の底部片である。内面は磨滅している。

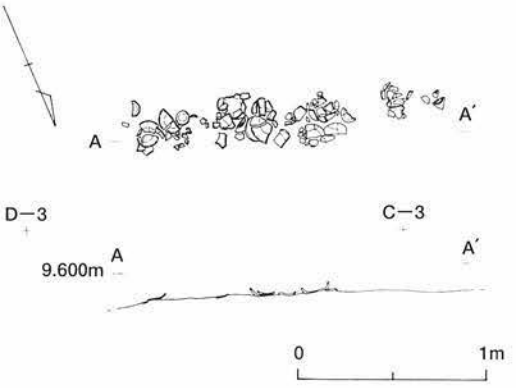


図24　かわらけ溜り3

土壙7出土遺物（図23－20～24）

20は青白磁の小壷の胴部片である。釉調は水青色を呈し、透明度は良い。起用は若干肌荒れしている。素地は灰味白色を呈し、緻密である。胴部最大径は復元で8.0cmを測る。21は火打ち石である。22～24はかわらけである。口径はいずれも7.8cm、底径は5.0cm・5.7cm・5.0cm、器高は1.5cm・1.4cm・2.0cmを測る。24は深いタイプである。胎土は概ね肌色を呈し、粉質である。

土壙8出土遺物（図23－25～33）

25は青白磁の梅瓶の蓋である。型押しで放射条線が施される。釉調は水青色で不透明である。素地は灰色を呈し、緻密である。26は白磁の壷類の蓋である。口径は復元で9.8cmを測る。釉調は緑灰色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は灰白色を呈し、やや粗い。27・28は常滑の製品である。27は壷の口縁部片である。28は甕である。口径は復元で49.2cmを測る。器壁に接するぐらいの幅広の縁帯がつく。胎土は灰色を呈し、器表は茶褐色を呈し、自然釉が厚くかかる。29～33はかわらけである。29は大皿で口径が11.5cm、底径が6.3cm、器高が3.1cmを測る。30～33は小皿で概ね口径は7.0cm前後、底径は5.0cm前後、器高は1.5cm前後を測る。胎土はいずれも淡橙色～橙色を呈し、粉質で焼成は良好である。

土壙9出土遺物（図23－34～36）

34～36はかわらけの大皿である。各々、口径は11.5cm・12.5cm・13.0cm、底径は7.8cm・7.8cm・9.0cm、器高は3.0cm前後を測る。胎土は淡橙色を呈し、微砂を含み、粉質である。焼成は良好である。

土壙10出土遺物（図23－37・38）

37は美濃系山茶碗である。復元で口径は14.0cm、底径は5.8cm、器高は5.8cmを測る。胎土は灰色を呈し、堅緻である。逆三角形の低い高台が付き、高台端部には籾殻痕が認められる。内底部に重ね焼きの痕がみられる。38はかわらけである。口径は7.4cm、底径は5.0cm、器高は1.8cmを測る。器壁中位に強い稜が入り、底部は厚めに切り離されている。胎土は肌色を呈し、粉質で焼成は良好である。

かわらけ溜り3（図24）

かわらけ溜り3はC～D－3グリッド付近、海抜約9.3mに検出された。南半は試掘壙によって切られ、その範囲は不明である。南北幅は340cmを測る。かわらけ12点から形成される。

かわらけ溜り3出土遺物（図25）

図25はかわらけ溜り3出土の図示し得たかわらけ12点である。1～9は大皿である。1・2の口径は11.5cm前後、底径が7.2cm・6.5cm、器高が各々3.0cm・4.0cmを測る。3～9の口径は12.0cm～14.0cm前後、底径は8.0cm～9.0cm前後、器高は3.5cm前後を測る。10～12は小皿である。口径は7.0cm～7.5cm、底径は5.0cm～5.5cm前後、器高は1.6cmを測る。概ね器壁は緩やかに外向きに立ち上がり、体部器厚は

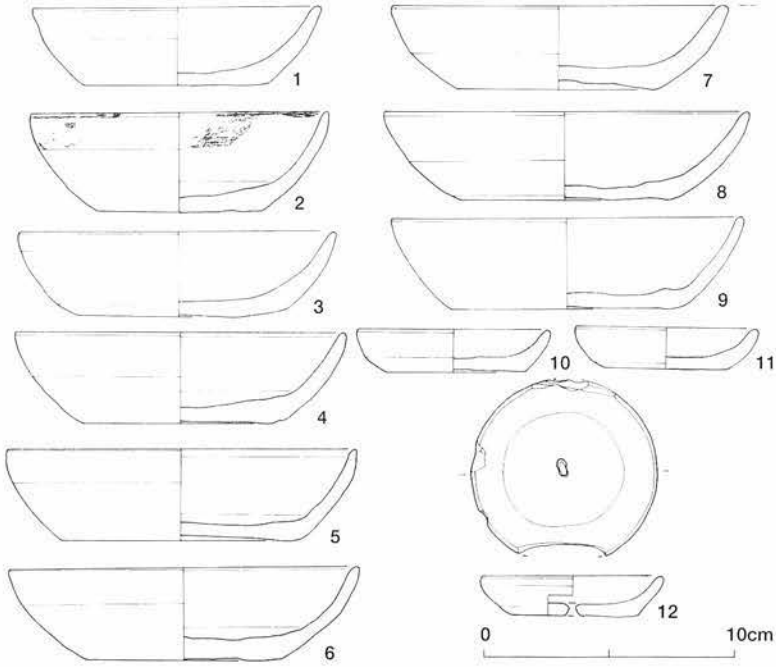


図25　かわらけ溜り３出土遺物

薄手である。また、２の器表には煤が付着し、灯明皿に使用している。12の底部中央には0.5cm程度の穴が穿たれている。胎土は２・３・10～12が肌色を呈し、１・４～９が橙色を呈す。いずれも微砂を含み、粉質である。

かわらけ溜り４（図26）

かわらけ溜り４はＥ－２グリッド・海抜約9.5m付近、調査区東部の土丹群周辺に小量のかわらけがまとまって検出された。

かわらけ溜り４出土遺物（図27）

かわらけ溜り４からは、図示し得たものでかわらけ６点・土製品１点で、この他、かわらけの小破片が出土した。１～６はかわらけである。１～３は大皿で口径は13.0cm前後、底径は7.5cm～8.0cm、器高は3.2cm～4.0cmを測る。体部器厚は0.4cm前後で薄く、器壁は緩やかに立ち上がる。４～６は小皿である。口径は7.8cm前後、底径は5.5～6.0cm、器高は1.8cm前後を測る。４・５は底径が広く、器壁はやや垂直気味に立ち上がる。６は器壁が外に開く。胎土は１～５が橙色を呈し、粉質で、微砂を含む。６は肌色を呈し、粉質で、微砂を多く含む。

７はかわらけ質の器の高台部片である直径は6.0cm前後、厚さは最大部で2.4cmを測る。中央部は円錐形に窪み、周縁は磨滅している。胎土はかわらけに似ており、明肌色を呈し、粉質だが、微砂を多く含み、表面はざらつく。

２面出土遺物（図28～31）

図28－１～30は磁器である。１～14は青磁である。１～７は蓮弁文碗である。１～３は口径が復元で各々、14.8cm・12.5cm・14.5cmを測る。１・４は蓮弁の幅が広いタイプで、２・３・５は幅の狭いタイプである。３の口縁端は外反する。釉調は、１・３・５は緑味灰色を呈し、光沢に優れ、１は透明度が良い。４は黄灰色を呈し、光沢・透明度に優れる。２・５は緑～青味水青色を呈す。微気泡多く不透明である。光沢は良い。３は濃緑灰色を呈し、微気泡多く不透

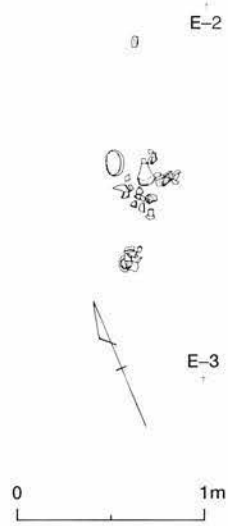


図26　かわらけ溜り４

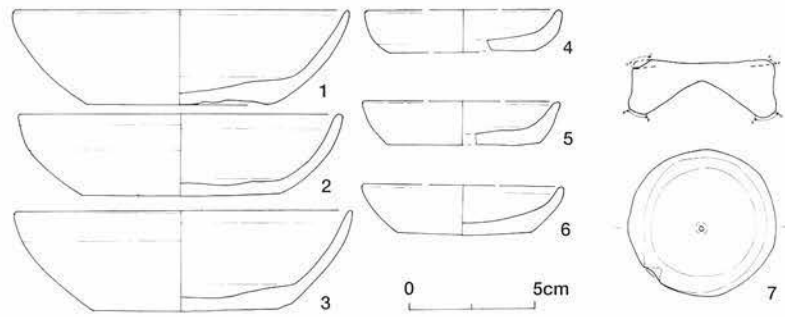


図27　かわらけ溜り４出土遺物

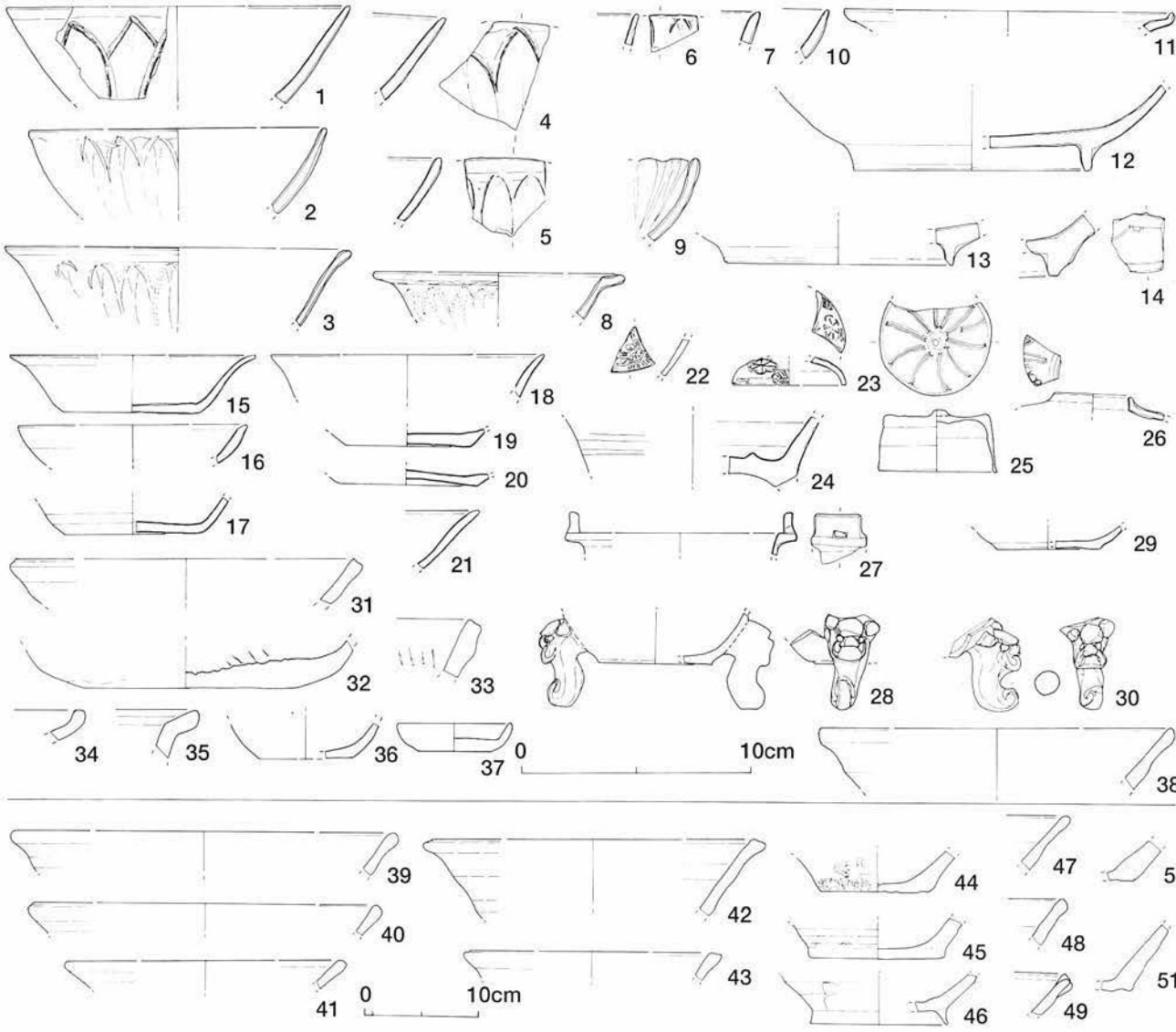


図28　2面出土遺物（1）

明である。素地は概ね、灰味白色を呈し、緻密である。4は灰色を呈す。8は蓮弁文の折れ縁鉢である。口径は復元で10.5cmを測る。釉調は淡水青色を呈し、微気泡多く、失透している。9は百合口の碗である。釉調は淡水青色を呈し、微気泡のため失透。口径は小破片のため不明である。10は無文の碗である。釉調は灰味青緑色を呈す。11は折れ縁鉢である。口径は復元で14.4cmを測る。釉調は黄灰色を呈し、光沢に優れ、微気泡多く、細かく貫入が入る。12･13は皿である。底径は12が10.0cm、13が復元で10.0cmを測る。釉調はいずれも青緑色を呈し、釉層厚く、微気泡多く失透している。素地は灰味白色を呈し、緻密で、黒色微細粒を含む。12の内面の器表には細かく擦痕が認められる。14は香炉類の底部片である。釉調は灰味緑色を呈し、釉層厚く、微気泡が多いため失透している。貼り付け文の一部が残る。15～23は白磁である。15～21は口兀である。15・18・21は口縁端が外反する。16は器高が2.0cm前後の浅い皿になる。釉調は概ね淡青味白色～白色～灰白色～灰色を呈し、釉層は薄く、光沢・透明度は良い。素地は白色で緻密である。22は型押しの皿である。牡丹文が施される。釉調は白色で、光沢・透明度に優れる。素地は白色で緻密である。傾きは小破片のため不明である。23は合子の蓋である。口径は復元で4.6cmを測る。型押しで草花文が施される。釉調は若干青味のある灰味白色を呈し、釉層薄く、光沢・透明度に優れる。素地は白色で緻密である。24～30は青白磁である。24は梅瓶の底部である。釉調は水青色を呈し、光沢は良い。微気泡のため若干失透気味である。外側底部付近に2条の沈線が入る。素地は白色で黒色微細粒がやや目立ち、

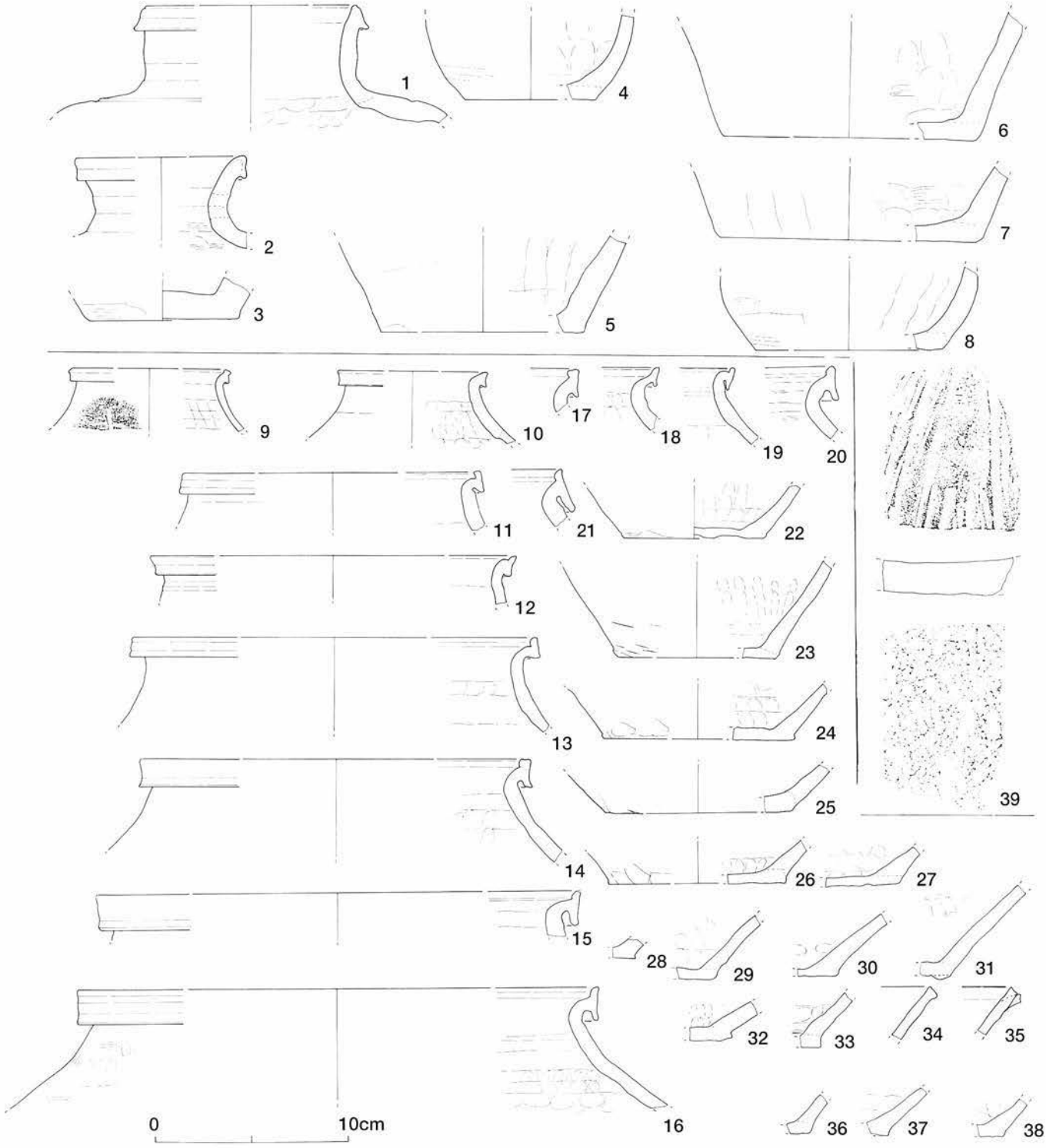


図29　2面出土遺物（2）

若干粗い。25は壷の蓋である。口径は5.0cm、器高は2.5cmを測る。型押しで放射線状の条線が施される。釉調は水青色を呈し、光沢は良い。透明度はやや劣る。素地は灰白色を呈し、黒色微細粒を含む。26は小壷である。口径は復元で3.0cmを測る。器表は再火のため釉が著しく溶融している。釉調は水青色を呈す。素地は白色で緻密である。27は香炉の把手部片である。口径は復元で8.5cmを測る。釉調は水青色を呈し、透明度は良い。28～30は獣面の三脚付き香炉である。同一個体である可能性がある。底径は復元で5.0cmを測る。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共にとても良い。素地は白色を呈し、若干粗い。獣面脚は指で形作られ、胴部下位に貼り付けられる。

図28－31～37は瀬戸の製品である。31～33はおろし皿である。34・35は折れ縁鉢である。復元で31の

口径は14.5cm、32の底径は10.0cmを測る。釉調はいずれも淡緑灰色を呈し、光沢が良い。胎土は灰白色を呈し、やや粉質で0.1cm以下の白色微石粒を含む。36・37は入れ子である。36は底部片で、復元で底径は4.0cmを測る。釉はかからず、胎土は乳白色を呈す。内底面には紅の痕が認められる。37は口径が5.0cm、底径が3.2cm、器高が1.2cmを測る。口縁端から内側面にかけて、自然釉が認められる。胎土は灰色を呈し、若干粗い。底部は回転糸切りである。

図28－38は山茶碗である。口径は復元で15.0cmを測る。口縁下で体部器厚が薄くなる。胎土は灰白色を呈し、0.1cm大の白色石粒を多く含み、粗い。

図28－39～51は山茶碗窯系こね鉢である。39～43は口径の復元できたもので、各々、33.4cm・29.6cm・24.0cm・28.0cm・21.6cmを測る。口縁の形は39～41・47・48は肥厚し、丸味をもっておわり、42は外反しておわり、43・49は口縁端に1条の沈線が入る。44～46・50・51は底部である。44・45・50・51は高台が剥がれている。42の外面には煤が付着している。46の内面には紅色顔料が残る。内側は底面を中心に、磨滅が著しい。49は口縁部を引き出して注ぎ口を作っている。胎土は39・40・44・43・47～50は青味灰色～灰色を、46は褐灰色を呈し、0.1cm以下の白色微石粒を多く含み、粗い。41・42・45・51は赤味灰白色～灰白色を呈し、0.5cm大の白色石粒を含み、粉性がある。

図29－1～38は常滑の製品である。1～8は壷類である。1・2は口縁部で口径は復元で各々10.7cm・8.5cmを測る。1・2共に縁帯が付く。3～8は底部である。3・5～7は直線的な胴部をもち、4・8は丸味を持って立ち上がる。9～33は甕である。9・10は小型で口径は復元で16.0cm前後を測る。また、縁帯の幅は狭い。11～16の口径は復元で各々、30.0cm・38.0cm・41.6cm・39.0cm・50.0cm・54.8cmを測る。口縁部はN字状の縁帯が付く。21は幅の広い縁帯が付く。22～33は甕の底部である。すべて、砂底で、内側にははっきりと指頭痕が残る。34～38はこね鉢である。34・35の口縁端は角張り、35は口縁部を引出して、注ぎ口を付けている。36～38は底部片で、内面は磨滅している。常滑製品の胎土は27が青味灰色を呈し、0.1cm以下の白色石粒が多く含まれる。11・12・16・30・38は橙褐色を呈し、1～10・13～15・17～26・28・29・31～37は灰色を呈し、1.0～0.1cm以下の白色石粒を多く含み、粗い。また、甕の底部の内面には自然釉が多くかかる。1の内面には煤が付着している。10と22は胴部片がないため確定はできないが胎土と器表の観察から、同一個体の可能性が高い。

図29－39は亀山の甕の胴部片である。胎土は明灰色を呈し、微石粒を含む。外面は格子文の叩き目が、内面は篦撫で調整痕が残る。

図30－1～6は火鉢である。口径は復元で1が36.0cm、2が35.2cmを測る。1・3・4は土器質の胎土で、2・5・6は瓦質の胎土である。6は菊花文のスタンプが施される。器表は黒色処理がなされている。1と2の胴部上位には穴が穿たれている。

図30－7はかわらけ質の土鍋の鍔部片である。胎土は肌色を呈し、粉質で微砂を含む。

図31はかわらけである。2面出土のかわらけは大小の2法量に大別され、大皿の口径は小振のものが目立つ。1～35は大皿である。1～29の口径は11.5cm～13.0cm、底径は7.0～8.0cm、器高は3.5cm前後を測る。30～35の口径は10.0cm～11.0cm前後、底径は6.0cm～7.5cm前後、器高は3.0cm～4.0cmを測る。概ね、器形はやや浅く、器壁は直線的に開く。胎土は暗橙色～橙色～明肌色～肌色を呈す。粉質がつよく、微砂を含む。1～4・19等は雑な作りで、24・25～29は丁寧に調整がなされている。

36～101は小皿である。36～99は口径は7.5～8.0cm、器高は1.5～1.8cm、底径は5.0cm前後を測る。100・101は口径が6.0cm、器高が1.8cm、底径が4.0cmを測る。器形は36～97は浅く、体部器厚は0.6cm前後で厚い。98～101は器高が深く、底径が小さく、体部器厚は0.4cm前後で薄い。胎土は50～55が赤橙色で、

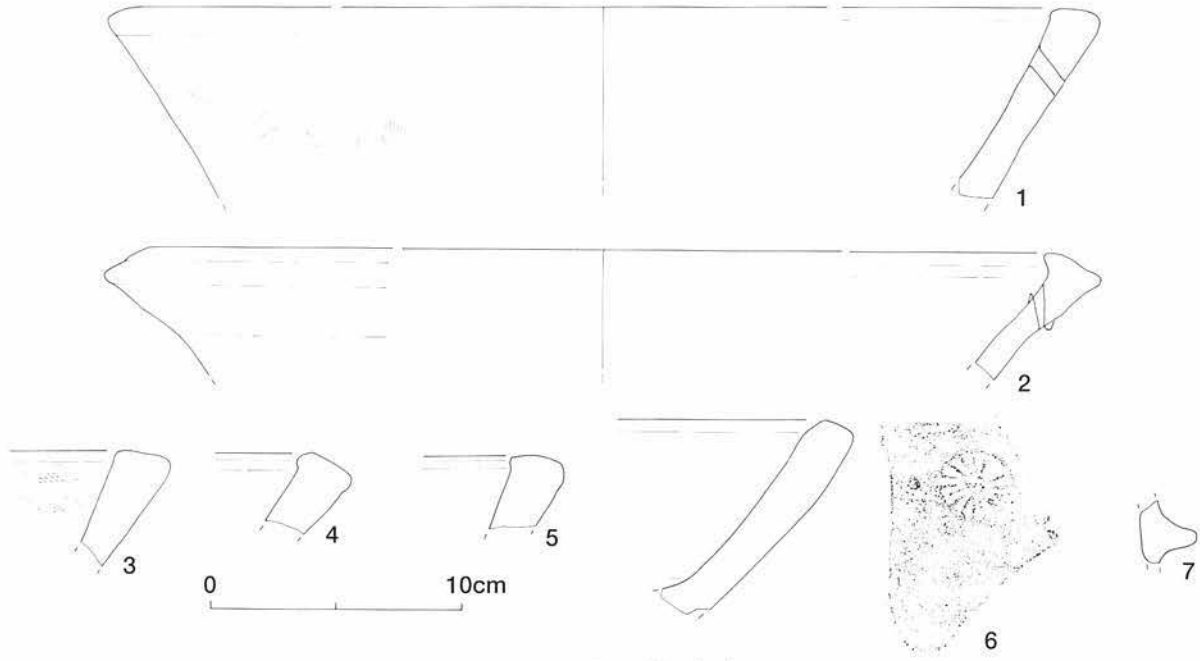


図30　2面出土遺物（3）

胎芯は黒色を呈す。68・91・96・97は橙色を呈し、粗い。その他は肌色を呈す。いずれも微砂を含み、粉質がつよい。また、4・5・8・13・26・30・39・42・61・83・90・92・101・102は器表に煤が付着しており、灯明皿として使用したであろう。

図32－1～3は研磨痕のある陶片で、1・2は常滑、3は須恵である。4～7は金属製品で4は銅製の鋲、5・6は鉄製の釘、7は鉄槌である。8～11は銭である。8・9は元豊通寶、10は元裕通寶、11は聖宋元寶である。12・13は硯である。12は淡茶褐色を呈し、両面に海と陸とが互い違いに作られている。13は黒灰色を呈す。14～24は砥石である。14～17は荒砥である。18～24は仕上げ砥である。25～27は滑石の鍋である。25は内側面に蛇の目に彫り込みがある。口径は復元で22.6cmを測る。28は軽石である。29は碁石である。30～33は火打ち石である。

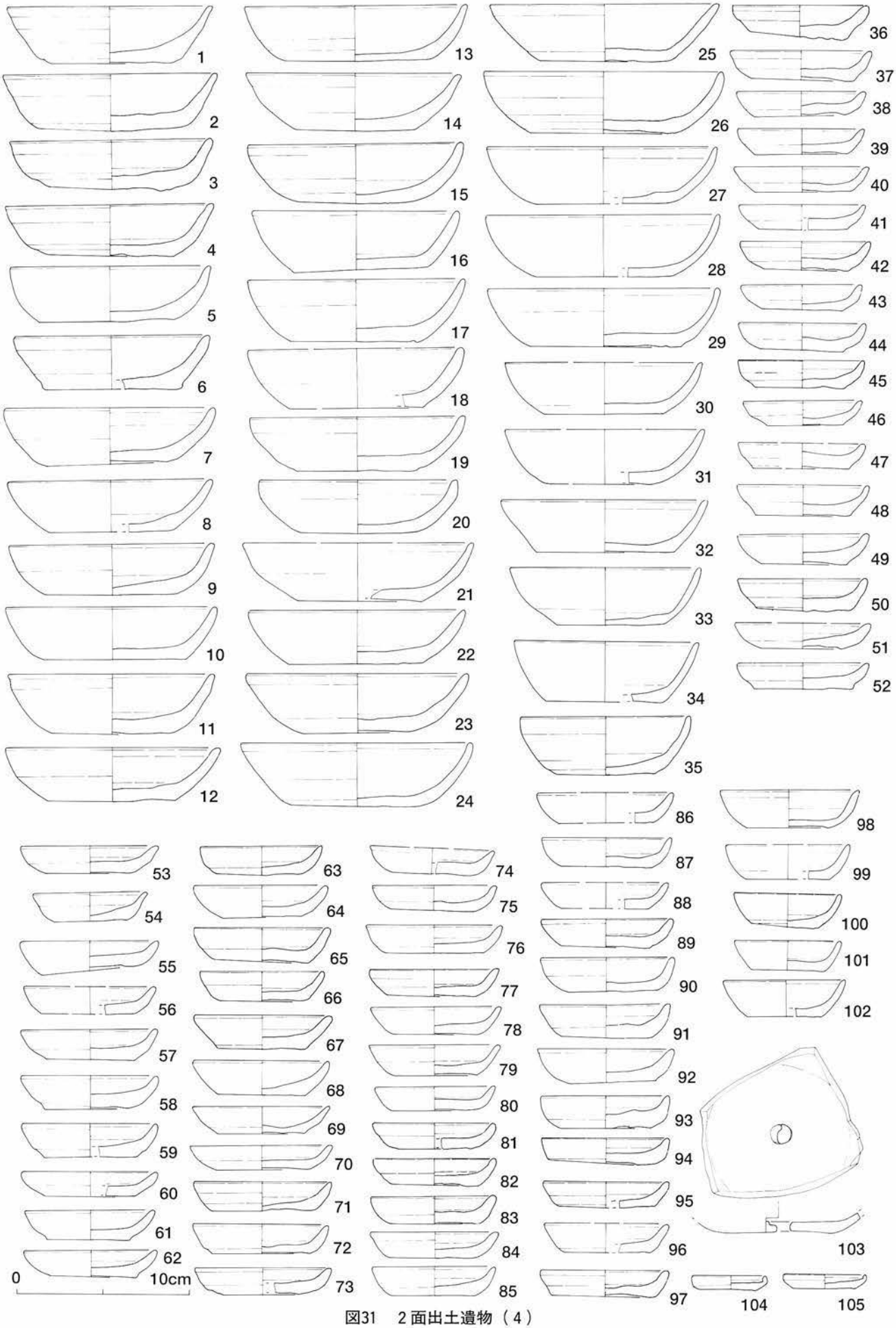

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
0
10cm

図31　2面出土遺物（4）

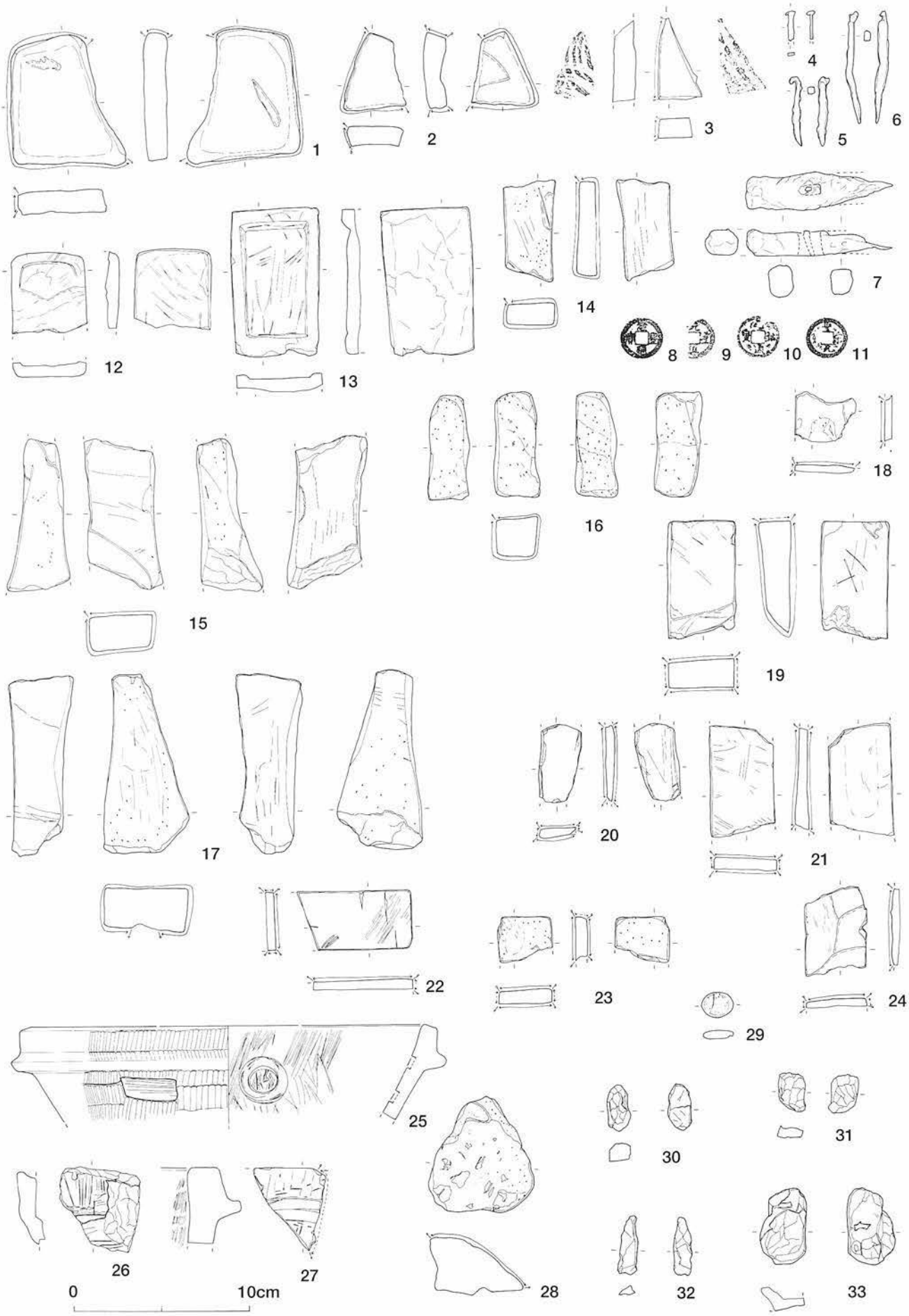

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
10cm

図32　2面出土遺物（5）

4） 3面の遺構と遺物

3面は2面下約45cm、海抜≒9.00m付近に検出され、ほぼ平坦である。3面からは調査区全域に拡がる掘立柱建物を検出した。3面に属する遺構は掘立柱建物1址・土壙2穴・かわらけ溜り1址である。また、調査区東部にはかわらけ片による地業面、南部には硬化面が確認された。面上からは下駄・曲物等が出土している。

かわらけ片地業面（図33・図59）

細かく砕いたかわらけ片を突き固めた地業面が調査区東部、海抜約9.0m付近に検出された。最大幅、東西460cm、南北840cmを測る。この地業面は掘立柱建物2の床下にまでおよび、さらに、東・南・北部

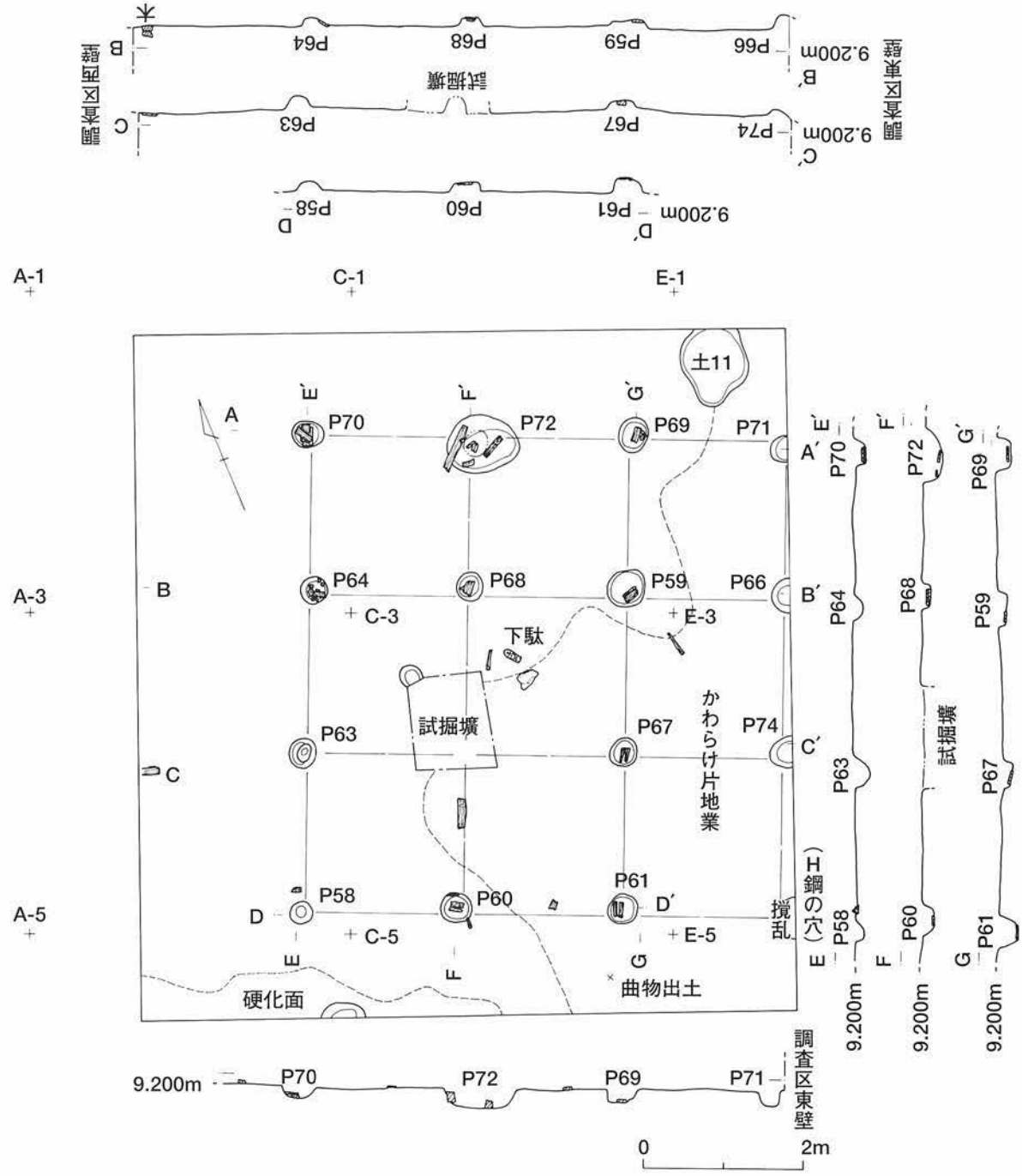


図33　3面全体図・掘立柱建物2

図34　掘立柱建物２出土遺物

は調査区外に広がり、隣接する「佐助ヶ谷遺跡・佐助一丁目450番24地点」の４面の西部に同レベルで検出されている。

掘立柱建物２（図33）

掘立柱建物２は調査区全域にわたって検出した。海抜は約9.04ｍである。計14口から成る。柱間は３間×３間で、さらに調査区外に広がる可能性がある。柱間は芯々で約200cmを測る。柱穴の規模は直径が32～44cm、深さが14～20cmを測る。平面形は円形を呈す。柱穴59～61・64・67～70・72の底部には厚さ3.0～4.0cmの礎板が残る。南北軸線方向はＮ－23°－Ｅである。また、隣接する「佐助ヶ谷遺跡・佐助一丁目450番24地点」の西部には軸線方向を同じくする柱穴３口が検出された。その距離は当址の東端から約264cmを測る。掘立柱建物に伴う塀等の構築物である可能性が考えられる。

掘立柱建物２出土遺物（図34）

それぞれの柱穴からかわらけが出土した。１は柱穴60から出土した。口径は復元で7.2cm、底径は5.0cm、器高は1.6cmを測る。２は柱穴63から出土した。口径は7.7cm、底径は5.4cm、器高は1.7cmを測る。３は柱穴66から出土した。口径は8.0cm、底径は5.7cm、器高は1.7cmを測る。胎土はいずれも肌色を呈し、粉質で、微砂を多く含む。

土壙11・12（図35）

土壙11はＥ－１グリッド付近、海抜約9.00ｍで検出した。直径は南北102cm、東西86cmを測り、不整円形を呈す。深さは検出面から８cmを測り、浅い。

土壙12はＢ－２グリッド付近、海抜9.00ｍで検出した。直径は南北88cm、東西66cmを測り、楕円形を呈す。深さは検出面から28cmを測る。

土壙11出土遺物（図36）

１・２はかわらけである。口径は7.5cm、器高は1.3cm・1.5cm、底径は5.8cmを測る。胎土は肌色を呈し、粉質で、微砂を含む。器壁は外に開いて立ち上がり、器形は浅い。

かわらけ溜り５（図37）

かわらけ溜り５はＣ～Ｄ－１～３グリッド付近にかわらけが図示し得たもので87点がまとまって検出された。検出レベルは海抜9.10ｍである。規模は南北が400cm、東西が260cmを測る。

かわらけ溜り５出土遺物（図38・39）

図38－１～３は青磁である。１・２は蓮弁文碗である。１の口径は復元で10.5cmを測る。釉調は青灰色を呈し、光沢はとても良い。気泡のため、失透し、白濁している。素地は灰色を呈し、緻密である。２の釉調は緑青色を呈し、素地は灰白色で緻密である。３は折れ縁鉢である。口径は復元で19.4cmを測る。釉調は青緑色を呈し、微気泡多く不透明である。素地は白色を呈し、緻密である。図38－５・６は山茶碗窯系こね鉢である。６の口径は復元で29.2cmを測る。いずれも口縁端に１条の沈線が入る。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含み粗い。図38－７は鉄製の釘。図38－８は天禧通

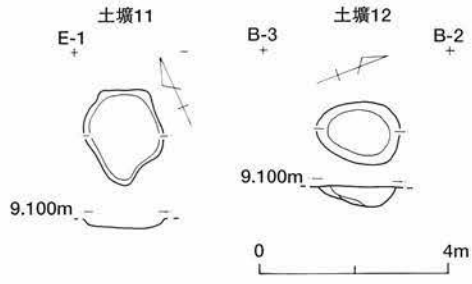


図35　土壙11・12

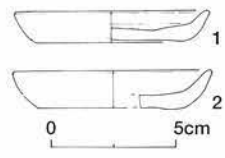


図36　土壙11出土遺物

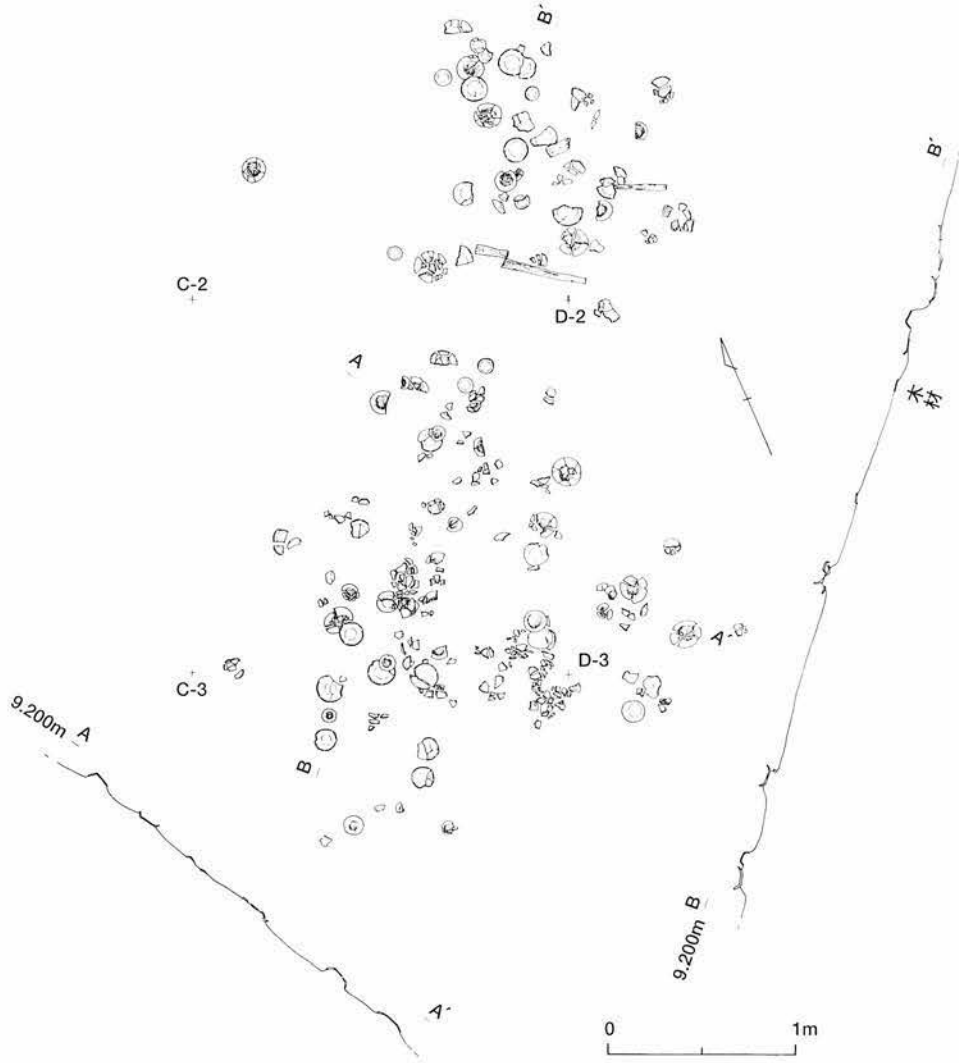


図37　かわらけ溜り5

寶。9は元豊通寶。

図39はかわらけである。1～50は大皿である。口径は11.0cm～12.5cm、底径は1～36が7.5cm～9.0cm、37・50が6.5cm～7.5cm器高は3.0cm～4.0cmを測る。1～36は底径が広く、口径との差が小さい。器壁は垂直気味に立ち上がる。体部器厚は1.0cm前後を測り、口縁端は細身になっておわる。胎土は赤味橙色・肌色を呈し、微砂を含み、粉質だが器表はざらつく。37～49は器壁が外に開き、胎土は粉質で微砂を含む。50は体部器厚が0.4cm前後を測り、薄い。胎土は明肌色を呈し、粉質で、微砂を含むが、精緻である。51・52は中皿である。復元で口径は10.3cm・10.6cm、底径は5.5cm・7.0cm、器高は3.5cmを測る。器形は底径が小さく、器高の深いタイプである。胎土は明肌色を呈し、粉質で微砂を含むが、精緻である。

図39－53～87は小皿である。53は手づくねかわらけである。口径は7.3cm、底径は6.3cm、器高は1.7cmを測る。底径は広く、平らで、浅いタイプである。胎土は肌色を呈し、粉質で微砂を含む。54～86は口径が8.0cm前後、底径が5.5cm前後、器高が1.5cm～2.0cmを測る。胎土は53～59が肌色、60～86は橙色を呈す。共に粉質で微砂を含み、60～86はやや粗い。器形は底径が広く、浅いタイプである。87は口径が7.5cm、底径が4.5cm、器高が2.2cmを測る。底径は小さめで、深手の皿である。器壁は緩やかなカーブを描いて立ち上がる。器壁は0.4cm前後と薄い。胎土は白色の強い肌色を呈し、微砂を含み、とくに黒色微細粒が目立つ。13・16・26・32・38・42・45・47・66・67・73・75・77・78・84・85は口縁部を中心に煤が付着し、灯明皿として使用している。

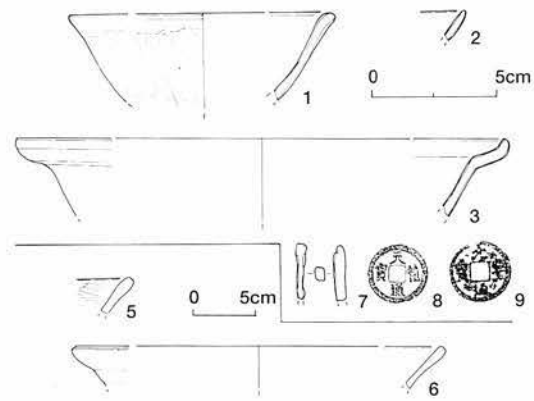


図38　かわらけ溜り5出土遺物（1）

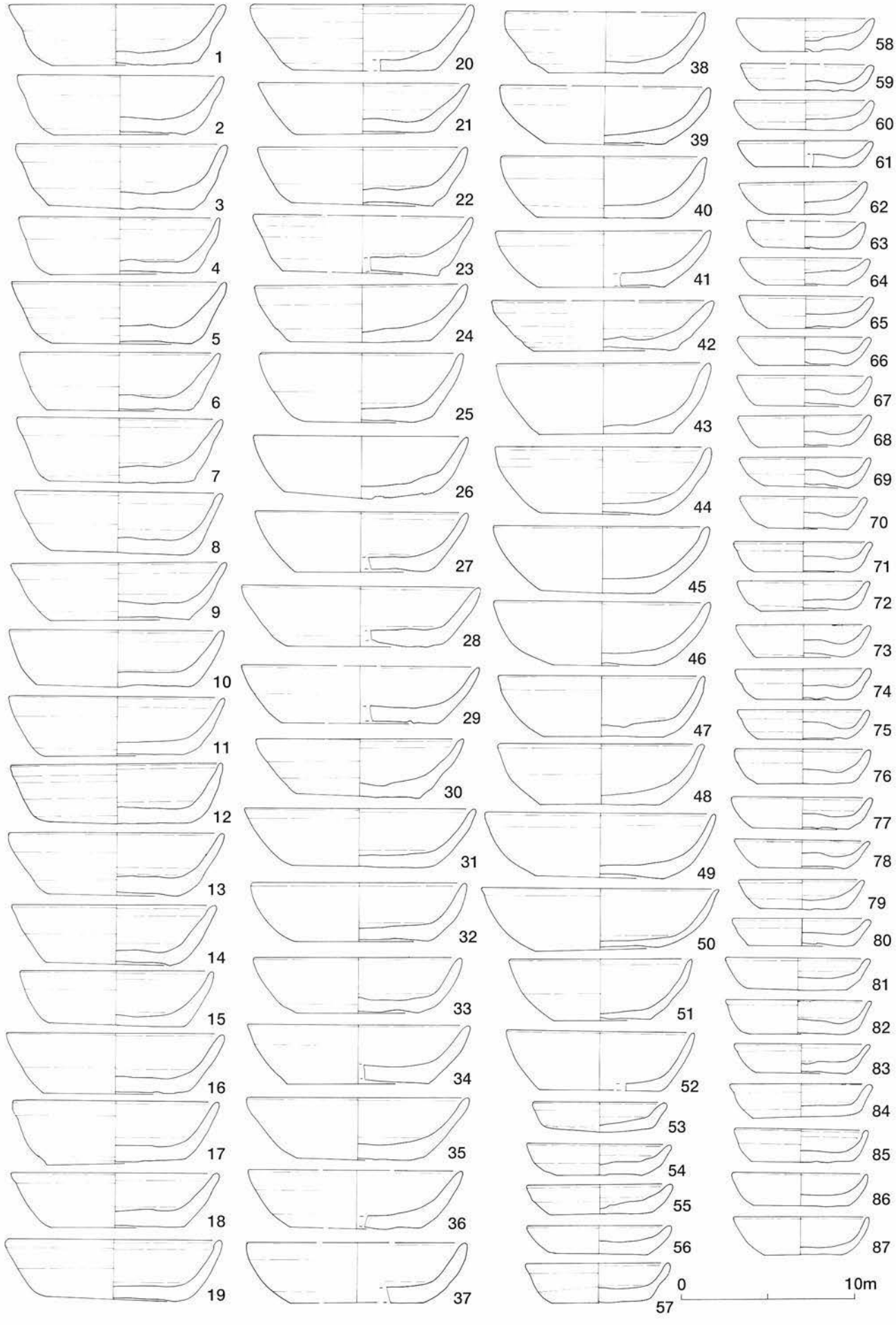


図39　かわらけ溜り５出土遺物（２）

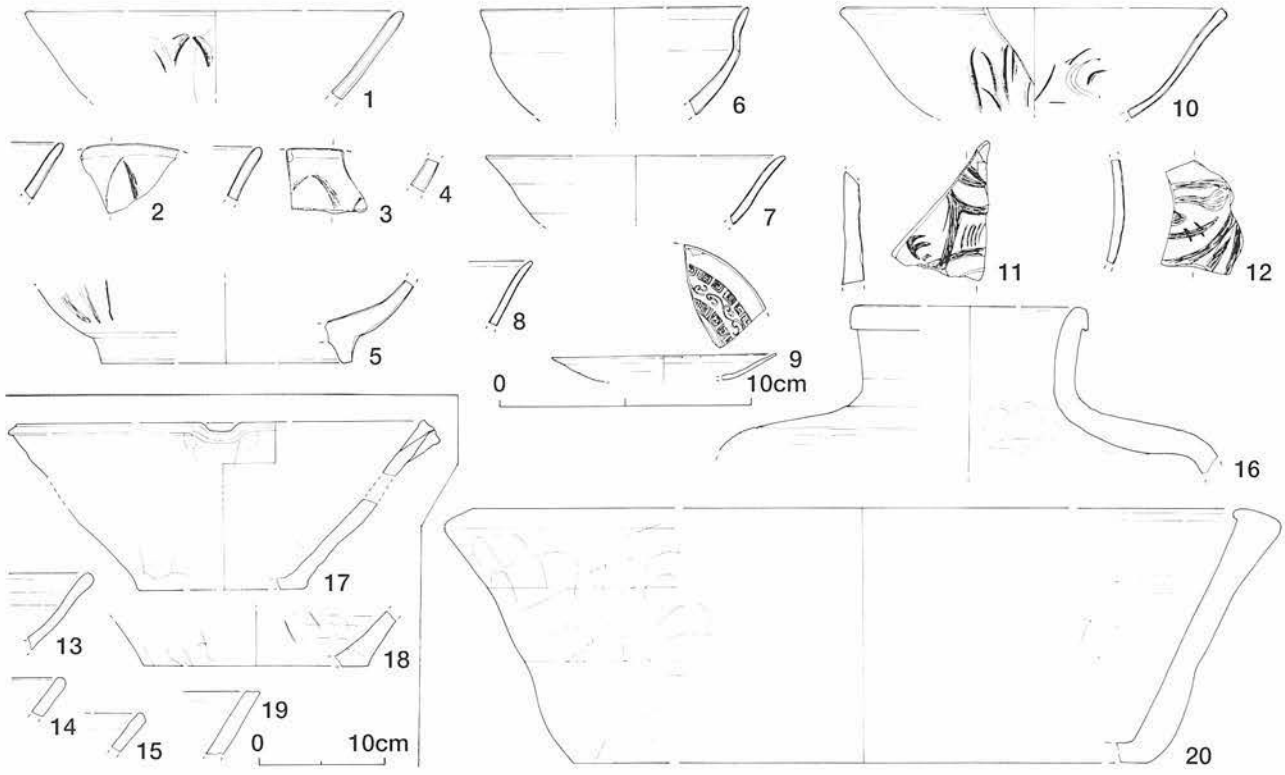


図40　3面出土遺物（1）

3面出土遺物（図40～43）

図40－1～12は磁器である。1～6は青磁。1～3は蓮弁文碗である。1の口径は復元で15.0cmを測る。釉調は1が黄灰色、2・3が青緑色を呈す。概ね光沢に優れ、1・3は透明度がよい。素地は灰白色を呈し、黒色微細粒を含み堅緻である。4は碗の胴部片で割れ口に接着用の漆が付着している。5は蓮弁文の鉢である。底径は復元で10.0cmを測る。釉調は濃い水青色を呈し、細かく貫入が入り、微気泡多く不透明である。光沢は優れる。6は天目型の碗である。口径は復元で10.5cmを測りる。器形は器壁上位でいったんくびれ、角度を変えて外向きに立ち上がる。釉調は青緑色を呈し、微気泡多く不透明である。器表は再火のためやや肌荒れする。素地は灰白色を呈し、堅緻である。7～9は白磁である。7・8は口兀皿である。7の口径は復元で11.8cmを測る。7・8共に釉調は灰白色を呈し、透明度・光沢共に優れる。素地は白色を呈し、堅緻である。9は印花文の皿である。周囲に雷文と唐草文、周縁には陰刻で輪花文が施される。口径は復元で8.8cmを測る。釉調は澄んだ白色で、光沢は優れる。素地は白色を呈し、緻密である。10～12は青白磁である。10は蓮弁文の碗である。外面には2段に蓮弁文が施される。内面には劃花文が施される。口径は復元で15.0cmを測る。釉調は澄んだ水青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。ごく薄く施釉され貫入が入る。素地は灰味白色を呈し、黒色微細粒を含む。中国・元の時代のもので、市内遺跡からの検出例は少ない。11・12は梅瓶の胴部片である。釉調は水青色を呈し、微気泡多くやや失透する。12は再火のため器表が肌荒れする。素地は概ね灰白色で黒色微細粒を含む。

図40－13～15は山茶碗窯系こね鉢である。13・14は口縁端部が丸味をもっておわり、15はやや角張る。概ね胎土は灰色を呈し、白・黒色石粒を多く含み、粗い。焼成は良好である。

図40－16～19は常滑である。16は壷である。口径は復元で8.8cmを測る。頚部付根から肩部にかけて2条の沈線が認められる。外面肩部は横位のへら削り、内面肩部はユビナデ調整が施される。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含む。17～19はこね鉢である。復元で17の口径は34.0cm、底径は13.6cm、器高は

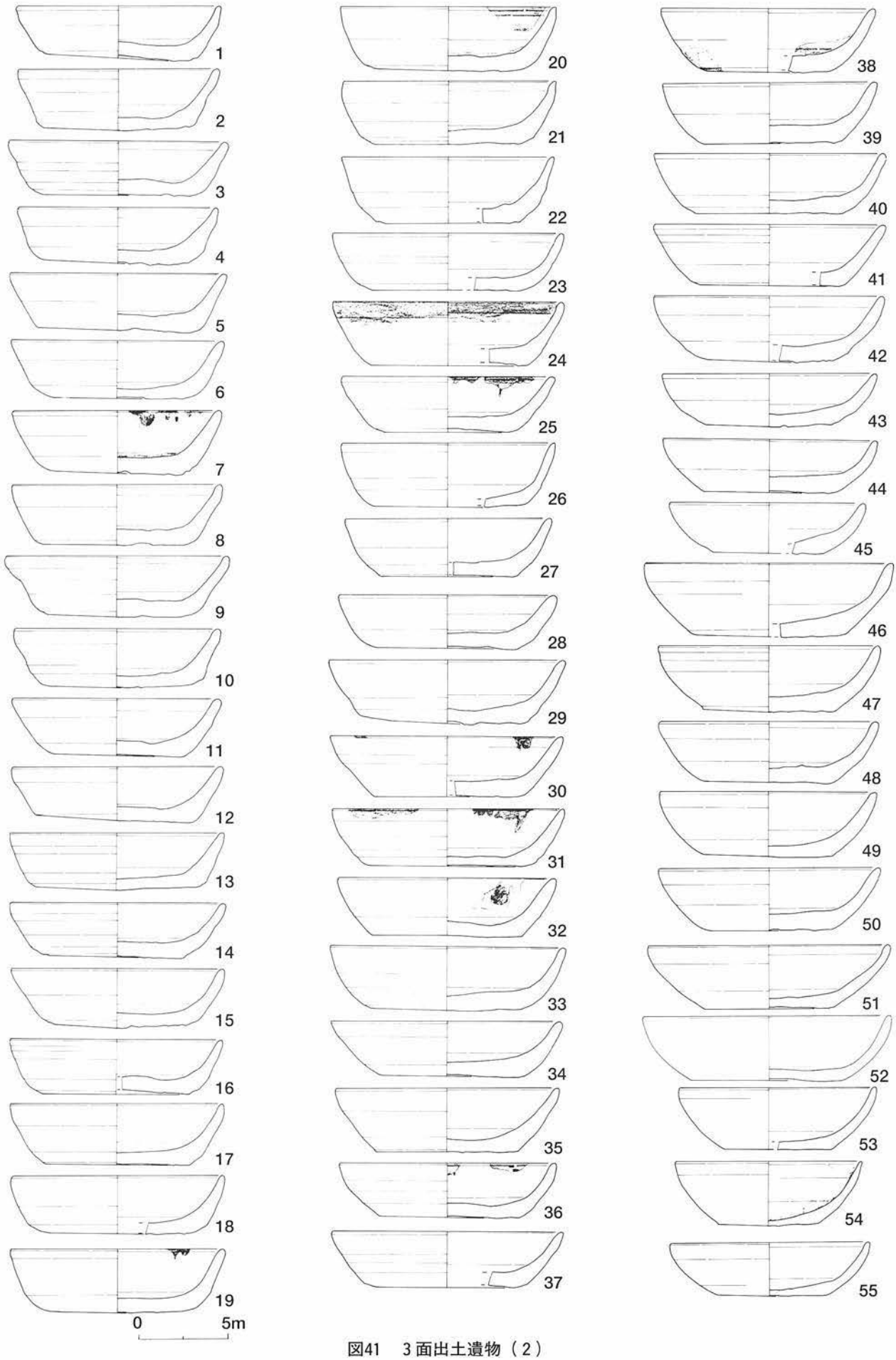

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
0
5m

図41　3面出土遺物（2）

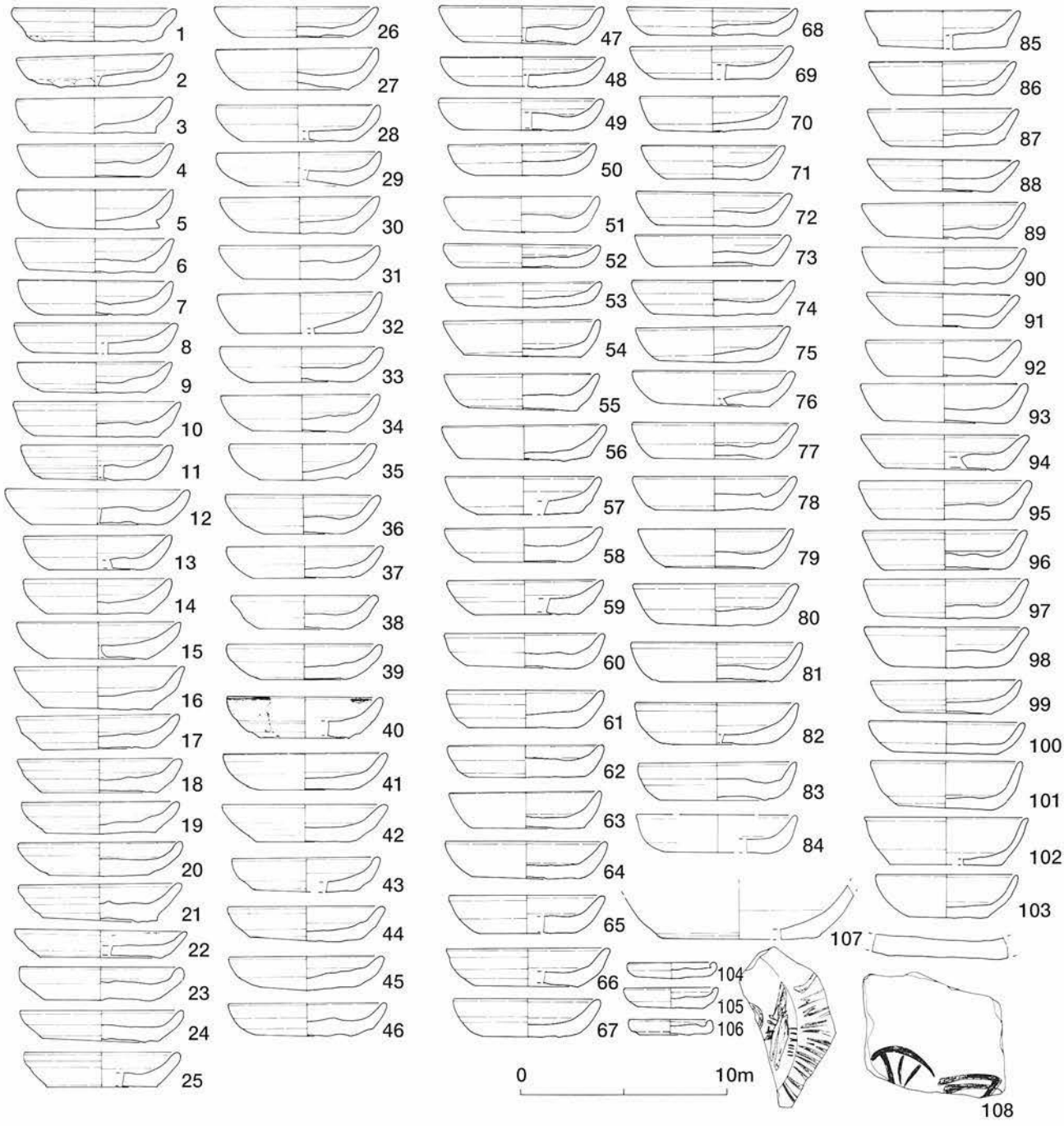


図42　3面出土遺物（3）

13.4cmを測る。胎土は暗紫色を呈し、白色石粒・微砂を含む。内底面は磨滅している。口縁端は窪んでいる。18は底部片である。底径は復元で18.0cmを測る。19は口縁部片である。18・19共に胎土は灰茶褐色を呈し、白色石粒を含み粗い。また、内面は磨滅している。

図40－20は火鉢である。復元で口径は33.6cm・底径は23.2cm・器高は10.2cmを測る。胎土は灰色で瓦質である。

図41・42はかわらけである。図41－1～52は大皿である。1～50は概ね、口径は10.0cm～14.0cm、底径は7.0cm～9.4cm、器高は3.0cm～4.0cmを測る。体部器厚は1.0cm前後と厚手で、底径が広い。また、外器壁には指ナデによる調整時の稜線が強く残り、器表は滑らかでない。胎土は赤褐色～赤橙褐色～橙褐色・茶褐色～灰褐色を呈し、2・4・12～14・17・18・25・26・28～35・42・44～49は砂質で、その

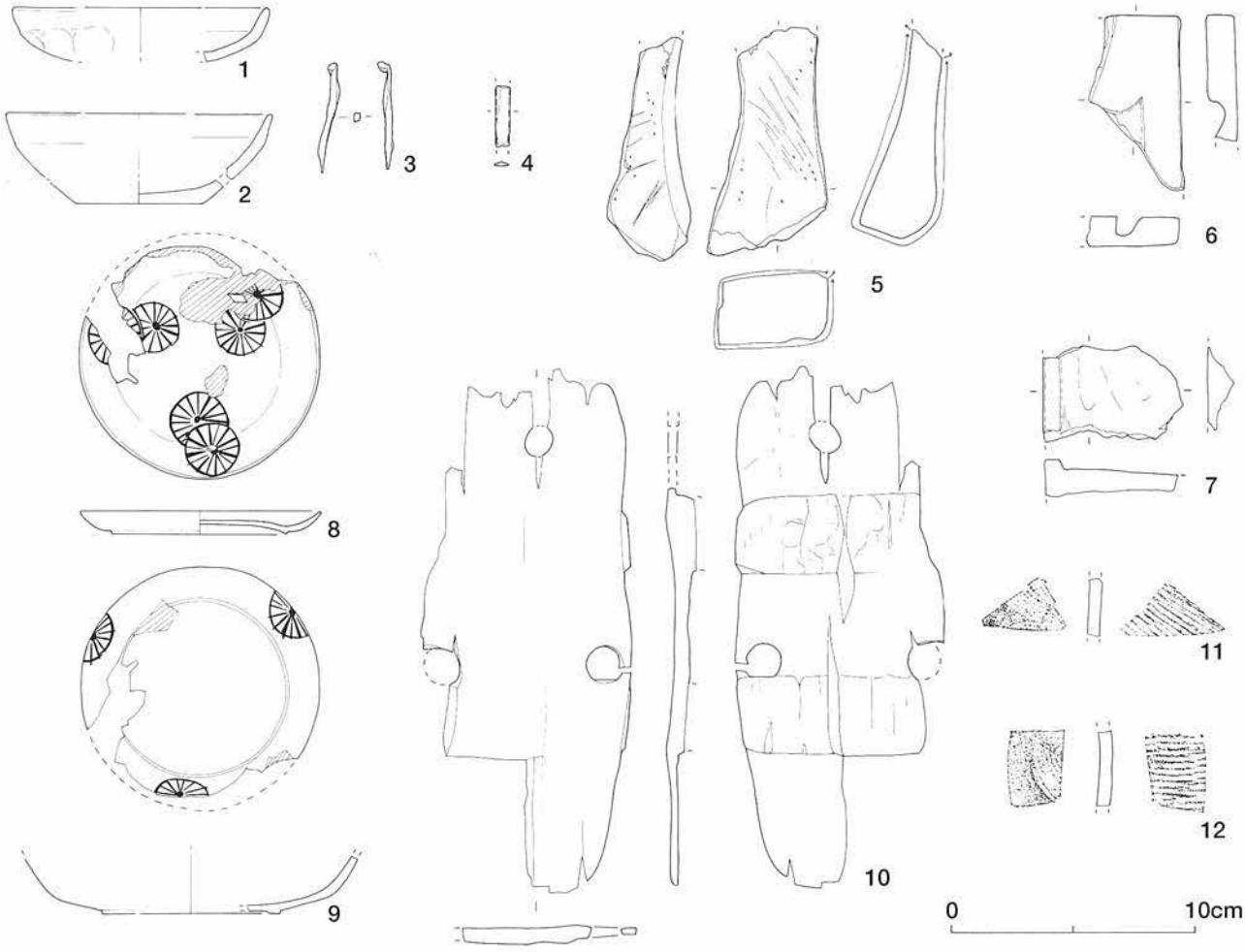


図43　3面出土遺物（4）

他は粉質である。焼成は概ね良好である。6・7・19・20・24・25・30～32・36・37・38は器表に灯明皿として使用時に付着したと考え得る煤が認められる。51・55は各々口径が13.6cm・14.0cm、底径は7.2cm・8.5cm、器高が3.6cm・3.8cmを測る。体部器厚は0.6cm前後で薄手で、器壁は緩やかにカーブを描きながら立ち上がる。胎土は明肌色を呈し、砂質である。

図41－53～55は中皿である。各々、口径は11.1cm・10.5cm・11.2cm、底径は6.0cm・5.6cm・6.0cm、器高は3.5cm・3.6cm・3.0cmを測る。体部器厚は0.5cm前後を測り、薄手で、底径が狭く、器壁は滑らかに立ち上がり、薄手深皿型である。胎土は暗肌色～赤橙色を呈し、粉質である。焼成は良好である。

図42－1～103は小皿である。1・2は手づくねの製品である。各々、口径は8.0cm・7.6cm、底径は6.6cm・5.8cm、器高は1.6cm・1.5cmを測る。胎土は橙褐色・淡肌色を呈し、粉質である。3～100は概ね、口径が7.5cm～8.2cm、底径が5.0cm～6.0cm、器形が1.5cm～2.0cmを測る。体部器厚は0.8cm前後を測り、厚手で、浅い器形である。器壁は外向きに立ち上がる。胎土は暗肌色～灰褐色・茶褐色～暗橙色～赤橙色～橙色を呈し、粉質と砂質の割合は半々である。焼成は良好。40の器表には煤が付着している。101～103は各々、口径が7.5cm・8.0cm・7.1cm、底径が4.7cm・5.5cm・3.6cm、器高が1.8cm・2.3cm・2.1cmを測る。体部器厚が0.4cm前後を測り、薄手深皿型である。

図42－104～106は内折れかわらけである。各々、口径は4.4cm・4.6cm・4.1cm、底径は3.6cm・3.2cm・3.3cm、器高は0.8cm・1.0cm・0.8cmを測る。胎土は橙色を呈し、粉質である。焼成は良好。

図42－107・108は墨書かわらけである。107は底径が復元で8.0cmを測り、胎土は肌色を呈し、粉質で

ある。外側面下位、立ち上がり部分に髭、外底面に唇・鼻、と思われる人面の墨書が施される。108は胎土は橙色を呈し、粉質である。外底面に車輪状の墨書が施される。

図43－１・２は白かわらけである。１は手づくねの製品である。口径は復元で10.6cmを測る。胎土は白色を呈し、黒色微砂を多く含む。焼成は良好である。２はろくろ整形の製品である。復元で口径は11.0cm、底径は5.2cm、器高は3.7cmを測る。胎土は白褐色を呈し、黒色微砂を含む。焼成は良好である。

図43－３は鉄製の釘である。長さは4.7cm、幅は3.0cmを測る。

図43－４は骨製品である。材質は鹿である。用途は不明。両端が欠損している。幅は0.5cm、厚さは0.2cmを測る。

図43－５～７は石製品である。５は砥石である。材質は泥岩で、暗灰色を呈す。６・７は硯である。６は黒灰色を呈し、表面には漆が塗られている。

図43－８・９は漆器である。８は皿。黒地に朱で内面と外側面に車輪が手描きで施される。浅い高台がつく。口径は10.0cm、底径は7.2cm、器高は1.0cm、体部器厚は0.2cm前後を測る。８は椀である。黒漆で無文である。外底面には漆は施されない。0.1cm程の高台がつく。

図43－10は下駄である。遺存状態はかなり悪く、歯の部分は焼け焦げ、炭化している。遺存最大長で22.0cm、幅8.5cm、厚さ0.8cmを測る。

図43－11・12は須恵の甕の胴部片である。いずれも胎土は灰色を呈し、緻密である。外面には叩き文が認められる。以上２点は下層からの混入品である。

5） 4面の遺構と遺物

4面は3面直下、海抜≒8,900m付近に検出され、ほぼ平坦である。4面からは礎石建物・礎石建物にともなう土壙3基・板囲い状遺構・かわらけ溜り2址が検出した。また、板囲い状遺構の周囲には関連のあると考え得る礎板列が検出した。調査区南東部にはかわらけ片による地業面及び硬化面が確認された。

調査区南東部に確認したかわらけ片による地業面は南北約3.0m、東西約1.4mに広がりを見せる。その面上レベルは海抜≒8.85mである。

調査区南部に確認した硬化面は帯状に2本である。その範囲は2.8m×0.52mと2.4m×0.2mである。面上レベルは海抜≒8.88mである。これらの硬化面の持つ性格は今回の調査では確認できなかった。
また、これらのかわらけ片地業面及び、硬化面は層位を異にするが、3面のほぼ同じ位置にも検出している。

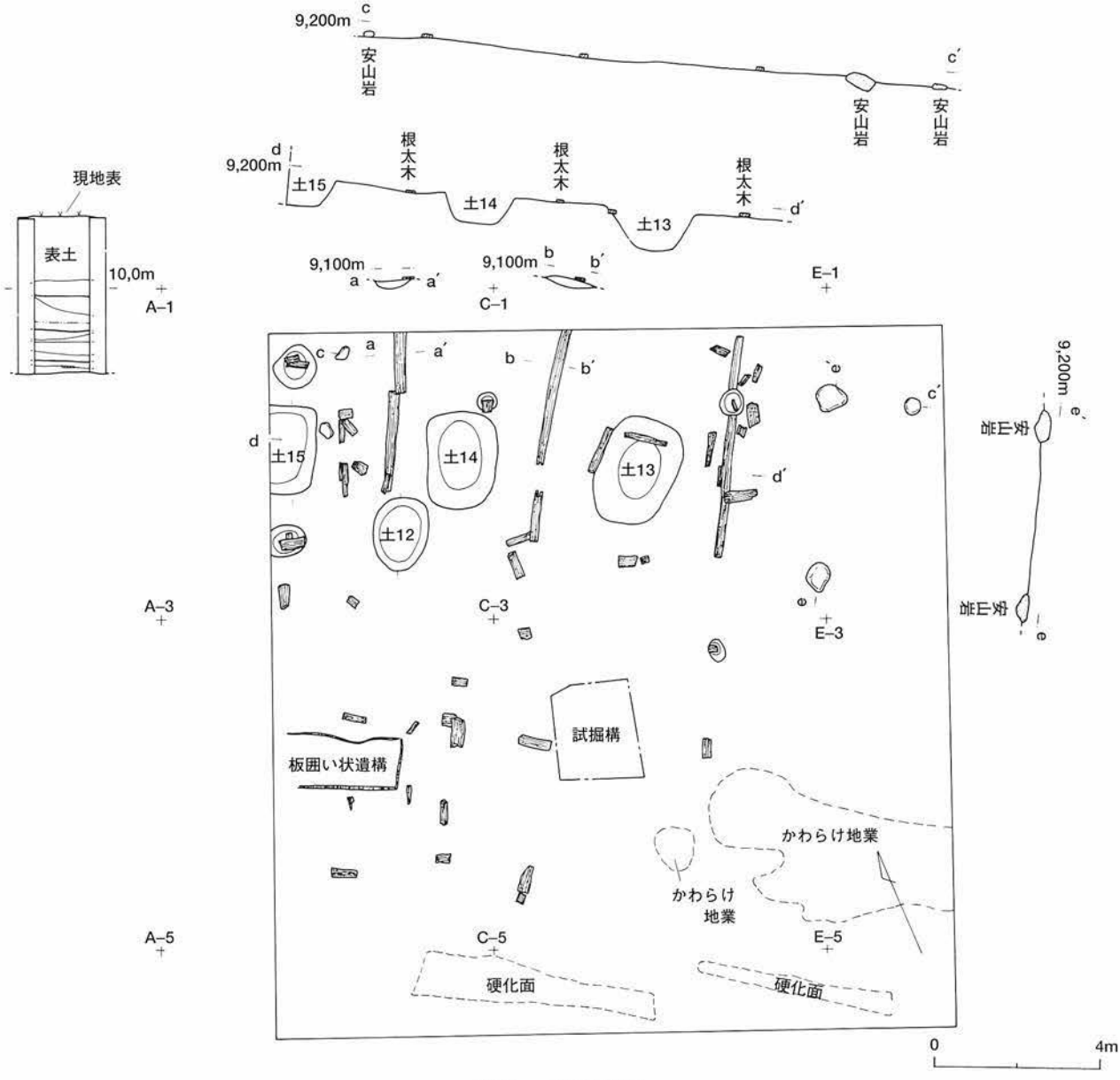


図44　4面全体図

礎石建物（図44）

礎石建物は3ライン以北に検出された。海抜は約9.00mである。南北軸線方位はN－29°－Eである。当址の北半は調査区外に広がり、その全容は明らかでない。南北を軸にする3本の木製土台と3個の安山岩から構成されていた。木製土台間の距離は芯々で西から200cm・210cmを測る。東の木製土台から礎石までの距離は120cm、礎石間の距離は芯々で南北が210cm、東西が100cmを測る。西の木製土台から礎石までは65cmを測る。木製土台はいずれも途中で切られている。西の木製土台は南から115cmで、鉤型に切れ、切り込みのない木製土台がつづく。中央の木製土台は南から60cmで凹型に切り込まれ、33cm置いて、同じく凹型に切り込まれた木製土台がつづく。廃材の再利用であろう。東の木製土台は172cmで柱穴が1口開き、その先にさらに木製土台がつづく。柱穴の直径は30cmを測り、平面形は円形を呈す。深さは検出面から14.0cmを測る。礎石は大きいもので30cm前後、小さいもので20cm前後を測る。また、木製土台と木製土台との間に3基の土壙が検出した。東の木製土台付近からは瓜科の植物の種がまとまって検出した。（写真図版PL39）

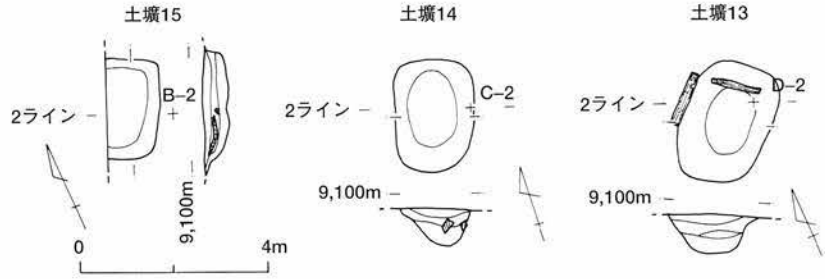


図45　土壙13・14・15

土壙13・14・15（図44・45）

土壙13はD－2グリッド付近に検出した。検出レベルは海抜8.94mである。平面形は南北に長い隅丸方形を呈し、直径は南北軸が128cm・東西軸が92cmを測る。深さは検出面より40cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面から15cm程の厚さで、暗黒褐色の海砂が堆積している。砂層のほぼ直上から、栗の実の表皮がまとまって出土した。

土壙14はC－2グリッド付近検出した。検出レベルは海抜8.94mである。平面形は南北に長い隅丸方形を呈し、直径は南北軸が120cm、東西軸が86cmを測る。深さは検出面より40cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面から20cm程の厚さで、暗褐色の海砂が堆積している。

土壙15はB－2グリッド付近に検出した。検出レベルは海抜8.94mである。西部は調査区外である。平面形は推定で南北に長い隅丸方形を呈し、直径は南北軸が108cmを測る。深さは検出面より30cmを測る。断面形はおそらく逆台形を呈する。底面から12cm程の厚さに黒褐色の海砂が堆積している。

土壙13～15にみられる暗黒褐色の海砂は土壙廃棄時の覆土ではなく、土壙使用時に埋設されたものと考えられ、何らかの明確な目的を持って設置されたと考えうるが、その用途は現時点では不明である。

土壙13出土遺物（図46）

図46－1はかわらけである。口径は13.0cm、底径は9.0cm、器高は3.4cmを測る。胎土は肌色を呈す。器表には煤が付着する。図46－2・3は木製の箸である。各々、長さは遺存部で11.4cm・12.0cm、太さは0.7cm・0.6cmを測る。図示し得たものの他に漆器片・山茶碗窯系こね鉢片・栗の実の表皮が出土している。

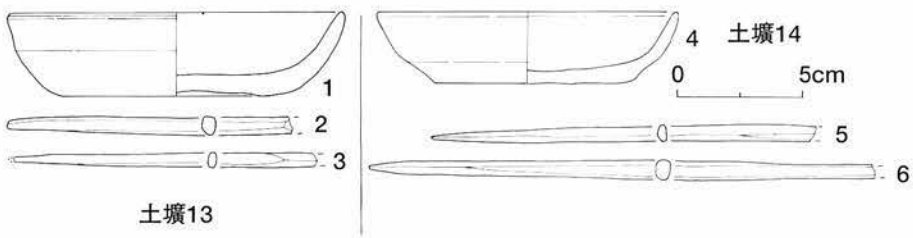


図46　土壙13・14

土壙14出土遺物（図46）

図46－4はかわらけである。口径は11.8cm、底径は7.8cm、器高は2.9cmを測る。胎土は灰褐色を

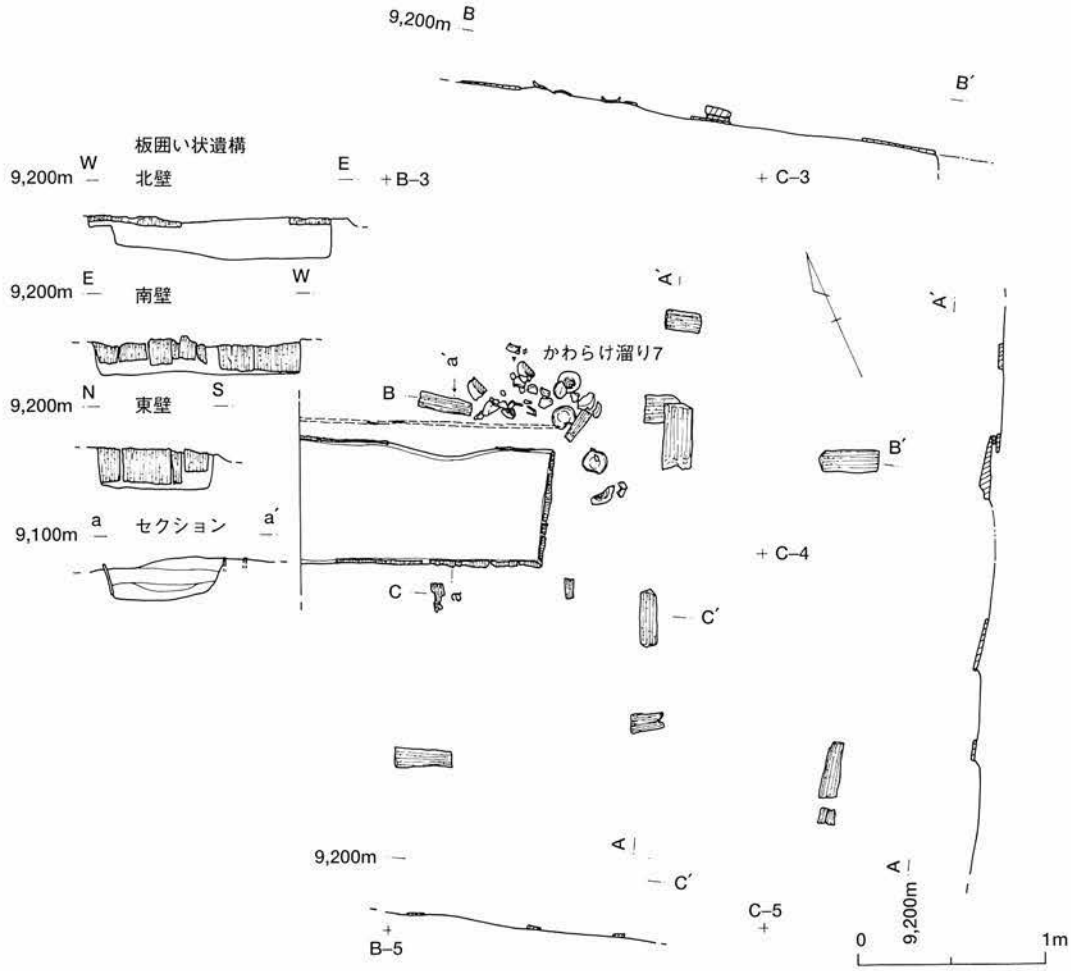


図47　板囲い状遺構

呈し、黒色微細粒を多く含み、粉質である。器表には煤が付着し、灯明皿として使用している。図46－5・6は木製の箸である。各々、長さは遺存部で15.4cm・20.2cm、太さは0.6cm・0.8cmを測る。

土壙15出土遺物

土壙15からは図示し得るものの出土はなかった。小量のかわらけ片・種子が出土した。

なお、土壙13～15出土の栗の実の表皮および種子は写真図版（ＰＬ34）に載せた。

板囲い状遺構（図47）

板囲い状遺構はＣ－４グリッド付近に検出された。検出レベルは9.00mである。深さは検出面より20cmを測る。西部は調査区外のため全容は明らかでないが、その規模は検出範囲で東西64cm・南北137cmを測る。遺存状態が悪かったが、北壁から10cm北に平行に板壁が検出した。板材の厚さは2.0cm前後を測り、南および東壁はほぼ底面まで板壁が入る。さらに、当址の周辺には礎板が等間隔に検出された。各礎板の間隔は90cm～120cmを測る。板囲い遺構にともなう何等かの遺構であろうか。また、北東辺には小規模なかわらけ溜りが検出した。連続性はあるものの若干の時期差がある。

板囲い状遺構出土遺物（図48）

当址からはかわらけ２点のみの検出だった。共に、糸切りかわらけである。図48－１・２の口径は8.4cm・8.6cm、底径は5.6cm・5.3cm、器高は1.7cm・2.0cmを測る。胎土は各々黄味灰色・橙色を呈し、粉質で微砂を含む。体部器厚は0.7cm前後を測り、やや厚手で、浅い器形である。

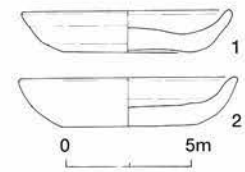


図48　板囲い状遺構出土遺物

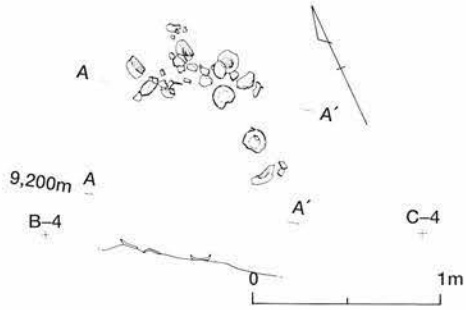


図49　かわらけ溜り７

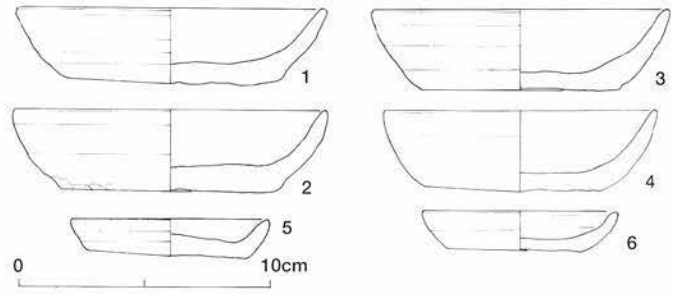


図50　かわらけ溜り７出土遺物

かわらけ溜り７（図49）

かわらけ溜り７はＣ－４グリッド付近・板囲い状遺構北東辺に検出した。検出レベルは海抜9.72ｍである。図示し得たものでかわらけ６点の小規模な遺構である。板囲い状遺構と連続性はあるものの若干の時期差があり、かわらけ溜り７のほうが若干下層であろう。

かわらけ溜り７出土遺物（図50）

かわらけ溜り７からはかわらけが６点出土した。いずれも糸切りかわらけである。１～４は大皿である。各々、口径は12.4cm・12.6cm・12.0cm・11.0cm、底径は8.6cm・9.2cm・9.2cm・7.6cm、器高は3.0cm・3.2cm・3.2cm・3.2cmを測る。体部器厚は0.8cm前後を測り、やや厚手である。胎土は概ね肌色を呈し、粉質で微砂を含む。焼成は良好である。５・６は小皿である。口径はともに8.0cm、底径は6.4cm・5.5cm、器高は1.5cmを測る。浅い器形である。胎土は肌色を呈し、粉質で微砂を含む。焼成は良好である。

かわらけ溜り６（図51）

かわらけ溜り６はＤ～Ｅ－３～４グリッド付近に検出した。検出レベルは海抜8.6ｍである。東西3.0ｍ、南北1.6ｍに渡って図示し得たもので39点のかわらけ・白かわらけ・漆器がまとまって検出した。

かわらけ溜り６出土遺物（図52）

図52－１～39はかわらけである。１～23は大皿である。口径は概ね12.0cm～13.0cm、底径は7.5cm～9.0cm、器高は2.7cm～3.5cmを測る。体部器厚は0.7cm前後を測り、やや厚手である。器壁はさほど開かずに立ち上がる。胎土は肌褐色～肌色～淡橙色～橙色を呈し、粉質で微砂を含む。焼成は良好である。５・11・13～15は器表に煤が付着し、灯明皿として使用したと考え得る。23は穿孔かわらけで、底部ほぼ中央に直径0.8cm程の孔が開く。24～38は小皿である。概ね口径は7.3cm～9.0cm、底径は5.0cm～6.7cm、器高は1.3cm～2.0cmを測る。体部器厚は0.6cm前後を測り、厚手である。器壁は外に開き気味に立ち上がり、浅い器形を呈す。胎土は概ね肌褐色～肌色を呈し、粉質で微砂を含む。33は橙色を呈し、砂質である。焼成はいずれも良好である。33は器表に煤が

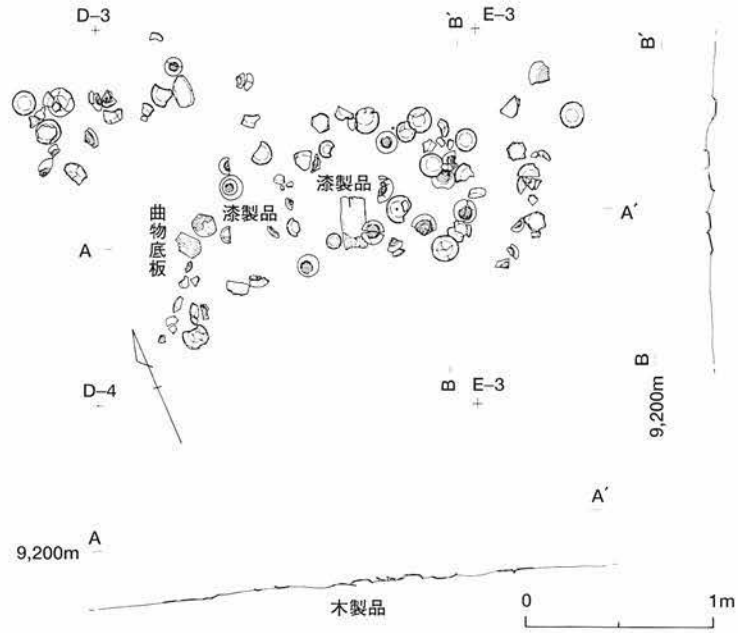


図51　かわらけ溜り６

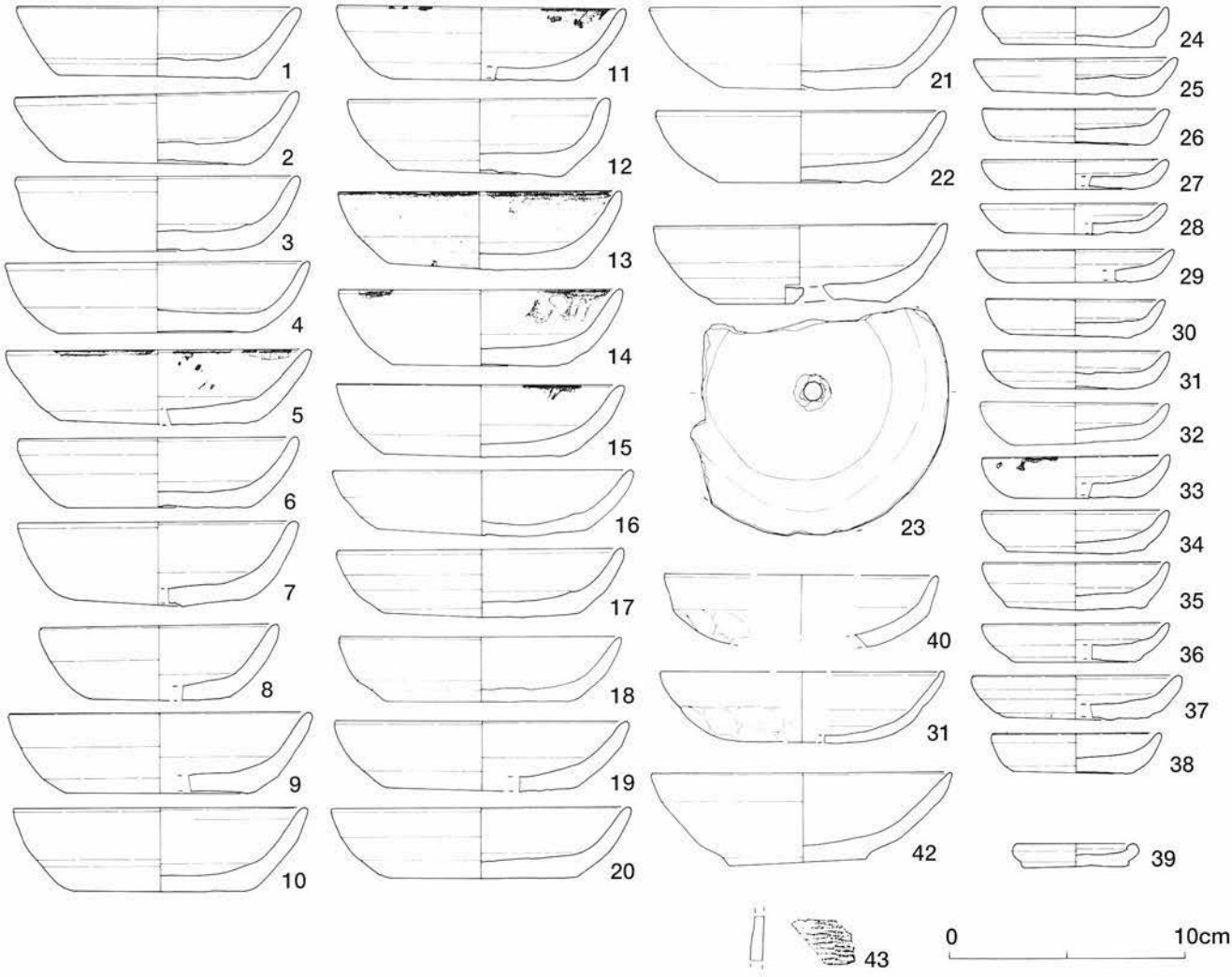


図52　かわらけ溜り6出土遺物

付着する。39は内折れかわらけである。口径は5.5cm、底径は4.6cm、器高は1.0cmを測る。胎土は橙色を呈し、粉質で微砂を含む。焼成は良好。

図52－40～42は白かわらけである。40・41は手づくねである。40の口径は11.8cmを測り、41は口径が12.2cm、底径が7.0cm、器高が3.0cmを測る。胎土は黄味白色を呈し、黒色砂粒はごく小量で、滑らかである。42は糸切りである。口径は13.0cm、底径は5.9cm、器高は3.9cmを測る。胎土は白褐色を呈し、微砂を含む。内底面は横方向に指ナデが施される。

図52－43は須恵の甕の胴部片である。胎土は淡灰色を呈し緻密である。下層からの混入品である。また、当址からは板状の漆製品が出土したが、遺存状態が悪く、図示し得なかった。

4面出土遺物（図53・54）

図53・54－1～58はかわらけである。図53は大皿である。概ね口径は12.0cm～13.0cmにまとまる。底径は7.5cm～9.0cm、器高は3.0cm～4.0cmを測る。底径が広く、体部器厚は0.8cm前後を測り、厚ぼったい。胎土は多くは肌褐色を呈し、橙色のものもいくつか含まれる。概ね、粉質で微砂を含む。焼成は良好である。1・13・15・16・27・35・36・39・51・54・は器表に灯明皿としての使用時に付着したと考え得る煤が付着している。図54－1～56は小皿である。1・2は手づくねである。各々、口径は8.5cm・8.2cm、底径は6.3cm・5.5cm・器高は1.8cm・1.9cmを測る。胎土は肌色を呈し、粉質である。3～56は糸切りの製品である。概ね口径は7.5cm～8.5cm、底径は5.0cm～6.5cm、器高は1.3cm～1.8cmを測る。

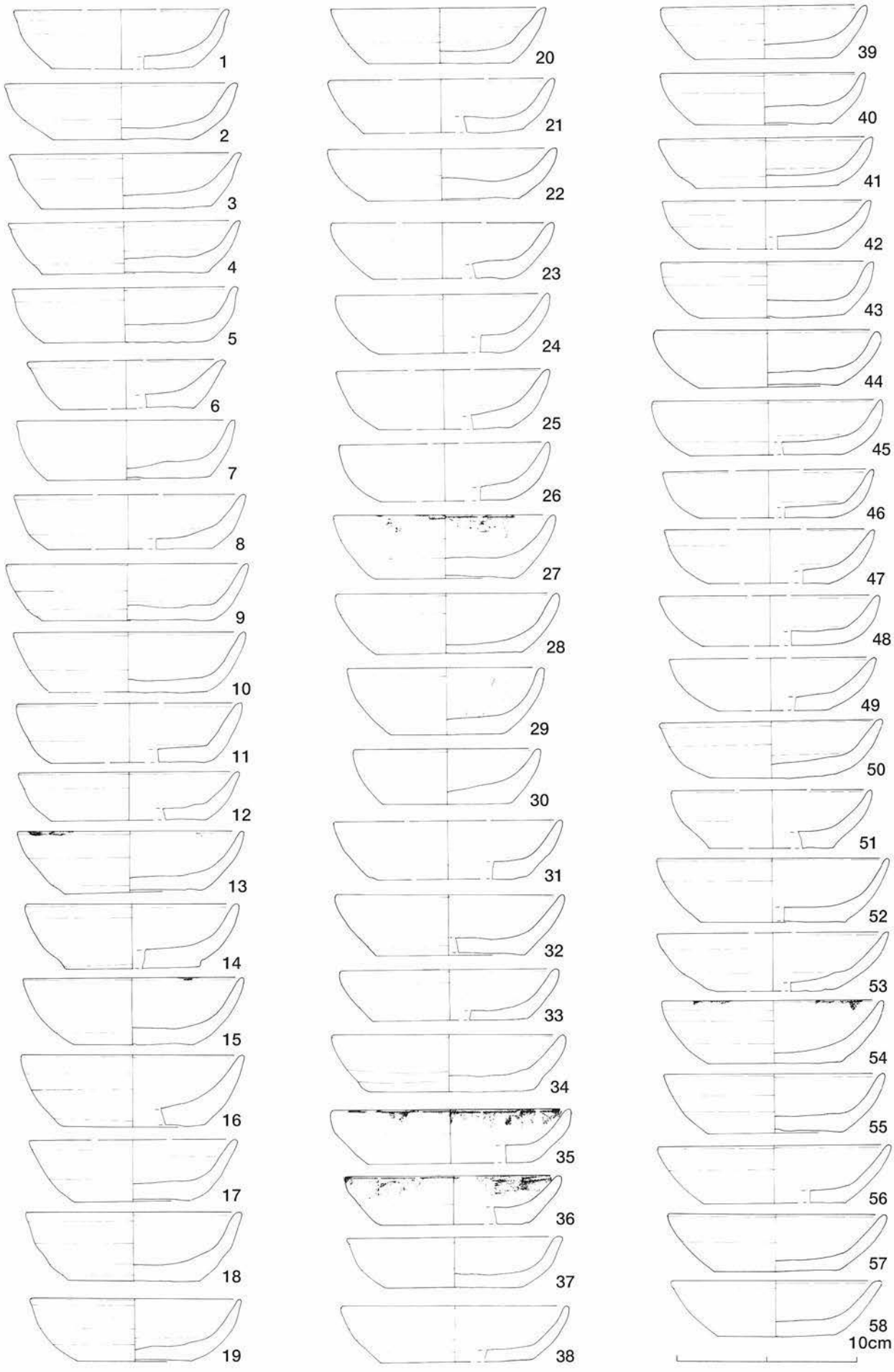

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
10cm

図53　4面出土遺物（1）

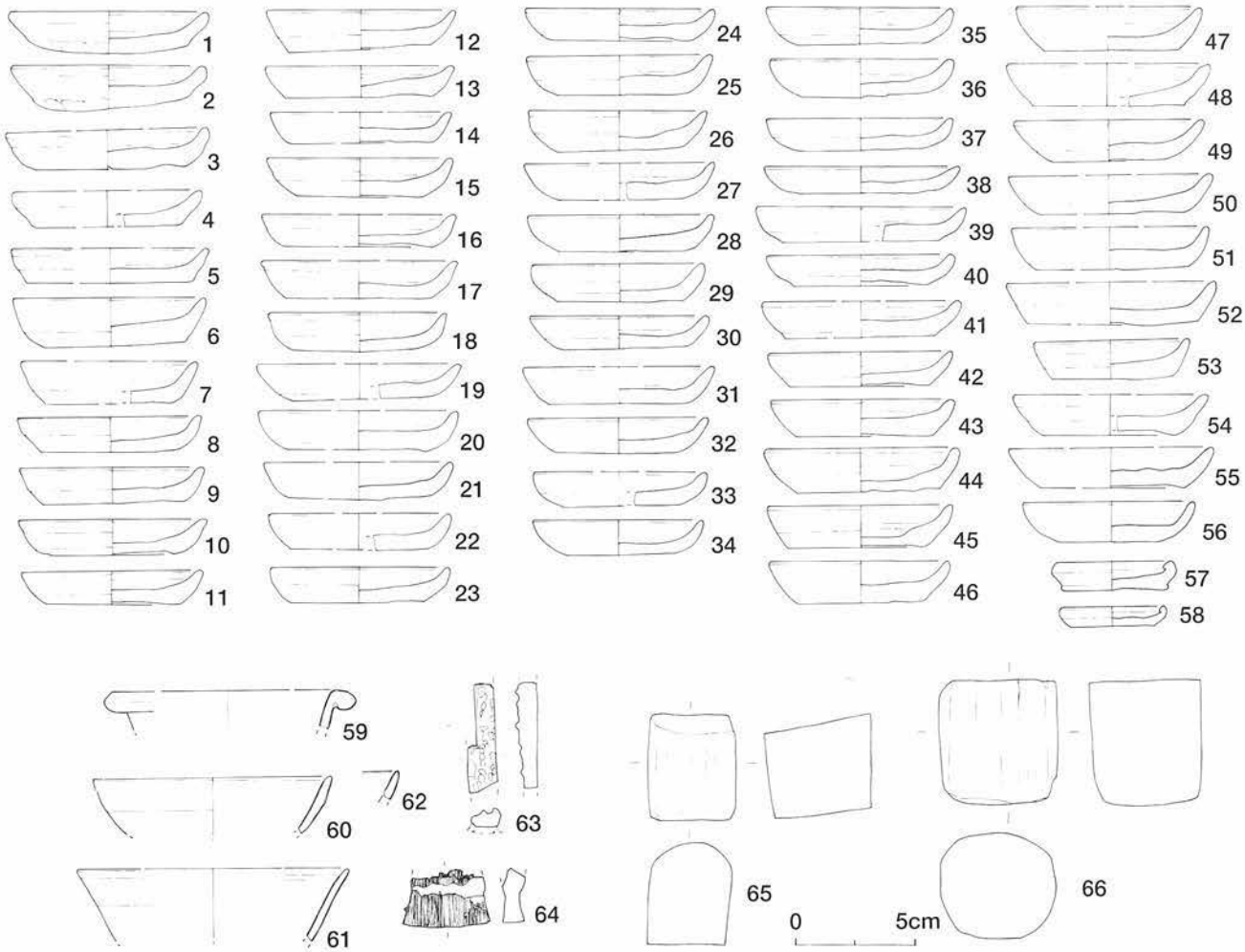


図54　4面出土遺物（2）

器壁は外向きに立ち上がり、浅い器形を呈す。胎土は多くが肌色～肌褐色を呈し、橙色を呈するものがいくつかある。概ね粉質で、微砂を含む。焼成は良好である。

57・58は内折れかわらけである。各々口径は5.2cm・4.6cm、底径は4.5cm・3.5cm、器高は1.2cm・0.9cmを測る。57の底部は厚く切り離される。胎土は57が橙色、58が暗肌色を呈し、いずれも粉質で微砂を含む。焼成は良好である。

図54－59～62は磁器である。59～61は白磁である。59は壷の口縁部片である。口径は復元で10.5cmを測る。釉調は灰白色を呈し、光沢に優れ、気泡多いため透明度は悪い。素地は灰白色を呈し、黒色微粒を含み緻密である。60・61は口兀皿である。口径は各々10.0cm・11.4cmを測る。釉調は灰白色を呈し、光沢に優れ、微気泡が多く透明度はやや悪い。素地は白色で、緻密である。62は青磁の蓮弁文碗の口縁部小片である。釉調は青緑色を呈し、微気泡多く不透明である。素地は灰白色を呈し、緻密である。

図54－63は骨角製品である。鹿の角の加工品である。用途は不明。

図54－64は漆刷毛である。刷毛の部分のみの検出である。幅は3.5cm、厚さ0.7cm前後を測る。材質については不明だが、一般に漆刷毛は人毛が使われることが多い。出土地点は礎石建物の床下にあたる場所である。

図54－65・66は木製品である。用途ははっきりとはしないが栓として使用した可能性が考えられる。65は四角柱を呈し、縦3.4cm・横3.7cm・高さ4.3cm、66は円柱を呈し、直径5.0cm・高さ5.2cmを測る。

6） 4 B面の遺構と遺物

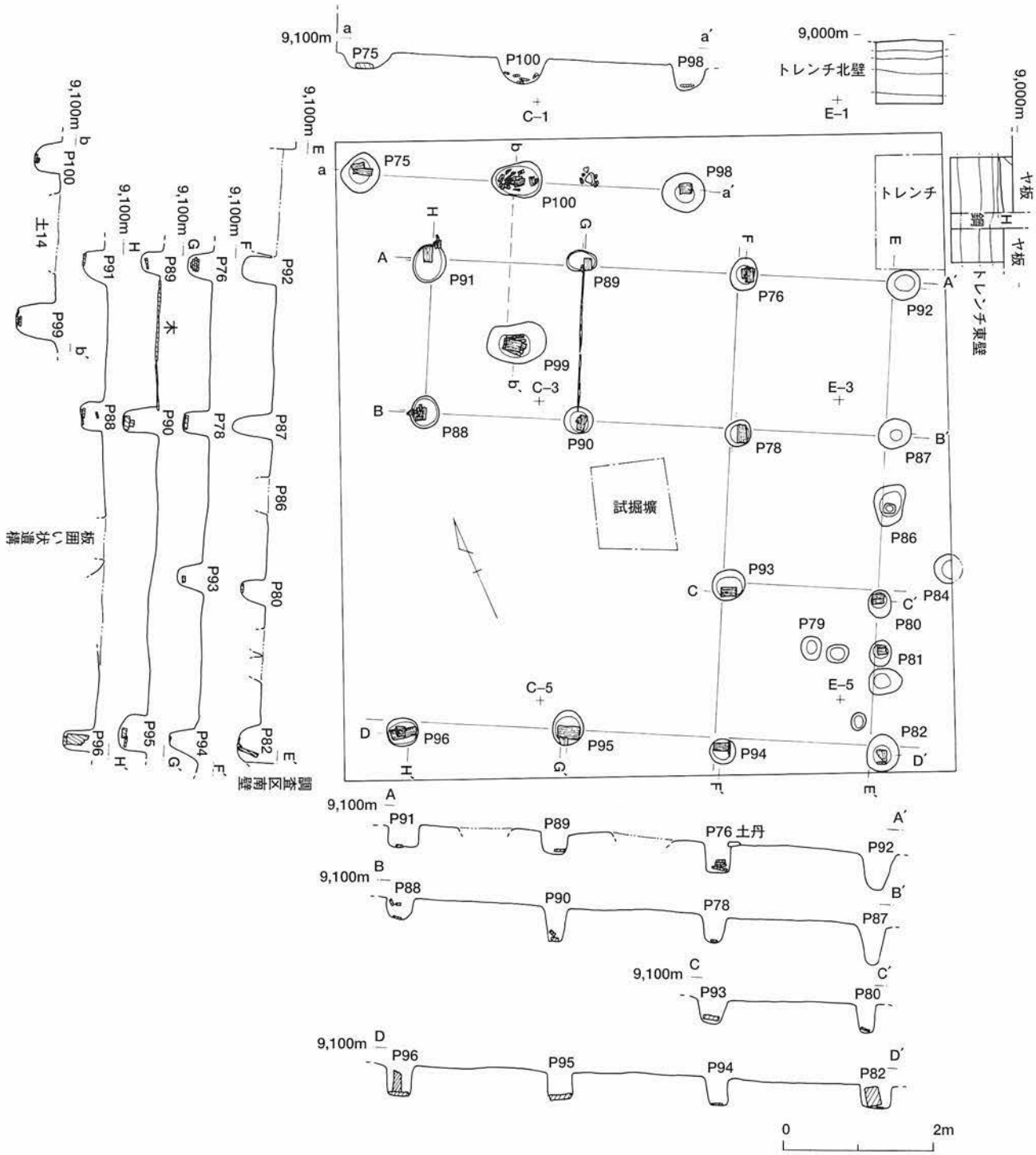


図55　4 B面全体図・掘立柱建物 3 ・ 4

4 B面は 4 面直下、海抜≒8.8mに検出した。掘立柱建物 2 址が検出した。中でも掘立柱建物 3 は礎板の遺存状態も良好で、規模が大きく、調査区全面に広がりを見せた。

掘立柱建物 3 （図55）

掘立柱建物 3 は調査区全面にわたって検出された。検出レベルは海抜8.8mである。14口の柱穴から

なり、コの字型に展開している。さらに調査区外に拡がると考えられる。柱間は芯々で210cmを測る。南北軸線方位はN－27°－Eである。柱穴の平面形は概ね円形を呈し、直径は35cm～45cmを測る。深さは検出面から32cm～56cmを測る。柱穴の多くには厚さ3cm～8cmのしっかりとした礎板が残り、柱穴76には4枚、柱穴90・95・88には2枚、と復数枚が重なりあって検出された。また、柱穴96には礎板の上に柱材が乗ったままで検出され、礎板は厚さ4.0cm・縦34.0cm・横16.0cmを測り、柱材は太く、一辺が14.0cm、遺存高が30cmを測り、大規模な建築物であったことが推測し得る。柱穴89と柱穴90間には柱穴間を結ぶようにごく細い板材が検出した。

掘立柱建物3出土遺物（図56）

図56－1～3は柱穴76から検出した。糸切りかわらけである。1は大皿で、口径は12.0cm、底径は8.0cm、器高は2.9cmを測る。胎土は肌色を呈し、粉質で微砂を含む。2・3は小皿である。口径は共に8.0cm、底径は5.6cm・6.0cm・器高は1.6cm・1.9cmを測る。底径が広く、器高の浅い器形である。胎土は肌色・橙色を呈し、共に粉質で微砂を含む。焼成は良好である。

図56－4～7は柱穴78から検出した。糸切りかわらけの大皿である。口径は12.0cm～13.0cm、底径は7.0cm～8.0cm、器高は3.0cm前後を測る。底径がやや広い器形である。焼成は良好である。4は器表に煤の付着がみられ、灯明皿であろう。

図56－8・9は柱穴87から検出した。糸切りかわらけの大皿である。8の口径は13.6cm、底径は9.6cm、器高は3.2cm、9の口径は11.5cm、底径は8.5cm、器高は2.8cmを測る。大皿としては8はやや大振で、9は小振である。底径が広く、器壁は直線的に立ち上がる。胎土は肌色・橙色を呈し、共に粉質で微砂を含む。焼成は良好である。

図56－10は柱穴88から検出した。糸切りかわらけの小皿である。口径は7.4cm、底径は4.4cm、器高は1.7cmを測る。胎土は肌色を呈し、粉質で微砂を含む。焼成は良好である。

図56－11は柱穴91から検出した。糸切りかわらけの小皿である。復元で口径は8.4cm、底径は6.2cm、器高は1.8cmを測る。胎土は肌褐色を呈し、粉質で微砂を含む。焼成は良好である。

堀立柱建物4（図55）

掘立柱建物4はB～D－1～3グリッド付近に検出した。検出レベルは海抜8.9m付近である。4口の柱穴からなり、T字型に展開していが、P99に関しては底面レベルが他の柱穴より約20cm深く、他の遺構の可能性も考え得る。ここでは柱穴間の距離および位置関係から同一遺構として説明する。柱間は芯々で220cmを測る。南北軸線方位はN－27°－Eである。柱穴の平面形は概ね円形を呈し、直径は52cm～80cmを測る。深さは検出面から30cm前後を測る。柱穴の底部にはいずれも礎板が検出された。礎板は厚さ3.0cm～4.0cm、長さ20cm～30cmを測る。柱穴100には10cm～20cmの、柱穴99には厚さ3.0cm・縦30.0cm・横18.0cmの板材が複数枚重なって検出した。

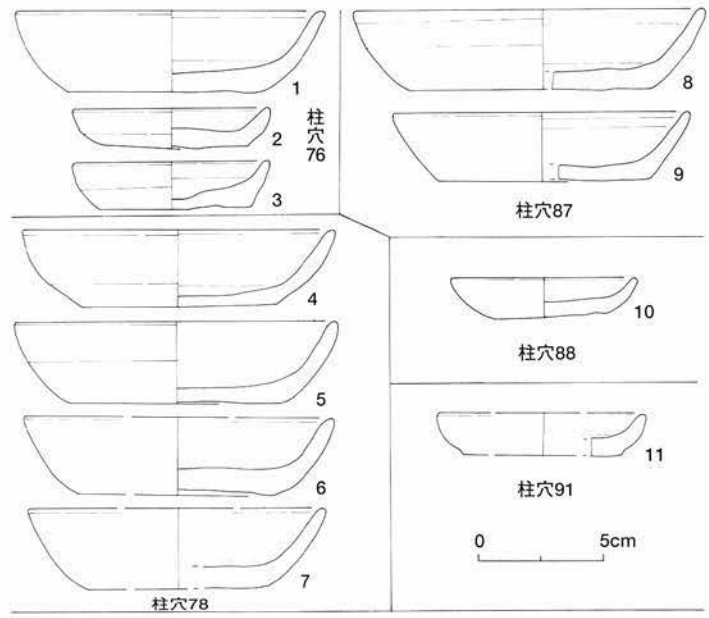


図56　掘立柱建物3出土遺物

掘立柱建物４出土遺物（図57）

図57－１～３は柱穴99から検出した。いずれも糸切りかわらけで、大皿である。各々、口径は13.0cm・12.0cm・12.6cm、底径は7.8cm・7.4cm・7.3cm、器高は3.0cm・3.3cm・3.8cmを測る。器壁はやや直線的で、外向きに立ち上がる。胎土は肌褐色を呈し、粉質で微砂を含む。焼成は良好である。

図57－４は柱穴75から検出した。木製品である。用途は不明。先端が細くなり、側部にくぼみが入る。長さ14.5cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。

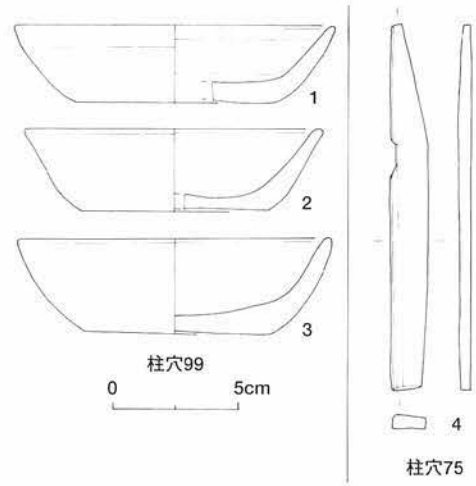


図57　掘立柱建物４出土遺物

４Ｂ面出土遺物（図58）

図58－１は青磁の折れ縁鉢である。釉調は灰緑色を呈し、光沢に優れる。細かい貫入と微気泡のため不透明である。素地は橙褐色～灰褐色を呈し、黒色微粒を含む。口径は復元で16.4cmを測る。

図58－２は常滑のこね鉢である。口縁の注口部片である。断面形の四角い口縁形である。口縁端が窪む。胎土は茶褐色を呈し、白色石粒を含み粗い。

図58－３～25はかわらけである。３～10は大皿である。概ね口径は12.0cm～13.0cm、底径は7.0cm前後、器高は3.0cm前後を測る。５は大振で口径が14.0cm、底径が9.8cm、器高が3.0cmを測る。10はやや小振で口径が10.6cm、底径が6.2cm、器高が、3.4cmを測る。胎土は概ね橙色を呈し、粉質で微砂を含む。焼成は良好である。11～25は小皿である。概ね口径は8.0cm前後、底径は5.5cm前後、器高は1.6cm前後を測る。胎土は概ね肌色を呈し、粉質で微砂を含む。焼成は良好である。図58－26・27は白かわらけである。26は黒縁皿風に器表に煤が付着する。口径は復元で10.4cmを測る。胎土は白色を呈し、比較的滑らかである。27は手づくねである。口径は12.6cm、底径は8.0cm、器高は3.3cmを測る。胎土は白色を呈し、器表は若干ざらつく。

図58－28は研磨痕のある常滑片である。図58－29は木製の箸である。

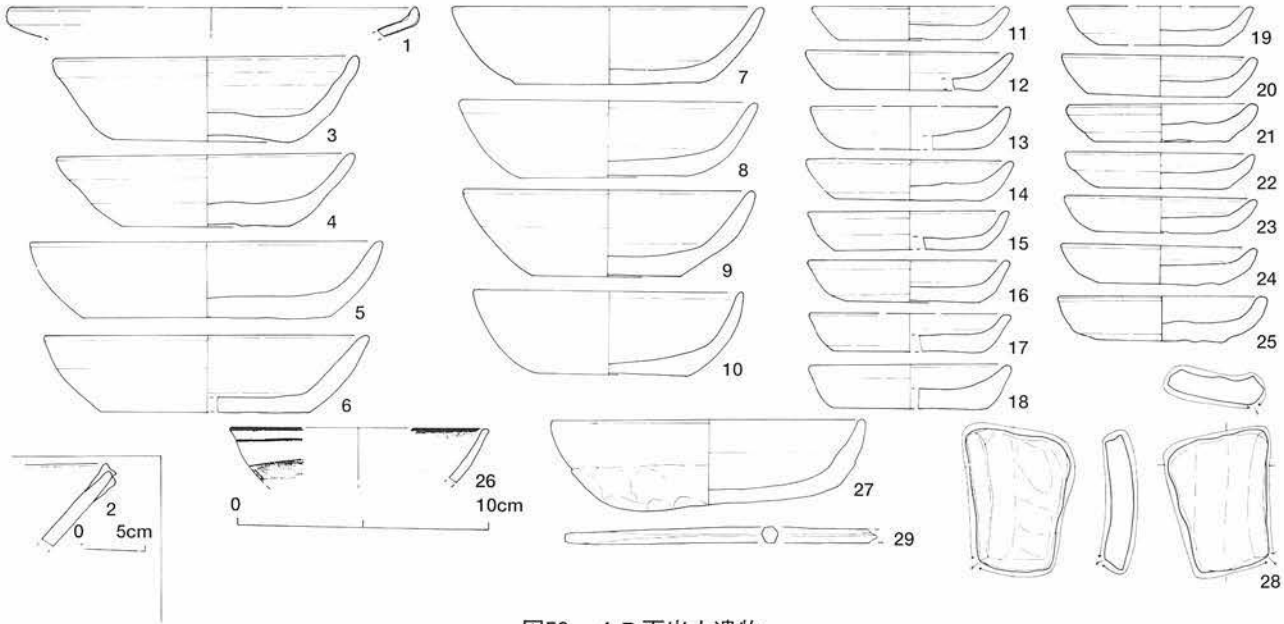


図58　４Ｂ面出土遺物

第3章　まとめ

本遺跡からは6面の生活面が確認された。本遺跡は佐助ヶ谷の開口部に位置し、周辺には東方約250mに「今小路西遺跡（福祉センター用地）」・「今小路西遺跡（御成小学校内）」、南西方約200mに「笹目遺跡」等が立地し、いずれも屋敷を中心とする遺跡が多数確認されている。そして、本遺跡との位置関係が御成山を挟んだ東方に位置する「今小路西遺跡（御成小学校内）」の発掘調査では、鎌倉時代の大規模な高級武家屋敷をはじめ、古代鎌倉郡衙跡が発見されている。北方約300mに位置する「佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）・（横浜地方法務局鎌倉出張所用地）」では大量の木製品が出土し、さらに寺院である可能性の高さが指摘されている。これら周辺に位置する遺跡からも、本遺跡地の性格がある程度、類推しえよう。

遺構の変遷

古　代

近隣の「今小路西遺跡（御成小学校内）」に鎌倉郡衙に比定される8～10世紀の遺構群が発見されていることから、本遺跡においても古代の遺構が存在することが十分考えうる。そこで、2ヵ所のトレンチ調査を行なった。トレンチは90cm×250cmで調査区北東隅と調査区中央の試掘壙を中世最終面より約80cm下まで掘り下げた。その結果遺構の確認はなかった。また、遺物は上層からごく小量のかわらけ片が検出したのみであった。中世層からは若干の須恵の破片が混入していたが、本遺跡においては、古代と断定し得る遺構の確認はなかったが、周辺部に展開される可能性は十分考えうる。

中世前期（3面～4B面）13世紀中葉～14世紀中葉

中世前期の各面は、連続的な様相を示し、間層が薄く、レベル差があまりない。3面検出の2棟の建物は重複して検出され、炭化物の堆積も顕著であり、先行する掘立柱建物2が火災に遇い、その直後に礎石建物に建て直されたと考えられる。また、中世前期（3面～4B面にかけて）だけで、4回の建て替えが確認された。さらに、掘立柱建物2の床下面には細かく砕いたかわらけ片による地業面が確認された。これらの建築群の中には安山岩の礎石を使ったものや、町屋ではみられない柱間の距離210m（7尺）を測るものがあり、掘立柱建物の内、2棟は3間×3間以上の規模であった。これらの検出状況から寺院もしくは武家屋敷級の建物である可能性が非常に高い。また、この時期にあたる遺構のなかで注目に値するものとして木製土台と礎石を組み合わせた建築遺構（礎石建物）と3基の土壙があげられる。3基の土壙はそれぞれ木製土台間に等間隔に検出し、ほぼ同型を呈し、密接な関係にある。3基共に、その上層からは建築部材である木片が多く投げ込まれ、さらに下層には海砂が一定レベルで埋設されていた。用途は不明だが何らかの明確な使用目的を持っていることは明らかであり、今後類似の遺構の発見について注目していかなければならない。さらに今回の調査では調査区の面積的な限界からその全体像の把握は難しいが隣接する「佐助ヶ谷遺跡（鎌倉市佐助一丁目450番24地点）」では各々対応する面において柱穴および礎石の検出がないことからも、屋敷は北西方向に展開していくであろうと考えうる。これらのことから、中世前期には本遺跡はある程度の規模をもつ屋敷地であり、活発で、かなりの規模の建て替えが行なわれていることから、この地の家主の隆盛ぶりが窺えよう。

中世後期（1面～2面）14世紀中葉～終末あるいは15世紀初

中世前期において大きな建物があったのに対して、中世後期にはその様相は変化してくる。2面では

掘立柱建物が確認されるが、その位置は北西部に移る。また、１Ｂ面および１面にはかわらけ溜りなど人跡は感じさせられるものの建物を形作るような遺構の検出はなかった。敷地の縮小によりその中心地が北部に移行していったのではないか。その中で、この時期に注目すべき遺構として４基の土壙がある。いずれの土壙も概ね隅丸の長方形を呈す。その形態は東西に長軸をもつもの３基と南北に長軸をもつもの１基である。４基の土壙は概ね隣接して検出した。その形状から、便所壙の可能性も指摘しうる。

この時期になると前代の賑わいとは様相を変え、徐々に規模を縮小し、衰退の兆候が濃くなってくる様子が窺い知れよう。

近　世

本遺跡では近世の田圃址が検出している。その分析結果は附編で紹介している。「今小路西遺跡（福祉センター用地）」でも確認されているように、江戸期に入ると当地は耕作地として機能していたようである。今回の調査ではこの他の遺構は確認されていない。

遺　物

今回の調査で出土した遺物のなか注目を引くものをあげてみたい。２面からは獣面香炉脚を中心とした青白磁・ビーズが挙げられる。青白磁は装飾性の高いものが多く認められ、ビーズは仏具の装飾品を思わせる。３面からは、全体の１／６程度の遺存率であるが元時代の青白磁の碗が検出している。鎌倉での検出例は初めてであろう。４面からは、栗の実の表皮・瓜科の種子等の食生活に関する遺物の検出が目立つ。また、漆刷毛も検出している。本遺跡地は遺物からみても、屋敷地であり、さらに、屋敷の裏手、台所の機能を兼ね備えた性格をもっていた可能性も考慮しうる。

まとめ

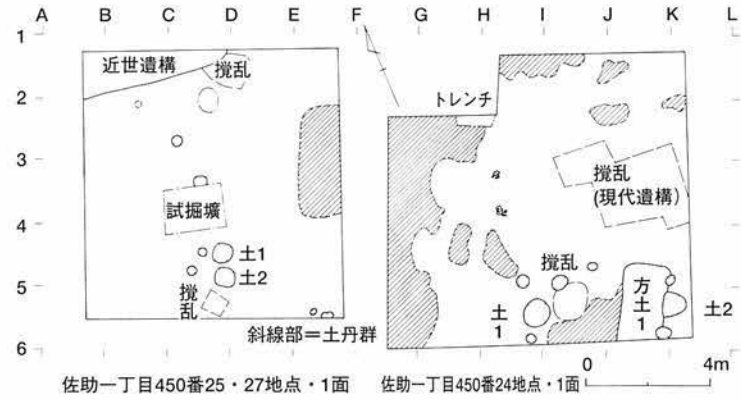
今回の発掘調査からは当地が「今小路西遺跡（御成小学校内）」において検出した高級武家屋敷とほぼ時期を同じくして、ある程度の規模をもった屋敷、もしくは寺院であったであろうことが調査面積が狭いことを考慮しても、指摘できよう。また、中世のある一時期をもっての当地の衰盛が見て取れたように思われる。また、今回の調査では不明であった鎌倉郡衙と当地周辺との関連、本遺跡検出の建物の全容、中世後期以後、近世までの空白期等は今後周辺の発掘調査により明らかになることであろう。

今回、「佐助ヶ谷遺跡（鎌倉市佐助一丁目450番24地点）」と「佐助ヶ谷遺跡（鎌倉市佐助一丁目450番25・27地点）」とは隣接した位置関係にあり、さらに同時期に発掘調査がすすめられた。その結果、一方は建物址を中心とし、他方はその周辺施設であろうという異なる様相を見せながらも、１つの遺跡としてとらえることができよう。以下にその２地点の変遷図を載せる。

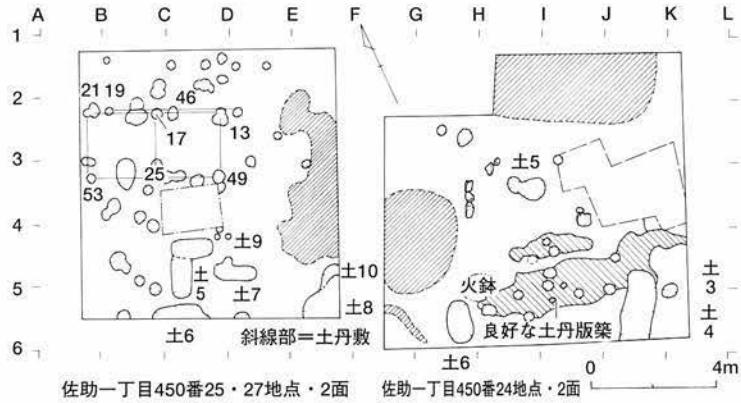
参考文献

「今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書」　1990　今小路西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会
「今小路西遺跡発掘調査報告書（福祉センター用地）」　1993今小路西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会
「佐助ヶ谷遺跡（税務署用地）発掘調査報告書」　1993　佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
「鎌倉市史・近世通史編」　1990　鎌倉市　吉川弘文館

中世　後期（1〜2面）

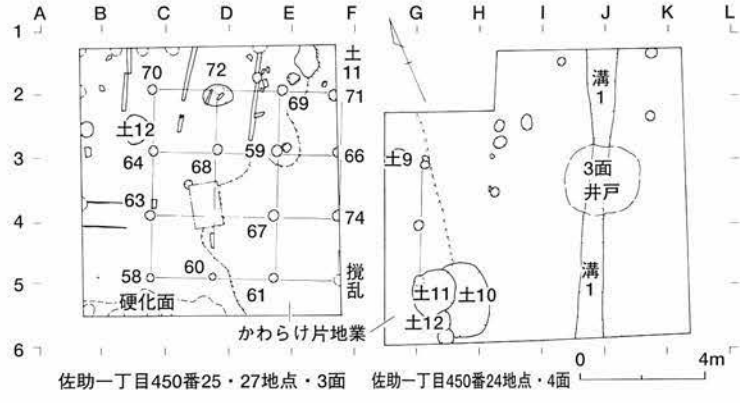


佐助一丁目450番25・27地点・1面　佐助一丁目450番24地点・1面

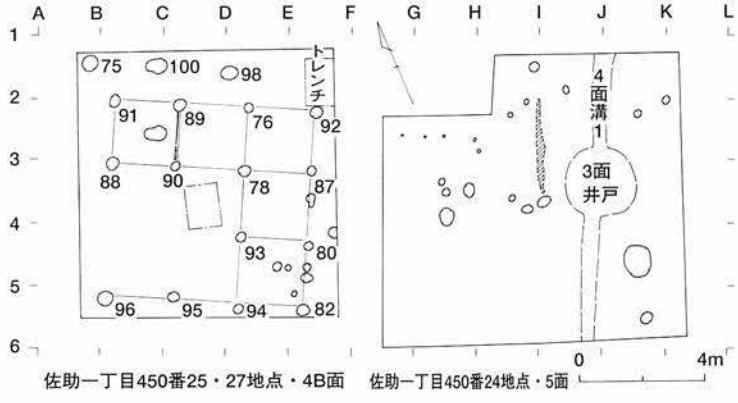


佐助一丁目450番25・27地点・2面　佐助一丁目450番24地点・2面

中世　前期（3〜4B面）



佐助一丁目450番25・27地点・3面　佐助一丁目450番24地点・4面



佐助一丁目450番25・27地点・4B面　佐助一丁目450番24地点・5面

図59　遺構変遷図

佐助ヶ谷遺跡の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

鎌倉市佐助一丁目450番に所在する佐助ヶ谷遺跡において行われた発掘調査で、中世の遺構・遺物とともに、その上位に水田層ではないかと思われる堆積層が検出された。本遺跡に近い今小路西遺跡（御成町625番２）では近世の水田跡が検出されており（今小路西遺跡発掘調査団　1993）、土相が本遺跡と似た様相を示していることからこの堆積層は水田層ではないかと考えられた。今回の発掘調査では面積的に狭く、遺構としての確認は難しく、よって、遺跡周辺の当時の古植生とともに水田稲作についても検討する目的で花粉分析を試みた。

１．試　料

試料は、調査区北壁よりスポットで５点（図１）採取した。各試料にについて簡単に記すと、試料１は、かわらけ片・小レキ・土丹片が点在する明黒褐色の粘土質シルトで、この試料１層の上位は撹乱層である。試料２、３は黒褐色のシルト質粘土で、かわらけ片・土丹片が点在し、炭片も認められる。試料４は褐色をおびた黒灰色の粘土で、かわらけ片・土丹片が散在しており、炭片も含まれている。試料５は黒色の炭化物（灰）が多く含まれる粘土で、土丹片が散在している。

これら５試料のうち、上位４試料が18世紀前後の江戸時代、最下部の試料５が中世と出土遺物などから考えられている。

２．分析方法

上記した５試料について、次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約４ｇ）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

３．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉23、草本花粉15、形態分類を含むシダ植物胞子４の総計42である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表１に、主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図１に示したが、上位３試料において花粉の検出数が少なく、特に樹木花粉は非常に少なく分布図として示すことができなかった。なお、分布図における花粉・シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート）を作成し、各々にPLC.SS番号を付し、形態観察用および保存用とした。

分布図で示した試料４、５についてみると、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属（アカマツ・クロマツ

表1　佐助ヶ谷周辺遺跡の産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5
樹木						
マキ属	*Podocarpus*	-	-	2	-	-
ツガ属	*Tsuga*	-	1	-	2	2
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	1	8	23	17
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	-	1	-	6	6
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	1	-	-	2
スギ属	*Cryptomeria*	3	2	-	15	11
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	-	1	1	2	1
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	-	-	-	-	2
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	1	-	1	3
カバノキ属	*Betula*	-	-	-	-	1
ハンノキ属	*Alnus*	2	2	3	1	3
ブナ属	*Fagus*	-	2	-	-	3
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1	3	-	3	5
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	2	2	-	1	8
クリ属	*Castanea*	-	-	-	2	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	1	-	-	-	1
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	-	-	1	2
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	1	-	-
クスノキ科	Lauraceae	-	-	-	-	1
フウ属	*Liquidambar*	1	-	-	-	-
モチノキ属	*Ilex*	-	-	-	-	1
カエデ属	*Acer*	-	1	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	1	-
草本						
イネ科	Gramineae	9	10	6	42	196
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	-	2	5	17
ツユクサ属	*Commelina*	-	-	-	1	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	-	-	1	5
ソバ属	*Fagopyrum*	-	-	-	2	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	3	1	18	103
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	2	1	6	2
キンポウゲ科	Ranunculaceae	-	-	-	-	1
アブラナ科	Cruciferae	3	1	5	16	11
マメ科	Leguminosae	-	-	-	-	2
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	1	1
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	-	2
ヨモギ属	*Artemisia*	2	1	3	52	49
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	-	2
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	14	44	14	12
シダ植物						
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	-	-	-	2	-
アカウキクサ属	*Azolla*	1	-	1	-	-
単条型胞子	Monolete spore	21	28	31	32	4
三条型胞子	Trilete spore	10	15	19	14	4
樹木花粉	Arboreal pollen	10	18	15	58	69
草本花粉	Nonarboreal pollen	19	31	62	158	403
シダ植物胞子	Spores	32	43	51	48	8
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	61	92	128	264	480
不明花粉	Unknown pollen	17	9	1	23	36

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

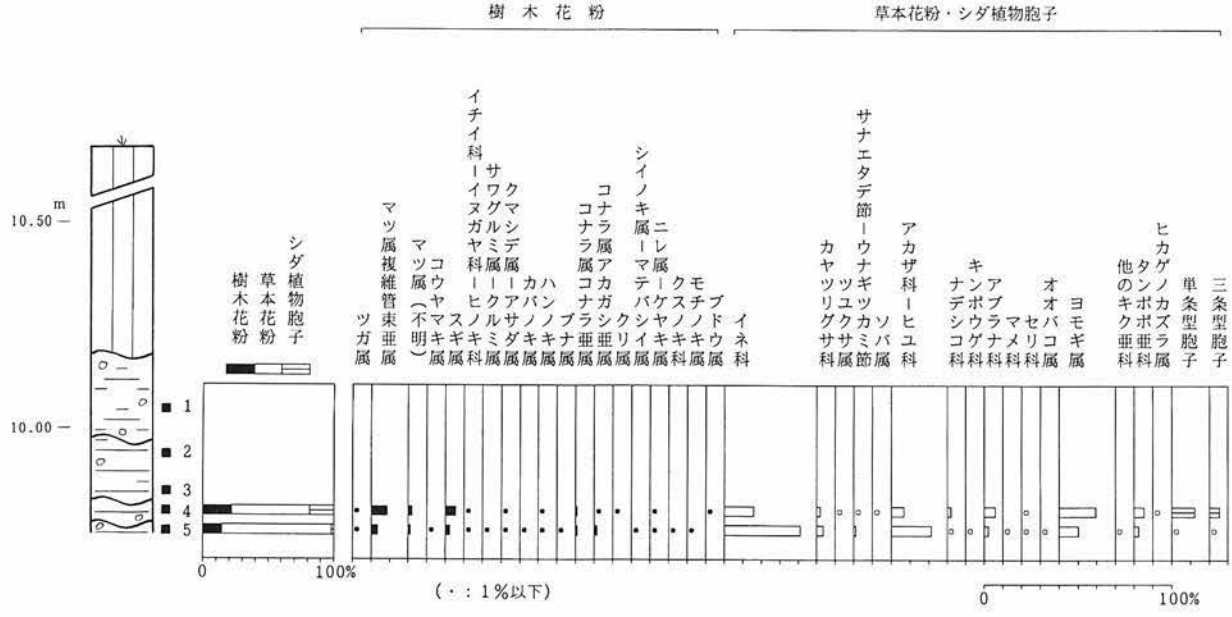
などのいわゆるニヨウマツ類）・スギ属がやや多く検出されており、他の試料からも得られている。次いでコナラ属コナラ亜属やコナラ属アカガシ亜属が検出され、その他、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科・クマシデ属－アサダ属・ハンノキ属などが得られている。草本類はイネ科・アカザ科－ヒユ科・ヨモギ属が多く検出されており、その他、カヤツリグサ科・アブラナ科・タンポポ亜科などが得られている。

4．佐助ヶ谷遺跡の古植生

中世の試料5においては、草本類に比べ樹木類の検出数が非常に少なく、遺跡周辺では当時樹木類は少なかったと思われる。先に示した同遺跡（佐助一丁目566番：鎌倉税務署）の花粉分析結果においても、樹木類の少ない古植生が推測され、スギ材の利用等による森林破壊が進んだ結果と考えられている（鈴木　1993）。このように、中世の佐助ヶ谷遺跡周辺丘陵部は、スギ林および照葉樹林（アカガシ亜属主体）や二次林要素のニヨウマツ類・コナラ亜属などがわずかにみられる貧弱な森林植生であった。

草本類ではイネ科が多産しており、形態的にもイネ属とみられる花粉が多く認められる。しかしながら、水田雑草的な分類群は検出されておらず、多く得られているアカザ科－ヒユ科やヨモギ属といった分類群は水路脇の土手などにみられる雑草類の様相を示していることも考えられ、これだけでは試料採取地点が水田地であったのか否かは不明である。

江戸時代（18世紀前後）においては、得られた花粉数が少なく、また、これは多くの花粉が消失してしまった結果と思われ、よって、当時の古植生については述べることができない。すなわち、残りやすい花粉だけで構成されている可能性があり、当時の植生をそのまま反映しているとは考えられないのである。この要因としては、試料採取地点が乾陸状態にあり、そこに落下・埋積された花粉の多くは紫外線や土壌微生物などにより分解・消失してしまったと考えられる。このように、江戸時代の古植生については述べることができず、当時水田稲作が行われていたかについても言及できない。



図A　佐助ヶ谷遺跡の主要花粉化石分布図

5．プラント・オパール分析

以上の花粉分析結果より試料採取地点付近が稲作地であったか否かについては不明であったことから、同試料を用いてプラント・オパール分析を行った。このプラント・オパールとは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成された植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）が、植物が枯れるなどして土中に混入し土粒子となったものをいい、このうち、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール（機動細胞珪酸体）個数から水田遺構の有無についての検討も行われており（藤原　1984）、このような研究成果から近年、植物珪酸体分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。こうしたことから、佐助ヶ谷遺跡においも採取された試料についてプラント・オパール分析を行い、稲作について検討した。

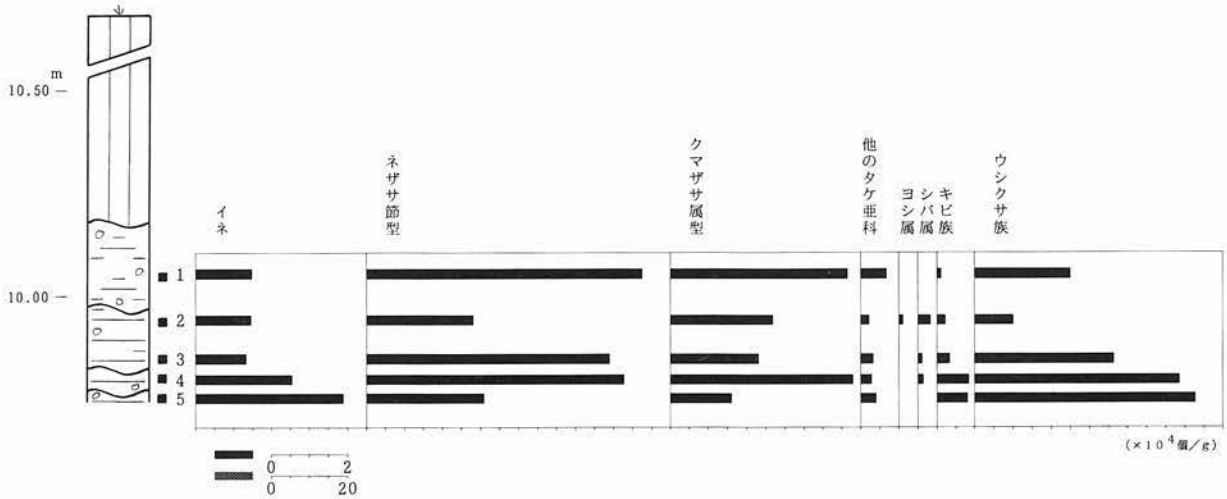
1）分析方法

花粉分析に用いた5試料について以下の手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40㎛）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10㎛以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

表2　試料1ｇ当りのプラントオパール

試料番号	イネ（個／g）	ネザサ節型（個／g）	クマザサ属型（個／g）	他のタケ亜科（個／g）	ヨシ属（個／g）	シバ属（個／g）	キビ族（個／g）	ウシクサ族（個／g）	不明（個／g）
1	14,800	73,000	46,700	6,800	0	0	1,100	25,100	37,600
2	14,500	27,900	26,800	2,200	1,100	3,300	2,200	10,000	20,100
3	13,200	63,700	23,100	3,300	0	1,100	3,300	36,300	17,600
4	20,200	53,900	38,200	2,200	0	1,100	6,700	42,600	26,900
5	39,000	31,000	16,200	4,000	0	0	8,100	57,900	43,100



図B　佐助ヶ谷周辺遺跡のプラントオパール分布図

2）分析結果

同定・計数された各分類群のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（表２）、それらの分布を図２に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果、全試料よりイネのプラント・オパールが10,000個以上検出され、試料５では40,000個近くに達している。最も多く検出されたのはネザサ節型で、次いでウシクサ族・クマザサ属型が多く、その他、キビ族・シバ属がみられ、ヨシ属は試料２でわずかに得られただけである。

3）稲作について

以上のように、全試料よりイネのプラント・オパールが10,000個以上検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネのプラント・オパールが試料１ｇ当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原　1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。よって、佐助ヶ谷遺跡における稲作の可能性は高いと検出個数からは判断される。また、近接する今小路西遺跡において近世の水田遺構が検出されており、その土相も佐助ヶ谷遺跡と同様であることなどからも佐助ヶ谷遺跡における稲作の可能性を支持するものと考える。このように、江戸時代の佐助ヶ谷遺跡周辺では稲作が行われていた可能性が高く、いっしょに検出されているキビ族はタイヌビエなどの水田雑草と推測され、シバ属は畦などの比較的乾いたところに生育していたものと思われる。また、花粉化石の多くは分解・消失している可能性が高く、こうした環境は当時乾陸化していたと推測され、この稲作はかなり乾いた環境（乾田？）で行われていたと思われる。

なお、周辺台地・丘陵部ではネザサ節型のササ類（アズマネザサ・ゴキダケなど）やウシクサ属（ススキ・チガヤなど）が生育する草地が広がっていたとみられる。これは、中世以降の森林破壊により広がった空地にネザサ節型のササ類やウシクサ族が侵入したためと推測される。

また、中世の試料５においてはさらに多くのイネのプラント・オパール（機動細胞珪酸体）が検出され、連なった状態で検出されるものもあり、イネ属型単細胞珪酸体も多く認められる。こうした傾向はキビ族やウシクサ族にもみられ、試料には炭化物が多く含まれていることから、稲わらなどが焼かれ灰化したものが多く混入しており、その結果、イネの機動細胞珪酸体などが多く、連なった形状で検出されたと推測される。

５．まとめ

中世の佐助ヶ谷遺跡周辺丘陵部はスギ林・照葉樹林やニヨウマツ類・コナラ亜属などの二次林がわずかにみられる貧弱な森林植生であった。

江戸時代の植生については多くの花粉化石が分解・消失している可能性が高く、当時の植生については言及できない。

植物珪酸体分析から江戸時代の遺跡周辺は稲作が行われていた可能性が示された。また、遺跡周辺丘陵部においてはネザサ節型のササ類やウシクサ族が生育する開けた草地の存在が推測される。

引用文献

藤原宏志（1976） プラント・オパール分析法の基礎的研究（1） －数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学、9、p.15-29.

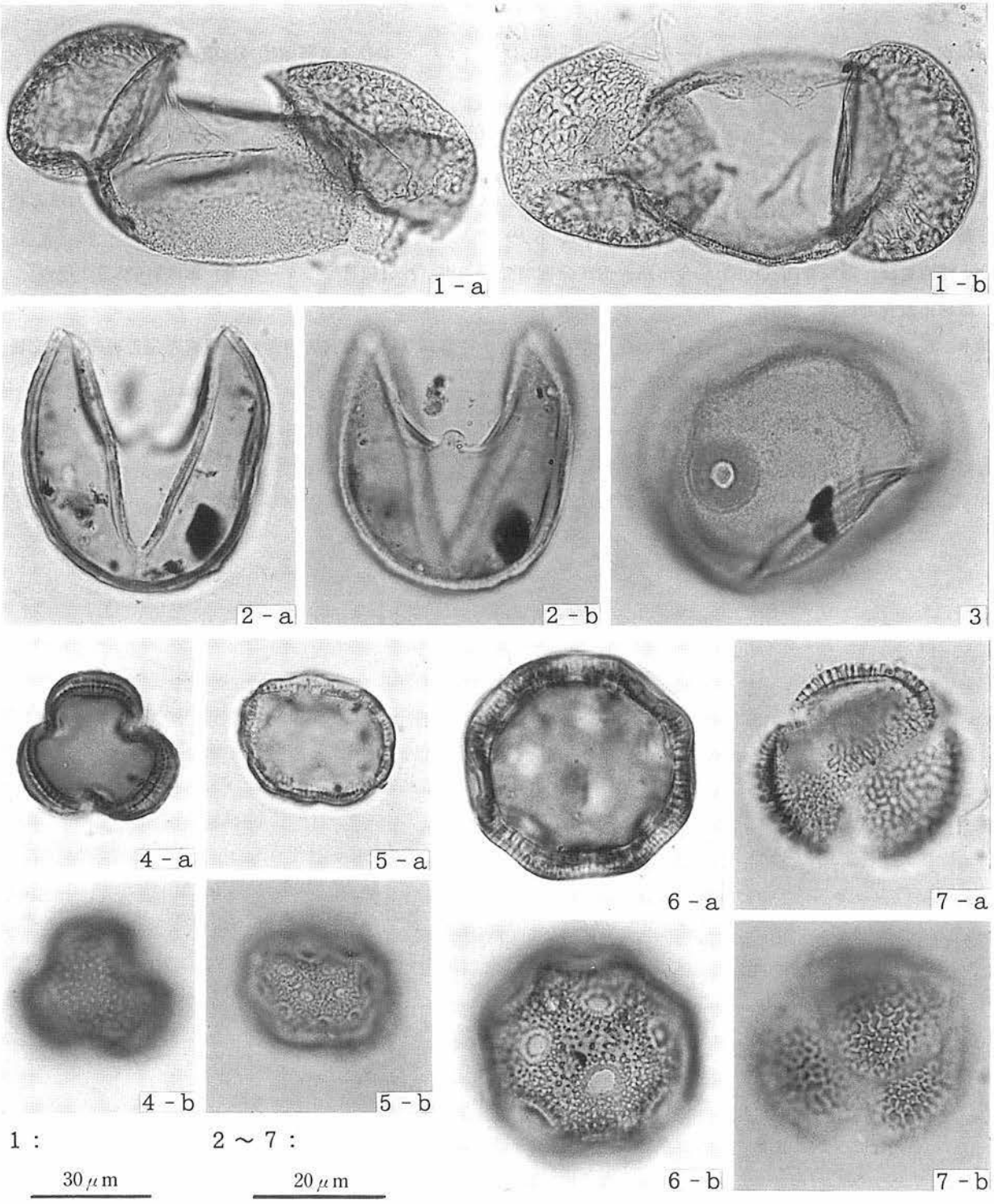
藤原宏志（1984） プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－. 考古学ジャーナル、227、p. 2－7.

藤原宏志・佐々木彰（1978） プラント・オパール分析法の基礎的研究（2） －イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－. 考古学と自然科学、11、p. 9-20.

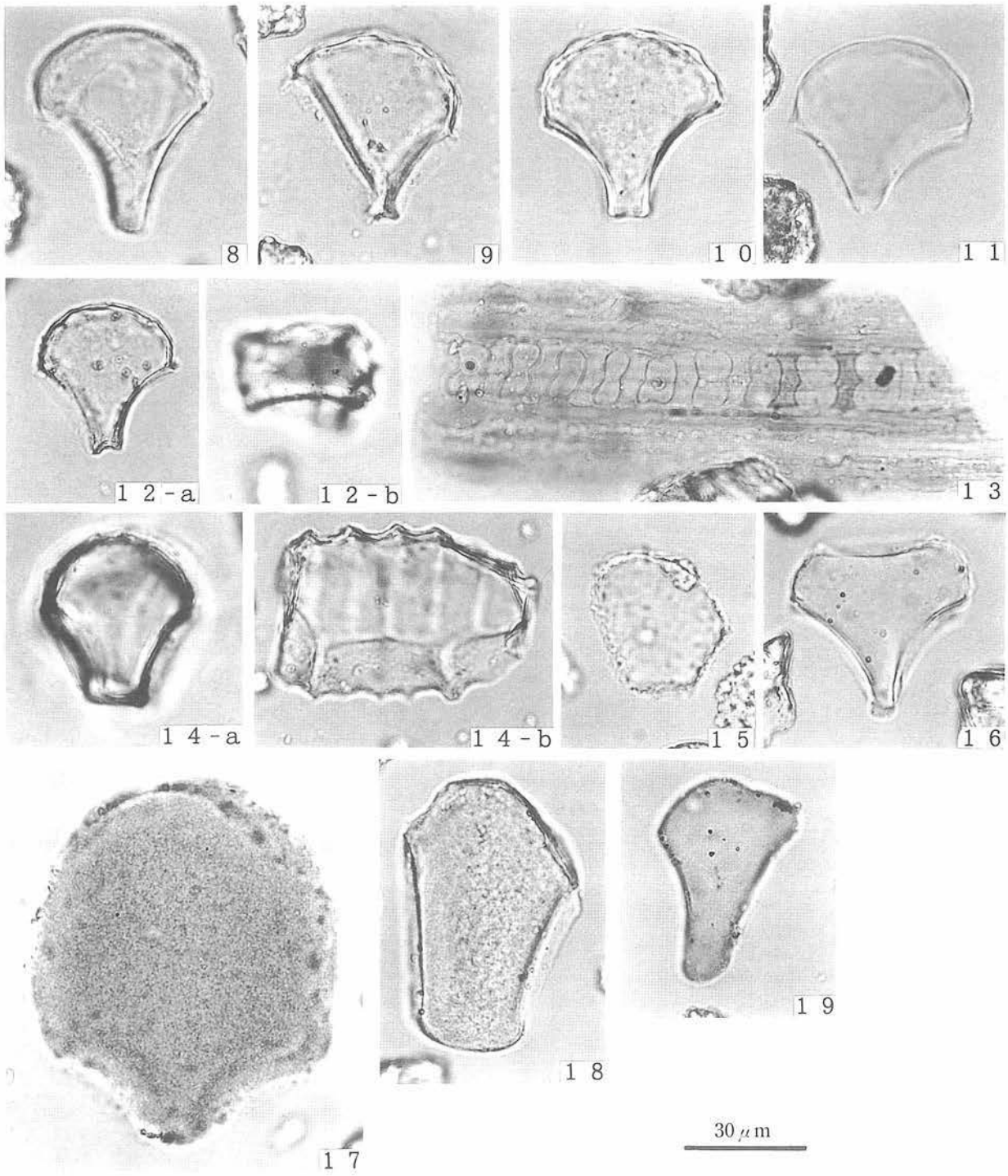
今小路西遺跡発掘調査団（1993） 今小路西遺跡発掘調査報告書（社会福祉センター用地・御成町625番2地点）. 鎌倉市教育委員会、246p.

鈴木 茂（1993） 鎌倉市佐助ヶ谷遺跡の花粉化石. 佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書－第1文冊－、佐助ヶ谷遺跡発掘調査団、p.407-430.

図版Ⅰ



図版Ⅰ　佐助ヶ谷遺跡の花粉化石
1：マツ属複維管束亜属　PLC.SS　2027　試料5
2：スギ属　PLC.SS　2024　試料4
3：イネ科　PLC.SS　2022　試料4
4：ヨモギ属　PLC.SS　2021　試料4
5：アガサ科ーヒユ科　PLC.SS　2028　試料5
6：ナデシコ科　PLC.SS　2023　試料4
7：アブラナ科　PLC.SS　2025　試料4



図版Ⅱ　佐助ヶ谷遺跡のプラント・オパール
8～12：イネ（8～11、12—a：断面、12—b：裏面）
　8：試料1、9：試料2、10：試料3、11：試料4、12：試料5
13：イネ属型単細胞珪酸体列　試料2
14：ネザサ節型（14—a：断面、14—:側面）試料5
15：クマザサ属型（断面）試料2
16：シバ属（断面）試料2
17：ヨシ属（断面）試料2
18、19：ウシクサ属　18：試料2、19：試料4

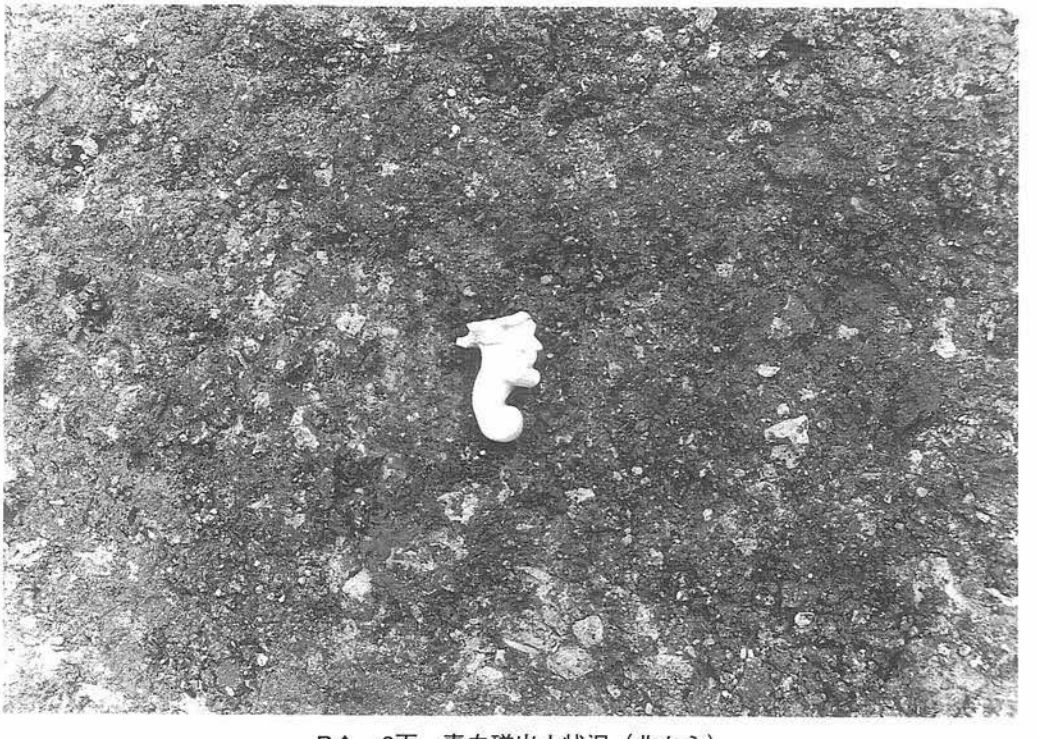
写　真　図　版

◀A 近世田（西から）

◀B 1面全景（南から）

PL 2

A▲　1B面　かわらけ溜り（南から）



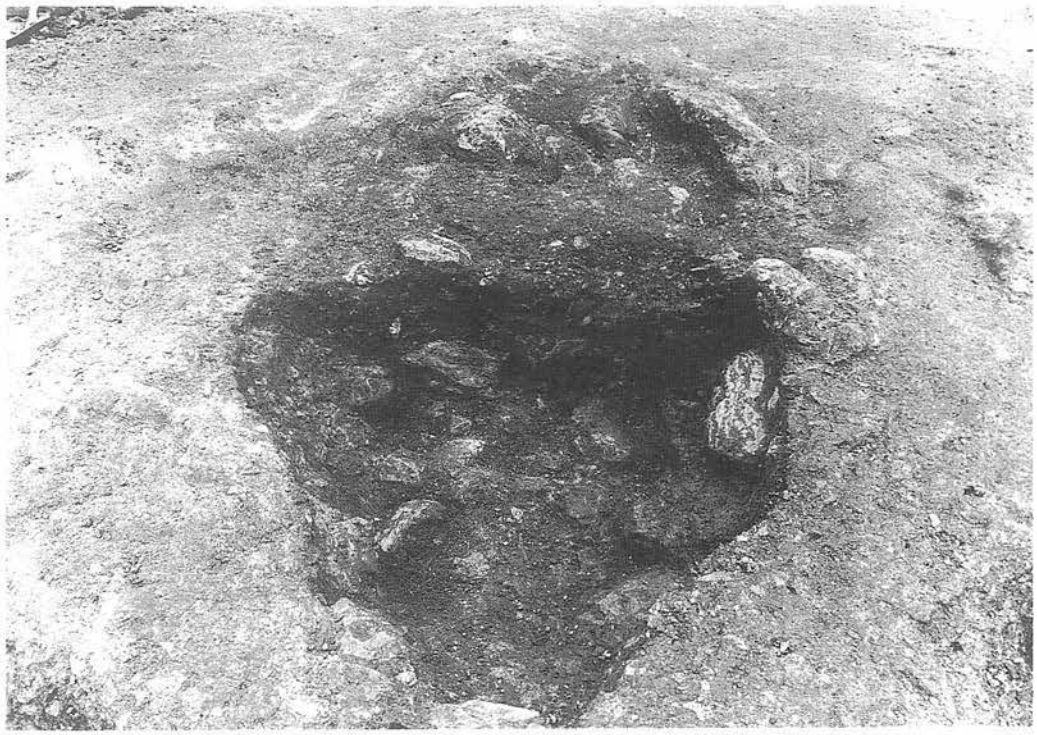
B▲　2面　青白磁出土状況（北から）

◀A 2面土丹敷（北から）

◀B 2面かわらけ溜り3（北から）

A▲　2面　かわらけ溜り4（西から）

B▲　2面　土壙5・7・9（南から）



A▲　2面　土壙3（南から）

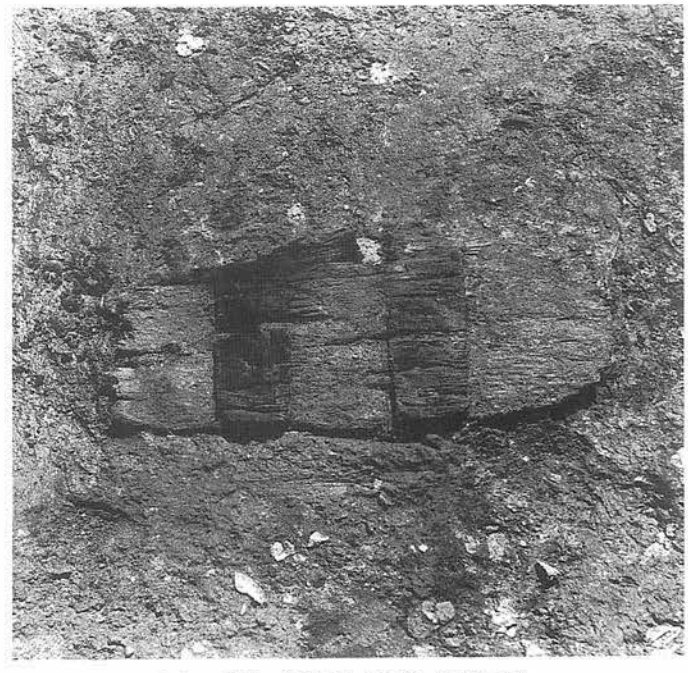
B▲　2面　土壙4（北から）

PL 6

◀A 2面北部ピット（柱列）群（西から）

◀B 2面全景（南から）

A▲　3面　かわらけ溜り5（北から）

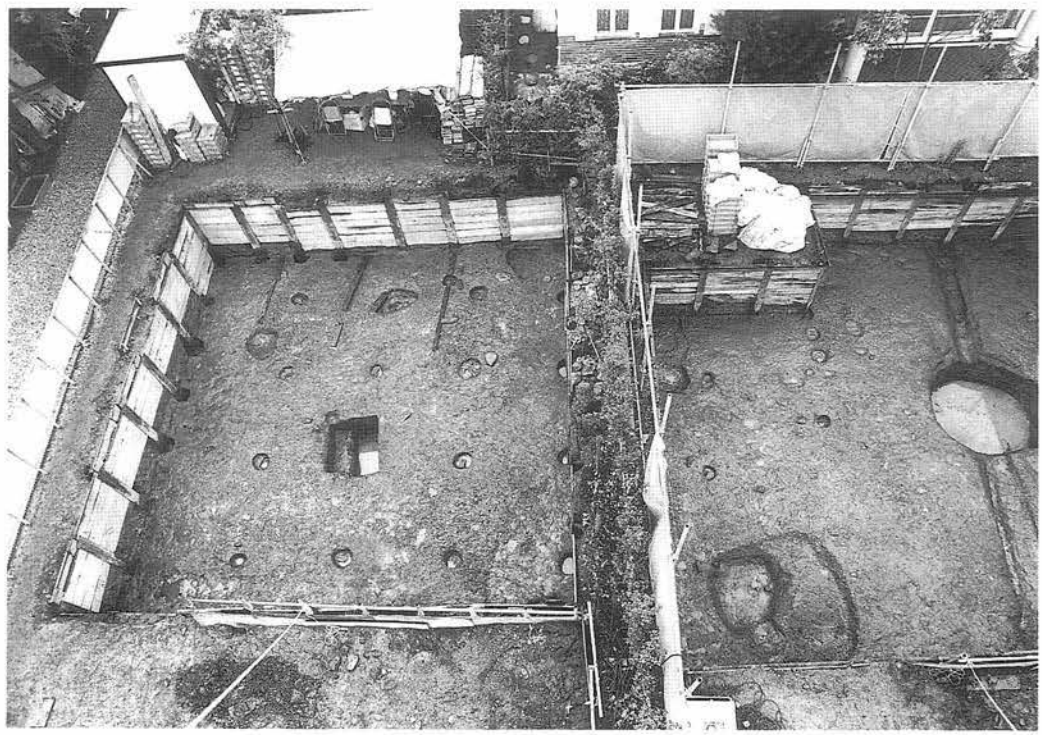


C▲　3面　下駄出土状況（西から）

B▲　3面　曲物出土状況（東から）

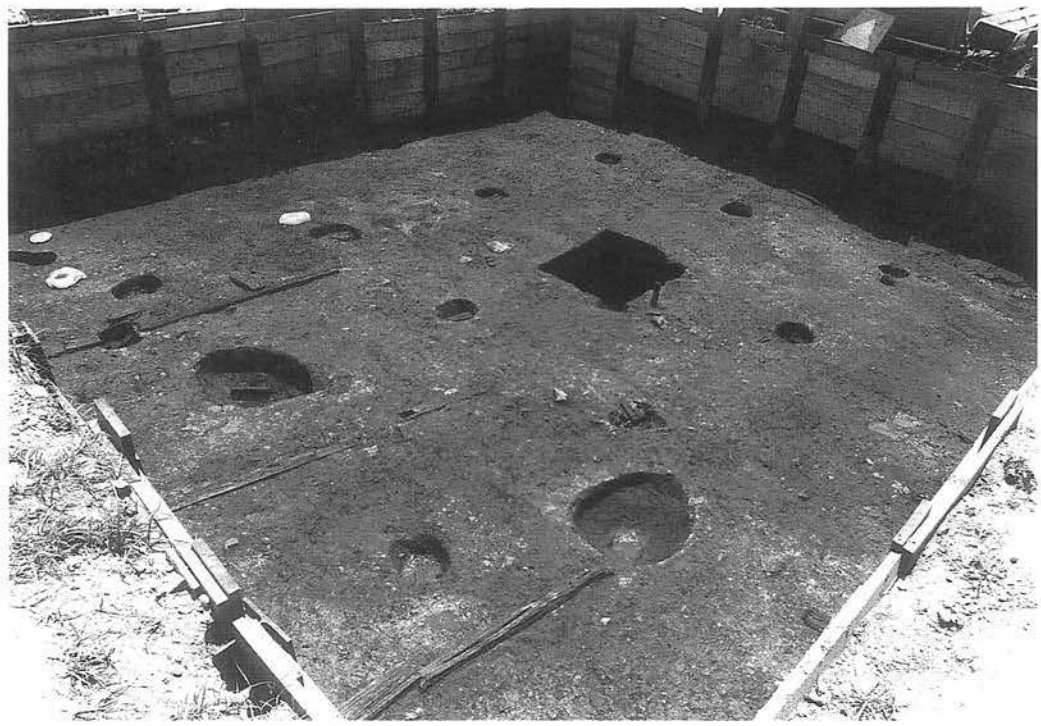
PL 8

A▲　掘立柱建物2（南から）



B▲　3面　全景（南より）

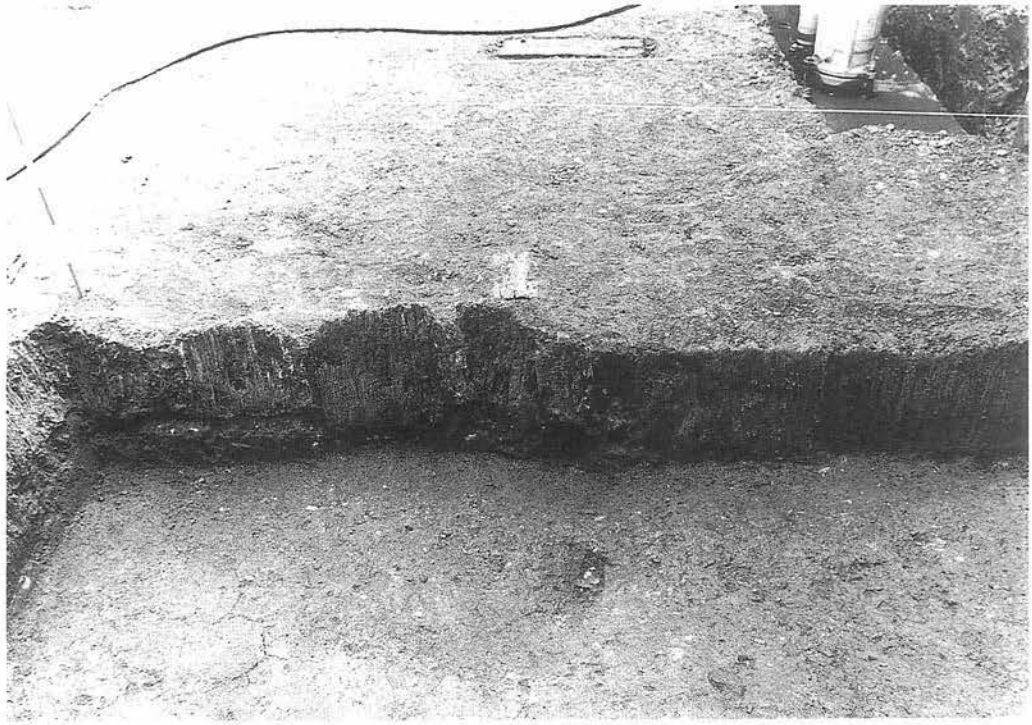
◀A 4面礎石建物（西から）



◀B 4面同上全景（北西から）

A▲　4面板囲い状建物と礎板列（西から）

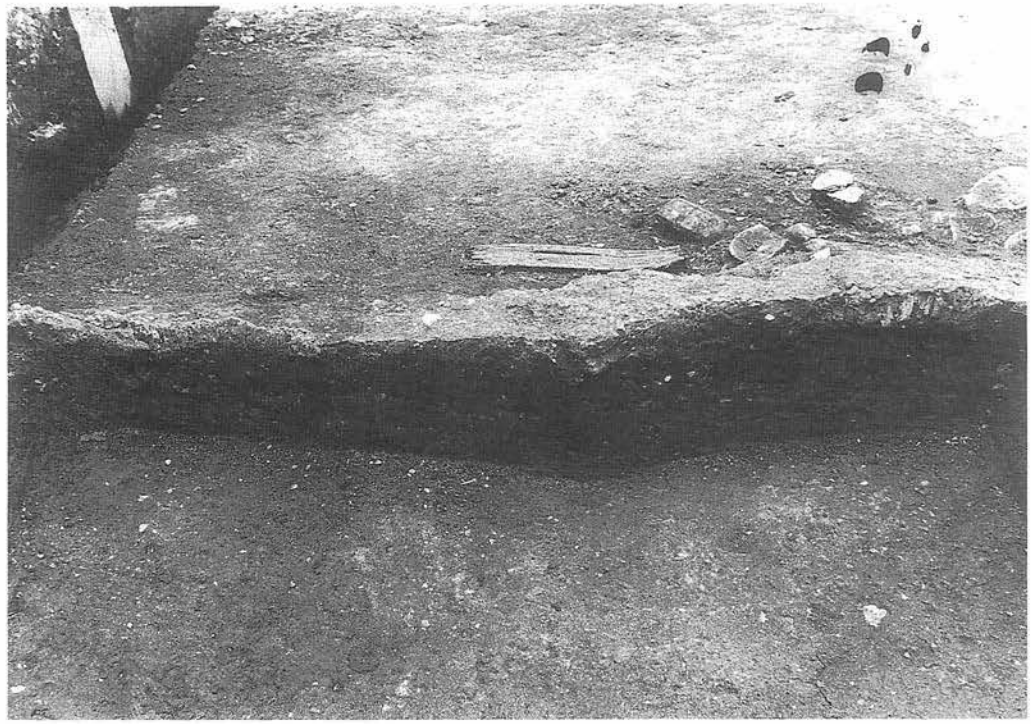
B▲　同上（南から）



A▲　4面板囲い状建物（南壁）

B▲　同上（東壁）

PL12



A▲　4面板囲い状建物（北壁）

B▲　4面かわらけ溜り7（北から）

A▲　4面かわらけ溜り6（北から）

B▲　同上近景（北から）

PL14

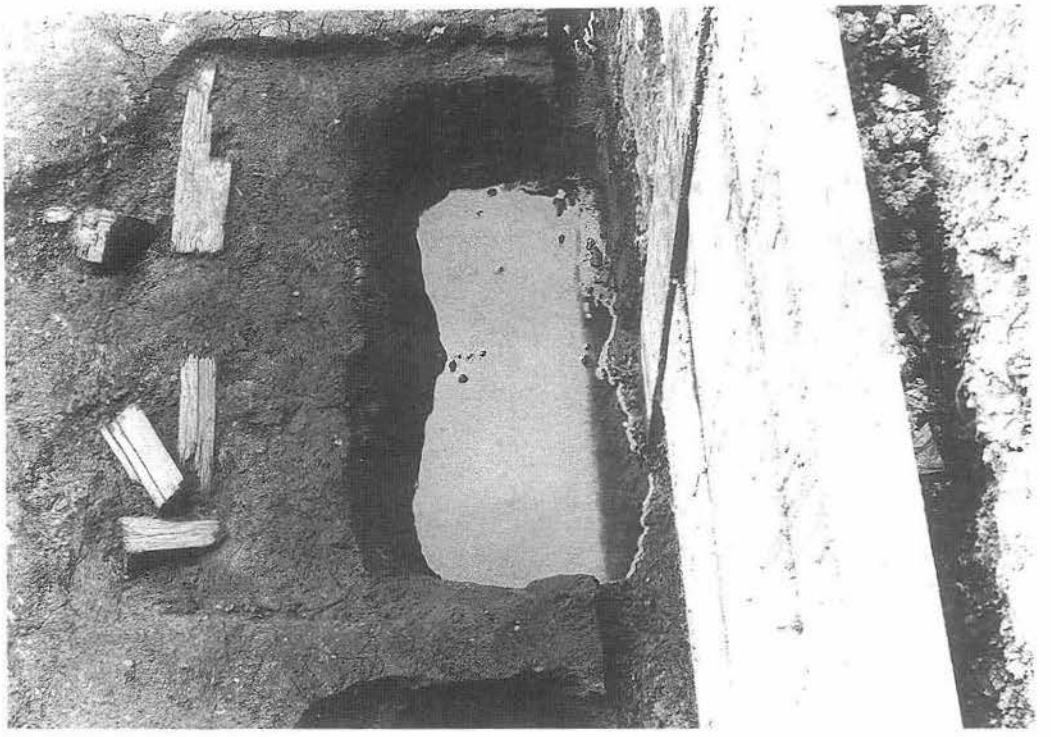
◀A 4面土壙13・14・15（西から）

◀B 4面土壙13（北から）

A▲　4面土壙14（北から）

B▲　土壙14セクション（西から）

PL16



A▲　4面土壙15（北から）

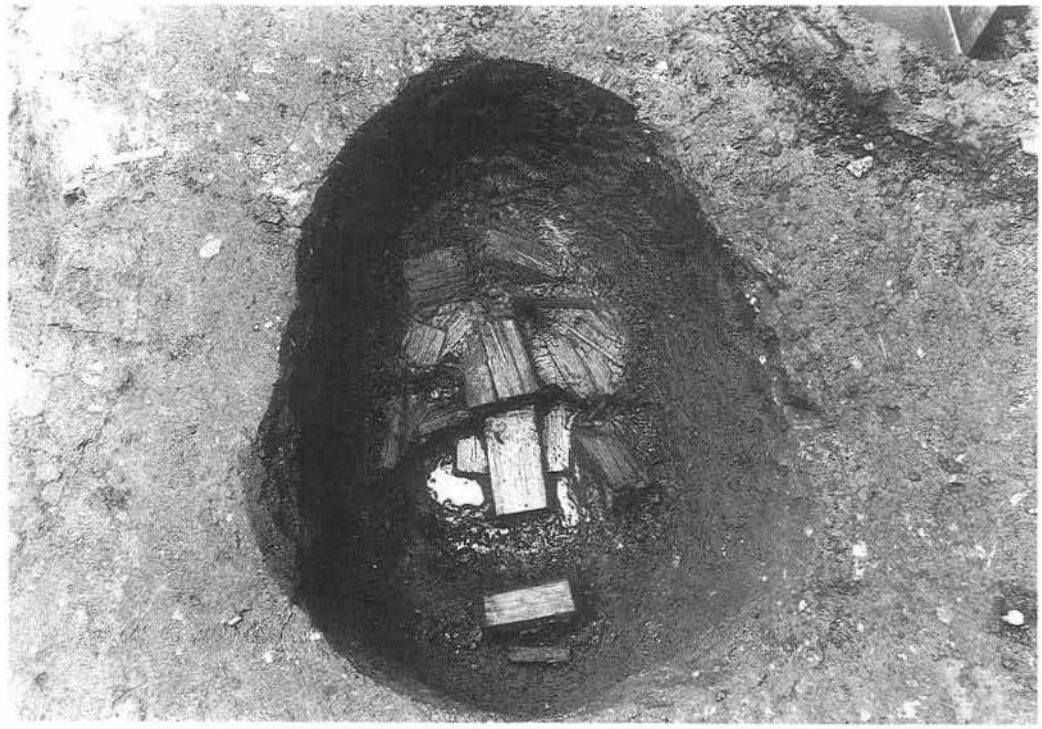
B▲　土壙15セクション（東から）

A▲　4面柱穴77（北から）

B▲　4面全景（南から）

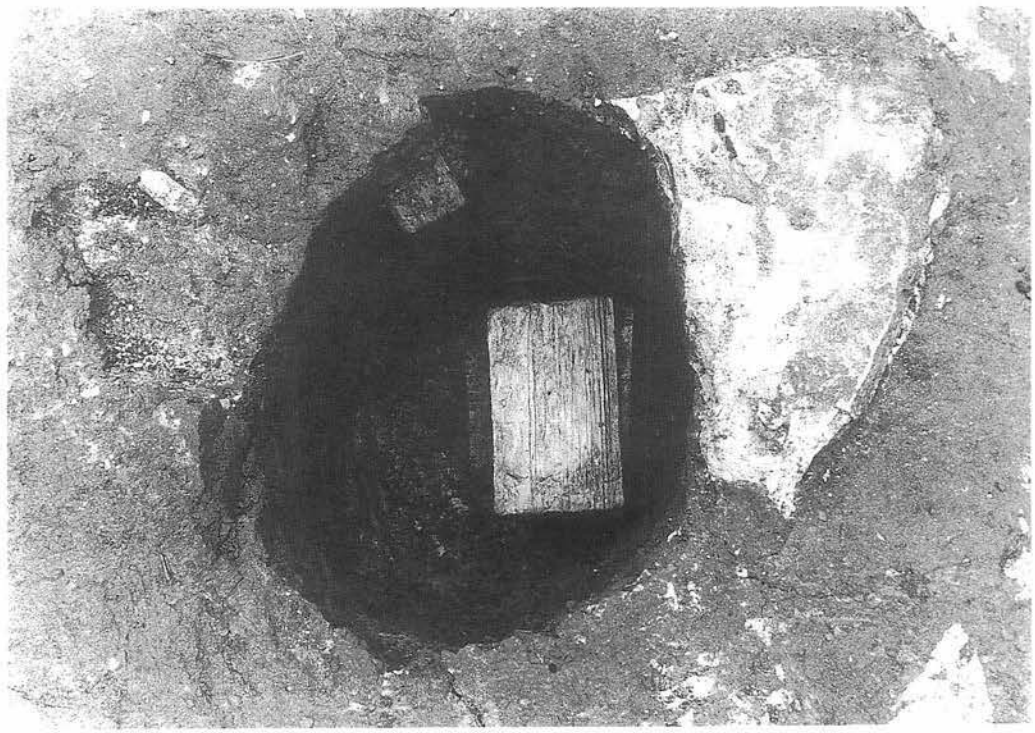
PL18

A▲　4B面掘立柱建物4（柱穴99）（南より）

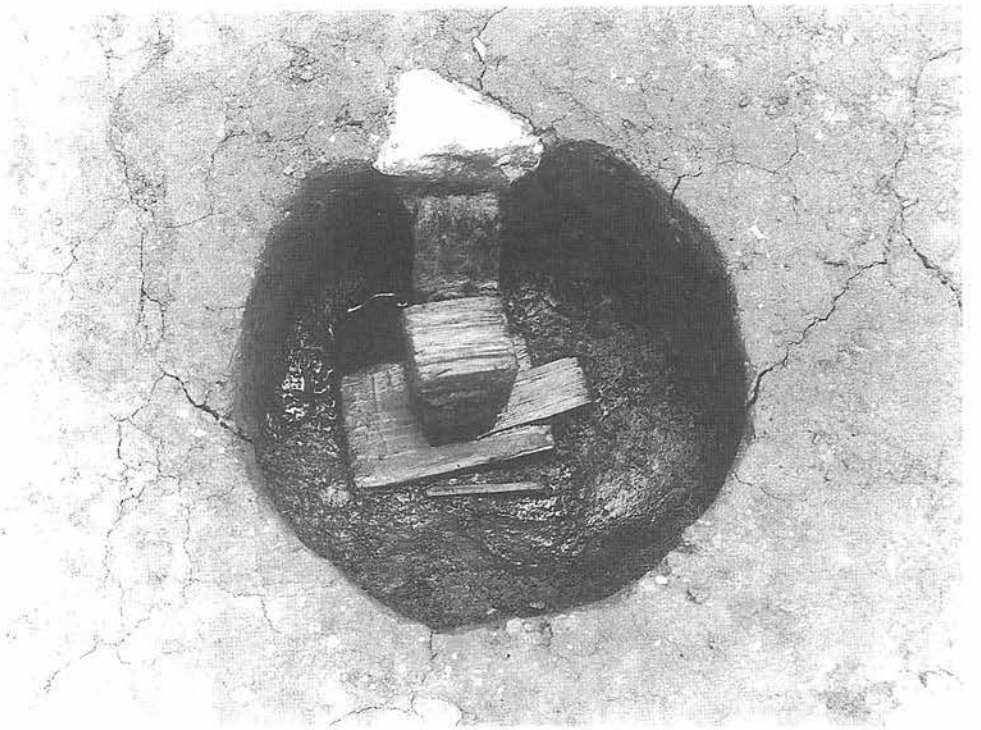


B▲　同上（柱穴100）（東より）

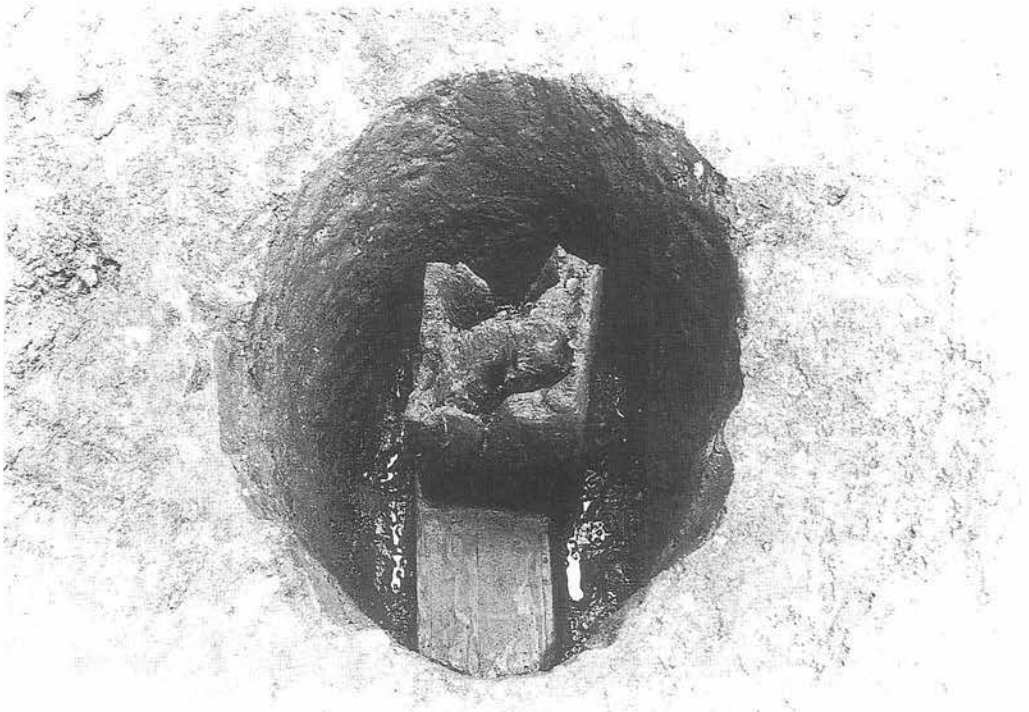
A▲　4B面掘立柱建物3（柱穴82）（北から）



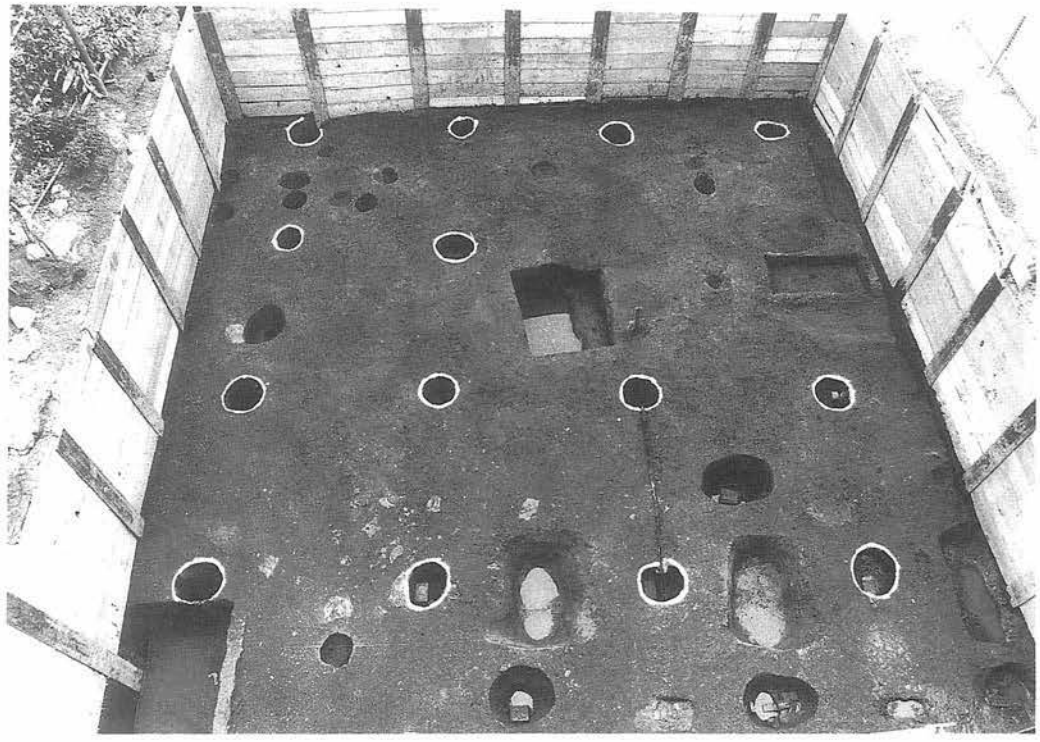
B▲　同上（柱穴76）（南から）



A▲　4B面掘立柱建物3（柱穴88）（東から）



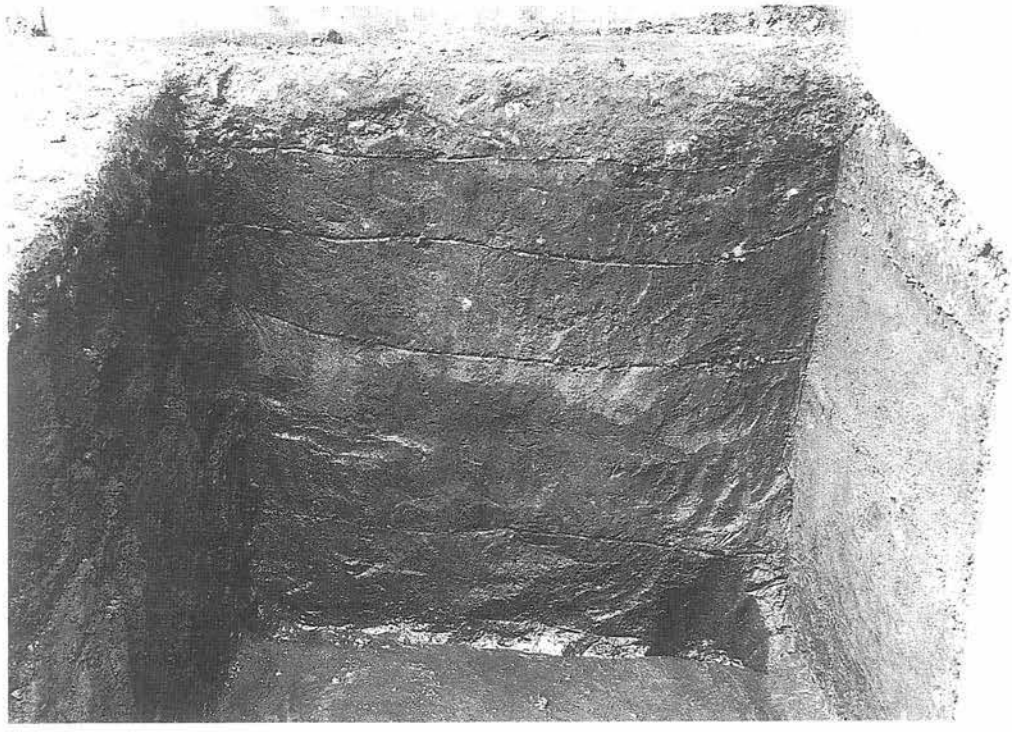
B▲　同上（柱穴96）（東から）



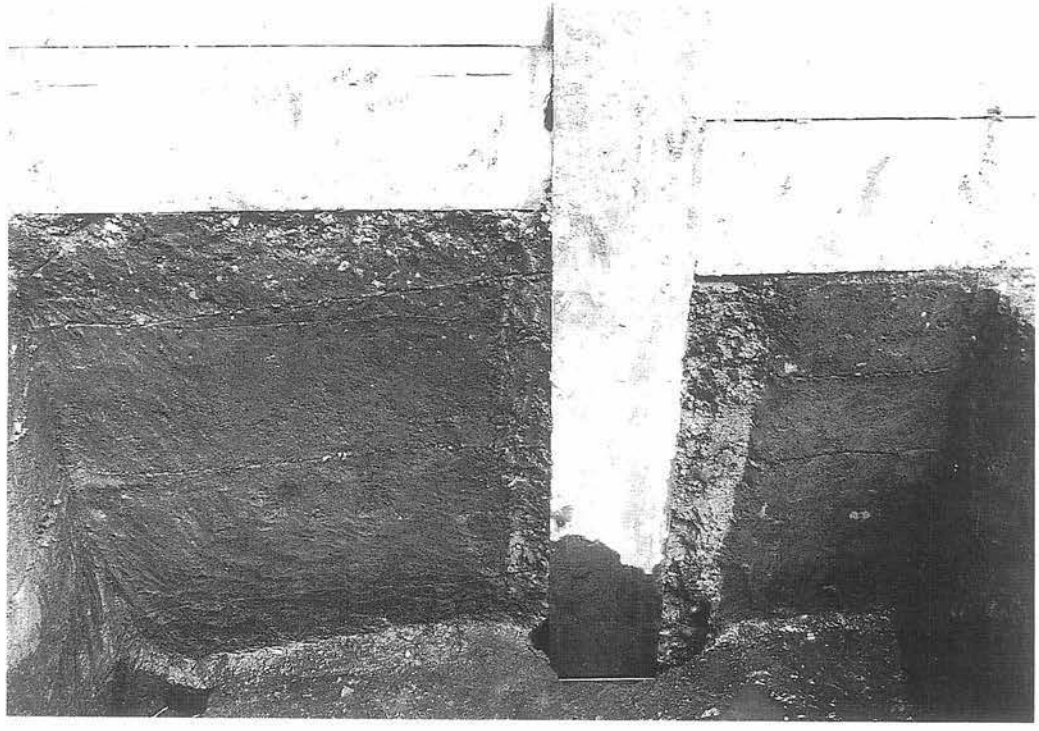
A▲　4B面掘立柱建物3（北から）

B▲　4B面全景（北から）

P L 22



A▲　北東部トレンチ（北壁）



B▲　同上（東壁）

PL23

9-1

9-2

9-6

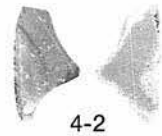
9-8

9-9
表土層

4-1

4-4

4-5


4-2

4-3

近世田

4-7

4-9

4-10

土壙1・2

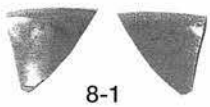
6-1

6-2

6-3

6-5

かわらけ溜り1


8-1

8-2

8-3

8-4

8-5

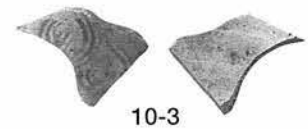
8-13

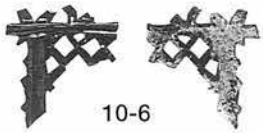
1面（1）

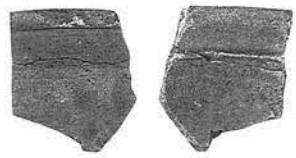
10-1

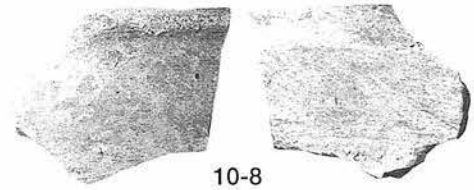
10-4

10-5

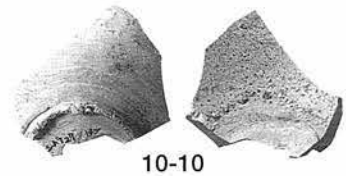

10-3


10-6


10-7


10-8

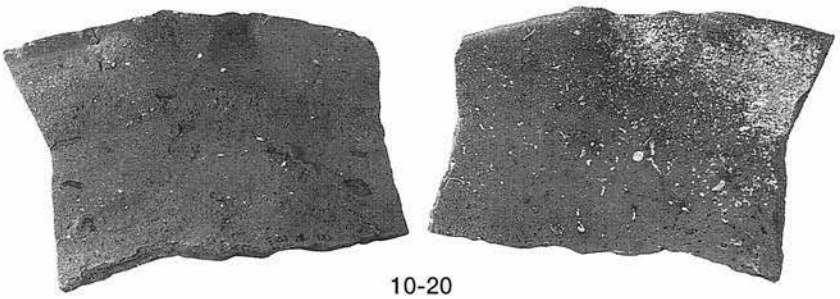
10-9


10-10

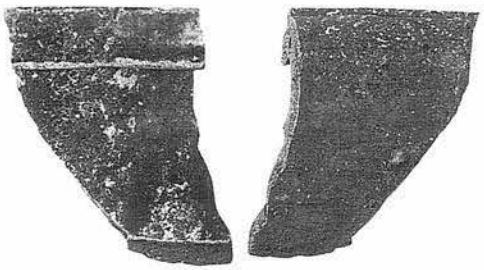
P L 24

1面（2）

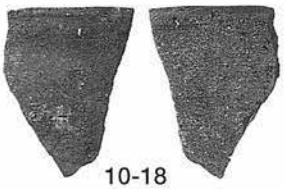
10-14



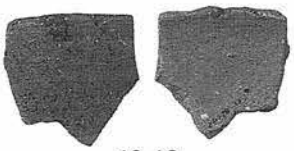
10-20



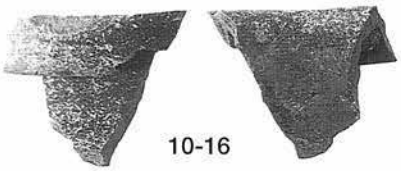
10-15



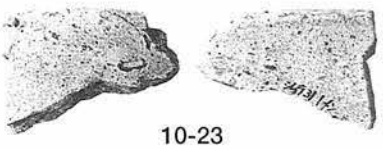
10-18



10-19



10-16



10-23

10-48

10-49

10-54

10-29

10-60

10-32

10-43

10-39

かわらけ溜り2（1）

13-4

13-8

13-10

13-11

13-22

13-29

13-37

13-42

13-47

13-50

13-55

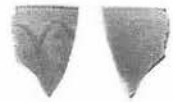
13-59

13-60

かわらけ溜り2（2）

14-1

14-2


14-3

14-4

14-5

14-8

14-9

14-10

14-11

14-12

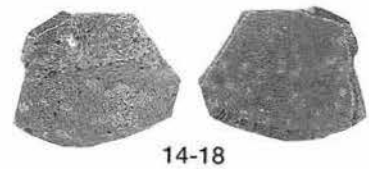
14-13

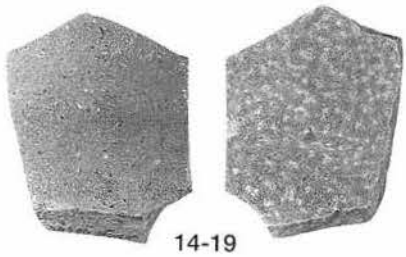
14-14

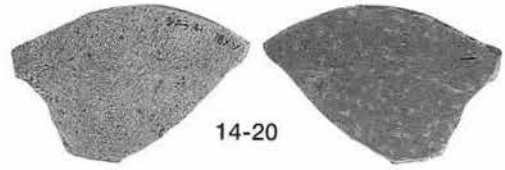
14-15

14-16

14-17

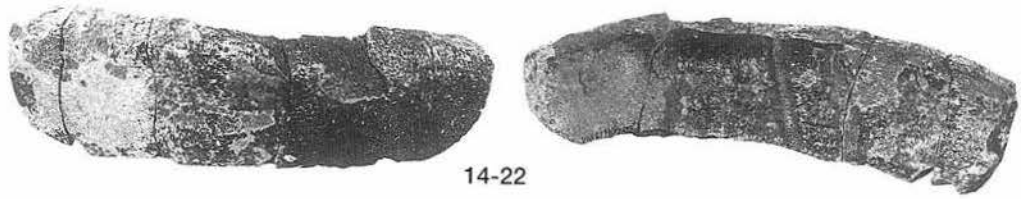

14-18


14-19

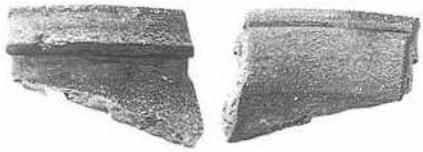

14-20

1B面（1）

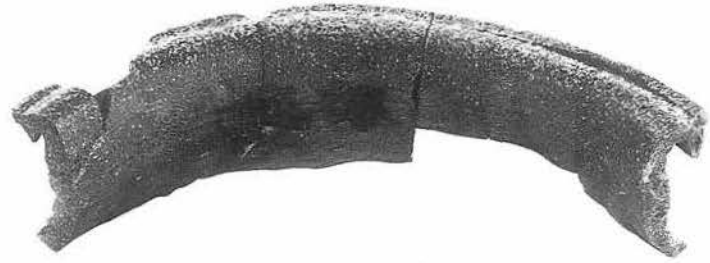
P L 26

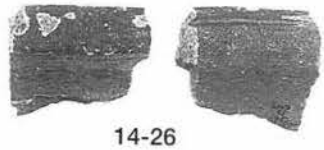


14-22

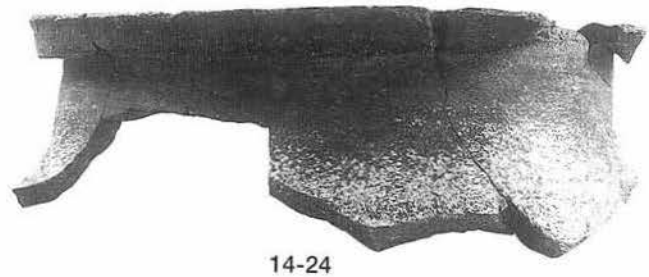


14-23



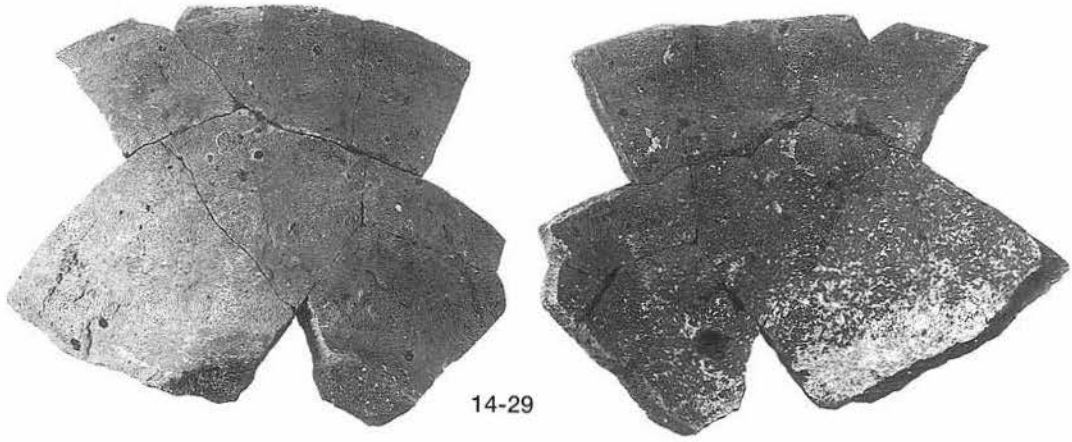


14-26

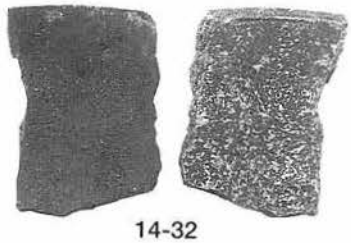


14-24

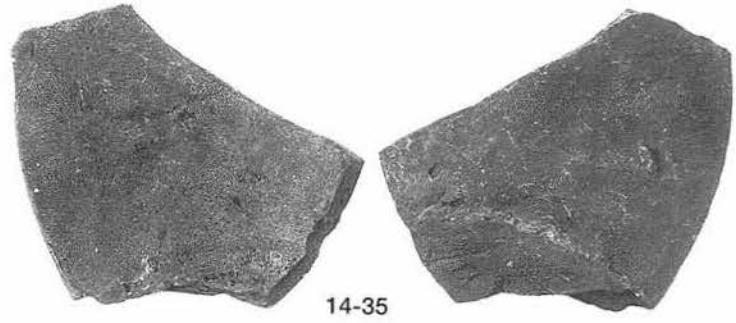
14-28



14-29

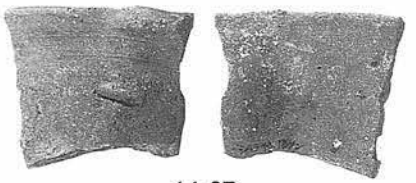


14-32

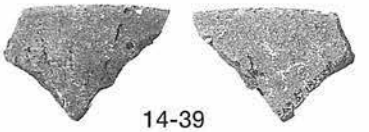


14-35

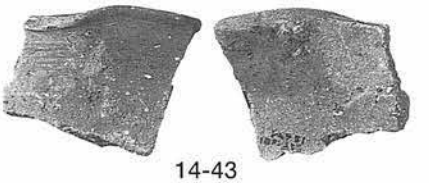
1B面 (2)



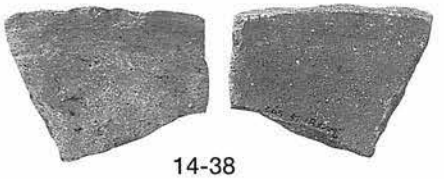
14-37



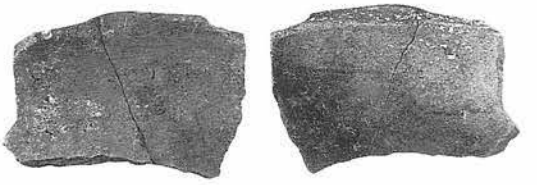
14-39



14-43



14-38



14-44

15-38

15-43

15-57

15-34

15-61

15-67

15-69

15-70

15-80

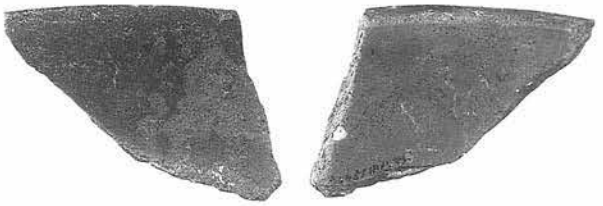
15-89

15-91

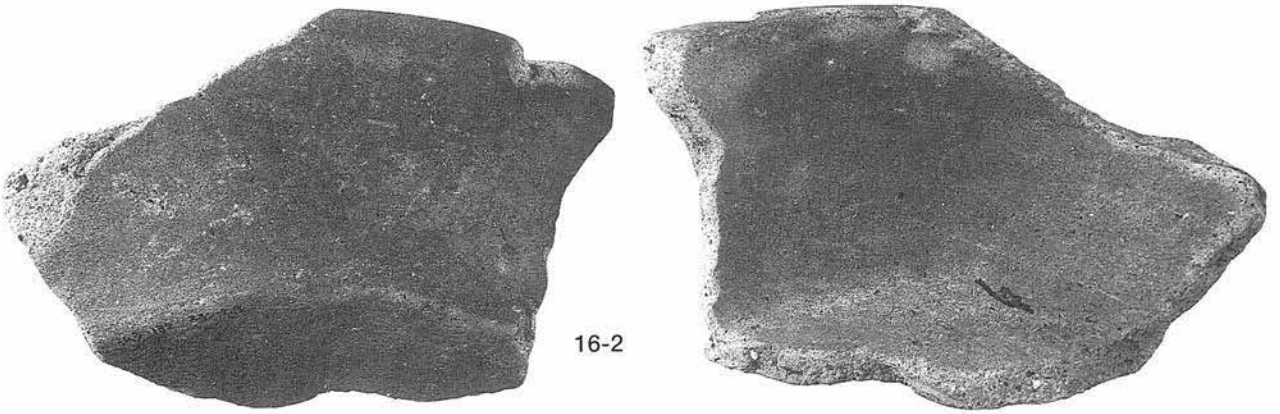
1B面（3）

P L 28

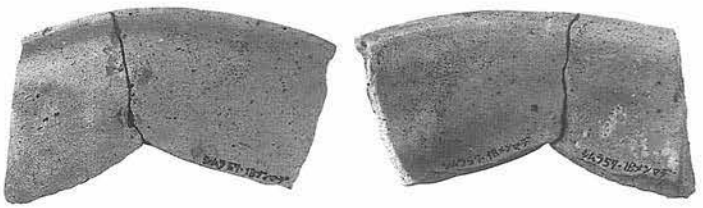
1B面（4）



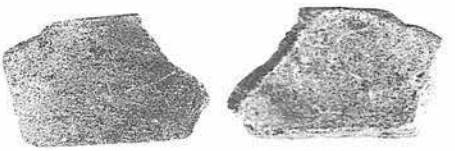
16-1



16-2

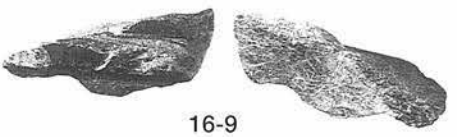


16-5



16-6

16-7



16-9

16-10

16-12

16-13

16-14

16-15

16-16

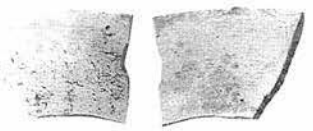
16-17

1B面（4）

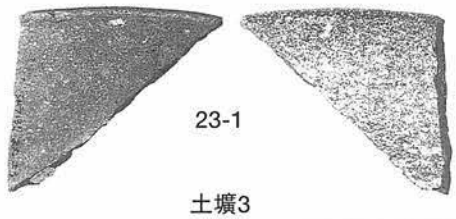
掘立柱建物1

19-1

柱列1



21-1


23-1

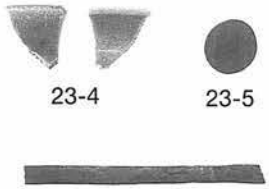
土壙3

23-16

土壙7

23-23

23-24


23-4

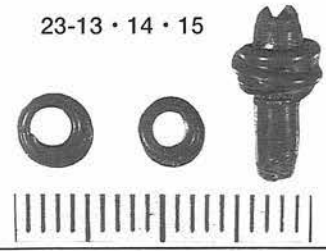
23-5

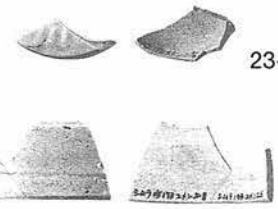
土壙5

23-7

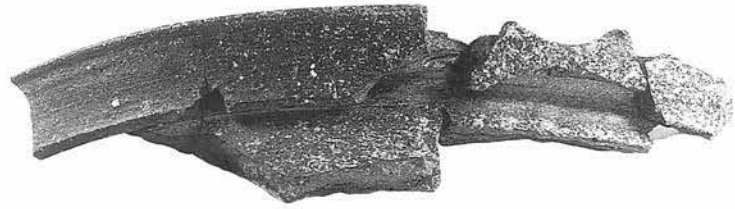
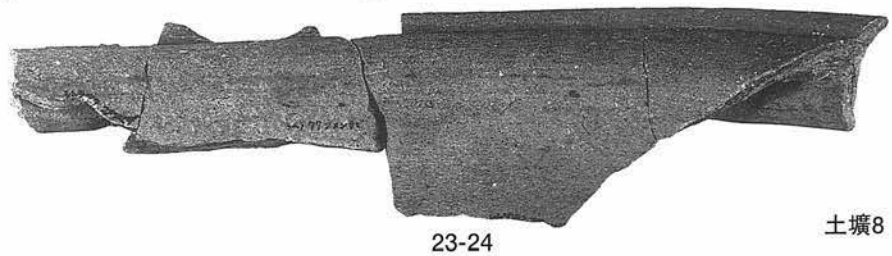
23-8

土壙6


23-13・14・15


23-21

23-22



23-24

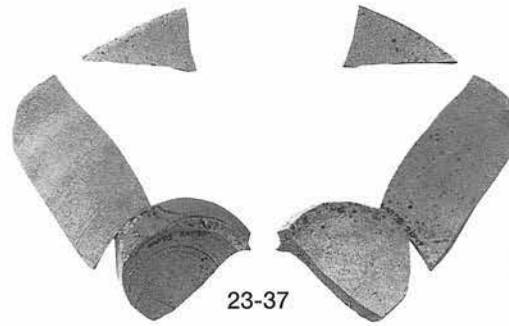
土壙8

23-26

23-27

23-30

土壙10


23-37

23-38

土壙9

23-36

25-1

25-2

25-4

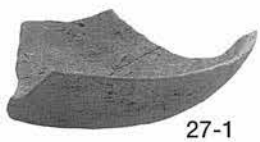
25-10

25-11

25-12

かわらけ溜り3

かわらけ溜り4


27-1

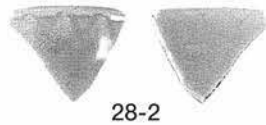
27-3

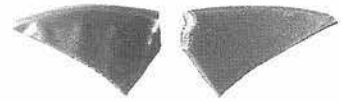
27-4

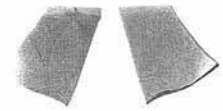
27-6

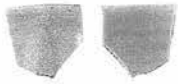
PL 30

28-1


28-2


28-3


28-4

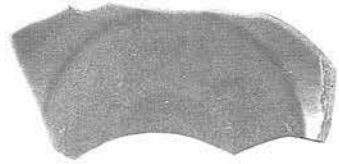

28-5

28-8

28-9

28-10

28-11



28-12

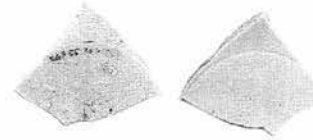
28-13

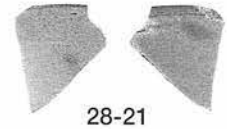
28-14

28-15

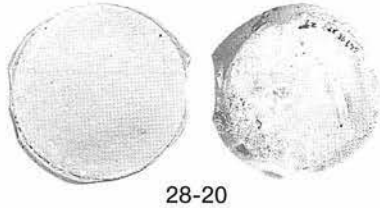
28-16

28-18


28-17

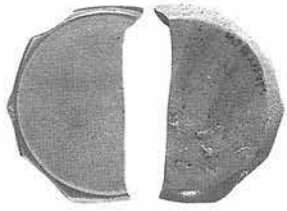

28-21

28-24


28-20

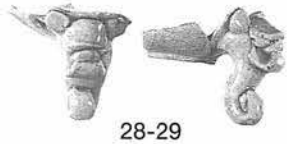
28-22

28-23

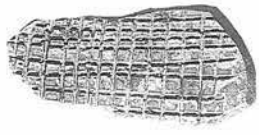

28-19

28-26

28-28


28-29

28-30



28-32

28-25

28-31

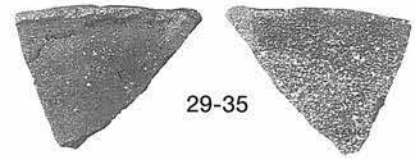
28-33

28-34

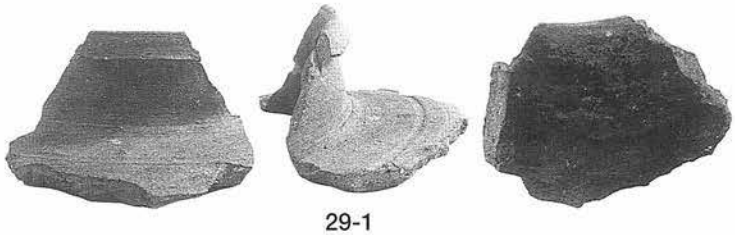
28-35

28-36

28-37

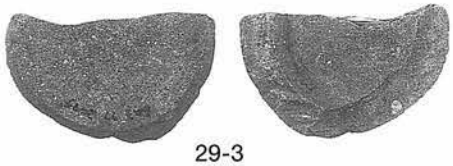

29-35

2面（1）



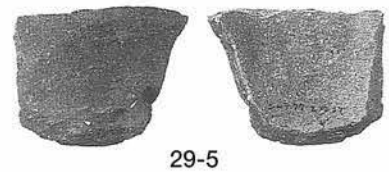
29-1

29-2

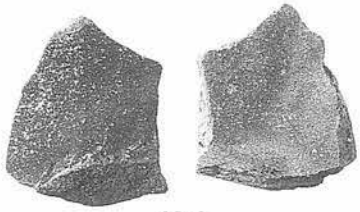


29-3

29-4



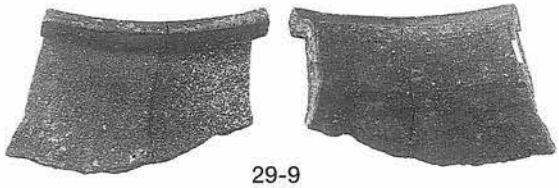
29-5



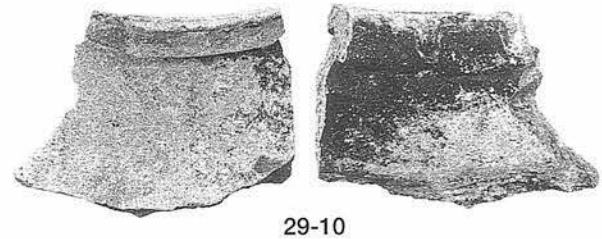
29-6

29-7

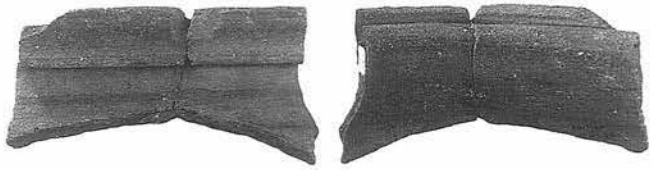
29-8



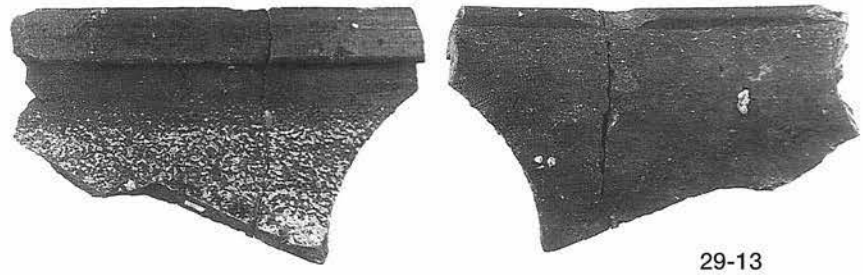
29-9



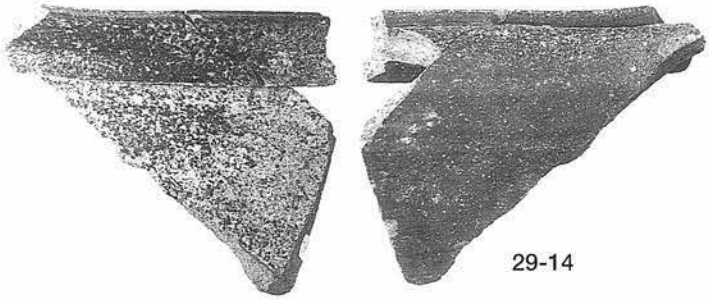
29-10



29-12



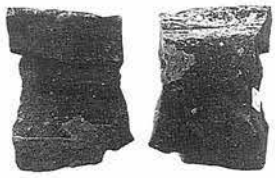
29-13



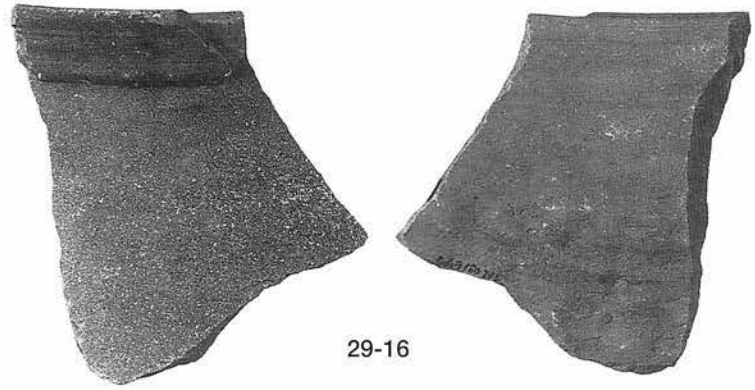
29-14

2面（2）

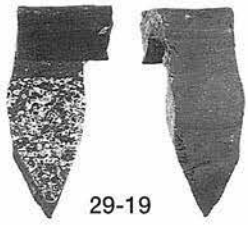
P L 32



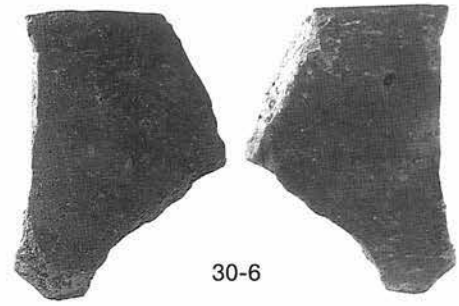
29-18



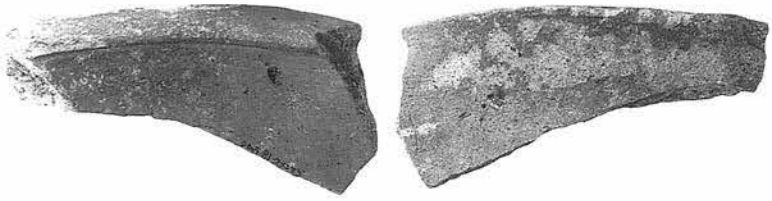
29-16



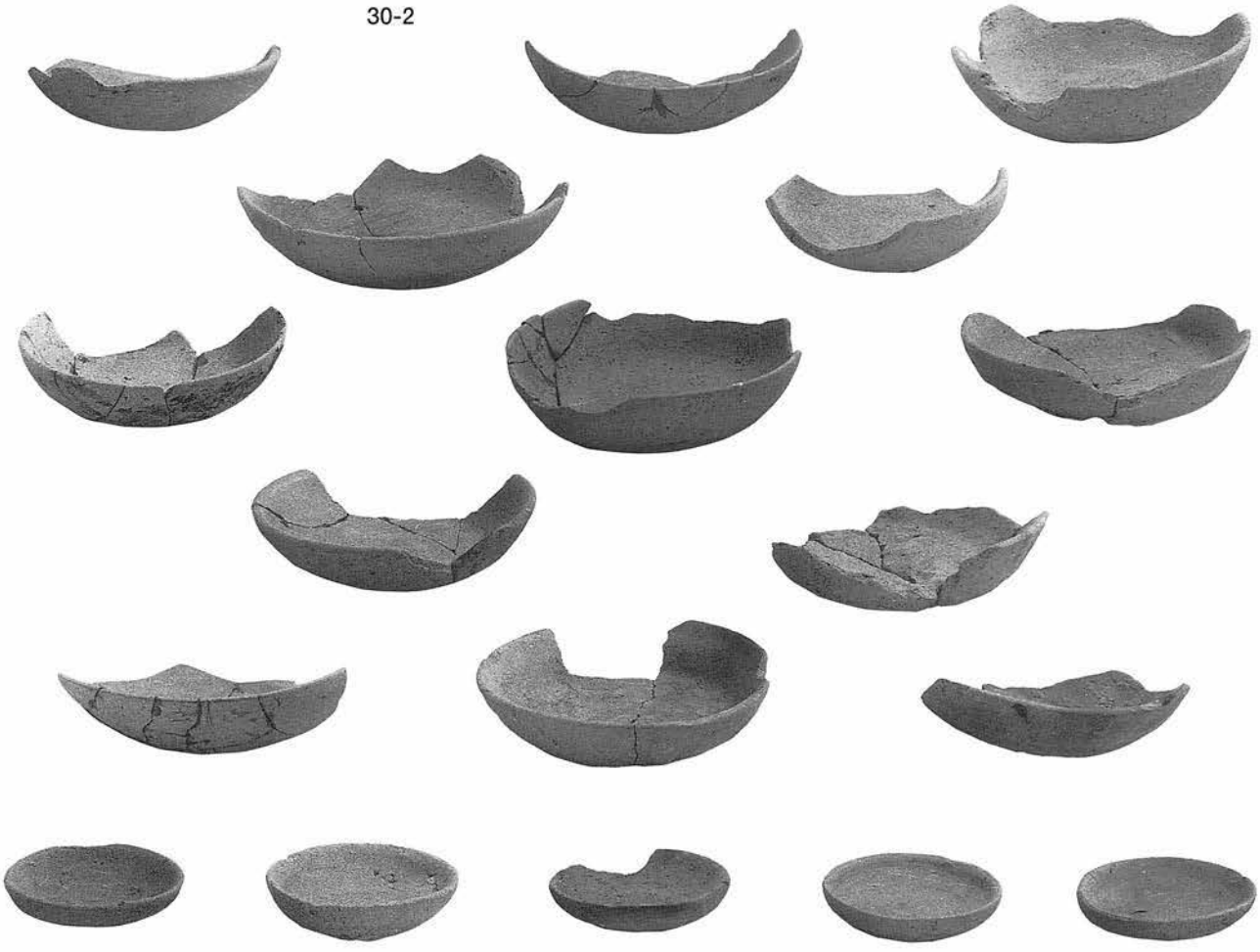
29-19



30-6



30-2



2面（3）

31-67

31-81

31-84

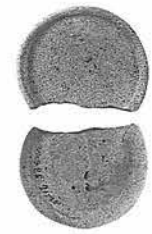
31-88

31-92

31-94

31-101

31-103


31-107

31-108

32-1

32-2

32-3

32-7

32-12

32-13

32-14

32-15

32-16

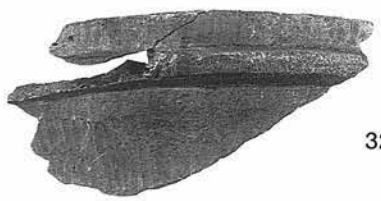
32-17

32-19

32-21

32-22

32-27



32-25

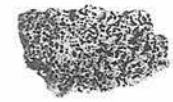
2面（4）

P L 34

36-1

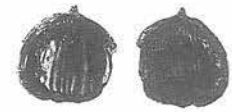
土壙11

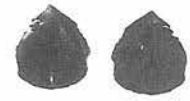
46-1



46-4

土壙14





土壙15

土壙13

かわらけ溜り5

38-1

38-3

39-16

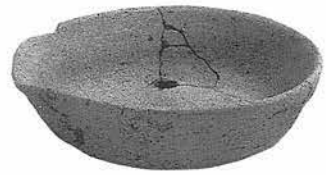
39-25

39-29

39-32

39-41

39-45



39-49

39-58

39-55

39-63

39-64

39-67

39-53

39-76

39-85

39-87

40-10

40-1

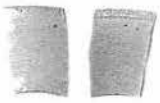
40-5

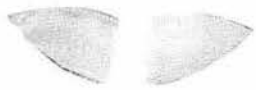
40-2

40-3

40-6

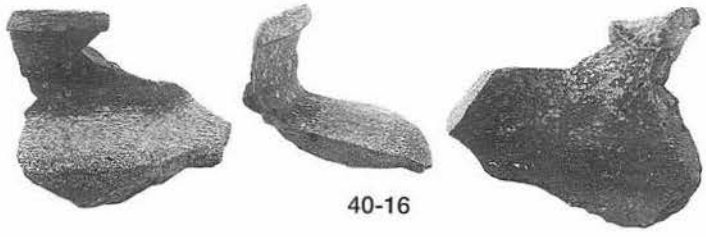
40-7


45-8


45-9

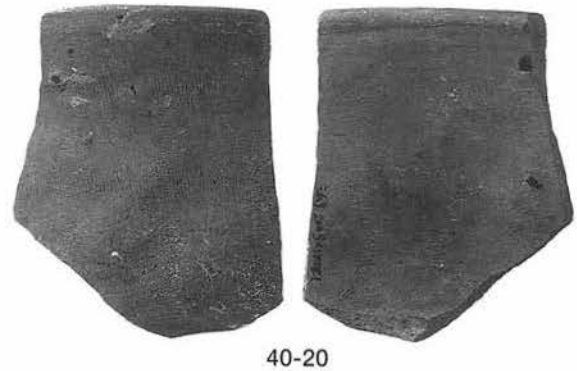
40-11

40-12


40-16

40-19

40-18


40-20

41-4

41-6

41-7

41-19

41-20

3面（1）

P L 36

41-25

41-26

41-29

41-38

41-47

42-6

42-9

42-19

42-37

42-56

42-62

42-64

42-69

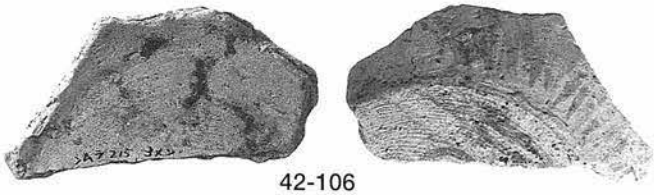
42-77

42-88

42-96

42-103

42-105

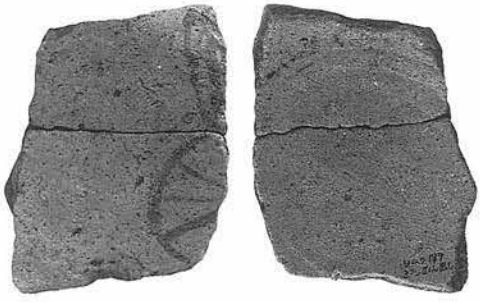


42-106

42-107

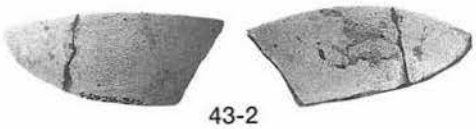
42-108

42-109



42-110

3面（2）



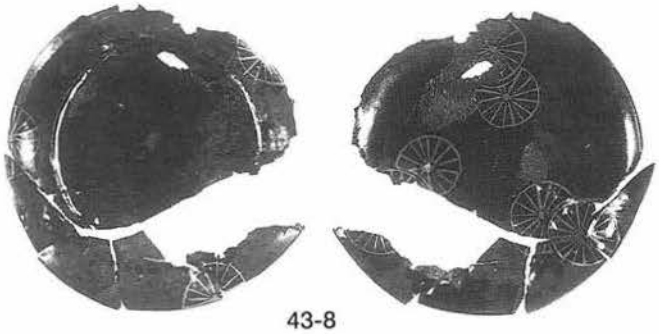
43-2

43-4

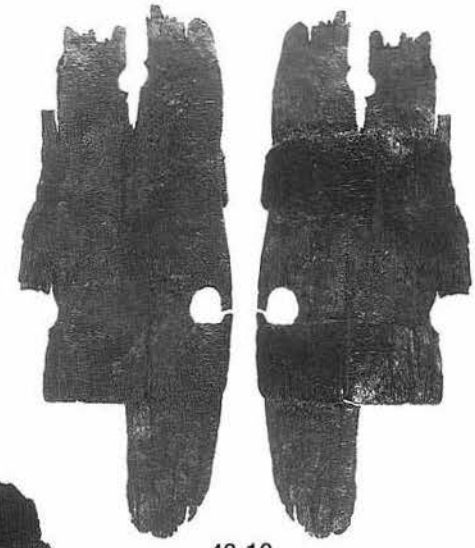
43-5

43-6

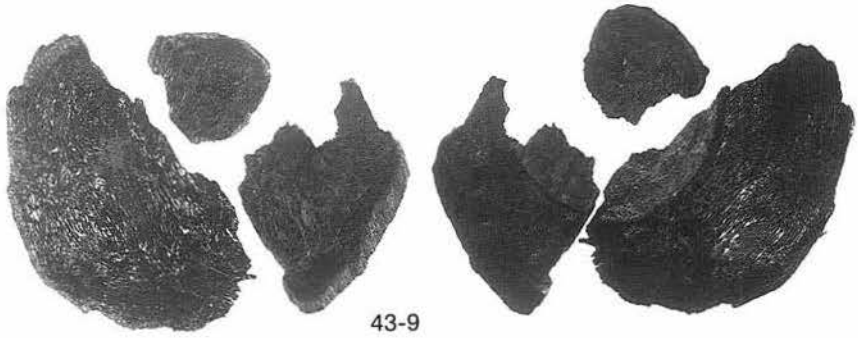
43-7



43-8



43-10



43-9

43-11

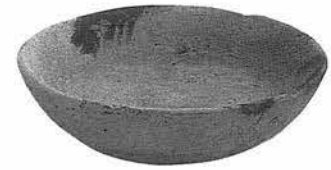
43-12

3面（3）

P L 38

52-5

52-9



52-13

52-18

52-22

52-35

52-29

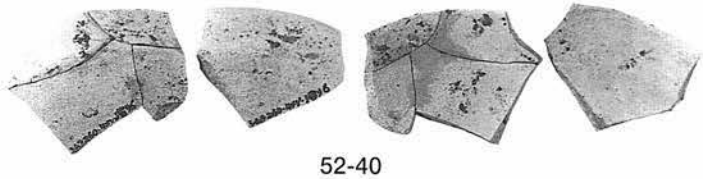
52-34

52-23

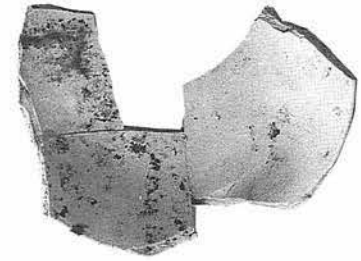
52-37

52-38

52-39



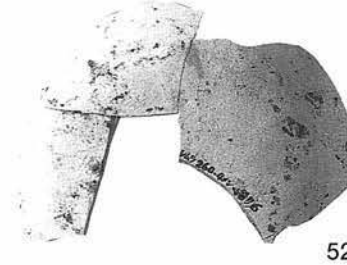
52-40



52-41

52-43

かわらけ溜り6



52-42

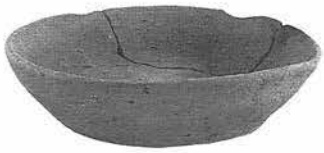
50-1

50-4

かわらけ溜り7

50-5

50-6


53-7

53-25

53-27

53-58

54-2

54-3

54-24

54-43

54-45

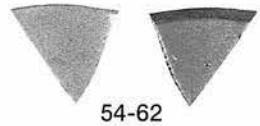
54-48

54-57

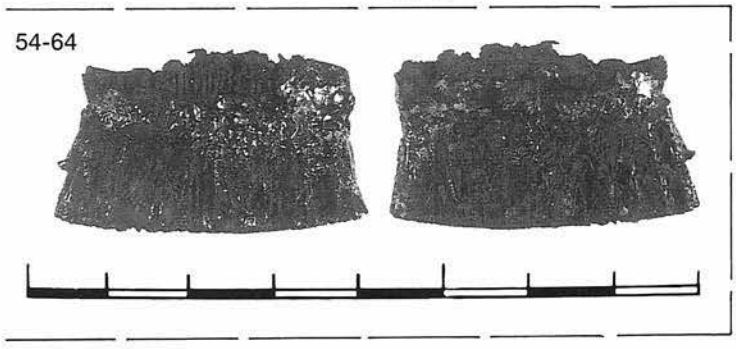
54-58

54-59

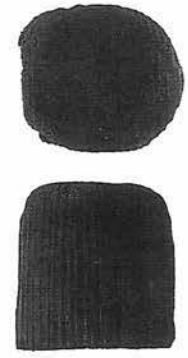
54-60


54-62

54-63


54-64

54-66


54-67

4面

P L 40

56-2

56-3

56-5

56-9

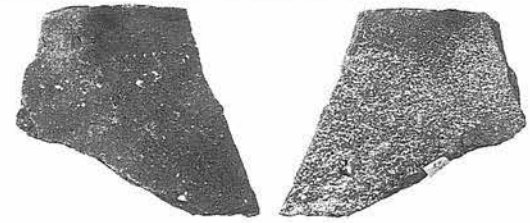
56-4

掘立柱建築址3

57-3

掘立柱建築址4

58-1


58-2

58-3

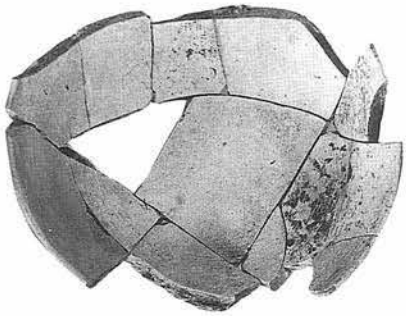
58-4

58-5

58-6

58-9

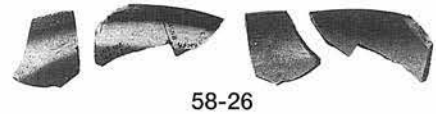
58-10



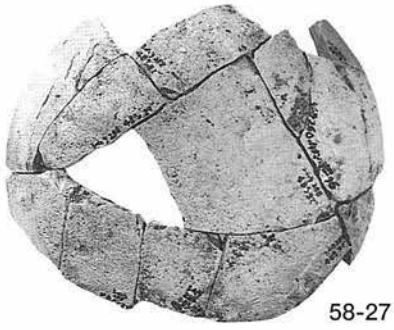
58-13

58-16

58-22


58-26

58-28


58-27

4B面

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14
副書名	平成9年度発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宮田　眞、滝澤　晶子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	かながわけんかまくらしさすけ 神奈川県鎌倉市佐助1丁目450番25・27	204	No.203	° ′ ″	° ′ ″	19960608 ～ 19960805	61.56	個人専用住宅の建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐助ヶ谷遺跡	中世都市	中世 13世紀 ～ 14世紀	掘立柱建物 礎石建物 かわらけ溜り 土壙 近世田	磁器、瀬戸 常滑、国産陶器類、 かわらけ、木製品、 漆器、ガラス製品、 種子	掘立柱建物はその規模から大きな建築物であったと考えられ、数回にわたる建て替えが行われている。

大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

雪ノ下四丁目620番５地点

例　　言

1．本報は鎌倉市雪ノ下四丁目620番５地点における埋蔵文化財発掘調査のうち、国庫補助事業にかかる自己用住宅部分の報告である。

2．発掘調査は集合住宅建設にともなう事業者負担分と平行して、1996年８月12日から11月５日までおこなわれた。

3．調査体制は次のとおり

担　当　者　馬淵和雄

調　査　員　野本賢二・太田美知子（現地調査）

渡部律子・及川加代子（資料整理）

調査補助員　丹行正・山上玉恵・坂倉美恵子・岡陽一郎・鍛冶屋勝二・真中泰行・弓削拓郎・鈴木裕子・安部しのぶ

調査参加者　石渡辰男・箕田孝善・長島三男・福本寿夫・渡辺久夫・宮崎明・香川尚美

4．本報作成分担は次のとおり

遺構図整理　馬淵

遺物実測　渡部・及川・太田・山上・坂倉

同墨入れ　渡部・太田・馬淵

同観察表　太田

同写真撮影　鍛冶屋

同写真版組　鍛冶屋

原稿執筆　馬淵

編　　集　馬淵

校　　正　馬淵・坂倉・兼行佼枝

本 文 目 次

第一章　調査地点概観 ……185
　1．位置と地勢 ……185
　2．歴史的環境 ……188
第二章　調査の概要 ……190
　1．調査にいたる経緯 ……190
　2．方眼設定方法 ……190
　3．調査経過 ……191
第三章　調査結果 ……193
　第1節　概　要 ……193
　　1．層序と遺構面のありかた ……193
　　2．出土遺物の概要 ……194
　第2節　各　説 ……195
　　1．近　代 ……195
　　2．近　世 ……195
　　3．中世後期 ……195
　　4．中世前期 ……196
　　5．弥生時代 ……236
　　6．参考資料 ……250
第四章　まとめと若干の展望 ……255
　1．弥生時代 ……255
　2．鎌倉時代 ……255
　3．中世後期 ……256
　4．近　世 ……256

挿　図　目　次

図１　調査地点の位置 ……185
図２　調査地点と近辺の遺跡・旧跡 ……186
図３　近辺の地形と調査区 ……187
図４　方眼設定図 ……190
図５　調査区西壁土層図 ……192
図６　近代遺構全図 ……194
図７　近代土壙１ ……195
図８　近世遺構全図 ……196
図９　中世後期遺構全図 ……197
図10　溝５ ……198
図11　中世前期遺構全図 ……199
図12　溝１～４（六浦道側溝） …… 200
図13　溝１・１′出土遺物……201
図14　溝２・３・４出土遺物 ……202
図15　柱穴列２ ……206
図16　布掘柱穴列、同出土遺物 ……207
図17　溝８、同出土遺物 ……209
図18　柱穴列１ ……210
図19　建物１・２ ……211
図20　井戸３、同出土遺物 ……212
図21　井戸４、同出土遺物 ……214
図22　土壙２・11、同出土遺物 ……216
図23　土壙15・20、同出土遺物 ……218
図24　土壙21・23・24、同出土遺物 ……220
図25　土壙25・26・土師器集中出土ｐ.301、
同出土遺物 ……222
図26　土師器集中出土ｐ.804・ｐ.525、
同出土遺物 ……223
図27　溝９ ……224
図28　中世前期泥岩層下出土遺物 ……225
図29　中世前期上部包含層出土遺物（１） …227
図30　中世前期上部包含層出土遺物（２）
２・Ｅ付近集中出土 ……229
図31　中世前期下部包含層出土遺物 ……231
図32　遺構外採集遺物 ……234
図33　弥生時代遺構全図 ……236
図34　竪穴住居７ ……238
図35　竪穴住居７出土遺物（１） …… 239
図36　竪穴住居７出土遺物（２） …… 240
図37　竪穴住居８ ……242
図38　竪穴住居８出土遺物 ……243
図39　竪穴住居９ ……244
図40　竪穴住居９出土遺物 ……245
図41　竪穴住居10（上）・11（下）、
同出土遺物 …… 247
図42　竪穴住居12、同出土遺物 ……248
図43　竪穴住居13、同出土遺物 ……249
図44　遺構外採集遺物 ……250
図45　井戸２ ……241
図46　井戸２出土遺物 ……252

表　目　次

表１　溝１出土遺物観察表 ……203
表２　溝１′出土遺物観察表 ……204
表３　溝２出土遺物観察表（１）……204
表４　溝２出土遺物観察表（２）……205
表５　溝３出土遺物観察表 ……205
表６　溝４出土遺物観察表（１）……205
表７　溝４出土遺物観察表（２）……206
表８　布掘柱穴列出土遺物観察表（１）……208
表９　布掘柱穴列出土遺物観察表（２）……209
表10　溝８出土遺物観察表 ……209
表11　井戸３出土遺物観察表 ……213
表12　井戸４出土遺物観察表 ……215
表13　土壙２出土遺物観察表 ……217
表14　土壙11出土遺物観察表 ……217
表15　土壙15出土遺物観察表 ……219
表16　土壙20出土遺物観察表 ……219

表17　土壙21出土遺物観察表 ……221
表18　土師器集中出土ｐ.301遺物観察表 ……221
表19　土師器集中出土ｐ.804遺物観察表 ……223
表20　土師器集中出土ｐ.525遺物観察表 ……224
表21　２－Ｅ土師器集中出土遺物観察表 ……225
表22　中世前期泥炭層下出土遺物観察表（１）……226
表23　中世前期泥炭層下出土遺物観察表（２）……227
表24　中世前期上部包含層出土遺物観察表（１）……227
表25　中世前期上部包含層出土遺物観察表（２）……228
表26　中世前期上部包含層出土遺物観察表（３）……230
表27　中世前期下部包含層出土遺物観察表（１）……232
表28　中世前期下部包含層出土遺物観察表（２）……233
表29　遺構外採集遺物観察表（１）……233
表30　遺構外採集遺物観察表（２）……235
表31　竪穴住居７出土遺物観察表（１）……240
表32　竪穴住居７出土遺物観察表（２）……241
表33　竪穴住居８出土遺物観察表 ……241
表34　竪穴住居９出土遺物観察表 ……246
表35　竪穴住居10出土遺物観察表 ……248
表36　竪穴住居12出土遺物観察表 ……248
表37　竪穴住居13出土遺物観察表 ……249
表38　遺構外採集遺物観察表 ……250
表39　井戸２出土遺物観察表（１）……253
表40　井戸２出土遺物観察表（２）……254
表41　遺物計数表（１）……257
表42　遺物計数表（２）……258

写真図版目次

図版１　中世面全景（上が北）……261
図版２－１　溝１ ……262
２－２　同上　土師器出土状況（南から）……262
図版３－１　溝１’（右）・２（左、東から）……263
３－２　溝３（右）・４（左、東から）……263
３－３　溝４土師器出土状況（北から）…263
３－４　六浦道側溝群と柱穴列２（上方）・布掘柱穴列（下方、上が北）……263
図版４－１　井戸３（西から）……264
４－２　同上　北西角隅柱 ……264
４－３　井戸４（北から）……264
４－４　同上　下半部土層断面 ……264
図版５－１　土壙15（東から）……265
５－２　土壙20（西から）……265
５－３　土壙27（西から）……265
図版６－１　土壙26（東から）……266
６－２　土壙25（東から）……266
図版７－１　土師器集中出土ｐ.301（東から）……267
７－２　土師器集中出土ｐ.804（東から）……267
７－３　土師器集中出土ｐ.525（南から）……267
図版８－１　井戸２（東から）……268
８－２　同上　遺物出土状況（北から）……268
図版９　弥生面全景（上が北）……269
図版10－１　竪穴住居７（南東から）……270
10－２　同上　東南部焼土面と遺物出土状況（北西から）……270
10－３　同上　ｐ.２・ｐ.６付近（西から）……270

図版11－1　竪穴住居７　図35－１出土状況（西から）……271
11－2　同上　図36－17出土状況（北から）……271
11－3　同上　図36－15・14・16（奥から）出土状況（西から）…271
図版12－1　竪穴住居８（西から）……272
12－2　同上　炭化材検出状況（西から）…… 272
12－3　同上　炭化部材２・３（奥から）出土状況（西から）……272
12－4　同上　図38－１（左）・38－６（中央）・炭化部材４（右手前）出土状況（西から）……272
図版13－1　竪穴住居８　炉（南から、中央の右が図38－７）……273
13－2　同上　土層断面 ……273
13－3　同上　完掘後（北西から）……273
図版14－1　竪穴住居８　炉　シイの実出土状況（中央の黒点群など）…274
14－2　同上　図38－５出土状況（北から）……274
14－3　同上　集石検出状況（北から）…274
図版15－1　竪穴住居９・10・11（南から）…275
15－2　竪穴住居９　図40－13・14・15（手前から奥に）出土状況（南から）……275
15－3　竪穴住居10　図41－２出土状況（西から）……275
図版16－1　竪穴住居９・８・13（左奥から手前に、北から）……276
16－2　竪穴住居12（南から）……276
16－3　竪穴住居13　炉（南から）……276
図版17－1　溝１・１′出土遺物（図13）……277
17－2　溝２・３・４出土遺物（図14）…277
図版18－1　布掘柱穴列出土遺物（図16）……278
18－2　溝８出土遺物（図17）……278
18－3　井戸３出土遺物（図20）……278
18－4　井戸４出土遺物（図21）……278
図版19－1　井戸４出土遺物（図21）……279
19－2　土壙２・11出土遺物（図22）……279
19－3　土壙15・20出土遺物（図23）……279
図版20－1　中世前期泥炭層下出土遺物（図28）……280
20－2　中世前期上部包含層出土遺物（図29）……280
20－3　同上（図30）……280
20－4　中世前期下部包含層出土遺物（図31）……280
図版21－1　中世前期下部包含層出土遺物（図31）……281
21－2　遺構外採集遺物（図32）……281
図版22－1　遺構外採集遺物（図32）……282
22－2　井戸２出土遺物（図46）……282
22－3　竪穴住居７出土遺物（図35）……282
図版23－1　竪穴住居７出土遺物（図35）……283
23－2　同上（図36）……283
23－3　竪穴住居８出土遺物（図38）……283
図版24－1　竪穴住居８出土遺物（図38）……284
24－2　竪穴住居９出土遺物（図40）……284
24－3　竪穴住居12出土遺物（図42）……284
24－4　竪穴住居13出土遺物（図43）……284
24－5　遺構外採集遺物（図44）……284

第一章　調査地点の概観

1．位置と地勢

県道金沢鎌倉線（「六浦道」・「金沢街道」）は、鶴岡八幡宮東側の筋違橋交差点からほぼ真東に約400m直進する。この直線部分の北側は、鎌倉時代前期の源氏将軍三代にわたって将軍の居館のあったところである。居館の方形区画は「御所」と呼ばれ、ここで政務も執り行われたところから、後に「大倉幕府」とも称されるようになった。「大倉幕府周辺遺跡群」は、文字どおり幕府推定地の周辺にひろがる遺跡である。鎌倉市遺跡No.49。

大倉「御所」の西限は、かつては筋違橋交差点から北上する線がそうであり（図２で「明治期までの旧道」としたところ）、現在のものは現横浜国立大学付属小学校前身の神奈川師範学校校庭が置かれるにともなって線引きされたものである。なお大倉は「大蔵」とも書くが、鎌倉時代は前者が一般的であったようだ。六浦道南側は旧字名では大倉南御門と呼ばれていた[1]。

調査地点は、県道金沢鎌倉線を、筋違橋から東に約120m行ったところの道路沿い南側にあり、幕府比定地の正面に当たる。現在の地番は鎌倉市雪ノ下四丁目620番５。

一帯は滑川の本流が浄明寺・二階堂付近の狭隘な谷間を抜け、北からの二階堂川と東御門川、南からの大御堂川と合流して鎌倉市内中心部の沖積平野を形成しはじめる辺りであり、滑川はこの付近から大

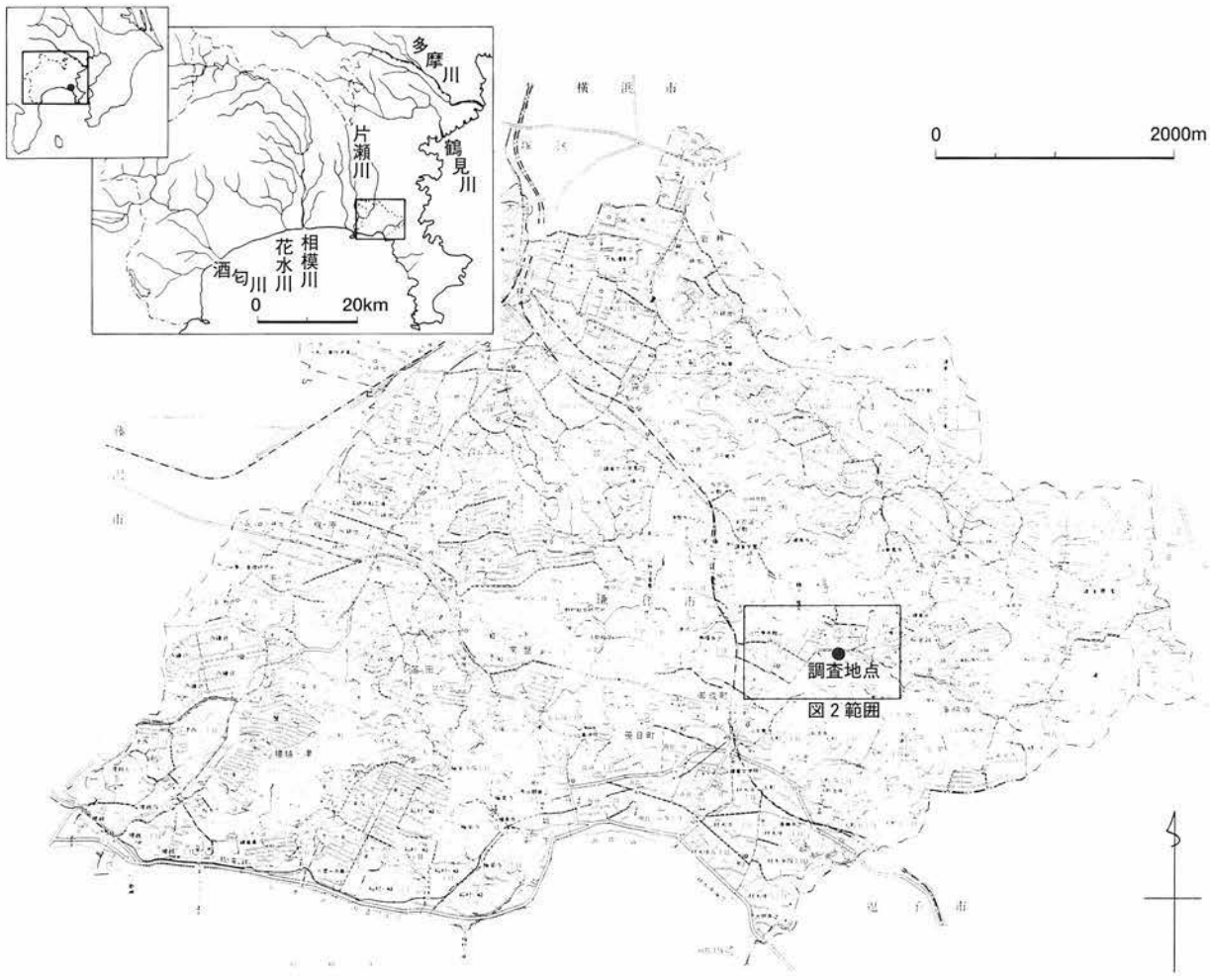


図１　調査地点の位置

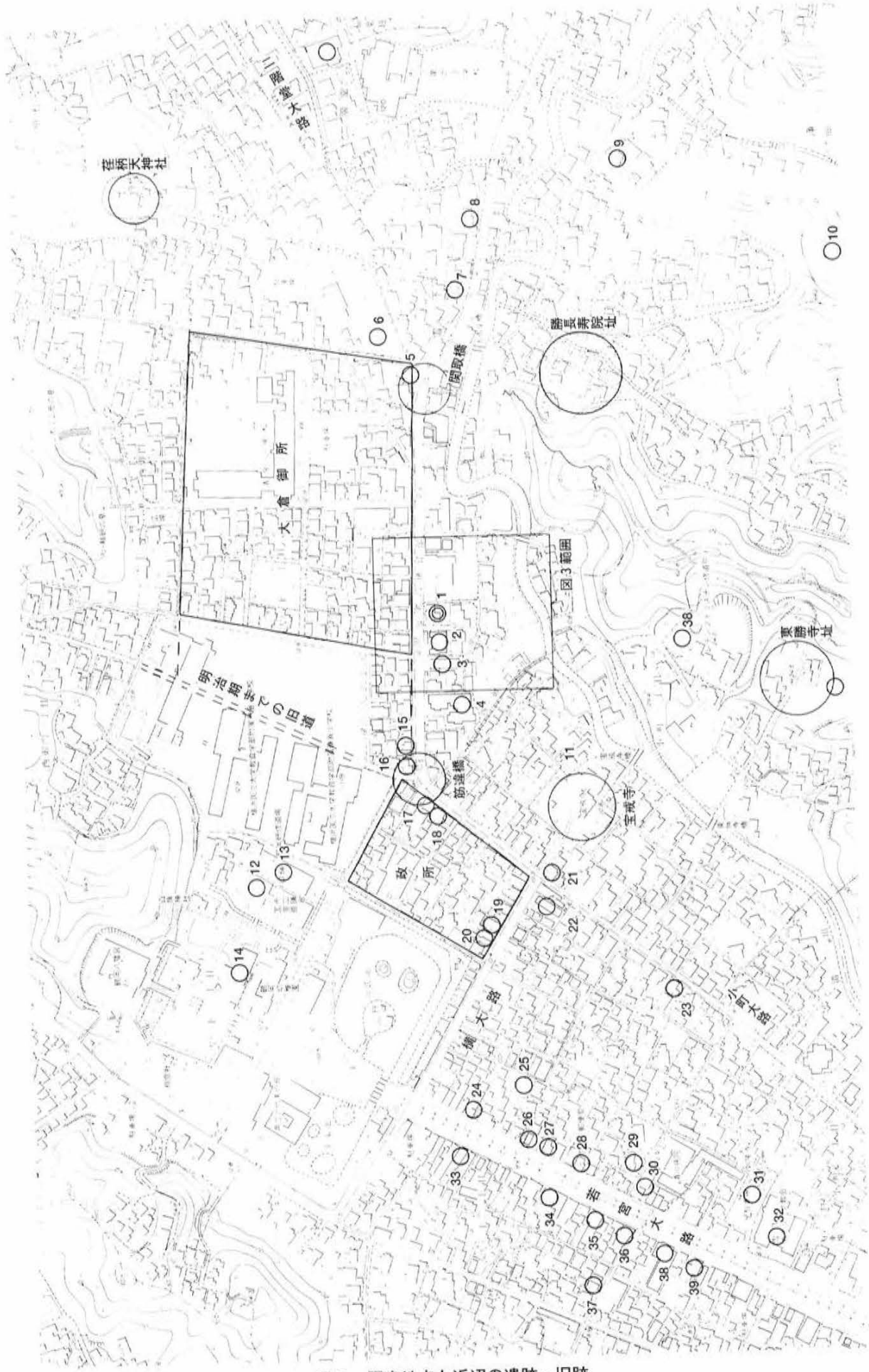


図2　調査地点と近辺の遺跡・旧跡

図２　地点名

１．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番５地点（調査地点）　２．大倉南御門遺跡Ａ地点　３．大倉南御門遺跡Ｂ地点　４．大倉南御門遺跡Ｃ地点　５．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下字大倉耕地569番１地点　６．大倉幕府周辺遺跡群　二階堂字荏柄38番１地点　７．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下字大倉耕地565番４地点　８．横小路周辺遺跡　９．浄明寺釈迦堂田楽辻子遺跡　10．浄明寺釈迦堂遺跡　11．東勝遺跡　12．鶴岡八幡宮旧境内　鎌倉国宝館用地　13．鶴岡八幡宮旧境内　研修道場用地　14．鶴岡八幡宮旧境内　直会殿用地　15．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下三丁目607番外地点　16．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下三丁目606番１地点　17．政所跡　雪ノ下三丁目965番地点　18．政所跡　雪ノ下三丁目966番１地点　19．政所跡　雪ノ下三丁目987番１・２地点　20．政所跡　雪ノ下三丁目988番地点　21．北条高時邸跡　小町三丁目426番３地点　22．北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目395番地点　23．北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目432番２地点　24．北条小町邸跡（泰時・時頼邸）雪ノ下一丁目377番７地点　25．北条泰時・時頼邸　雪ノ下一丁目374番２地点　26．北条泰時・時頼邸　雪ノ下一丁目371番１地点　27．北条泰時・時頼邸　雪ノ下一丁目372番７地点　28．北条泰時・時頼邸　雪ノ下一丁目369番地点　29．北条泰時・時頼邸　雪ノ下一丁目419番３地点　30．若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目366番他地点　31．宇津宮辻子幕府跡　小町二丁目354番12他地点　32．宇津宮辻子幕府跡　小町二丁目354番２地点　33．北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目293番１地点　34．北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目271番１地点　35．北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目273番ロ地点　36．北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目274番２地点　37．北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目233番９地点　38．若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目276番他地点　39．若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目279番２地点

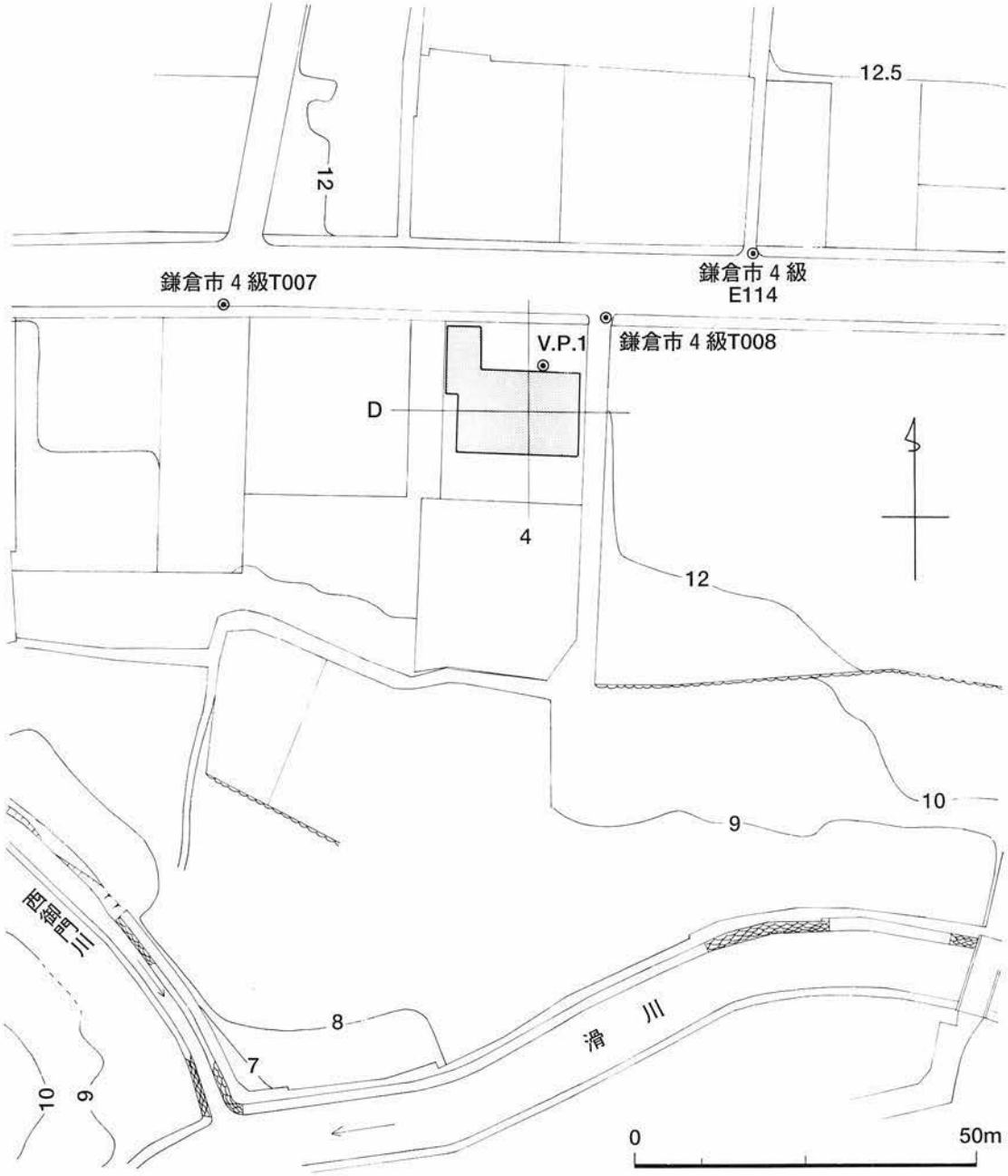


図３　近辺の地形と調査区

きく南流して海にいたる。調査地点現地表面の標高は12m前後。調査地点の背後（南側）から地形は滑川に向かって急な下り坂となる。川までは60～70mほど。遺跡北側には滑川とその支流の開析した東西約１km、南北約700mの平野が段丘状に拡がり、調査地点はその南端といってもいい位置にある。この平野部の西側３分の１を占めるのが鶴岡八幡宮である。

２．歴史的環境

この平野部には早くから人の往来が確認でき、かつて赤星直忠により、調査地点の東北約500mにある荏柄天神社前で、縄文時代前期の諸磯式、中期の阿玉台式土器が採集されている。また鶴岡八幡宮境内からも、前期の土器と中期加曽利Ｅ式土器が発見されている[2]。

弥生時代になると、当調査地点西隣の大倉南御門遺跡やその西の同Ｂ地点、さらに西のＣ地点で中期末の宮ノ台期の竪穴住居が数軒発見されている。また、六浦道を600mほど東進すると、杉本寺という寺があり、その前面にある遺跡（杉本寺周辺遺跡）からも弥生時代中～後期の遺物が出土している。おそらく、遺跡地付近の滑川の段丘上には相当な規模の当該期の集落が存在しており、調査地点はその一角に位置するとみてよい。

古墳時代から律令期にかけての遺構は、先述の南御門遺跡では見つかっていない。しかし、鎌倉市内全体ではいくつもあり、また大倉幕府比定地東南隅の調査でも土器片がたくさん出土しているので[3]、調査地点のすぐ近くの場所まで集落が存在していることは確実である。

平安時代末期の長治元年（1104）には、本地点から約500m東北の山裾に、菅原道真を祭神とする荏柄天神社が開かれている。この神社はのちに、大倉におかれた「御所」の鬼門鎮守の社として崇められたという。またこれとほぼ同じころ、南東に御霊神社（権五郎神社）、北西に佐助稲荷、南東に祇園社（大町八雲神社）が勧請されているので、荏柄天神社はこれらとともに、鎌倉の四隅を守る都市神のひとつとして建てられたのだろう[4]。

このころには、六浦道は房総往還の道として、確実に通じていたとみてよい。そして鎌倉時代前期まで、六浦道は都市鎌倉の中軸線として機能していた。調査地点はこの道の沿革抜きに語れない。

このころ「武士の棟梁」源義朝は、亀ケ谷の山裾、現在の寿福寺の場所に居館を構えた。これを「鎌倉之楯」という。なぜ寿福寺の場所と確定できるかというと、義朝の「亀谷御旧跡」に正治二年（1200）閏２月12日、北条政子の発願で伽藍建立が決まり、翌13日それは禅僧栄西に寄進されて「寿福寺」と呼ばれたからである（『吾妻鏡』同日条）。

六浦道は、鶴岡八幡宮設営以前、大倉を過ぎて筋違橋交差点から「鉄の井」の交差点までつながっており、岩屋堂前面の道路を経て「鎌倉之楯」に直線的に向かっていた。いわばこの道は、義朝亭への参道だったといってもよい。「筋違橋」の名称は、古来の道が八幡宮に寸断され、曲折せざるをえなかったことから付いたものだろう[5]。

鎌倉開府前後の六浦道について石丸熙は、鎌倉から六浦にいたる道沿いの地域を、三浦（和田）一族が掌握していたといっている[6]。源義朝旧亭に堂宇を建てていた岡崎義実が三浦義明の末弟であること、杉本寺一帯が杉本義宗（三浦義明長子）の本拠であること、荏柄社前に和田義盛（杉本義宗長子）の甥胤長の屋地があったとされること、今の横浜市金沢区にある和田谷戸が和田義盛の名字の地である可能性があること[7]、などからみてこの指摘は頷ける。いずれ調査地点付近も、平安末期ごろには三浦氏と馴染み深い場所ではあったはずだ。

『吾妻鏡』によれば、治承四年（1180）10月７日、鎌倉入りした頼朝は、居所を建てようとして父義

朝の「亀谷御旧跡」に足を運ぶ（同日条）。しかし、地形が狭いことと、岡崎義実がすでに亡き主君義朝の菩提をとむらうために堂宇を建てていたので断念し、その替わりに大倉の地に新亭を営むことになった。新亭は二ヵ月という短期間で完成、12月12日に「移徙之儀」がおこなわれる（同日条）。

この「頼朝新亭」がいわゆる「大倉御所」で、後世には大倉幕府と称されるようになる。六浦道の直線部分の北側を占める東西約400mの方形区画がそれである。調査地点はまさしくその正面にあたる。以後大倉の幕府は、嘉祿元年（1225）に北条泰時が宇津宮辻子近隣に幕府を移すまで続いた。また近辺には永福寺や勝長寿院といった大刹が建立されるなど、開府当初、大倉一帯が鎌倉の中心であったことがわかる。

鎌倉時代前期、大倉幕府周辺に宿館を構えていた武士は、北条氏や三浦氏をはじめ『吾妻鏡』に頻出するが、南御門一帯に限れば、八田右衛門尉知家と畠山次郎重忠がいる。

八田知家の居宅については、文治三年（1187）正月十二日条に頼朝と頼家が知家の南御門宅に「御成」をしたこと、建保元年（1213）12月1日の御所近辺の火事で屋敷が延焼したことがわかる。彼の家が南御門にあったことは確実のようだ。畠山重忠の居宅については、正治元年（1199）五月七日条に、京都から前日着いた医師時長の滞留先を南御門の畠山邸に移す旨の記事がある。南御門の範囲は決して広くなく、両家が調査地点から至近距離にあったことは間違いない。

三浦一族についていえば、まず和田氏が、建保元年（1213）の「和田の乱」で亡ぼされ、ついで宝治元年（1247）、三浦泰村ら一族が北条時頼と安達氏に亡ぼされた（「宝治合戦」・「三浦の乱」）。これにより、大倉一帯から三浦氏の勢力は完全に払拭された。

嘉祿元年に幕府が若宮大路方面に移転してからは、遺跡一帯についての情報は文献に乏しい。建長三年（1251）、鎌倉幕府は「鎌倉中」の商業地区を七カ所に決める法令を出した。その中の一つに「大倉辻」がある。正確な場所は不明だが、幕府跡東南角の関取橋付近（旧二階堂大路との交差点）であった可能性が高い。また文永二年（1265）にも同様の法令が出されるが、そこには「大倉辻」と共に「須地賀江（筋違）橋」が加えられているので、一帯は鎌倉後期には商業地に変化していたのだろう。

鎌倉時代後期～末期には大倉辺の火事が『北条九代記』等に見えるが、調査地点との関係は不明。

16世紀半ばには、現在の関取橋の場所に、その名の由来となった関取場が置かれた。「荏柄天神社文書」天文十七年（1548）十二月二十七日付文書によると、小田原城主北条氏康が、荏柄社の再興・造営のため、通行の商人・道者たちから、関銭をとる法を定めたものである。当時の関所は、警備を主たる目的とした江戸時代のものと性格を異にし、交通税を徴収する機関であった。先年おこなわれたこの地点の発掘調査で、関取場の建物とおぼしい礎石建物が検出されている。

江戸時代後期の六浦道は、相模湾の魚介をいち早く江戸に送る重要な搬送路となった。

注

1．『日本歴史地名大系　神奈川県の地名』　平凡社　1984
2．赤星直忠　『鎌倉市史　考古編』　吉川弘文館　1959
3．馬淵和雄　『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下字大倉耕地569番1地点』　大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団　1990
4．馬淵和雄　「武士の都　鎌倉…その成立と構想をめぐって…」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』　新人物往来社　1994　21・22頁
5．同前書　20頁
6．石丸熙『都市鎌倉の武士たち』新人物往来社　1993　17～19頁
7．石井　進　「中世六浦の歴史」『三浦古文化』　第40号　三浦古文化研究会　1986
8．注3前掲報告書

第二章　調査の概要

1．調査にいたる経緯

1996年１月、鎌倉市雪ノ下四丁目620番５地点において、共同住宅併用個人専用住宅建設の事前相談があり、クイ基礎の計画であったので試掘調査を実施したところ、地表下70cm以下に遺構面が確認された。事業者と協議した結果、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法に則った手続きをおこない、調査実施方法等を協議した。その結果次のような方法でおこなうことが決まった。

計画面積は252㎡で、このうち個人専用住宅部分126㎡を国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施する。共同住宅部分126㎡については事業者負担として別途おこなう。両者の調査区は、後述の方眼南北軸３と４のほぼ中央辺りで東西に分割され、便宜的に個人専用住宅部分をⅠ区、共同住宅部分をⅡ区と呼ぶ。しかし、発掘調査という作業の性質上、両者を分離して実施することはさまざまな不都合が伴うので、調査は平行しておこなわれた。

本報はⅠ区を報告対象とする。しかし、溝や掘立柱建物など両区に跨がっている遺構については、分断すると遺跡理解を妨げかねないため全体を提示することとし、遺構の数量的な配分において両調査区の等分を期すことを心掛けた。

2．方眼設定方法

まず北西調査区外に任意点を設定し、それを方眼原点１－Ａとした。ここから東に向かい南北軸を、南に向かい東西軸を５ｍごとに派生させ、前者に算用数字を、後者に大文字アルファベットの記号を付した。各方眼区画の名称は北西角の軸線交点で表される。南北軸の偏差はＴＮ－１°05′－Ｅ

この方眼は次のように鎌倉市４級基準点に連結している。

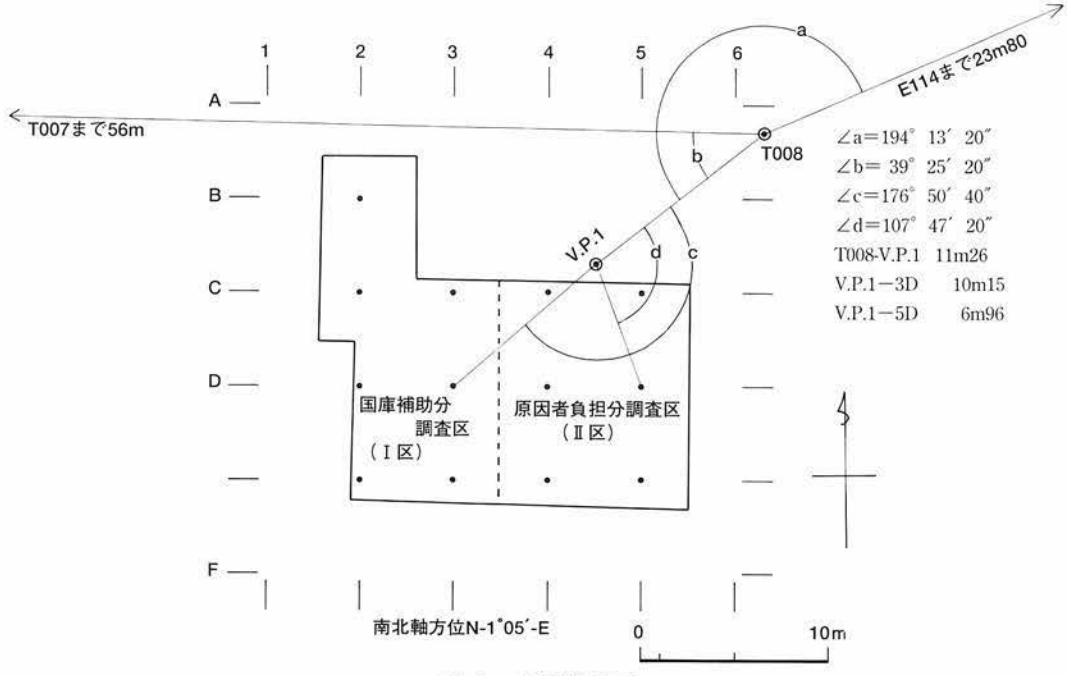


図４　方眼設定図

まず鎌倉市４級基準点Ｔ.007とＴ.008を結ぶ線から、Ｔ.008を支点として調査区外北東部に、任意点Ｖ.Ｐ.01を角度39°25′20″、距離11.26ｍで置いた。Ｖ.Ｐ.01とＴ.008を結ぶ線から、Ｖ.Ｐ.01を支点とした３－Ｄ・５－Ｄとの位置関係は次のとおり。

Ｖ.Ｐ.01⟷３－Ｄ　　距離10.15ｍ、角度176°50′40″

Ｖ.Ｐ.01⟷５－Ｄ　　距離 6.96ｍ、角度107°50°40″

３－Ｄの位置は、北緯35°19′12″、東経139°33′42″である。

３．調査経過

調査期間は1996年８月12日から～11月５日までを要した。日誌抄により、その間の経過を記す。

８月12日　機材搬入。重機による表土掘削開始
８月15日　北西拡張部より遺構検出作業開始
８月16日　近代井戸・近世土壙など掘り始める
８月21日　遣方方眼設定作業
８月22日　中世後期遺構（溝５など）掘り始める
８月27日　中世前期面遺構検出作業開始
９月11日　順次平面実測開始
９月17日　中世初期遺構群検出作業開始
10月３日　中世面全景写真撮影（外部委託）
10月７日　弥生層まで掘り下げ開始
10月９日　遺構検出作業開始
10月12日　順次遺構掘り上げに入る
10月27日　弥生面全景写真撮影（外部委託）
10月28日　調査区壁土層断面実測
10月29日　機材撤収
11月５日　残務整理終了

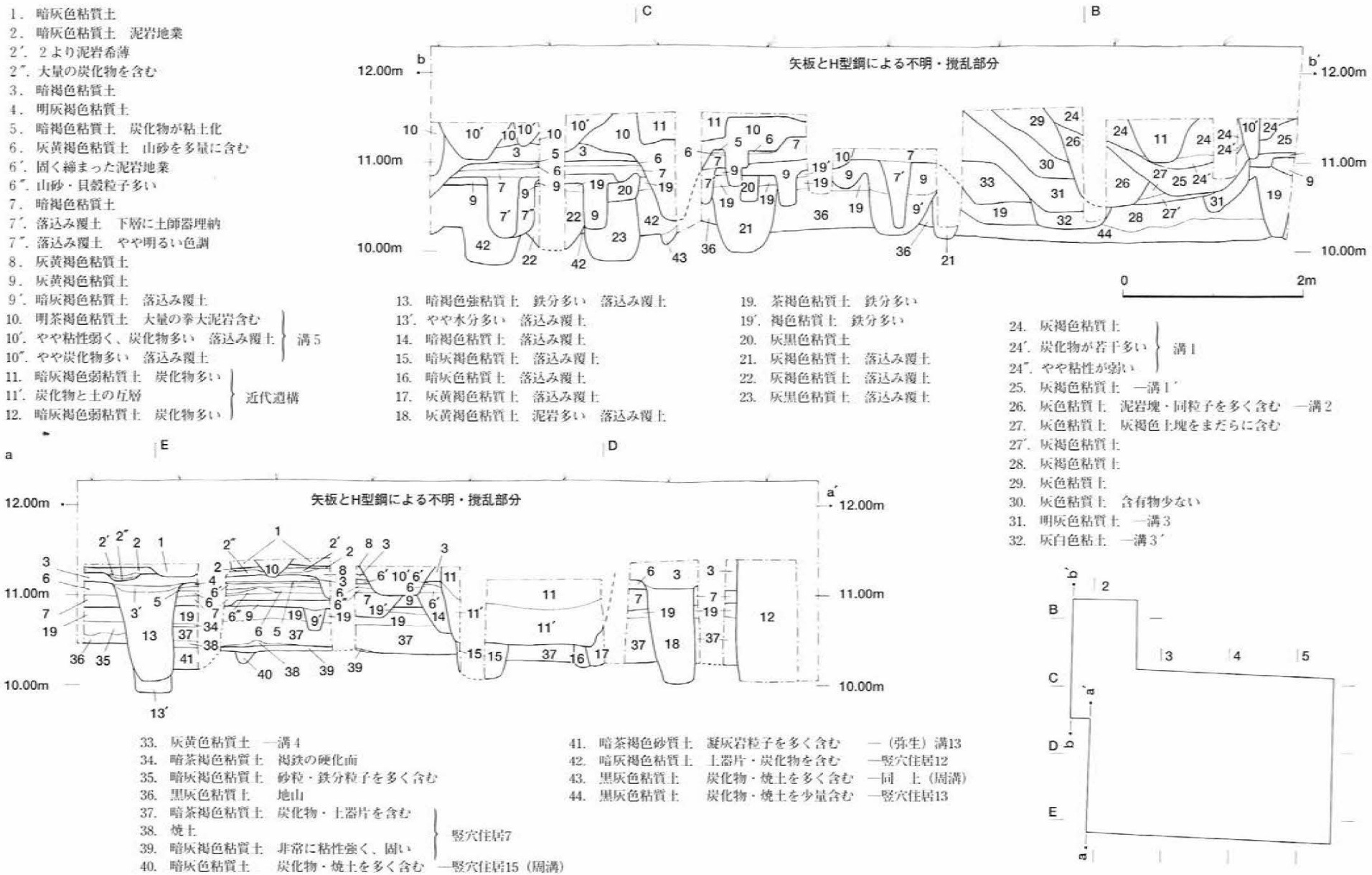
謝　辞

現地調査および資料整理を通じ、多くの方々や機関から助言・援助を賜った。ここに銘記し、感謝の意を表する。

秋山哲雄・安藤弘道・及川良彦・大河内勉・大橋康二・金丸義一・河野真知郎・菊川英政・木村美代治・合田芳正・小松茂憲・佐藤仁彦・汐見一夫・宍戸信悟・宗臺秀明・宗臺富貴子・瀬田哲夫・田代郁夫・田村良照・継　実・土屋浩美・手塚直樹・西川修一・根本志保・浜野洋一・原　広志・藤沢良祐・藤原良章・松尾宣方・松山敬一朗・宮田　真

社団法人鎌倉市高齢者事業団・奥寺組・斉藤建設

図5　調査区西壁土層図



1．暗灰色粘質土
2．暗灰色粘質土　泥岩地業
2′．2より泥岩希薄
2″．大量の炭化物を含む
3．暗褐色粘質土
4．明灰褐色粘質土
5．暗褐色粘質土　炭化物が粘土化
6．灰黄褐色粘質土　山砂を多量に含む
6′．固く締まった泥岩地業
6″．山砂・貝殻粒子多い
7．暗褐色粘質土
7′．落込み覆土　下層に土師器埋納
7″．落込み覆土　やや明るい色調
8．灰黄褐色粘質土
9．灰黄褐色粘質土
9′．暗灰褐色粘質土　落込み覆土
10．明茶褐色粘質土　大量の拳大泥岩含む
10′．やや粘性弱く、炭化物多い　落込み覆土　} 溝5
10″．やや炭化物多い　落込み覆土
11．暗灰褐色弱粘質土　炭化物多い
11′．炭化物と土の互層　} 近代遺構
12．暗灰褐色弱粘質土　炭化物多い

13．暗褐色強粘質土　鉄分多い　落込み覆土
13′．やや水分多い　落込み覆土
14．暗褐色粘質土　落込み覆土
15．暗灰褐色粘質土　落込み覆土
16．暗灰色粘質土　落込み覆土
17．灰黄褐色粘質土　落込み覆土
18．灰黄褐色粘質土　泥岩多い　落込み覆土

19．茶褐色粘質土　鉄分多い
19′．褐色粘質土　鉄分多い
20．灰黒色粘質土
21．灰褐色粘質土　落込み覆土
22．灰褐色粘質土　落込み覆土
23．灰黒色粘質土　落込み覆土

24．灰褐色粘質土
24′．炭化物が若干多い　} 溝1
24″．やや粘性が弱い
25．灰褐色粘質土　—溝1′
26．灰色粘質土　泥岩塊・同粒子を多く含む　—溝2
27．灰色粘質土　灰褐色土塊をまだらに含む
27′．灰褐色粘質土
28．灰褐色粘質土
29．灰色粘質土
30．灰色粘質土　含有物少ない
31．明灰色粘質土　—溝3
32．灰白色粘土　—溝3′

33．灰黄色粘質土　—溝4
34．暗茶褐色粘質土　褐鉄の硬化面
35．暗灰褐色粘質土　砂粒・鉄分粒子を多く含む
36．黒灰色粘質土　地山
37．暗茶褐色粘質土　炭化物・土器片を含む
38．焼土　} 竪穴住居7
39．暗灰褐色粘質土　非常に粘性強く、固い
40．暗灰色粘質土　炭化物・焼土を多く含む　—竪穴住居15（周溝）

41．暗茶褐色砂質土　凝灰岩粒子を多く含む　—（弥生）溝13
42．暗灰褐色粘質土　土器片・炭化物を含む　—竪穴住居12
43．黒灰色粘質土　炭化物・焼土を多く含む　—同　上（周溝）
44．黒灰色粘質土　炭化物・焼土を少量含む　—竪穴住居13

第三章　調査結果

第1節　概　要

1．層序と遺構面のありかた

地表面は海抜12.3m前後にあり、以下約60～70cmまで近・現代の客土層が及んでいる。それを重機で除くと、調査区南域では鎌倉時代後期～南北朝ごろの、北域では戦国時代ごろの包含層が現れる。近世の包含層と遺構面は失われている。このことは、近・現代に客土された時点で、すでに近世以後の層が削り取られていたことを示しているが、近代・近世の遺構でも、井戸・土壙などの深い掘肩を持つものは中世面の調査の際に、その下半部を検出できた（図6・8）。染付など、出土遺物の年代からそう判断した。確認された近代の遺構は次のとおり。

井戸3基／土壙5基

近世の遺構は次のとおり。

東西溝1条（六浦道側溝）／井戸1基／竪穴遺構1基／楕円形土壙2基

戦国時代ごろの包含層は拳大泥岩塊による整地層だが、この時代も切込み面自体はほとんど残っておらず、やはり溝や土壙など、深い掘肩を持つもののみの検出にとどまる（図9）。この年代の遺構は次のとおり。

東西溝2条（六浦道側溝1条、およびこれに平行して約6m南を走るもの1条）／土壙2基

鎌倉時代後期～南北朝ごろの包含層は暗灰色粘質の炭化物の多い土で、土師器や陶磁器ほか多量の遺物を含む。しかし、この層も明白に確認できるのは調査区南半部でも西域付近のみにとどまった。この面の海抜は11.3m前後で、部分的に薄く破砕泥岩が敷かれていた。

この遺跡の歴史時代における主体をなすのは第一章でも述べたように、平安時代末～鎌倉時代前期である。中世の遺構・遺物の大半はこの時代に属し、後述するように多数を検出した。この面は海抜11～11.2m前後にあり、数次の面の補修が認められる。面を構成する土は、暗褐色粘質土、あるいは山砂を多く含む灰黄褐色粘質土で、いずれも炭化物や貝殻粒子が散見される。また、部分的に硬く締まった泥岩が薄く敷かれている。

さらに、この遺構面の下には約20cmほどで褐鉄の硬い凝固面が形成されており、ここから切り込まれた遺構も若干認められた。これが中世基盤層で、茶褐色の非常に粘性の強い土である。海抜は10.8m前後で、年代的にはおそらくこれが平安時代末期に属していよう。

中世前期の検出遺構は次のとおり。

柱穴約900口（掘立柱建物8棟以上・柱穴列4列以上を含む）／溝9条（六浦道側溝5条・建物雨落溝1条・南北溝1条・鎌倉時代以前東西溝1条）／側溝護岸施設1列／井戸3基（木枠あるもの2基）／土壙17基／土師器集中出土9群

この茶褐色粘質の中世基盤層を排除すると、灰黄色～淡褐色をした、ザラザラする感触の砂質土が現れ、弥生時代の遺構を検出することができる。あるいは弥生遺構は、茶褐色粘質土から切り込まれている可能性もあるが、断面観察によっても確認できなかった。この面の海抜は10.5～10.6m程度。弥生時代の遺構は次のとおり。

竪穴住居14軒（住居番号は15まであるが、4号が欠番）／溝1条

2．出土遺物の概要

以下に出土遺物の概略を示す。文中の「整理箱」は、内法54×34×14cmを標準的な規格とする市販の合成樹脂製遺物収納箱のことである。

近代…明治時代中期～昭和前期の陶器・磁器ほか整理箱２箱ほどがある。

近世…竪穴遺構出土の肥前染付（18世紀第４四半期～19世紀第１四半期）を主体に、土器・陶器など整理箱11箱。

中世…前期・後期あわせ、土器・陶磁器・金属製品・石製品など整理箱32箱。このうち21箱を中世前期の遺物が占める。

弥生…土器・石器ほか鹿角などもある。計整理箱18箱。

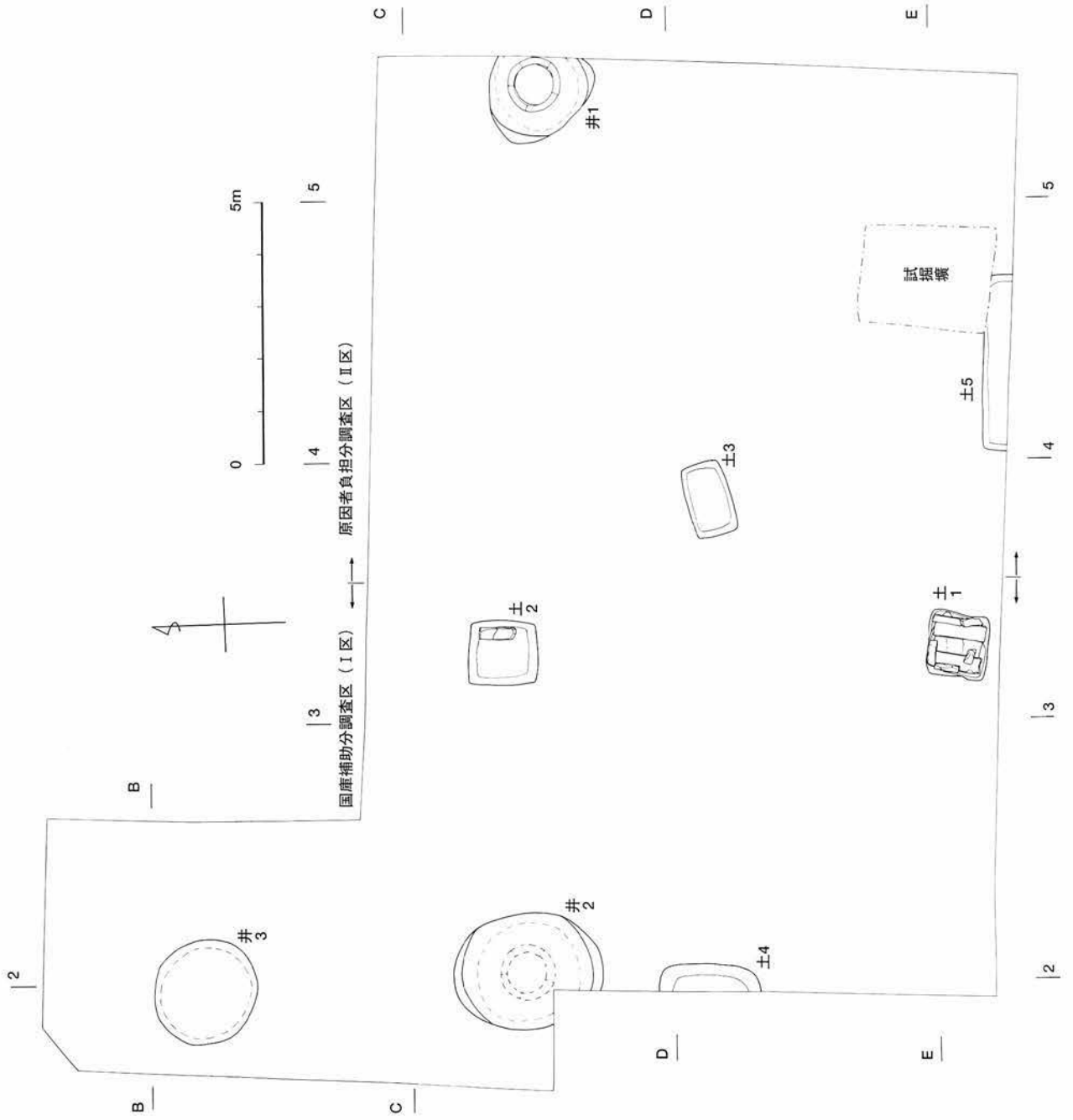


図６　近代遺構全図

第2節　各　説

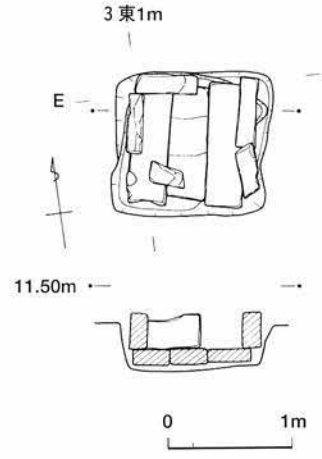
1．近　代

Ⅰ区検出遺構のうち土壙１を報告する。このほかのⅠ区の遺構については、詳細を略す。円形の井戸２・３のうち井戸２は、弧状に整形した凝灰質砂岩切石を組み合わせ、井戸枠としている。この形態はⅡ区５－Ｃにある井戸１と同じである。井戸３は素掘りで、ともに完掘していない。また西壁にかかる土壙４については、図５の西壁土層図も参照してほしい。

土壙１（図７）

３－Ｅで検出された方形土壙である。出土遺物がなかったので厳密な年代は不明だが、埋土からみておそらく戦前である。約４ｍ北の３－Ｃにも、切石の残りは悪いが同様の遺構がある（図６）。

長さ１ｍ、幅15cm前後の凝灰質砂岩の板状切石を三枚並べて底面に敷き、その縁に長さ40～60cmの板石を壁状に、囲むように立てる。上部は破壊されている。壁をもつ形態からみて、小型のムロ（室）のようなものか。



概　要　方形土壙の底面に凝灰質砂岩切石を敷き、その縁に同じく切石を立て、壁状に囲い込む。上半部を失う。ムロか。
規　模　長辺×短辺×深さ(cm)　125×115×40
平面形　方形
断面形　箱形
切石寸法　底部敷石　1m前後×30cm×10～12cm　壁体　40～60cm×30cm×15cm
主軸方位　N-8°-E

図７　近代土壙１

2．近　世

Ⅰ区で近世遺構と認められるものとして、六浦道側溝とおぼしい東西溝がある。これは後述する中世後期の側溝埋土中で完結しており、断面観察から確認したもので、個別図は省略する。深い逆台形の断面を呈し、上端幅74cm、下端幅25cm、深さ75cmほどの規模である。

今回の報告対象ではないが、Ⅱ区には長円形の土壙２基、円形素掘り井戸１基のほか、特筆すべきものとして、長方形の竪穴遺構がある。ここからは大量の18世紀末～19世紀初頭の伊万里焼など陶磁器が出土した。近隣の大倉南御門遺跡Ｃ地点（図２地点４）などでもほぼ同時期の遺構・遺物が発見されており、この時期の大倉のこの一帯には、かなりの数の人々が住んでいたことが窺われる。

3．中世後期

鎌倉市内遺跡ではしばしば、中世層の上部に泥岩塊による黄褐色の地業層が認められることがある。ここで「中世後期」と称するのはこの層のことを指す。年代的には大体室町時代から戦国時代、すなわち15～16世紀ごろに相当する。あるいは室町前期ごろ鎌倉市内のほぼ全域を覆い尽くす整地があった可能性もある。先述したように、この層も切込み面そのものはほとんど残っておらず、当該期遺構の検出は、埋土が黄褐色の泥岩層であることを目安とした。東西方向の溝２条・土壙などを検出したが、ここで紹介するのはそのうち溝１条である（溝５）。もう一つの溝は六浦道側溝だが（溝１・１'）、これについては中世前期からの変遷過程とあわせ、次項で論じたい。土壙は省略する。

溝５（図10）

ほぼＣ軸沿いを東西に走る溝。幅は最大で125cmほど、深さ80cm前後である。東から西に向かって流れる。断面は整ったＶ字形、または薬研形で、後述の六浦道側溝の溝１とは約６ｍを隔てて平行している。この溝の役割は不明だが、溝１との間があるいは道路であった可能性がある。埋土はいちどきに入

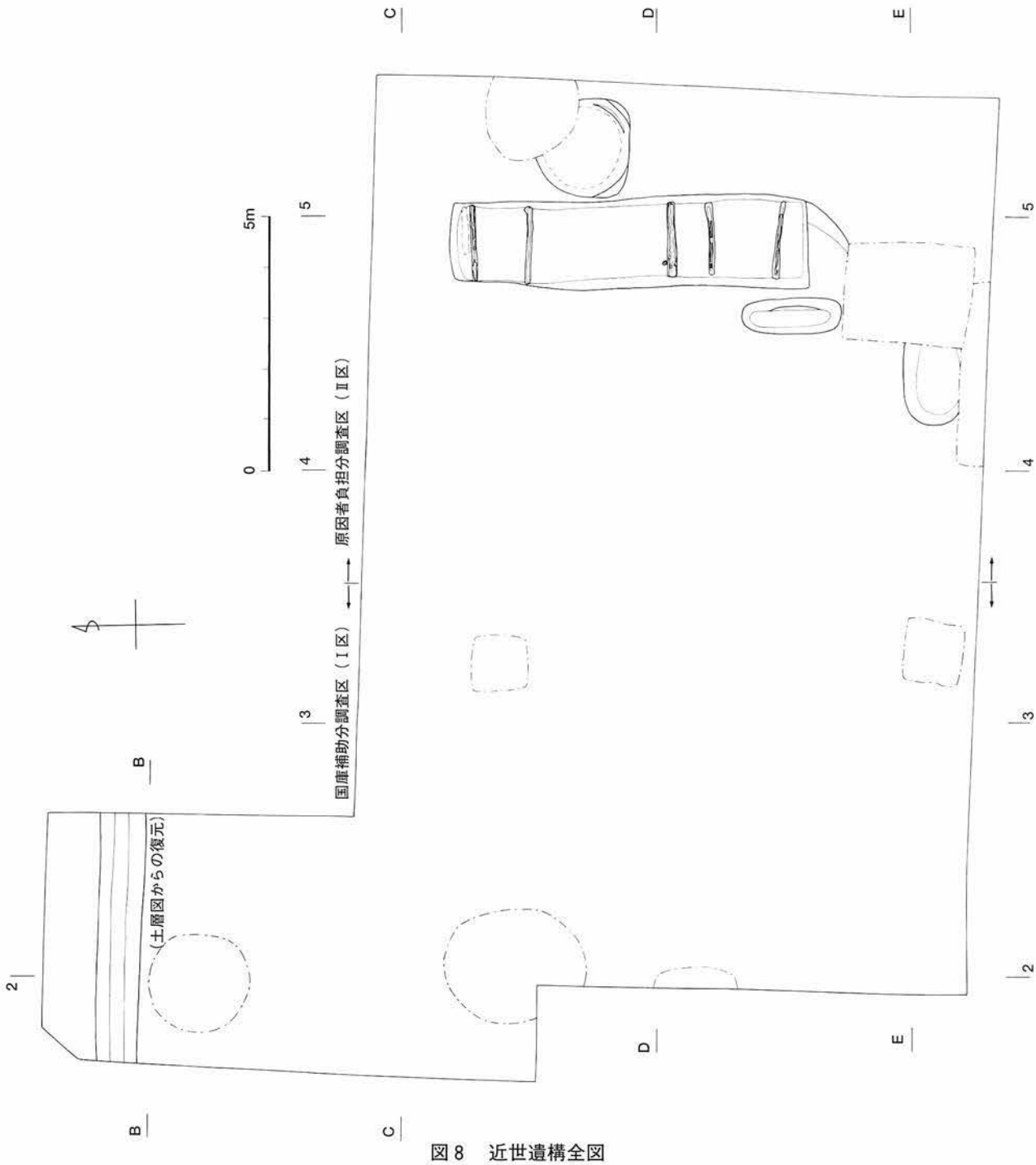


図８　近世遺構全図

れられたような形跡が断面から観察できる。

４．中世前期

ここでいう「中世前期」とは、３の「中世後期」と後述の弥生層との間にある強い粘質の茶褐色土のなかに掘り込まれた遺構群のこと。この茶褐色土が中世の基盤層をなすものであり、当該期の遺構の多くがこの上面から切り込まれている。

２・３－Ｄ・Ｅ付近では、この面の５～10cm上面に破砕泥岩による薄い整地面がところどころにみられ、そこからも柱穴等の遺構を検出することができる。

以下では検出した遺構を「ａ.六浦道沿いの遺構群」「ｂ.居住空間の遺構群」「ｃ.鎌倉時代以前の遺

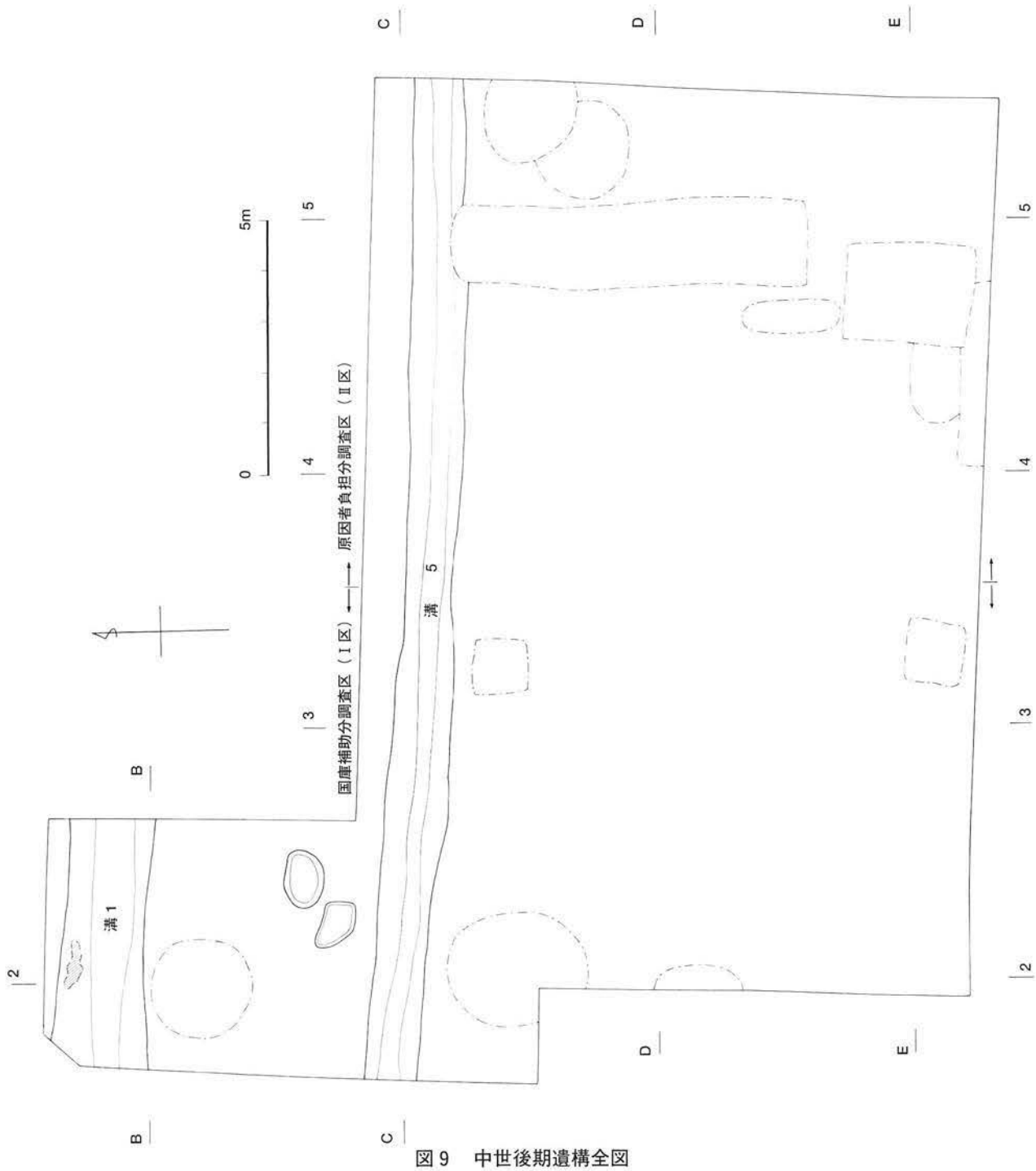


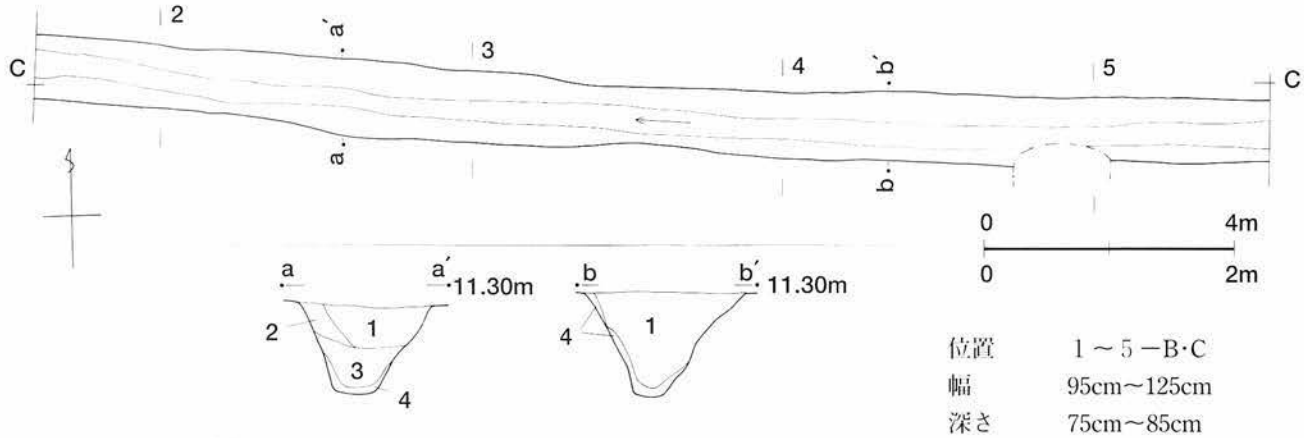
図９　中世後期遺構全図

構群」の３群に大別して記述する。「ａ」は道路側溝や柵列など境界領域に関係する施設を主体とし、「ｂ」は道路から離れた（奥まった）場所にある雨落ち溝や建物、井戸など住環境に伴う施設を主体とする。掘立柱建物に関しては今次の報告では２棟にとどめ、そのほかは原因者負担分報告書に委ねる。「ｃ」は平安時代末期に属する遺構を指す。また「ｄ」として遺構外採集遺物の項を設けた。

ａ．六浦道沿いの遺構群

溝１～４（図12～14／表１～７）

１～４すべて、１・２－Ａ・Ｂの調査区張出部北辺で重なり合って検出された東西溝で、位置と方向からみて六浦道の側溝であることは間違いない。先にも触れたように溝１は中世後期に属するが、記述



1．茶褐色粘質土　泥岩塊多く含み、固くしまる
2．茶褐色粘質土　1とほぼ同土だが、混入物少ない
3．明茶褐色粘質土　泥岩が非常に多く、固くしまる
4．黒褐色粘質土　粘性強く、焼土・炭化物等を含む

位置　1～5－B·C
幅　95cm～125cm
深さ　75cm～85cm
断面形状　薬研形.V字形
流下方向　東→西
主軸方位　N－87°－W

図10　溝5

の都合上本項で扱う。土層断面については図5を参照。

溝1は皿状の断面のやや浅い溝で、底近くの埋土中には大量の炭化物とともに、15世紀ごろの土師器皿の集中出土がみられた。上方は削り取られているが、現況で幅251cm、深さ50cm前後の規模である。下端幅は広いところで約80cmほど。なお、中世後期～末期になって、側溝が浅い皿状に変化してくる傾向は若宮大路とも共通する。

溝1'は1に堆積した炭化物を除くと現れる逆台形の溝である。堆積状況から1は1'の掘り直しであることを確認した。道路側の岸では両者のあいだに約35cmの嵩上げが見られる。注意を要するのは、南側落込みの肩が先述の溝5の落ち込み肩よりも50cm以上高いことで、このことは溝南側に土塁、あるいは築地のような高まりがあった可能性を示唆するものかも知れない。

溝2は南側の落ち込み肩を1または1'の南側肩と共有しており、埋土もまた似ているところから、規模と形態は異なってはいても年代的には連続しているとみてよい。深い逆台形の断面をもつ、幅・深さとも約1m強の溝。

なお溝2と次に紹介する溝3とのあいだに、土層断面にはやはり側溝とおぼしい落ち込みの一部が認められる。おそらく逆台形になると想像できるが、詳細は不明。

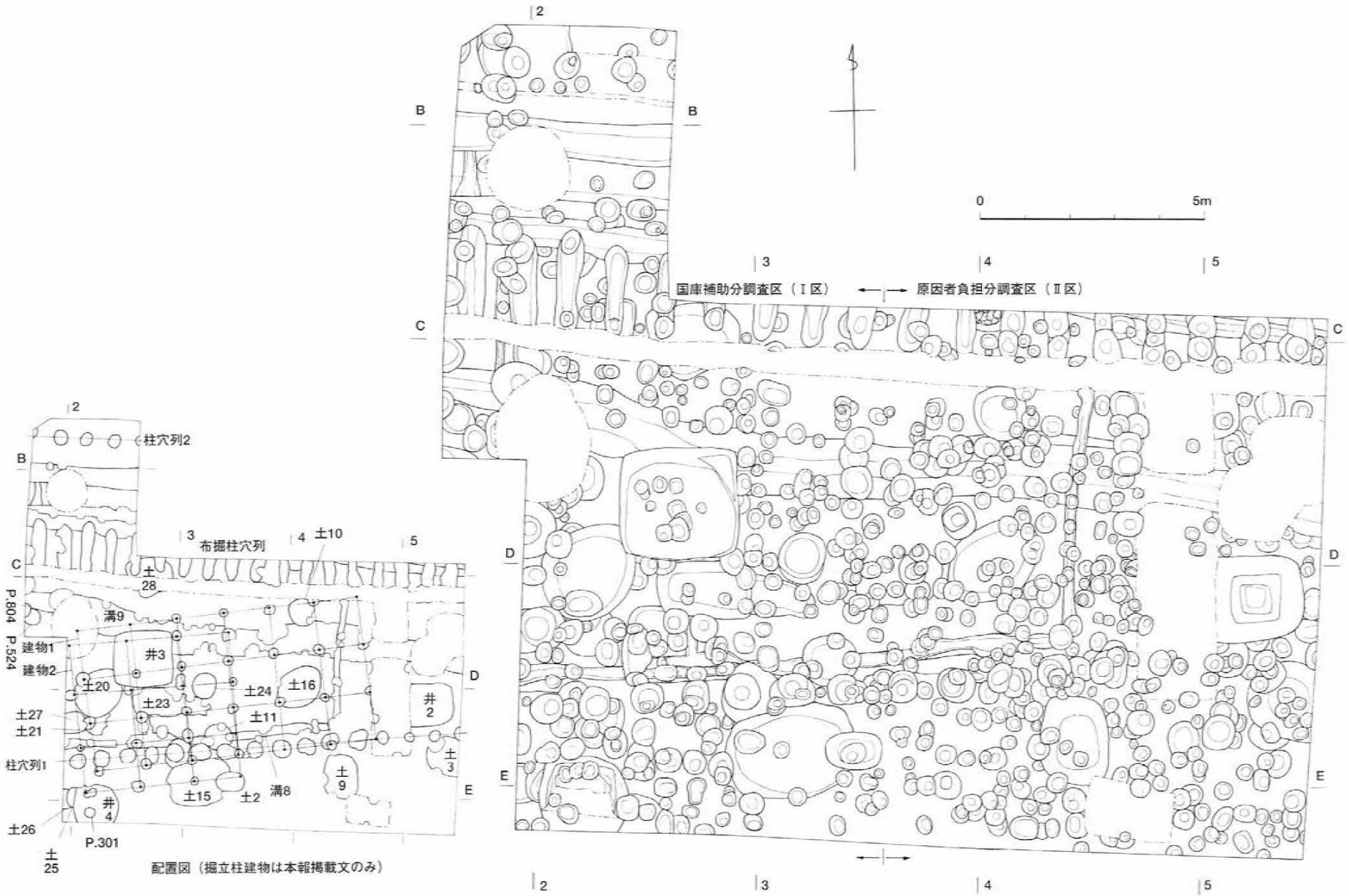
溝3は以上3本の側溝の南壁の下にある。北側は溝2などに削り取られているが、非常に整った逆台形の断面をもつ。深さ74cm。

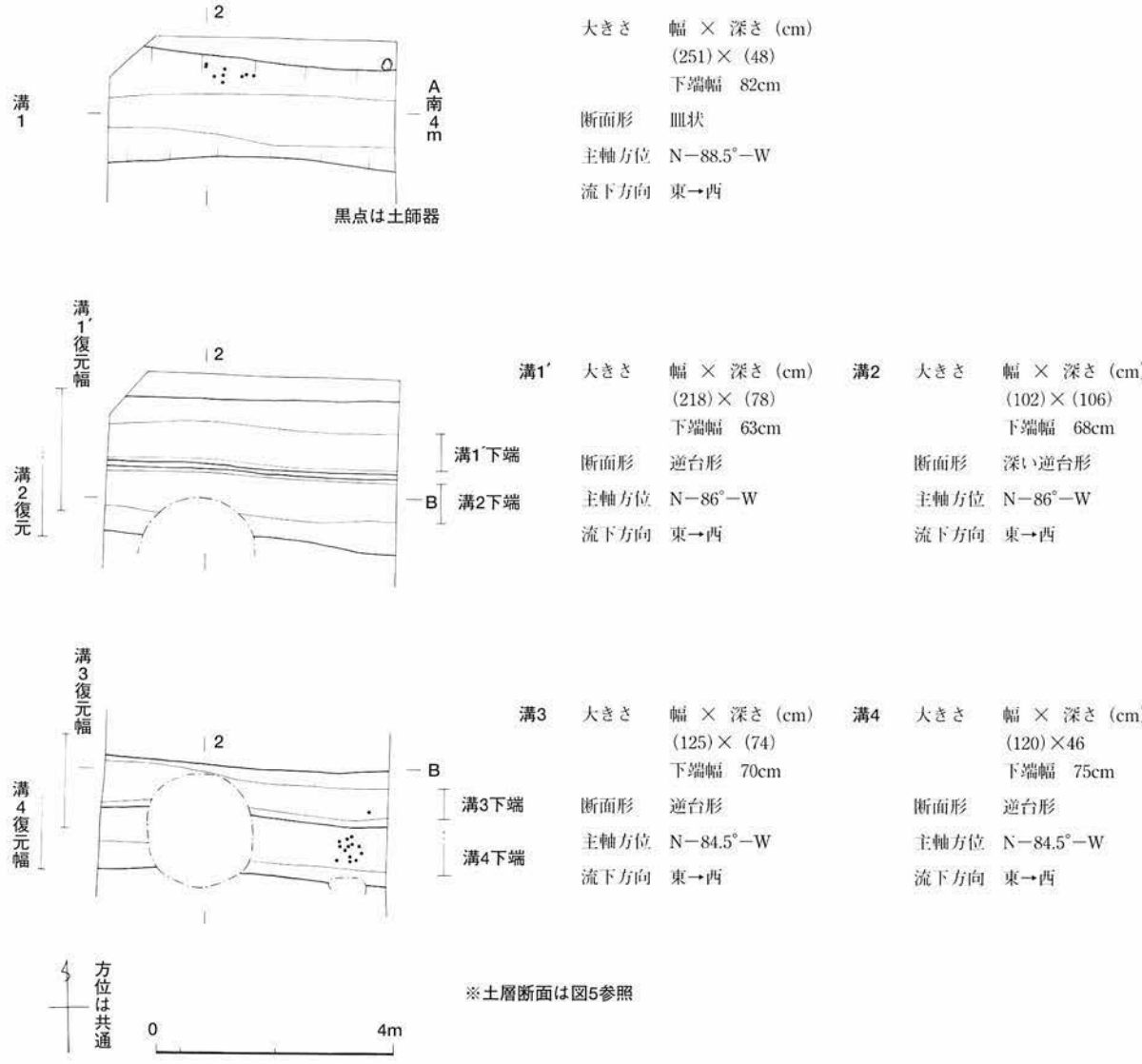
溝3'は3の下に底辺だけのぞいている溝で、これもおそらく逆台形になるものと想像できる。位置からみて3は3'の浚渫と考えられる。

溝4はこれらから少し内側（南側）に入った位置にあるが、六浦道対岸（北側）の側溝の所在が不明なので、道幅自体に変化があったかどうかはつかめない。六浦道側の壁が溝3・3'によって失われており全容は不明だが、これもおそらく整った逆台形になるのだろう。深さは46cmと浅い。溝底にはT種（手づくね）を主体とした鎌倉時代前期以前の土師器集中出土がみられる。

溝4の下にはさらに浅い落ち込みが断面に認められるが、これが側溝であるかどうかは不明である。とすれば、溝4が確実な側溝としてはもっとも古いものである可能性があり、引いては六浦道が今の場所に成立した当初の溝である可能性も否定できない。

図11　中世前期遺構全図





溝1
大きさ　幅 × 深さ（cm）
(251)×（48）
下端幅　82cm
断面形　皿状
主軸方位　N－88.5°－W
流下方向　東→西

溝1′
大きさ　幅 × 深さ（cm）
(218)×（78）
下端幅　63cm
断面形　逆台形
主軸方位　N－86°－W
流下方向　東→西

溝2
大きさ　幅 × 深さ（cm）
(102)×(106)
下端幅　68cm
断面形　深い逆台形
主軸方位　N－86°－W
流下方向　東→西

溝3
大きさ　幅 × 深さ（cm）
(125)×（74）
下端幅　70cm
断面形　逆台形
主軸方位　N－84.5°－W
流下方向　東→西

溝4
大きさ　幅 × 深さ（cm）
(120)×46
下端幅　75cm
断面形　逆台形
主軸方位　N－84.5°－W
流下方向　東→西

図12　溝１～４（六浦道側溝）

柱穴列２（図15）

調査区張出部北辺、溝１・１'の下に検出された。層位的にみれば六浦道沿いの遺構群中ではもっとも古い一群に属し、溝３または４に平行しているが、両者との関係は明確でない。

確実な並びが４口しか確認できず、柱間にもややばらつきがあるが、直径60～70cm、深さ40cm内外の丸い柱穴が平均122cm間隔で並んでいる。

道路脇に柱穴が並ぶありかたは、近在でもかつて筆者が調査した大倉幕府周辺遺跡群二階堂字荏柄38番１地点（『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』９　鎌倉市教育委員会1993）に代表的な例があり、また同じく大倉幕府周辺遺跡群雪ノ下三丁目606番１地点（同前）などで見つかっている。柵か塀のようなものなのだろうか。

布掘柱穴列（図16／表８・９）

Ｃ軸北側に、南北に並んだ二つの柱穴を溝でつないだ布掘遺構が東西に並んでいる。現況17間で、東西の調査区外へさらに延びることは間違いない。平均の間隔は約109cmで、これはだいたい当時の建物柱間の半分の長さに相当する。

これも前出の大倉幕府周辺遺跡群二階堂字荏柄38番１地点に、同様の例がある。詳細はいまだ不明と

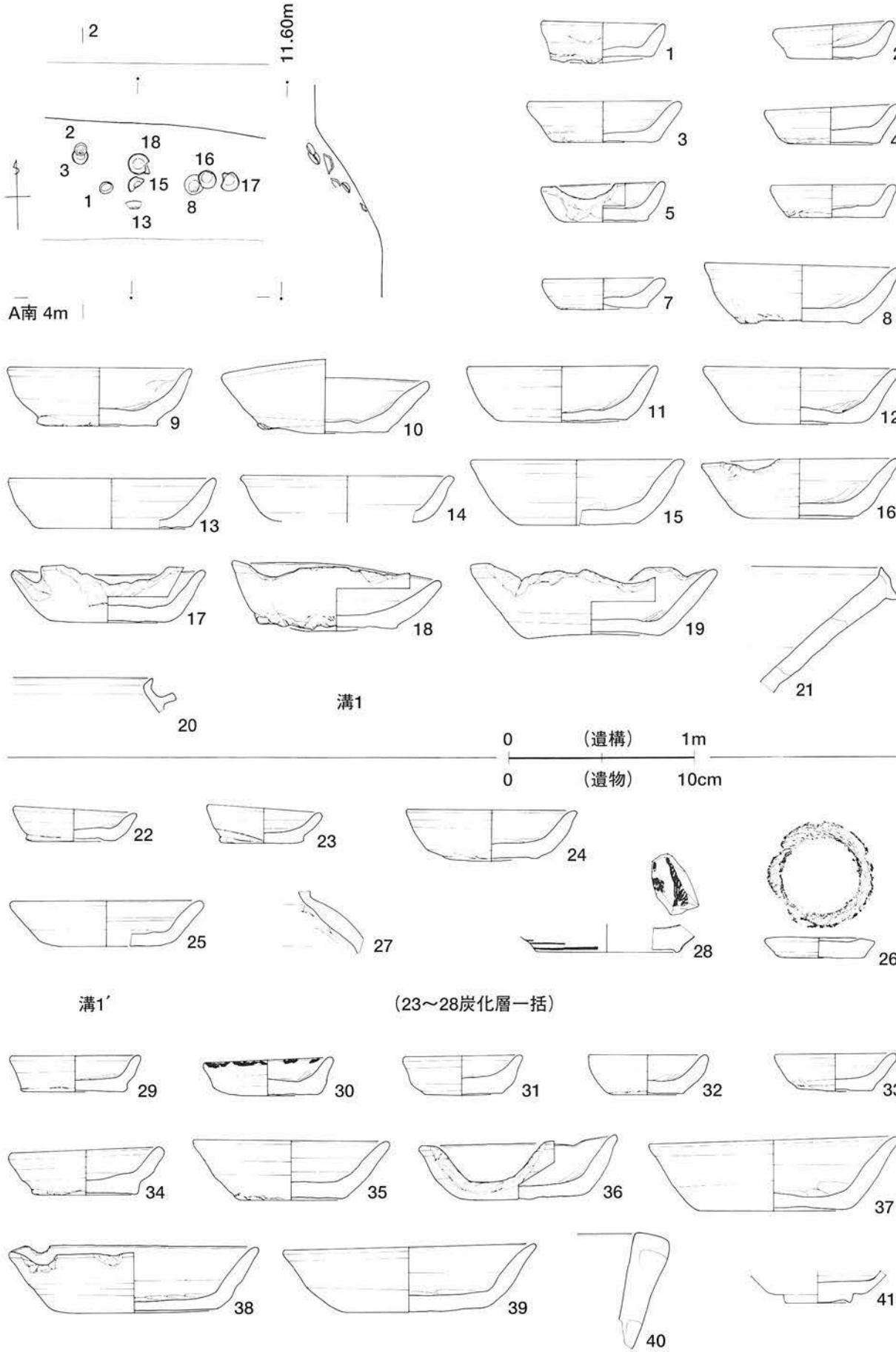


図13　溝１・１′出土遺物

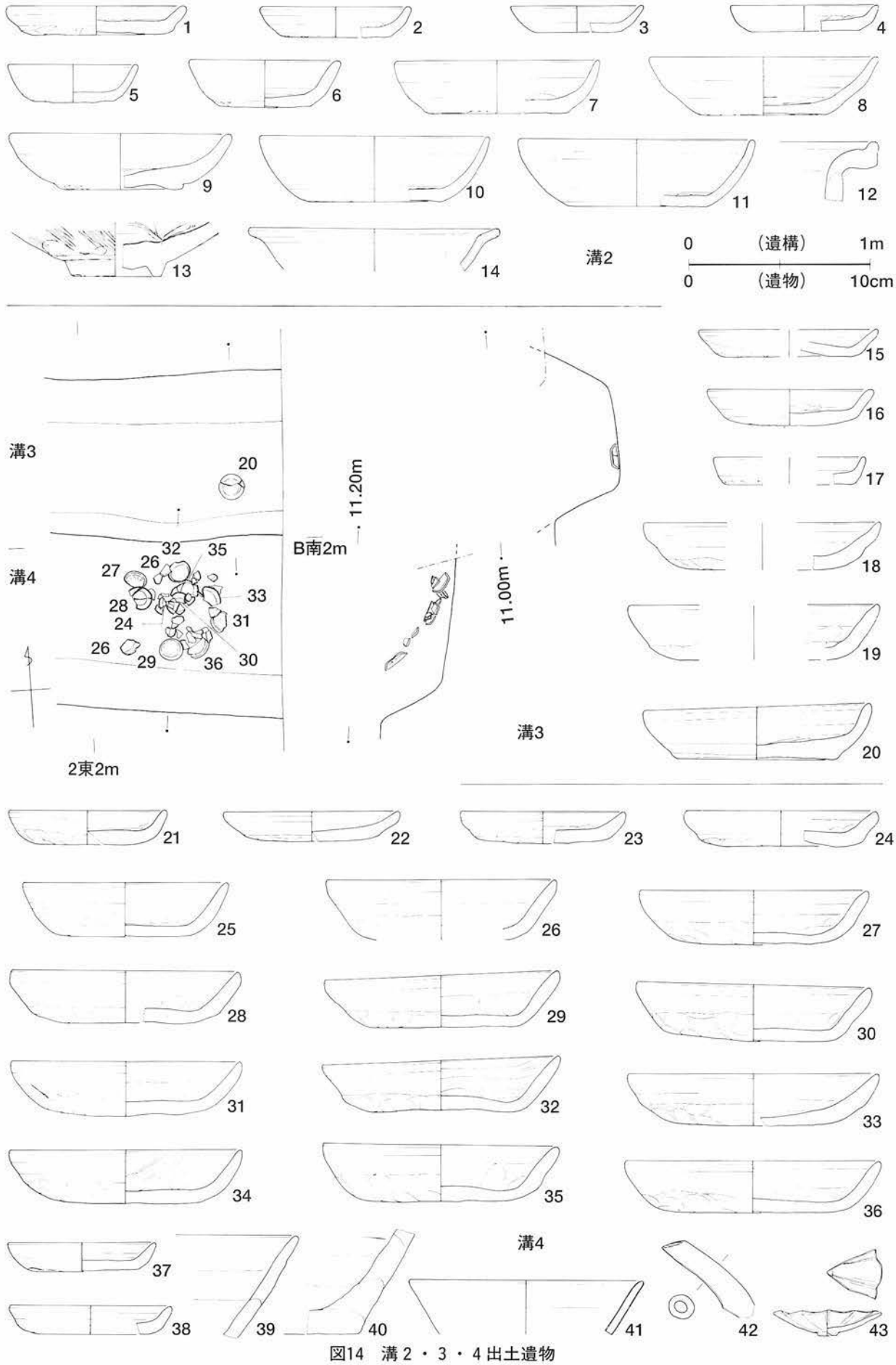


図14　溝２・３・４出土遺物

図13	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径6.8cm　底経5.7cm　器高2.2cm　せいけい　ロクロ　胎土　赤色粒子　雲母　色調　灰橙色
2	かわらけ	大きさ　口径6.6cm　底経4.9cm　器高21.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　礫　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
3	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経5.6cm　器高2.3cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
4	かわらけ	大きさ　口径7.3cm　底経5.1cm　器高2.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　赤色粒子　微砂粒　色調　灰橙色
5	かわらけ	大きさ　口径6.8cm　底経4.5cm　器高2.1cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　赤色粒子　針状物質　色調　橙褐色　備考　口縁部を故意に打ち欠く　板状圧痕
6	かわらけ	大きさ　口径6.8cm　底経5.2cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　赤色粒子　微砂粒　色調　灰橙色　備考　内底部に針様の掻傷　板状圧痕
7	かわらけ	大きさ　口径6.8cm　底経4.8cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
8	かわらけ	大きさ　口径10.6cm　底経6.5cm　器高3.1cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　雲母　粗砂粒　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
9	かわらけ	大きさ　口径10.0cm　底経6.5cm　器高3.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　金雲母　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
10	かわらけ	大きさ　口径11.2cm　底経6.8cm　器高2.9～4.0cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　金雲母　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
11	かわらけ	大きさ　口径10.4cm　底経7.2cm　器高3.0cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　雲母　砂粒　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
12	かわらけ	大きさ　口径10.6cm　底経6.5cm　器高3.1cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
13	かわらけ	大きさ　口径11.4cm　底経8.6cm　器高2.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
14	かわらけ	大きさ　口径11.6cm　せいけい　ロクロ　胎土　赤色粒子　雲母　色調　灰橙色　備考　小片
15	かわらけ	大きさ　口径11.6cm　底経6.7cm　器高2.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　微砂粒　色調　橙灰褐色
16	かわらけ	大きさ　口径10.7cm　底経6.4cm　器高3.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　色調　橙褐色　備考　口縁一部を故意に欠く　板状圧痕
17	かわらけ	大きさ　口径10.6cm　底経6.4cm　器高3.0cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　粘土粒　砂粒　色調　灰橙褐色　備考　口縁部２箇所を故意に欠く　板状圧痕
18	かわらけ	大きさ　口径11.4cm　底経7.6cm　器高3.5cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　雲母　色調　灰橙色　備考　口縁の一部を故意に欠く　板状圧痕
19	かわらけ	大きさ　口径13.5cm　底経7.4cm　器高2.9～4.0cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒子　色調　灰橙色　備考　口縁部を故意に欠く　板状圧痕
20	土　鍋	口縁部破片　口径23.2cm　せいけい　輪積後ナデ　胎土　表面肌色　胎芯部黒灰色　きめ細やか　備考　鍔下にすす付着
21	常　滑 捏　鉢	口縁部破片　せいけい　輪積　外面　刷毛目調整　胎土　灰色　針状物質　小礫を多く含む粗土　表面　赤褐色
22	かわらけ	大きさ　口径6.8cm　底経4.8cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
23	かわらけ	大きさ　口径6.2cm　底経4.6cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　針状物質　色調　灰橙色　備考　板状圧痕

表１　溝１出土遺物観察表

図13	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
22	かわらけ	大きさ　口径6.8cm　底経4.8cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　針状物質　小礫粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
23	かわらけ	大きさ　口径6.2cm　底経4.6cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　針状物質　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
24	かわらけ	大きさ　口径9.2cm　底経5.1cm　器高2.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　粘土粒　微砂粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
25	かわらけ	大きさ　口径10.6cm　底経7.0cm　器高2.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒子　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
26	土製品	大きさ　口径6.0cm　底経4.8cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　小礫粒　針状物質　色調　灰橙色
27	瓦　質 土風呂	口縁部破片　せいけい　輪積み　外面へら磨き　胎土　赤灰色　表面　灰黒色　赤色粒含むがきめ細やか
28	舶　載 染付鉢	底部破片　底経4.8cm　せいけい　ロクロ　高台部削りだし　素地　白色　黒色粒微量　きめ細やか　文様　内底面．外面に染め付け
29	かわらけ	大きさ　口径7.1cm　底経5.6cm　器高2.1cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　粘土粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
30	かわらけ	大きさ　口径7.0cm　底経4.8cm　器高2.0cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　色調　橙褐色　備考　口縁部に油媒付着
31	かわらけ	大きさ　口径6.5cm　底経4.3cm　器高2.1cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
32	かわらけ	大きさ　口径6.5cm　底経3.9cm　器高2.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　小礫粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
33	かわらけ	大きさ　口径6.0cm　底経4.0cm　器高2.1cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
34	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経5.7cm　器高2.4cm　せいけい　ロクロ　胎土　針状物質　雲母　色調　灰橙色　備考　板状圧痕　内底部剥離
35	かわらけ	大きさ　口径10.6cm　底経5.7cm　器高3.3cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
36	かわらけ	大きさ　口径10.8cm　底経6.9cm　器高3.0cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　小礫粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
37	かわらけ	法量　口径13.6cm　底経8.1cm　器高3.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
38	かわらけ	大きさ　口径13.6cm　底経8.8cm　器高3.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　粘土粒　色調　橙褐色　備考　口縁部２箇所を故意に欠く　板状圧痕
39	かわらけ	大きさ　口径13.8cm　底経8.0cm　器高3.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　金雲母　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
40	瓦　質 手あぶり	口縁部破片　せいけい　輪積み　外面へら磨き　胎土　灰白色　表面　灰黒色　砂粒を含むが細やか　備考　輪花か？
41	瀬　戸 小　鉢	底部破片　底経　3.6cm　せいけい　ロクロ　高台部削り出し　胎土　黄灰色　細やか　釉薬　淡い黄緑色

表２　溝１′出土遺物観察表

図14	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径10.0cm　底経7.4cm　器高1.6cm　せいけい　手づくね　口縁部、内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色
2	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経6.0cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
3	かわらけ	大きさ　口径6.3cm　底経4.6cm　器高1.45cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　砂粒　小礫粒　色調　淡灰褐色

表３　溝２出土遺物観察表（１）

図14	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
4	かわらけ	大きさ　口径8.2cm　底経6.0cm　器高1.4cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　白色粒　色調　灰褐色
5	かわらけ	大きさ　口径7.2cm　底経4.6cm　器高2.1cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
6	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経5.2cm　器高2.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　砂粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
7	かわらけ	大きさ　口径11.4cm　底経8.0cm　器高2.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　粘土粒　色調　橙色
8	かわらけ	大きさ　口径12.8cm　底経7.2cm　器高3.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
9	かわらけ	大きさ　口径12.4cm　底経7.0cm　器高3.1cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　赤色粒　砂粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
10	かわらけ	大きさ　口径12.8cm　底経7.4cm　器高3.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　金雲母　砂粒　色調　淡橙色
11	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経7.6cm　器高3.75cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　暗橙色
12	常滑か め	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　灰黒色　砂粒　小礫粒　表面　暗褐色　備考　肩部に降灰
13	青磁碗	底部破片　底経5.0cm　せいけい　ロクロ　素地　灰色　緻密　釉薬　暗灰緑色　外面下位から底部露胎　文様　内面画花と櫛描き　外面櫛描き
14	青磁碗	口縁部破片　口径14.0cm　せいけい　ロクロ　素地　灰白色　緻密　釉薬　青灰色　文様　内面に蓮弁　備考　竜泉窯

表４　溝２出土遺物観察表（２）

図14	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
15	かわらけ	大きさ　口径10.0cm　底経7.6cm　器高1.4cm　せいけい　手づくね　口縁部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色　備考　二次焼成
16	かわらけ	大きさ　口径9.2cm　底経4.4cm　器高2.0cm　せいけい　手づくね　口縁部ナデ　胎土　砂粒　色調　灰褐色
17	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経7.2cm　器高1.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡橙色
18	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経7.0cm　器高2.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色
19	かわらけ	大きさ　口径14.0cm　底経9.0cm　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色
20	かわらけ	法量　口径12.7cm　底経9.0cm　器高2.95cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　砂粒　色調　橙色

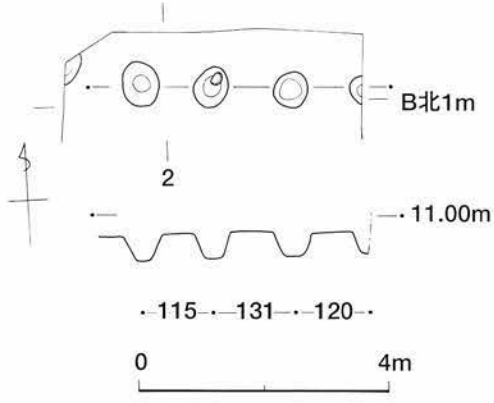
表５　溝３出土遺物観察表

図14	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
21	かわらけ	大きさ　口径8.8cm　底経5.0cm　器高1.9cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　粘土粒　砂粒　色調　灰橙色
22	かわらけ	大きさ　口径9.8cm　底経4.0cm　器高1.65cm　せいけい　手づくね　胎土　白色粒　粘土粒　砂粒　色調　灰橙色
23	かわらけ	大きさ　口径9.2cm　底経6.0cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　白色粒　砂粒　色調　橙色
24	かわらけ	大きさ　口径10.8cm　底経6.2cm　器高1.95cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡橙色
25	かわらけ	大きさ　口径11.4cm　底経6.0cm　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　白色粒　砂粒　色調　淡灰褐色

表６　溝４出土遺物観察表（１）

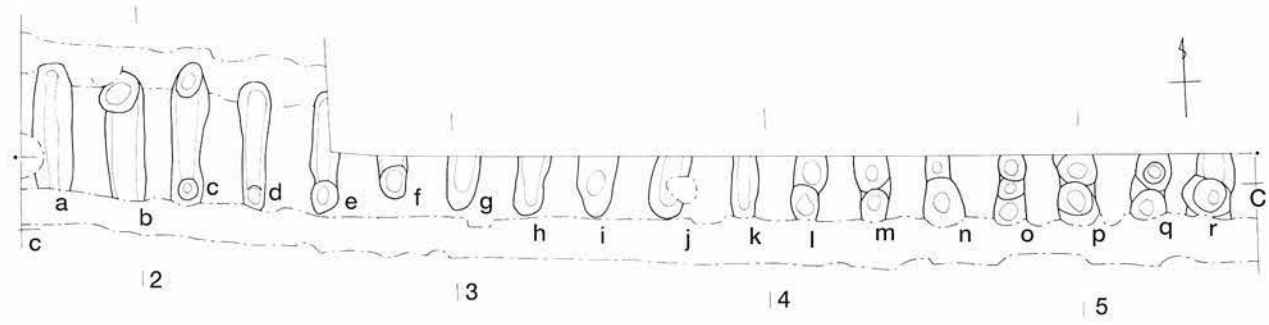
図14	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
26	かわらけ	大きさ　口径12.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　色調　淡灰褐色
27	かわらけ	大きさ　口径12.8cm　底経5.7cm　器高3.1cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　白色粒　粘土粒　白色粒　砂粒　色調　灰橙色
28	かわらけ	大きさ　口径12.8cm　底経6.2cm　器高2.9cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　粘土粒　砂粒　色調　淡灰橙色
29	かわらけ	大きさ　口径13.1cm　底経7.75cm　器高2.9cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　雲母　砂粒　色調　淡灰褐色
30	かわらけ	大きさ　口径13.1cm　底経5.2cm　器高3.1cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　粘土粒　砂粒　色調　暗灰橙色　備考　板状圧痕
31	かわらけ	大きさ　口径12.8cm　底経5.8cm　器高3.05cm　せいけい　手づくいね　胎土　針状物質　赤色粒　粘土粒　砂粒　色調　備考　板状圧痕
32	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経7.3cm　器高2.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　白色粒　粘土粒　砂粒　色調　淡灰橙色　備考　二次焼成
33	かわらけ	大きさ　口径14.0cm　底経8.0cm　器高2.85cm　せいけい　手づくね　胎土　粘土粒　砂粒　色調　淡灰橙色
34	かわらけ	大きさ　口径12.9cm　底経5.5cm　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　粘土粒　砂粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
35	かわらけ	大きさ　口径13.1cm　底経6.9cm　器高3.15cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　色調　淡灰褐色　備考　二次焼成
36	かわらけ	大きさ　口径14.2cm　底経8.0cm　器高2.9cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　粘土粒　貝殻粒　砂粒　色調　淡灰褐色
37	かわらけ	大きさ口径8.2cm　底経6.15cm　器高1.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　赤色粒　砂粒　色調　淡灰褐色
38	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経6.2cm　器高1.6cm　せいけい　ロクロ　胎土　赤色粒子　雲母　色調　灰橙色
39	山茶碗窯こね鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　灰色　白色粒　砂粒　備考　内面に降灰
40	渥美小壺	底部破片　せいけい　輪積み後ロクロ　胎土　暗灰色　白色粒　砂粒　備考　内底部に降灰
41	青磁碗	口縁部破片　口径13.0cm　せいけい　ロクロ　素地　緻密　黄白色　釉薬　黄緑色半透明　文様　無　備考　竜泉窯
42	青白磁水注	注口部破片　注口径1.4cm　注口の長さ6cm　素地　灰白色　緻密　釉薬　水青色透明
43	青白磁皿	法量　口径6.2cm　底経1.0cm　器高1.4cm　せいけい　ロクロ後型入れ　素地　乳白色　緻密　釉薬　淡灰緑色透明

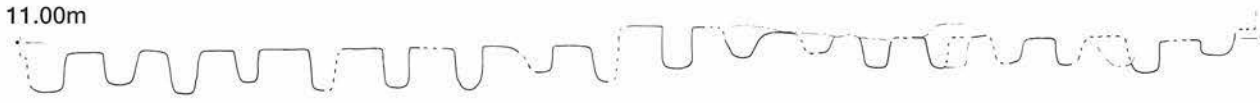
表7　溝4出土遺物観察表（2）



概要　東西方向の柱穴列
位置　1・2−A
柱間　現況3間（平均柱間距離122cm）
主軸方位　N−94°−E
柱穴の大きさ　直径66cm（平均）
深さ41cm（同）
特記事項　六浦道側溝に近接

図15　柱穴列2





—·117·—·99·—·100·—·122·—·113·—·120·—·105·—·110·—·115·—·108·—·123·—·95·—·107·—·112·—·107·—·121·—·96·—

概要	東西方向の布堀状柱穴列　南北に並んだ2個の柱穴を溝でつなぐ
位置	1～5－B・C
規模	現況17間（東西）×1間
柱間	109.4cm（平均）×17
主軸方位	N－86.5°－W
特記事項	築地基礎か

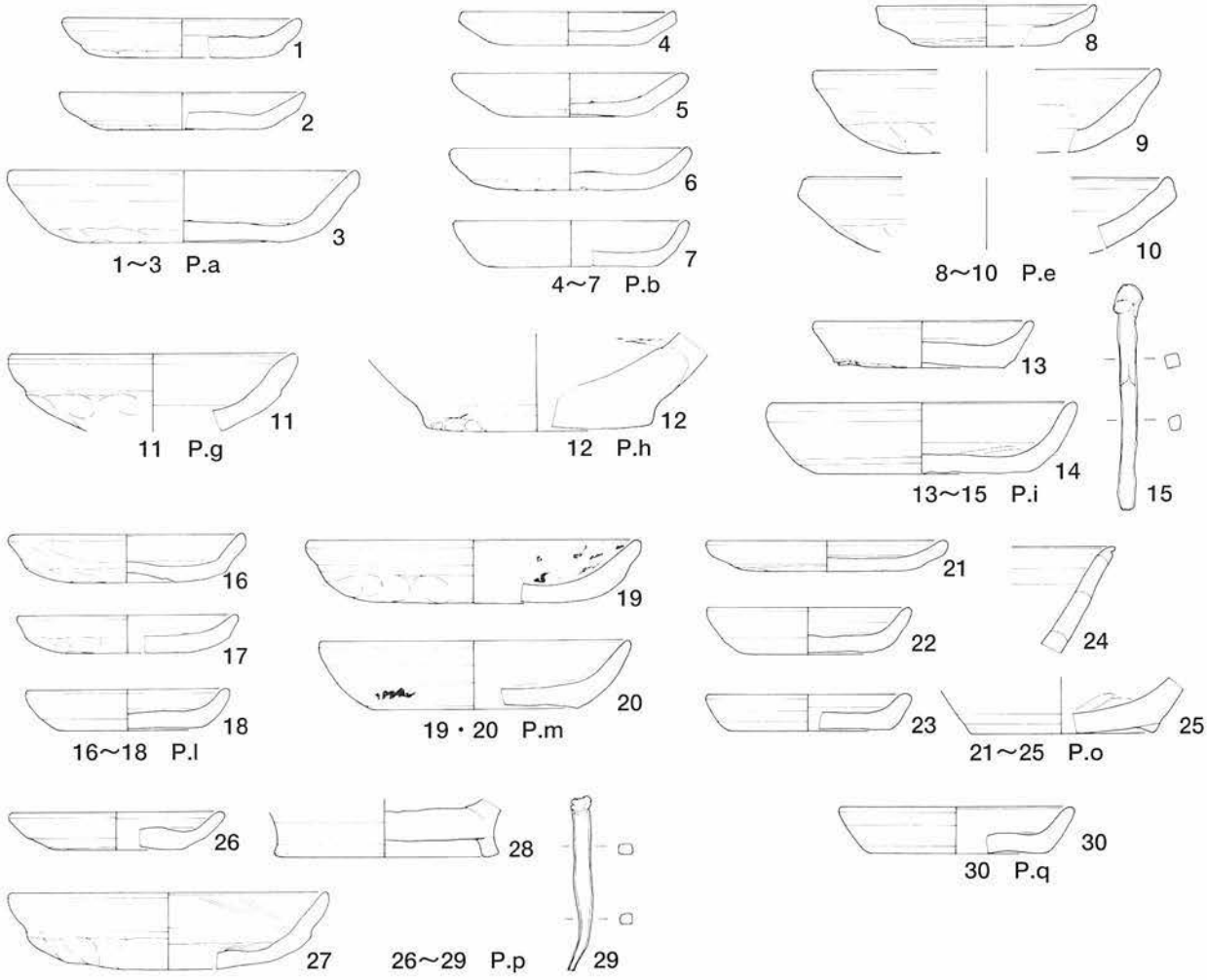


図16　布掘柱穴列、同出土遺物

図16	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径10.0cm　底経6.4cm　器高1.6cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　色調　灰褐色
2	かわらけ	大きさ　口径10.1cm　底経6.8cm　器高1.5cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡褐色
3	かわらけ	大きさ　口径14.6cm　底経9.0cm　器高2.95cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　色調　灰褐色　備考　二次焼成
4	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経5.0cm　器高1.4cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色
5	かわらけ	大きさ　口径9.8cm　底経5.0cm　器高1.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡橙色
6	かわらけ	大きさ　口径10.0cm　底経6.0cm　器高1.75cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色
7	かわらけ	大きさ　口径9.8cm　底経7.2cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
8	かわらけ	大きさ　口径9.2cm　底経4.4cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡橙色
9	かわらけ	大きさ　口径14.4cm　底経6.8cm　器高3.4cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡橙色
10	かわらけ	大きさ　口径15.6cm　底経　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　色調　橙色　備考　二次焼成
11	常　滑 こね鉢	底部破片　底経17.2cm　せいけい　輪積み　胎土　灰色　長石粒　黒色粒　色調　表面赤褐色
12	常　滑 か　め	底部破片　底経9.8cm　せいけい　輪積み　胎土　灰色　小礫粒　砂粒　備考　内面に指頭痕
13	かわらけ	大きさ　口径9.2cm　底経6.8cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　粘土粒　砂粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
14	かわらけ	大きさ　口径12.8cm　底経8.5cm　器高2.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
15	鉄製品 釘	長さ9.2cm　厚さ0.7×0.7
16	かわらけ	大きさ　口径9.2cm　底経5.2cm　器高1.54cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡褐色
17	かわらけ	大きさ　口径9.8cm　底経6.0cm　器高2.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡褐色
18	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経6.0cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
19	かわらけ	大きさ　口径14.0cm　底経10.0cm　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　灰褐色　備考　内面に墨痕
20	土　鍋	大きさ　口径13.0cm　底経8.6cm　器高2.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕　油媒
21	常　滑 こね鉢	大きさ　口径9.8cm　底経6.0cm　器高1.3cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　色調　灰褐色　備考　二次焼成
22	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経6.4cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
23	かわらけ	大きさ　口径8.6cm　底経6.6cm　器高1.5cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　赤色粒　砂粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
24	山茶碗窯 こね鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　褐色　砂粒　細やか

表8　布掘柱穴列出土遺物観察表（1）

図16	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
25	瀬　戸 山茶碗	底部破片　底経7.4cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　高台貼り付け　胎土　灰色　気孔あるが細やか色調
26	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経5.4cm　器高1.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
27	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経8.6cm　器高3.2cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　色調　灰褐色　備考　二次焼成
28	渥美瓶	底部破片　底経9.6cm　せいけい　輪積み　高台貼り付け　胎土　灰色　微砂粒　釉薬　灰緑色　備考　二次焼成
29	鉄製品 釘	長さ7.2cm　厚さ0.6×0.8cm
30	かわらけ	大きさ　口径9.8cm　底経7.4cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙褐色　備考　板状圧痕

表９　布掘柱穴列出土遺物観察表（２）

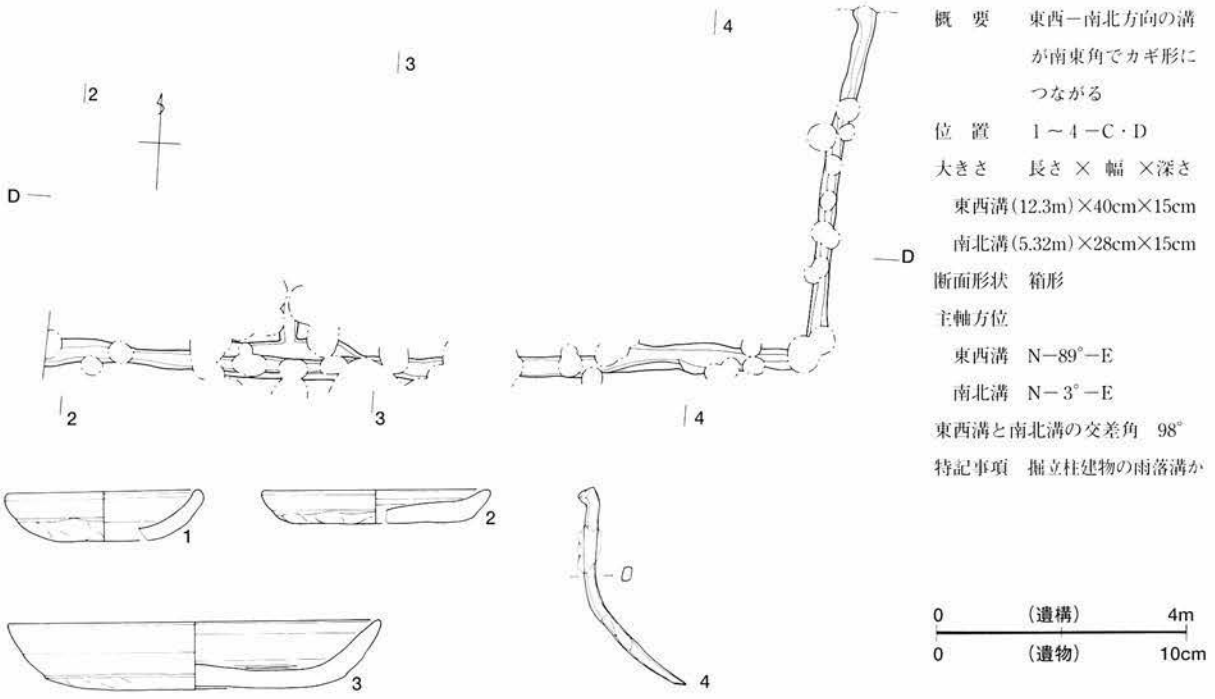


図17　溝８、同出土遺物

図17	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径8.0cm　底経4.0cm　器高2.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡橙色
2	かわらけ	大きさ　口径9.2cm　底経7.0cm　器高1.35cm　せいけい　手づくね　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　色調　淡橙色
3	かわらけ	大きさ　口径15.0cm　底経10.0cm　器高2.7cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　色調
4	鉄製品 釘	長さ9.2cm　厚さ0.55×0.4

表10　溝８出土遺物観察表

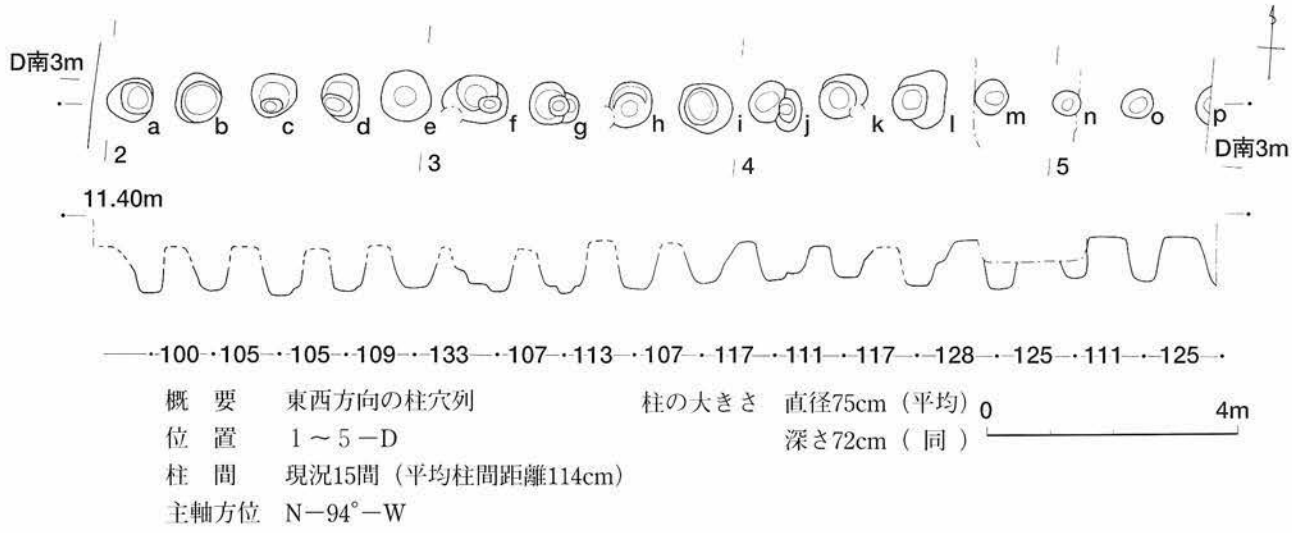


図18　柱穴列1

しておくが、築地の基礎のようなものを想定したいところである。

土師器T種を中心にかなりの出土遺物があり、いずれも13世紀前半を出ない点で整合性を見せる。年代的にも二階堂字荏柄38番1地点と共通する。

b．居住空間の遺構群

溝8（図17／表10）

調査区中央部にカギ形に存在する。4軸の東2m前後を南北に走る溝と、D・E軸の中間付近を東西に走る溝が、4－Dの中央部で出会う形になっている。

幅30～40cm、深さ15cm程度の小さな溝で、後述する柱穴列1や建物群と軸線を同じくしている。掘立柱建物に付随した雨落ち溝の可能性が高いが、組合せとなる建物については原因者負担分報告の際に検討したい。

出土遺物には土師器T種や釘があり、年代的には鎌倉時代前期（13世紀前半まで）に属する。

柱穴列1（図18）

溝8の東西溝部分の南側に平行して、大型の柱穴が連なって列を成す遺構がある。東西の端は調査区の外に延びており、全容はつかめない。現況でも15間の柱間がある。出土遺物は少なかったが、層位や軸線などからみて、これもこの面の大半の遺構と同様、鎌倉時代前期までに属するとみてよい。

柱穴はおおむね円形、大きさは平均で直径75cm、深さ72cmと大きく、柱間距離114cmとおよそこの時期の建物柱間で半間に相当する。先述したようにこの種の遺構は鎌倉時代前期の大倉幕府周辺遺跡群二階堂字荏柄38番1地点に代表的な例がある。

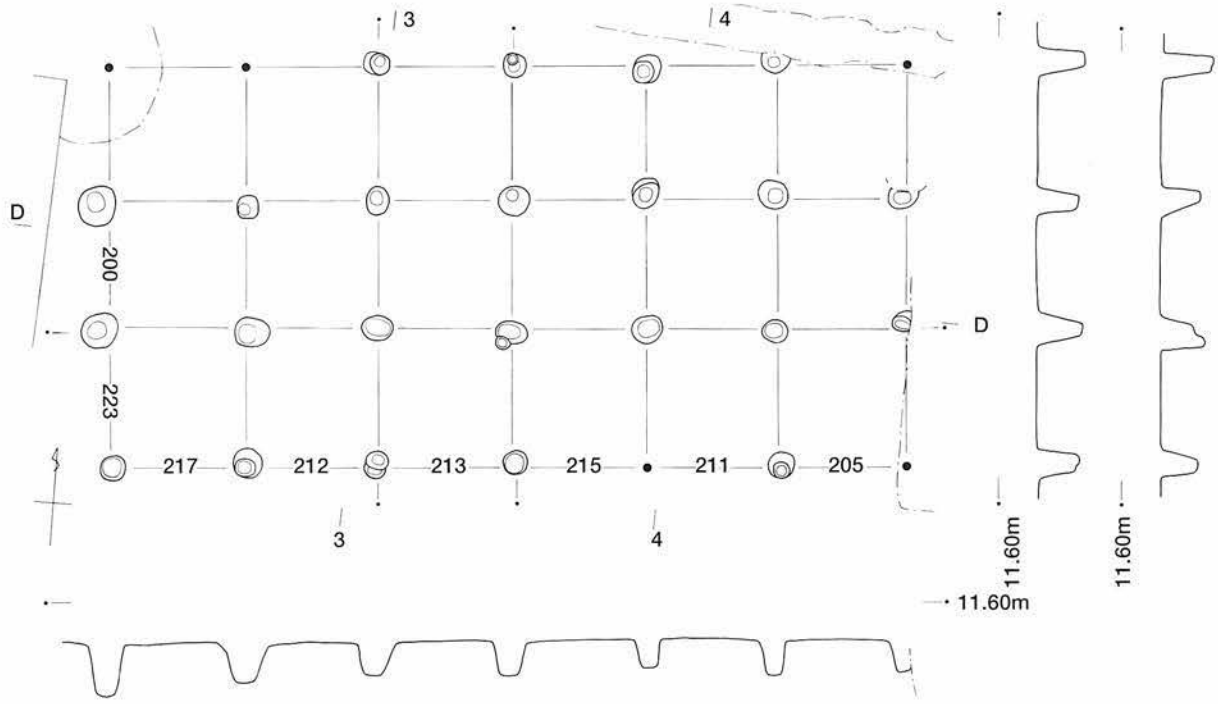
建物1（図19）

柱穴列1に南端を接する位置の2・3・4－C・Dにある掘立柱建物。現況で6間×3間の規模があり、西側は調査区外に延びる可能性もある。面積は約86㎡。

軸線がほかの遺構群と共通しており、時期にさほど差のないことがうかがわれる。

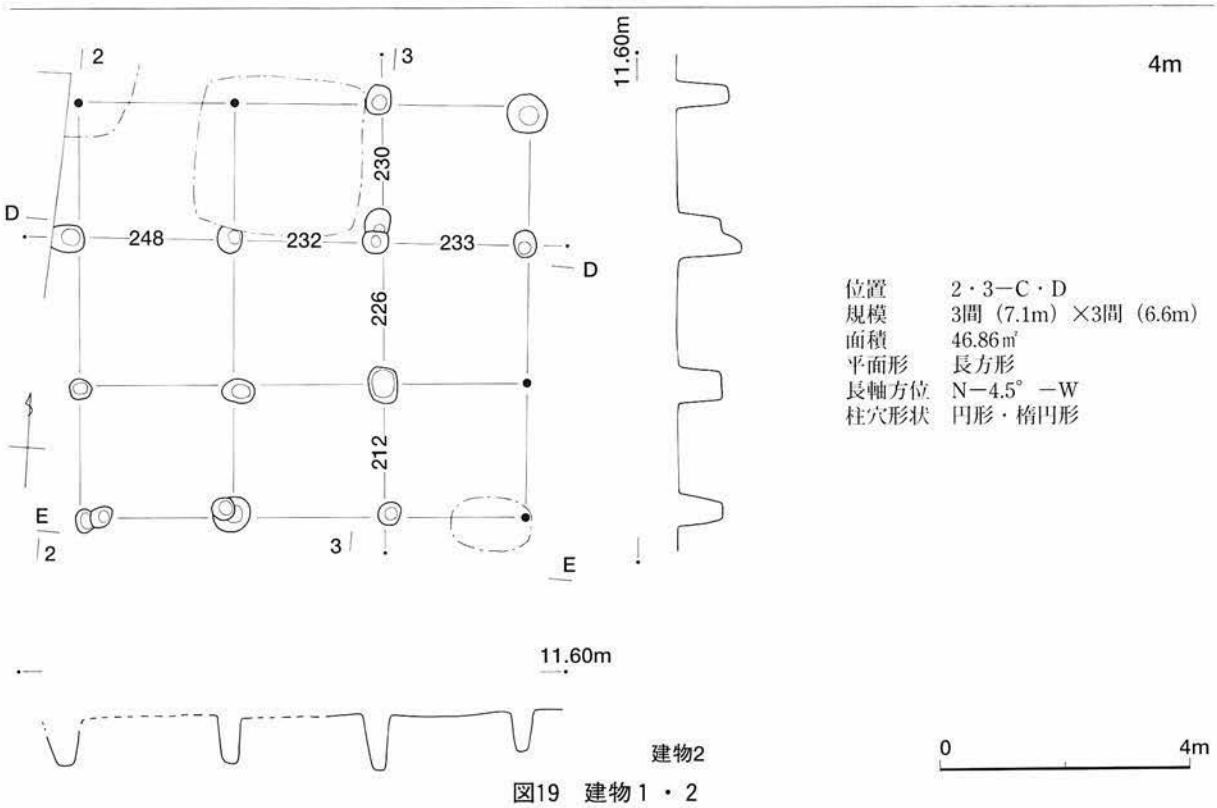
建物2（図19）

建物1の西半分に重なって存在するが、柱穴自体に切合い関係がなく、新旧は不明である。現況3間×3間で、面積約47㎡。



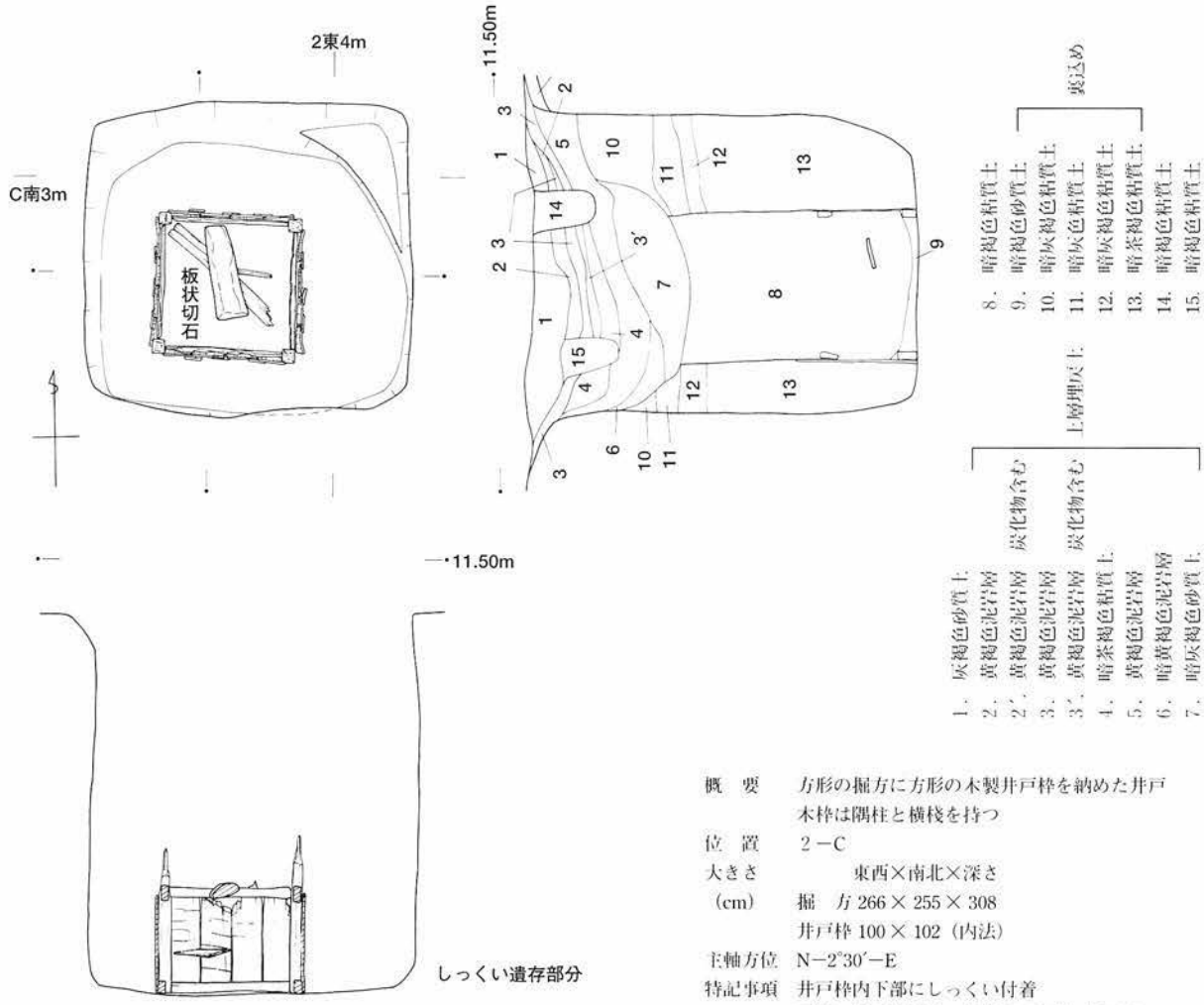
位置　2・3・4－B・C
規模　6間（12.8m）×3間（6.7m）
面積　85.76㎡
平面形　長方形
長軸方位　N－85.5°－E
柱穴形状　円形・楕円形

建物1



位置　2・3－C・D
規模　3間（7.1m）×3間（6.6m）
面積　46.86㎡
平面形　長方形
長軸方位　N－4.5°－W
柱穴形状　円形・楕円形

図19　建物1・2



概　要　方形の掘方に方形の木製井戸枠を納めた井戸
　　木枠は隅柱と横桟を持つ
位　置　2－C
大きさ　　東西×南北×深さ
（cm）　掘　方 266 × 255 × 308
　　井戸枠 100 × 102（内法）
主軸方位　N－2°30′－E
特記事項　井戸枠内下部にしっくい付着
　　下層に凝灰質砂岩の板状切石が投げ込まれている

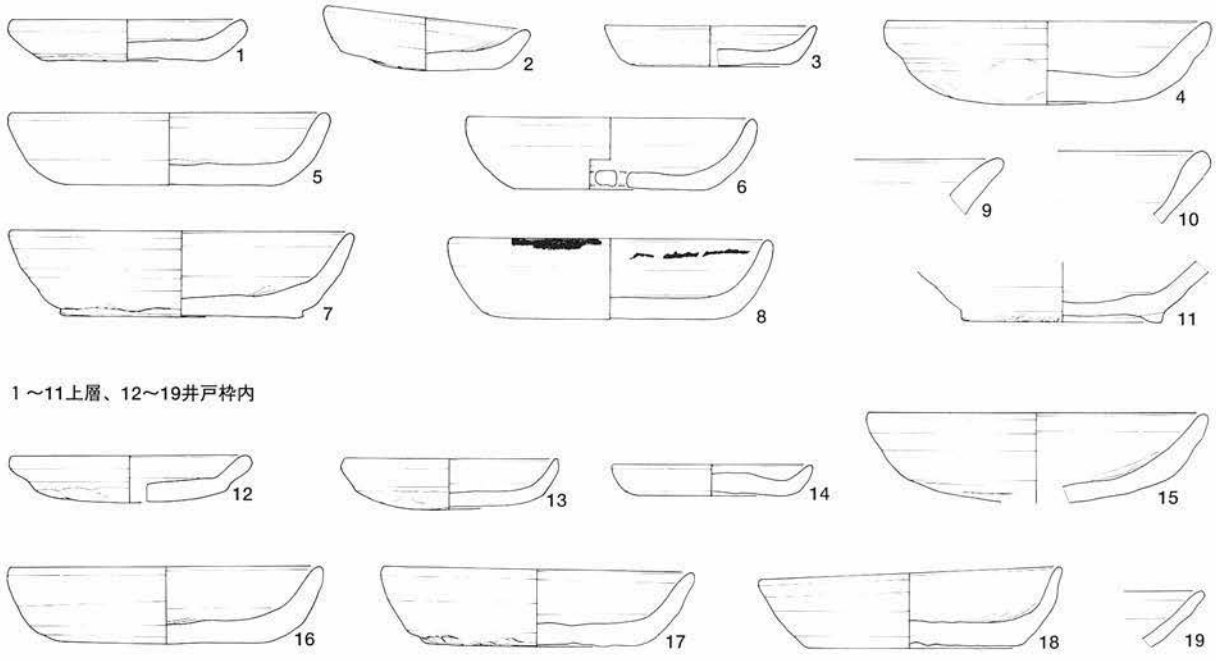


図20　井戸３、同出土遺物

図20	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径9.6cm　底経6.6cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　色調　灰褐色
2	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経6.4cm　器高2.1cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
3	かわらけ	大きさ　口径8.6cm　底経6.6cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
4	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経9.0cm　器高3.3cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　色調　橙褐色
5	かわらけ	大きさ　口径13.0cm　底経9.2cm　器高2.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色　備考　二次焼成　板状圧痕
6	かわらけ	大きさ　口径11.8cm　底経7.8cm　器高2.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　小礫粒　色調　灰褐色　備考　底部中央二カ所に穿孔　板状圧痕
7	かわらけ	大きさ　口径14.0cm　底経9.8cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　色調　灰褐色　備考　ロクロ条痕　板状圧痕
8	かわらけ	大きさ　口径13.0cm　底経10.1cm　器高3.2cm　せいけい　ロクロ　胎土　針状物質　小礫粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕　湯媒付着
9	山茶碗窯こね鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　灰色　黒色粒　白色粒　小礫粒
10	山茶碗窯こね鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　青灰色　黒色粒　白色粒　小礫粒
11	山茶碗	底部破片　底経8.0cm　せいけい　ロクロ　高台貼り付け　胎土　灰色　砂粒　小礫粒　備考　高台畳付きに籾殻痕
12	かわらけ	大きさ　口径9.8cm　底経4.0cm　器高1.9cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色
13	かわらけ	大きさ　口径8.8cm　底経4.8cm　器高2.1cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡橙褐色
14	かわらけ	大きさ　口径8.2cm　底経5.6cm　器高1.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　雲母　色調　灰褐色
15	かわらけ	大きさ　口径15.8cm　底経10.4cm　器高3.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　雲母　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
16	かわらけ	大きさ　口径12.8cm　底経8.6cm　器高3.0cm　せいけい　ロクロ　胎土　針状物質　粘土粒　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
17	かわらけ	大きさ　口径12.6cm　底経9.0cm　器高3.0cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　色調　橙褐色　備考　二次焼成
18	かわらけ	大きさ　口径12.2cm　底経8.6cm　器高3.0cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　雲母　砂粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
19	瀬戸系山茶碗	口縁部破片　せいけい　ロクロ　胎土　乳白色　小礫粒含むがきめ細やか

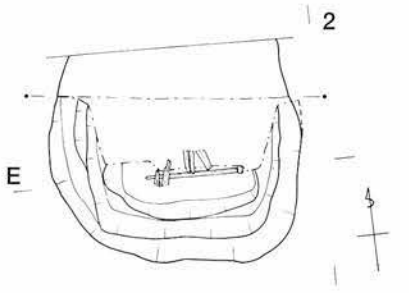
表11　井戸３出土遺物観察表

これも西側調査区外に拡がる可能性がある。軸線は建物１や柱穴列１など主要遺構と共通し、これらとほぼ同時代であることを裏付ける。

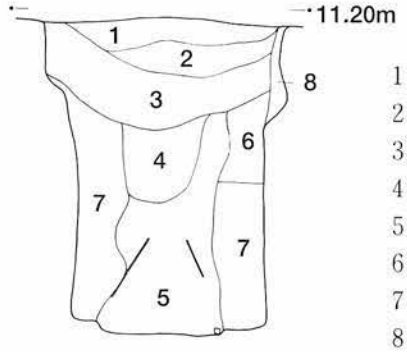
※掘立柱建物については現在までの検討で12棟を検出しているが、本報で扱うのは以上２棟にとどめ、そのほかについては原因者負担分の報告書に委ねたい。

井戸３（図20／表11）

調査区西寄りの２－Ｃにある方形井戸。井戸枠は隅柱と横桟で縦板をとめる形式で、一辺１ｍの規模をもつ。井戸枠内壁にはしっくいが残っており、下層には76×27×13cmの板状に加工した凝灰質砂岩が投げ込まれていた。これも板碑投棄などと同じく、さまざまな儀軌の報告されている井戸鎮めの一例と考えたい。掘方の一辺は266cm、深さは３ｍ強と大きい。井戸廃棄後、上層には厚く泥岩層が敷かれ、生活面が形成されている。



概　要　方形の掘方に方形の木製木枠を納めた井戸
　　木枠は横桟と側板（縦）を確認
位　置　２－D・E
大きさ　　東西×南　北×深さ
（cm）　掘　方 201×174以上×251
　　井戸枠 72×　　×　（内法）
主軸方位　N－2°30′－E



1．暗灰褐色粘質土
2．灰褐色砂質土
3．２と炭化層とが互層状に堆積
4．灰褐色粘質土　］井戸枠内埋土
5．暗灰褐色粘質土　］
6．灰褐色粘質土　］裏込め
7．暗灰色粘質土　］
8．青灰色粘質土

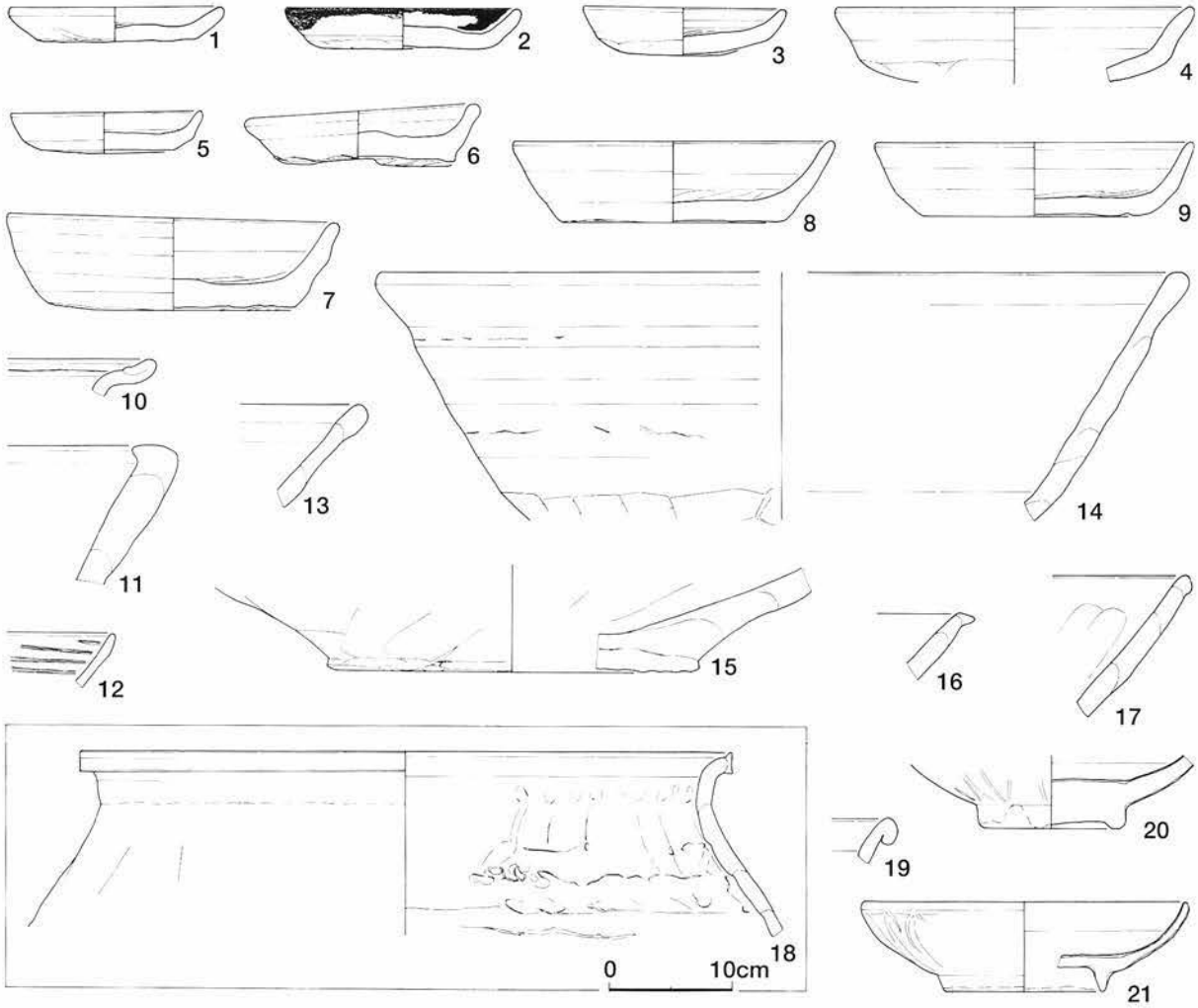


図21　井戸４、同出土遺物

図21	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径8.8cm　底経6.0cm　器高1.4cm　せいけい　手づくね　胎土　粘土粒　色調　黄灰褐色
2	かわらけ	大きさ　口径9.6cm　底経6.4cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　色調　灰褐色　備考　湯媒付着
3	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経4.0cm　器高2.0cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　小礫粒　色調　暗橙色
4	かわらけ	大きさ　口径14.6cm　底経7.8cm　器高3.1cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　灰褐色
5	かわらけ	大きさ　口径7.9cm　底経5.5cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　小礫粒　色調　橙褐色　備考　板状圧痕
6	かわらけ	大きさ　口径9.6cm　底経6.8cm　器高2.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色
7	かわらけ	大きさ　口径13.6cm　底経10.1cm　器高3.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　色調　灰褐色　備考　二次焼成　板状圧痕
8	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経9.2cm　器高3.3cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　粘土粒　色調　灰橙色
9	かわらけ	大きさ　口径13.0cm　底経9.2cm　器高2.95cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　淡灰褐色　備考　板状圧痕
10	伊勢系土鍋	口縁部破片　口径29cm　せいけい　輪積み　胎土　粗砂粒　色調　胎芯部黒灰色　外面淡赤灰色　備考　口縁外面すす付着
11	瓦質火鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　灰橙色　小礫粒　表面灰色
12	瓦質碗	口縁部破片　口径9.0cm　せいけい　ロクロ　内外面へら磨き　胎土　灰色　きめ細やか　表面黒灰色　内面横位暗文
13	山茶碗窯こね鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　灰橙色　長石　小礫粒　表面灰色
14	山茶碗窯こね鉢	口縁から体部破片　口径33.2cm　せいけい　輪積み　外面下部横位へら削り　胎土　暗灰色　長石小礫粒
15	渥美かめ	底部破片　底経15.2cm　せいけい　輪積み　外面へら調整　胎土　灰褐色　黒色粒　細やか　備考　内面に降灰
16	常滑こね鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　赤褐色　砂粒含むがきめ細やか
17	常滑こね鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　灰褐色　長石　小礫粒　表面　茶褐色
18	常滑こね鉢	口縁部破片　口径26.6cm　せいけい　輪積み　胎土　灰色　小礫粒　表面　褐色　備考　肩部に押印　降灰顕著
19	白磁壺	口縁部破片　せいけい　ロクロ　素地　灰白色　黒色粒微量　きめ細やか　釉薬　黄白色で半透明
20	青磁碗	底部破片　底経6.0cm　せいけい　ロクロ　高台削り出し　素地　青灰色　気孔あるが緻密　釉薬　灰緑色透明　文様　外面に複蓮弁　備考　竜泉窯
21	青磁碗	大きさ　口径13.4cm　底経6.6cm　器高3.6cm　せいけい　ロクロ　高台削り出し　素地　灰白色　釉薬　水青色透明　文様　外面に単蓮弁　備考　竜泉窯

表12　井戸4出土遺物観察表

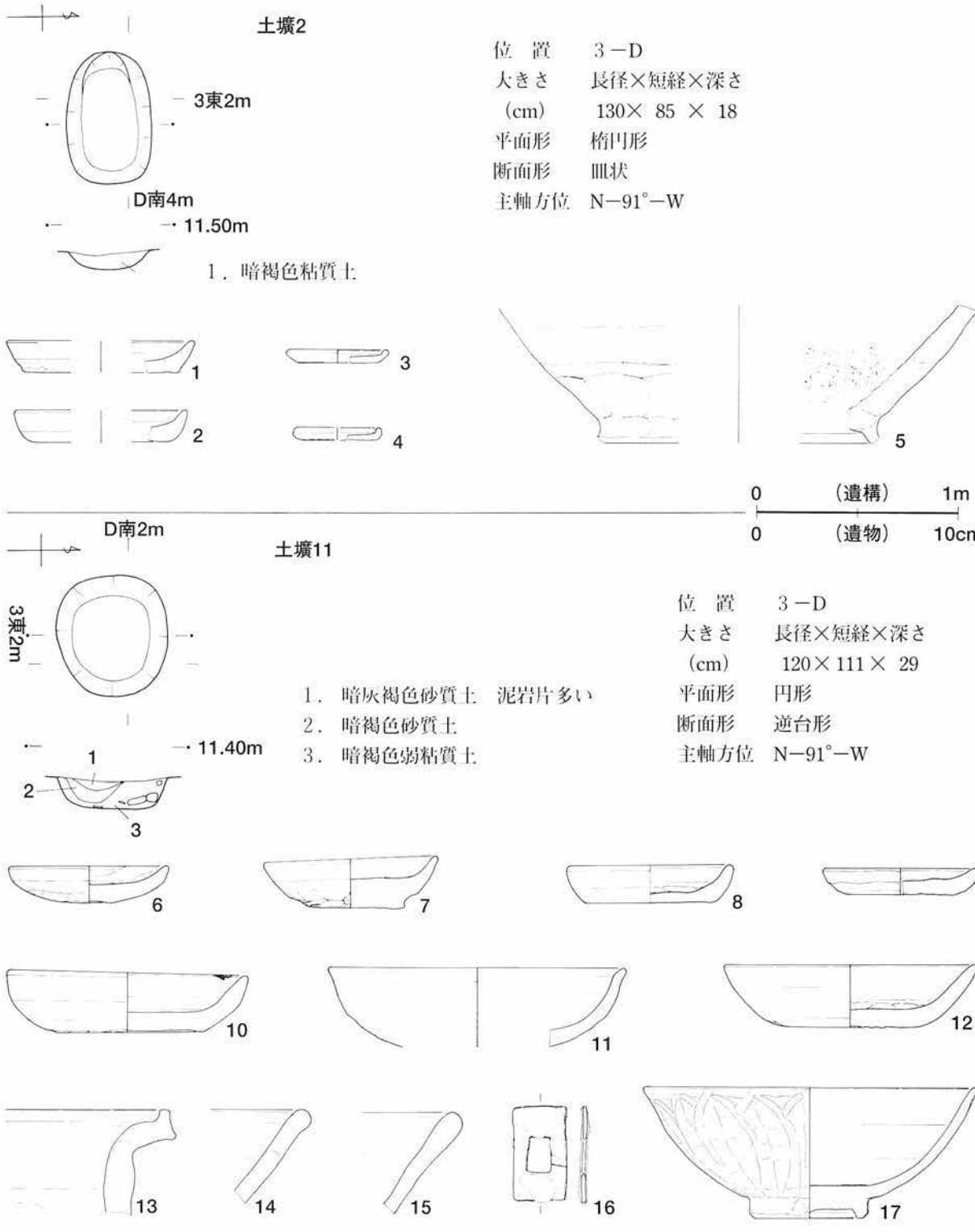


図22　土壙２・11、同出土遺物

出土遺物は13世紀第２四半期ごろの土師器Ｒ種が主体を占める。

井戸４（図21／表12）

調査区南西角の２－Ｄにある方形井戸。南半分が調査区外に出ているため詳細不明だが、掘方一辺２ｍ前後、深さ251cmである。木枠はほとんど壊されて下部がわずかに残っているにすぎないが、残存木材からやはり隅柱と横桟で縦板を固定する形式だとみられる。下端の横桟の長さは72cmあった。この井戸も廃棄後上層を泥岩で固めて、新たに生活面が造りだされている。出土遺物の年代は13世紀第２四半

図22	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径9.4cm　底経7.7cm　器高1.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡灰橙色
2	かわらけ	大きさ　口径8.6cm　底経7.4cm　器高1.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色
3	かわらけ	大きさ　口径5.2cm　底経4.0cm　器高0.65cm　せいけい　ロクロ　胎土　針状物質　砂粒　色調　暗橙色
4	瓦器皿	大きさ　口径4.4cm　底経3.4cm　器高0.65cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　色調　灰色　備考　二次焼成　極小
5	山茶碗窯こね鉢	底部～体部破片　底経14.0cm　せいけい　輪積み後ロクロ　下位回転へら削り　高台貼り付け　胎土　暗灰色　砂粒　小礫粒　備考　内面磨滅著しい

表13　土壙２出土遺物観察表

図22	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
6	かわらけ	大きさ　口径8.0cm　底経2.2cm　器高1.8cm　せいけい　手づくね　胎土　清緻　色調　赤橙色　備考　二次焼成
7	かわらけ	大きさ　口径8.7cm　底経4.8cm　器高2.4cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色
8	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経6.4cm　器高1.85cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　赤色粒　色調　灰褐色
9	かわらけ	大きさ　口径7.8cm　底経5.3cm　器高1.3cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
10	かわらけ	大きさ　口径12.5cm　底経8.1cm　器高3.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
11	かわらけ	大きさ　口径14.8cm　底経7.2cm　器高3.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙褐色
12	かわらけ	大きさ　口径12.6cm　底経6.5cm　器高3.1cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
13	常滑カメ	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　暗灰色　砂粒　表面褐色
14	山茶碗窯こね鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み後ロクロ　胎土　砂粒　小礫粒　色調　暗灰褐色　備考　口縁内面に降灰
15	山茶碗窯こね鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み後ロクロ　胎土　砂粒　小礫粒　色調　灰褐色
16	鉄製品	長さ4.8cm　幅2.6cm　厚さ0.2cm　内穴1.0×1.6cm
17	青磁碗	大きさ　口径16.6cm　底経6.0cm　器高6.5cm　せいけい　ロクロ　素地　暗灰色　緻密　気孔若干　釉薬　暗緑灰色透明　文様　単連弁

表14　土壙11出土遺物観察表

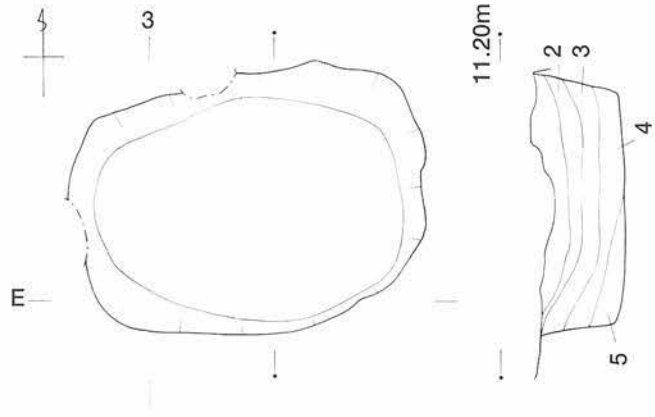
期～中葉に比定される。

土壙２（図22／表13）

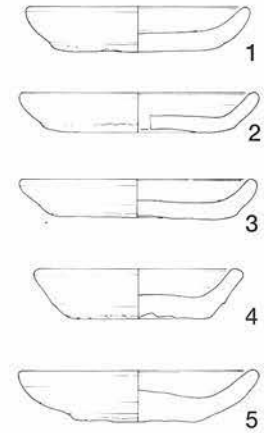
後述の土壙15を埋めた泥岩面上で検出された楕円形の浅い土壙。長径130cm、短径85cm、深さ18cm。皿状の断面をもつ。出土遺物から年代は13世紀第２四半期～中葉。

土壙11（図22／表14）

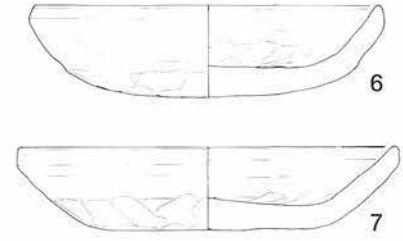
３－Ｄにあり、前出溝８の東西部分に切合うかたちで存在するが、土層から先後関係はつかめなかった。ただ出土遺物の様相には、本址に新しい要素が認められる。直径110～120cmの円形土壙で、深さ30cm弱、逆台形の断面をもつ。出土遺物はおおむね13世紀中葉を主体とする。



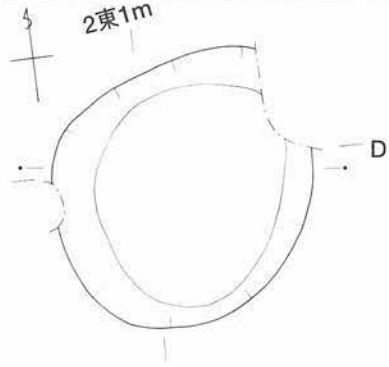
1．黒褐色粘質土
2．暗褐色粘質土
3．暗褐色強粘質土
4．黒灰色粘質土
5．黒灰色強粘質土



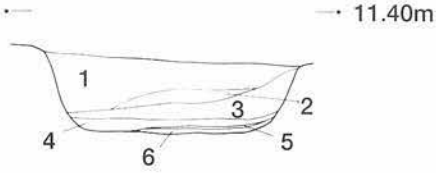
位　置　2・3－D・E
大きさ　長径×短経×深さ
（cm）　289×209×74
平面形　楕円または隅丸長方形
断面形　箱型
主軸方位　N－86°－E



土壙15



位　置　2－C・D
大きさ　長径×短経×深さ
（cm）　240×201×68
平面形　不整円形
断面形　逆台形
主軸方位　N－60.5°－E



土壙20

1．暗灰褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土　1より泥岩多い
3．暗灰褐色粘質土　鉄分多い
4．暗茶褐色粘質土
5．炭化物層
6．暗褐色粘質土

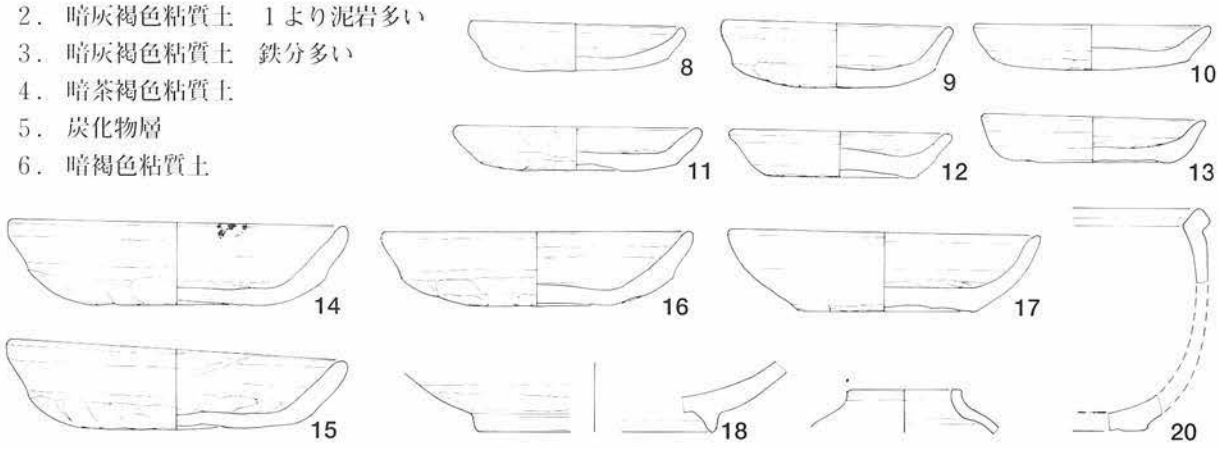


図23　土壙15・20、同出土遺物

図23	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経4.6cm　器高1.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　微砂粒　小礫粒　色調　灰橙色
2	かわらけ	大きさ　口径9.65cm　底経5.8cm　器高1.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　微砂粒　色調　橙色
3	かわらけ	大きさ　口径9.6cm　底経6.0cm　器高1.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　微砂粒　色調　橙色
4	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経5.7cm　器高2.0cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　微砂粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
5	かわらけ	大きさ　口径9.6cm　底経5.2cm　器高2.1cm　せいけい　ロクロ　胎土　針状物質　微砂粒　色調　橙色
6	かわらけ	大きさ　口径14.2cm　底経4.8cm　器高3.75cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　微砂粒　色調　灰褐色
7	かわらけ	大きさ　口径15.4cm　底経8.0cm　器高3.3cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　微砂粒　色調　淡橙色

表15　土壙15出土遺物観察表

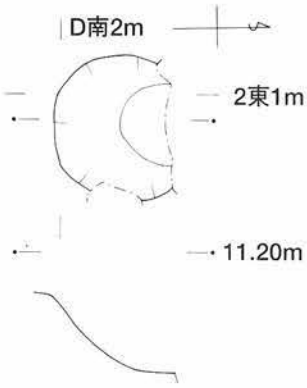
図23	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
8	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経5.0cm　器高1.9cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　灰褐色
9	かわらけ	大きさ　口径9.3cm　底経3.6cm　器高2.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　砂粒　色調　淡橙色
10	かわらけ	大きさ　口径9.5cm　底経3.5cm　器高1.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　暗灰褐色　備考　二次焼成
11	かわらけ	大きさ　口径10.0cm　底経5.0cm　器高1.75cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡橙色
12	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経6.0cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
13	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経6.9cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡橙色　備考　板状圧痕
14	かわらけ	大きさ　口径13.7cm　底経7.2cm　器高3.3cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰橙色　備考　すす付着
15	かわらけ	大きさ　口径13.8cm　底経8.0cm　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　白色粒　砂粒　色調　淡橙色
16	かわらけ	大きさ　口径12.6cm　底経5.8cm　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　砂粒　色調　灰褐色
17	かわらけ	大きさ　口径12.6cm　底経7.4cm　器高3.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　淡橙褐色　備考　板状圧痕
18	山茶碗窯捏　鉢	底部破片　底経9.4cm　せいけい　輪積み後ロクロ　外面下位へら削り　高台貼り付け　胎土　白色粒　砂粒　色調　暗灰色
19	瀬　戸茶入れ	口縁部破片　口径4.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　灰色土　砂粒　色調　内面茶褐色　釉薬　外面灰緑色透明
20	黄　釉盤	口縁部底部破片　素地　灰褐色　白色粒小礫粒の多い粗土　釉薬　黄褐色　内面鉄絵　外面下位から外底面露胎

表16　土壙20出土遺物観察表

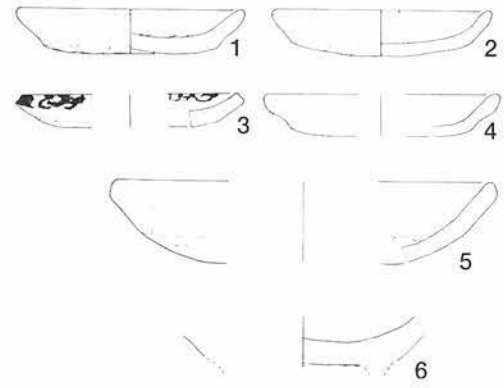
土壙15（図23／表15）

調査区中央部南寄り３－Ｄ付近にある、楕円形もしくは隅丸長方形の大型土壙。長径は３ｍに近く（289cm）、短径209cm、深さ74cm、箱型の断面をもつ。出土遺物の年代は13世紀前半以前の鎌倉時代前期である。

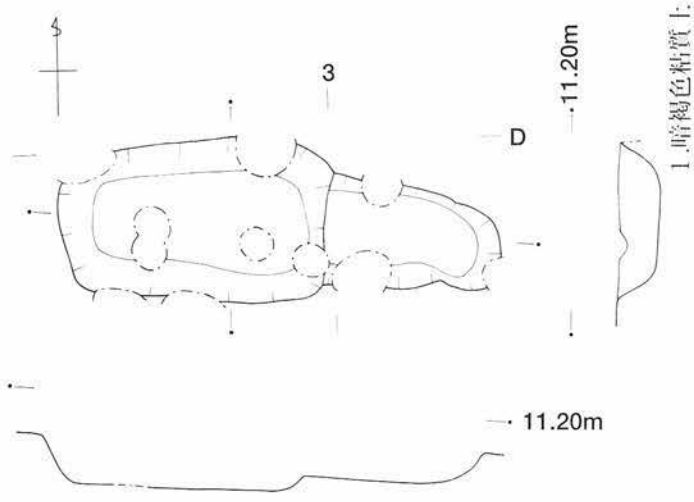
柱穴列１の南側に位置し、もし同時期のものならば屋敷地の境界域にあることになる。確証はないものの憶測をたくましくすれば、便槽のようなものを想定してよいかもしれない。埋土下層の黒灰色粘質



位　置　　2－D
大きさ　　長径×短経×深さ
（cm）　　(90)× 115 × 65
平面形　　円形
断面形　　すり鉢状
主軸方位　N－2°－E

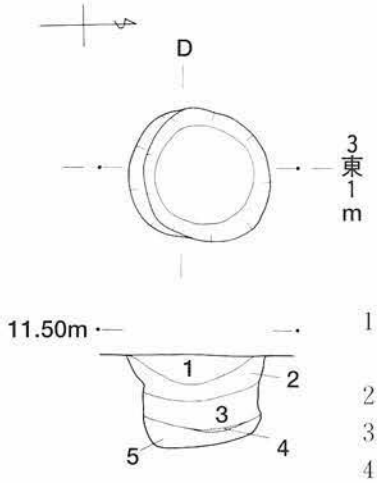


土壙21



位　置　　2－D
大きさ　　長さ× 幅 ×深さ
（cm）　　356×132×　42
平面形　　大小２基の隅丸長方形土壙が縦方向に連接
断面形　　浅い逆台形
主軸方位　N－85°－W

土壙23



1．暗黄褐色砂質土
　泥岩小塊を多量に含む
2．茶褐色粘質土
3．黒褐色粘質土
4．炭化層
5．黒褐色粘質土

位　置　　3－D
大きさ　　長経×短経×深さ
（cm）　　113× 106 ×　78
平面形　　円形
断面形　　箱形
主軸方位　N－2°－E

土壙24

0　（遺構）　2m
0　（遺物）　10cm

図24　土壙21・23・24、同出土遺物

図24	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径9.2cm　底経7.0cm　器高1.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色
2	かわらけ	大きさ　口径8.8cm　底経3.0cm　器高1.85cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡灰橙色
3	かわらけ	大きさ　口径9.2cm　底経4.8cm　器高1.3cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色　備考　すす付着
4	かわらけ	大きさ　口径9.5cm　底経5.0cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡灰橙色
5	かわらけ	大きさ　口径15.6cm　底経8.4cm　器高3.2cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色
6	渥美　捏鉢	底部破片　底経7.0cm　せいけい　輪積み　胎土　白色粒　砂粒　小礫粒　色調　暗灰色

表17　土壙21出土遺物観察表

土が、各地の便所遺構からしばしば報告される黒色土と同じものである可能性もある。

土壙20（図23／表16）

調査区西壁近くの２－Ｃ・Ｄにあるおむすび形の土壙。240cm×201cm、深さ68cmと、大きめといえる。断面は逆台形。底部近くには炭化物の層が堆積している。

出土遺物からみた年代はこれも鎌倉時代前期より下らない。

土壙21（図24／表17）

北半分を土壙20に切られている。全容は不明だが、短径で115cm、深さ65cmほどあり、すり鉢のような形状をしている。出土遺物の年代は12世紀第４四半期～13世紀第１四半期。

土壙23（図24）

井戸３の南側に、同掘方に接するような位置にある。ほとんど切合っていないので新旧は分からないが、埋土からみておそらく井戸より古い。大小ふたつの隅丸長方形または楕円形土壙が縦に連接した形になっている。両者のあいだに切合いは確認できなかった。長さ356cm、幅132cm、深さ42cm、断面は浅い逆台形を呈する。図示可能な遺物は出土していないが、層位からみて鎌倉前期より下らない。

土壙24（図24）

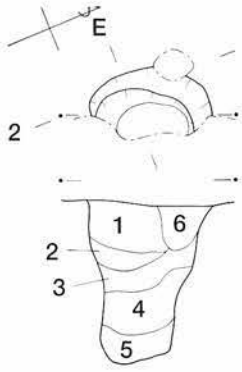
調査区中央部やや西寄りの、井戸３や土壙23に近い場所にある。直径110cm前後、深さ78cmの円形土壙。下層に黒っぽい粘質土が堆積している。層位的には井戸３と同時期に属する。

土壙25（図25）

調査区南西角にあり、井戸４に切られ、土壙26を切る。平面形は直径１ｍほどの円形または隅丸方形

図25	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径11.8cm　底経7.7cm　器高3.3cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　白色粒　砂粒　小礫粒　色調　灰橙色　備考　二次焼成
2	かわらけ	大きさ　口径10.6cm　底経5.8cm　器高3.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　白色粒　砂粒　小礫粒　色調　灰橙色
3	かわらけ	大きさ　口径13.6cm　底経9.0cm　器高2.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　白色粒　粘土粒　砂粒　小礫粒　色調　橙色　備考　二次焼成
4	かわらけ	大きさ　口径12.6cm　底経8.4cm　器高3.25cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　白色粒　貝粒　砂粒　小礫粒　色調　淡灰橙色　備考　二次焼成　板状圧痕
5	かわらけ	大きさ　口径13.0cm　底経6.4cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　粘土粒　砂粒　小礫粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕

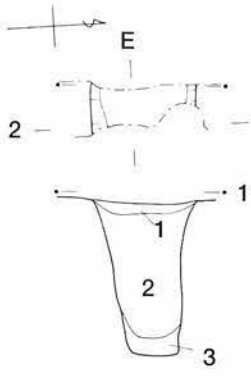
表18　土師器集中出土ｐ.301遺物観察表



土壙25

1．暗褐色弱粘質土
2．暗褐色弱粘質土　やや柔らかい
3．暗灰褐色粘質土
4．灰褐色粘質土
5．暗褐色粘質土
6．暗灰褐色粘質土

位　置　1・2−D・E
大きさ　長径×短径×深さ
(cm)　98 ×　× 132
平面形　円形または隅丸方形
断面形　深い逆台形
主軸方位　——
切合関係　井戸4に切られ、土壙26を切る



土壙26

1．暗褐色粘質土
　泥岩多く含む
2．灰褐色粘質土
　泥岩・炭化物多く含む
3．暗灰色粘質土
　ややしまり良く、泥岩粒子多く含む

位　置　1・2−D・E
大きさ　長径×短径×深さ
(cm)　85 ×　× 126
平面形　円形または隅丸方形
断面形　深い逆台形
主軸方位　——
切合関係　土壙25に切られる

P.301

1．暗褐色弱粘質土

位　置　2−E
大きさ　長径×短径×深さ
(cm)　46 × 44 × 12
平面形　円形
断面形　逆台形
主軸方位　——
特記事項　土師器を土壙底面に埋置

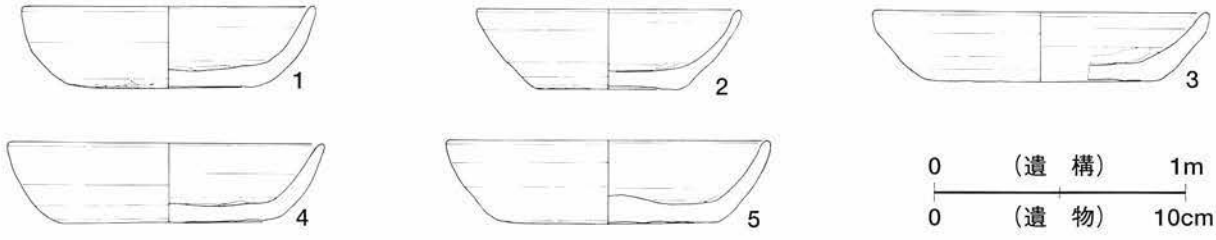


図25　土壙25・26・土師器集中出土ｐ.301、同出土遺物

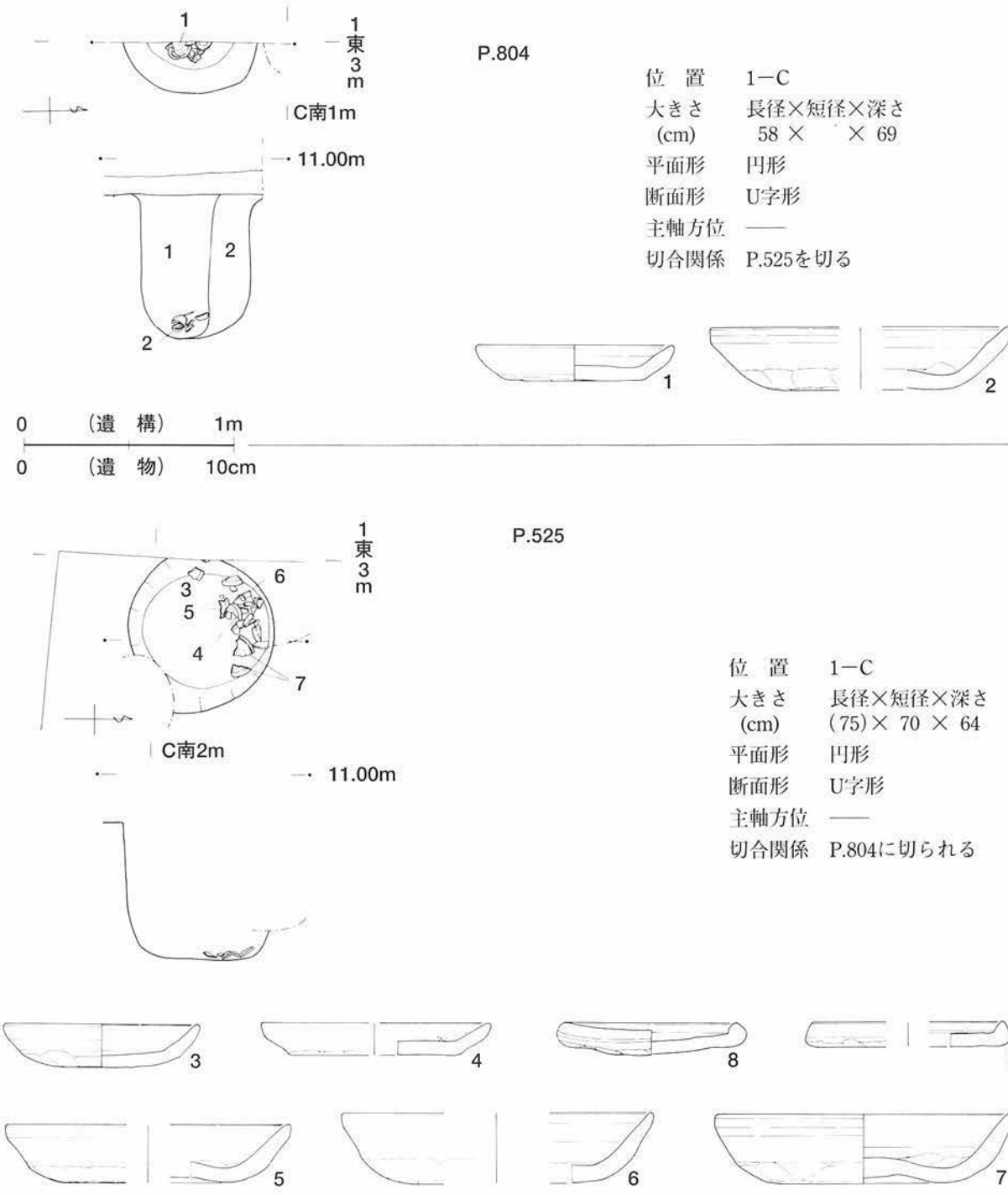


図26　土師器集中出土ｐ.804・ｐ.525、同出土遺物

図26	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径9.4cm　底経6.5cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　微砂粒　小礫粒　色調　灰褐色
2	かわらけ	大きさ　口径14.4cm　底経8.0cm　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　微砂粒　色調　灰橙色
3	かわらけ	大きさ　口径9.4cm　底経3.5cm　器高2.1cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　微砂粒　色調　灰褐色

表19　土師器集中出土ｐ.804、ｐ.525出土遺物観察表

図26	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
4	かわらけ	大きさ　口径11.0cm　底経8.0cm　器高1.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　微砂粒　色調　灰褐色　備考　焼成前傷痕
5	かわらけ	大きさ　口径13.7cm　底経8.0cm　器高2.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　微砂粒　色調　灰褐色
6	かわらけ	大きさ　口径14.9cm　底経8.0cm　器高3.4cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　色調　灰褐色
7	かわらけ	大きさ　口径14.2cm　底経8.2cm　器高3.3cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　微砂粒　色調　灰橙色
8	かわらけ	大きさ　口径9.1cm　底経3.5cm　器高1.45cm　せいけい　手づくね　内折れ　胎土　針状物質　微砂粒　小礫粒　色調　灰褐色
9	かわらけ	大きさ　口径9.75cm　底経8.7cm　器高1.2cm　せいけい　手づくね　内折れ　胎土　針状物質　微砂粒　色調　灰褐色

表20　土師器集中出土ｐ.525遺物観察表

で、深さ132cmの細く深い土壙。層位的には鎌倉時代前期に属する。

土壙26（図26）

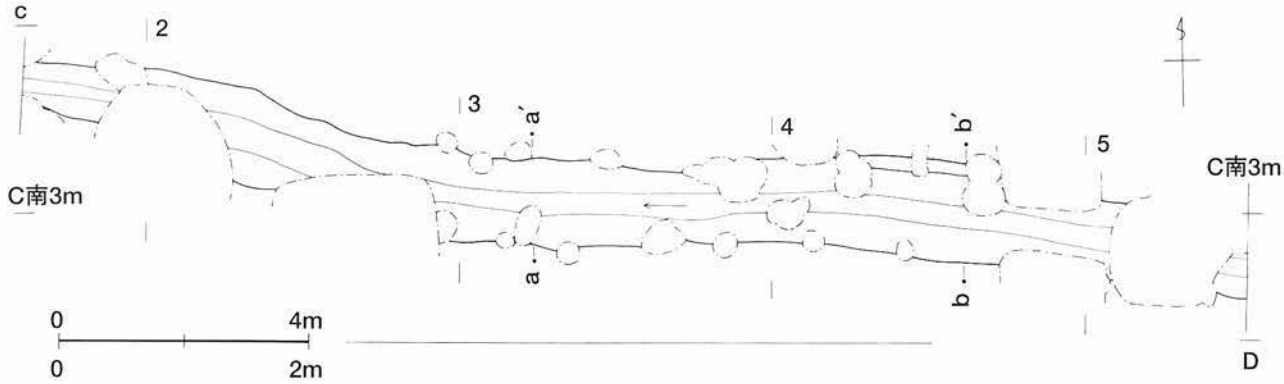
土壙25に東側を切られ、西側は調査区外に出ている土壙。直径85cm、深さ126cmと、これも細くて深く、土壙25に似た形状をしている。両者は同様の性格を持つものかもしれない。層位的にみて、鎌倉時代初期に属する。

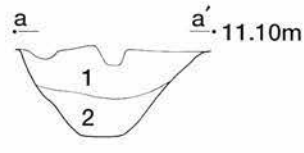
土師器集中出土ｐ.301（図25／表18）

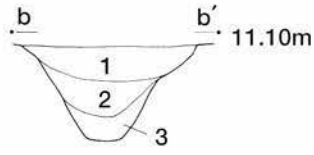
調査区南西角井戸４を埋めた泥岩層中に検出された直径45cm前後の円形土壙に、土師器が多数入っていた。すべてＲ種で占められ、土壙底部から壁にかけてくっついている。年代は13世紀第３四半期ごろに属する。

土師器集中出土ｐ.804（図26／19）

１－Ｃの調査区壁にある直径60cm前後、深さ70cmほどの円筒形の落ち込み底部に、Ｔ種を主体とする土師器が数枚入っていた。ｐ.525を切っているが、年代的には12世紀第４四半期～13世紀第１四半期（鎌







位　置　1～5－C
幅　122～151cm
深さ　72～77cm
断面形状　逆台形、V字形
流下方向　東→西
主軸方位　N－83°－W

1．茶褐色粘質土　2．暗茶褐色粘質土　3．黒褐色強粘質土

図27　溝９

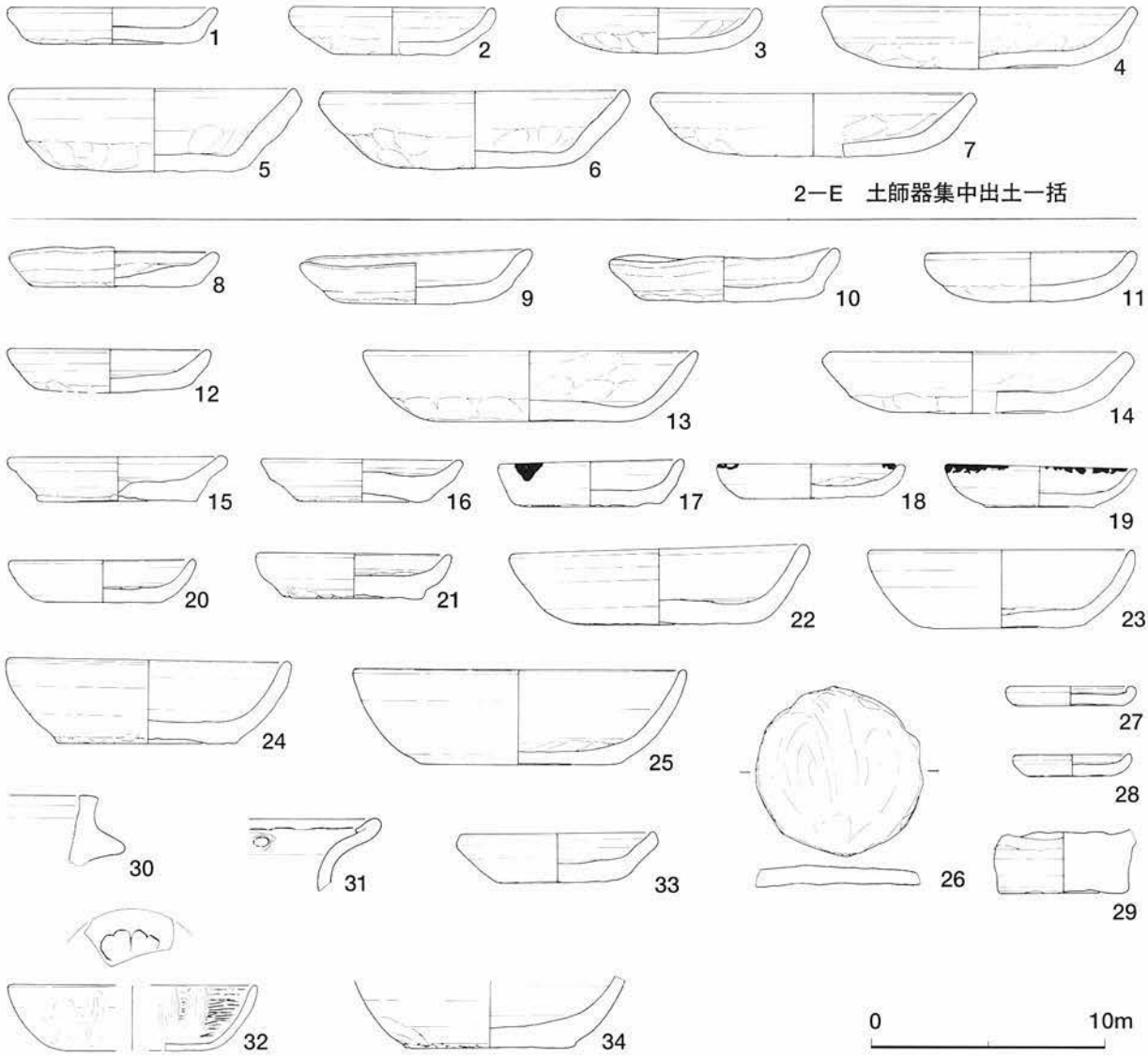


図28　中世前期泥岩層下出土遺物

図28	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経6.0cm　器高1.55cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　白色粒　砂粒　色調　灰橙色
2	かわらけ	大きさ　口径8.8cm　底経4.6cm　器高2.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　砂粒　色調　灰橙色
3	かわらけ	大きさ　口径8.8cm　底経5.5cm　器高1.9cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　砂粒　色調　灰橙色
4	かわらけ	大きさ　口径13.4cm　底経6.0cm　器高2.65cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　粘土粒　砂粒　色調　灰橙色
5	かわらけ	大きさ　口径12.6cm　底経7.8cm　器高3.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　白色粒　粘土粒　砂粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
6	かわらけ	大きさ　口径13.4cm　底経4.0cm　器高3.3cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　粘土粒　砂粒　色調　灰橙色
7	かわらけ	大きさ　口径14.0cm　底経6.0cm　器高2.7cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　粘土粒　砂粒　色調　灰橙色

表21　2－E土師器集中出土遺物観察表

図28	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
8	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経7.2cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　橙色
9	かわらけ	大きさ　口径9.9cm　底経5.5cm　器高2.2cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　灰褐色
10	かわらけ	大きさ　口径9.9cm　底経7.7cm　器高1.9cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　灰褐色
11	かわらけ	大きさ　口径9.1cm　底経5.8cm　器高2.1cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　灰褐色
12	かわらけ	大きさ　口径8.7cm　底経7.0cm　器高1.9cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　色調　橙色
13	かわらけ	大きさ　口径14.4cm　底経8.8cm　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　灰褐色
14	かわらけ	大きさ　口径13.3cm　底経7.4cm　器高2.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　色調　橙色
15	かわらけ	大きさ　口径9.4cm　底経6.8cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　小礫粒　色調　灰褐色
16	かわらけ	大きさ　口径8.7cm　底経5.7cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　針状物質　金雲母　微砂粒　色調　灰橙色
17	かわらけ	大きさ　口径8.3cm　底経6.2cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　小礫粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕　すす付着
18	かわらけ	大きさ　口径8.1cm　底経6.0cm　器高1.5cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　色調　橙色　備考　すす付着
19	かわらけ	大きさ　口径8.3cm　底経4.7cm　器高1.75cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　精緻　色調　乳白色　備考　白色系　すす付着
20	かわらけ	大きさ　口径8.0cm　底経5.2cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　小礫粒　色調　灰褐色
21	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経6.0cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　小礫粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
22	かわらけ	大きさ　口径12.8cm　底経8.1cm　器高3.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　赤色粒　粘土粒　砂粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕
23	かわらけ	大きさ　口径11.4cm　底経7.0cm　器高3.3cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　小礫粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
24	かわらけ	大きさ　口径12.2cm　底経7.6cm　器高3.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　小礫粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
25	かわらけ	大きさ　口径14.2cm　底経7.8cm　器高3.1cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
26	かわらけ 円　盤	底部片　直径７cm　厚さ0.8cm　胎土　赤色粒　砂粒　色調　灰褐色
27	かわらけ	大きさ　口径5.5cm　底経4.5cm　器高0.85cm　せいけい　ロクロ　内折れ　胎土　赤色粒　小礫粒　色調　灰橙色　備考　極小
28	かわらけ	大きさ　口径5.1cm　底経3.6cm　器高0.95cm　せいけい　ロクロ　胎土　精緻　色調　灰橙色　備考　極小
29	かわらけ	柱状高台　底経5.6cm　せいけい　ロクロ　胎土　針状物質　赤色粒　色調　灰褐色
30	羽　釜	口縁部破片　せいけい　輪積み　口縁部ナデ　内面横位の刷毛目　胎土　微砂粒　小礫粒　色調　灰褐色
31	伊勢系 土　鍋	口縁部破片　せいけい　輪積み　口縁内部に向かって内折れ　胎土　白色粒　色調　胎芯部灰黒色　内外面　赤灰褐色　備考　口縁部に穿孔
32	瓦器碗	大きさ　口径10.65cm　底経6.8cm　器高2.8cm　せいけい　手づくね　口縁部へら磨き後胴部へへらによる押し込みで瓜型を成形　内面器壁調整のため縦位のナデ　胎土　小礫粒　色調　胎芯部灰白色　器表面暗灰色　備考　内面横位の暗文　内底面に花暗文

表22　中世前期泥炭層下出土遺物観察表（１）

図28	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
33	山茶碗窯 皿	大きさ　口径8.6cm　底経5.0cm　器高2.15cm　せいけい　ロクロ　胎土　粗砂粒　小礫粒　色調　灰色　備考　口縁部に降灰
34	渥美碗	底部破片　底経7.2cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂粒　色調　暗灰色　備考　内定部に降灰

表23　中世前期泥炭層下出土遺物観察表（２）

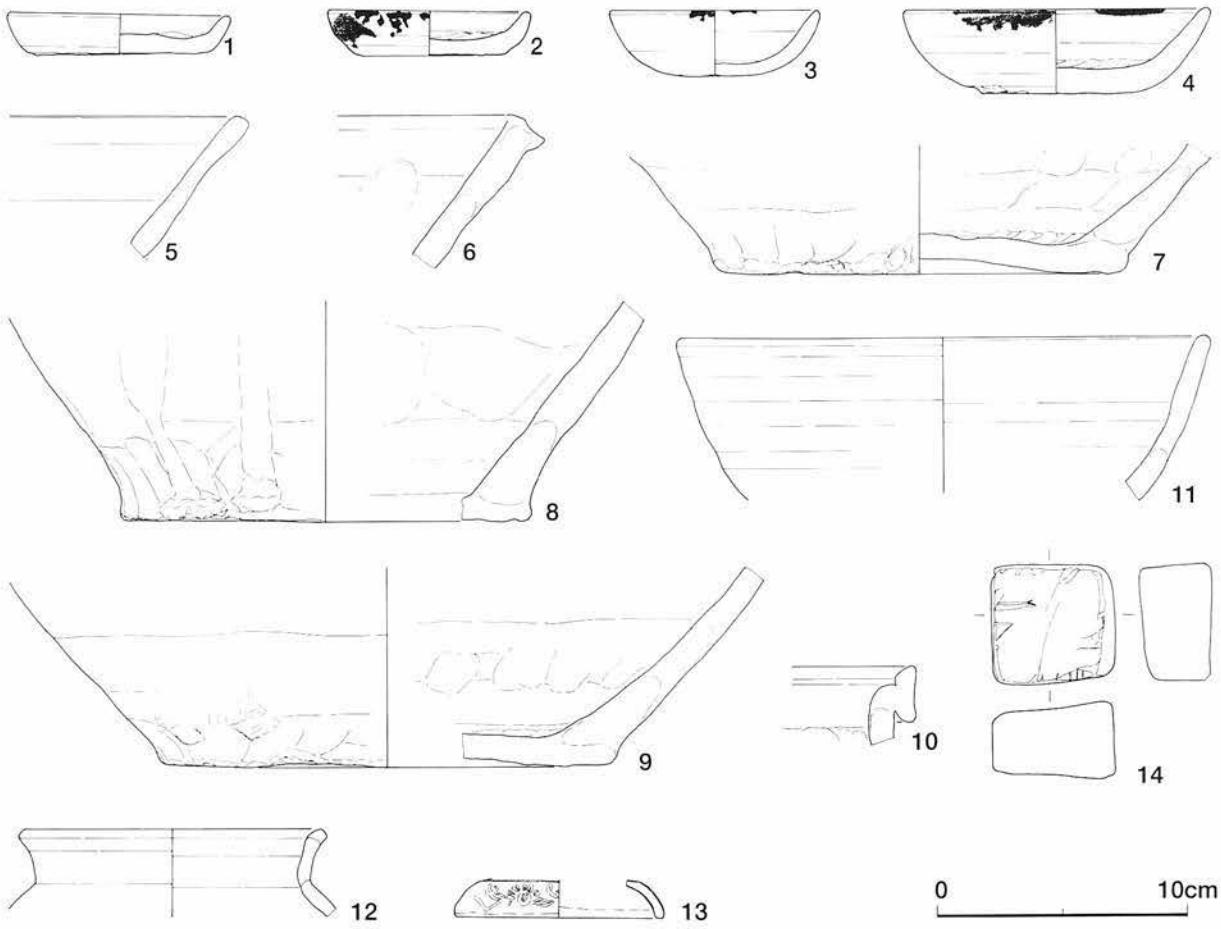


図29　中世前期上部包含層出土遺物（１）

図29	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経7.4cm　器高1.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　微砂粒　小礫粒　色調　灰褐色
2	かわらけ	大きさ　口径8.1cm　底経6.0cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　赤色粒　小礫粒　色調　灰橙色　備考　すす付着
3	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経3.0cm　器高2.65cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　橙色　備考　すす付着
4	かわらけ	大きさ　口径12.4cm　底経7.0cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　小礫粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕　すす付着
5	山茶碗窯 捏　鉢	口縁部破片　口径6.4cm　せいけい　輪積み　内外面横位のナデ　胎土　小礫粒　色調　灰色
6	常　滑 捏　鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　精製土　小礫粒　色調　橙褐色

表24　中世前期上部包含層出土遺物観察表（１）

図29	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
7	常　滑 か　め	底部破片　底経16.4cm　せいけい　輪積み　胎土黒色粒　白色粒　貝粒　小礫粒　色調　胎芯部暗灰褐色　外面黒褐色　備考　こね鉢として使用か？
8	常　滑 か　め	底部破片　底経16.4cm　せいけい　輪積み　胎土　白色粒　小礫粒　気孔　色調　胎芯部淡灰褐色　表面褐色　備考　内外面降灰多量
9	常　滑 か　め	底部破片　底経8.2cm　せいけい　輪積み　胎土　白色粒　黒色粒　粘土粒　小礫粒　色調　胎芯部灰褐色　表面暗灰褐色
10	常　滑 か　め	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　白色粒　黒色粒　小礫粒　色調　明褐色
11	瀬戸系 碗	口縁部破片　口径21.4cm　せいけい　輪積み後ロクロ　胎土　精製土　小礫粒　貝粒　色調　灰色
12	褐釉壺	口縁部破片　口径12.4cm　せいけい　輪積み　胎土　精製土　白色粒　釉薬　黒褐色　備考　二次焼成
13	青白磁 合子蓋	大きさ　最大径8.2cm　せいけい　型入れ　文様　型押し花文　素地　灰白色　釉薬　淡黄青色透明　外面施釉
14	砥　石	大きさ　長さ4.8cm　幅5.0cm　厚さ3.1cm　備考　砥面　5面

表25　中世前期上部包含層出土遺物観察表（2）

倉時代初期～前期）に属している。

土師器集中出土p.525（図26／表20）

1－C壁際にある円筒形落ち込みの底部で発見された集中出土。落ち込みは直径75cmほど、深さ64cmで、p.804に北半分を削り取られている。

土師器はほとんどがT種で、年代的には鎌倉時代初期（12世紀第4四半期）だろう。

c．鎌倉時代以前の遺構群

一群の中世前期の遺構群より層位的にさらに古い遺構で、鎌倉時代までは下らず、しかし古代末期とされる平安時代後期（11世紀中葉）までは遡らないというものである。したがって平安時代末期、すなわち11世紀後半～12世紀前半の100年間程度の時間幅を想定しておきたい。

溝9（図27）

D軸の北側を東西に走るV字形の断面を持つ溝で、東から西に流れている。3軸を過ぎた辺りで少し北に曲がり、大倉道や本地点で検出された他遺構のどれとも主軸方位が一致しない。幅120～150cm前後、深さは70cmを越える。

本址は層位的にみて本地点の歴史時代遺構群のなかでもっとも古い。鎌倉時代以前であることは明白で、同様の層位と形状のものが杉本寺周辺遺跡などでも検出されており、今後も注目しておく必要があろう。今次調査で本址以外の同層位のものは不明である。

d．遺構外採集遺物（図28～32／表21～30）

包含層や攪乱壙その他から採集したおもな遺物を示す。

図28上段は2－E付近の泥岩層下からまとまって出土したT種土師器群で、鎌倉時代初期の様相を示す。同下段は泥岩層を除いた層から出土した一群をまとめた。図29は泥岩層より上の中世前期包含層から出土した遺物群で、図30は2－E付近から出た土師器以外の器種である。図31は泥岩層の下から出土したもの。青磁などに若干の混入らしき様子もあるが、おおむね鎌倉時代前期までの様相を示す。

図32は攪乱壙や上層遺構で採集された主だった遺物を集めたもの。

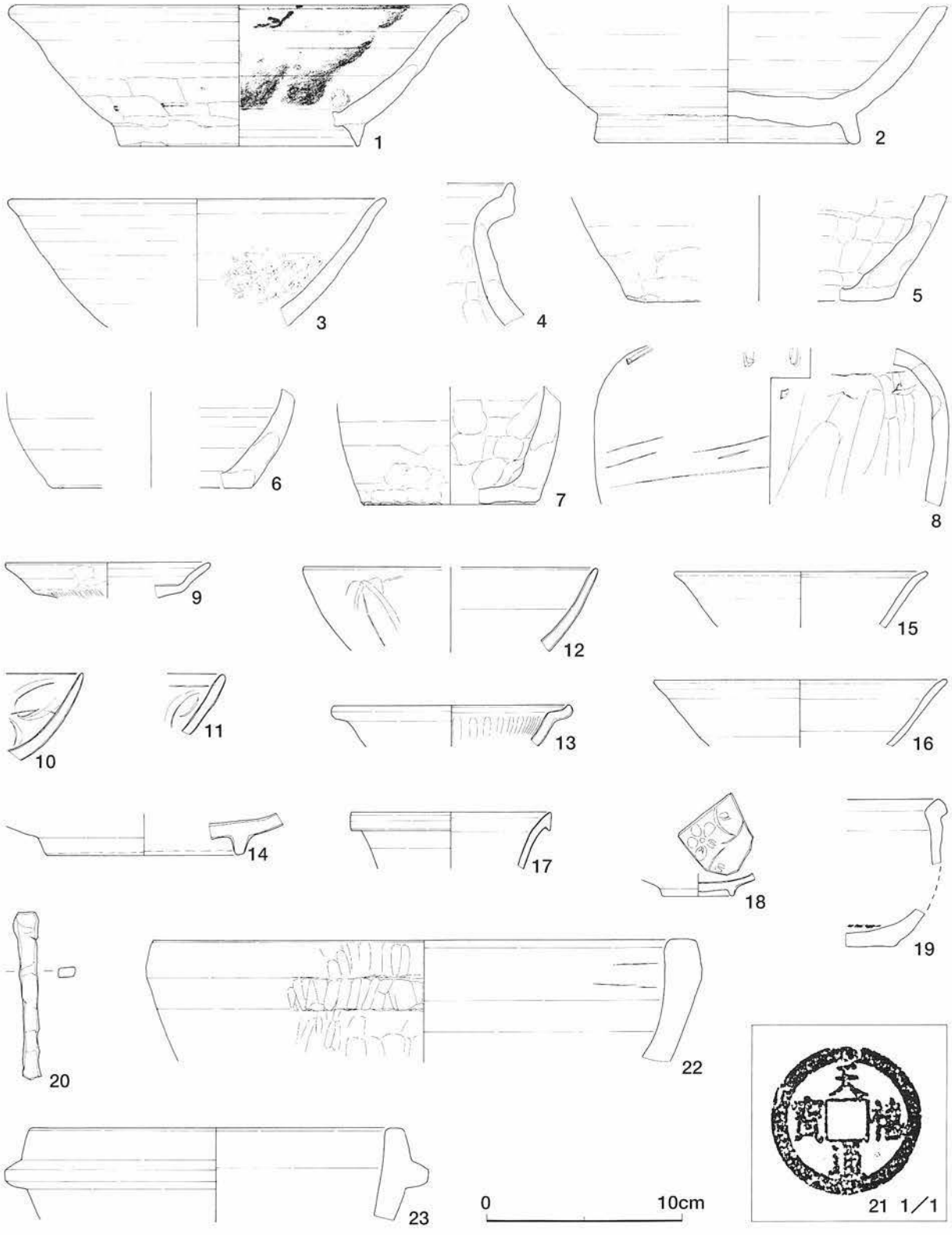


図30　中世前期上部包含層出土遺物（2）－2・E付近集中出土

図30	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	山茶碗窯 捏　鉢	大きさ　口径23.6cm　底経12.2cm　器高7.2cm　せいけい　輪積み後ロクロ　外面下部へら撫で　底面高台貼り付け　胎土　黄褐色　小礫粒　備考　手あぶりに使用か？
2	山茶碗窯 捏　鉢	底部破片　底経13.6cm　せいけい　輪積み後ロクロ　外面下部へら撫で　底面高台貼り付け　胎土　小礫粒多量　色調　灰色　備考　内面著しい磨滅
3	山茶碗窯 捏　鉢	口縁部破片　口径19.4cm　せいけい　輪積み後ロクロ　胎土　灰色　小礫粒　粗砂粒　備考　口縁部に降灰　内面著しい磨滅
4	常　滑 か　め	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　灰色　白色粒　砂粒　気孔　表面黒褐色　備考　内外面降灰　二次焼成
5	常　滑 壺	底部破片　底経13.7cm　せいけい　輪積み　へら調整あり　胎土　灰色　小礫粒　粗砂粒　表面褐色　備考　内底部に降灰　底部に砂付着
6	常　滑 鳶口壺	底部破片　底経10.4cm　せいけい　輪積み　丁寧な指頭撫で　外面下位刷毛目調整　胎土　暗灰色　小礫粒　色調　表面暗褐色
7	常　滑 鳶口壺	底部破片　底経9.2cm　せいけい　輪積み　内外面指頭撫で　底部糸切り　胎土　粗砂粒　小礫粒　気孔　色調　胎芯部暗灰色　表面　暗褐色
8	瀬　戸 四耳壺	胴部破片　せいけい　輪積み　胎土　灰色　砂粒　釉薬　黄緑色透明　刷毛塗り　備考　二次焼成
9	青　磁 皿	口縁部破片　口径10.6cm　せいけい　ロクロ　素地　緑灰色　堅緻　釉薬　淡黄緑色透明　備考　同安窯
10	青　磁 碗	口縁部破片　せいけい　ロクロ　素地　青灰色　釉薬　淡緑灰色透明　文様　内面に画花文　備考　竜泉窯
11	青　磁 碗	口縁部破片　せいけい　ロクロ　素地　青白色　釉薬　淡青緑色透明　貫入あり　文様　内面に画花文　備考　竜泉窯
12	青　磁 碗	口縁部破片　口径15.2cm　せいけい　ロクロ　素地　青灰色　気孔　釉薬　淡黄緑色半透明　文様　複蓮弁文　備考　竜泉窯
13	青　磁 小　鉢	口縁部破片　口径12.4cm　せいけい　ロクロ　素地　黄褐色　釉薬　黄緑色透明　文様　内面に蓮弁文　備考　竜泉窯
14	青　磁 鉢	底部破片大きさ　底経10.0cm　せいけい　ロクロ　高台削り出し　素地　灰白色　気孔　釉薬　淡緑色透明　内外面高台施釉　備考　竜泉窯
15	白　磁 碗	口縁部破片　口径13.0cm　せいけい　ロクロ　素地　乳白色　釉薬　灰白色透明
16	白　磁 口兀皿	口縁部破片　口径15.0cm　せいけい　ロクロ　素地　乳白色　釉薬　灰白色透明
17	白　磁 水　注	口縁部破片　口径10.2cm　せいけい　ロクロ　素地　青灰色　黒色粒　釉薬　灰白色透明
18	青白磁 皿	底部破片大きさ　底経3.6cm　せいけい　型入れ　高台削り出し　素地　灰白色　釉薬　淡青色透明　文様　内面型押し花文
19	黄　釉 盤	口縁部　底部破片　せいけい　輪積み　胎土　堅緻　小礫粒　釉薬　黄灰色透明　内面に施釉　鉄絵
20	鉄製品 釘	長さ　8.5cm　厚　0.5×0.9cm
21	銭	天禧通寶　篆書　北宋　1119年
22	滑　石 鍋	口縁部破片　口径28cm　せいけい　外面にノミ痕　石材　滑石　色調　灰色　備考　鍔部を削りとっている
23	滑　石 鍋	口縁部破片　口径19.2cm　せいけい　外面にノミ痕　石材　滑石　色調　灰色

表26　中世前期上部包含層出土遺物観察表（3）

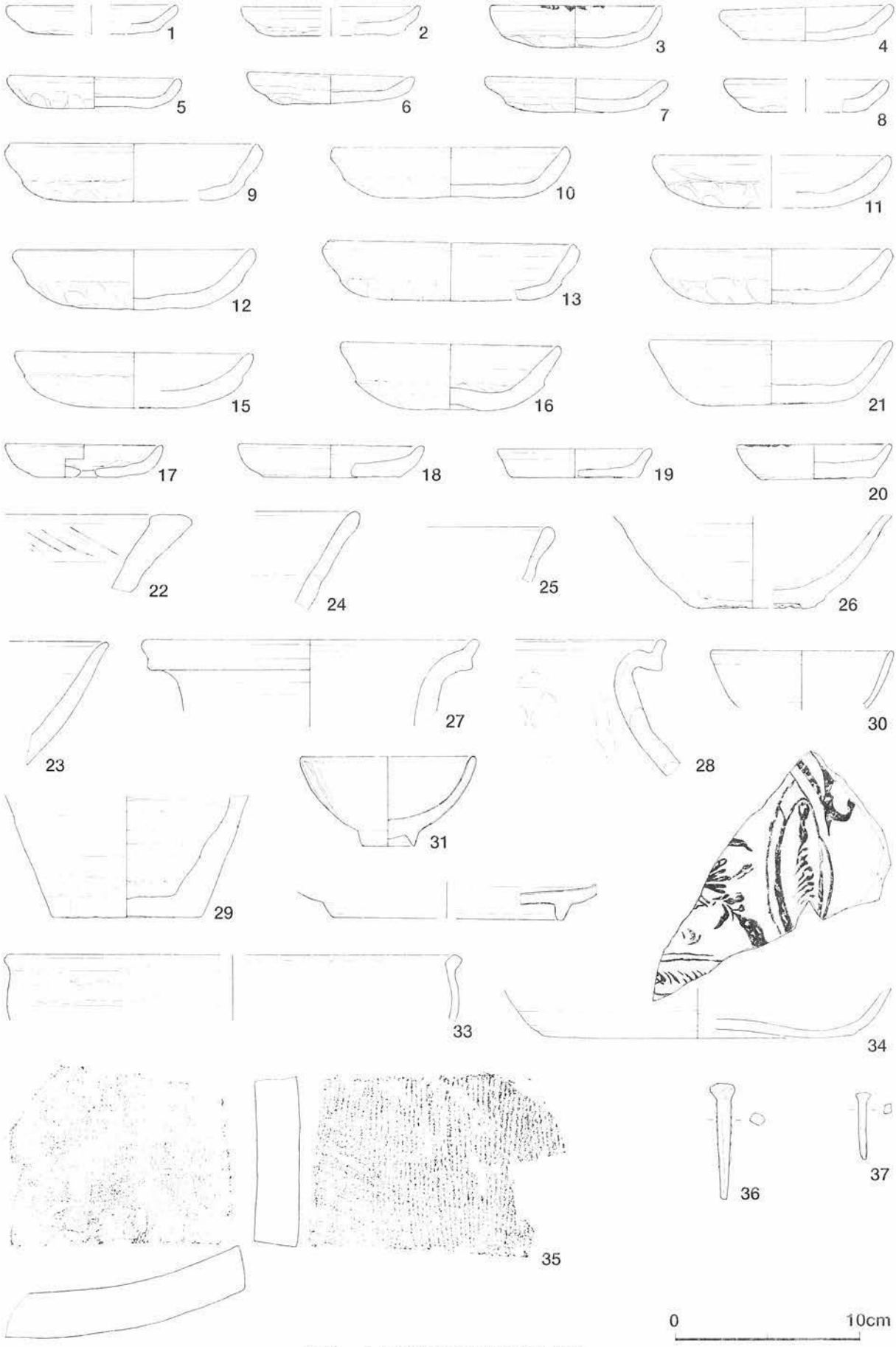


図31　中世前期下部包含層出土遺物

図31	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径9.4cm　底経6.0cm　器高1.6cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　小礫粒　色調　橙褐色
2	かわらけ	大きさ　口径9.8cm　底経6.4cm　器高1.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　色調　淡橙色
3	かわらけ	大きさ　口径9.4cm　底経4.0cm　器高2.3cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　色調　淡灰橙色　備考　油媒付着
4	かわらけ	大きさ　口径9.4cm　底経7.1cm　器高1.85cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　雲母　白色粒　砂粒　小礫粒　色調　淡灰褐色
5	かわらけ	大きさ　口径9.5cm　底経5.8cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　白色粒　雲母　砂粒　色調　橙褐色
6	かわらけ	大きさ　口径9.2cm　底経5.8cm　器高1.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　小礫粒　色調　淡灰褐色
7	かわらけ	大きさ　口径10.0cm　底経5.2cm　器高1.85cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　白色粒　粘土粒　砂粒　小礫粒　色調　淡橙色
8	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経6.0cm　器高1.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　黒色粒　砂粒　小礫粒　色調　淡灰橙色
9	かわらけ	大きさ　口径14.0cm　底経8.0cm　器高3.15cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　淡橙色
10	かわらけ	大きさ　口径13.0cm　底経8.0cm　器高2.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　白色粒　粘土粒　砂粒　色調　灰橙色
11	かわらけ	大きさ　口径13.0cm　底経6.0cm　器高2.85cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　小礫粒　色調　淡橙色
12	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経6.8cm　器高3.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　粘土粒　赤色粒　砂粒　小礫粒　色調　淡橙色
13	かわらけ	大きさ　口径14.0cm　底経8.0cm　器高3.15cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　淡橙色
14	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経6.6cm　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　黒色粒　粘土粒　砂粒　小礫粒　色調　橙色
15	かわらけ	大きさ　口径13.0cm　底経5.4cm　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　小礫粒　色調　橙色
16	かわらけ	大きさ　口径12.0cm　底経5.6cm　器高3.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　白色粒　砂粒　小礫粒　色調　橙色
17	かわらけ	大きさ　口径8.6cm　底経5.7cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　小礫粒　色調　淡灰橙色　備考　板状圧痕　穿孔あり
18	かわらけ	大きさ　口径10.2cm　底経7.4cm　器高1.75cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　黒色粒　砂粒　小礫粒　色調　淡灰褐色
19	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経6.8cm　器高1.6cm　せいけい　ロクロ内底部ナデ　胎土　白色粒　砂粒　色調　淡灰褐色
20	かわらけ	大きさ　口径8.4cm　底経6.2cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　小礫粒　色調　淡灰橙色　備考　板状圧痕　油媒付着
21	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経7.8cm　器高3.5cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　淡灰橙色　備考　板状圧痕
22	土器質火鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　灰黒色　針状物質　白色粒　赤色粒　砂粒　表面赤みのかかった灰褐色
23	渥美捏鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　注口あり　胎土　暗灰色　黒色粒　白色粒　砂粒　釉薬　灰釉刷毛塗り
24	山茶碗窯捏鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み後ロクロ　胎土　灰色　白色粒　小礫粒
25	山茶碗窯捏鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み後ロクロ　胎土　灰色　白色粒　黒色粒　貝殻粒　小礫粒
26	山茶碗窯碗	低部破片　底経7.0cm　せいけい　ロクロ　高台張り付け　胎土　灰色　白色粒　黒色粒　砂粒　気孔　備考　高台畳付き部分にもみがら痕

表27　中世前期下部包含層出土遺物観察表（1）

図13	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
27	常滑かめ	口縁部破片　口径9.2cmせいけい　輪積み　胎土　小礫粒　気孔　色調　胎芯部灰色　表面暗褐色
28	常滑かめ	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　白色粒　長石　小礫粒　色調　胎芯部灰色　表面暗褐色
29	常滑壺	低部破片　底経8.2cm　せいけい　輪積み　内面指頭痕　外面刷毛撫で　外面下位へら撫で　胎土　長石　砂粒　小礫粒　色調　胎芯部灰色　表面茶褐色　備考　内定面に降灰
30	瀬戸入れ子	口縁部破片　口経10.0cm　せいけい　ロクロ　胎土　精製土　色調　暗灰色
31	青磁碗	大きさ　口径9.6cm　底経3.0cm　器高4.9cm　せいけい　ロクロ　高台切りだし　素地　黄灰色　緻密　気孔あり　釉薬　黄緑色　内外面、高台内施釉　文様　外面蓮弁文　備考　竜線窯
32	青磁鉢	底部破片　底経12.6cm　せいけい　ロクロ　素地　灰黄褐色　釉薬　灰緑褐色半透明　備考　竜線窯
33	黄釉盤	口縁部破片　口経24.8cm　せいけい　輪積み　口縁玉縁　胎土　灰色　砂粒多く含む　釉薬　黄緑色
34	黄釉盤	低部破片　低経17.6cm　せいけい　輪積み　胎土　黄灰色　砂粒多く含む　釉薬　内面灰黄色　文様　内面に鉄絵
35	平瓦	大きさ　厚さ2.4cm　せいけい　凹面　砂目　凸面縄目叩き　胎土　精製土　砂粒　黒色粒　色調　灰黒色
36	鉄製品釘	大きさ　長さ6.4cm　幅0.55×0.7cm
37	鉄製品釘	大きさ　長さ3.6cm　幅0.4×0.5cm

表28　中世前期下部包含層出土遺物観察表（2）

図32	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経5.0cm　器高2.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　淡橙色
2	かわらけ	大きさ　口径9.0cm　底経6.6cm　器高1.4cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色
3	かわらけ	大きさ　口径9.6cm　底経3.0cm　器高1.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡橙色
4	かわらけ	大きさ　口径9.2cm　底経4.0cm　器高1.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　赤色粒　雲母　砂粒　色調　橙色
5	かわらけ	大きさ　口径8.6cm　底経6.0cm　器高1.45cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色
6	かわらけ	大きさ　口径9.4cm　底経5.4cm　器高2.15cm　せいけい　手づくね　胎土　白色粒　砂粒　色調　淡灰褐色
7	かわらけ	大きさ　口径9.6cm　底経7.8cm　器高1.5cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　白色粒　砂粒　小礫粒　色調　橙色
8	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経8.0cm　器高2.9cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　淡橙色
9	かわらけ	大きさ　口径12.6cm　底経5.0cm　器高3.3cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　淡橙色
10	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経7.0cm　器高3.1cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　白色粒　砂粒　色調　淡灰褐色
11	かわらけ	大きさ　口径13.6cm　底経7.8cm　器高3.0cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　橙色
12	かわらけ	大きさ　口径8.0cm　底経5.6cm　器高1.45cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　粘土粒　砂粒　色調　淡橙色
13	かわらけ	大きさ　口径7.4cm　底経5.4cm　器高1.3cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　白色粒　砂粒　小礫粒　色調　暗橙色　備考　板状圧痕

表29　遺構外採集遺物観察表（1）

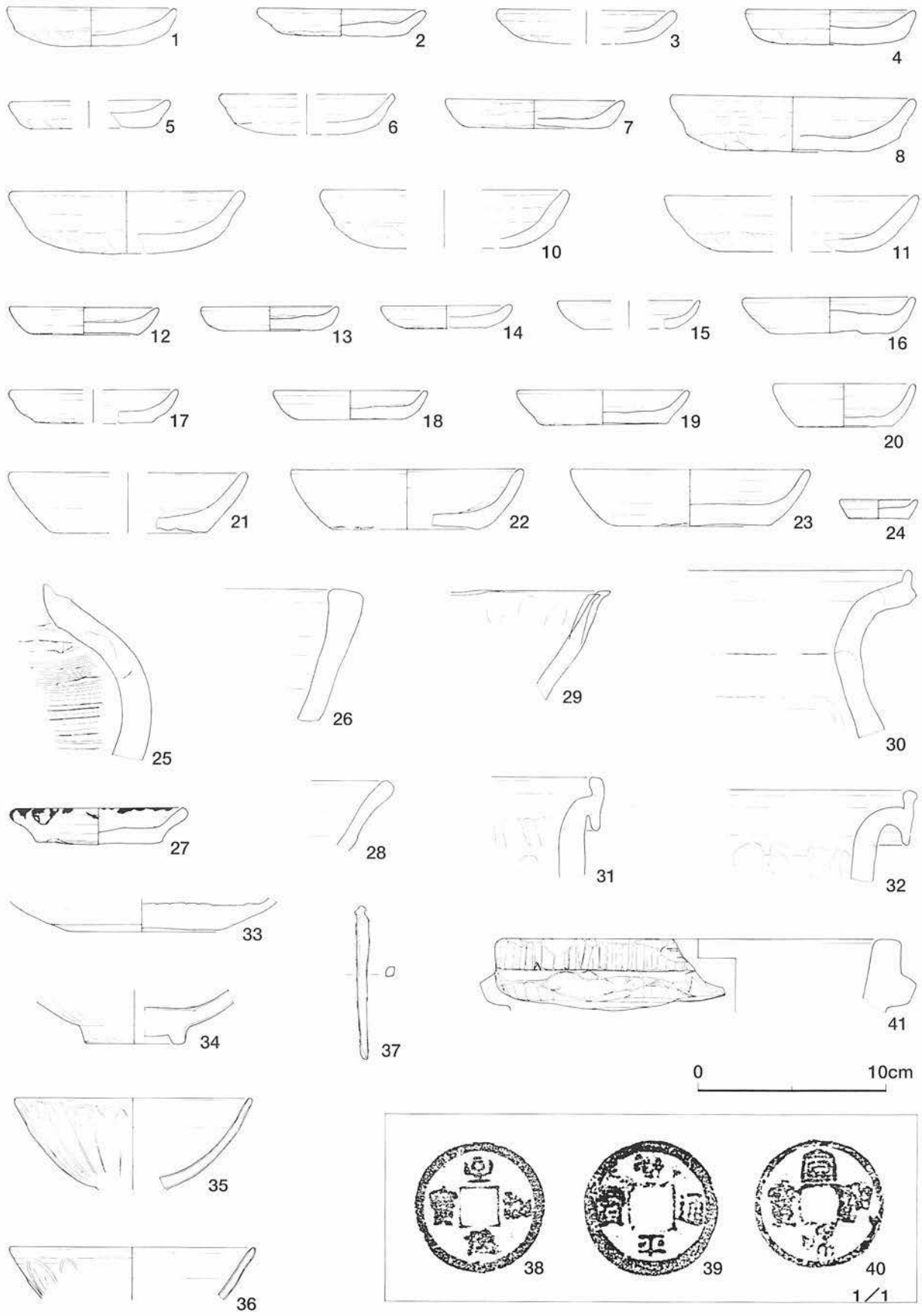

1
2
3
4
5
6
7
8
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
29
30
27
28
31
32
33
34
37
41
0
10cm
35
36
38
39
40
1／1

図32　遺構外採集遺物

図32	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
14	かわらけ	法量　口径7.0cm　底経4.0cm　器高1.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　白色粒　粘土粒　砂粒　小礫粒　色調　橙色
15	かわらけ	法量　口径7.6cm　底経4.4cm　器高1.5cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　白色粒　砂粒　色調　淡橙色
16	かわらけ	法量　口径9.2cm　底経6.4cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　色調　灰橙色
17	かわらけ	法量　口径9.0cm　底経6.0cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　橙色
18	かわらけ	法量　口径8.2cm　底経5.4cm　器高1.55cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　淡橙色
19	かわらけ	法量　口径9.2cm　底経6.8cm　器高1.85cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　白色粒　砂粒　色調　淡橙色　備考　板状圧痕
20	かわらけ	法量　口径7.6cm　底経5.0cm　器高2.3cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　雲母　砂粒　小礫粒　色調　橙色　備考　板状圧痕
21	かわらけ	法量　口径12.8cm　底経8.4cm　器高3.2cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　淡橙色
22	かわらけ	法量　口径12.4cm　底経7.8cm　器高3.15cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　橙色
23	かわらけ	法量　口径12.8cm　底経8.6cm　器高3.0cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　暗灰橙色
24	かわらけ	法量　口径4.2cm　底経3.2cm　器高1.0cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　砂粒　小礫粒　色調　淡橙色　備考　極小
25	瓦　質 香　炉	胴部破片　せいけい　輪積み　内面指頭撫で　刷毛撫で　外面へら磨き　胎土　白色粒　気孔　色調　胎芯部灰白色　外面黒色
26	瓦　質 火　鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　外面へら削り　胎土　砂粒　小礫粒　色調　胎芯部灰白色　外面灰黒色
27	山茶碗窯 皿	法量　口径9.5cm　底経6.8cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　長石　白色粒　砂粒　小礫粒　色調　灰色　備考　すす付着
28	山茶碗窯 捏　鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　砂粒　小礫粒　色調　胎芯部灰色　表面灰黒色
29	常　滑 捏　鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　注口あり　胎土　白色粒　赤色粒　小礫粒　色調　褐色
30	常　滑 か　め	口縁部破片　せいけい　輪積み　内外面指頭痕あり　胎土　白色粒　砂粒　小礫粒　気孔　色調　胎芯部灰色　表面茶褐色　備考　肩部に降灰
31	常　滑 か　め	口縁部破片　せいけい　輪積み　内面指頭痕あり　胎土　白色粒　長石　小礫粒　色調　胎芯部灰褐色　表面暗茶褐色
32	常　滑 か　め	口縁部破片　せいけい　輪積み　内面指頭痕あり　胎土　小礫粒　色調　胎芯部灰褐色　表面暗褐色
33	瀬　戸 おろし皿	低部破片　底経8.2cm　せいけい　ロクロ　内底部におろしの刻み　胎土　灰色　白色粒　釉薬　内底部に淡黄緑色透明　備考　内底部に目跡
34	青磁碗	口縁部破片　口径13.0cm　せいけい　ロクロ　素地　青灰色　黒色粒　釉薬　淡黄緑色半透明　文様　外面複蓮弁　備考　竜泉窯
35	青磁碗	底部破片　底経5.4cm　せいけい　ロクロ　高台削りだし　素地　青灰色　気孔　釉薬　淡黄緑色透明　文様　外面蓮弁文　備考　竜泉窯
36	青磁碗	口縁部破片　口径12.6cm　せいけい　ロクロ　素地　黄白色　黒色粒　釉薬　淡黄緑色半透明　文様　外面単蓮弁文　備考　竜泉窯
37	鉄製品 釘	法量　長さ8.1cm　幅4.5×4.5cm
38	銭	至和元寶　篆書　北宋　1054年
39	銭	治平通寶　真書　北宋　1064年
40	銭	宣和通寶　篆書　北宋　1119年
41	滑　石 鍋	口縁部破片　口径21.4cm　せいけい　外面にのみ痕　石材　滑石　色調　灰白色　備考　再加工途中

表30　遺構外採集遺物観察表（２）

5．弥生時代

住居番号は15まであるが、整理作業の結果、４号が消滅、欠番となった。ここではそのうち、７・８・９・10・11・12・13・15を紹介する。また、調査区内を東西に走る溝13は国庫補助分・原因者負担分双方の調査区を通過するが、後者報告分に含めた。

第１節で先述したように、弥生時代の遺構群は中世基盤層である茶褐色粘質土の厚い層を除いた灰黄色～淡褐色土の上面で検出される。これはザラザラした触感の粗い砂質土で、鶴岡八幡宮前面東側から大倉二階堂一帯の滑川河岸段丘上に広くみられる。あるいは茶褐色粘質土中のどこかに本来の弥生遺構切込み面があるのかもしれないが、今のところどの地点においても確認されていない。

図33　弥生時代遺構全図

竪穴住居７（図34～36／表31・32）

２・３－Ｃ・Ｄにあり、西半部が調査区外に出ている。竪穴住居15・溝13を切っている。７×6.5mほどの胴張り隅丸方形になると推定される。

壁溝がほぼ同心円状に二重に巡っており、住居が拡張されていることがわかる。床全体に広く焼土・炭化物が散っているので、おそらく火災住居であろう。

炉の所在は不明。床は地山灰褐色砂質土の直床。拡張前と後で計５口の主柱穴が見つかった。また南壁近くに、出入り用の梯子穴とみられるおむすび形の柱穴も検出された。

総じて石器類は豊富で、大・中・小３点の片刃石斧がまとまって見つかったのをはじめ、太形蛤刃磨製石斧や抉入片刃磨製石斧・石包丁・敲石・磨石などが床面から出土した。拡張後の床硬化面上から有頭石錘が焼けて細かく割れた状態で出土し、復元すると長さ24cm余りになった。

土器は甕・壺・鉢といった組成で、甕はおおむねハケ目、壺は口縁部に羽状縄文をもつ縁帯が付加されたものが多い。

本址の時期は弥生時代中期後半であろう。

竪穴住居８（図37・38／表33）

１・２－Ａ・Ｂ・Ｃにあり、東北部分が調査区外にある。東南部を竪穴住居９に削り取られ、北側で竪穴住居13を切る。胴張りの隅丸方形で、推定7.45×6.9mの大きさになる。拡張されて壁溝が同心円状に二重になっている。

床面には大量の炭化物や焼土があり、また壁部材らしい焼けた木材が、床に倒れ込んだような状態で見つかった。

炉は中央部北寄りに１基あり、枕石が残っていた。また炉の焼土中からはシイの実が出土した。床は地山直床。拡張の前と後で４本の柱穴が検出されている。

出土遺物は壺・鉢・敲石・石包丁・磨石など。壺（図38－１）は頸部を再利用したもの。

本址の時期は弥生時代中期後半であろう。

竪穴住居９（図39・40／表34）

調査区中央部北寄りの２・３－Ｂ・Ｃにある小判形をした竪穴住居。主軸方位は30°ほど西に偏差をもち、8.2×6.15mの規模で、竪穴住居８・10を切る。

炉の所在は不明。床は地山灰褐色砂質土直床で、床面からは土器類のほか敲石が３点一緒に出土している。

壁溝は東壁・西南・西北に残る。主柱穴は３穴でいずれも楕円形をしており、竪穴主軸に直交する主軸をもつ。梯子穴が南端中央にあり、その東隣に貯蔵穴らしい穴がある。

本址の時期は弥生時代中期末か後期初頭とみたい。

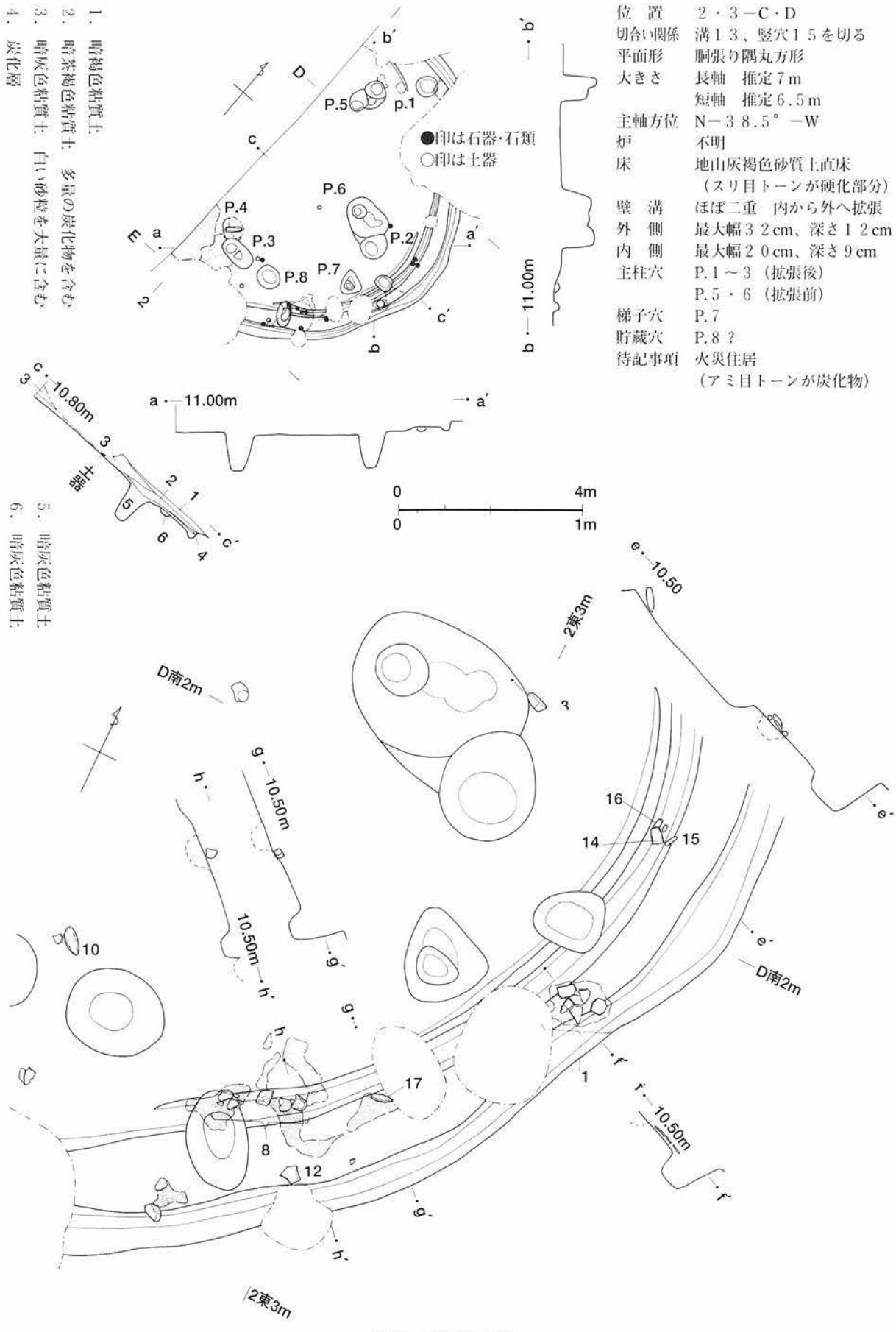
竪穴住居10（図41上段・表35）

前記竪穴住居９にほとんどを削られており詳細は不明だが、主柱穴の位置からみておそらく隅丸長方形、7.4×5.5mほどになると推定される。

炉は不明。床面は地山直床。主柱穴は掘り直しを含め計６穴検出された。南壁際西寄りに梯子用らしい穴がある。

壁溝は遺存部分では全周し、最も幅の広い南西部の溝中から、壺底部と小さな柱状の片刃磨製石斧が出土している。

本址は時期不明とせざるをえないが、９号よりは古い。



位　置　２・３－C・D
切合い関係　溝１３、竪穴１５を切る
平面形　胴張り隅丸方形
大きさ　長軸　推定７m
　　短軸　推定６.５m
主軸方位　N－３８.５°－W
炉　不明
床　地山灰褐色砂質土直床
　（スリ目トーンが硬化部分）
壁　溝　ほぼ二重　内から外へ拡張
外　側　最大幅３２cm、深さ１２cm
内　側　最大幅２０cm、深さ９cm
主柱穴　P.１～３（拡張後）
　P.５・６（拡張前）
梯子穴　P.７
貯蔵穴　P.８？
待記事項　火災住居
　（アミ目トーンが炭化物）

図34　竪穴住居７

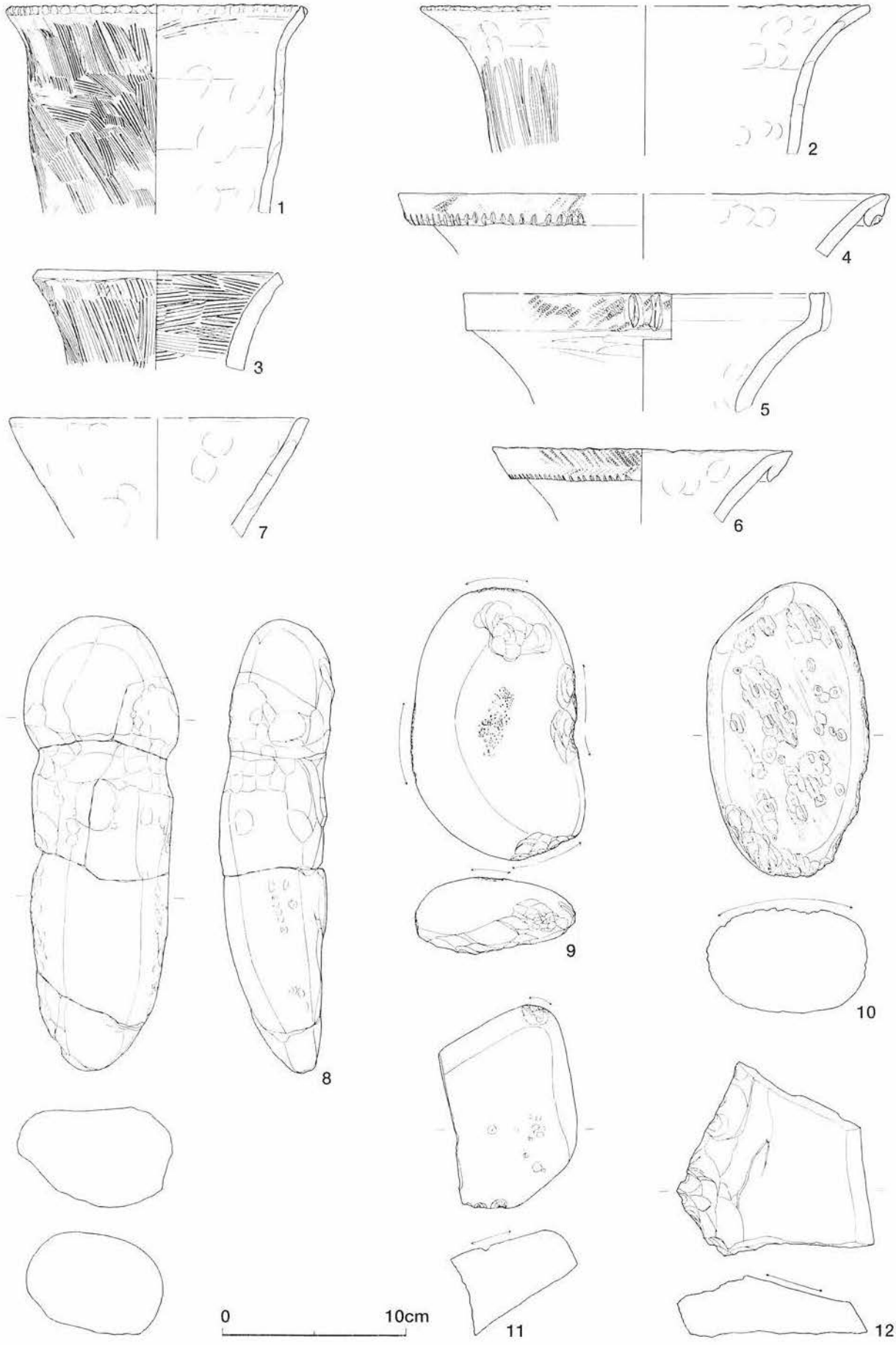


図35　竪穴住居７出土遺物（１）

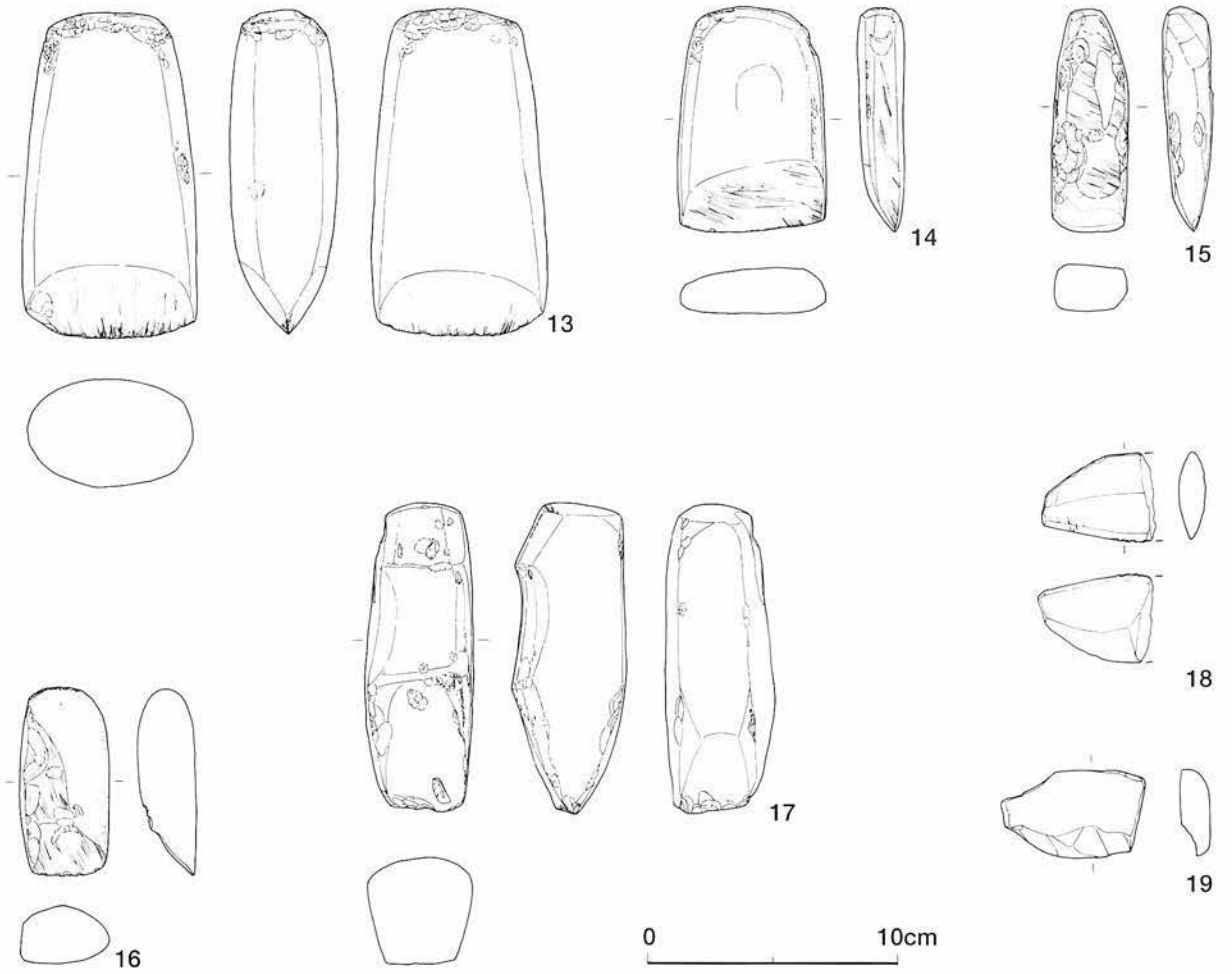


図36　竪穴住居７出土遺物（２）

図35	種　類	大きさ　　せいけい　　胎土　　色調　　備考
1	弥　生 広口かめ	口縁部～胴部破片　口径16.4cm　せいけい　輪積み　口唇部上方から丸棒による押捺で波状　口縁部から胴部縦位　胴部から斜めの刷毛目　胎土　暗橙色　砂粒　表面暗灰褐色
2	弥　生 広口かめ	口縁部破片　口径24.4cm　せいけい　輪積み　口唇部上方から丸棒による押捺　口縁部　横位胴部縦位　胴部から斜めの刷毛目　胎土　暗橙色　砂粒　表面暗灰褐色
3	弥　生 壺	口縁部破片　口径13.5cm　せいけい　輪積み　口縁部外反　内面横位の櫛目　外面縦位の櫛目　胎土　灰褐色　針状物質　砂粒
4	弥　生 広口壺	口縁部破片　口径26.6cm　せいけい　輪積み　口縁部を折り返しＲＬの羽状糸縄文　下端を棒の様なもので押捺し刻む　胎土　灰橙色　砂粒　備考　赤彩か？
5	弥　生 広口壺	口縁部破片　口径19.6cm　せいけい　輪積み　口唇部に糸縄文　口縁部上方に立ち上がりＲＬの糸縄文　下端を棒の様なもので押捺し刻む　棒状浮文二ヶ　胎土　灰橙色　針状物質　微砂粒　備考　表面赤彩か？
6	弥　生 広口壺	口縁部破片　口径16.4cm　せいけい　輪積み　口縁部緩やかに外反　折り返し口縁にＲＬの羽状糸縄文　上端を丸棒押捺　下端をへら様なもので刻む　胎土　灰橙色　砂粒　備考　赤彩か
7	弥　生 鉢	口縁部破片　口径9.4cm　せいけい　輪積み　内外面指頭ナデ　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色
8	有頭石錘	長さ24.7cm　頭部8.4cm　頚部6.8cm　胴部7.3cm　せいけい　形を整える為のせいけい痕　石質　粗粒砂岩　備考　枕石として使用
9	叩き石	長さ14.5cm　幅8.4cm　厚さ4.2cm　石質　硬質中粒凝灰岩
10	叩き石	長さ16.0cm　幅8.6cm　厚さ5.7cm　石質　粗粒凝灰岩　備考　擦り石としても使用か？
11	叩き石	破片長さ15.0cm　幅6.0cm　厚さ4.4cm　石質　硬質砂岩
12	石　皿	破片　長さ10.5cm　幅10.3cm　厚さ3.3cm　石質　砂岩

表31　竪穴住居７出土遺物観察表（１）

図36	種　類	大きさ　　せいけい　　石質　　備考
13	磨製石斧 蛤　刃	長さ13.1cm　幅6.7cm　厚さ4.3cm　石質　硬質中粒凝灰岩
14	磨製石斧 扁平片刃	長さ8.0cm　幅5.8cm　厚さ1.8cm　石質　ホルンフェルス
15	磨製石斧 扁平片刃	長さ7.5cm　幅3.6cm　厚さ2.35cm　石質　硬質中粒凝灰岩
16	磨製石斧 扁平片刃	長さ8.8cm　幅3.0cm　厚さ2.0cm　石質　硬質中粒凝灰岩
17	磨製石斧 えぐり扁 平片刃	長さ12.5cm　幅4.2cm　厚さ4.45cm　せいけい　石質　硬質中粒凝灰岩
18	石包丁	破片長さ4.6cm　幅3.5cm　厚さ1.0cm　石質　砂岩
19	石包丁	破片長さ6.0cm　幅3.5cm　厚さ1.1cm　石質　砂岩

表32　竪穴住居７出土遺物観察表（２）

竪穴住居11（図41下段）

ほとんどを竪穴住居６と10に削り取られた形で、３・４－Ｃに存在する。全容はまったく不明だが検出された壁溝は直線的で、隅丸系の平面形を持つものと想像できる。

床面らしい硬化面はみられないが、壁溝底部のみ残してそっくり削平されている。ということはこの一帯で、弥生遺構検出面である灰褐色の砂層上部が後世（しかしおそらく平安時代以前）全体に削平された可能性がある、ということだ。

壁溝から約50cmしか離れていない場所に焼土の詰まった浅い土壙状の火床面が検出された。これが炉である可能性はある。ただし削平により壁溝との連続性が不明な上、位置的にやや疑問も残る。

柱穴等は検出できなかった。時期も不明。

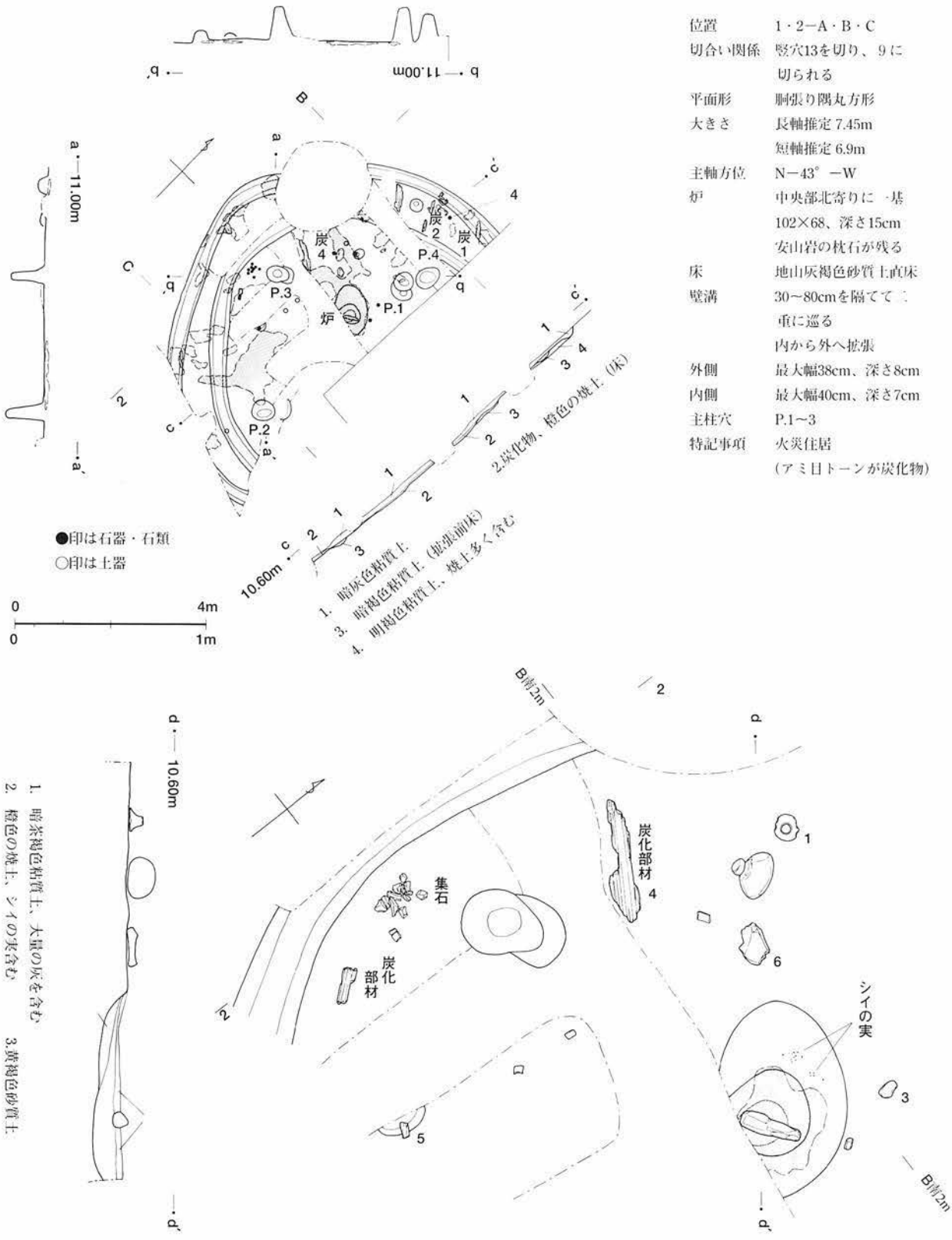
竪穴住居12（図42／表36）

調査区西壁中央部１－Ｃ付近に、壁溝の一部が検出され、柱穴らしい落込みの一部も除いているが、大半が調査区外にあり、床面も中世遺構によって著しく損なわれているので、大きさその他不明。

床面は地山灰褐色砂質土直床。

図38	種　類	大きさ　　せいけい　　胎土　　色調　　備考
1	弥　生 壺	頚部破片　頚部経6.8cm　せいけい　輪積み　内外面刷毛ナデ　胎土　淡橙色　白色粒　黒色粒　赤色粒　備考　壺の頚部～肩部を再加工
2	弥　生 広口壺	口縁部破片　口経13.5cm　せいけい　輪積み　内外面刷毛ナデ後へら磨き　胎土　淡橙色　白色粒　黒色粒　砂粒　備考　赤彩
3	叩き石	長さ10.4cm　幅7.0cm　厚さ2.3cm　石質　硬質砂岩
4	石包丁	長さ6.6cm　幅3.5cm　厚さ1.0cm　石質　硬質砂岩
5	有頭石錘	長さ21.0cm　幅10.1cm　厚さ7.8cm　石質　硬質砂岩
6	有頭石錘	長さ30.2cm　幅8.8cm　厚さ7.8cm　石質　火山礫凝灰岩
7	石　皿	長さ21.0cm　幅17.0cm　厚さ2.5～7.5cm　石質　砂岩　備考　両面使用

表33　竪穴住居８出土遺物観察表



位置	1・2−A・B・C
切合い関係	竪穴13を切り、9に切られる
平面形	胴張り隅丸方形
大きさ	長軸推定 7.45m 短軸推定 6.9m
主軸方位	N−43°−W
炉	中央部北寄りに一基 102×68、深さ15cm 安山岩の枕石が残る
床	地山灰褐色砂質土直床
壁溝	30〜80cmを隔てて二重に巡る 内から外へ拡張
外側	最大幅38cm、深さ8cm
内側	最大幅40cm、深さ7cm
主柱穴	P.1〜3
特記事項	火災住居 （アミ目トーンが炭化物）

図37　竪穴住居 8

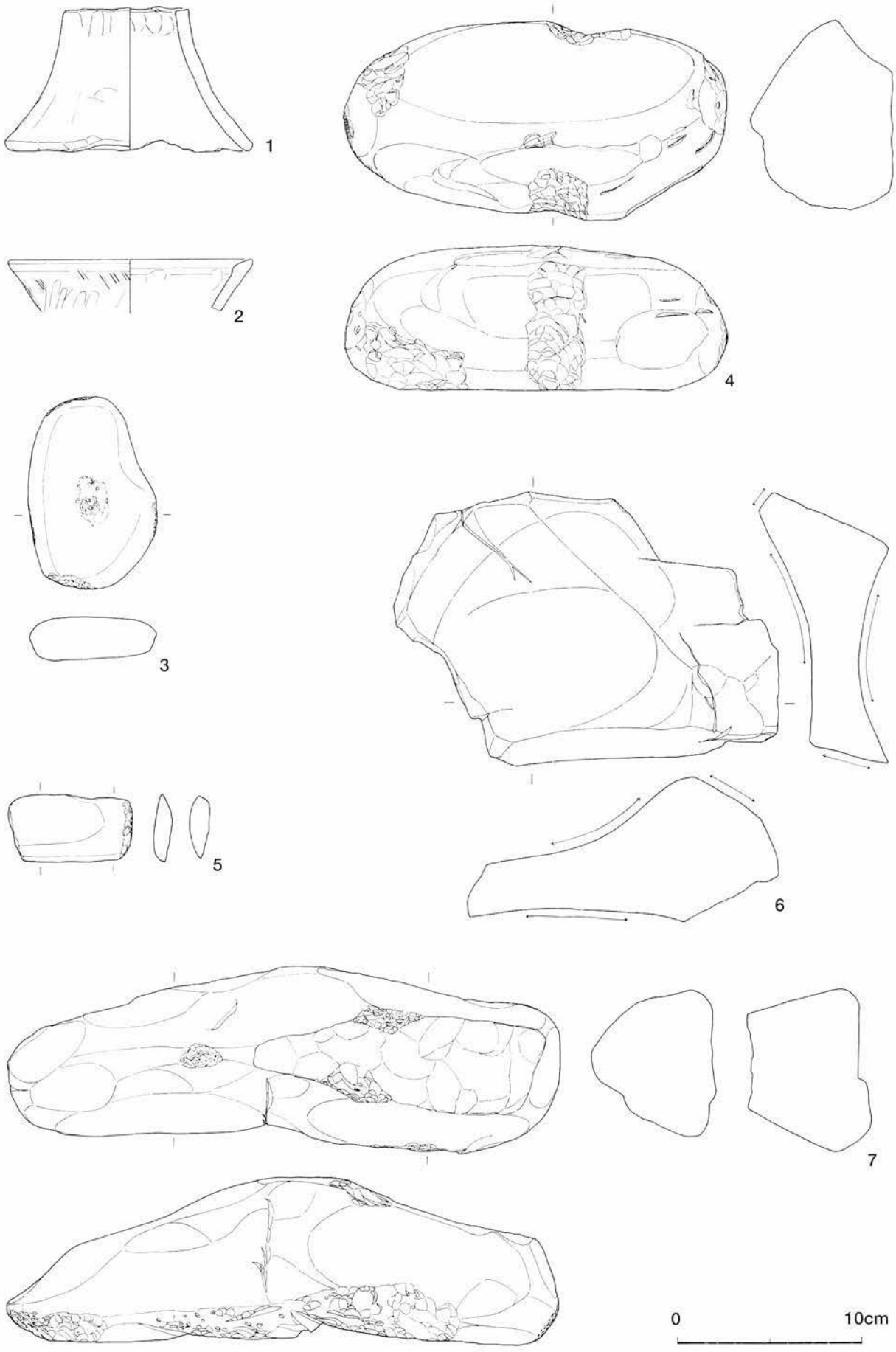
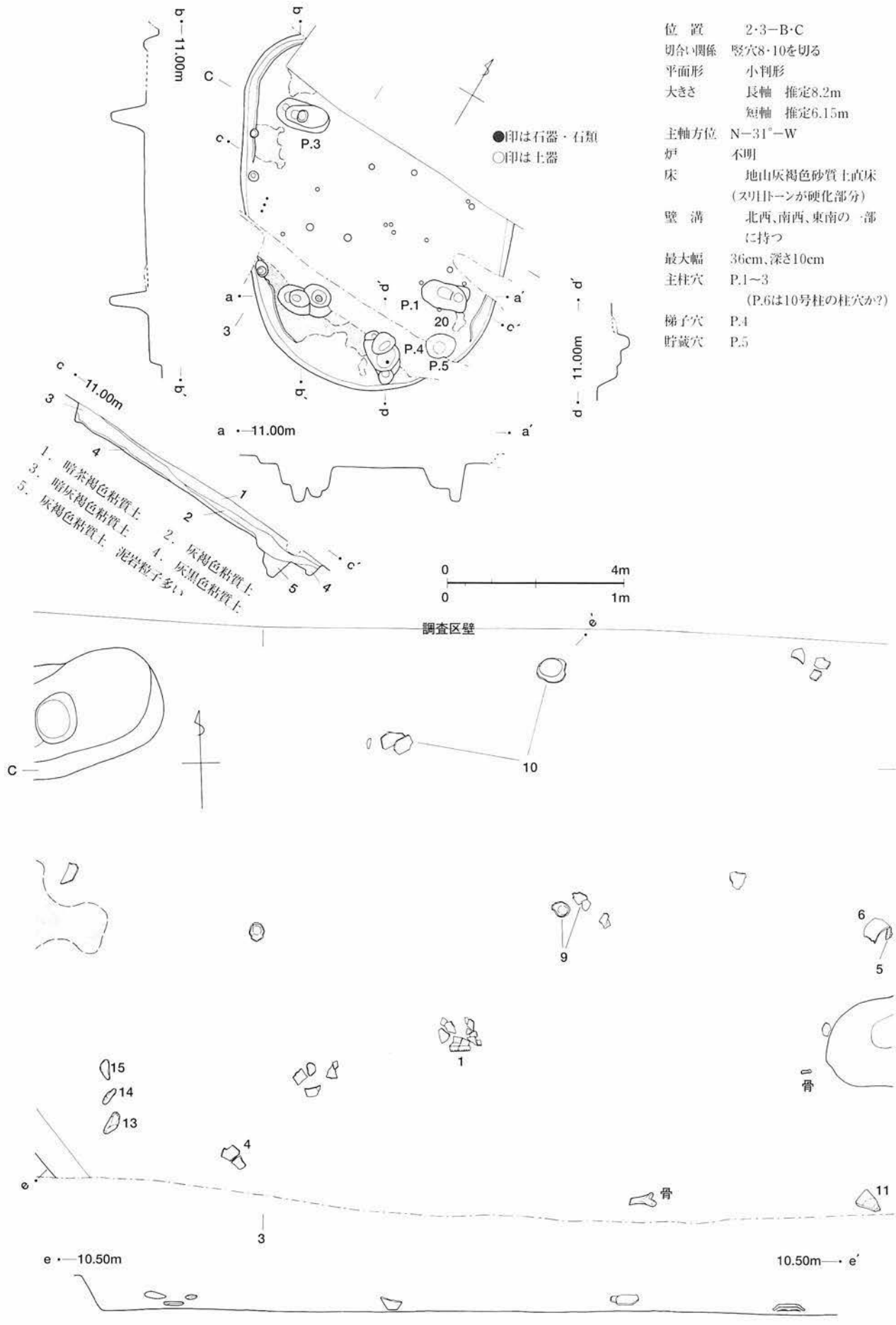


図38　竪穴住居 8 出土遺物



位　置　2·3−B·C
切合い関係　竪穴8·10を切る
平面形　小判形
大きさ　長軸　推定8.2m
　短軸　推定6.15m
主軸方位　N−31°−W
炉　不明
床　地山灰褐色砂質土直床
（スリ目トーンが硬化部分）
壁　溝　北西、南西、東南の一部に持つ
最大幅　36cm、深さ10cm
主柱穴　P.1〜3
（P.6は10号柱の柱穴か?）
梯子穴　P.4
貯蔵穴　P.5

図39　竪穴住居 9

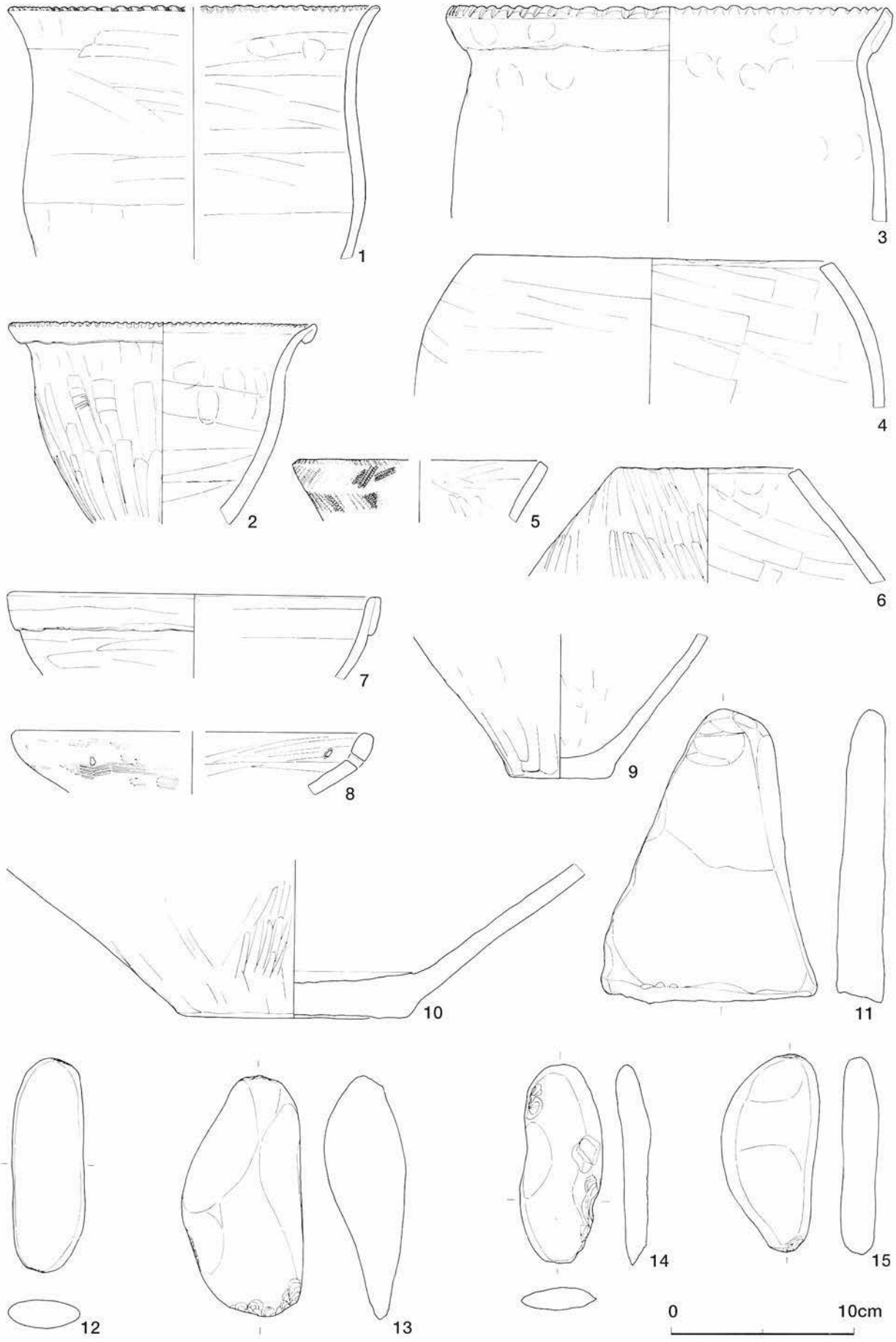


図40　竪穴住居 9 出土遺物

図40	種　類	大きさ　せいけい　胎土　色調　備考
1	弥　生 深　鉢	口縁部～胴部破片　口径20.5cm　せいけい　輪積み　口唇部上方から丸棒による押捺で波状　口縁部から胴部斜めの刷毛目　胎土　淡灰褐色　赤色粒　砂粒　表面　黒褐色
2	弥　生 か　め	口縁部～胴部破片　口径16.0cm　せいけい　輪積み　口唇部上方から丸棒による押捺で波状　口縁部折り返し　内外面刷毛ナデ後へら磨き　胎土　橙色　針状物質　赤色粒　砂粒
3	弥　生 か　め	口縁部～胴部破片　口径24.7cm　せいけい　輪積み　口唇部上方から丸棒による押捺で波状　口縁部折り返し指頭によるナデ　胎土　灰橙色　針状物質　白色粒　砂粒　備考　磨滅著しい
4	弥　生 壺	胴部破片　胴部径26.0cm　せいけい　輪積　内面へら磨き　外面へら磨き後赤彩　胎土　淡橙色　赤色粒　砂粒　備考　再加工か？
5	弥　生 広口壺	口縁部破片　口径14.1cm　せいけい　輪積み　口唇部に糸縄文　口縁部～肩部ＲＬの羽状糸縄文　胎土　淡橙色　白色粒　赤色粒　微砂粒　備考　表面赤彩か？
6	弥　生 広口壺	頚部～肩部破片　せいけい　輪積み　内面へらナデ胎土　外面へら磨き後赤彩　淡橙色　白色粒　赤色粒　砂粒　備考　再加工か？
7	弥　生 鉢	口縁部破片　口径20.6cm　せいけい　輪積み　口縁部折り返し　内外面へら磨き後赤彩　胎土　淡橙色　白色粒　砂粒
8	弥　生 鉢	口縁部破片　口径19.9cm　せいけい　輪積み　口縁部に二ヶ穿孔　外面刷毛ナデ　胎土　橙色　白色粒　砂粒
9	弥　生 壺	底部破片　底経　5.6cm　せいけい　輪積み　外面刷毛ナデ後へらナデ　胎土　橙色　白色粒　砂粒
10	弥　生 か　め	底部破片　底経　12.8cm　せいけい　輪積み　外面へら磨き　底部刷毛ナデ　胎土　橙色　砂粒
11	石　皿	破片長さ15.5cm　幅12cm　厚さ2.5cm　石質　砂岩
12	敲打痕の ある石	破片長さ11.6cm　幅4.0cm　厚さ1.5cm　石質　軟質細粒凝灰岩　備考　加工礫
13	叩き石	破片長さ13.2cm　幅6.7cm　厚さ4.5cm　石質　砂岩
14	打　製 石包丁	破片長さ10.9cm　幅4.1cm　厚さ1.4cm　石質　ホルンフェルス
15	敲打痕の ある石	破片長さ10.7cm　幅5.2cm　厚さ1.9cm　石質　砂岩

表34　竪穴住居９出土遺物観察表

床上や壁溝中から壺底部が出土しているが、時期は不明。

竪穴住居13（図43／表37）

調査区北西の拡張区１・２－Ａ・Ｂにあり、北半部は調査区外に出ている。また南側は竪穴住居８に切られる。詳細は不明だが、だいたい６ｍ前後の胴張りの隅丸方形になろう。

炉は北寄りに１基が検出された。不整楕円の平面形で、串または杭らしい小穴７つを確認した。

床は地山灰褐色砂質土直床で、全体に遺存状態がよい。また広く被熱痕跡がある。壁溝は検出範囲では全周している。

主柱穴は南東部のもののみ検出した。南端の壁際に梯子穴らしい穴がある。

出土遺物には甕底部・石包丁・敲石等がある。

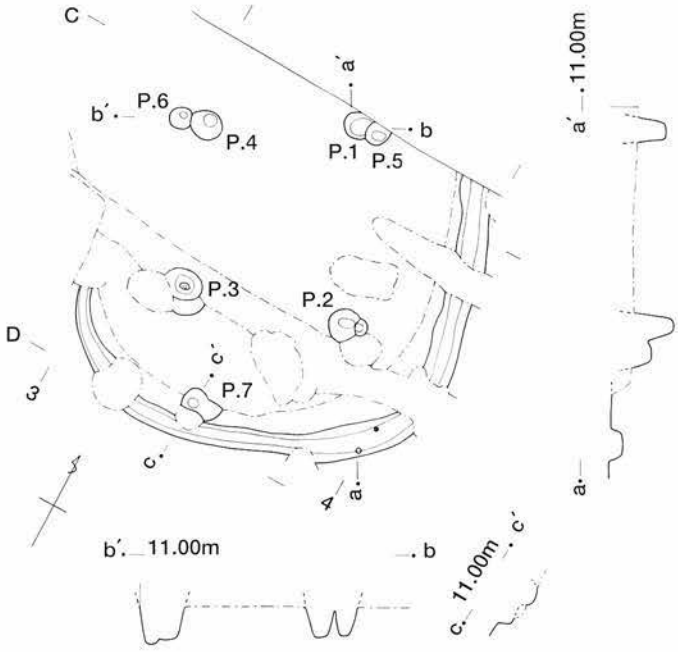
時期は不詳だが、これもおおむね弥生時代中期後半とみてよいのではないか。

竪穴住居15（図33、個別図なし）

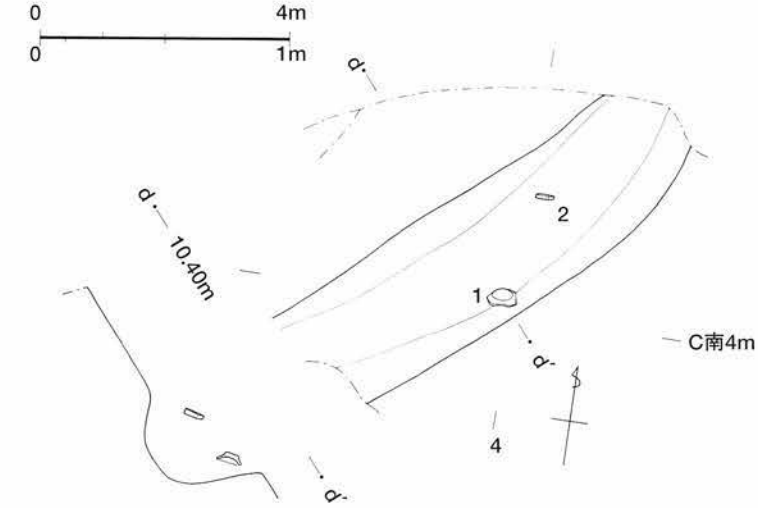
調査区南西角の１・２－Ｄに、竪穴住居７の下から壁溝が70～80cmほど検出された。溝13と重複するが、本址が新しい。詳細は不明。

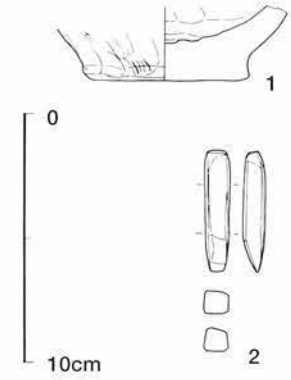
遺構外採集遺物（図44／表38）

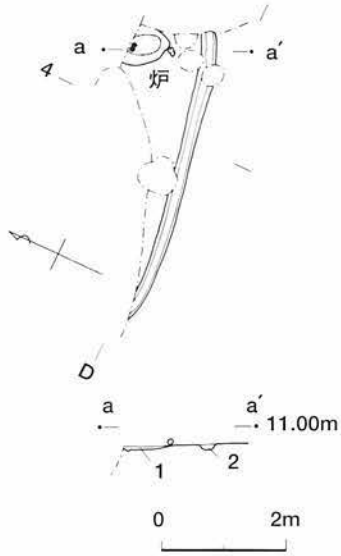
地山灰褐色砂質土上にある茶褐色粘質土中や、中世層に混じって出土した遺物のうち、主なものを紹



位置	2・3・4—B・C・D
切合い関係	竪穴11を切り、9に切られる
平面形	隅丸長方形
大きさ	長軸推定 7.4m
	短軸推定5.5m
主軸方位	N—23° —W
炉	不明
床	地山灰褐色砂質土直床
	(ほとんどが竪穴9に削られている)
壁溝	壁遺存部分では全周
	最大幅50cm、深さ22cm
主柱穴	P.1～4
梯子穴	P.7







1. 橙色の焼土
2. 暗灰褐色粘質土

位置	3・4—C
切合い関係	竪穴6・10に切られる
平面形	不明だが隅丸系か
大きさ	不明
主軸方位	N—80° —E前後か
炉	壁溝から55cm前後の位置に焼土の詰った炉床があるが、位置的にみて当該住居のものかどうか疑問がある。
床	全面削平されている
壁溝	最大幅28cm、深さ9cm
主柱穴等	不明
特記事項	壁溝のごく一部のみの検出。この高さで削平を受けていることは弥生以後中世までの間に一帯が大きく削平されたことを意味する。また、炉址が別住居のものならば、最低でも2軒の住居が存在したことになる。

図41　竪穴住居10（上）・11（下）、同出土遺物

図41	種　類	大きさ　　せいけい　　胎土　　色調　　備考
1	弥　生 か　め	底部破片　底径6.6cm　せいけい　輪積み　内外面指頭痕　外面刷毛ナデ　胎土　橙色　白色粒　砂粒　小礫粒
2	磨製石斧 ノミ型	長さ4.8cm　幅1.0cm　厚さ　1.0cm　石質　硬質中粒凝灰岩

表35　竪穴住居10出土遺物観察表

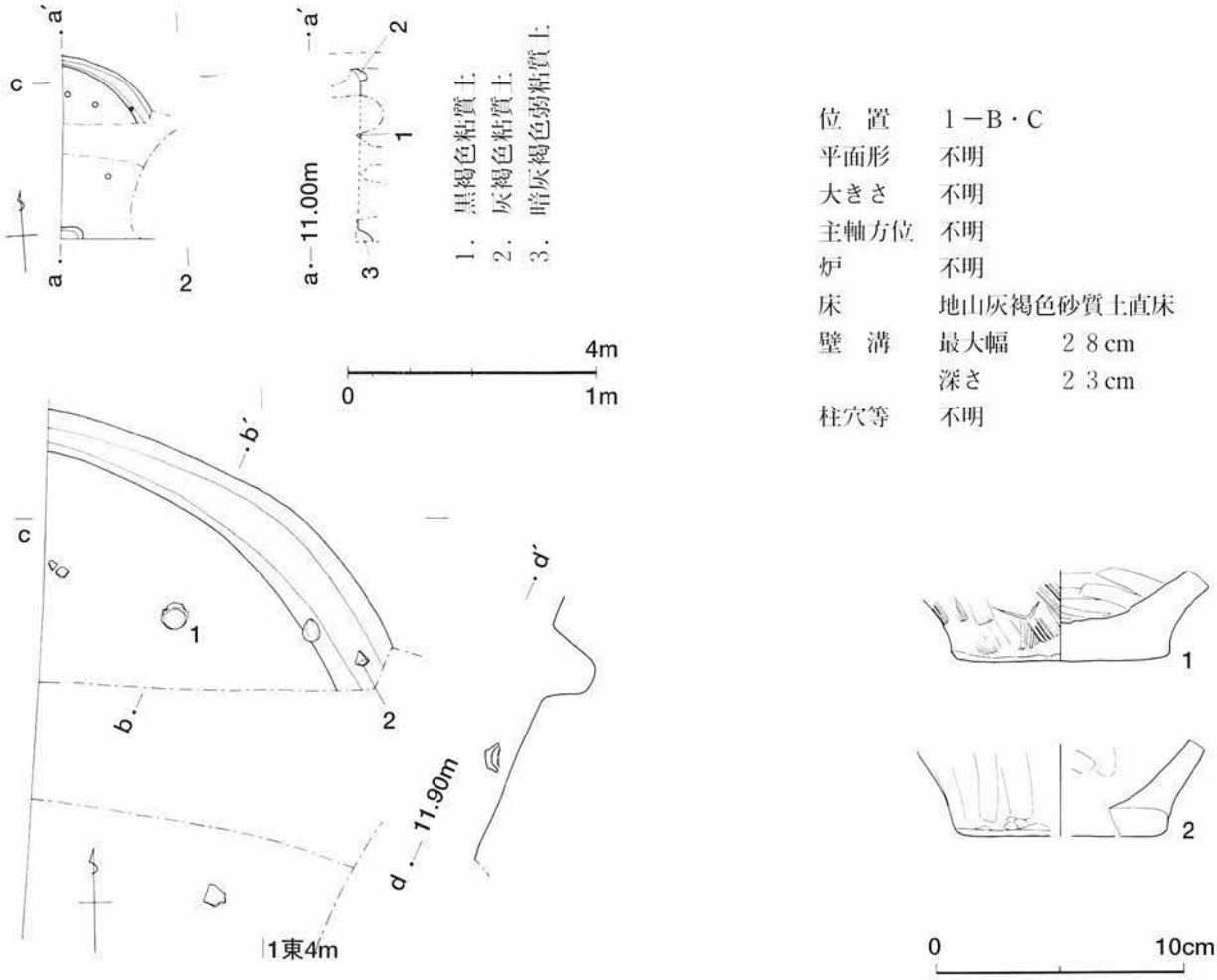


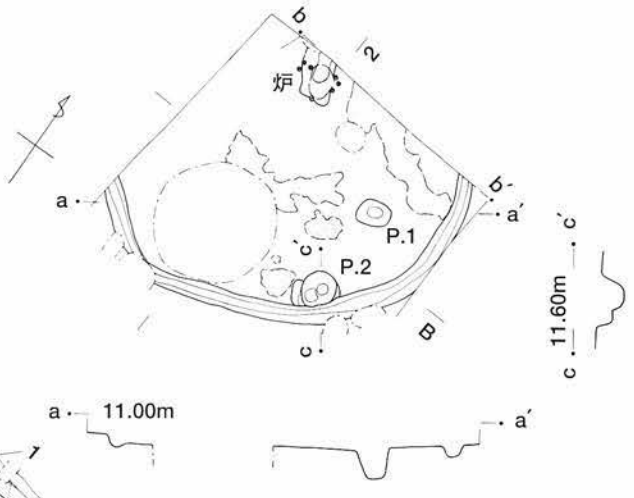
図42　竪穴住居12、同出土遺物

図42	種　類	大きさ　　せいけい　　胎土　　色調　　備考
1	弥　生 か　め	底部破片　底径8.6cm　せいけい　輪積み　内外面刷毛ナデ　外面後へらナデ　胎土　淡橙色　白色粒　黒色粒　砂粒　備考　二次焼成
2	弥　生 か　め	底部破片　底径8.4cm　せいけい　輪積み　外面下位へらナデ　胎土　橙色　白色粒　黒色粒　砂粒

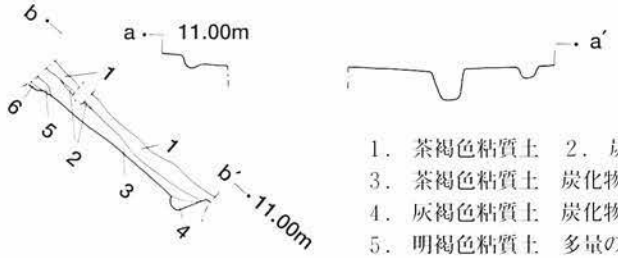
表36　竪穴住居12出土遺物観察表

介しておく。

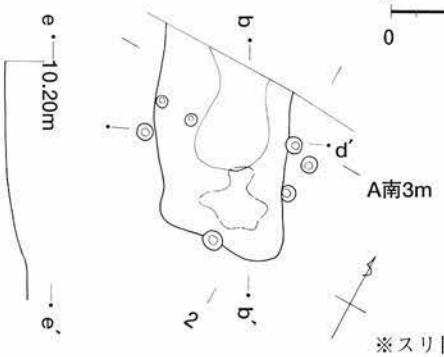
再利用かあるいは別の目的で丁寧に割れ口を打ち欠いてある壺頸部・鉢・高坏・超小型土器（「ミニチュア」土器）・敲石などがある。



位　置　　1・2－A・B
切合い関係　竪穴8に切られる
平面形　　胴張り隅丸方形か
大きさ　　長軸　不明
　　短軸　6.5m前後か
主軸方位　N－35°－E
炉　　北寄りに一基
　　詳細は下図
床　　地山灰褐色砂質土直床
　　（スリ目トーンが硬化部分）
壁　溝　　壁遺存部分では全周
　　最大幅37cm、深さ13cm
主柱穴　P.1
梯子穴　P.2

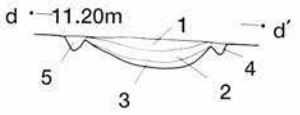


1．茶褐色粘質土　2．炭化層
3．茶褐色粘質土　炭化物含む
4．灰褐色粘質土　炭化物含む
5．明褐色粘質土　多量の炭化物含む
6．橙色の焼土　炭（詳細は下図）



※スリ目トーンが硬化部分

大きさ　　長軸　94cm以上
　　短軸　55cm
　　深さ　12cm
特記事項　直径4～8cm、深さ5～10cm、の小穴が
　　周辺に7穴存在



1．暗灰褐色粘質土
2．橙色の焼土、炭
3．焼土・炭に泥岩粒子混る
4．3に同じ
6．3に同じ

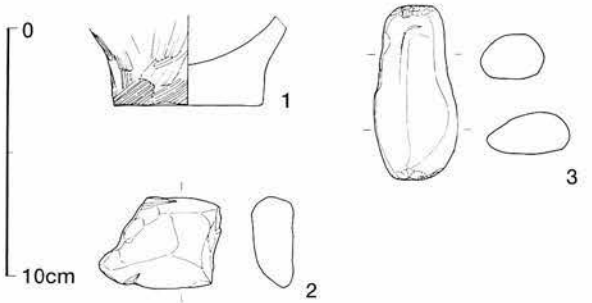


図43　竪穴住居13、同出土遺物

図43	種　類	大きさ　せいけい　胎土　色調　備考
1	弥生壺	底部破片　底径6.0cm　せいけい　輪積み　外面刷毛ナデ後へらナデ　胎土　淡橙色　白色粒　金雲母　粘土粒　備考二次焼成
2	石包丁	破片長さ4.5cm　幅3.5cm　厚さ　1.6cm　石質　砂岩
3	敲打痕のある石	長さ7.0cm　幅3.3cm　厚さ1.6cm　石質　砂岩

表37　竪穴住居13出土遺物観察表

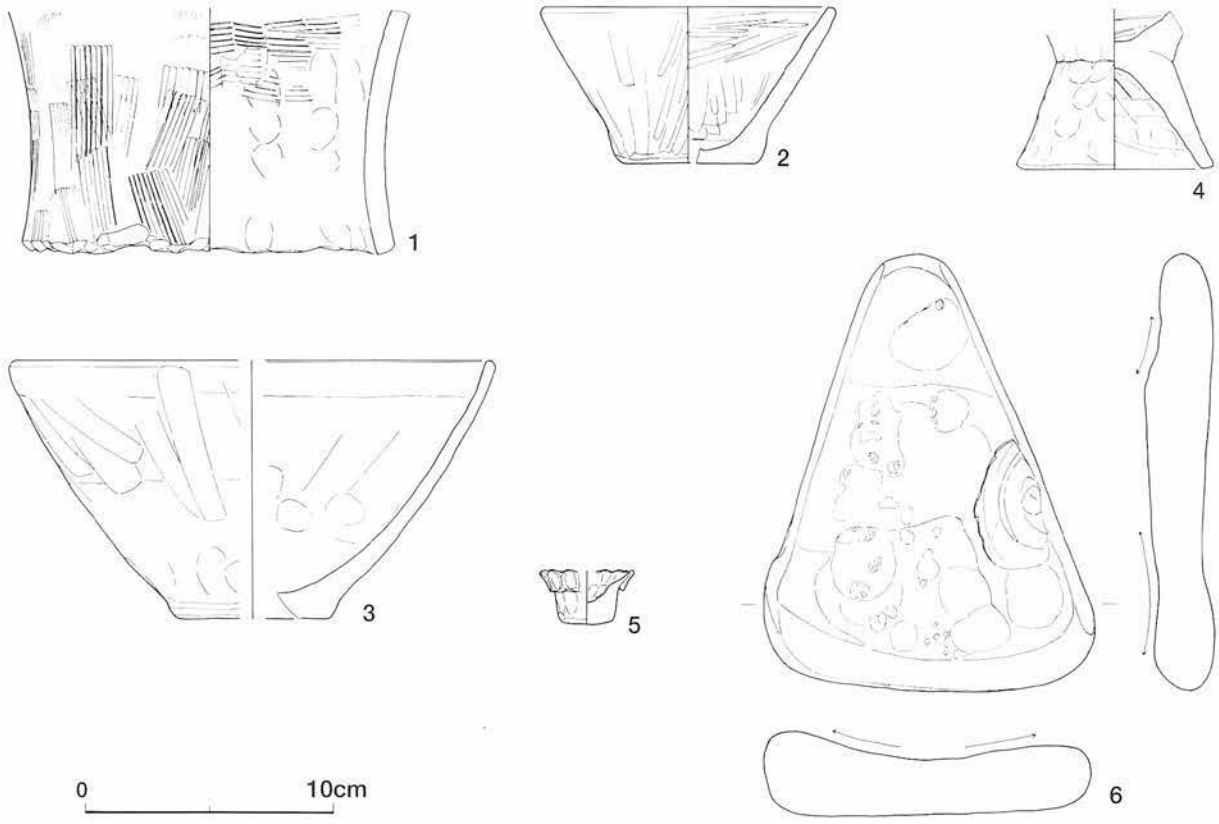


図44　遺構外採集遺物

図44	種　類	大きさ　　せいけい　　胎土　　色調　　備考
1	弥　生 壺	体部破片　体部径15.0cm　せいけい　輪積み　内面指頭ナデ後刷毛ナデ　外面縦位の刷毛目　胎土　灰黒色　針状物質　白色粒　砂粒　表面橙色
2	弥　生 鉢	大きさ　口径11.9cm　底経5.4cm　器高6.2cm　せいけい　輪積み　内外面　刷毛ナデ後へらナデ　胎土　灰橙色　針状物質　白色粒　赤色粒　砂粒
3	弥　生 鉢	大きさ　口径19.6cm　底経6.2cm　器高10.3cm　せいけい　輪積み　内外面　刷毛ナデ後へらナデ　胎土　灰橙色　針状物質　白色粒　黒色粒　粘土粒　砂粒　備考　煤付着
4	弥　生 台付かめ	台部破片　底径8.0cm　せいけい　輪積み　内外面ナデ　外面ＲＬの糸縄文が沈線で交互に区画　胎土　灰橙色　白色粒　砂粒
5	弥　生 極小土器	大きさ　口径3.7cm　底経2.0cm　器高2.2cm　せいけい　手づくね　口縁部　花弁にせいけいか？　胎土　灰橙色　針状物質　白色粒　赤色粒　きめ細やか
6	弥　生 広口壺	口縁部破片　口径16.4cm　せいけい　輪積み　口縁部緩やかに外反　折り返し口縁にＲＬの羽状糸縄文　上端を丸棒押捺　下端をへら様なもので刻む　胎土　灰橙色　砂粒　備考　赤彩か
7	自然石	長さ17.3cm　幅13.1cm　厚さ3.4cm　備考　道具として持ち込んだ可能性あり

表38　遺構外採集遺物観察表

6．参考資料

原因者負担分調査区のⅡ区にある遺構だが、資料としての意義が大きいためここで紹介しておく。

井戸２（図45・46／表39・40）

調査区東壁近くの５－Ｄにある素掘り井戸。平面形状は隅丸方形で、全体的には先端の切り取られた逆角錐形を呈する。大きさは上端で220×193cm、深さ322cm。

埋土下層に土師器や山茶碗が多数投げ込まれており、井戸埋め戻しにともなう儀礼の一種がおこなわれたとみられる。刀子や小型硯が出土しているが、それらも儀器のひとつかもしれない。

山茶碗は藤沢良祐の示教によれば、12世紀第３～第４四半期のものである。共伴の土師器類もほぼその時期の所産とみてよい。これはあるいは平安時代末期にさかのぼりうる資料である。

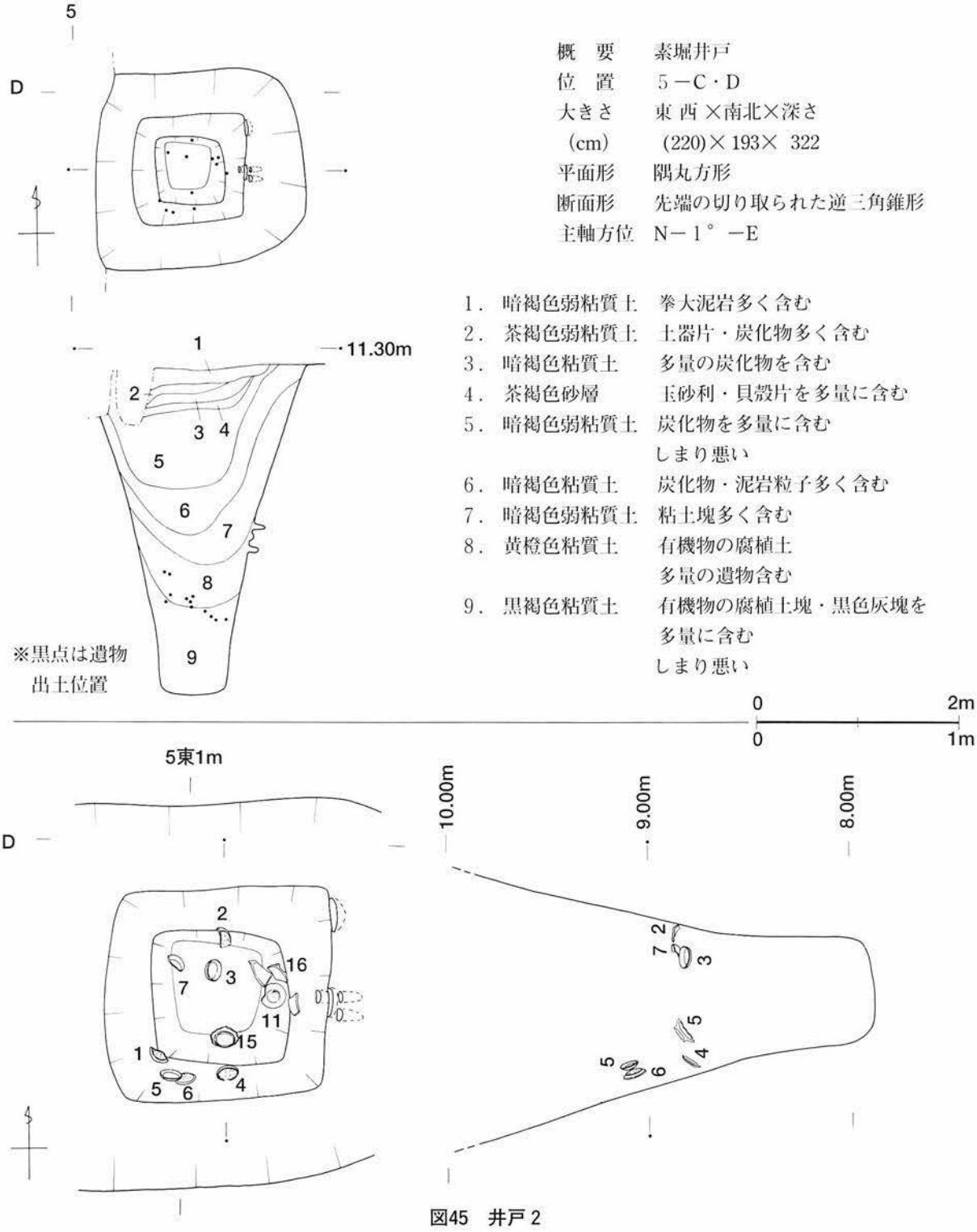


図45　井戸２

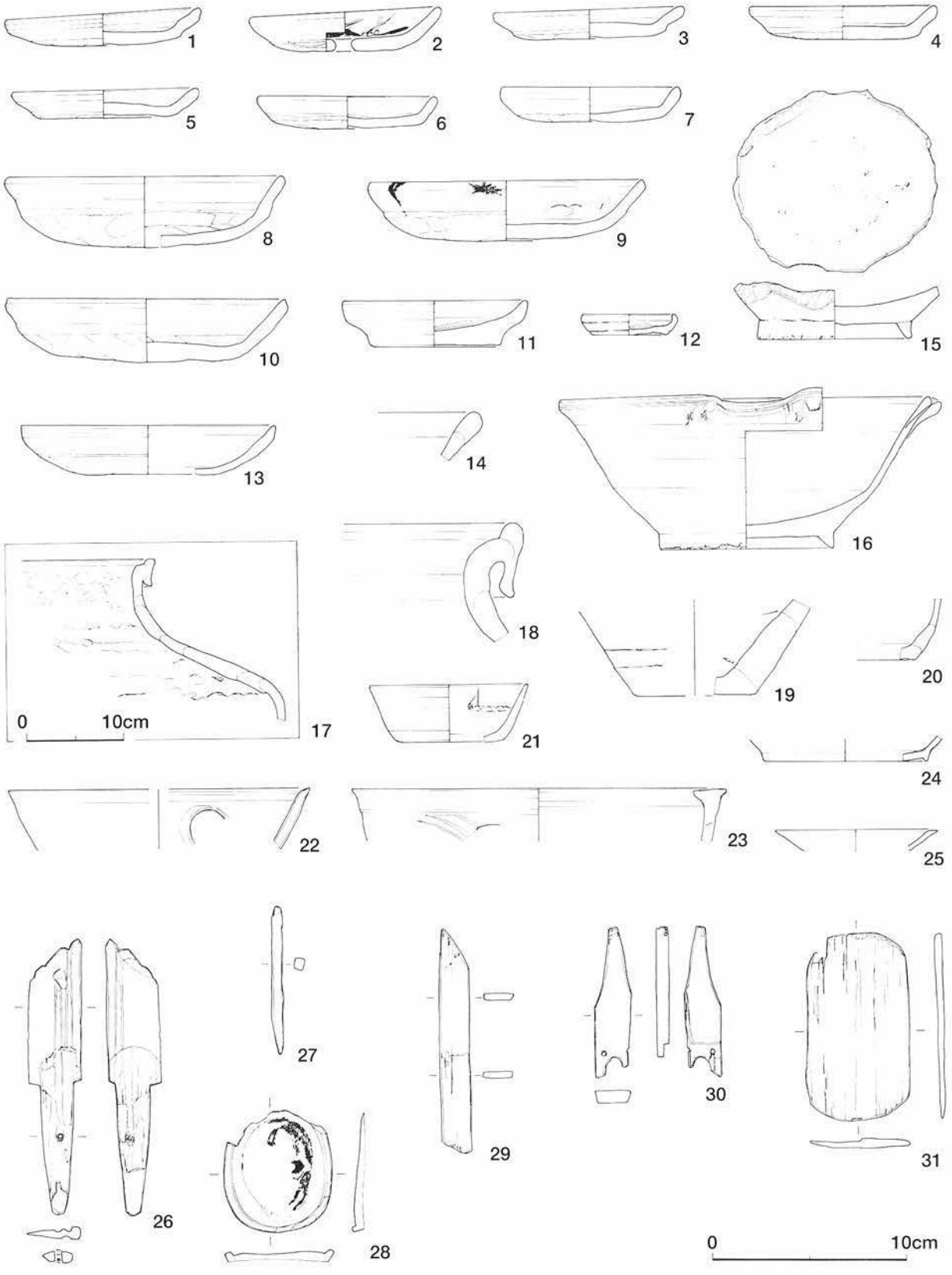

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
15
13
14
16
18
0
10cm
17
19
20
21
24
22
23
25
27
26
28
29
30
31
0
10cm

図46　井戸 2 出土遺物

図46	種　類	大きさ　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	大きさ　口径10.2cm　底経4.6cm　器高1.6cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　色調　灰褐色
2	かわらけ	大きさ　口径10.0cm　底5.0cm　器高2.0cm　せいけい　手づくね　胎土　清緻　色調　黄灰褐色　備考　内底面に穿孔　内底面に墨付着
3	かわらけ	大きさ　口径9.8cm　底経6.3cm　器高1.5cm　せいけい　手づくね　胎土　砂粒　色調　灰褐色
4	かわらけ	大きさ　口径9.8cm　底経4.8cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　灰褐色　備考　二次焼成
5	かわらけ	大きさ　口径9.7cm　底経6.6cm　器高1.4cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　砂粒　小礫粒　色調　灰褐色
6	かわらけ	大きさ　口径9.6cm　底経4.4cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　雲母　色調　灰褐色
7	かわらけ	大きさ　口径9.4cm　底経4.4cm　器高1.8cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　灰褐色
8	かわらけ	大きさ　口径9.4cm　底経4.4cm　器高1.9cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　灰褐色
9	かわらけ	大きさ　口径14.4cm　底経6.4cm　器高3.1cm　せいけい　手づくね　胎土　針状物質　色調　橙色　備考　油媒付着
10	かわらけ	大きさ　口径14.6cm　底経8.5cm　器高3.8cm　せいけい　手づくね　胎土　雲母　針状物質　砂粒　色調　橙褐色
11	かわらけ	大きさ　口径9.8cm　底経6.8cm　器高2.4cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　砂粒　色調　灰褐色　備考　板状圧痕
12	かわらけ	大きさ　口径5.0cm　底経3.8cm　器高1.6cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　粘土粒　色調　灰橙色　備考　板状圧痕　極小
13	かわらけ	大きさ　口径13.2cm　底経7.0cm　器高2.5cm　せいけい　ロクロ　内底部ナデ　胎土　小礫粒　色調　灰白色
14	山茶碗捏鉢	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　灰色　小礫粒　長石
15	美濃系山茶碗	底部～体部の再加工品（硯）　口径10.5cm　底経8.0cm　器高2.9cm　せいけい　ロクロ　高台張り付け　胎土　乳白色　黒色粒　砂粒含むがきめ細やか　備考　高台畳付きに籾殻痕　墨付着
16	美濃系山茶碗	大きさ　口径19.7cm　底経9.0cm　器高7.7cm　せいけい　ロクロ　高台張り付け　胎土　色調　灰橙色
17	常滑かめ	口縁部～体部　せいけい　輪積み　胎土　灰色　黒色粒　長石　表面暗褐色　備考　口縁部内面剥離
18	常滑かめ	口縁部破片　せいけい　輪積み　胎土　暗灰色　小礫粒　表面　暗褐色
19	常滑壺	底部破片　底経6.4cm　せいけい　輪積み　胎土　灰褐色　長石　表面　黒灰色
20	常滑小壺	底部破片　せいけい　輪積み　胎土　灰黒色
21	瀬戸入子	大きさ　口径8.2cm　底経5.6cm　器高2.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　黄灰色　きめ細やか　表面　灰青色　備考　内面　掻傷
22	青磁碗	口縁部破片　口径15.6cm　せいけい　ロクロ　素地　灰色　緻密　釉薬　淡緑色透明　文様　内面に画花
23	青白磁香炉	口縁部破片　口径19.4cm　せいけい　ロクロ　素地　白色　きめ細やか　釉薬　淡青色透明　文様　外面に透かし彫り

表39　井戸２出土遺物観察表（１）

図46	種　類	大きさ　　せいけい　　胎土　　素地　　色調　　釉薬　　備考
24	青白磁 皿	底部破片　底径8.4cm　せいけい　ロクロ　素地　乳白色　きめ細やか　釉薬　淡青色透明
25	青白磁 皿	口縁部破片　口径8.4cm　せいけい　ロクロ　素地　乳白色　きめ細やか　釉薬　淡青色透明
26	鉄製品 刀　子	茎～刀身部分の一部　長さ14.0cm　備考　茎に目釘痕
27	鉄製品 釘	長さ　7.6cm　厚さ0.45×0.55cm
28	硯	円面硯　上部の一部　底部損傷　長さ　6.2cm　幅　5.6cm　せいけい　墨道を中央に円縁に海部を浅く彫り上げている　石材　赤褐色　粘板岩
29	木製品 不　明	長さ11.5cm　1.5×0.3cm
30	木製品 糸巻き	一部分　長さ　7.6cm　1.8×0.6cm　備考　数カ所の穿孔あり
31	木製品 不　明	長さ　9.5cm　15.3×0.5cm

表40　井戸２出土遺物観察表（２）

第四章　まとめと若干の展望

本発掘調査では、さほど広範囲の調査とはいえないにもかかわらず、弥生時代から中～近世にかけ非常に良好な資料が得られた。しかし、今回の報告分は調査区中の西側半分の国庫補助事業にかかる範囲にとどまり、総括的な考察については、原因者負担分の報告を併せた全体の成果をまってからおこなわなければならない。ここでは、今回報告した分について気づいたことを簡単にまとめ、総括に向け若干の課題と展望を示しておきたい。

1．弥生時代

鶴岡八幡宮東隣の筋違橋付近から杉本付近にかけての滑川北岸で、相当な規模の弥生集落があることはかねて予想されていた。大倉幕府正面の一帯で竪穴住居が検出されたのはこれで4例目となる。過去3例はいずれも住居を単発的に調査したにすぎなかったが、本地点では14軒の住居がまとまって検出され、集落の様相をある程度把握できる資料を得ることができた。

遺構についてなど

集落の年代はおおむね宮ノ台期に含めることができる。これは本調査地点のすぐ西側にある「大倉南御門遺跡A地点（仮称）」(図2地点2）をはじめ、これまで大倉一帯で検出された竪穴住居とも共通する。この地域に展開した弥生集落の年代を示すものだといえよう。

なお、住居のなかには若干の新しい要素を持つものもみられる（竪穴住居9）。また次回報告分も含め、同心円状の二重の壁溝を持つものがいくつかある（7・8・3）が、いずれも外側が新しく、しかも内側の溝の上や2本の溝の間に床面が形成されているところから、これは住居の拡張とみてよい。そしてそれは、ほとんど当たり前のようにおこなわれていたと推測できる。

ただ現象的には拡張と呼ぶのが妥当なこの行為だが、その意味についてはまだまだ検討される必要があると思う。なお、拡張された3軒の住居がいずれも火災を被っている点、また平面形が胴張り隅丸方形で共通している点は注意を要する。

今回報告分ではないが、調査区を東西に走る溝13にも注意しておきたい。この溝はかつて大倉南御門遺跡A地点（仮称）の調査区南東角でも確認されており、竪穴住居7・15よりも古い。

出土遺物

出土遺物に関しては竪穴住居7で発見された片刃磨製石斧の大中小3点セット、同じく7の小さく割れた有頭石錘に注目したい。後者には被熱痕跡が明瞭で、おそらく炉の枕石に使われたとみられる。8の炉からはシイの実も見つかっている。鉄斧は出土していない。

2．鎌倉時代

鎌倉時代前期までとそれ以後

大倉幕府周辺遺跡群のうち筆者がかつて調査した二階堂字荏柄38番1地点（図2地点6）、東に近在する横小路周辺遺跡（図2地点8）など、六浦道沿いの遺跡の多くがそうであるように、本地点でもまた、鎌倉時代前期までが圧倒的に多く、同中期以後急激に遺跡密度が薄くなる、という現象が確認された。これはどうやら、付近で通有にみられる現象であるらしい。

そうだとすると、嘉禄元年（1225）の幕府の若宮大路近辺への移転（「宇津宮辻子幕府」）、あるいは

宝治合戦（三浦の乱、宝治元年＝1247）を契機にして、以後何らかの空白化政策がとられた可能性もあるかもしれない。

遺構について

本報で紹介した掘立柱建物は2棟にとどまったが、現在までに8棟を認めており、さらに増える可能性もある。大半が同じような主軸方位をもっているようなので、時期的には近接しているものと考えたい。これは前記した遺跡の消長を裏付ける現象でもある。

また、これらの方位がいずれも六浦道にではなく、柱穴列1に一致している要因が何なのか、遺跡消長とあわせ、総括報告に向けて課題としたい。

六浦道側溝の変遷が、一部とはいえ連続的に捉えられたことは本調査の大きな成果である。側溝からやや南に離れた位置に検出された布掘形式の柱穴列は、前出大倉幕府周辺遺跡群二階堂字荏柄38番1地点（図2地点6）に続いて2例目となる。今後さらに事例の増加することを期待したい。

出土遺物

土師器T種を中心に、鎌倉時代前期を主体とした良好な遺物が出土したが、ほぼ同一の層に集中しているため年代的な先後関係はつかみにくい。そのなかで、参考資料として呈示した井戸2の出土資料は注目に値する。

おそらく井戸の廃棄儀礼としていちどに投げ込まれたもので、良好な一括性は明らかである。図46－15・16の山茶碗は、本文でも述べたように、藤沢良祐によれば12世紀第3四半期の所産である可能性があるという。だとすれば鎌倉時代以前にまでさかのぼりうる資料であり、共伴する土師器の時期比定に有力な材料を提供するものとみてよい。

3．中世後期

東西に走る良好な溝を検出したが、そのほかの資料は乏しい。なお、先章でたびたび触れたように、こぶし大の破砕泥岩を大量に含む茶褐色～黄褐色の地業層が市域で広範に確認されるのはこのころである。この層の背景を探ることは、今後の鎌倉研究におそらく大変有益で、注目しておきたい。

4．近　世

遺構の大半がⅡ区の原因者負担分にあるため、今回の報告ではほとんど触れられなかったが、竪穴遺構から出土した大量の肥前産などの陶磁器は、大橋康二の示教によれば18世紀末～19世紀初めの良好な資料だという。近在の大倉南御門遺跡C地点（仮称、図2地点4）の調査でも同時期の遺物はかなりの量が出土しており、このころ六浦道沿いがおおいに賑わっていたことが分かる。

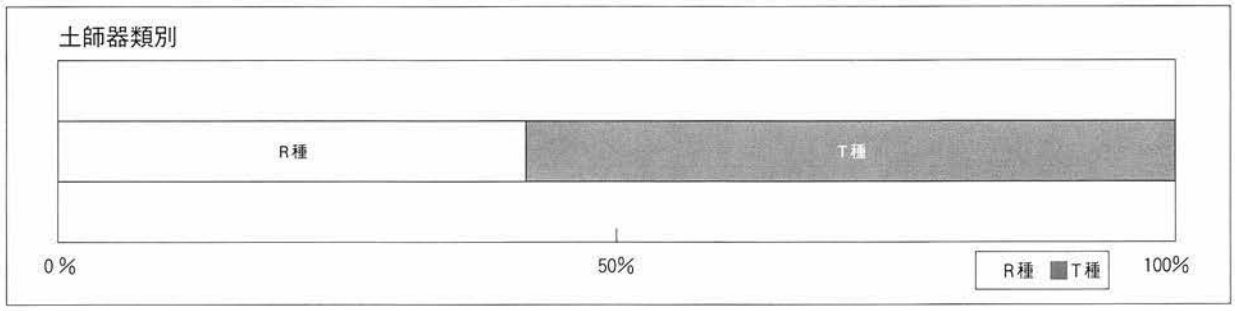
以上、粗雑ではあるが、今後の課題・展望等を述べてみた。

出土遺物総点数

土師器	国産陶磁器	土器土製品	舶載陶磁器	瓦	銭	金属製品	石製品	木製品	骨．骨製品	貝	鉱滓	総数
23049	2483	151	532	131	60	198	78	26	135	7	19	26869
85.8%	9.2%	0.6%	2.0%	0.5%	0.2%	0.7%	0.3%	0.1%	0.5%	0.0%	0.1%	100.0%

土師器類別

	R種	T種	総点数
	9732	13317	23049
百分率	42.2%	57.8%	100.0%



国産陶磁器類別

	常滑	渥美	山茶碗	瀬戸	他	総点数
	1855	217	321	85	41	2519
百分率	74%	8.6%	12.7%	3.4%	1.6%	100.0%

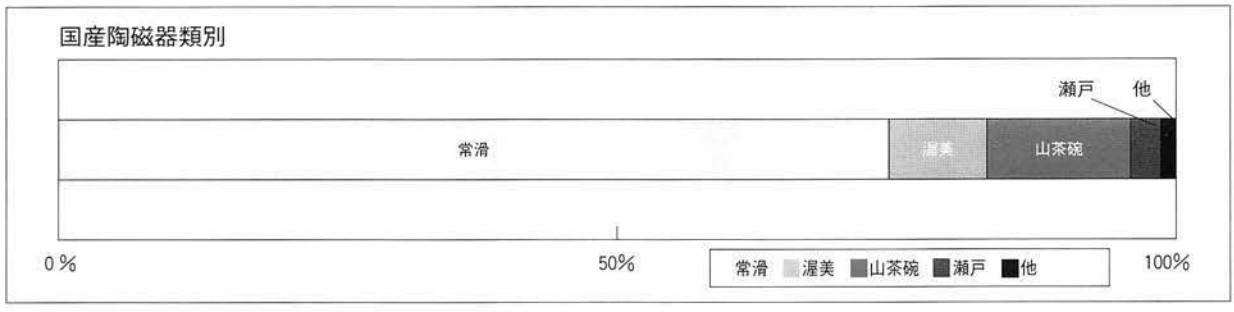
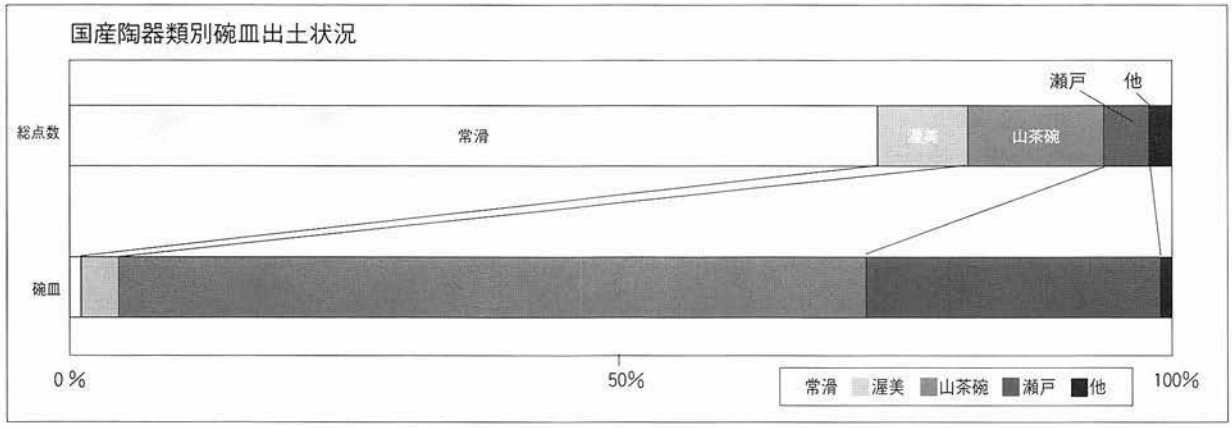


表41　遺物計数表（1）

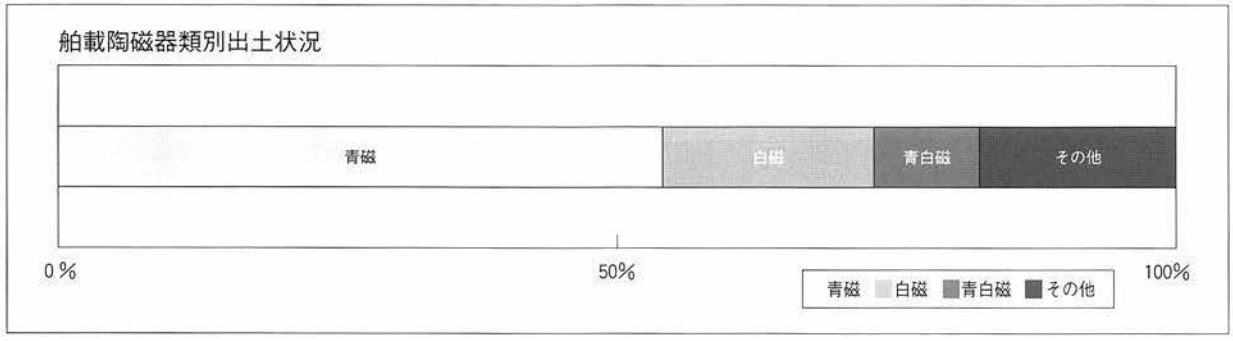
国産陶器類別碗皿出土状況

	常滑	渥美	山茶碗	瀬戸	他	総点数
碗皿	1	4	73	29	1	108
百分率	0.1%	1.8%	22.7%	34.1%	2.4%	4.3%



舶載陶磁器類別出土状況

	青磁	白磁	青白磁	その他	総点数
	284	98	52	98	532
百分率	53.4%	18.4%	9.8%	18.4%	100.0%



舶載陶磁器碗皿類別出土状況

	青磁	白磁	青白磁	その他	総点数
碗皿	266	59	25		350
百分率	93.7%	60.2%	48.1%	0.0%	65.8%

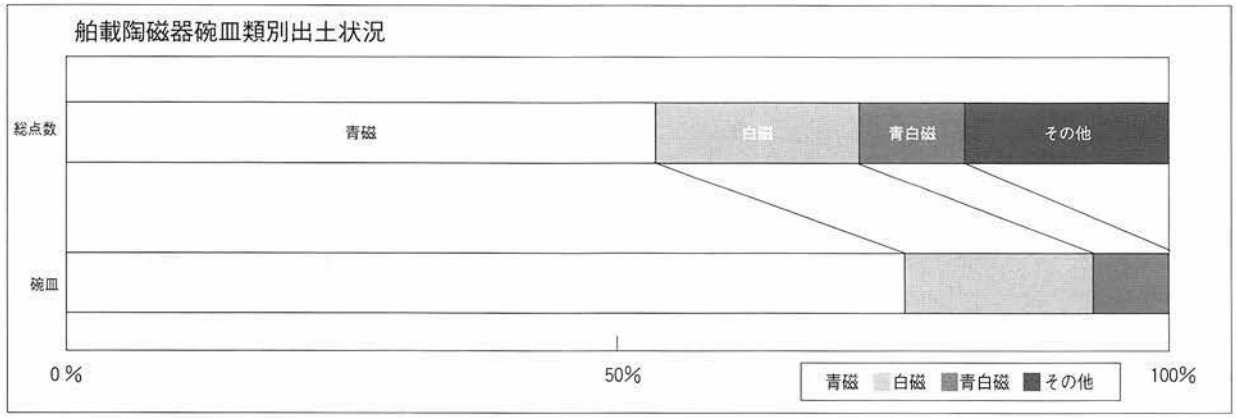
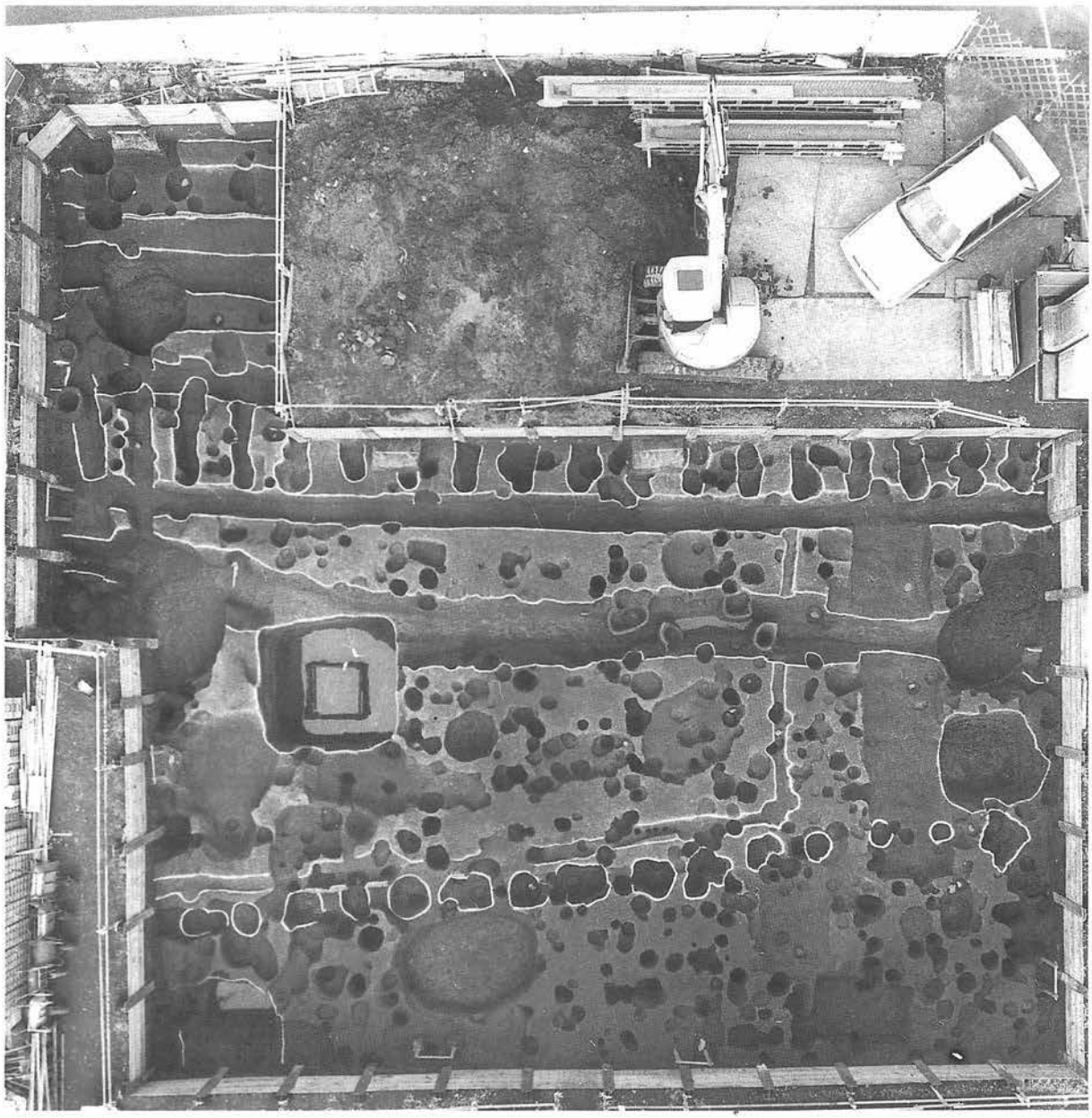


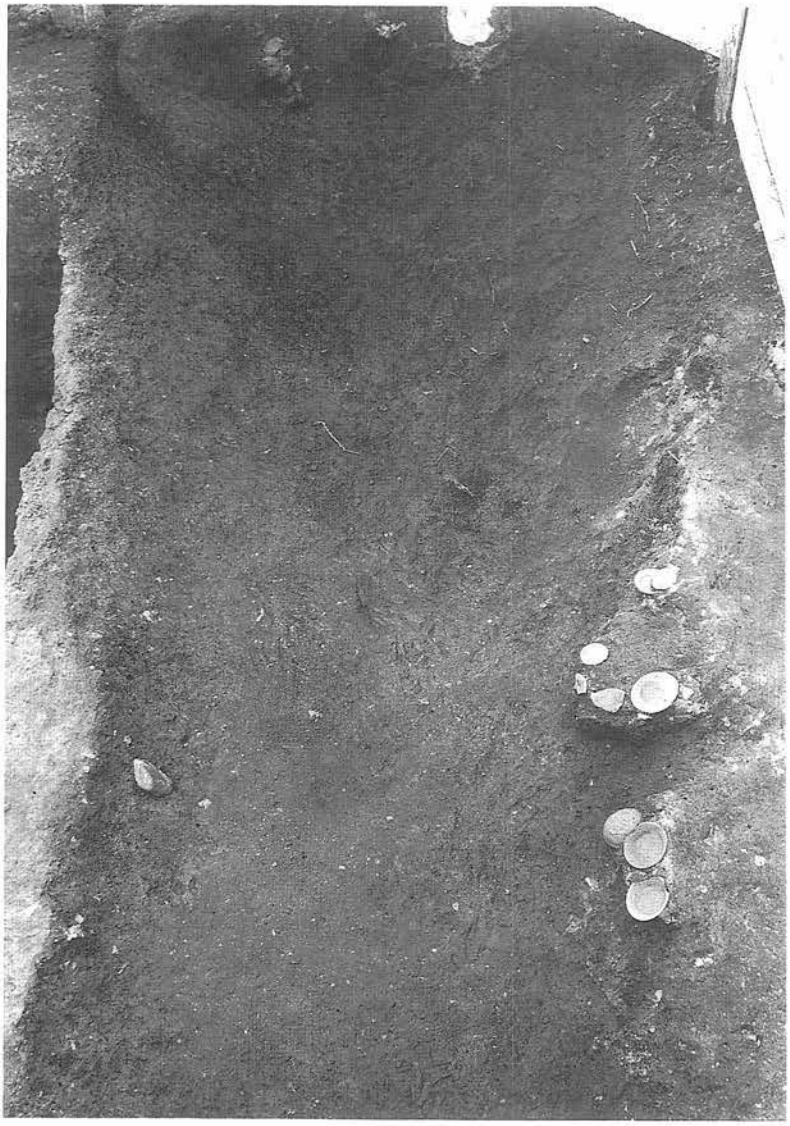
表42　遺物計数表（２）

写　真　図　版



中世面全景（上が北）

図版 2

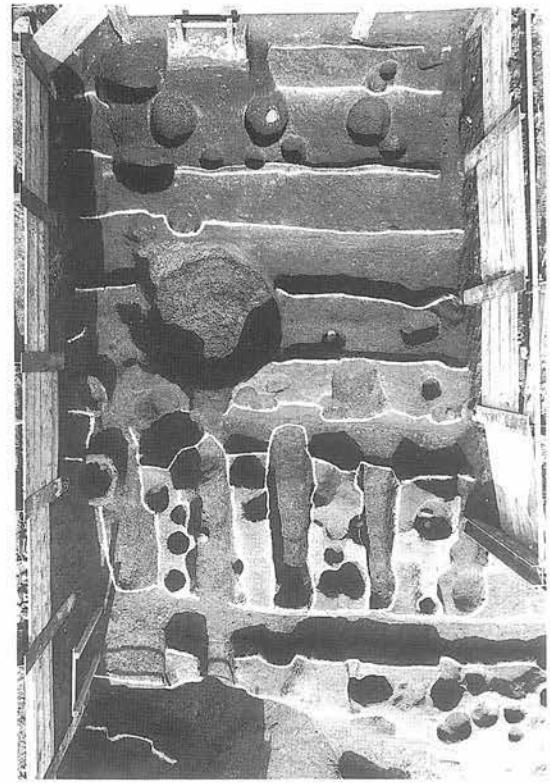


1. 溝1（東から）

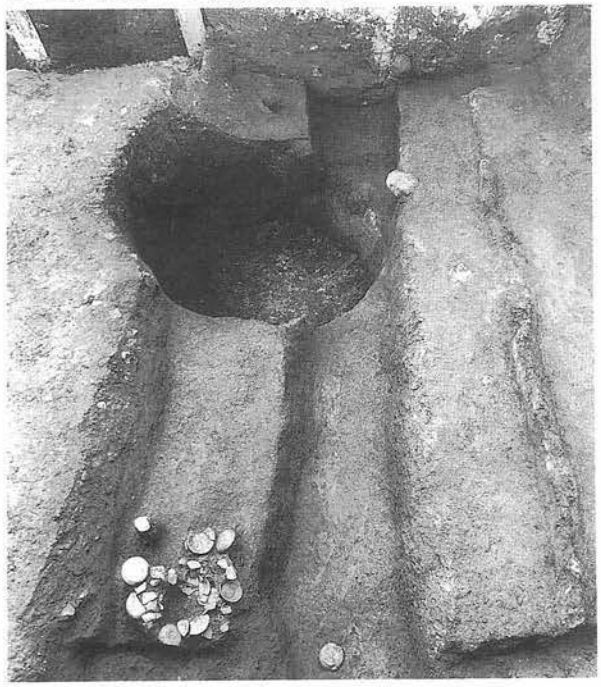
2. 同上　土師器出土状況（南から）

1. 溝1’（右）・2（左、東から）

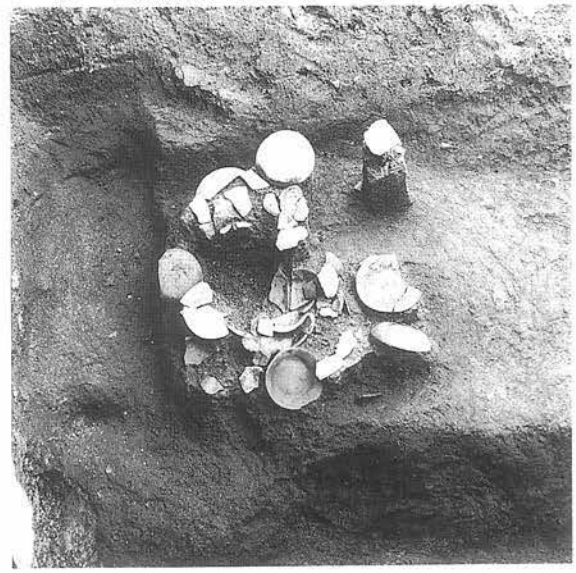
4. 六浦道側溝群と柱穴列2・布掘柱穴列（上が北）



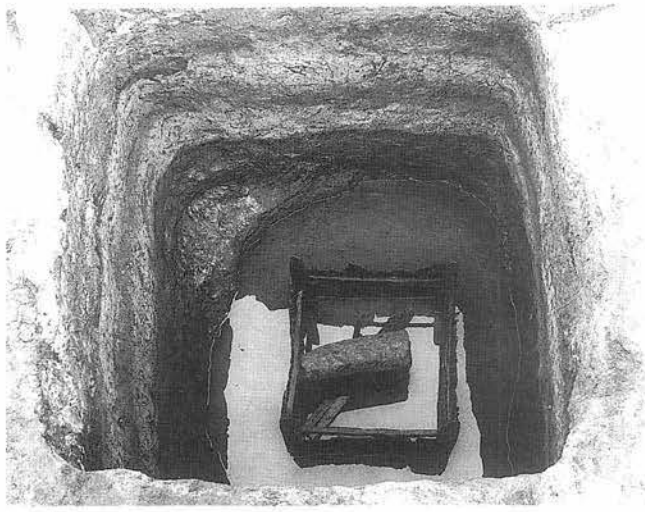
2. 溝3（右）・4（左、東から）



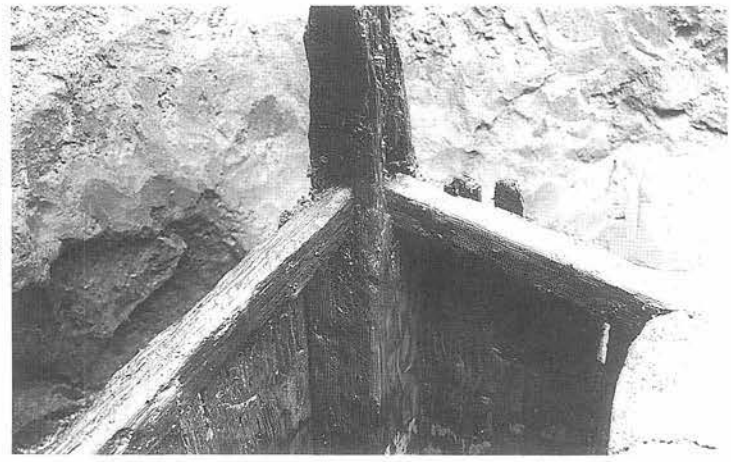
3. 溝4　土師器出土状況（北から）



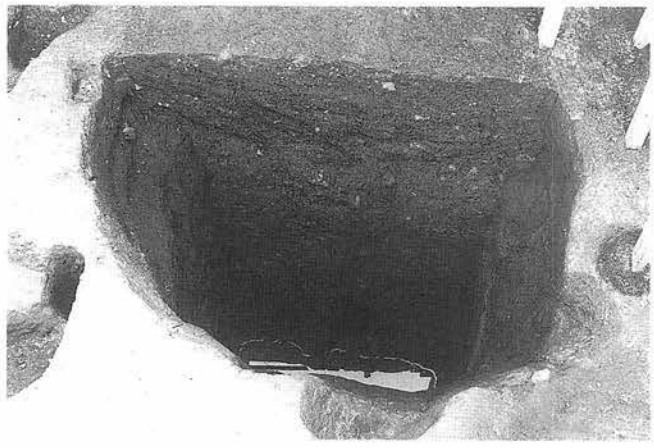
図版 4



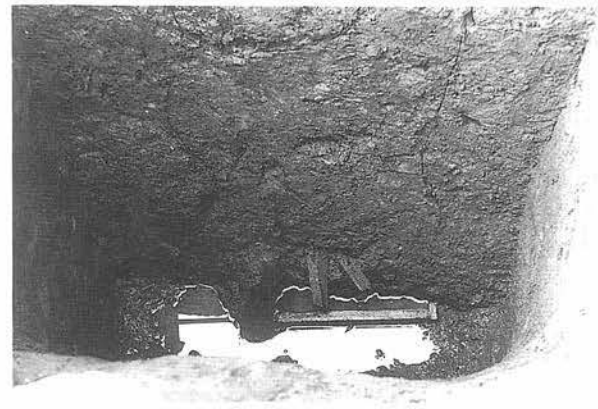
1. 井戸 3（西から）



2. 同上　北西角隅柱

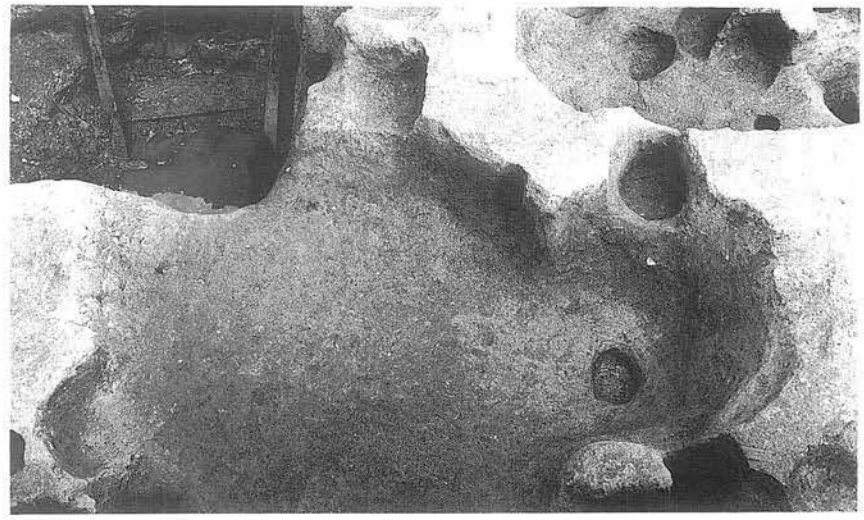


3. 井戸 4（北から）



4. 同上　下半部土層断面

1. 土壙15（東から）



2. 土壙20（西から）

3. 土壙27（西から）

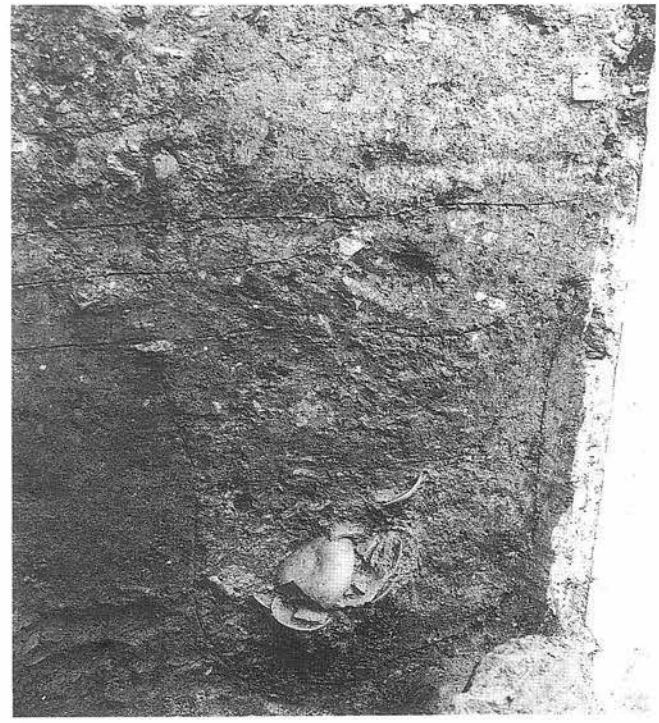
図版 6

1. 土壙26（東から）

2. 土壙25（東から）

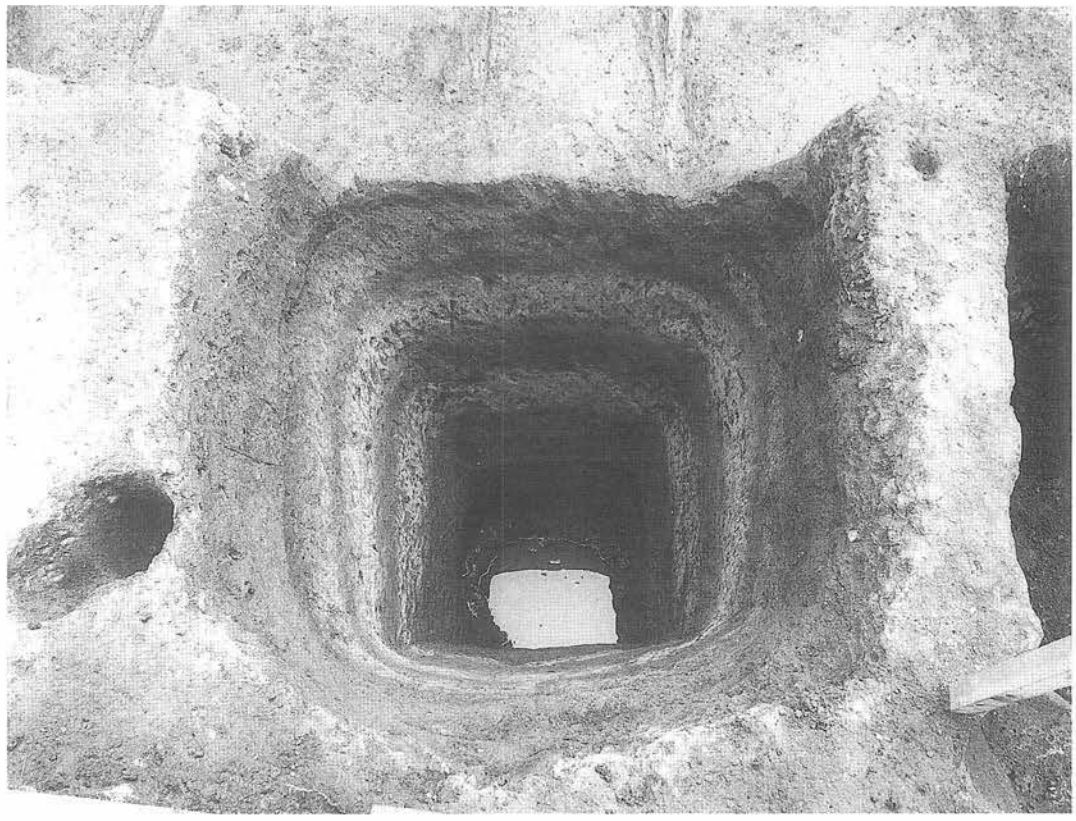
1. 土師器集中出土P.301（東から）

2. 土師器集中出土P.804（東から）

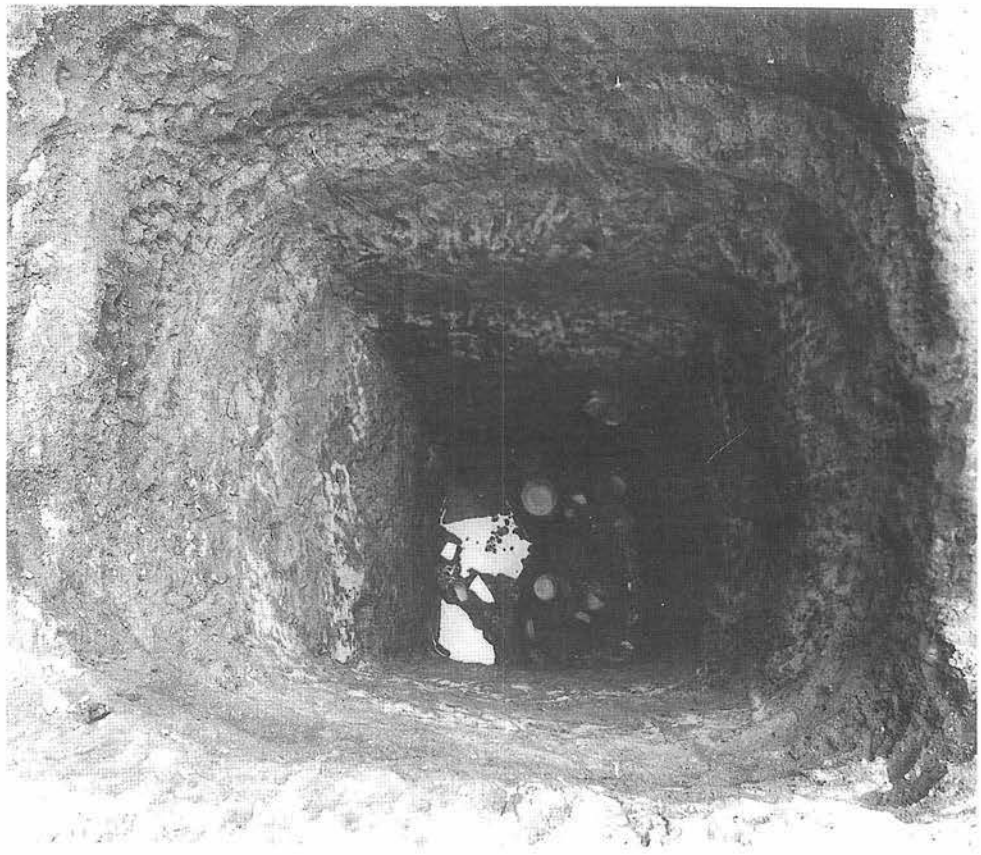


3. 土師器集中出土P.525（南から）

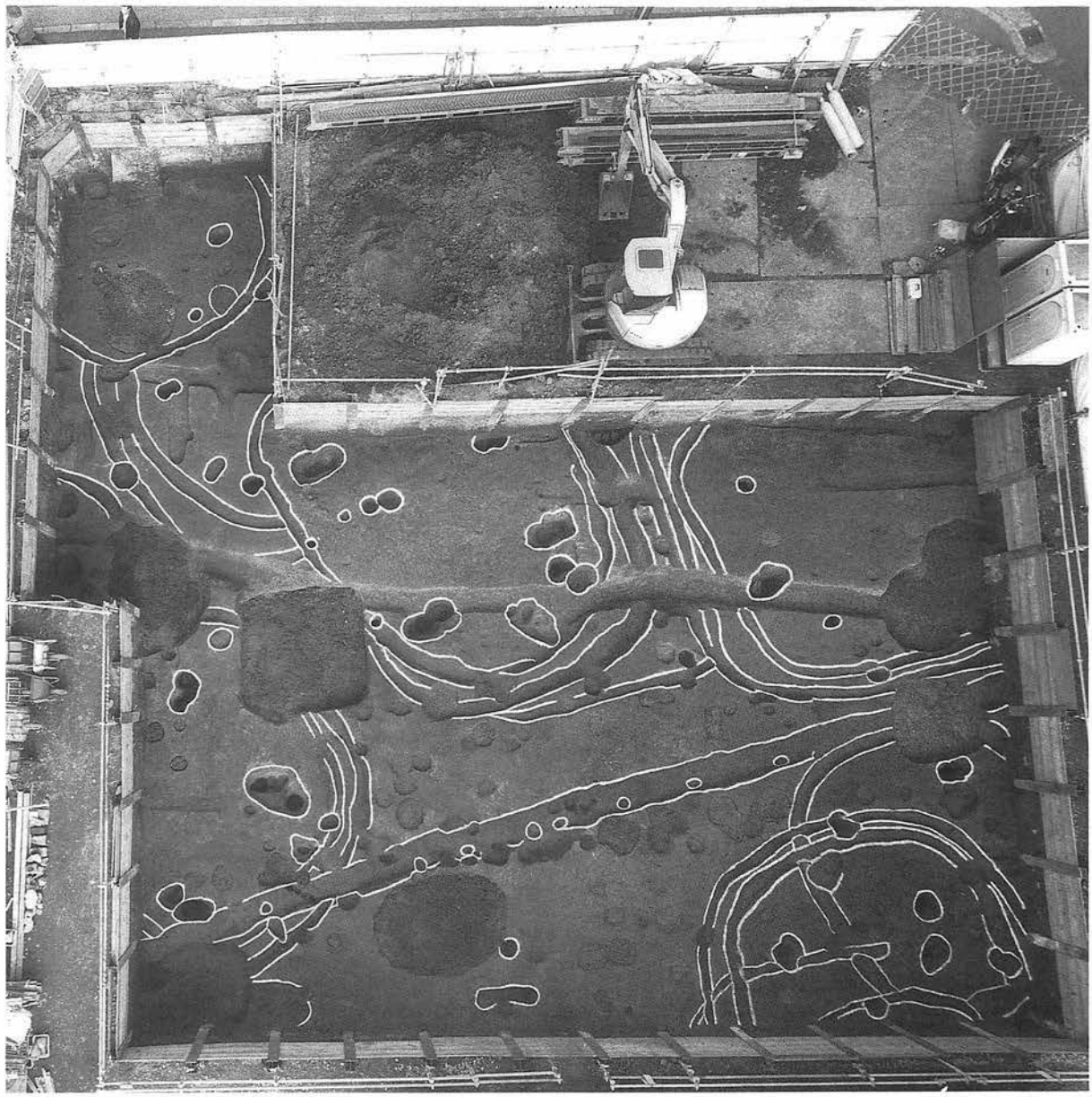
図版 8



1. 井戸2（東から）

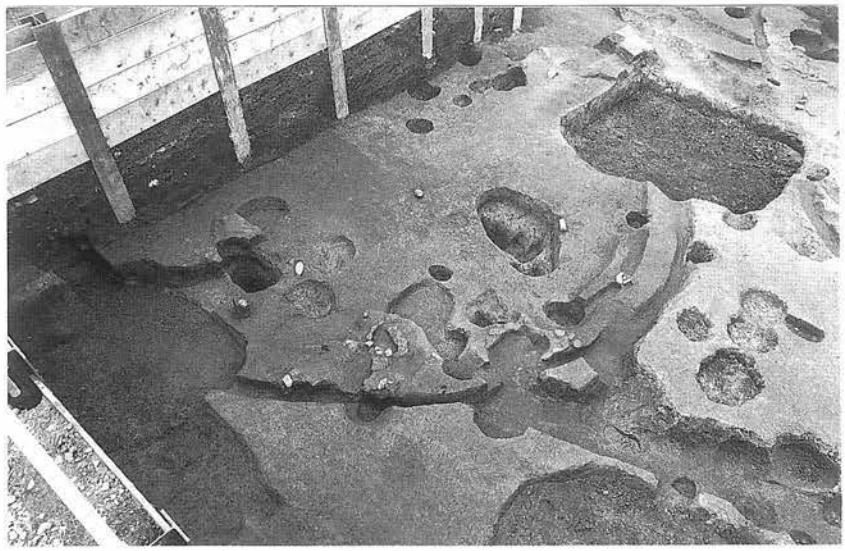


2. 同上　遺物出土状況（北から）



弥生面　全景（上が北）

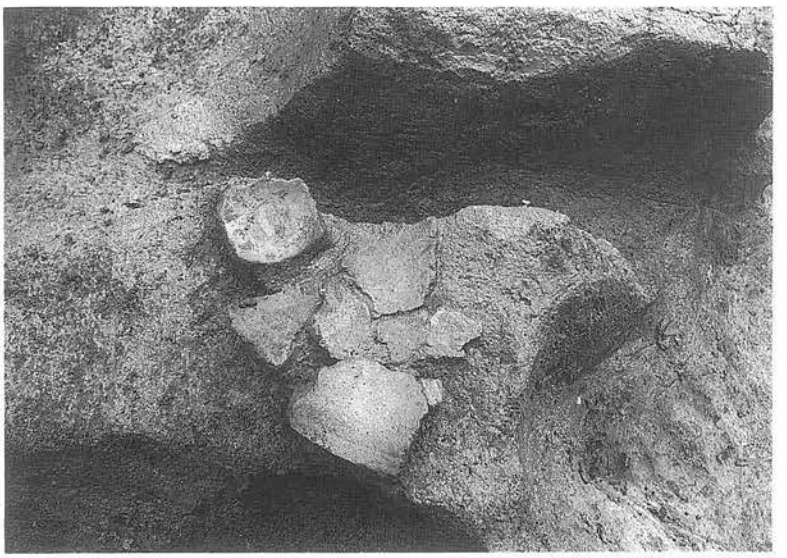
図版10



1. 竪穴住居7（南東から）

2. 同上　東南部焼土面と遺物出土状況（北西から）

3. 同上　P.2・P.6付近（西から）

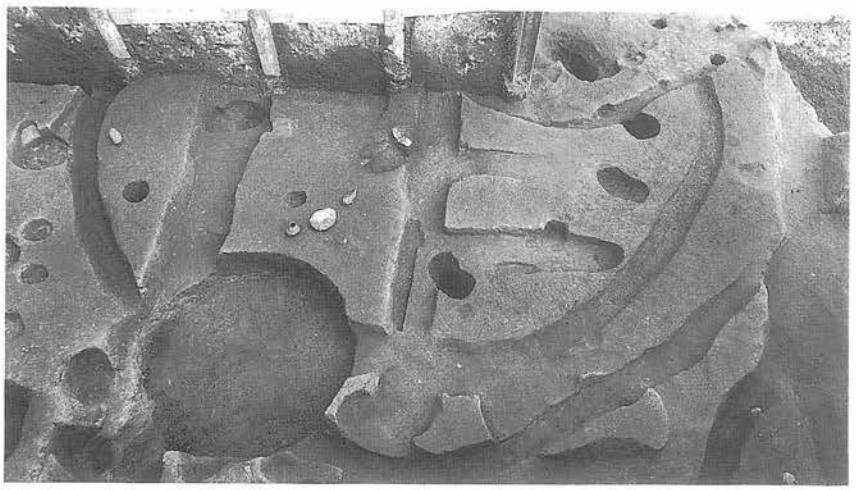


1. 竪穴住居7図35-1出土状況（西から）

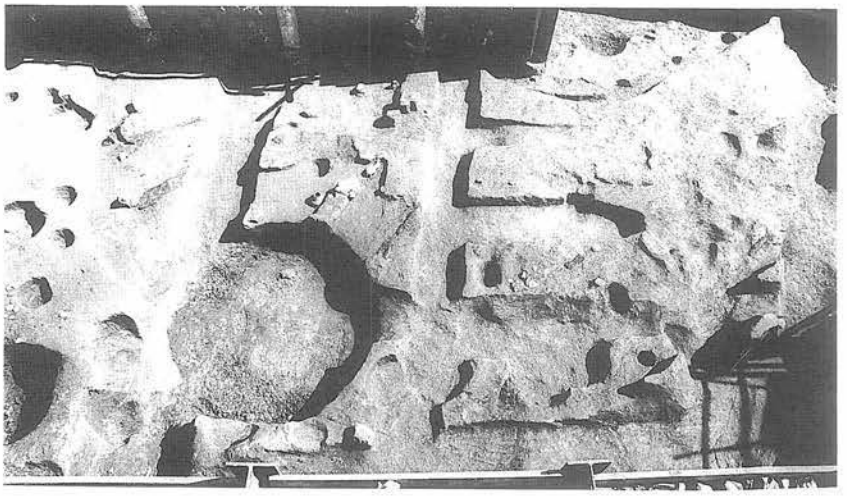
2. 同上　図36-17出土状況（北から）

3. 同上　図36-15・14・16（奥から）出土状況（西から）

図版12

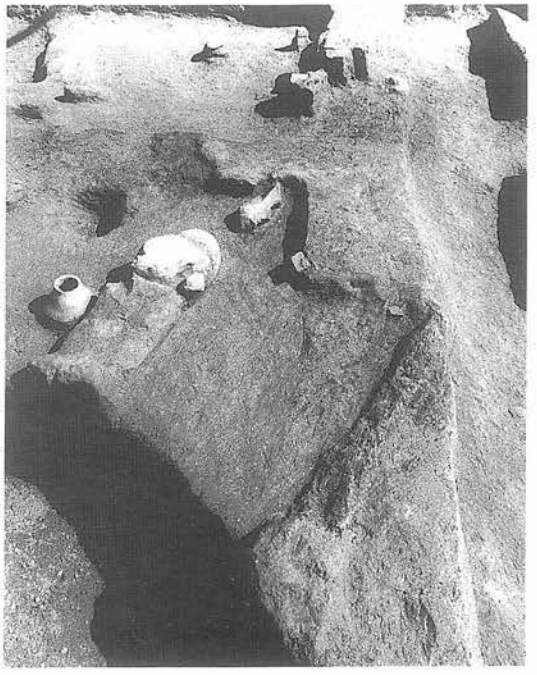


1. 竪穴住居8（西から）



2. 同上　炭化材検出状況（西から）

3. 同上　炭化部材2・3（奥から）出土状況（西から）



4. 同上　図38-1（左）・38-6（中央）・炭化部材4（右手前）出土状況（西から）

1. 竪穴住居8　炉（南から、中央の右が図38-7）

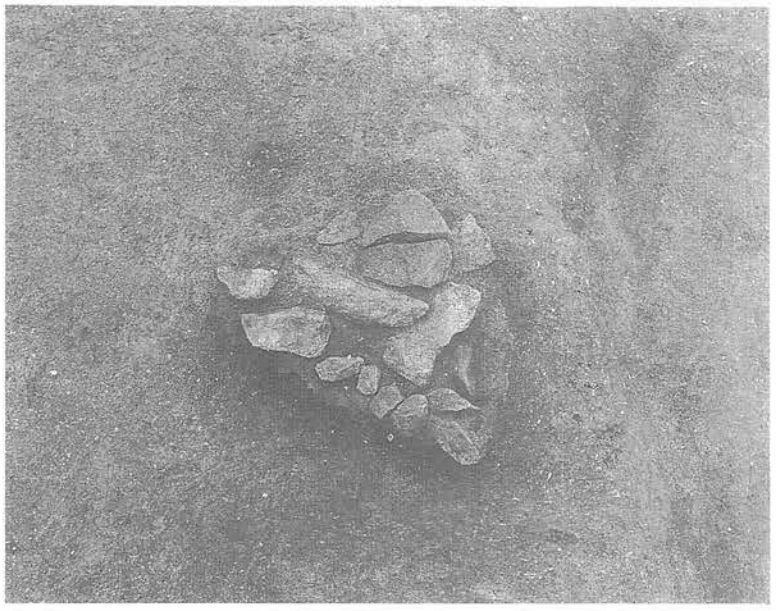
2. 同上　土層断面

3. 同上　完掘後（北西から）

図版14

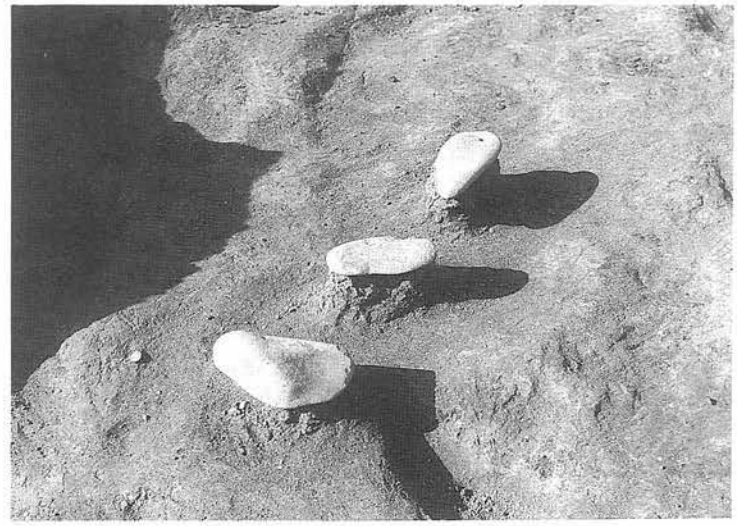
1. 竪穴住居8　炉　シイの実出土状況（中央の黒点群など）

2. 同上　図38-5出土状況（北から）

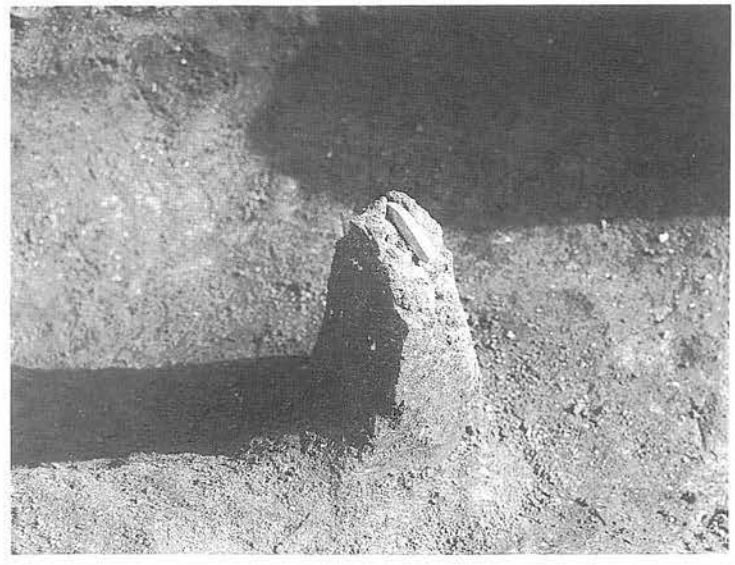


3. 同上　集石検出状況（北から）

1. 竪穴住居9・10・11（南から）

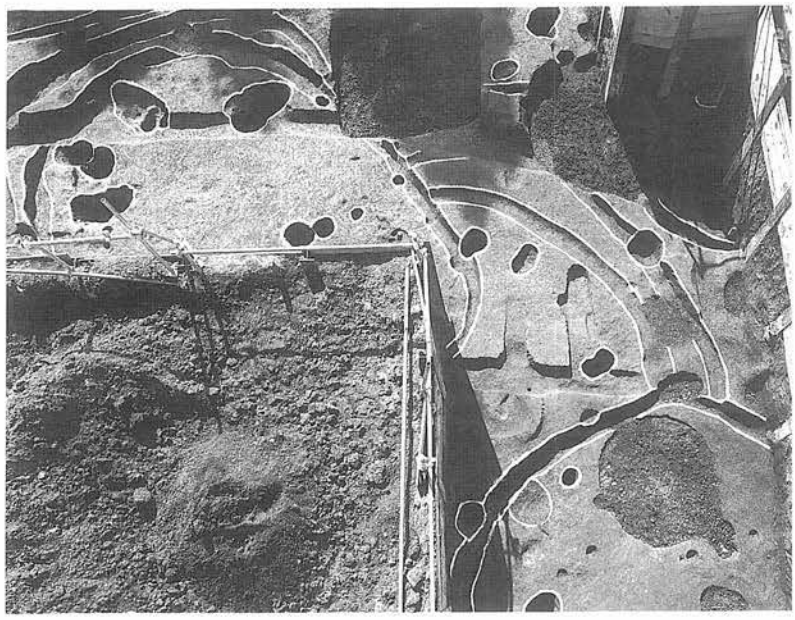


2. 竪穴住居9　図40-13・14・15（手前から奥に）出土状況（南から）



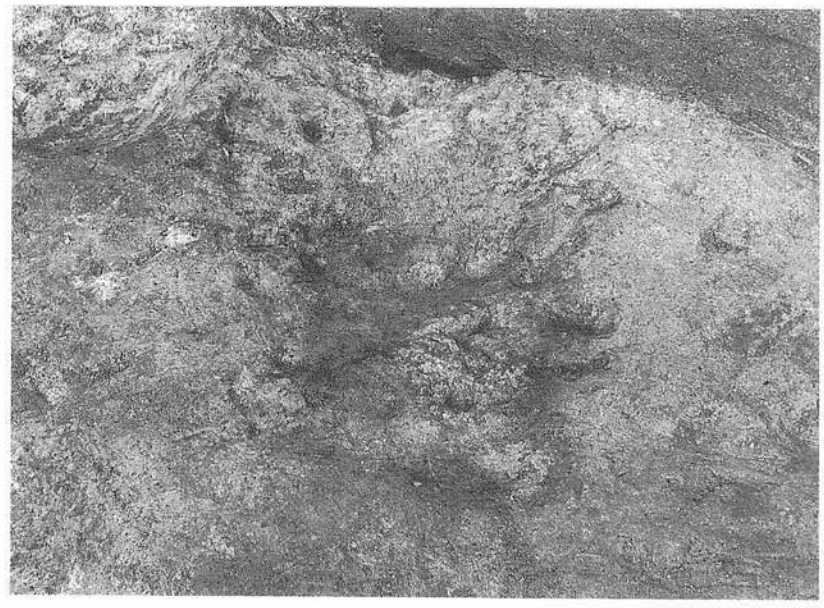
3. 竪穴住居10　図41-2　出土状況（西から）

図版16

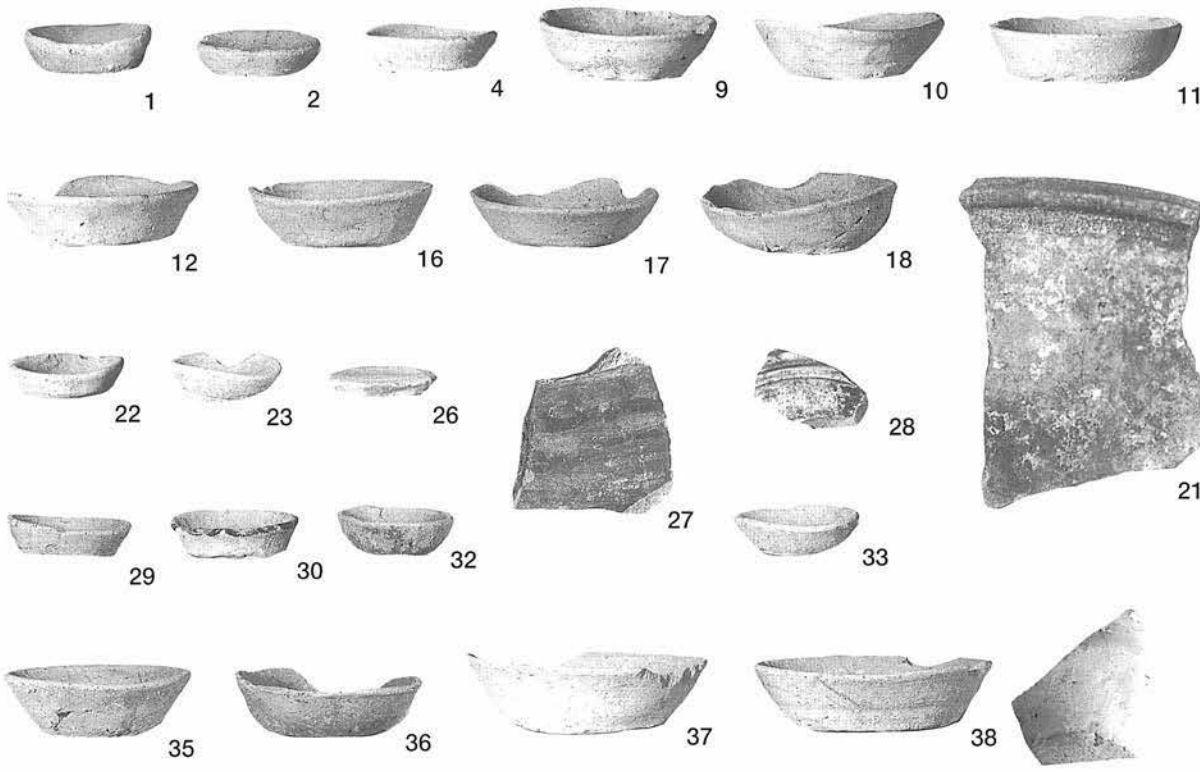


1. 竪穴住居9・8・13（左奥から手前に、北から）

2. 竪穴住居12（南から）

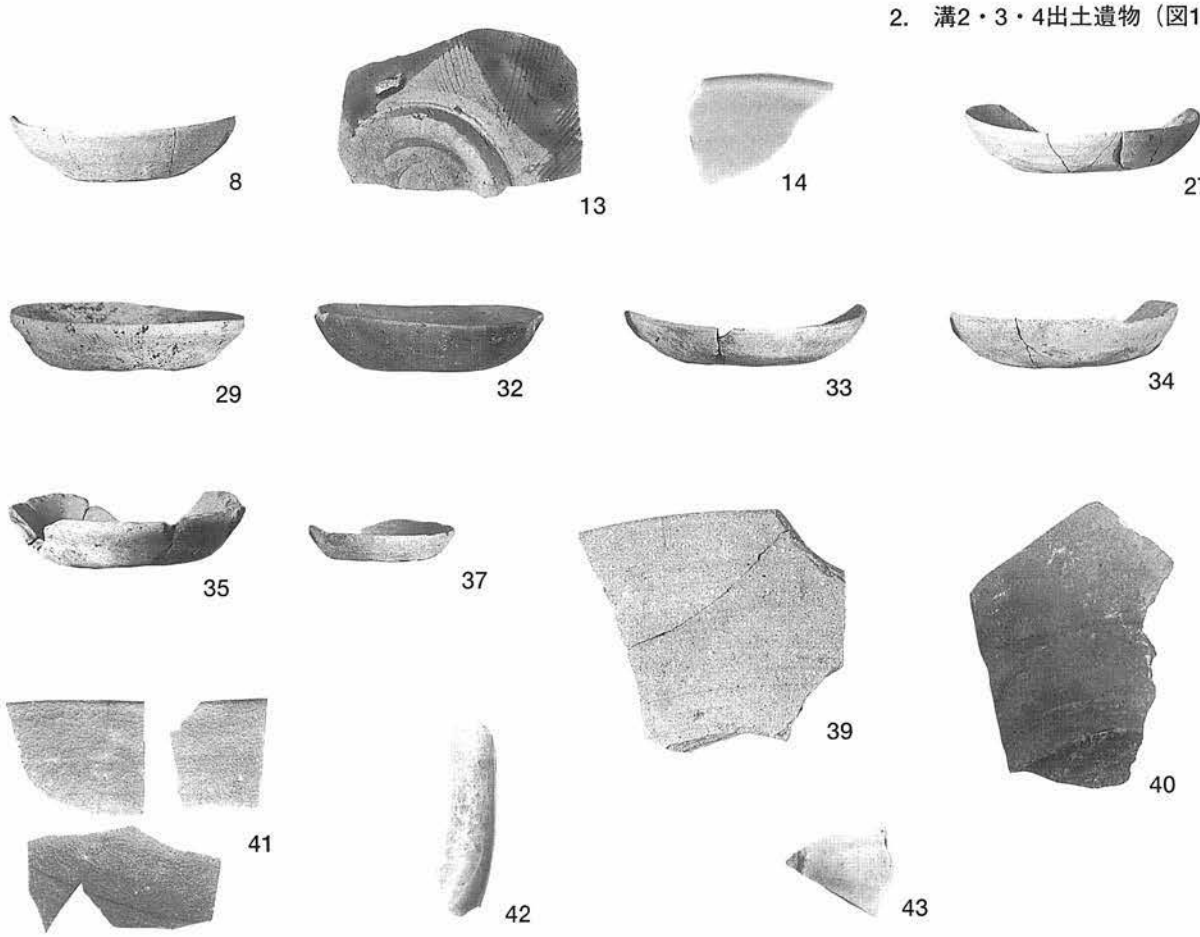


3. 竪穴住居13　炉（南から）



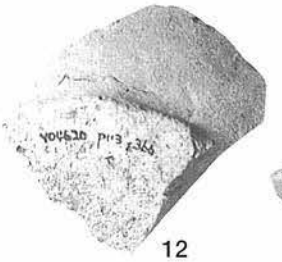
1. 溝1・溝1′出土遺物（図13）

2. 溝2・3・4出土遺物（図14）



図版18

3


12

13

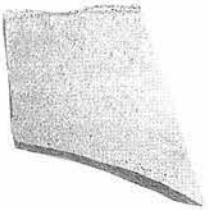
14

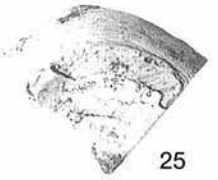
16

20

21

22


24


25

29

15

1. 布掘柱穴列出土遺物（図16）

4

2. 溝8出土遺物（図17）

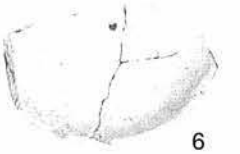
3. 井戸3出土遺物（図20）

2

4

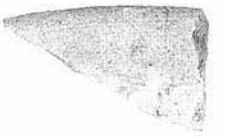
5

7


6

8

9


10

11

16

17

18

19

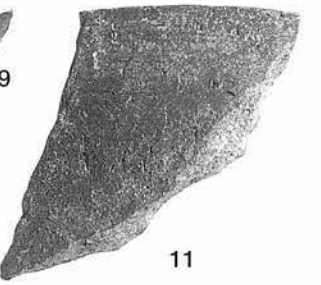
4. 井戸4出土遺物（図21）

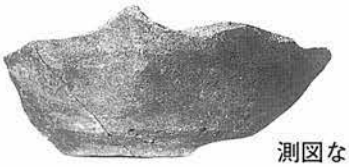
5

6

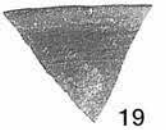
7

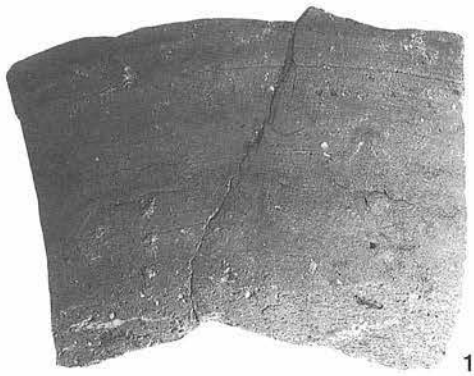
9


11

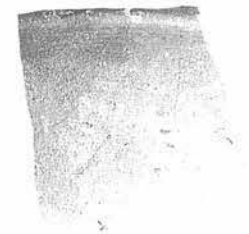

測図なし

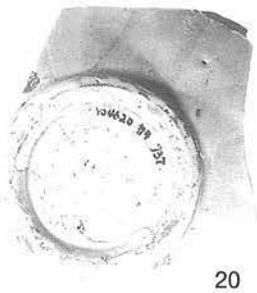
12


19


14

15


17


20

21

18

1. 井戸4出土遺物（図21）

2. 土壙2・11出土遺物（図22）

7

9

10

12

16

17

3. 土壙15・20出土遺物（図23）

3

6

8

9

13

図版20

5

9

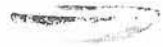
10

11

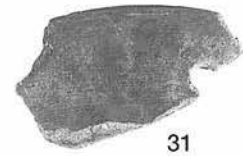
13

15

17


19

27


31

測図なし

32

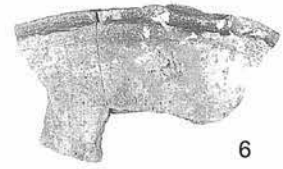
1. 中世前期泥炭層出土遺物（図28）

2. 中世前期上部包含層出土遺物（図29）

1

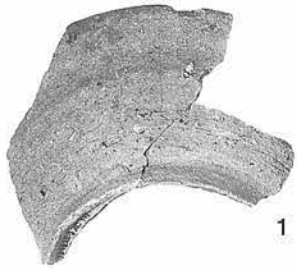
2

4

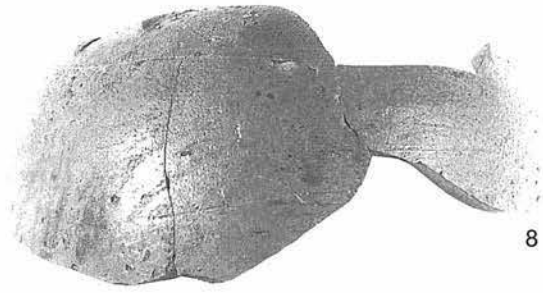

6

14

3. 同上（図30）

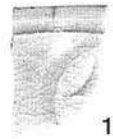

1

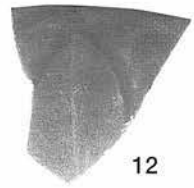
2

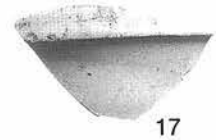

8

9

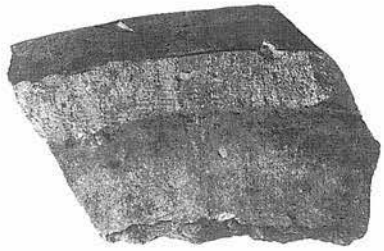
10

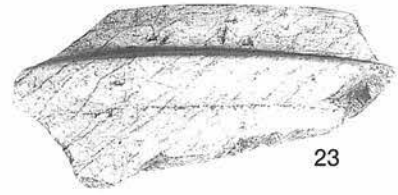

11


12


17

19


22


23

4. 中世前期下部包含層出土遺物（図31）

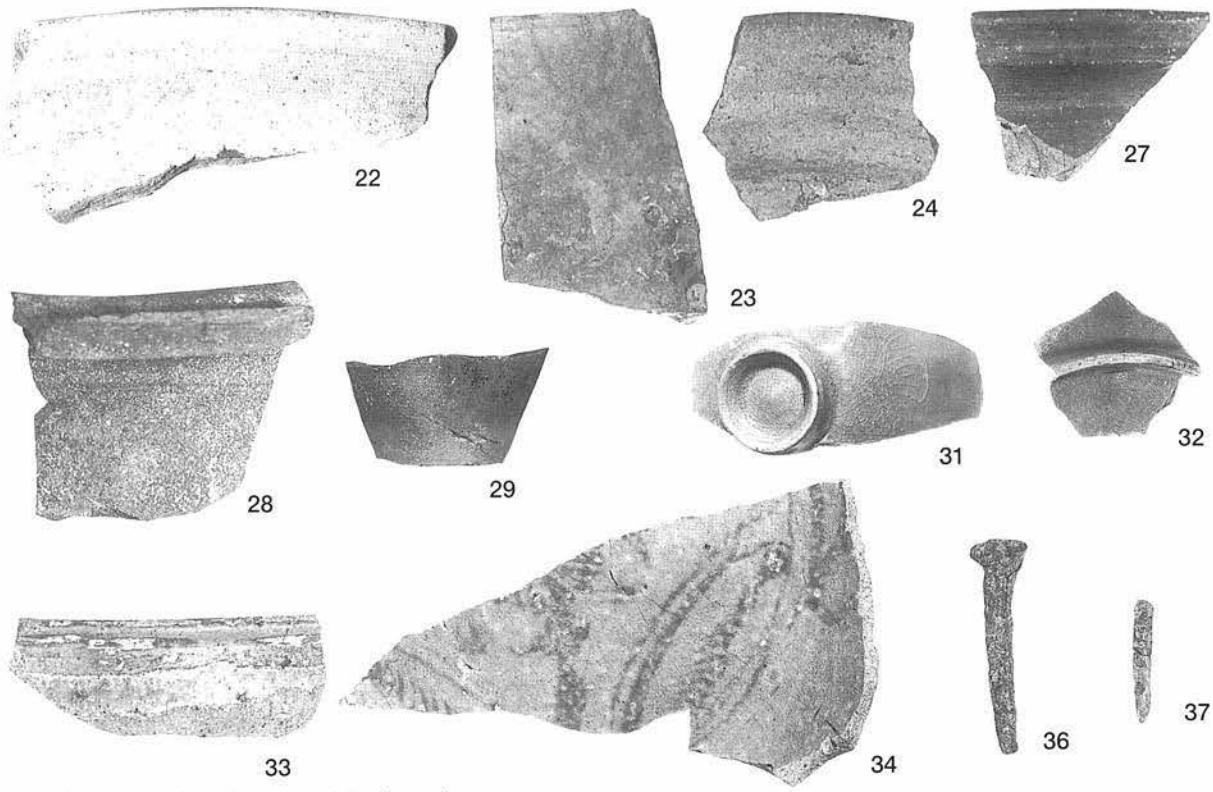
3

7

9

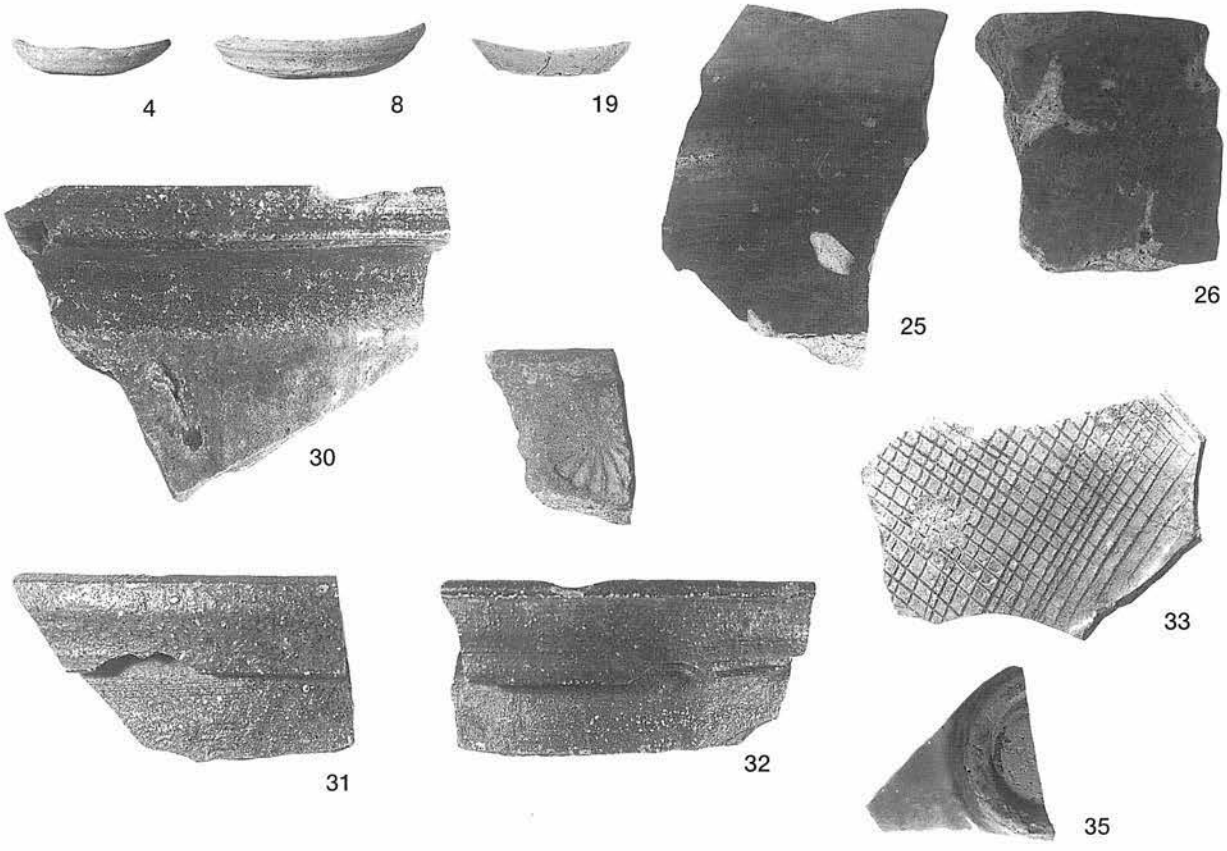
10

17



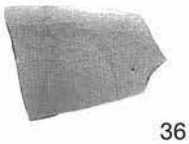
1. 中世前期下部包含層出土遺物（図31）

2. 遺構外採集遺物（図32）



図版22

35


36

41

1. 遺構外採集遺物（図32）

2. 井戸2出土遺物（図46）

1

9

10

11

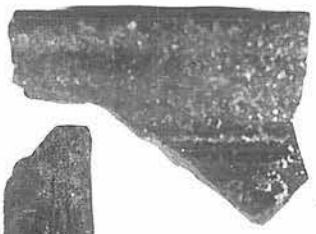
2

14

15

16

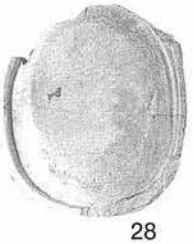
17


18

22

26

27


28

29

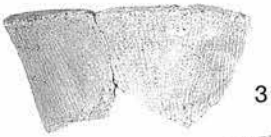
30

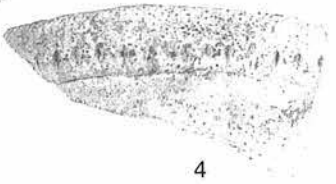
31

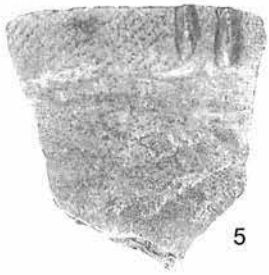
3. 竪穴住居7出土遺物（図35）

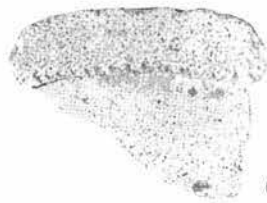
1

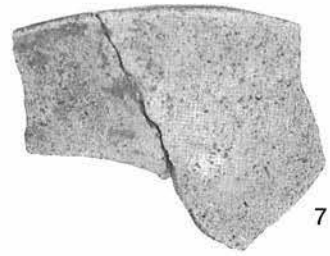
2


3


4


5


6

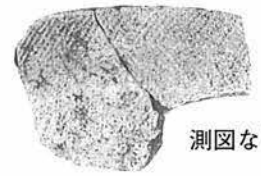

7

8

9

10

11

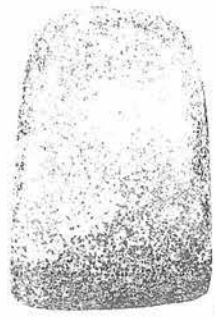

測図なし

測図なし

測図なし

1. 竪穴住居7出土遺物（図35）

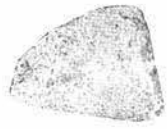
13


14

15

16

17


18

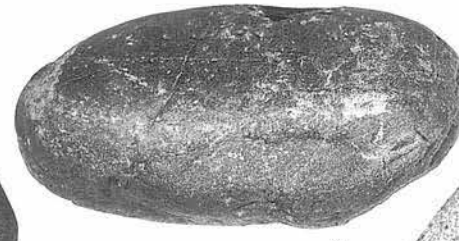
19

2. 同上（図36）

3. 竪穴住居8出土遺物（図38）

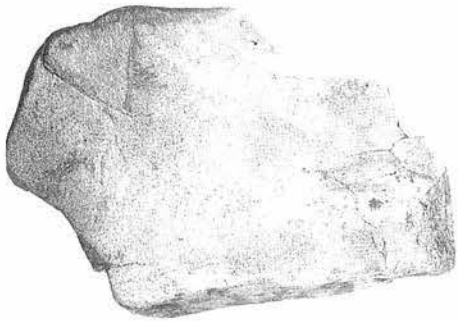
1

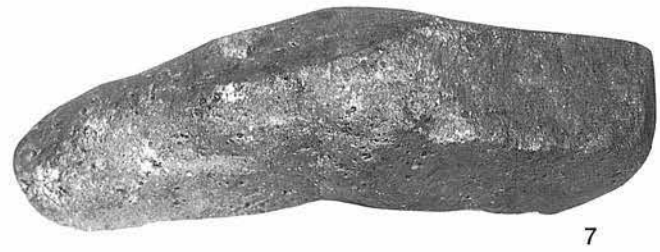
2


4

測図なし

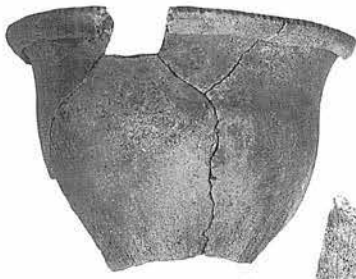
図版24

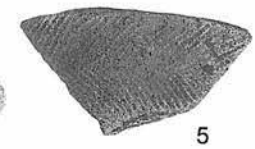


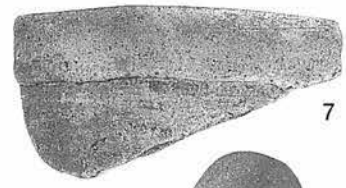


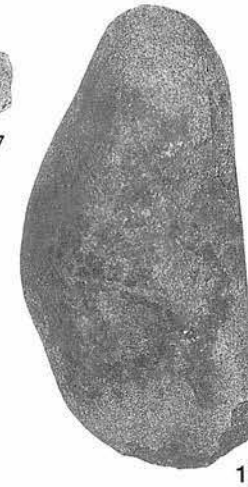
1. 竪穴住居8出土遺物（図38）

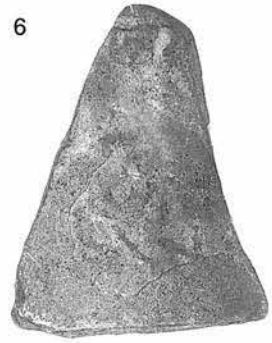
2. 竪穴住居9出土遺物（図40）











3. 竪穴住居12
出土遺物（図42）

4. 竪穴住居13出土遺物（図43）

5. 遺構外採集遺物（図44）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14
副書名	平成9年度発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬淵和雄
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおくらばくふしゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群	かながわけんかまくらしゆきのした 神奈川県鎌倉市雪ノ下四丁目620番5	14204	No.49	35° 19′ 12″	139° 33′ 42″	19960812 ～ 19961105	126.29	共同住宅併用個人専用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大倉幕府周辺遺跡群	都市	弥生時代 平安末～鎌倉時代 室町後期～戦国時代 江戸時代 近代	弥生時代 竪穴住居 溝 平安末～鎌倉時代 柱穴様小穴　900 （建物8・柱穴列3を含む） 溝　9 井戸　3 土壙　17 土師器集中出土　7 室町後～戦国時代 溝　1 江戸時代 竪穴遺構　1 井戸　1 近代 井戸　2	弥生時代 土器・蛤刃石斧・片刃磨製石斧・鹿角 平安末～鎌倉時代 土師器・常滑・瀬戸・竜泉窯青磁・口はげ白磁・鉄釘・銭 室町後～戦国時代 土師器・常滑 江戸時代 土師器・肥前・瀬戸・志土呂・その他陶器 計テン箱63箱	かねて断片的にしか把握されていなかった大倉一帯の弥生時代中期後半の集落が、はじめて一定規模のひろさで確認された。 大倉幕府正面の場所として鎌倉時代前期まで鎌倉の中心地帯であったこの付近で、掘立柱建物が頻繁に建て替えられている様子がうかがえた。

北条小町邸跡（No.282）

雪ノ下一丁目369番１地点

例　　言

1．本報は、北条小町邸跡遺跡（No.282）の所在する遺跡内の鎌倉市雪ノ下一丁目369番１地点における緊急発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、店舗併用住宅の建設に伴い、国庫補助事業と原因者負担事業とが平行して実施されたが、遺跡の理解を損なわれないために本報にはできる限り、その成果も取り入れている。

3．調査体制は、以下の通りである。

調査担当者　原　廣志
調　査　員　小林重子・須佐直子
調査補助員　秋山哲雄・須佐仁和・早坂伸市
調査参加者　田口　豊・渡辺輝彦・森　芳郎
協力機関名　㈱鎌倉市シルバー人材センター・㈱高橋組・鎌倉考古学研究所

4．本報の執筆は、第一章を秋山、第二章・第四章を原、第三章を須佐（直）・原がそれぞれ分担し、これを原が編集した。資料整理の作業は執筆者の他、須佐（仁）・早坂があたった。

5．本報掲載の写真は、遺構を小林・須佐（直）・原、遺物を須佐（仁）・早坂が撮影した。

6．現地調査及び資料整理を通じて、多くの方々や機関から助言・援助を賜った。ここに銘記し、感謝の意を表する。

石井　進・大三輪龍彦・大河内　勉・岡陽一郎
小野正敏・河野眞知郎・菊川英政・小玉マツ子
小林康幸・斉木秀雄・佐藤仁彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木　亘・瀬田哲夫・田代郁夫・玉林美男・継　実・手塚直樹・永井正憲・橋場君男・福田　誠・藤原良章・松尾宣方・馬淵和雄・宮田　真・桃崎祐輔（五十音順）

7．発掘調査における出土遺物・図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……291
　1．遺跡の位置 ……291
　2．遺跡の歴史的環境 ……291
第二章　調査の概略 ……296
　1．調査の経緯と経過 ……296
　2．グリット設定方法 ……296
　3．調査の概要 ……296
第三章　検出遺構と出土遺物 ……299
　1．近代・近世の遺構と遺物 ……299
　2．中世の遺構と遺物 ……304
第四章　まとめ ……322

挿　図　目　次

図１　遺跡の範囲と調査地点 ……292
図２　グリット設定図 ……297
図３　グリット配置図 ……298
図４　近代・近世遺構全図 ……299
図５　井戸１ ……300
図６　近世耕作土層出土遺物 ……301
図７　井戸１出土遺物 ……301
図８　溝１出土遺物 ……302
図９　溝２出土遺物 ……302
図10　中世遺構全図 ……303
図11　土壙・控材 ……304
図12　土壙出土遺物 ……305
図13　溝３～５土台部材 ……306
図14　溝３出土遺物（１）……307
図15　溝３出土遺物（２）……308
図16　溝３出土遺物（３）……309
図17　溝４出土遺物（１）……310
図18　溝５出土遺物（１）……311
図19　溝５出土遺物（２）……312
図20　近隣の調査地点 ……323

表　目　次

表１　近世耕作土層出土遺物 ……313
表２　井戸１出土遺物 ……313
表３　土壙出土遺物（１）……313
表４　土壙出土遺物（２）……314
表５　溝１出土遺物 ……314
表６　溝２出土遺物 ……314
表７　溝３出土遺物（１）……315
表８　溝３出土遺物（２）……316
表９　溝３出土遺物（３）……317
表10　溝４出土遺物 ……318
表11　溝５出土遺物（１）……319
表12　溝５出土遺物（２）……320
表13　溝５出土遺物（３）……321

写真図版目次

図版１　A.空撮遠景（上空より北を望む）
　　B.空撮調査区全景（上が北）……327
図版２　A.調査前の状況（南西から）
　　B.表土掘削風景（西から）……328
図版３　A.土台状角材１～３（手前が東）
　　B.同上　裏込の土丹塊（南から）…329
図版４　A.井戸１（西から）
　　B.溝２（南から）
　　C.溝２南壁セクション（南から）…330
図版５　A.若宮大路側溝（溝３～７）
　　B.溝３～５（南から）
　　C.溝６（南から）……331
図版６　A.溝４・５東側土台材（南から）
　　B.溝３・５西側土台材（北から）
　　C.調査区東半部全景（南から）……332
図版７　A.溝３・５東側（南から）
　　B.溝３・５東側北端
　　C.溝３・５西側（南から）
　　D.溝３・５西側完掘状況……333
図版８　A.溝５土台材②南端
　　B.溝３土台材①と③継目部
　　C.溝３土台材②と③継目部
　　D.溝５土台材③継目部
　　E.溝５土台材③裏込状況
　　F.溝５土台材③と④継目部……334
図版９　A.梁材検出状況
　　B.梁材継目部と掘り方
　　C.控え梁１出土状況
　　D.若宮大路側溝の東肩口柱穴群
　　E.土壙１・２完掘状況
　　F.土壙１・２土層堆積……335
図版10　A.溝３瀬戸入子出土状況
　　B.溝５下駄出土状況
　　C.溝７下駄出土状況
　　D.溝４木簡出土状況
　　E.溝５木簡出土状況
　　F.溝５笹塔婆出土状況
　　G.溝４土台材①の刻印
　　H.溝５土台材①の刻印
　　Ⅰ.溝５土台材③の線刻……336
図版11　出土遺物（１）……337
図版12　出土遺物（２）……338
図版13　出土遺物（３）……339
図版14　出土遺物（４）……340

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

1．遺跡の位置

本遺跡は、鎌倉の基軸である若宮大路の北端東側に当たり、その若宮大路を西、横大路を北、小町大路を東に限った、約200m四方の方形区画であり、神奈川県遺跡台帳では「北条小町邸跡」となっている。本調査地点はこの中でも南西角の若宮大路に面したところに位置しており、JR鎌倉駅から北東に約500m、鶴岡八幡宮からは約200mの距離にある。鎌倉市内の中心に位置する平坦地は、東西の小さな谷戸から流れ出た河川が流れ込んで形成された扇状地であり、当遺跡のすぐ東を流れる滑川は、直線距離1700m程で由比ケ浜に注ぎ込む。

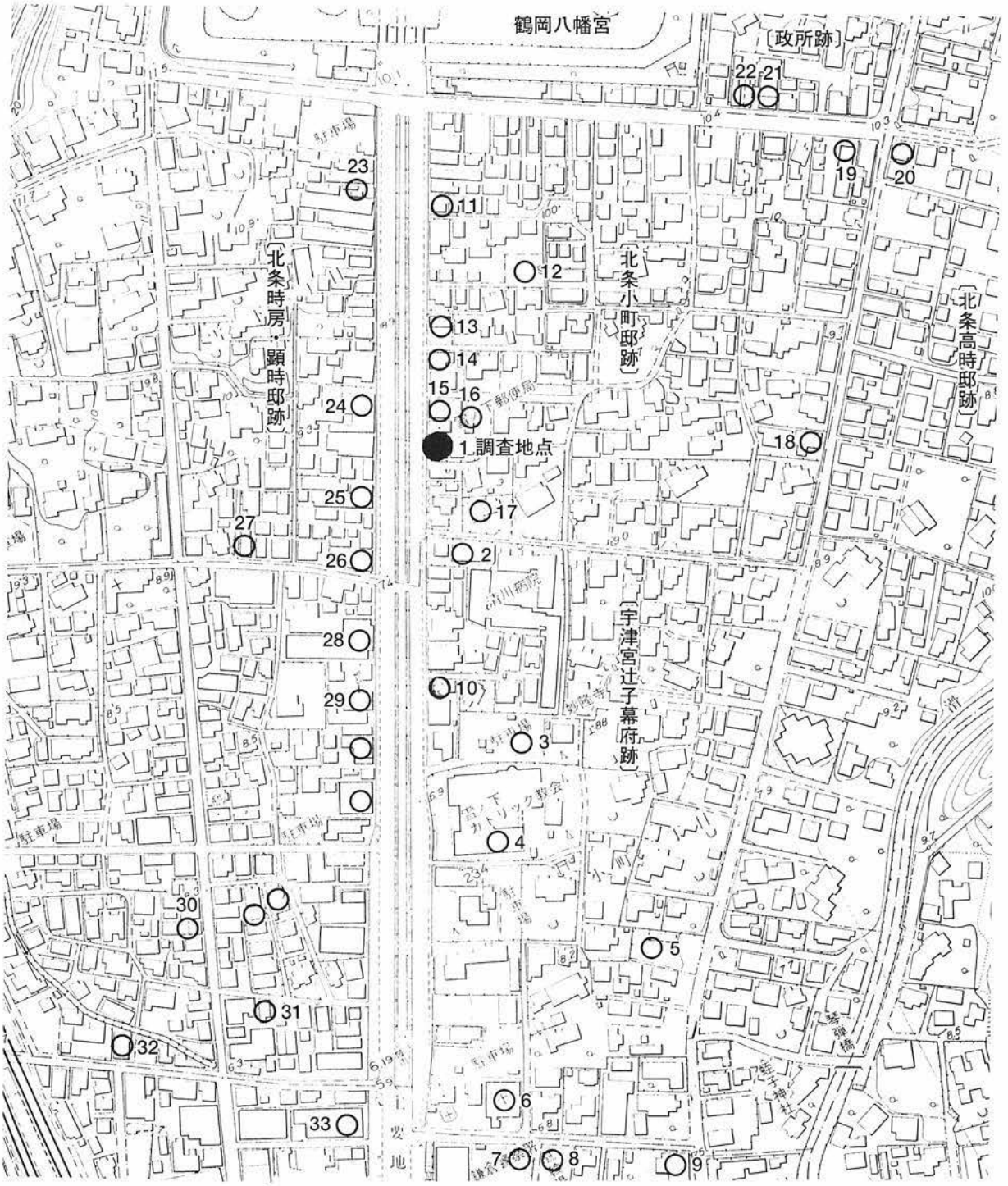
2．遺跡の歴史的環境

若宮大路沿いの発掘調査では、大路に平行する溝から木簡が数点出土しており、中世における木簡研究の貴重な資料となっている。例えば、若宮大路の東側で本調査地点から約20m北に位置する　地点の調査においては、「一丈伊北太郎跡」や「一丈南　くにの井の四郎入道跡」と記された木簡が出土しており（注１）、さらに100m北の大路沿いの地点で出土した木簡には「二けん　おぬきの二ろう」をはじめ、「二けん　まきのむくのすけ」や「二けんかわしりの五ろう」などと記されていた（注２）。これらの木簡の性格に関しては、「若宮大路側溝の側面を保護するための護岸工事式の作事を御家人達に分担させた際の木札」という石井進氏（注３）や馬渕和雄氏（注４）の見解が一般的である。このように若宮大路の作事が御家人に代って行われていたとすれば、その周囲は当然ながら公的性格を帯びた地域ということになるので、木簡を「嘉禎二年（1236）の宇津宮辻子から若宮大路「東頬」への幕府移転に伴うもの」(注５）とした馬渕氏の推定は至極当然のものといえる。今後もこのような木簡の発掘事例は多く報告されることとなるであろう。

古代における当遺跡周辺は湿地帯であり、200m北の鶴岡八幡宮の源平池が田地を潰して造成されたこと（注６）や、周辺の発掘調査に伴う花粉化石の分析（注７）などから、耕作地として使われていた可能性が指摘できる。したがって当時の中心的な地域は、当遺跡周辺でなく鎌倉郡衙跡の検出された御成小学校周辺であり、その前を通る現在の今小路が重要路であった。源頼朝の父義朝が居館を構えたのは、この路と六浦へと通じる六浦路の交点であり、現在の寿福寺一帯に当たる（注８）。頼朝が鎌倉に入ると、鎌倉内の土地不足もあって本遺跡周辺も北条氏や和田氏によって開発されたようだが、依然として水はけの悪い土地であり（注９）、木簡が物語るように大規模な排水溝を整備しなければならないほどであった。北条氏は、このような環境に当たって本遺跡周辺に住み始めたようである。

北条氏が小町に邸宅をもち始めたのは義時の頃からであり、その邸宅は小町大路周辺にあったことが分かる（注10)。『吾妻鏡』建保元年（1213）五月二日条の和田合戦の記事では「相州（義時）御亭［小町上］西北両門」が攻撃を受けたとあるので、小町亭がその西と北で道に面していたと考えられる。西門は小町大路に面し、北門は幕府のある大蔵にむけて開かれていたのであろう。その場所は「北条小町亭」の位置ではなく、現在の宝戒寺付近に比定できる（注11）ので、これをかりに「宝戒寺小町亭」と仮称したい。

義時の子泰時の邸宅も小町にあったが（注12)、後にこの邸宅が重時に譲られる際の記録に「御所北面若宮大路也」(注13）とあるように御所の北で若宮大路に面していたので、泰時亭は本遺跡に該当する



1．調査地点
2．小町二丁目366番1
3．小町二丁目354番12
4．小町二丁目354番2
5．小町二丁目389番1
6．小町二丁目345番2
7．小町一丁目321番1
8．駐輪場
9．小町一丁目325番イ外
10．小町二丁目361番1
11．雪ノ下一丁目377番7
12．雪ノ下一丁目374番2
13．雪ノ下一丁目371番1
14．雪ノ下一丁目372番7
15．雪ノ下一丁目369番
16．雪ノ下一丁目369番他
17．雪ノ下一丁目419番3
18．雪ノ下一丁目432番2
19．雪ノ下一丁目395番他
20．小町三丁目426番3
21．雪ノ下三丁目987番1.2
22．雪ノ下一丁目372番7
23．雪ノ下一丁目293番1
24．雪ノ下一丁目271番1
25．雪ノ下一丁目273番ロ
26．雪ノ下一丁目274番2
27．雪ノ下一丁目233番9
28．小町二丁目276番他
29．小町二丁目279番2
30．小町二丁目12番18
31．みのビル
32．小町二丁目63番3
33．日本生命ビル

図1　遺跡の範囲と調査地点

といえよう。義時の死を受けて京六波羅からこの邸宅に戻った泰時は、すぐには執権になれない微妙な立場にあった。しかし叔母の政子が、将軍後見としての泰時の立場を強調するように、泰時亭にわざわざ次期将軍しなる頼経を連れてきたりした（注14）ことによって、泰時亭は将軍後見の住む邸宅として周囲に強く意識されることとなった。その政子が亡くなると、泰時は御所移転を強行し（注15）、将軍の抱え込みと政治の一新をはかる。そもそも大蔵にあったこの御所の移転は頼経亭の新築計画から始まっているが、この計画は陰陽師らの占いの結果が悪いために予定通りに進まず頓挫してしまう。しかし、御所新築から移転へと変更した背景には、泰時の並々ならぬ意志が感じられよう。すなわち御所移転には、政子の死によって動き出しかねない三浦氏を中心とした頼経勢力の活動を阻止して将軍に付随する旧勢力と頼経とを分断し、泰時自身の権威の後ろ盾として将軍を抱え込むという狙いがあったと考えられるのである。したがって、政治的な配慮をまず優先して、御所は絶対に新築ではなく泰時亭近くへの移転が不可欠な要因であったことは容易に想像されよう。

この御所移転にともなって、泰時の連署となる時房も御所近くに移住している（注16）。『吾妻鏡』延応元年（1239）四月二十五日条で時房の邸宅は「前武州（泰時）向顔」とあり、「向顔」とは「向頬」の誤りで道を挟んだ向かいの意であろうから、時房亭は泰時亭の向い側にあったことが分かる。泰時は当遺跡地にいたので、時房はその向かいの「宝戒寺小町亭」にいたことになる。

さらに移転した御所の位置に関しては（注17）、松尾剛次氏の述べるように（注18）、宇津宮辻子御所の北方の別郭へ移動したと考えるのが妥当である。しかし、前回の移転が頼経を抱え込もうという泰時の意とによってなされたことを考慮にするならば、宇津宮辻子御所はその北側で泰時亭に隣接していた可能性が高い。つまりそこからさらに北方別郭への移転は、泰時亭郭内への移転を意味しているのである。この移転に直接関連してはいないが、『吾妻鏡』嘉禎二年（1236）十二月十九日条には、泰時が、「日来御所北方」に邸宅を新造したことが記されている。これを、御所が郭内の南側に移転してきたために、泰時亭が同郭内でも北に移ったためと推測することも可能であろう。御所が移転した翌日に登場する「評定所」も移転を木に新造されたものだろうが、御所が泰時亭と同郭内にあったならば、評定所もその郭内に建てられたと考えられる。したがって「北条小町亭」に該当する泰時亭内には、御所と評定所があったのである。また、この新造亭は、その記事に続く記述から周囲を被官の邸宅に囲まれていたことがわっている。

泰時の孫経時の邸宅は、泰時亭を継承したものであったが（注19）、同時に「故武州禅室（泰時）北隣」（注20）でもあった。経時亭が泰時亭の跡であり、しかも北隣でもあることを整合的に理解するには、経時が泰時亭内の北側だけを譲られたと考えるほかはない。経時は、おそらく二度目の御所移転を契機としてここを譲渡されたのであろう。ここでは便宜上、経時が泰時から譲られた若宮大路小町亭内北側を「小町北亭」、泰時の御所北方新造亭を「小町南亭」と称したい。

このうち「小町北亭」には重時が入る（注21）がその四ヶ月後には新造され、そこには初めて評定所が置かれたのである（注22）。幕府の期間である評定所が御所から離れて建てられたとは考えにくいので、重時亭内でも御所に近いところに新造されたと考えるべきであろう。したがって、重時は御所に近い小町南亭をも吸収し、そこに評定所をもつ邸宅を新造したと考えるのが妥当であろう。この重時亭は幕府に隣接してそこを押さえる役割も果していたであろう。

経時の弟である時頼の邸宅は、『吾妻鏡』建長四年（1252）五月十七日条の記事から、重時亭の東にあったことがわかるので、時房の旧跡である「宝戒寺小町亭」を継いだものであったことが理解される。時頼・重時の邸宅と泰時・時房の時期とを比較した場合、ちょうど執権と連著の邸宅が入れ替わってい

る。このことからは、北条氏にとって御所の重要性が減じ、幕府権力の後ろ盾を必要としなくなったことが読み取れよう。時頼が執権の地位を揺るぎないものとしたこともあり、時頼のいた宝戒寺小町亭は御所に代わって政治の中心になっていく。しかし、重時が御所の北に評定所を含む邸宅をもち、依然として幕府を押さえていたことからは、北条氏の勢力が結局のところ幕府そのものを無視できなかったことが分かる。

時頼の子である時宗は御所の北東に住んでいた（注23）ので、おそらく時頼の「宝戒寺亭」と同じ郭内に邸宅をもっていたと考えられる。時宗の子である貞時の邸宅がどこにあったかを示す史料は今のところない。しかし、宝戒寺が高時の霊を弔うためにその邸宅の跡地に建てられた（注24）ものであることから、貞時のこの高時が「宝戒寺小町亭」に住していたことは明らかであり、また貞秋の父も「宝戒寺小町亭」にいたことを考えあわせるなら、貞時自身もここに邸宅をもっていたと考えてさしつかえないであろう。これらの邸宅が実質的な政治の中心となっていたことはいうまでもない。

『太平記』によれば、鎌倉幕府滅亡の際、高時は「宝戒寺小町亭」から東勝寺に逃げ込み自害している。東勝寺は泰時の創建と伝えられるが（注25）、その泰時の邸宅の背後に東勝寺があるという位置関係は、頼朝の御所とその持仏堂の関係に酷似している。頼朝が葬られた後は法華堂と呼ばれる頼朝の持仏堂には、実朝が和田合戦のおりに御所から避難しており（注26）、また宝治合戦の際には三浦泰村がここに盾こもるが、その時に法華堂は「殊勝城郭」（注27）と記されている。つまり、頼朝の墓である法華堂が、避難場所や城郭の性格をもっていたのである。一方で東勝寺は、『太平記』に「父祖代々ノ墳墓ノ地」とあり、また正和四年（1315）四月十六日には高時が火事を逃れるために葛西谷に避難しているので（注28）、東勝寺が避難場所の性格をもっていたことが窺える。さらに発掘調査でもその城塞的な性格が明らかとなっている（注29）。このように東勝寺は、墓所であり避難場所、城郭であるという頼朝の法華堂と同様の性格を合わせもっていたのである。

このように邸宅とその背後の寺院とは関係が深いことが分かったが、邸宅の正面には、頼朝の場合父義朝を弔うために建立した菩提寺の勝長寿院があった。一方で泰時亭の正面に位置する寿福寺は、もともと義朝の邸宅跡であった土地が正治二年（1200）閏二月十三日に栄西に寄進され、政子が開基となって建立された寺である。この位置関係はただの偶然かもしれないが、政子の後押しで執権となった泰時にとっては、頼朝における義朝との関係と同じように、政子を崇拝すべき対象であったとしても問題ないのではなかろうか。したがって、邸宅を中心に、背後に避難場所、墓所であり、かつ城塞的性格を有した寺院が置かれ、正面には先代の菩提を弔う寺院が配置されたと考えることができるのである。頼朝の場合は、御所の背後に持仏堂（死後に法華堂）があり、正面には勝長寿院があって、三者は直線上に並んでいたのである。

南北朝時代以降になると、若宮大路周辺に有力者が住んでいた形跡はなく、鎌倉における要地は六浦路沿いの浄妙寺周辺と、武蔵国府に向かう道に沿った山内となった（注30）。しかし幕府滅亡を待たずとも、時頼の頃から北条氏は、若宮大路周辺よりもむしろ鎌倉の北西部に当たる山内の邸宅を用いていたようである。このように若宮大路周辺ではなく郊外に住むという状況は、幕府草創以前の様子と似ているので、幕府滅亡後の鎌倉の都市構造が、義朝の頃のような自然発生的な本来あるべき鎌倉の姿に回帰したものであるといえる。逆に鎌倉時代の鎌倉は極めて人為的な構造をもつ「都市」だったと考えられる。

以上のように本遺跡は、鎌倉幕府開設以降に北条氏に代って居住地として開発され、泰時の頃には将軍後見者の邸宅と認識され、背後の東勝寺、正面の寿福寺とともに直線的な位置関係をとり、その後、

経時、重時らが住んだが、時頼以降は実質的な政治の中心が「宝戒寺小町亭」や山内の邸宅に存していた。幕府が滅びると当遺跡周辺は居住地としてはほとんど機能しなくなり近世を迎えるのである。

注

1．馬淵和雄 『北条泰時・時頼邸跡雪ノ下一丁目371番1地点発掘調査報告書』 鎌倉市教育委員会1985
2．岡陽一郎 「人名木簡について」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告（第2分冊）』「北条小町邸跡（No.282）雪ノ下一丁目377番7地点」 鎌倉市教育委員会 1996
3．引用文献は石井 進 「鎌倉から出土した最初の木簡」『日本歴史』 第449号 1985による。
4．前掲注1。なお同氏 「中世鎌倉若宮大路側溝出土の木簡」『日本歴史』 第439号 1984も参照。
5．前掲注4と同じ。
6．『吾妻鏡』 寿永元年（1182）四月二十四日条。
7．鈴木 茂 「宇津宮辻子幕府跡の花粉化石」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告（第1分冊）』「宇津宮辻子幕府跡（No.239） 小町二丁目389番1地点」 鎌倉市教育委員会 1996。イネのプラントオパールを多数検出、古墳時代に水田稲作が行われていた可能性が高い。
8．馬淵和雄 「武士の都鎌倉－その成立と構想をめぐって－」 網野善彦・石井進編 『中世の風景を読む－2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』 新人物往来社 1994
9．最近の発掘調査によれば、旧市街地内には滑川以外にも多くの自然流路があり、現在ほぼ平坦な本遺跡周辺地域は、当時若宮大路を境に東から西に向かって傾斜している。
10.『吾妻鏡』 建久二年（1191）三月四日条。
11.秋山哲雄 「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史学雑誌』 第106編9号 1997
12.『吾妻鏡』 承元四年（1210）十一月二十日条。
13.『吾妻鏡』 宝治元年（1247）七月十七日条。
14.『吾妻鏡』 元仁元年（1224）閏七月一日条。
15.『吾妻鏡』 嘉禄二年（1226）十二月二十日条。
16.『吾妻鏡』 安貞元年（1227）二月八日条。
17.『吾妻鏡』 嘉禎二年（1236）八月四日条。
18.松尾剛次 「武士の首都「鎌倉」の成立」 石井進編 『都と鄙の中世史』 山川出版 1992
19.前掲注13
20.『吾妻鏡』 寛元三年（1244）六月二十八日条。
21.前掲注13。
22.『吾妻鏡』 宝治元年（1247）十一月十四日条。
23.『吾妻鏡』 文応元年（1260）二月二十一日条。
24.建武二年（1335）三月二十八日足利尊氏寄進状。
25.貫達人・川副武胤 『鎌倉廃寺事典』 有隣堂 1980 東勝寺の項
26.『吾妻鏡』 建保元年（1213）六月二日条。
27.『吾妻鏡』 宝治元年（1247）六月五日条。
28.『公衡公記』 正和四年（1315）四月十六日条。
29.『東勝寺遺跡発掘調査報告書』 鎌倉市教育委員会 1977
30.山田邦明 「室町時代の鎌倉」 五味文彦編 『都市の中世』 吉川弘文館 1992

第二章　調査の概略

1．調査の経緯と経過

平成７年（1995）12月、鎌倉市雪ノ下一丁目369番１地点において店舗併用住宅建設の申請に伴う事前相談があった。申請地は鎌倉市№282遺跡の「北条小町邸跡」の一角にあたり、隣地の発掘調査結果から工事の実施によって遺構の損傷が避けられないため、設計変更が不可能ならば埋蔵文化財発掘調査は不可避であると文化財保護課は判断した。その結果、事業者と協議を重ねた後に文化財保護法の手続きを経て、事業者の準備が整ったところで、以下のように発掘調査が実施されるはこびとなった。発掘調査は基本的に原因者負担分と国庫補助事業分が平行して行われた。調査対象となる建築面積126.20㎡のうち、店舗部分にあたる80.77㎡が原因者負担とし、自己用住宅部分に係る残りの45.43㎡を国庫補助事業として発掘調査を実施した。それぞれの調査期間については、全体を調査面積比と応分に分割した。

調査は自己用区域を対象として、平成８年８月12日から開始された。はじめに調査区全体の近・現代整地層と近世耕作土を重機により除去し、近代・近世遺構の調査を実施することにした。その後残土処理の都合上、調査区北壁際にトレンチを設定し中世遺構の確認を兼ねて調査進行に伴う残土量を試算した。その結果、中世遺構は調査区を東西に分割し、まず西半部の調査では残土を場外搬出し、続いて東半部の調査は場内処理するはこびとなった。調査期間中には例年にない猛暑や、台風の豪雨に遭い土層観察のために残したセクションベルトの一部が崩落するなどのアクシデントにも見舞われたが、工事の規定深度まで人力で掘り下げて記録保存を行い、同年10月11日までに機材等を撤収し、関係各方面にその旨を伝え調査を終了した。

2．グリット設定方法

調査に使用した測量軸は、若宮大路中心軸に平行・直行する方向で調査区内を２ｍグリットに区割りした。調査区内グリットは南北方向に西からアルファベットを、東西方向に北から算用数字を付した。各区画の名称は北西隅の交点杭を与えている。このグリットは、近年調査された周辺遺跡の調査地点と同一のメッシュに乗せて設定されている。これは、原点を鶴岡八幡宮ニノ鳥居の礎石北辺の中央におき八幡宮社頭段葛中央を見通した線を基軸としたものであり、南北軸方位は真北に対して、26°48′23″東に振れている。便宜上報文中における方位の呼称は、八幡宮側を北、若宮大路側を西とし概ねグリットの方向に合わせたつもりである。

グリット軸は鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市４級基準点と連結しており、調査区内Ｅ－５グリット杭の位置関係を明記した（図２）。調査地点近辺の鎌倉市４級基準点は鶴岡八幡宮社頭から南に100m程進んだ若宮大路段葛脇のＴ025と、大路東側歩道で清川病院前のＴ026の２点がある。

3．調査の概要

今回の調査で発見された遺構と遺物は、概ね以下に記したとうりである。

近代遺構　建物土台材…長さ４ｍ以上、幅30㎝の角材３本をＴ字形した基礎確認。溝１条

近世遺構　井戸１基…＜井戸１＞素掘り円形で径1.6m、深さ2.9m。溝２条…＜溝２＞大路側溝

中世遺構　土壙12基・溝８条・道路面・柱穴30口、以下に若宮大路側溝の概要を記す。

＜溝３～５＞規模：幅３ｍ程　時期：13世紀中葉頃から14世紀前半　　概要：３回以上の修築で若干の

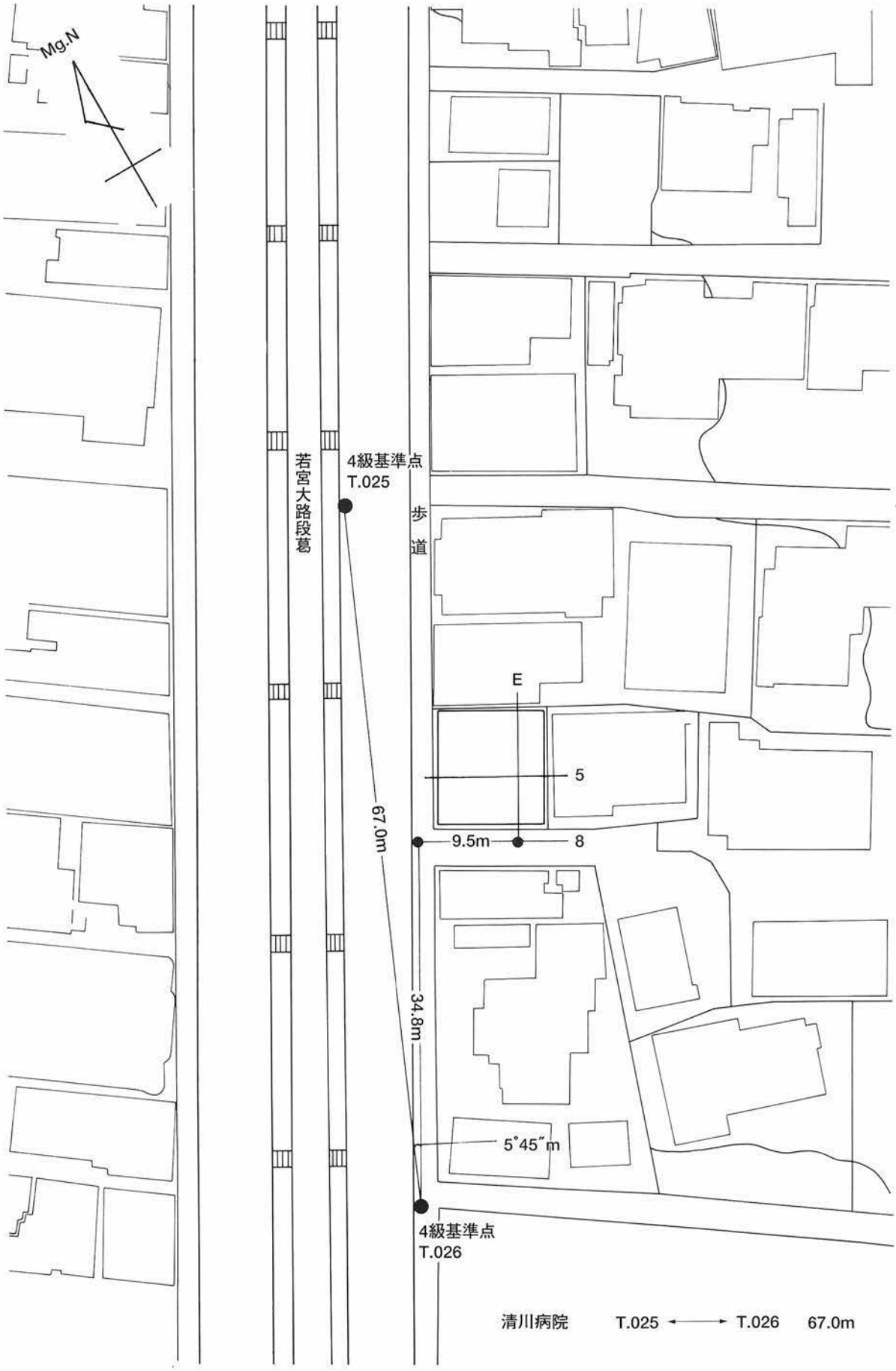

Mg.N
若宮大路段葛
4級基準点
T.025
歩道
E
5
9.5m
8
67.0m
34.8m
5°45″m
4級基準点
T.026
清川病院
T.025
T.026
67.0m

図2　グリット設定図

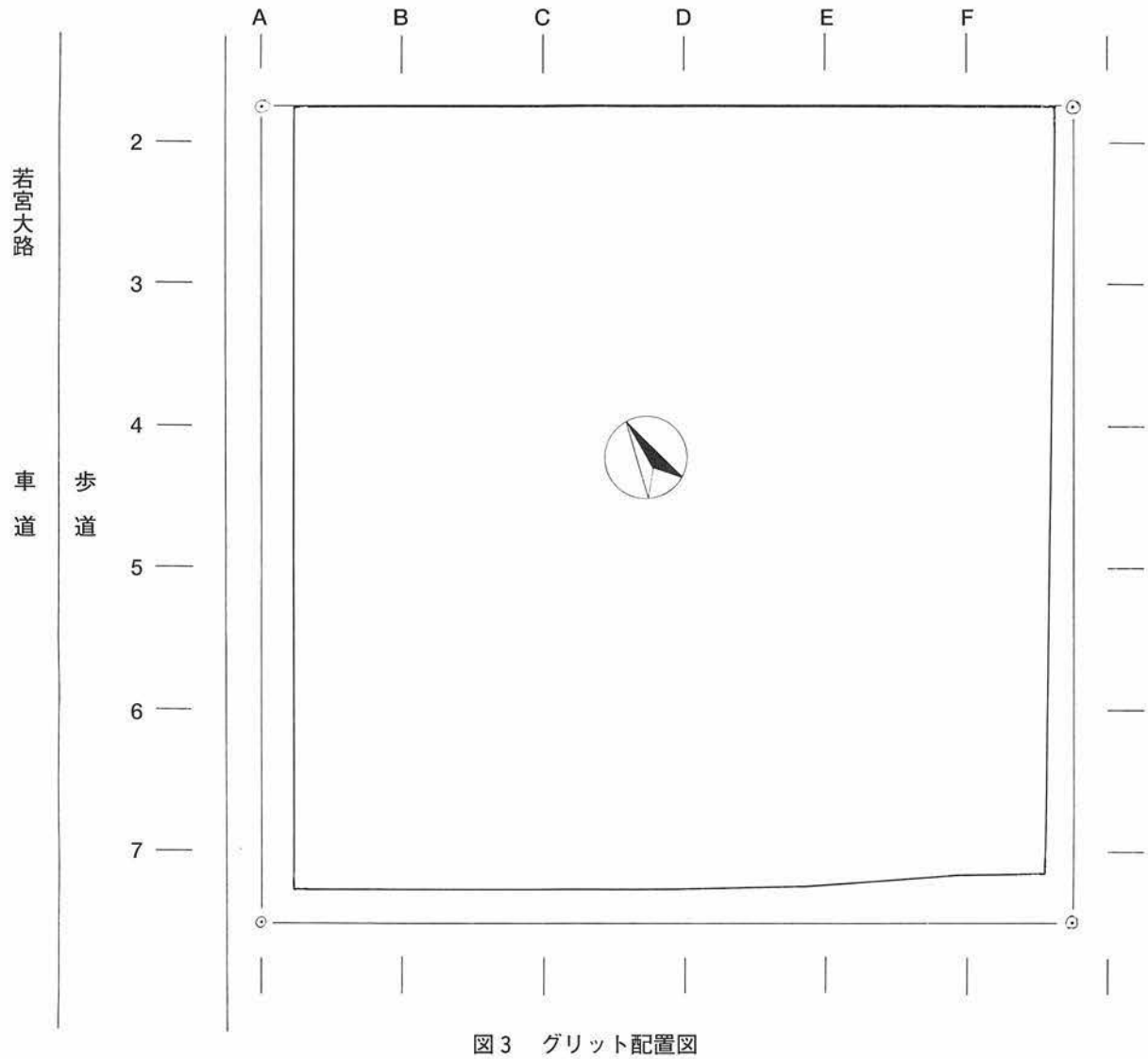


図3　グリット配置図

位置移動がある。木組み構造、箱堀状掘り方の両底に柄穴を切った土台材が検出された。溝の東肩口には土圧で溝枠が内側へ倒壊しないようにする「控え梁」と、それを根元で固定する柱穴列を検出した。溝中からは多量の遺物が出土したが、この中に「南無薬師如来」と記した笹塔婆や大路側溝の普請に伴い幕府が御家人たちに課役した事を示すと推定される木簡が出土した。

＜溝６＞規模：推定幅３ｍ、深さ２ｍ前後、Ｖ字形の薬研堀　　時期：13世紀前葉　概要：溝７の約４ｍ東方、上方を後代の溝３～５が削平する。位置関係から見ると溝７より後出的な要素をもつが、箱堀溝は浚渫みられ、ある時期は両溝が共存した可能性も考えられる。出土遺物は少量である。

＜溝７＞規模：幅３ｍ、深さ1.6ｍ、逆台形掘り方　　時期：12世紀末から13世紀前葉　概要：現大路歩道に接した最も西寄りに位置した若宮大路東側溝でる。一度浚渫した後、埋め立てられ上面が舗装されて溝３～５時期の大路道路を構築。出土遺物には、かわらけ・渥美・常滑・木製品などがある。

第三章　検出遺構と出土遺物

1．近代・近世の遺構と遺物

近・現代の客土層と近世耕作土層を剥がすとすぐに中世地山または大路側溝覆土が現れることから、近代・近世遺構を伴う生活面が残っていたわけではなく近世以降に削平されたと考えられる。上層調査時に検出された近代遺構のＴ字形の建物土台を思わす木材列や溝１は確認できたが、近世遺構の溝２は底面を僅かに残しただけであり、井戸に到っては中世遺構まで掘り下げて検出された遺構である。深い掘り方をもつ遺構のみが辛うじて検出することができた。したがって、図4の「近代・近世遺構全図」は実際の生活面がありこれを検出して図化したものではなく、上層調査時の近代遺構図に、近世に属する遺構

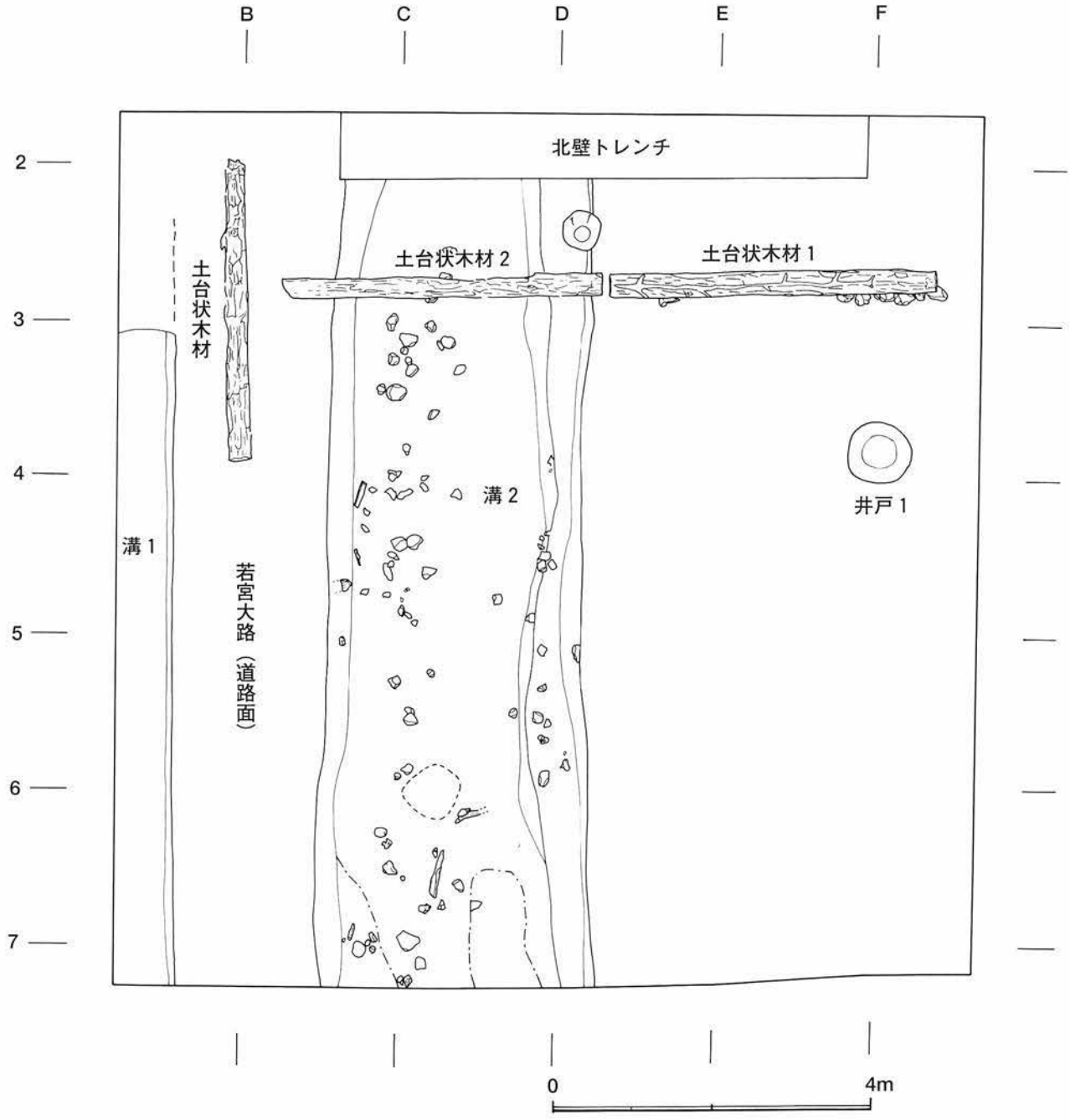


図４　近代・近世遺構全図

を抽出して合成した図であることをお断りしておく。

建物土台状遺構（図４）

調査区北側でＴ字形に木材を配した建物土台状遺構を検出した。土台状木材は東西方向が３軸北側に２本、それに直交する南北方向がＢ軸の２～４グリットの間で１本が確認された。

検出した３本の土台材は特に上面の腐蝕が進んでいて当初形状を留めていないが、この中で遺存状態の良好な土台状木材１をみると、長さ4.15m、幅31cm、高さ15cm以上で、側面と両端が加工された角材と考えられる。木材の底面と両脇に沈下・ズレ防止ためか土丹塊を不規則に敷き込んでいる。年代を表す遺物はないが、近世所産の溝２が埋まった後に構築された遺構で溝１との位置関係からも明治期頃のものであろうか。

溝１（図４）

調査区西壁沿いに検出した。鎌倉時代初期に開削された溝６を埋め戻し構築した中世期の若宮大路を壊して掘られている。断面は逆台形をした素掘りの溝で、現況で幅75cm以上、深さ80cmである。覆土は灰褐色砂質土である。

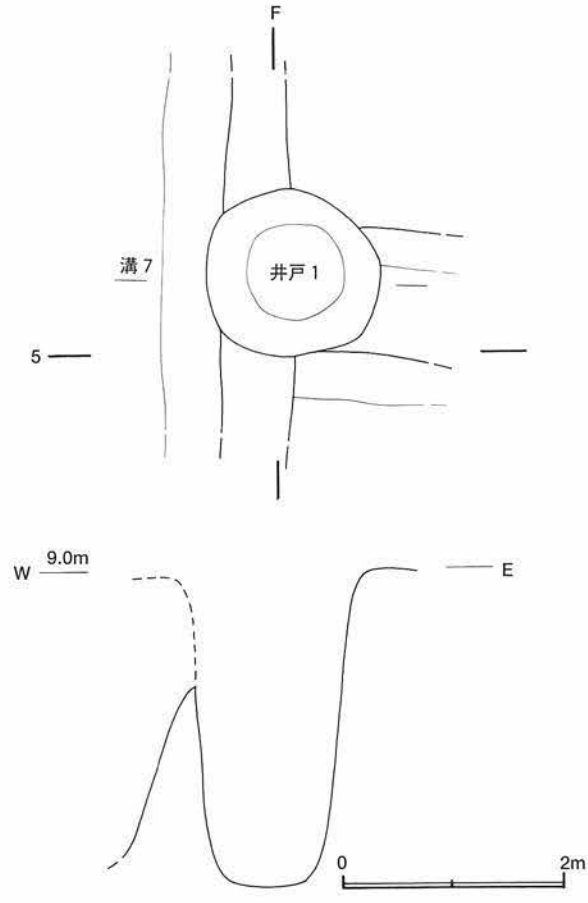


図５　井戸１

出土遺物は肥前系が仏飯器のみで、銅版転写の染付皿や白磁碗、徳利や香炉などの瀬戸・美濃産が主体を占めている。

溝２（図４）

Ｃ軸を挟んで近世期のものと考えられる大路側溝を検出した。この溝は上部を殆ど削平されているので正確な規模は判明していないが、土層堆積から少なくとも二時期が確認されている。現況で西に位置した幅２ｍ程で深さ60cmの断面皿形の溝と、重複して東側の幅1.3m、深さ70cmのものである。西側溝の底面近くで宝永火山灰ブロックが確認されている。

出土遺物には、瀬戸・美濃産の錆釉摺鉢や美濃産の白天目茶碗（17Ｃ代）、曲物底板などがある。この他に混入品として、かわらけや白磁口兀皿などの中世期の遺物を多く含んでいた。図９－10の碁盤をモチーフにした漆器は、茶托様に中央がやや凹んだ低い皿状で薄い器地の精緻な作りある。形状は皿状であるが、施された文様から碁石入れの碁笥蓋とも考えられ、近世以前に遡る可能性もある。

井戸１（図５）

調査区東壁寄りに検出したもので、Ｆ軸と５軸の交点付近にあたる。規模は径1.6m、深さ2.9mで円形を呈し、垂直な側壁をもつ掘り方である。掘り方内からは抜き取られたためか井戸枠などの痕跡は検出されていない。底面は中世基盤層下の湧水の多い海成砂層まで達している。埋土は上層に灰褐色粘質土、有機物腐蝕土や炭化物を多く含んだ間層を挟んだ中層以下には、投げ込まれた大形土丹塊・安山岩、廃材などが詰まっていた。

出土遺物の主体は肥前系碗・皿、大形の砥石、下駄や曲物などで18世紀後半から幕末頃である。

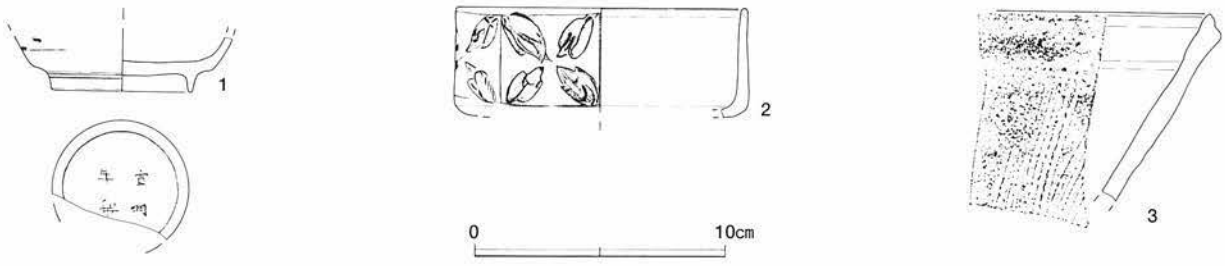


図6　近世耕作土層出土遺物

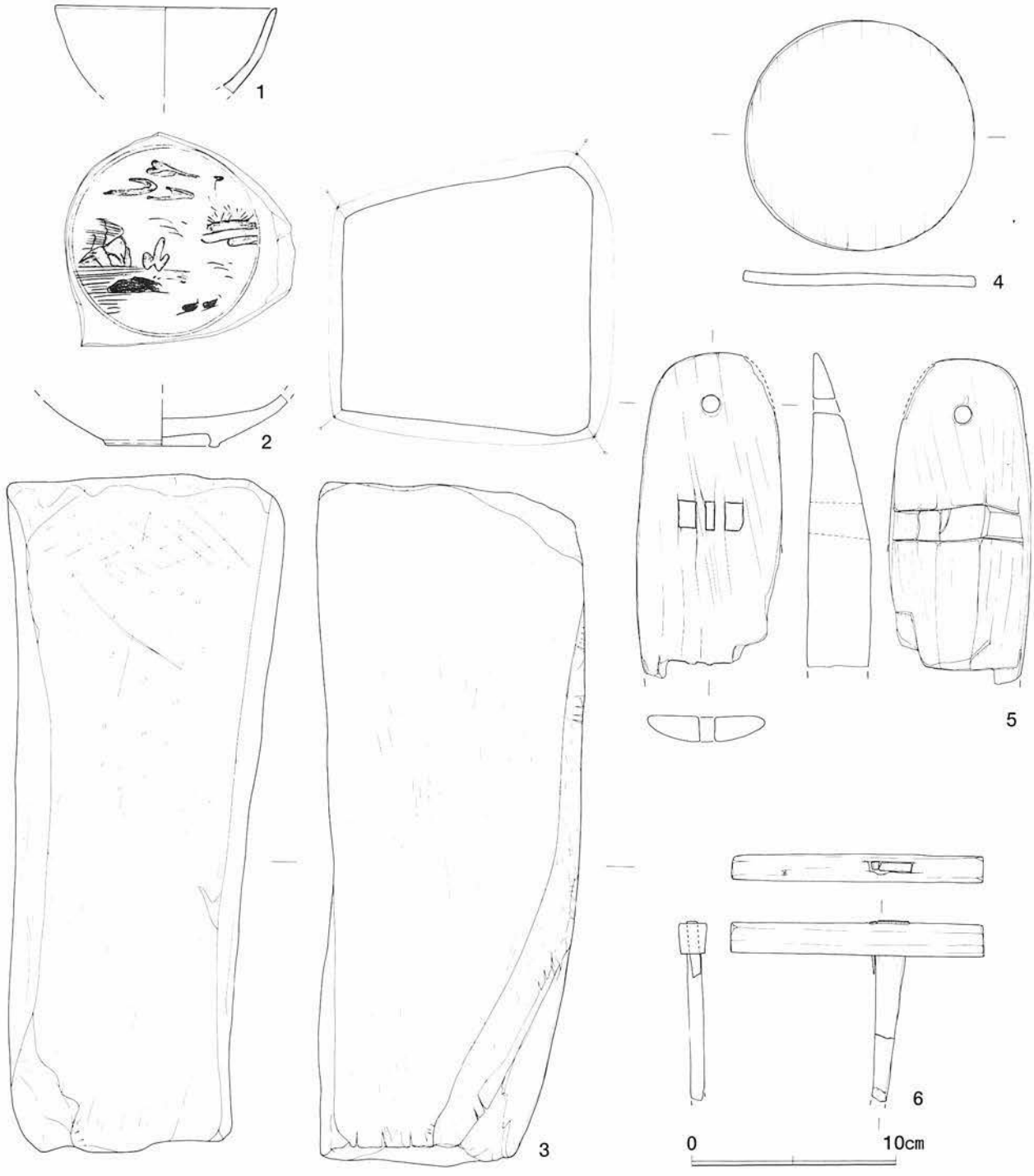


図7　井戸1出土遺物

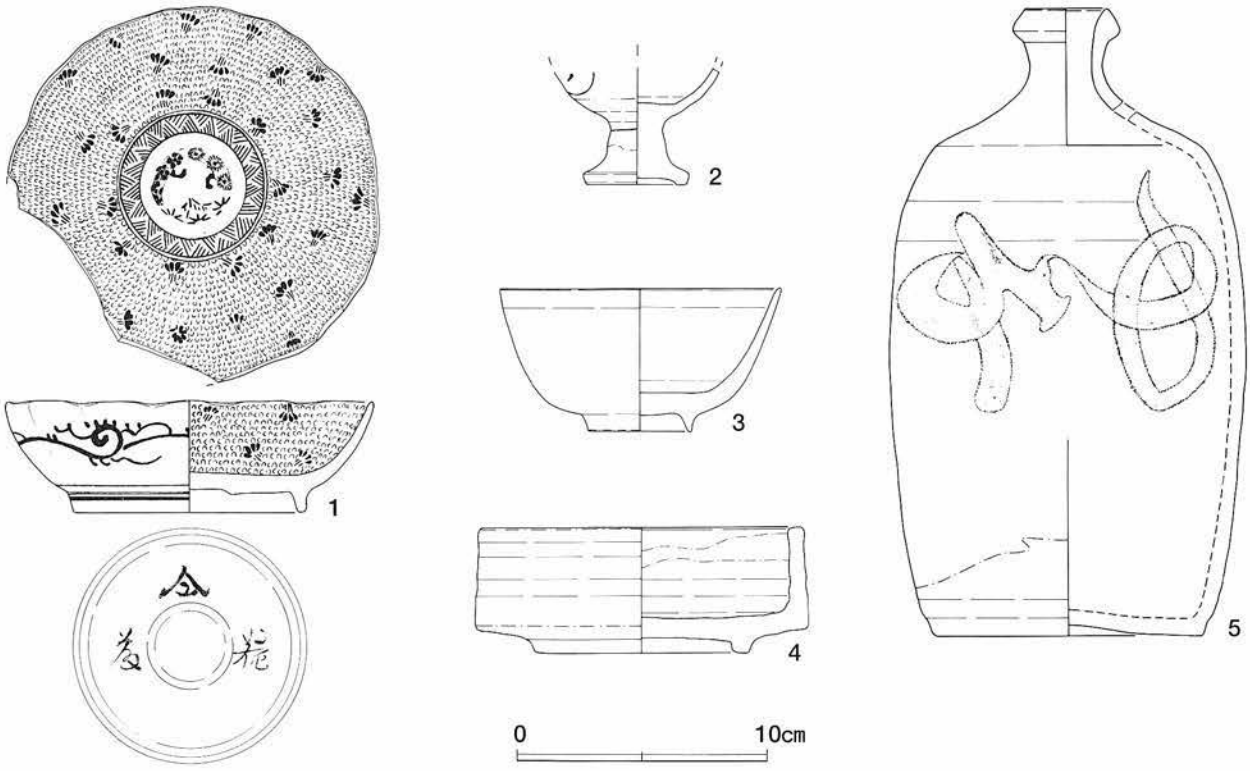


図8　溝1出土遺物

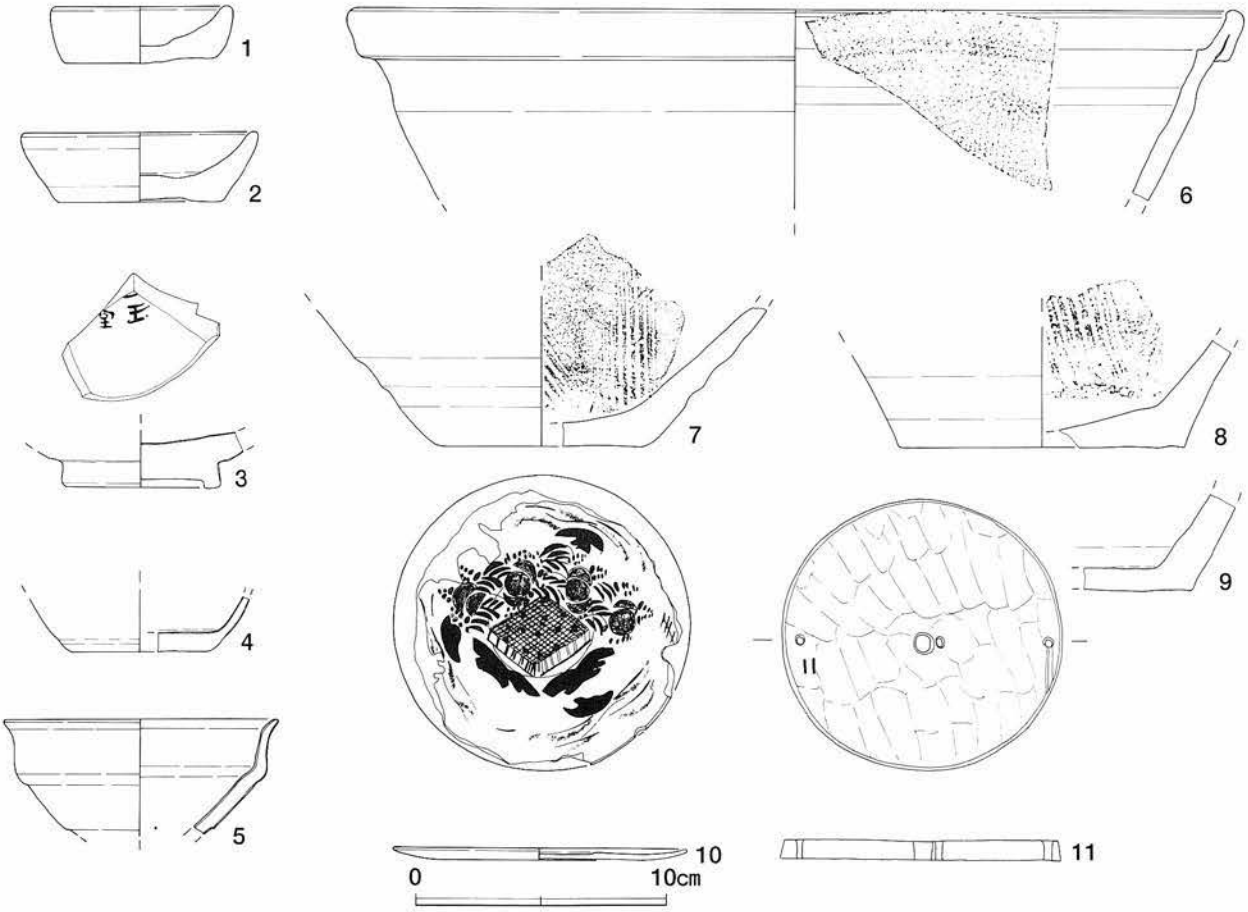
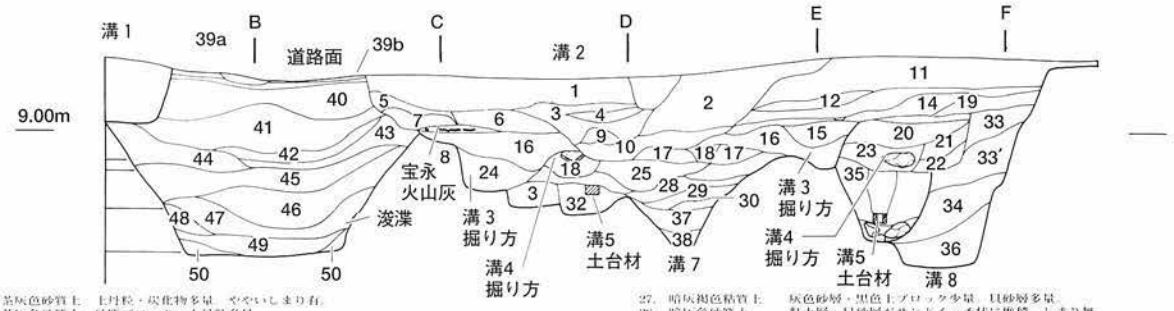


図9　溝2出土遺物



1. 暗茶灰色砂質土　土丹粒・炭化物多量。ややしまり有。
2. 暗茶灰色砂質土　砂質ブロック・土丹粒多量。
3. 暗茶褐色砂質土　貝砂・砂利・土丹粒多量。しまり無。部分的に宝永火山灰。
4. 暗褐色砂質土　黄褐色砂。土丹塊。砂利。
5. 暗茶灰色粘質　土丹粒。炭化物。ややしまり有。
6. 茶灰色砂質土　黄色砂多量。土丹粒。部分的に宝永火山灰。
7. 暗茶灰色粘質土　砂層ブロック多量。土丹粒。炭化物。
8. 暗茶褐色砂質土　拳大土丹・貝砂・砂利多量。土層に宝永火山灰有。しまり無。
9. 暗茶褐色砂質土　土丹粒・貝砂層多量。粘質土ブロックまばら。
10. 茶褐色粘質土　土丹塊。土丹粒。貝粒。粘性強。
11. 暗茶褐色粘質土　土丹粒・炭化物多量。しまり有。
12. 暗茶褐色粘質土　土丹粒・炭化物少量。砂層ブロック若干入る。
13. 茶灰色砂質土　小土丹塊・土丹粒・黄色砂多量。
14. 暗茶灰色粘質土　砂ブロック多量。炭化物少量。
15. 暗茶灰色粘質土　1cm角土丹。貝砂層。木片多量。下層に砂層堆積。
16. 暗褐色砂質土　砂利・拳大土丹・土丹粒・かわらけ片・貝砂多し。しまり無。
17. 暗灰褐色粘質土　貝砂層と粘土層がサンドイッチ状に堆積。非常にしまり有。
18. 灰褐色砂質土　貝砂層多量。
19. 灰褐色砂質土　拳大土丹・小土丹塊・貝砂多量。しまり有。
20. 灰褐色粘質土　砂利・木片・貝砂まばらに含む。ややしまり有。
21. 灰褐色粘質土　貝砂層多量。しまり無。
22. 暗灰褐色粘質土　貝砂層ブロック・木片多量。しまり有。
23. 暗灰褐色砂質土　貝砂層ブロック・砂利・木片・かわらけ片多量。非常にしまり有。　溝4掘り方裏込め
24. 暗灰褐色砂質土　黒色土ブロック・灰褐色土ブロック多量。非常にしまり有。
25. 灰褐色粘質土　小土丹塊・土丹粒多量。貝砂層少量。
26. 灰褐色粘質土　拳大土丹・土丹粒・貝砂層多量。非常にしまり有。　溝4溝底
27. 暗灰褐色粘質土　灰色砂層・黒色土ブロック少量。貝砂層多量。
28. 暗灰色砂質土　粘土層・貝砂層がサンドイッチ状に堆積。しまり無。
29. 茶褐色粘質土　微量の貝砂層。木片。しまり無。
30. 茶褐色粘質土　木片。しまり無。
31. 暗灰褐色砂質土　土丹粒。炭化物。ややしまり有。
32. 暗茶灰褐色砂質土　貝砂層・炭化物・木片多量。非常にしまり有。
33. 暗茶褐色粘質土　5cm角土丹・玉石多量。しまり有。
34. 暗茶褐色粘質土　黄灰褐色粘質土ブロック・大小土丹塊多量。非常にしまり有。
35. 暗茶灰色粘質土　黄灰色砂・黒色土ブロック多量。非常にしまり有。
36. 茶灰褐色粘質土　小土丹塊・土丹粒多量。下層に有機物腐植土有。
37. 灰褐色粘質土　灰褐色粘土ブロック・小土丹塊少量。非常にしまり有。
38. 灰褐色粘質土　黒褐色土層多量。非常にしまり有。
39. a黄褐色砂層多量。非常にしまる硬化する面。小砂利等多量。　時期の道路面
b黒灰色地山と黄褐色砂による舗装で硬化が著しい。
40. 灰褐色粘質土　暗灰色砂質土ブロック多量。非常にしまり有。
41. 黒灰色粘質土　黒褐色土ベースでしまり有。
42. 黒灰色粘質土　暗灰色土ブロック・土丹粒まばら。非常にしまり有。　埋め戻し土
43. 黒灰色粘質土　暗灰色土ブロック多量。
44. 暗灰褐色粘質土　暗灰色土ブロック・黒灰色土ブロック多量。非常にしまり有。
45. 暗茶褐色粘質土　有機物腐植土。小土丹塊。貝片。木片。ややしまり有。
46. 暗茶褐色粘質土　大小土丹塊・木片多量。しまり無。
47. 茶灰褐色粘質土　灰色砂層ブロック多量。木片・土丹粒まばら——浚渫後堆積
48. 茶灰褐色粘質土　土丹塊・砂利やや多量。
49. 暗灰褐色砂質土　土丹粒・砂・木片多量。しまり無。
50. 暗灰色砂層　灰褐色粘質土ブロック多量。

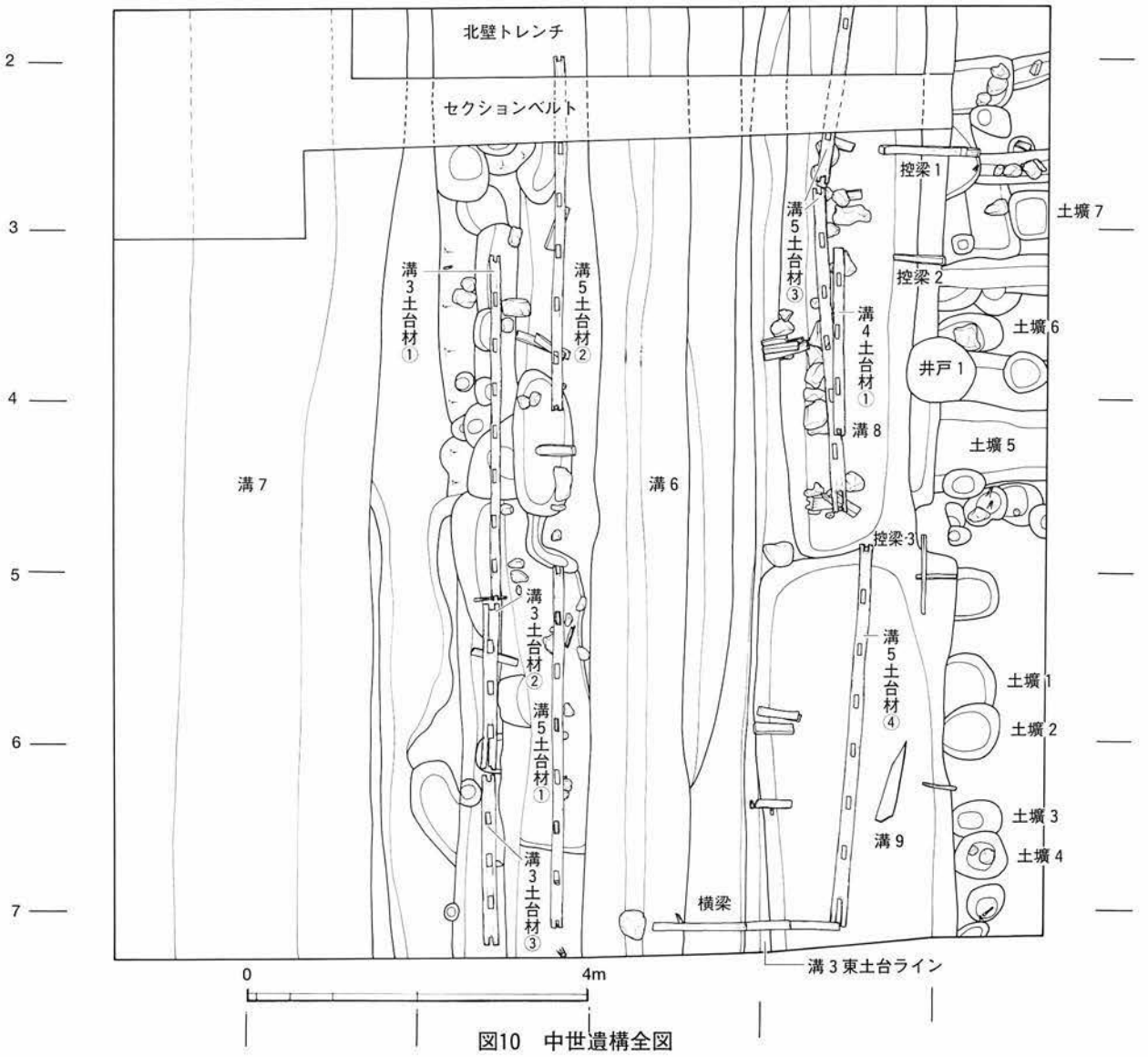


図10　中世遺構全図

2．中世の遺構と遺物

先述したように若宮大路沿いの調査地点から中世前期の大路東側溝が発見されており、今回の調査でも発見される可能性が高いため、調査区内の生活面や遺構の状況を確認する目的で、まず北壁トレンチを設定して以下の観察を行った。その結果、近現代客土層や水田耕土層の直下には調査区東端だけに中世地山があり、大半が大路側溝であることが判明した。従って、中世遺構はこの地山面で確認した。

土壙１・２（図11）

Ｆ－６杭付近で溝９肩口に位置し、２基の土壙が重複しいるが、土壙１が新しい。土壙１はほぼ円形で径１ｍ、深さ95cmである。覆土主体は軟弱な有機物の腐蝕した褐色土、中位に炭化した藁状繊維、下層に地山に近い黒褐色土が堆積する。遺物は少なく手づくねかわらけと女瓦だけである。

土壙２は楕円形で長径75cm、短径63cm、確認面からの深さ30cmである。覆土は土丹粒多い黄褐色砂で遺物は出土していない。

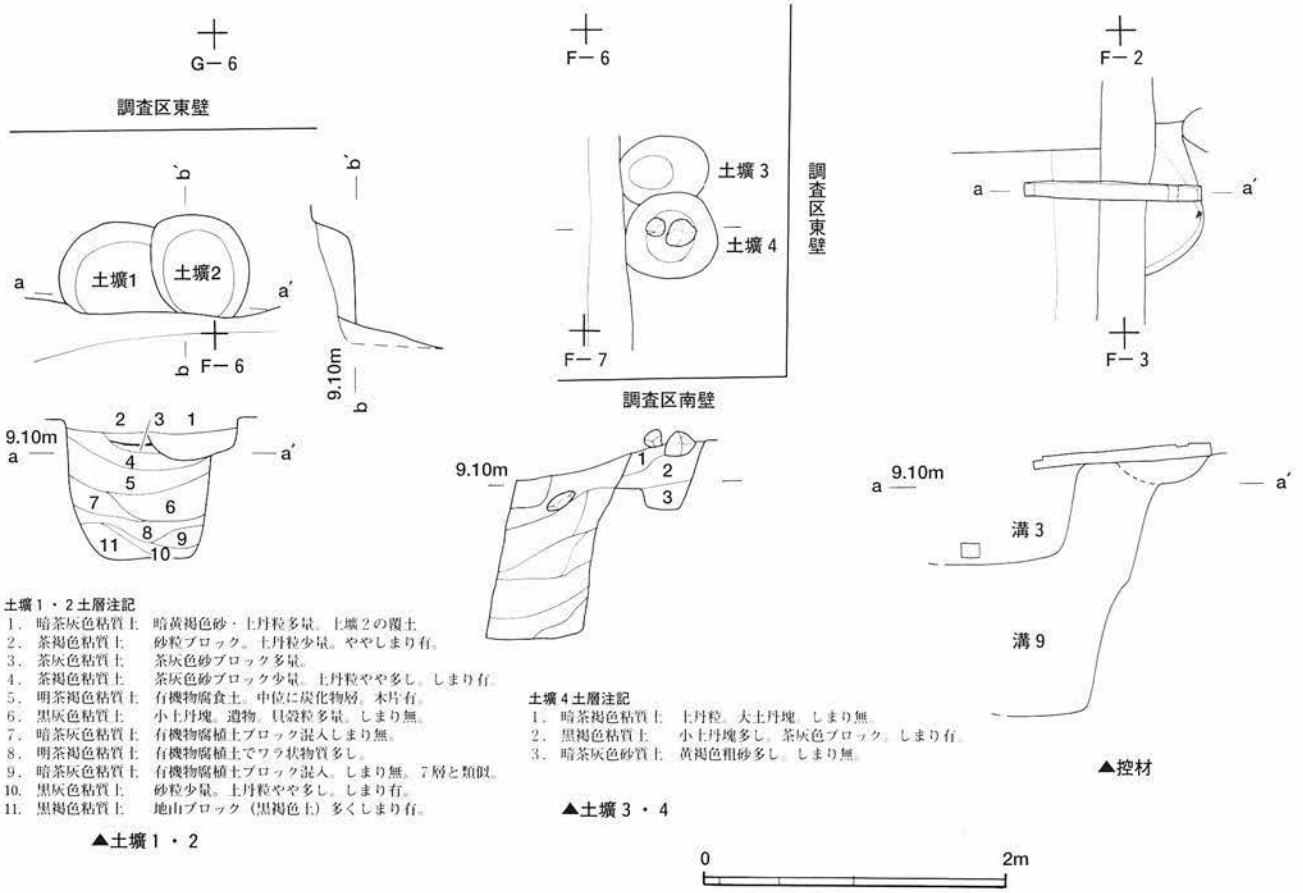
土壙３・４（図11）

Ｆ－７杭付近で溝９肩口に位置し、２基の土壙が重複するが、土壙４が新しい。土壙３は楕円形で長径60cm、短径40cm、深さ40cmである。覆土は地山に近い黒褐色土、白磁碗が出土している。

土壙４はほぼ円形で径60cm、深さ55cmである。覆土は締まりのある土で、上層に土丹塊２個がみられた。図示可能な遺物は出土していない。

土壙５（図10）

Ｆ－４グリットに位置し、４軸に沿って検出した遺構でる。東側は調査区外、西は大路側溝に削平され全体規模は不明で土壙としたが、溝の可能性もある。残存する規模は東西135cm以上、幅105cmで地山



土壙１・２土層注記
1．暗茶灰色粘質土　暗黄褐色砂・土丹粒多量。土壙２の覆土
2．茶褐色粘質土　砂粒ブロック。土丹粒少量。ややしまり有。
3．茶灰色粘質土　茶灰色砂ブロック多量。
4．茶褐色粘質土　茶灰色砂ブロック少量。土丹粒やや多し。しまり有。
5．明茶褐色粘質土　有機物腐食土。中位に炭化物層。木片有。
6．黒灰色粘質土　小土丹塊。遺物。貝殻粒多量。しまり無。
7．暗茶灰色粘質土　有機物腐植土ブロック混入しまり無。
8．明茶褐色粘質土　有機物腐植土でワラ状物質多し。
9．暗茶灰色粘質土　有機物腐植土ブロック混入。しまり無。７層と類似。
10．黒灰色粘質土　砂粒少量。土丹粒やや多し。しまり有。
11．黒褐色粘質土　地山ブロック（黒褐色土）多くしまり有。

土壙４土層注記
1．暗茶褐色粘質土　土丹粒。大土丹塊。しまり無。
2．黒褐色粘質土　小土丹塊多し。茶灰色ブロック。しまり有。
3．暗茶灰色砂質土　黄褐色粗砂多し。しまり無。

図11　土壙・控材

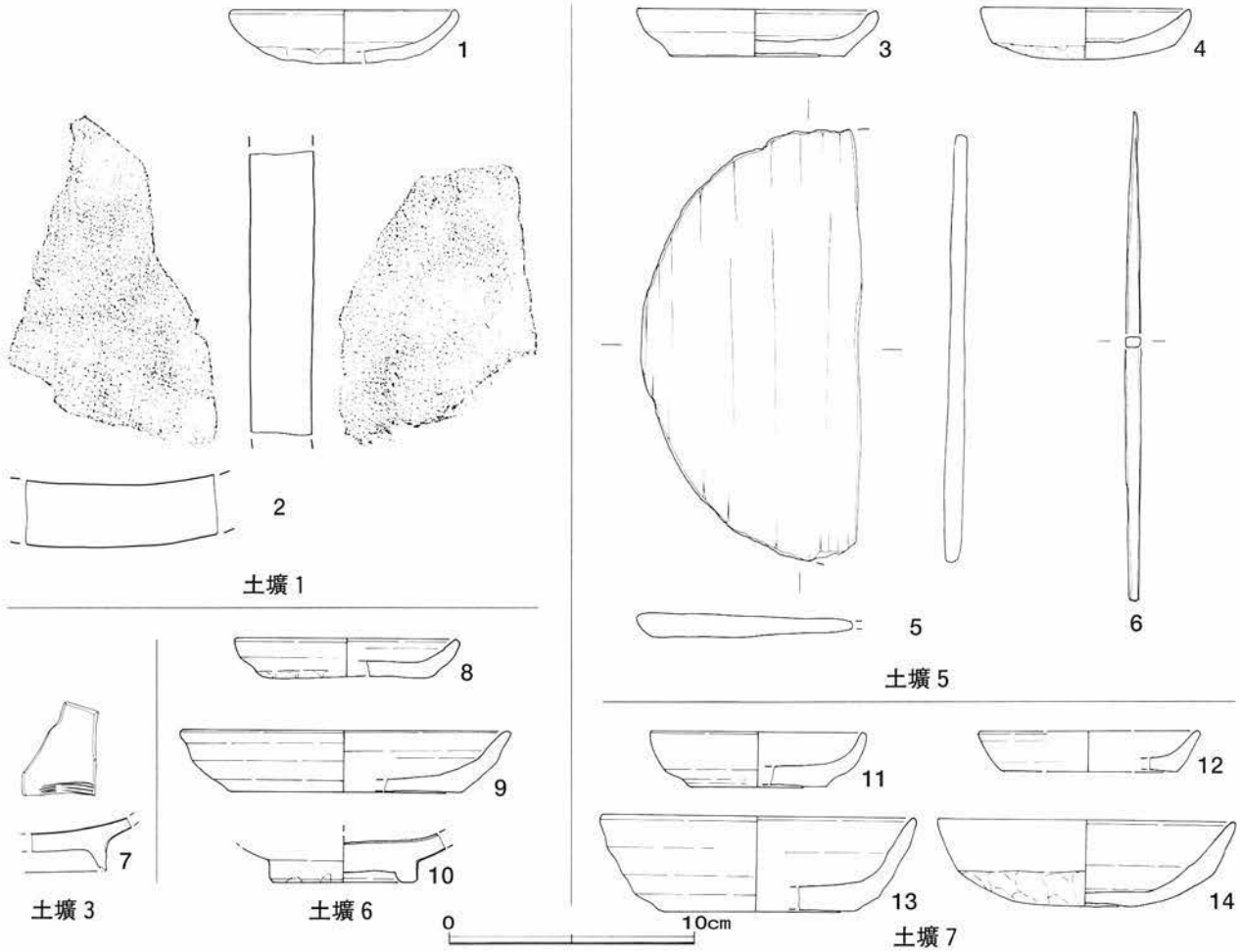


図12　土壙出土遺物

に似た古い覆土もつ大形土壙である。遺物はかわらけが手づくねと器高の低いロクロ成形のもの、渥美甕片、箸や曲物底板の木製品などが出土した。

土壙６（図10）

Ｆ－３に位置した径50cm、深さ40cm程の円形で断面が皿状の土壙である。覆土は締まりのある暗茶褐色粘質土で、遺物は手づくねと器高の低いロクロ成形のかわらけ、青磁碗である。

土壙７（図10）

Ｆ－２に位置する。形状は隅丸方形で断面は浅い皿形を呈し、一辺の長さ60cm、深さ20cmである。覆土は植物繊維（藁状のもの）が燃えたような炭化物が堆積する。遺物は手づくねとロクロ成形のかわらけが出土した。

若宮大路側溝（図10・11～19）

溝３～５はＣ軸からＦ軸の間に存在した南北方向の木組み溝である。木組み溝は少なくとも３時期が確認され、同じような位置に何度も修築されており、溝の土台部材の位置や規模からみて中世鎌倉の最盛期に造られた若宮大路東側溝であることは間違いない。各溝は断絶なく掘り直され、殆んどの木組み部材は壊され抜き取られているので上端から低部まで確認できたものはなく、土台部材と掘り方との相関関係を把握することはかなり困難を伴った。それでも、僅かに残存していた土台部材の配置や土層断面からの観察により溝の切合い関係や規模を推定することができた。各溝の覆土そのものの区別は調査中にも可能であったため、概ね出土遺物の分別はできた。以下、溝３～５の概略を古い順から述べる。

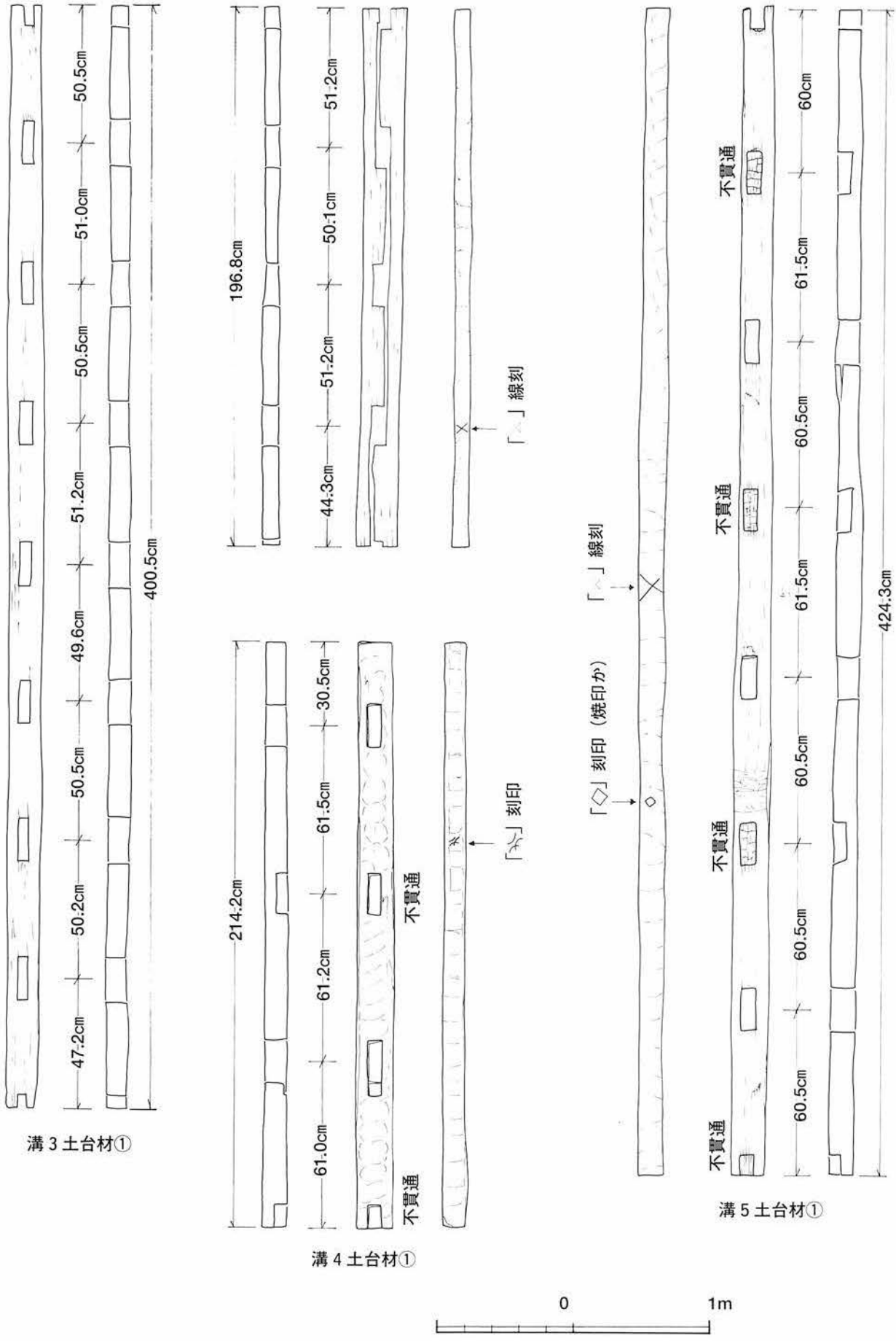

47.2cm
50.2cm
50.5cm
49.6cm
50.5cm
51.2cm
51.0cm
50.5cm
400.5cm
溝3土台材①
196.8cm
44.3cm
51.2cm
50.1cm
51.2cm
「へ」線刻
214.2cm
61.0cm
61.2cm
61.5cm
30.5cm
不貫通
不貫通
「ヘ」刻印
溝4土台材①
「◇」刻印（焼印か）
「へ」線刻
不貫通
不貫通
不貫通
60.5cm
60.5cm
60.5cm
61.5cm
61.5cm
60cm
424.3cm
溝5土台材①
0
1m

図13　溝3～5土台部材

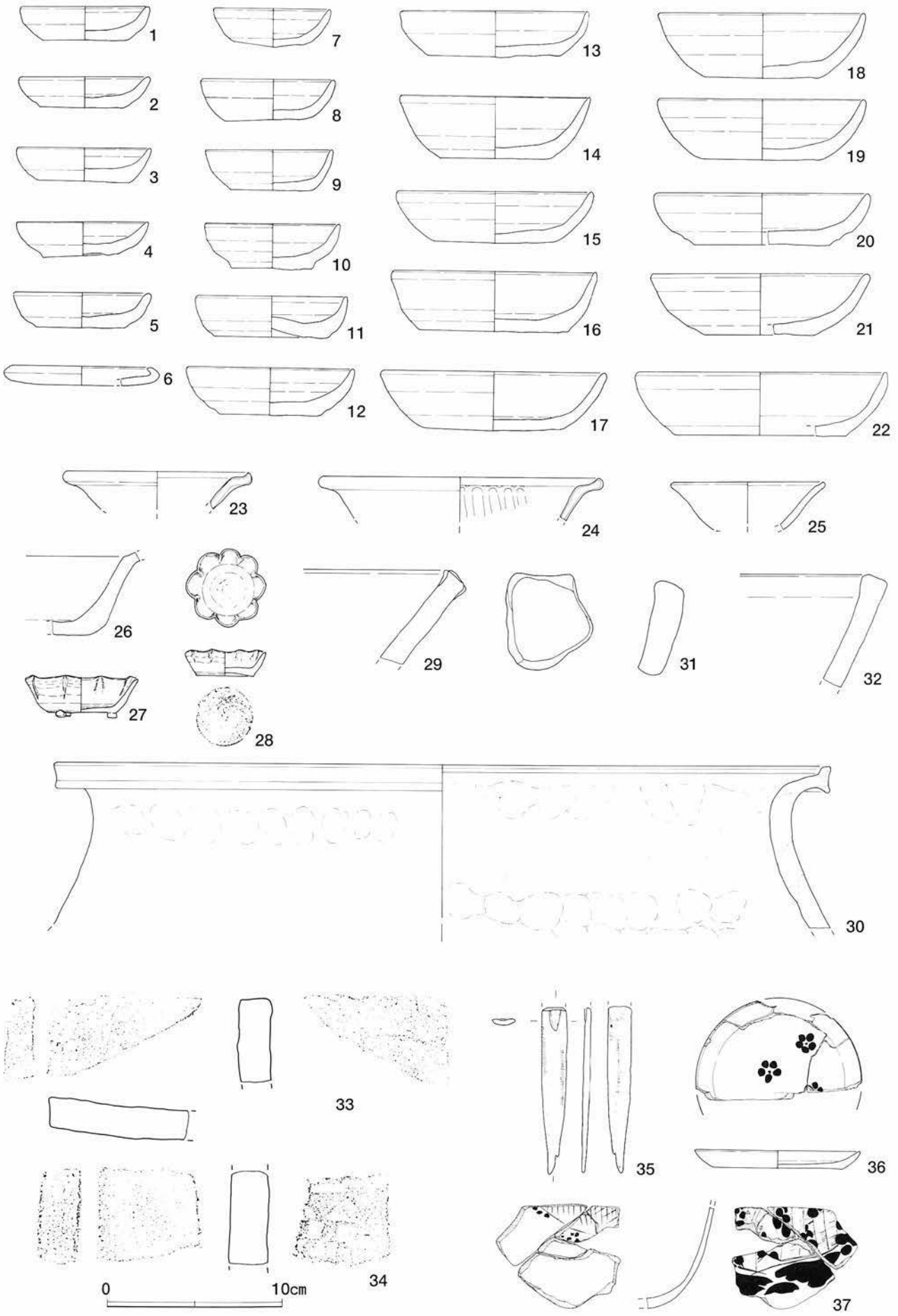

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
31
32
30
33
34
35
36
37
0
10cm

図14　溝３出土遺物（１）

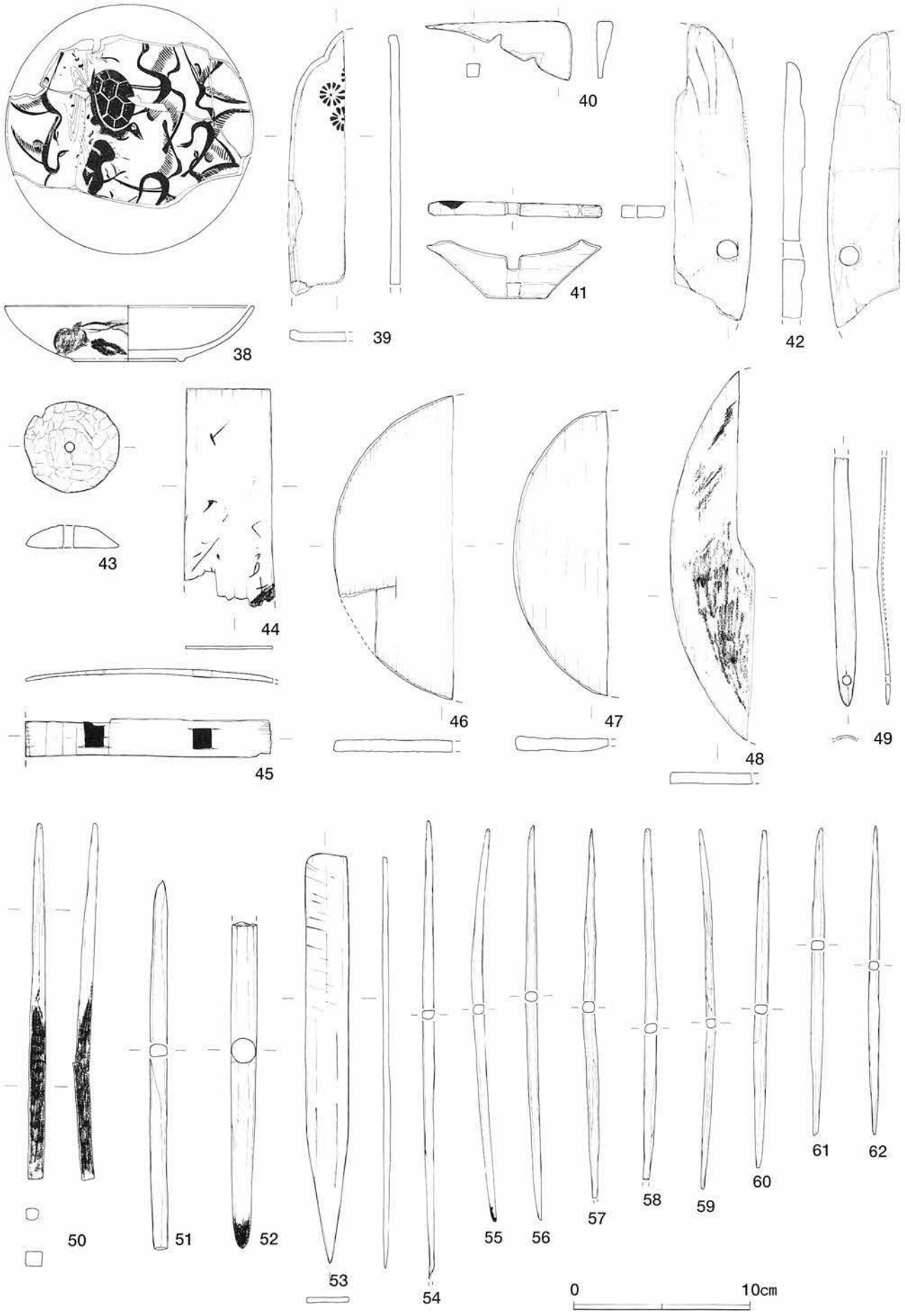

38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
0
10cm

図15　溝3出土遺物（2）

溝５

溝７・８を埋め戻した後に開削された。掘り方は箱堀状に掘り下げた溝底の両脇を、さらにU字の溝状に掘って枘穴を切った土台材を据える。掘り方の下端幅は約3.8m、東西土台材の幅は芯々で約３mである。土台材の寸法は、西側の土台材①（図13）が長さ424.3cm、幅13.5cm、厚さ10cm、枘穴間芯々の平均60.8cmである。

この他の土台材は、西側の②が長さ412cm・枘穴間（芯々平均、以下同じ）61cm、東側は③が長さ381cm・枘穴間60.5cmで、④が長さ449cm・枘穴間61cmを計る。溝５に伴う土台材は、すべて枘穴が貫通と不貫通とを一つおきに設けているのが特徴である。

溝４

溝３を構築した際の削平が著しく、土台材は東側の１本だけが遺存しているが、溝５との位置や幅は殆んど変化していない。掘り方の下端幅は約3.8m、土台材寸法は長さ381、幅13.5cm、厚さ８cm、枘穴は貫通と不貫通が一つおきで、枘穴間61.2cmである。

溝３

上記の二溝より西へ少しずれた位置で検出された。箱堀状の掘り方で溝底の両脇を浅い溝状に掘り込み土台材を据えている。掘り方の下端幅は約3.9m、土台材は西側だけに遺存していた。東側は土台材を据えた時、下に敷かれた礎板や礎石、角杭などが残っており、およその推定位置から判断した幅は３m強である。

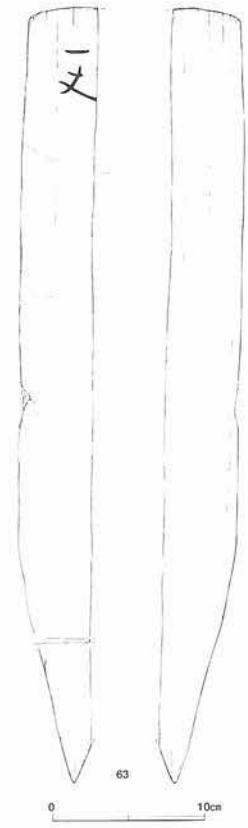


図16　溝３出土遺物（３）

土台材の寸法は、土台材①が長さ400.5cm、幅13.0cm、厚さ8.5cm、枘穴間50.5cmである。土台材②は長さ196.8cm・幅14cm・厚さ６cm前後・枘穴間50.8cm、土台材③は長さ201.2cm・幅13.5cm・厚さ６cm・枘穴間50.6cmを計る。従って溝４・５土台材に比べて枘穴間の芯々が平均で10cm程短くなっている。

ところで側溝の東側肩口には、柱穴や土壙状の掘り込みが溝に沿って並び、さらに溝に直交する形で何本かの角材が検出されている。これは大路両側で側溝が検出された調査例からみて、溝枠が外方からの土圧で内側へ倒れないように地中から曳っぱるための控梁の一部と考えられ、控梁１の後部には上端に切り欠きを入れており、これは押さえ木を咬ませるものであろう。また溝５土台材④南端にある東西位角材は横梁の可能性もあるが、柱穴も含めて控梁と個々の溝との対応関係は把握できていない。これらの溝に伴う遺物は、図14以下に示したとおり多量に出土している。特に溝３・５からは、細長い板材の上端を平らか圭頭状にし、下端が尖るように削られた墨書木札（墨書は殆んど不明瞭）が土台材の継ぎ目付近から出土した。これは大路側溝を造るにあたって、幕府が御家人たちに課役した工事分担箇所に立てられた表示札に相当する木簡と考えられる。また溝５からは、「南無薬師如来」と記された笹塔婆も出土している。

今回の調査で検出された中世期若宮大路側溝について、事業者負担分の調査成果も参考にしながら、以下にその変遷の概要を述べることにしたい。

調査区西端に沿って検出された溝７が最も古く、鎌倉時代初期まで遡りえる大溝である。この溝は、断面逆台形の掘り方で上端幅3.2m、深さ170cmを計り、一度浚渫された後に埋め戻されている。上面は土丹版築と海砂による舗装を施しており、木組み構造へと変移した時期の若宮大路の路面を構築している。この溝７と、同時期もしくはやや後出の側溝がD軸からE軸の間で検出された薬研形の溝６である。

溝７の東方に位置しており、若宮大路幅員が拡った後代の本址（溝３～５）に共通する点、溝７より新しい要素を見いだすことができる。さらに溝８・９の上からは、溝４・５の土台材が検出され土層断面や出土遺物からみて、本址に先行する古い溝であったことが看取できよう。

ところが若宮大路側溝は溝５の時期を境にして、古代的様相を残した箱薬研の素掘りから、木組み構造にと大きく変化したのである。先述したように、溝４～３も同じような位置や規模で連続した造り直しが行われ、木組み構造を持つ溝の間は側溝中心軸の変移は殆んど認められず、一貫性のある計画的な町割の様子を窺うことができる。

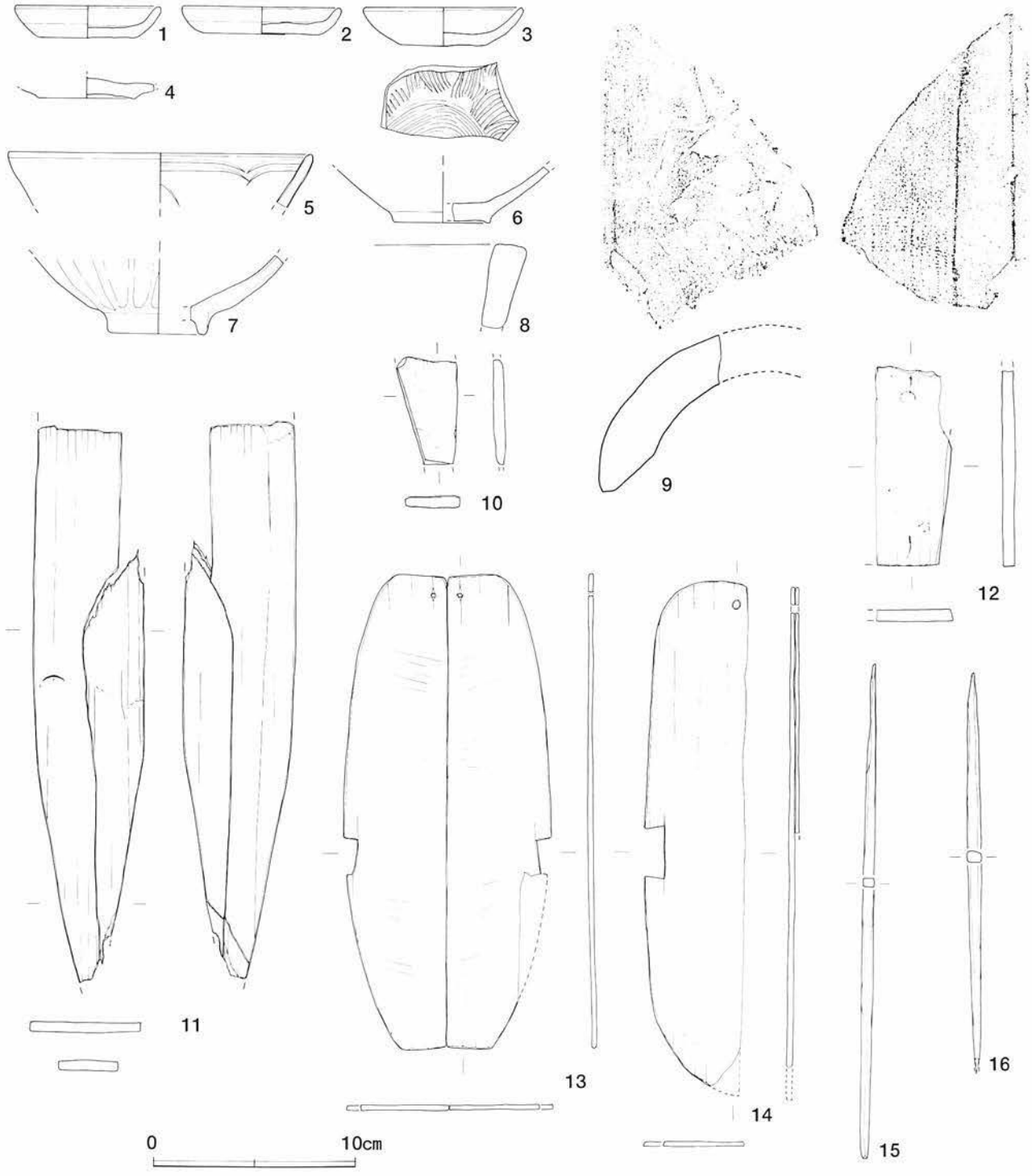


図17　溝４出土遺物（１）

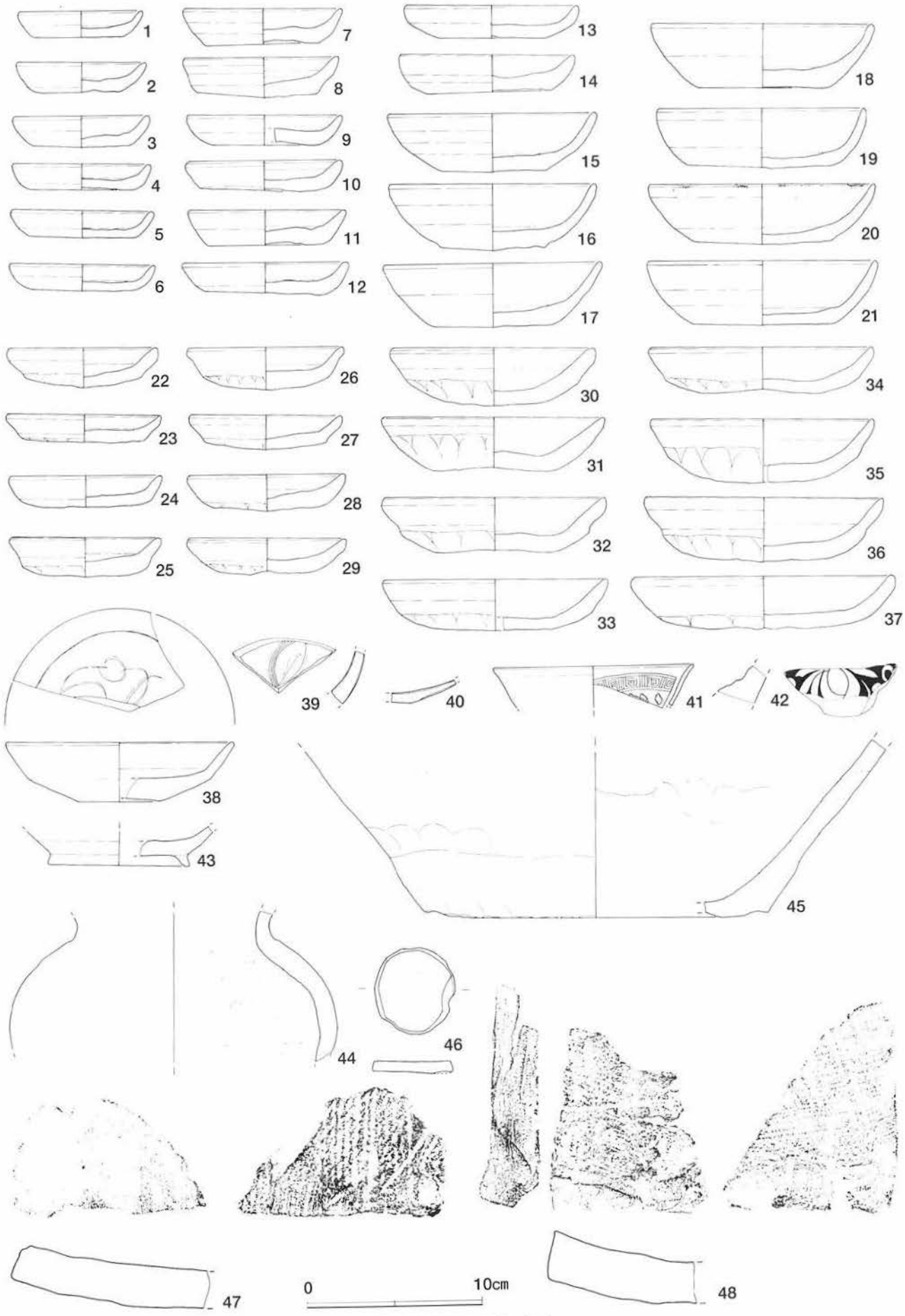

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
0
10cm

図18　溝５出土遺物（１）

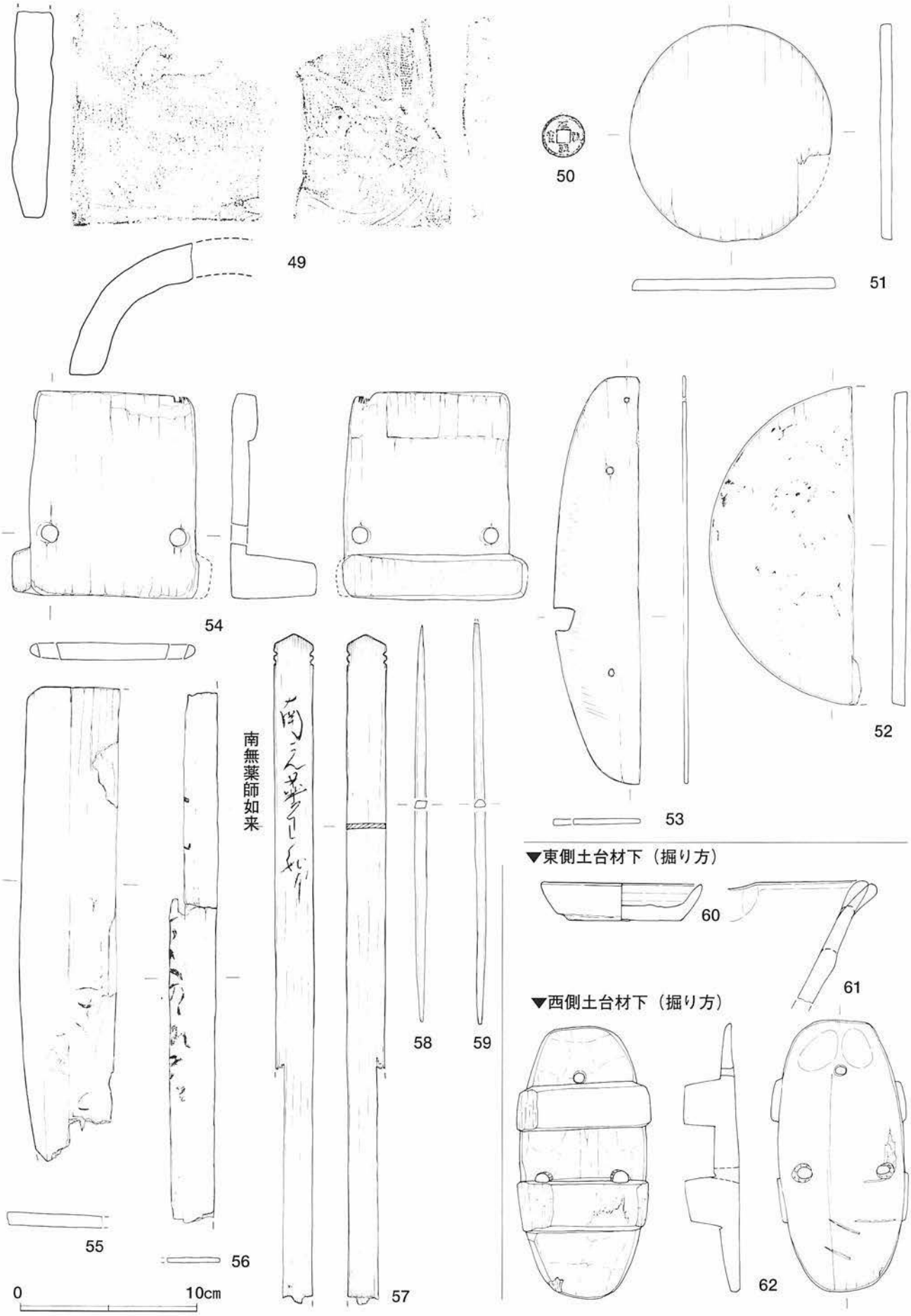

49
50
51
52
53
54
南無薬師如来
55
56
57
58
59
▼東側土台材下（掘り方）
60
61
▼西側土台材下（掘り方）
62
0
10cm

図19　溝５出土遺物（２）

図6		
1	肥　前 染付碗	法量　高台径5.5cm　　素地　白色　　砂粒やや多いが緻密　　染付　明青色顔料　　手描きの文様　　底裏に「宣明年製」
2	肥　前 染付碗	法量　口径11.6cm　　素地　淡灰白色　　砂粒やや多いが緻密　　染付　灰青色顔料　　手描き植物文
3	擂　鉢	胎土　灰色　　砂粒　白色粒　小石　　色調　淡茶褐色

表1　近世耕作土層出土遺物

図7		
1	有　田 青磁碗	法量　口径10.7cm　　素地　白色　　緻密　　釉薬　淡緑白色　半透明 備考　17ｃ中葉～末
2	肥　前 染付碗	法量　高台径5.5cm　　素地　乳白色　　砂粒多く含みややきめが粗い　　染付　淡青色顔料　　手描きの文様
3	砥　石	法量　長33.0cm　幅12.2cm　厚9.3～13.0cm　　色調　灰色　　備考　全面に使用痕あり
4	木製品 曲物底板	法量　径11.2cm　厚0.5cm
5	木製品 下駄	法量　残存長15.2cm　幅7.0cm　厚1.0～3.0cm　　備考　歯部欠損、差込式歯部
6	木製品 組　物	法量　長12.3cm　幅1.5cm　厚1.3cm　　枘2.2cm×0.5cm　　備考　用途不明　釘穴1箇所

表2　井戸1出土遺物

図12		
1	かわらけ	法量　口径9.0cm　底径7.2cm　器高2.15cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母　白針　　色調　明橙色
2	女　瓦	法量　　厚2.5cm　　凹面　布目痕　　凸面　やや粗めの離れ砂若干付着　縦位ナデ 胎土　明灰色　砂粒　白色粒　小石　良土　　色調　灰黒色
3	かわらけ	法量　口径9.8cm　底径7.2cm　器高1.9cm　　せいけい　ロクロ　　胎土　微砂　雲母　赤色粒　　色調　淡橙灰色
4	かわらけ	法量　口径8.5cm　底径7.3cm　器高2.1cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　白針　色調　橙色
5	木製品 曲物底板	法量　径18.0cm　厚0.5～1.0cm
6	木製品 箸	法量　長20.0cm　幅0.6cm　厚0.4cm
7	白　磁 碗	素地　白色　　緻密　　釉薬　淡黄灰白色
8	かわらけ	法量　口径9.2cm　底径7.3cm　器高1.7cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　白針　色調　灰白色
9	かわらけ	法量　口径13.5cm　底径9.6cm　器高2.5cm　　せいけい　ロクロ　　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　色調　暗橙色
10	青　磁 碗	法量　高台径6.0cm　　素地　灰白色　　微砂粒含むがきめ細かい　　釉薬　灰緑色　透明 備考　龍泉窯
11	かわらけ	法量　口径8.6cm　底径5.8cm　器高2.2cm　　せいけい　ロクロ　　胎土　微砂　白針　色調　淡橙灰色

表3　土壙出土遺物（1）

12	かわらけ	法量　口径8.9cm　底径7.2cm　器高1.6cm　　せいけい　ロクロ　　胎土　微砂　白針赤色粒　色調　暗橙色
13	かわらけ	法量　口径13.0cm　底径6.1cm　器高3.8cm　　せいけい　ロクロ　　胎土　微砂　白針色調　暗橙色
14	かわらけ	法量　口径12.2cm　底径10.2cm　器高3.5cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母色調　淡橙色

表4　土壙出土遺物（2）

図8		
1	瀬戸美濃 染付皿	法量　口径14.6cm　高台径9.3cm　器高4.5cm　　胎土　白色　　きめ細かい 染付　明青色顔料　　銅板転写の植物文
2	肥　前 染付仏飯器	法量　高台径4.0cm　　素地　淡灰白色　　緻密　　染付　灰青色顔料　　手描きの植物文
3	瀬　戸 白磁碗	法量　口径11.2cm　高台径4.2cm　器高5.6cm　　素地　白色　　堅緻　　釉薬　白色　透明 備考　近・現代
4	瀬戸美濃 香　炉	法量　口径12.8cm　高台径8.5cm　器高5.0cm　　胎土　黄白色　　きめ細かい 釉薬　青味灰緑色～赤褐色
5	瀬　戸 徳　利	法量　口径2.3cm　底径10.6cm　器高25.0cm　　胎土　黄灰色　　砂粒　赤色粒　きめ細かい　釉薬　黄灰褐色　　備考　肩部分に1箇所穿孔あり（ヒモ通しの穴？）

表5　溝1出土遺物

図9		
1	かわらけ	法量　口径7.0cm　底径6.0cm　器高2.3cm　　せいけい　ロクロ　　胎土　微砂　雲母　小石　白色粒　　色調　黄灰色
2	かわらけ	法量　口径9.4cm　底径6.6cm　器高3.3cm　　せいけい　ロクロ　　胎土　微砂　雲母　小石　白色粒　赤色粒　　色調　暗橙灰色
3	青磁 碗	法量　高台径(6.3)cm　　素地　黄灰色　　緻密　　釉薬　暗灰緑色　透明 備考　見込に「金玉満堂」
4	白　磁 口兀皿	法量　底径5.5cm　　素地　白色　　緻密　　釉薬　淡灰白色　半透明
5	美　濃 白天目茶碗	法量　口径11.0cm　　胎土　淡黄白色　　微砂粒　白色粒　気孔を含む 釉薬　黄白色　やや厚め
6	瀬戸美濃 擂　鉢	法量　口径(34.8)cm　緑帯幅2.0cm　　胎土　黄白色　　砂粒　白色粒　きめ細かい 釉薬　明茶褐色
7	瀬戸美濃 擂　鉢	法量　底径(8.0)cm　　胎土　黄白色　　やや紛質　　釉薬　赤味がかった灰黒色
8	瀬戸美濃 擂　鉢	法量　底径(11.5)cm　　胎土　淡黄白色　　ボソボソしている　釉薬　茶褐色
9	手焙り 瓦　質	胎土　黄味がかった白色　　紛質　　色調　灰色　　備考　器表に黒色漆が塗布
10	漆　器 皿？	法量　口径12.8cm　底径6.3cm　器高0.6cm　　文様　手描きで中央に碁石をのせた碁盤を配し、上位に梅花文、下位に石風のものを表現　周囲には鳥様のものが描かれる　　備考　黒漆地に赤色漆と光沢のない赤色漆の二種で内面のみに漆絵される　　器肉が薄く極めて器高の低い皿状の製品で茶卓様のもの　　囲碁の絵から碁笥の蓋の可能性もある
11	木製品 曲物蓋板	法量　径11.2cm　厚6.8cm　　備考　周縁は斜めに面取りを施す　　中央近くに径0.8cmの穿孔その直線状に3箇所小孔あり　　周縁近くに樹皮紐

表6　溝2出土遺物

図14		
1	かわらけ	法量　口径7.2cm　底径4.9cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　小石　色調　淡灰褐色
2	かわらけ	法量　口径7.4cm　底径4.8cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 白色粒　色調　暗黄灰色
3	かわらけ	法量　口径7.5cm　底径5.1cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　色調　灰褐色
4	かわらけ	法量　口径7.4cm　底径4.4cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　色調　灰褐色
5	かわらけ	法量　口径7.8cm　底径5.1cm　器高2.0cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 色調　暗黄灰色
6	白かわらけ	法量　口径8.0cm　底径8.2cm　器高1.1cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　色調　白色
7	かわらけ	法量　口径6.5cm　底径4.4cm　器高2.2cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　色調　灰褐色
8	かわらけ	法量　口径7.3cm　底径4.9cm　器高2.3cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　色調　淡灰褐色
9	かわらけ	法量　口径7.1cm　底径4.8cm　器高2.3cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 色調　橙色
10	かわらけ	法量　口径7.5cm　底径4.8cm　器高2.6cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 色調　灰褐色
11	かわらけ	法量　口径8.4cm　底径6.6cm　器高2.3cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　色調　橙灰色
12	かわらけ	法量　口径9.4cm　底径5.7cm　器高2.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　小石　色調　淡灰褐色
13	かわらけ	法量　口径10.5cm　底径7.6cm　器高2.6cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　色調　淡橙色
14	かわらけ	法量　口径10.6cm　底径6.0cm　器高3.5cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　色調　橙色
15	かわらけ	法量　口径11.0cm　底径7.0cm　器高3.0cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　色調　橙灰色
16	かわらけ	法量　口径11.4cm　底径8.6cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　色調　淡橙灰色
17	かわらけ	法量　口径12.8cm　底径7.7cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 白色粒　色調　淡橙灰色
18	かわらけ	法量　口径11.6cm　底径6.6cm　器高3.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　小石　色調　淡橙色
19	かわらけ	法量　口径11.6cm　底径6.5cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 色調　灰褐色
20	かわらけ	法量　口径12.2cm　底径7.9cm　器高3.0cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 色調　暗黄灰白色
21	かわらけ	法量　口径12.4cm　底径6.4cm　器高3.5cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 白色粒　色調　暗橙灰色
22	かわらけ	法量　口径14.0cm　底径9.8cm　器高3.6cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針 赤色粒　色調　淡橙灰色

表7　溝3出土遺物（1）

図14		
23	青　磁 皿	法量　口径10.5cm　　素地　灰白色　　堅緻　　釉薬　灰緑色　不透明
24	青　磁 折縁鉢	法量　口径16.0cm　　素地　灰白色　　堅緻　　釉薬　青灰色　不透明　　貫入あり
25	白　磁 口兀皿	法量　口径8.8cm　　素地　灰白色　　堅緻　　釉薬　灰緑色　不透明
26	瀬　戸 折縁鉢	胎土　灰色　　きめ細かい　　釉薬　黄緑灰色
27	瀬　戸 入　子	法量　口径6.5cm　底径3.8cm　器高2.3cm　　せいけい　ロクロ　　輪花　　胎土　微砂気孔を含む　緻密　色調　灰白色　　備考　外底部は糸切り後に粘土粒を貼り付けて三脚とする　　内底面に赤色物質付着　紅皿に使用か
28	瀬　戸 入　子	法量　口径4.6cm　底径3.3cm　器高1.4cm　　せいけい　ロクロ　　輪花　　胎土　黒色粒子　色調　灰色　　備考　淡灰緑色の自然釉の降灰が口縁から内壁にあり
29	常　滑 捏　鉢	胎土　砂粒　長石粒　石英粒　赤色粒　小石　　色調　茶褐色
30	常　滑 甕	法量　口径（44.0)cm　緑帯幅1.5cm　　胎土　砂粒　長石粒　雲母　白色粒　小石 色調　内面　茶褐色　　外面　灰色
31	擦り常滑	胎土　砂粒　長石粒　赤色粒　小石　　色調　暗茶褐色　　備考　甕片を転用　　割れ口2面を砥面として使用
32	手焙り	胎土　灰白色　　小石・砂粒を多く含む粗土　　色調　灰黒色
33	女　瓦	法量　厚1.9cm　　凹面　黒色微砂の離れ砂付着　縦位ナデ　　凸面　黒色微砂の離れ砂付着　　胎土　黄白色　砂粒・黒色粒を多く含む粗土　　色調　灰黒色
34	女　瓦	法量　厚2.3cm　　凹面　黒色微砂の離れ砂付着　　凸面　黒色微砂の離れ砂付着 胎土　灰白色　小石・赤色粒を多く含む粗土　　色調　灰黒色
35	骨製品 笄	法量　残存長9.6cm　幅1.4cm　厚0.4cm　　色調　暗黄灰色
36	漆　器 皿	法量　口径9.4cm　底径7.4cm　器高1.0cm　　文様　手描きの梅花　　備考　黒色系漆の上塗に赤色漆で漆絵される
37	漆　器 椀	文様　手描きの梅の花と葉？　　備考　黒色系漆の上塗に赤色漆で漆絵される
図15		
38	漆　器 椀	法量　口径14.2cm　底径6.3cm　器高3.2cm　　文様　内面　水辺の亀と鶴の情景　　外面　亀と二羽の鶴の組合せを三分割した形で描く　備考　黒色系漆の上塗に赤色漆で漆絵される
39	漆製品 盆	法量　残存長14.3cm　残存幅3.2cm　厚0.5cm　　備考　角は雲形状に削られる　黒色系漆の上塗に赤色漆で菊花印判施文
40	漆製品 雲　形	法量　幅8.0cm　厚さ0.3cm～0.8cm　　備考　本体との接合部分以外は黒色系漆塗布
41	木製品 灯明台	法量　厚さ0.7cm　　備考　台木の受け　　灯明皿をのせた部分に焼痕あり
42	木製品 下　駄	法量　残存長16.7cm　残存幅4.4cm　厚1.2cm　　備考　歯部欠損
43	木製品 有孔円盤状	法量　径5.4cm　厚1.3cm　孔径0.5cm　　備考　下面は削り（小刀）で平らに成形　上面は断面　カマボコ形になるように小刀での細かな削りを施す　防水車か？
44	木製品 折　敷	法量　残存長12.3cm　幅4.9cm　厚0.2cm　　備考　墨書あり　判読不明

表8　溝3出土遺物（2）

図15		
45	木製品 曲　物	法量　残存長2.0cm　厚0.2～0.4cm
46	木製品 曲物底板	法量　径(17.2)cm　厚0.7cm
47	木製品 曲物底板	法量　径(16.5)cm　厚0.7cm
48	木製品 円盤状蓋	法量　径(30.8)cm　厚0.6cm　　備考　両面に黒漆付着
49	木製品 用途不明	法量　残存長14.0cm　残存幅1.1cm　残存厚0.2cm　孔径6.4cm
50	漆製品 箸	法量　長20.3cm　幅0.7～0.9cm　厚0.7～0.8cm　備考　全体の半分くらいに黒色系漆が残る
51	木製品 箸　状	法量　長21.0cm　幅1.0cm　厚0.7cm　　備考　加工途中か？
52	木製品 錐柄？	法量　残存長18.5cm　径1.4cm　備考　先端に焼痕あり
53	木製品 用途不明	法量　長23.4cm　幅2.4cm　厚0.3cm　　備考　上部半分くらいにやや規則性のある擦痕あり 呪術具か？
54	木製品 箸	法量　残存長26.0cm　幅0.7cm　厚0.5cm
55	木製品 箸	法量　長22.3cm　幅0.6cm　厚6.5cm
56	木製品 箸	法量　長22.4cm　幅0.7cm　厚0.5cm
57	木製品 箸	法量　残存長21.0cm　幅0.6cm　厚0.6cm
58	木製品 箸	法量　残存長19.9cm　幅0.7cm　厚0.5cm
59	木製品 箸	法量　長20.5cm　幅0.5cm　厚0.5cm
60	木製品 箸	法量　長19.1cm　幅0.7cm　厚0.5cm
61	木製品 箸	法量　長17.4cm　幅0.7cm　厚0.5cm
62	木製品 箸	法量　長17.5cm　幅0.6cm　厚0.5cm
図16		
63	木製品 木　簡	法量　長51.2cm　残存幅4.8cm　厚0.2～0.6cm　　備考　墨書あり「一丈…」以下判読不明

表9　溝3出土遺物（3）

図17		
1	かわらけ	法量　口径7.2cm　底径4.8cm　器高1.6cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　淡橙色
2	かわらけ	法量　口径7.8cm　底径5.6cm　器高1.4cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　淡橙色
3	かわらけ	法量　口径7.8cm　底径4.3cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白色粒　赤色粒　色調　暗橙白色
4	白かわらけ	法量　底径4.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　赤色粒　色調　淡橙白色
5	青　磁 碗	法量　口径15.0cm　素地　灰色　堅緻　釉薬　暗灰緑色　半透明　備考　劃花文
6	青　磁 碗	法量　底径(4.8)cm　素地　灰色　堅緻　釉薬　水青色　透明
7	青　磁 碗	法量　高台径(4.7)cm 素地　灰色　堅緻　釉薬　淡緑色　不透明　貫入あり　若干気泡を含む
8	手焙り	胎土　灰白色　砂粒　雲母　白色粒　色調　淡橙灰白色
9	男　瓦	法量　厚2.6cm　凹面　布目紺　黒色微砂の離れ砂若干付着　凸面　縦位ナデ　縄叩き目　胎土　暗灰色　微砂　白色粒　良土　色調　灰黒色
10	砥　石	法量　残存長5.1cm　幅2.7cm　厚0.6cm　色調　乳白色　備考　細かい刃物痕あり
11	木製品 木　簡	法量　残存長27.5cm　幅5.5cm　厚0.5cm　備考　墨書あり　判読不明
12	木製品 用途不明	法量　残存長9.6cm　残存幅3.7cm　厚0.6cm　備考　下方に削りによる成形あり　墨書あり　判読不明
13	木製品 板草履	法量　長23.5cm　幅10.3cm　厚0.2cm
14	木製品 板草履	法量　長(25.3)cm　幅5.0cm　厚0.3～0.5cm
15	木製品 箸	法量　長24.5cm　幅0.55cm　厚0.45cm
16	木製品 箸	法量　残存長19.1cm　幅0.7cm　厚0.6cm

表10　溝4出土遺物

図18		
1	かわらけ	法量　口径7.0cm　底径5.0cm　器高1.5cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　暗黄灰色
2	かわらけ	法量　口径7.3cm　底径4.4cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　淡橙白色
3	かわらけ	法量　口径7.6cm　底径5.6cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　淡橙色
4	かわらけ	法量　口径7.8cm　底径5.8cm　器高1.5cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　色調　暗黄灰白色
5	かわらけ	法量　口径8.0cm　底径6.0cm　器高1.6cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　色調　暗黄灰色
6	かわらけ	法量　口径8.2cm　底径5.8cm　器高1.5cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　暗黄灰色
7	かわらけ	法量　口径9.0cm　底径6.5cm　器高2.0cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　色調　暗黄灰色
8	かわらけ	法量　口径8.5cm　底径6.8cm　器高2.3cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　淡橙灰色
9	かわらけ	法量　口径8.0cm　底径6.0cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　暗黄灰白色
10	かわらけ	法量　口径8.5cm　底径7.4cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　雲母　白針　色調　淡灰褐色
11	かわらけ	法量　口径8.7cm　底径6.6cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　色調　淡橙灰色
12	かわらけ	法量　口径9.4cm　底径6.6cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　暗黄灰白色
13	かわらけ	法量　口径9.8cm　底径6.0cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　暗黄灰白色
14	かわらけ	法量　口径9.7cm　底径7.3cm　器高2.1cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　淡橙灰色
15	かわらけ	法量　口径11.8cm　底径6.0cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　色調　暗橙灰色
16	かわらけ	法量　口径11.8cm　底径5.9cm　器高3.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　色調　暗橙灰褐色
17	かわらけ	法量　口径12.4cm　底径6.8cm　器高3.6cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　暗橙灰白色
18	かわらけ	法量　口径12.6cm　底径7.2cm　器高3.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　色調　暗黄灰白色
19	かわらけ	法量　口径11.8cm　底径8.4cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　色調　淡橙色
20	かわらけ	法量　口径12.8cm　底径7.7cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　色調　暗黄灰色
21	かわらけ	法量　口径13.0cm　底径8.0cm　器高3.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　色調　淡橙色
22	かわらけ	法量　口径(9.1)cm　底径7.0cm　器高2.2cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　色調　淡橙灰色

表11　溝5出土遺物（1）

図18		
23	かわらけ	法量　口径8.6cm　底径6.9cm　器高1.5cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　　色調　淡橙灰色
24	かわらけ	法量　口径8.6cm　底径7.6cm　器高1.8cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　白色粒　　色調　淡橙色
25	かわらけ	法量　口径8.1cm　底径7.1cm　器高2.3cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　赤色粒　　色調　橙色
26	かわらけ	法量　口径8.6cm　底径7.2cm　器高2.4cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　赤色粒　　色調　淡橙灰色
27	かわらけ	法量　口径8.6cm　底径7.2cm　器高2.0cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　　色調　淡橙色
28	かわらけ	法量　口径8.6cm　底径7.2cm　器高2.1cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　　色調　淡灰茶褐色
29	かわらけ	法量　口径8.2cm　底径7.0cm　器高1.9cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　　色調　淡橙灰色
30	かわらけ	法量　口径11.3cm　底径9.9cm　器高3.3cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　赤色粒　　色調　灰褐色
31	かわらけ	法量　口径12.4cm　底径11.4cm　器高2.9cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　赤色粒　　色調　淡橙灰色
32	かわらけ	法量　口径12.4cm　底径10.9cm　器高3.0cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　赤色粒　　色調　灰褐色
33	かわらけ	法量　口径12.6cm　底径10.8cm　器高2.9cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　赤色粒　　色調　淡灰褐色
34	かわらけ	法量　口径12.3cm　底径11.2cm　器高2.4cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　赤色粒　　色調　淡灰褐色
35	かわらけ	法量　口径12.4cm　底径11.4cm　器高3.6cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　　色調　淡橙灰褐色
36	かわらけ	法量　口径13.3cm　底径11.6cm　器高3.7cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　赤色粒　　色調　灰褐色
37	かわらけ	法量　口径14.3cm　底径12.3cm　器高2.9cm　　せいけい　手づくね　　胎土　微砂　雲母 白針　赤色粒　　色調　淡灰褐色
38	青　磁 碗	法量　口径(13.0)cm　底径(4.7)cm　器高3.4cm　　素地　暗灰色　緻密　　釉薬　淡緑色 透明　　備考　劃花文
39	青　磁 碗	素地　灰色　堅緻　　釉薬　暗灰緑色　透明　貫入あり　　備考　劃花文
40	青　磁 皿	素地　灰色　堅緻　　釉薬　水青色　透明　貫入あり　　若干気泡を含む
41	白　磁 碗	法量　口径(11.5)cm　　素地　白色　堅緻　　釉薬　青味がかった白色　透明
42	白　磁 鉄絵　四耳壺	素地　淡茶灰色　緻密　釉薬　淡黄白色　透明
43	山茶碗	法量　高台径(8.0)cm　　胎土　白色粒　小石　　色調　暗黄灰白色 備考　張り付高台
44	渥美 甕	胎土　白色　　緻密土　　色調　暗灰色

表12　溝５出土遺物（２）

図18		
45	常　滑 甕	法量　底径19.8cm　胎土　砂粒　長石粒　小石　雲母　　色調　淡橙色
46	かわらけ 円盤状	法量　径5.0cm　厚0.6cm　　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　　色調　淡橙色
47	女　瓦	法量　厚2.5cm　　凹面　布目痕　離れ砂付着　　凸面　縄目叩き　離れ砂付着　糸切り痕 胎土　砂粒　雲母　　色調　淡黄白色
48	女　瓦	法量　厚2.7cm　　凹面　離れ砂付着　糸切り痕　　凸面　縄目叩き　離れ砂付着 糸切り痕　　胎土　砂粒　　色調　暗灰色
図19		
49	男　瓦	法量　厚2.1cm　　凹面　布目痕　　端縁・側縁に幅広のケズリ　　凸面　縦位ナデ　縄目 叩き　　胎土　暗灰色　　良土　　色調　灰黒色
50	銭	
51	木製品 曲物底板	法量　長径12.2cm　短径11.5cm　厚0.6cm
52	木製品 曲物底板	法量　径18.5cm　厚0.7cm　　備考　表面に黒色物質（漆？）付着
53	木製品 板草履	法量　長径23.0cm　幅5.0cm　厚0.2～0.4cm　　備考　3ヶ所に径0.2～0.3cmの穿孔あり
54	木製品 下　駄	法量　残存長11.7cm　幅9.0～9.3cm　厚1.0cm　歯高4.0cm　歯厚1.8～2.5cm 備考　前後とも歯の外側が鋸で切断されている　理由は不明
55	木製品 木　簡	法量　残存長27.0cm　残存幅5.4cm　厚0.7cm　　備考　墨書あり　判読不明
56	木製品 木　簡	法量　残存長30.2cm　残存幅2.6cm　厚0.2～0.3cm　　備考　墨書あり　判読不明
57	木製品 笹塔婆	法量　残存長38.0cm　幅2.2cm　厚0.25cm　　備考　墨書あり　「南無薬師如来」
58	木製品 箸	法量　長22.5cm　幅0.6cm　厚0.4cm
59	木製品 箸	法量　残存長22.8cm　幅0.6cm　厚0.4cm
60	かわらけ	法量　口径9.1cm　底径6.5cm　器高2.0cm　　せいけい　ロクロ　　胎土　微砂　白針 赤色粒　　色調　暗橙色
61	山茶碗窯 捏　鉢	胎土　砂粒　長石粒　石英粒　　色調　暗灰色　　備考　片口有り
62	木製品 下　駄	法量　長15.5cm　幅7.2cm　厚1.3cm　　前歯高3.0cm　後歯高3.1cm　備考　連歯式　前緒付近の指圧痕から女性・子供用の左足と思われる

表13　溝5出土遺物（3）

第四章　まとめ

北条小町邸跡（北条泰時・時頼邸跡）に係わる発掘調査は、これまでに９ケ所（図１・20）の地点で実施されている。調査地点は主に現在の若宮大路、横大路、小町大路に面した店舗改築に伴う例で郭内の縁辺部が主体をなし、中枢部は１ケ所（図１－12）調査されているに過ぎない。しかし現大路に面した地点調査では、鎌倉時代中期以降の大路側溝やその内側に拡がる生活空間が少しづつ判明してきている。さらに側溝は、現在の鎌倉の幹線道路に沿って発見されており、かつての各大路の幅員が現在よりも広ったことが解ってきている。こうした調査成果をもとに中世都市鎌倉の街割の復元を試みる研究成果が公表されている（馬淵　1987、大三輪　1989、宗臺　1997）。今回の発掘調査では、鎌倉時代前期から近世に到るまでの若宮大路側溝を検出することができた。ここでは中世若宮大路側溝の変遷を中心に事業者負担分の調査成果も参考にしながら、その特徴と年代観を含めた概要を述べてまとめに変えたい。本地点調査では、まず調査区西辺に沿って検出された溝７（図10）が最も古く、鎌倉時代前期頃まで遡りえる大溝である。これは現在知りうる若宮大路側溝のなかで最も現大路に寄っており歩道に接して西岸が確認された。その規模は断面逆台形で上端幅3.2m、深さ1.7m程、一度浚渫された後に埋め戻されていた。上面は後に木組み構造に変移した時期の若宮大路の路面を構築している。溝７と、先後関係は厳密には不明だか同時期またはやや後出のものが、東側に平行して検出した薬研形の溝６（図10）である。この溝は第三章でも触れたように後世に開削された木組み側溝の溝３～５に上端を削平されていたが、規模は幅2.5m以上、深さ1.7m以上でＶ字形の溝であり、溝７とともに鎌倉時代前期の大路東側溝の姿を示している。この２条の溝については、本地点北方の若宮大路に面した図20の雪ノ下一丁目377番７地点でも検出されており、『吾妻鏡』にみえる八幡宮参道で最初の若宮大路の構築を示す養和二年（1182）三月十五日条（「詣往道」）から北条泰時の嘉禄元年（1225）十月四日条の丈尺制導入まで存続した側溝の可能性が指摘されている（馬淵　1996）。これらの溝は出土遺物からみて鎌倉前期に造営されたことは間違いなさそうであるが、若宮大路を挟んだ西側地域の「北条時房・顕時邸跡」郭内の大路に面した４地点の調査では、現在までのところこの時期に対応する西側溝は発見されておらず、いずれも本地点調査で検出された木組み溝と同じ構造の鎌倉時代中期～南北朝期頃までの側溝が検出されている。

ところで、これら木組みの東西側溝からは側溝の造営や修理に際し幕府が御家人に割普請したことを示す表示札で、割り当てた人名とその長さを墨書した木簡が合計６点が発見されている（馬淵　1985、田代　1990、岡　1996）。溝３～５の土台材継ぎ目付近から出土した墨書木札も判読可能な文字やその形状から推定して工事分担箇所に立てられた表示札の木簡と思われる。

［引用文献］

馬淵和雄　1985「北条泰時・時頼邸跡雪ノ下一丁目371番地点発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会

馬淵和雄　1987「北条時房・顕時邸跡雪ノ下一丁目233番９地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書３』鎌倉市教育委員会

馬淵和雄　1996「北条小町邸跡雪ノ下一丁目377番７地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12』鎌倉市教育委員会

岡　陽一郎　1996　同上報告書「人名木簡について」

大三輪龍彦　1989「鎌倉の都市計画－政治都市として・軍事都市として」石井　進・大三輪龍彦編『よみがえる中世３．武士の都鎌倉』平凡社

田代郁夫　1990「北条時房・顕時邸跡雪ノ下一丁目265番３地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』鎌倉市教育委員会

宗臺秀明　1997『北条時房・顕時邸跡雪ノ下一丁目272番地点』北条時房・顕時邸跡発掘調査団

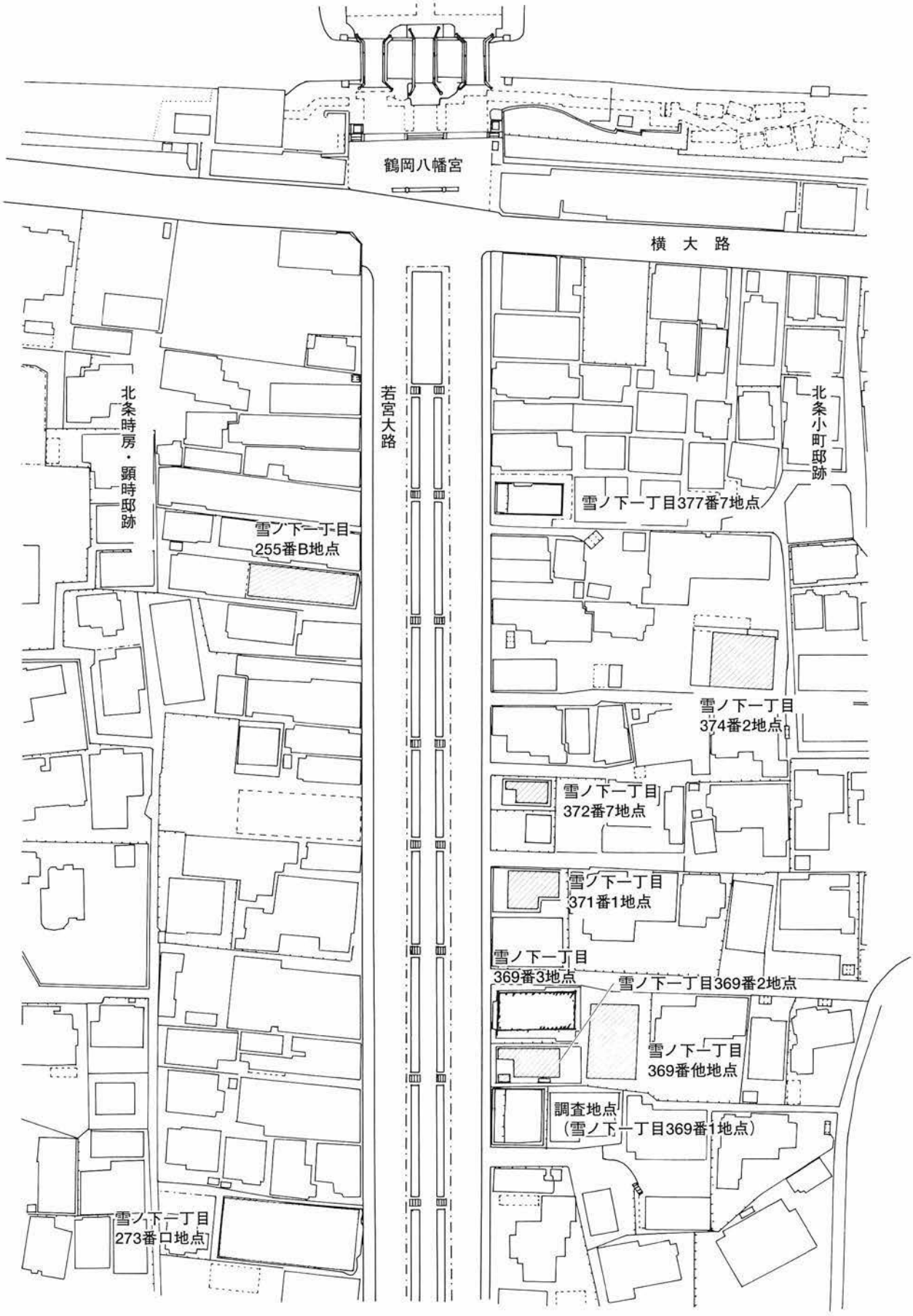
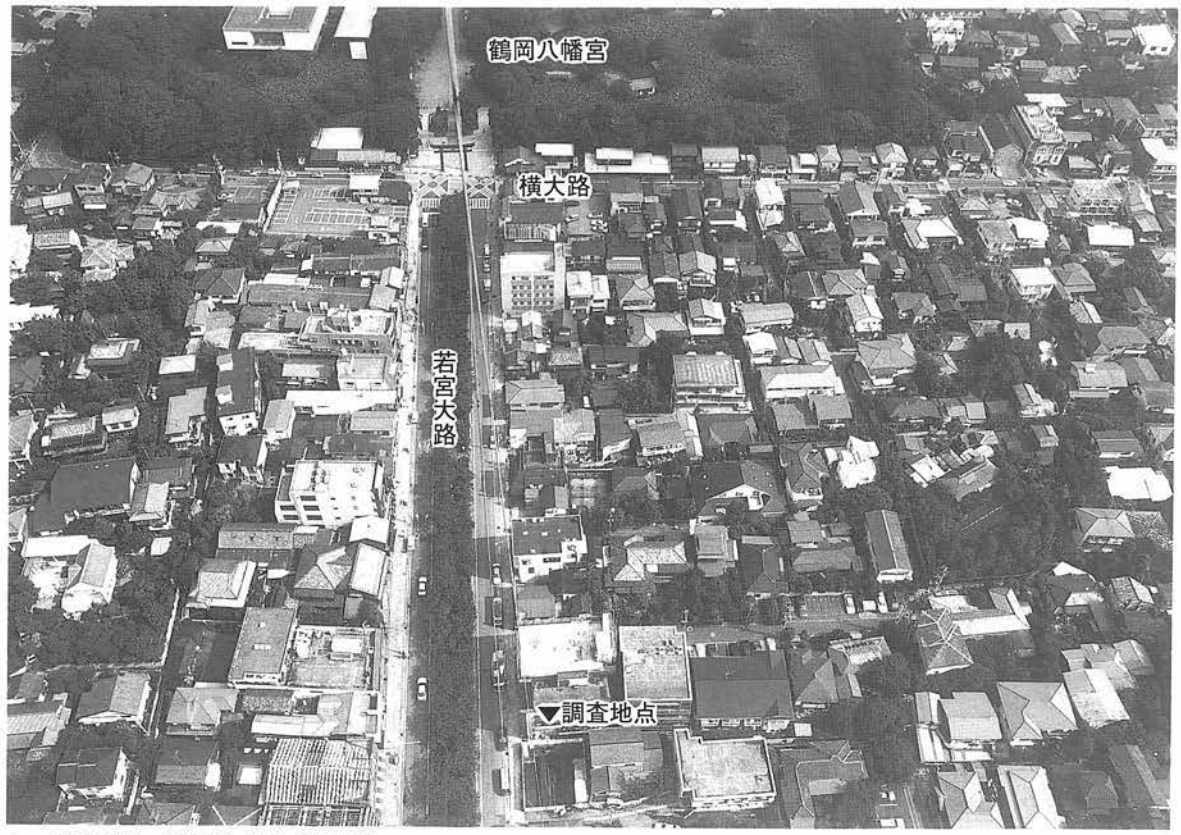
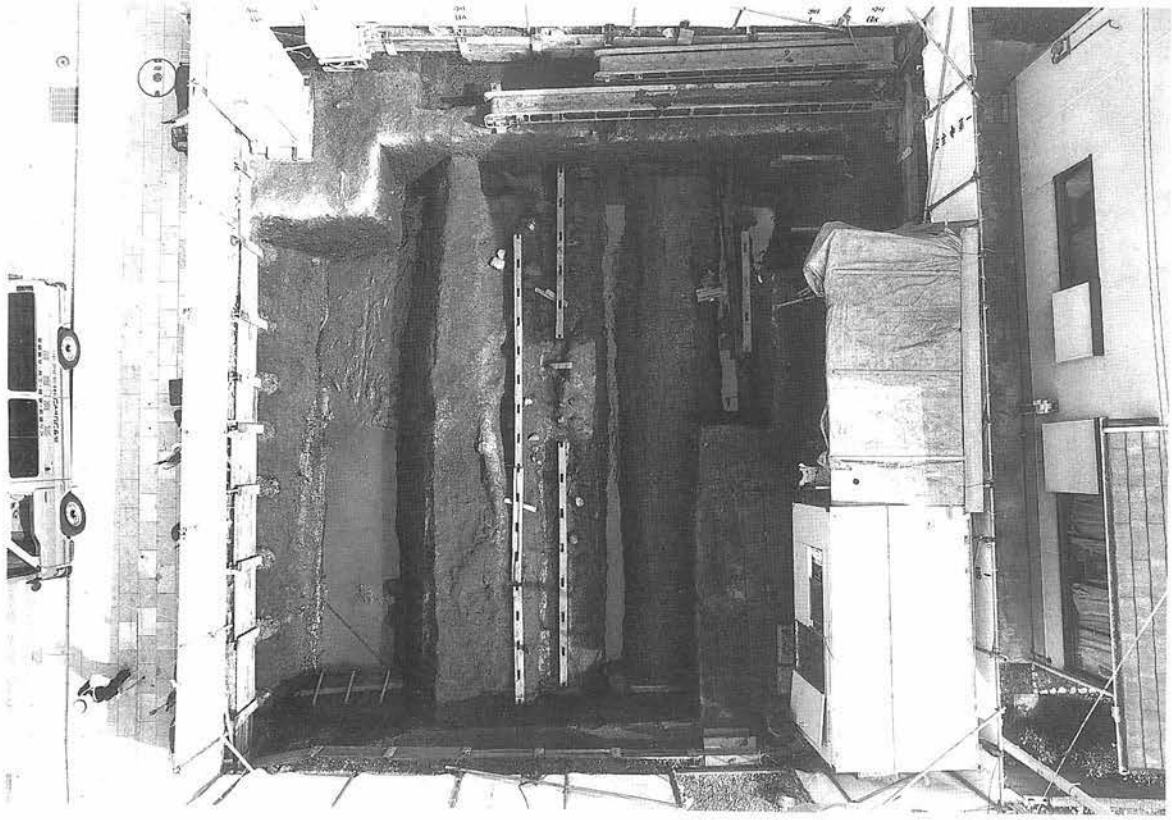

鶴岡八幡宮
横大路
若宮大路
北条時房・顕時邸跡
北条小町邸跡
雪ノ下一丁目
255番B地点
雪ノ下一丁目377番7地点
雪ノ下一丁目
374番2地点
雪ノ下一丁目
372番7地点
雪ノ下一丁目
371番1地点
雪ノ下一丁目
369番3地点
雪ノ下一丁目369番2地点
雪ノ下一丁目
369番他地点
調査地点
（雪ノ下一丁目369番1地点）
雪ノ下一丁目
273番口地点

図20　近隣の調査地点

写　真　図　版

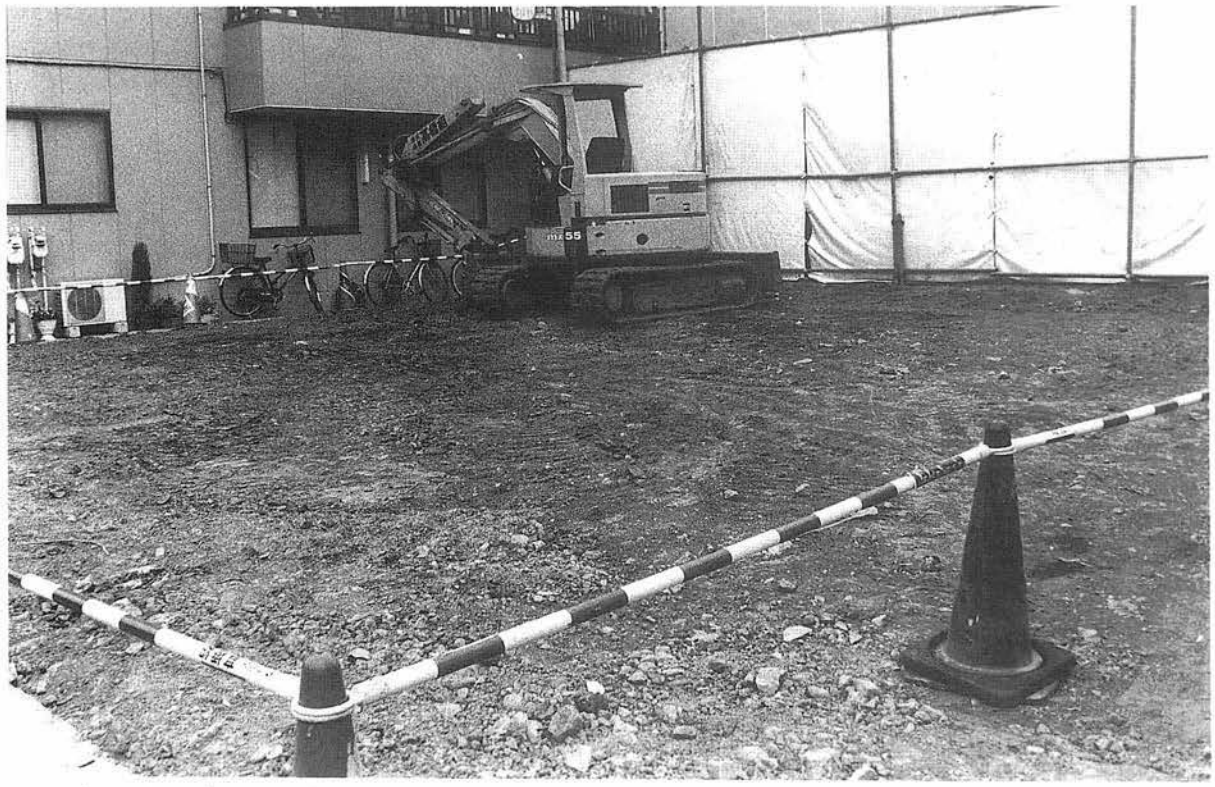


A.　空撮遠景（上空より北を望む）
　　西が若宮大路、北が横大路、東側が小町大路で、その間が北条小町邸跡の推定域。



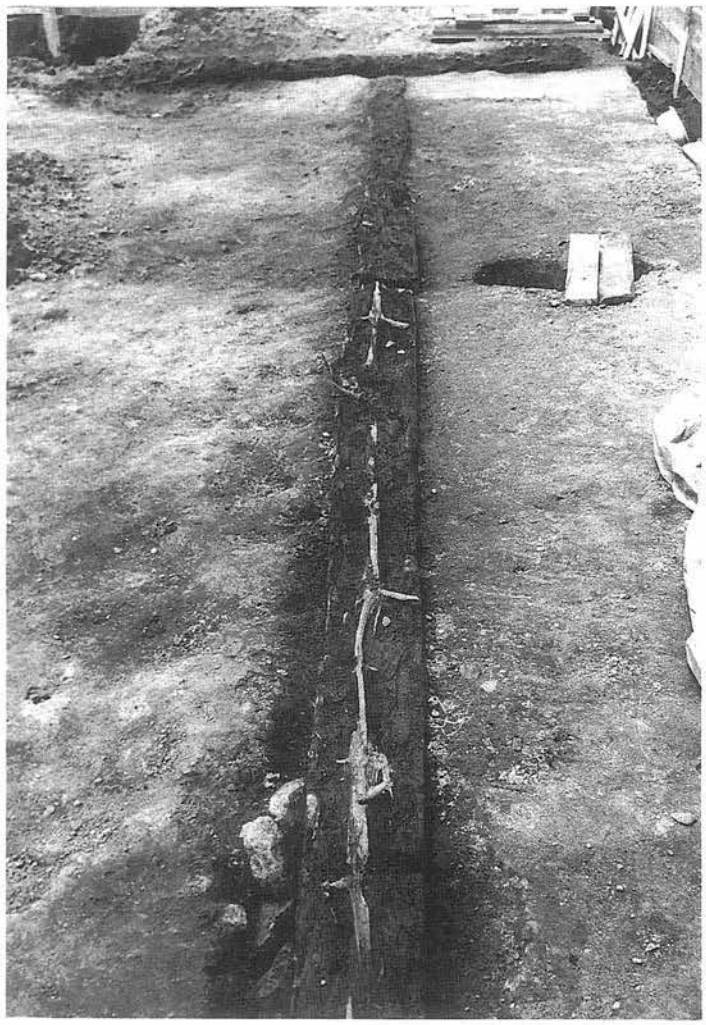
B.　空撮調査区全景（上が北）

図版 2

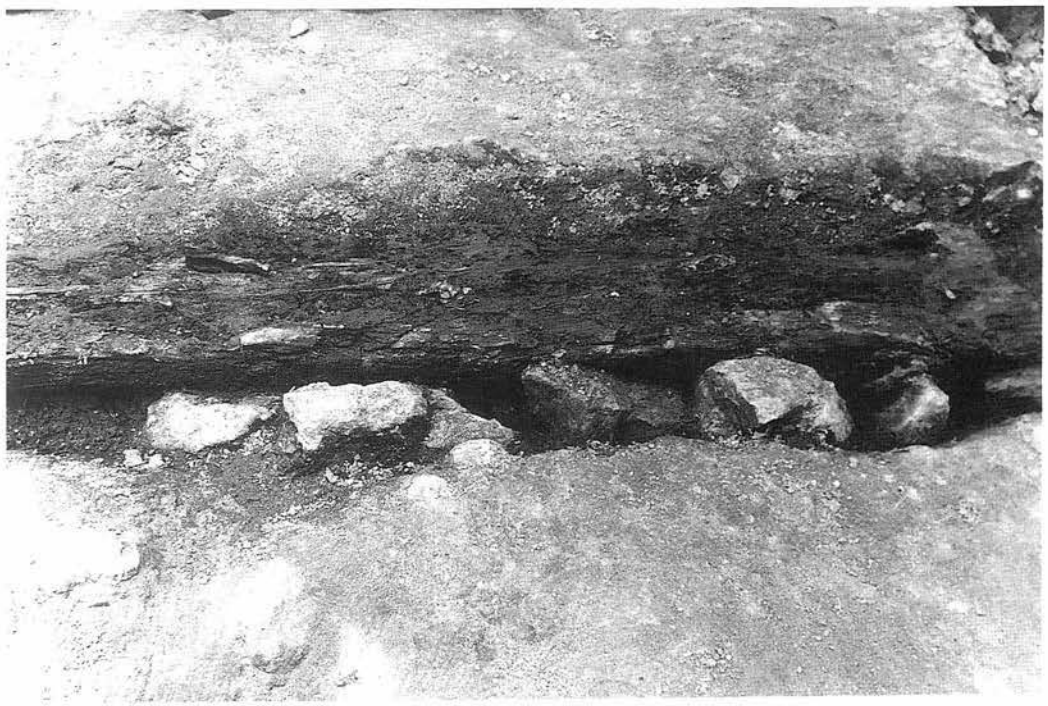


A. 調査前の状況（南西から）

B. 表土掘削風景（西から）



A.　土台状角材1～3（手前が東）

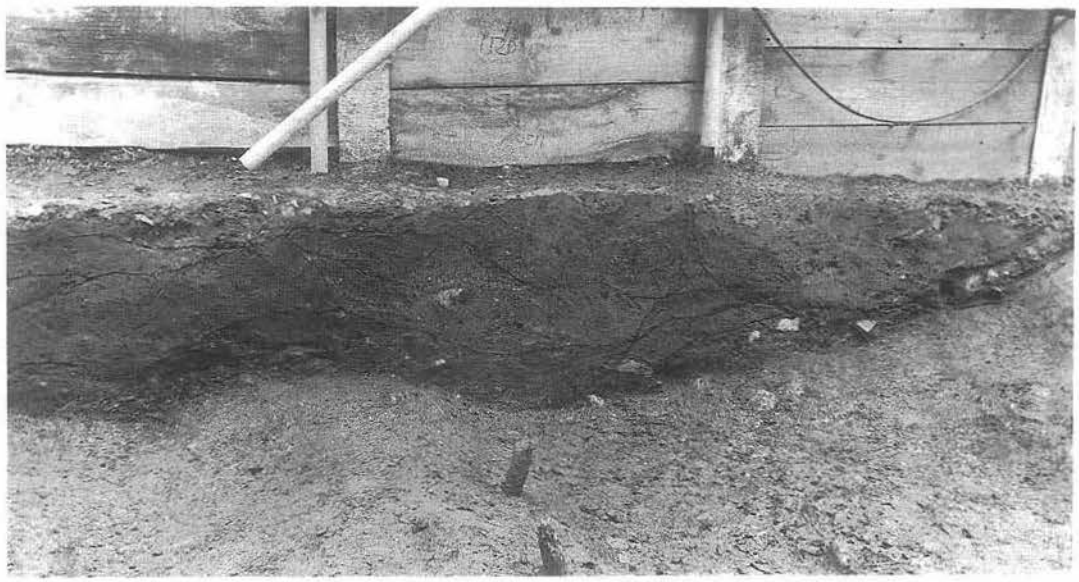


B.　同上　裏込の土丹塊（南から）
裏込に土丹塊を置いて沈下防止している。

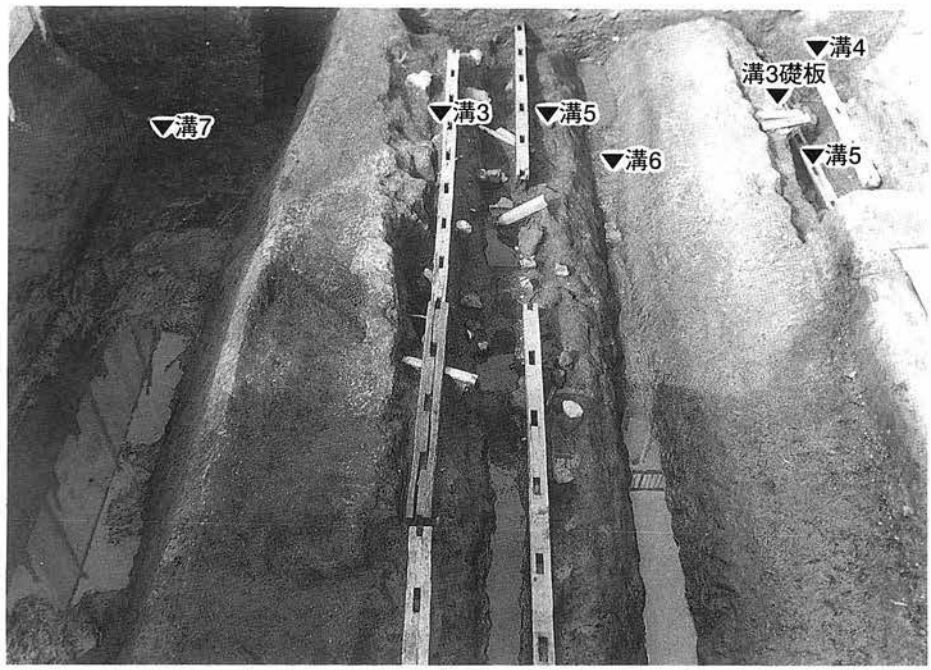
図版 4

A. 井戸1（西から）

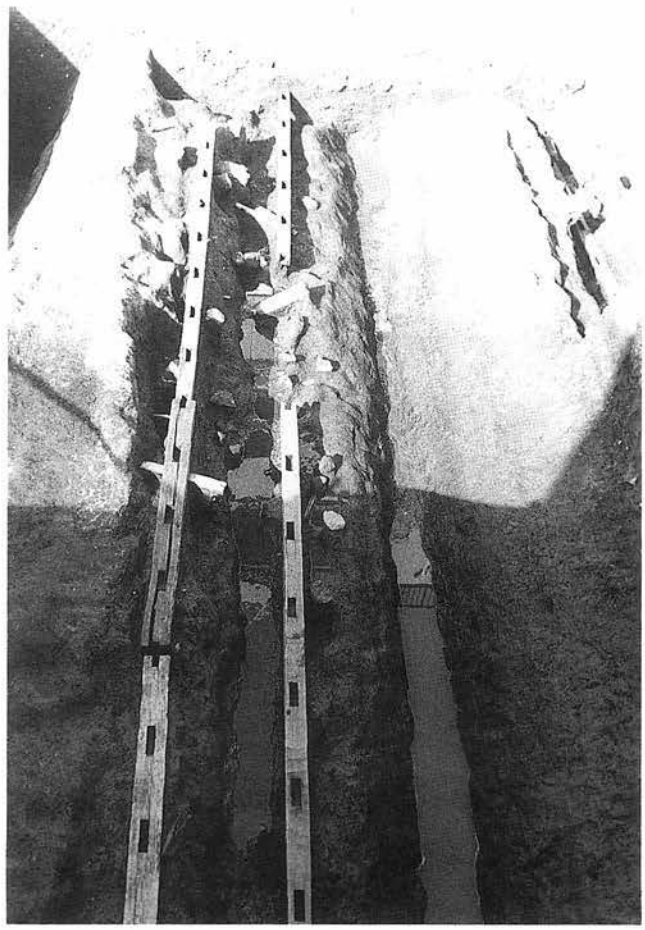
B. 溝2（南から）



C. 溝2 南壁セクション



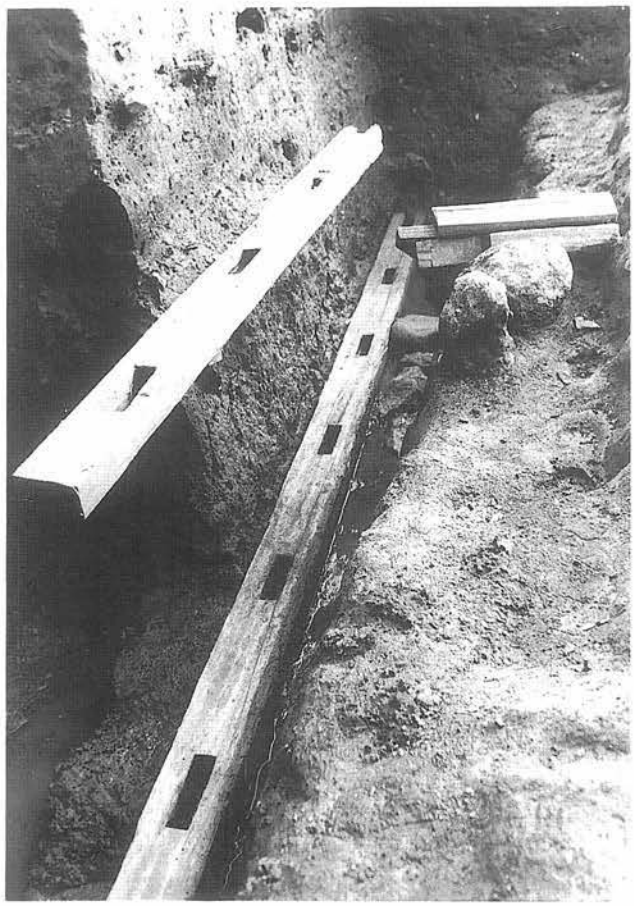
A. 若宮大路側溝（溝3～7）



B. 溝3～5（南から）

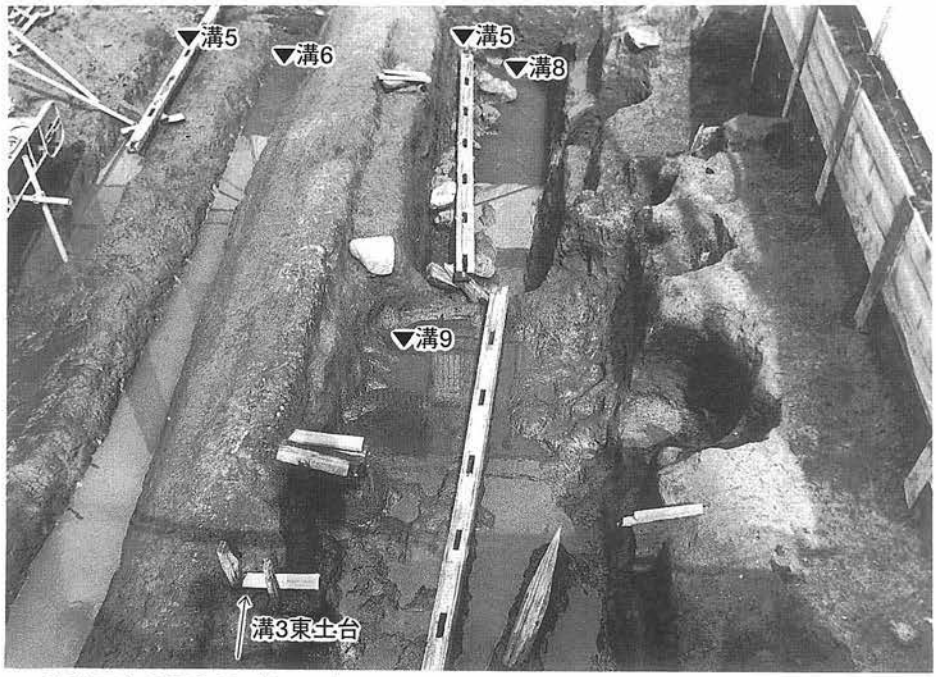
C. 溝7（南から）
西肩は現大路歩道と接し、幅3mを超える大溝。

図版 6

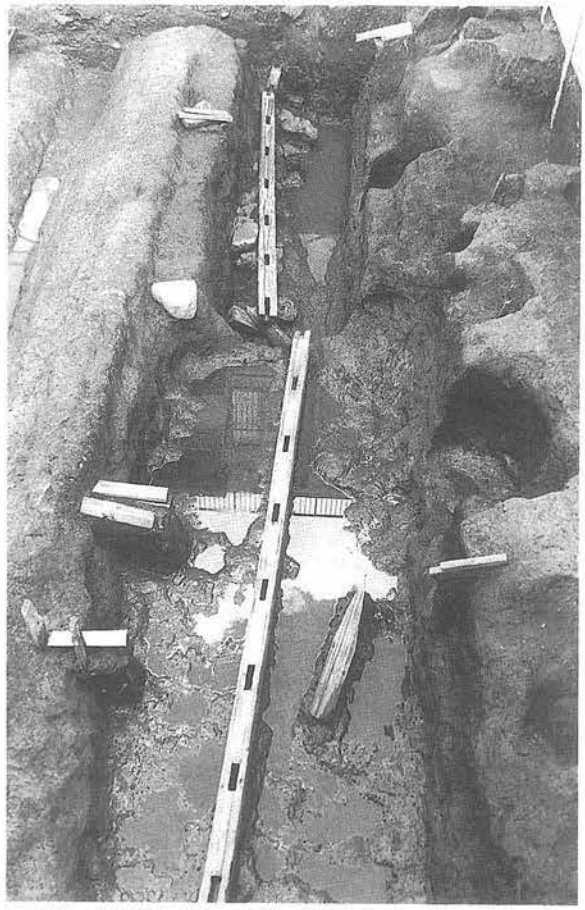


A. 溝4・5　東側土台材（北から）
土台材は上が溝4、下が溝5である。溝5東側にある礎板・礎石は溝3に伴うもの。

B. 溝3・5　西側土台材（北から）
左が溝5、右が溝3に、伴うもの。

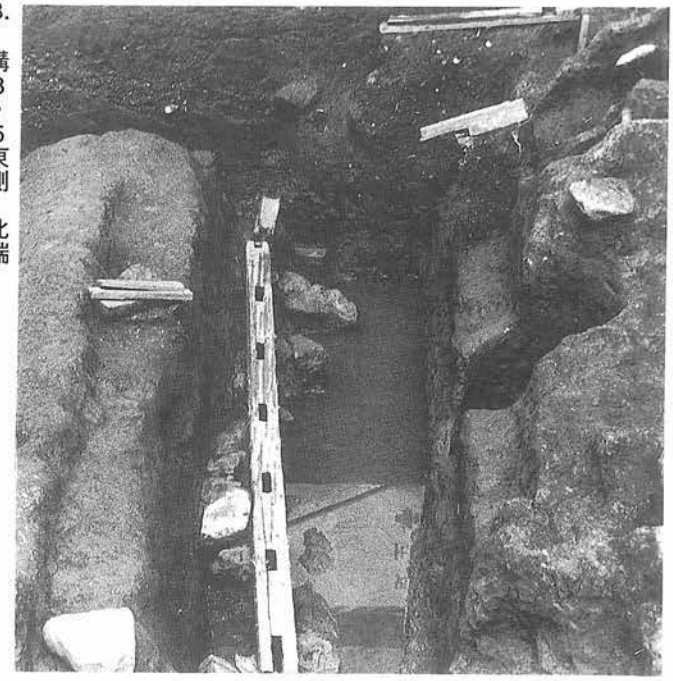


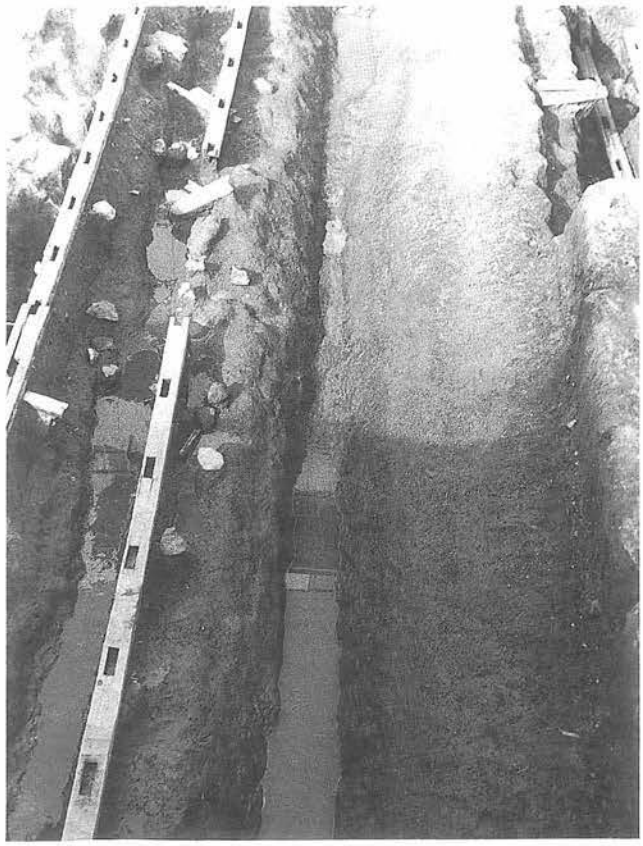
C. 調査区東半部全景（南から）
溝3土台材の位置は、矢印方向上に残る礎板・礎石や杭から推測される。



A. 溝3・5 東側（南から）

B. 溝3・5東側 北端

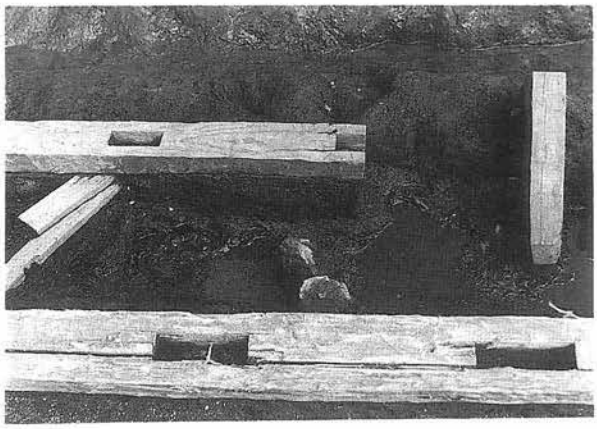




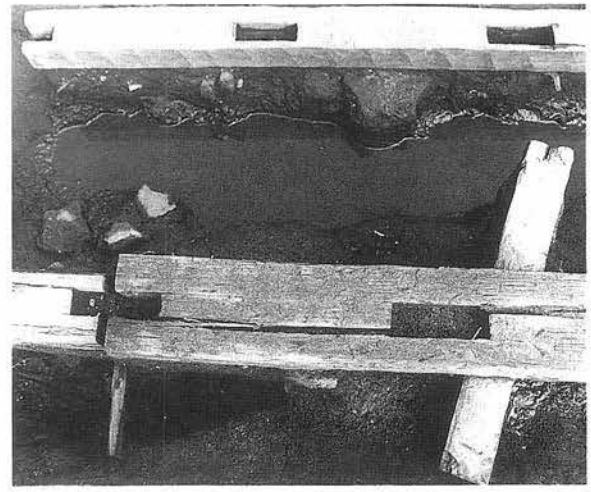
C. 溝3・5西側（南から）

D. 溝3・5西側 完掘状況

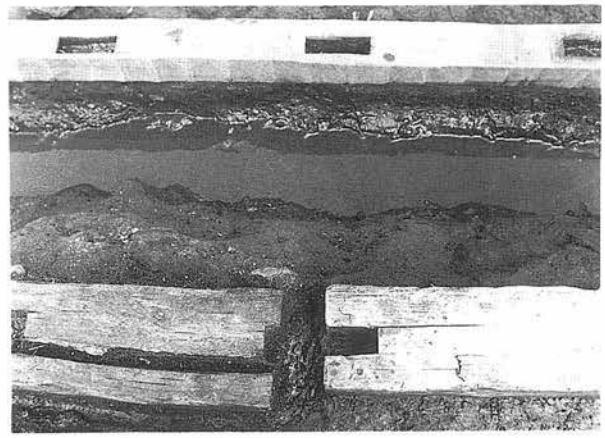
図版 8



A. 溝5土台材②　南端

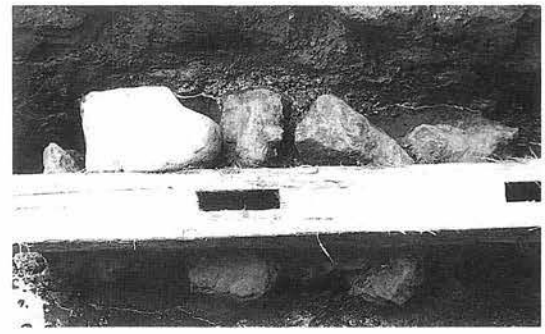


B. 溝3土台材①と②継目部

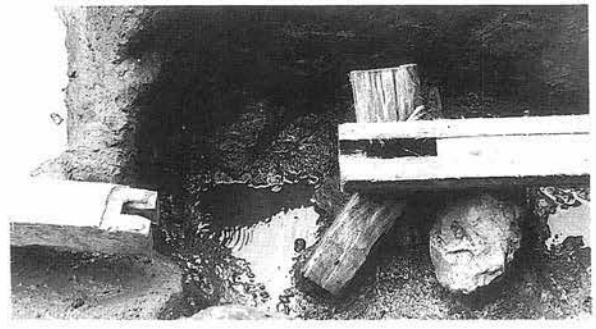


C. 溝3土台材②と③継目部
この2本は他土台材の半分の長さで、
部分補修によるものか。

D. 溝5土台材③継目部
継ぎ目は1/2の不貫通なホゾ穴からなり
欠き継の仕口で接続する。

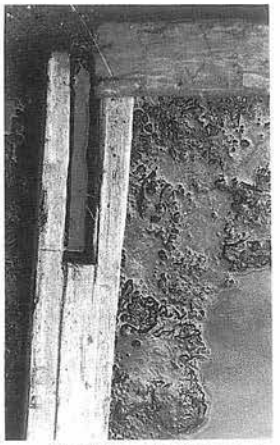


E. 溝5土台材③　裏込状況
人頭大土丹塊を土台下や両脇に詰めて根固めする。

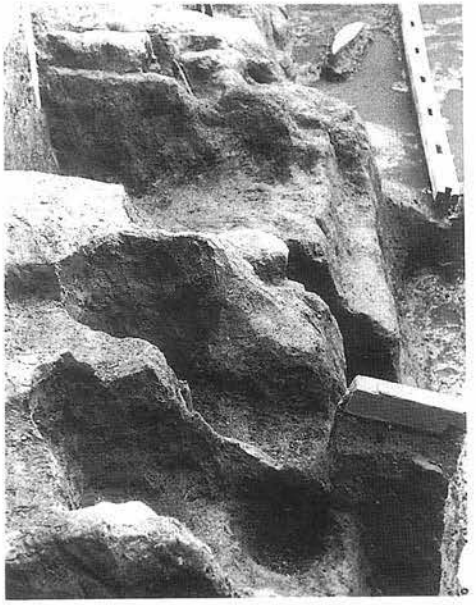


F. 溝5土台材③と④継目部
沈下防止に礎板・土丹塊を咬ます。

A. 梁材　検出状況

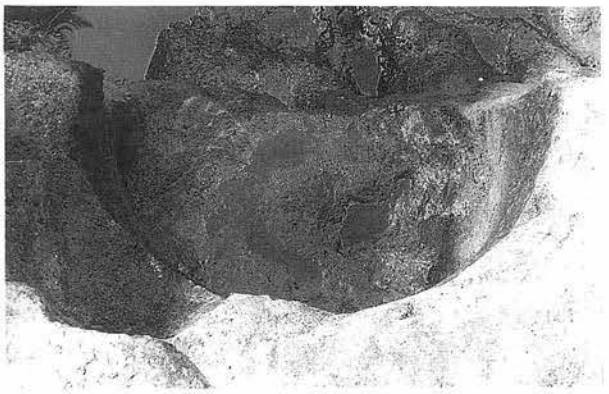


B. 梁材継目部と掘り方

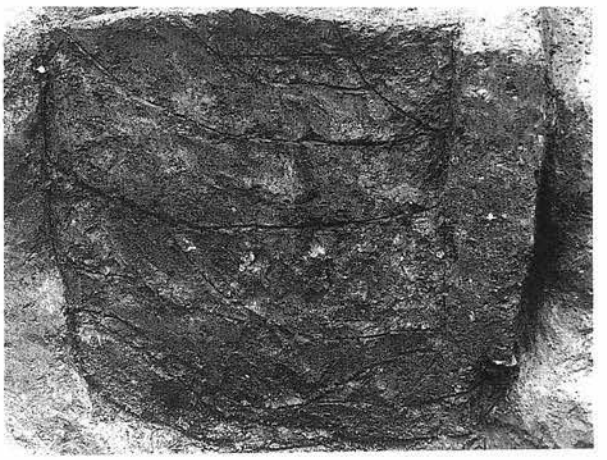


D. 若宮大路側溝東肩口の柱穴群

C. 控え梁1　出土状況

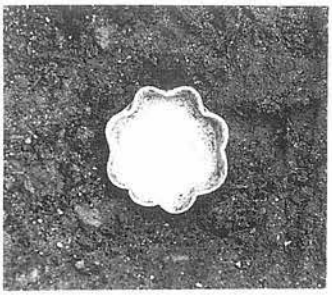


E. 土壙1・2　完掘状況



F. 土壙1・2　土層堆積

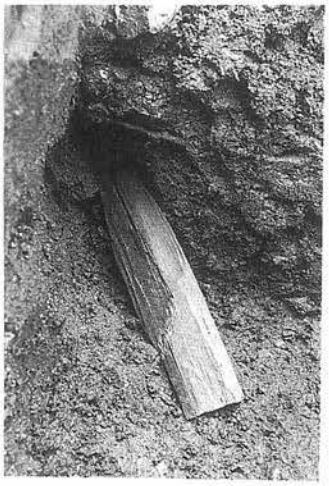
図版10



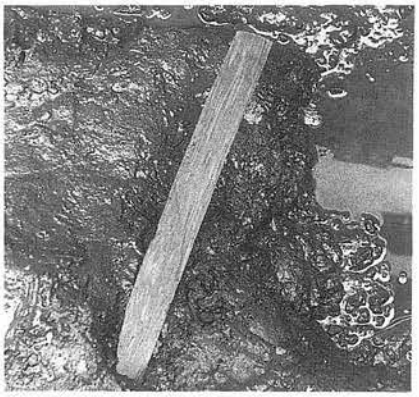
A.　溝3　瀬戸入れ子出土状況

B.　溝5　下駄出土状況

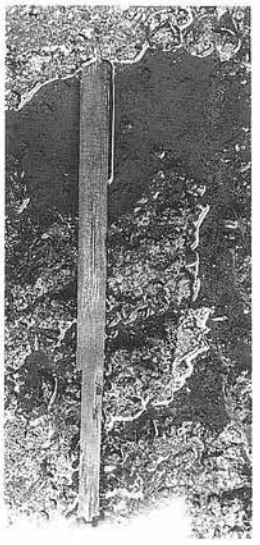
C.　溝7　下駄出土状況



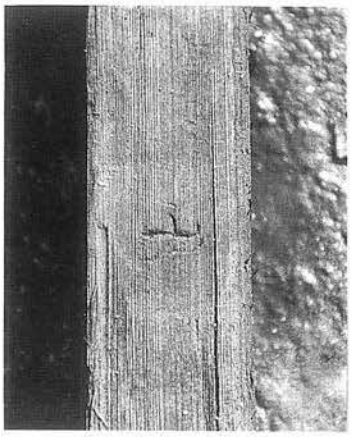
D.　溝4　木簡出土状況



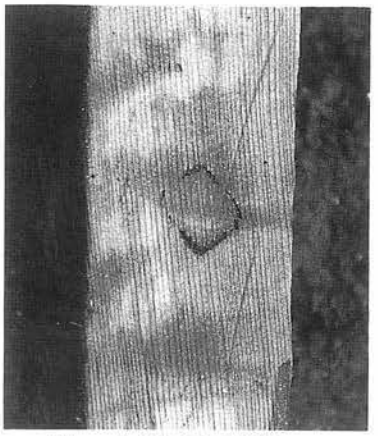
E.　溝5　木簡出土状況



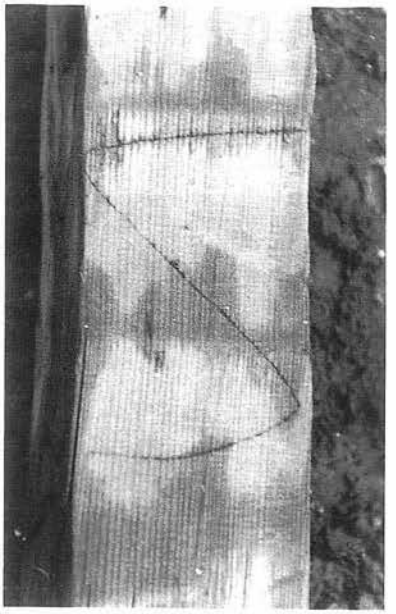
F.　溝5　笹塔婆出土状況



G.　溝4　土台材①の刻印



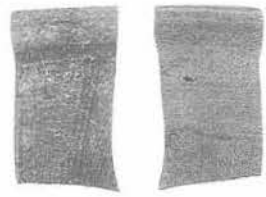
H.　溝5　土台材①の刻印



I.　溝5　土台材③の刻目

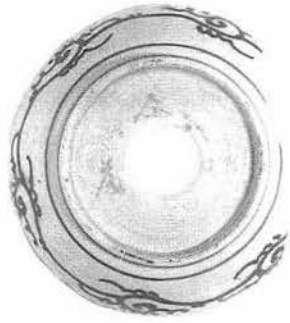
6-1

6-2


6-3

8-5

8-1

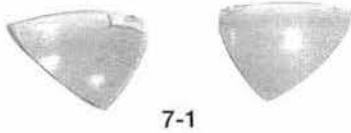


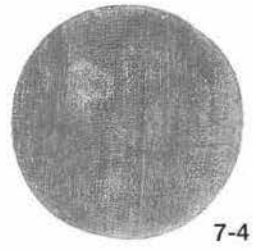
8-4

8-2

▲溝1

▼井戸1


7-1


7-4

7-3

7-2

7-5

出土遺物（1）

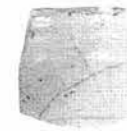
図版12

9-1

9-2

9-3

9-4

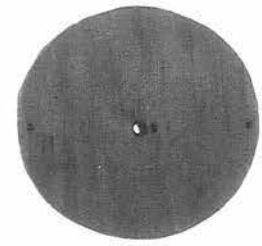

9-5

9-6

▲溝1

9-7

9-10


9-11

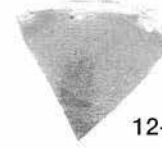
▲土壙2

12-3

12-4

12-8

12-9


12-10

▲土壙7

12-5

12-6

12-7

▲土壙6

▲土壙5

12-11

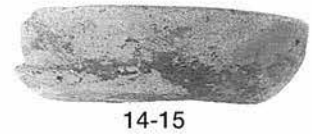
▲土壙8

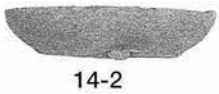
12-20

14-1

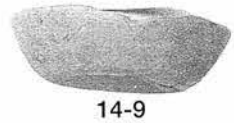
14-5

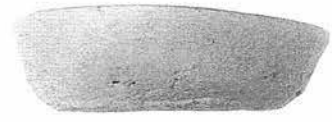
14-8


14-15


14-2

14-6


14-9

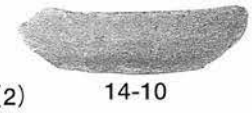

14-16

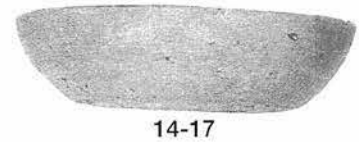
14-3

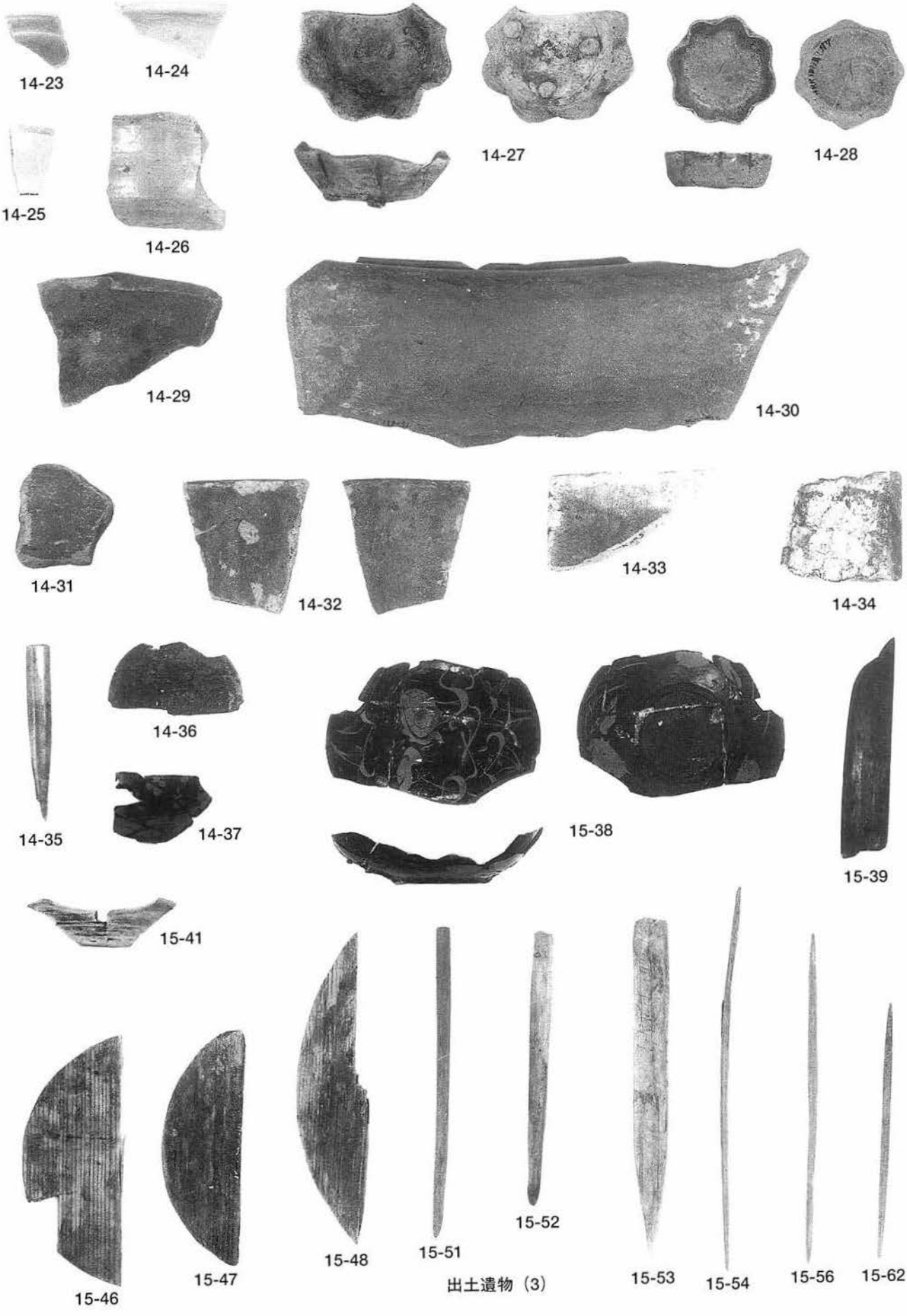
14-4

14-7

出土遺物（2）


14-10


14-17

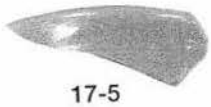

14-23
14-24
14-25
14-26
14-27
14-28
14-29
14-30
14-31
14-32
14-33
14-34
14-35
14-36
14-37
15-38
15-39
15-41
15-46
15-47
15-48
15-51
15-52
15-53
15-54
15-56
15-62

出土遺物（3）

図版14

17-2

17-3


17-5

17-6

17-7

▲溝4

17-10

17-9

17-13

▼溝3

18-2

18-19

18-32

18-31

18-4

18-20

18-24

18-35

18-6

18-25

18-9

18-21

18-28

18-36

18-38

18-39

18-42

18-44

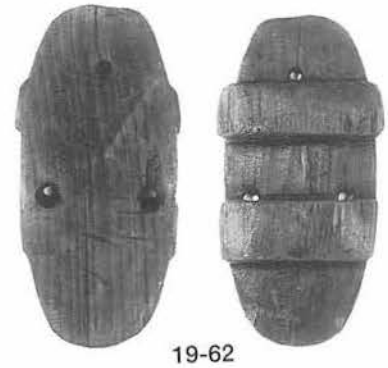
18-48

19-52

19-53

19-54

出土遺物（4）


19-62

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成9年度発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	原　廣志
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ホウジョウコマチテイアト 北条小町邸跡	カナガワケンカマクラシユキノシタ 神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目369番1	204	No.282	35° 33′ 07″	139° 19′ 27″	19960812 ～ 19961011	45.43	店舗併用住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北条小町邸跡	城館	鎌倉時代 南北朝時代	若宮大路東側溝 若宮大路 土壙 井戸（近世） 柱穴列 柱穴	・かわらけ ・常滑窯製品 ・瀬戸窯製品 ・渥美窯製品 ・青磁 ・白磁 ・土製品 ・木製品 ・漆製品 ・銅製品 ・鉄製品	・中世前期の若宮大路と、それに平行した大路東側溝を検出。 ・大路側溝の造成に際し、幕府が御家人に課役したことを示す木簡が出土。

横小路周辺遺跡（No.259）

雪ノ下五丁目557番１地点

例　　言

1．本報は鎌倉市雪ノ下五丁目557番１における個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告である。
2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成８年９月６日から９月20日である。
3．本報の執筆・編集は野本が行った。資料整理作業は小柳津、野本と田畑衣理が行った。
4．本報に使用した遺構写真は手塚・野本が撮影した
5．調査体制

担　当　者　手塚直樹
調　査　員　野本賢二・小柳津シゲ子
調査補助員　弓削拓郎
作　業　員　長島三男・荻野　勲

6．本遺跡に関する発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……347
第二章　検出された遺構と出土遺物 ……348
第三章　まとめ ……350

図　表　目　次

図１　調査地点と遺跡周辺図 ……346
図２　グリッド配置図 ……347
表　遺物観察表 ……348
図３　遺構平面図・調査区壁土層図 ……349
図４　出土遺物 ……350

図　版　目　次

図版１．第７層上斜面（北から）……353
２．第８層上斜面（南から）……353
３．中世基盤層上斜面（南から）……353
４．調査区北中世基盤層上平場（東から）
……353

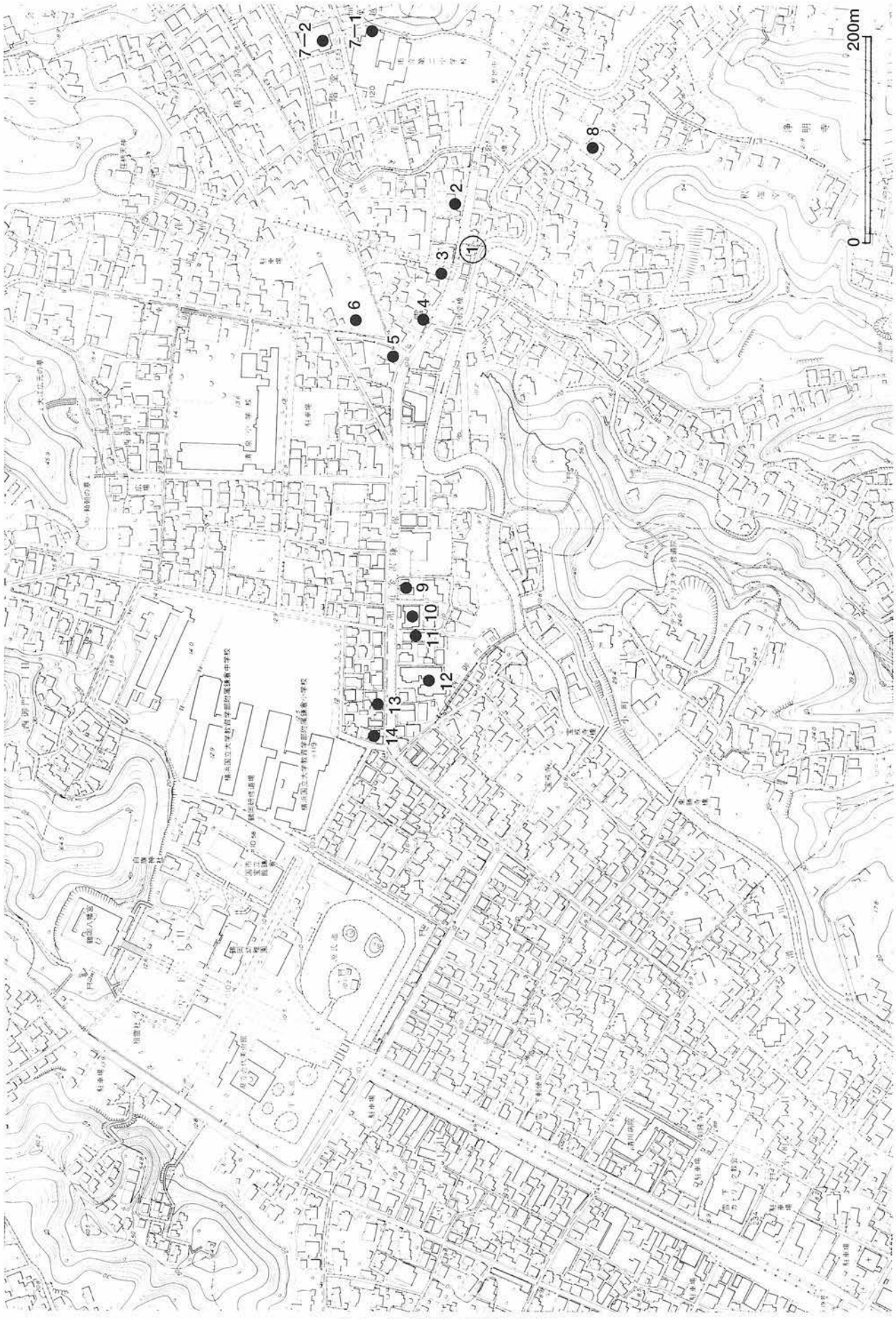


図１　調査地点と遺跡周辺図

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は「岐れ道」より180m東、荏柄天神社参道入口の東南に位置する。地点は北を六浦路、南を滑川に挟まれており、その間わずか約12mである。北には荏柄天神社、北東には永福寺、東には杉本寺、南には勝長寿院というように六浦路沿いには、鎌倉時代前期もしくはそれ以前の創建の寺社があり古くから重要な道であったことが窺われる。現地表の標高は約11.4m。

本調査地点周辺では多くの発掘調査が行われている。図１－２地点[註1]では14～15世紀の屋敷跡が発見されている。図１－３地点[註2]では13～15世紀の荏柄天神社の参道に平行する土塁状遺構が発見されている。図１－４地点[註2]では13世紀中頃～16世紀初頭までの方形竪穴・柱穴・井戸等が発見されている。図１－５地点[註4]は関取場の伝承がある地で中近世期の礎石建物、中世以前の自然流路が発見されている。図１－６地点[註5]は鎌倉時代前期の屋敷・二階堂大路の側溝、弥生時代後期の竪穴住居１軒・奈良～平安時代の竪穴住居８軒等が発見されている。

註

註１　菊川英政　1991年　『横小路周辺遺跡発掘調査報告書』　横小路周辺遺跡発掘調査団

註２　菊川英政　1991年　「大倉幕府周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７』　鎌倉市教育委員会

註３　福田誠・菊川泉・神山晶子　1996年　「大倉幕府周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12（第１分冊）』　鎌倉市教育委員会

註４　馬淵和雄　1990年　『大倉幕府周辺遺跡群』　大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団

註５　馬淵和雄　1993年　「大倉幕府周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９（第２分冊）』鎌倉市教育委員会

図２　グリット配置図

第二章　検出された遺構と出土遺物

遺構（図３）

第７層上面斜面で柱穴（Ｐ１～６）らしきものを確認した（第３－１）。だが、すべての覆土が第６層の土であることから、草木の根穴と考えられる。第11層上面斜面の根穴（図３－２）も第７層の土が混入し、これも根穴と考えられる。調査区東平場の中世基盤層上で土壙を検出した（図３－３）。長さ80cm、深さ10cmの不正円形で、覆土は暗褐色のかなりしまった土で炭・焼土を多く含んでいた。遺物はなし。

調査区北からの落ち込みのラインは、調査区南の滑川に平行しているようである。

出土遺物（図４・表）

本調査地点は調査面積が狭く、遺物も総点数444点と少ない。内訳はかわらけ279点（ロクロ20点、手づくね７点、不明252点）、土器・土製品25点、中国陶磁器８点、国産陶磁器88点（瀬戸窯22点、常滑窯６点）、瓦３点、鉄製品６点、石製品４点、弥生土器14点、土師器６点、近現代陶磁器11点である。ほ

番号	種　類	計測値　単位 cm　（　）は復元	観　察　事　項
1	かわらけ		手づくね　胎土　赤褐色
2	かわらけ	口径(10.6) 器高1.95孔径(1.9)	手づくね　胎土　赤茶褐色　底部中央を穿孔
3	瀬戸　卸し皿		胎土　灰白色　釉　灰緑色
4	常滑　壷		胎土　暗茶褐色　口唇部二次焼成
5	土製品　土錘	長さ3.2　最大径0.7	胎土　暗褐色　二次焼成
6	かわらけ		手づくね　胎土　赤褐色
7	かわらけ		手づくね　胎土　茶褐色
8	かわらけ		手づくね　胎土　淡茶褐色
9	かわらけ		ロクロ　胎土　暗茶褐色
10	青磁　蓮弁文碗		胎土　暗灰色　釉　暗緑褐色
11	瀬戸		胎土　淡黄白色　釉　黄白色
12	常滑　甕		胎土　暗茶色
13	鉄製品　釘	残存長3.5	
14	弥生土器　甕		胎土　淡赤茶色　口唇部外面にキザミ。内外面ともにハケ目調整。
15	弥生土器　甕		胎土　淡黄茶色　口縁部折り返し
16	瀬戸　皿	底径(5.2)	胎土　淡黄灰色　外底糸切り
17	滑石　スタンプ	残存長2.75　残存幅1.3　長さ1.05　孔径0.5	文様　花菱　梅花文？
18	弥生土器　甕		胎土　暗茶灰色　口唇部外面にキザミ。内外面にもにハケ目調整。
19	弥生土器　台付甕		胎土　淡黄茶色
20	瀬戸　皿		胎土　淡黄白色　釉　淡黄緑色
21	常滑　甕	底径(11.6)	胎土　明茶色
22	平瓦		胎土　暗茶色

表　遺物観察表

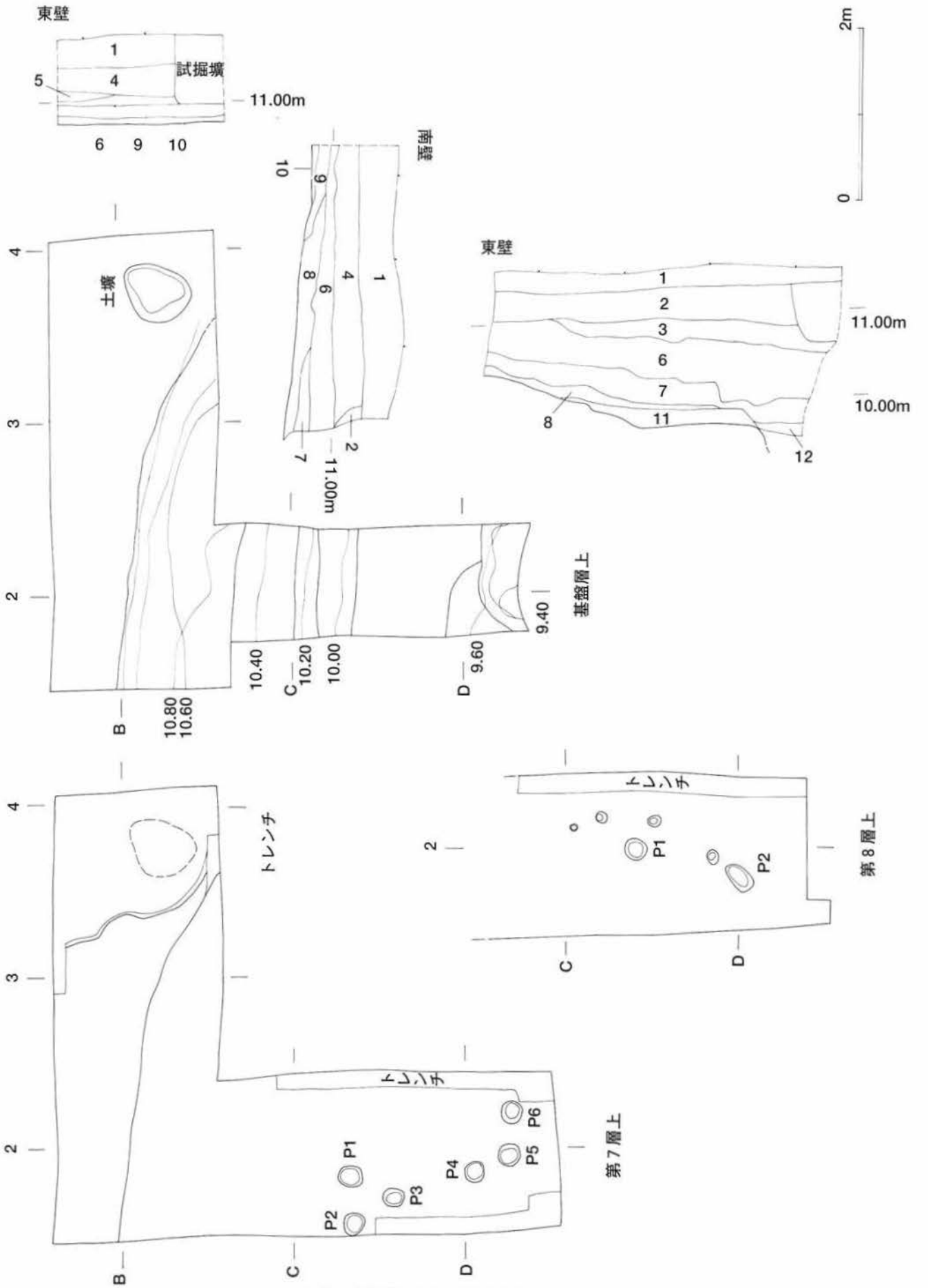


図3　遺構平面図・調査区壁土層図

とんどが小破片で図示しえたのは22点である。

1～5は表土。6～13は第6層。14～17は第7層。18～20は第8層。21・22は中世基盤層上の第11層から出土した。14・15・18は弥生土器の口縁部で、14・18は内外面ともにハケ調整されており弥生中期（宮ノ台期）と思われる。15は口縁部を折り返している。

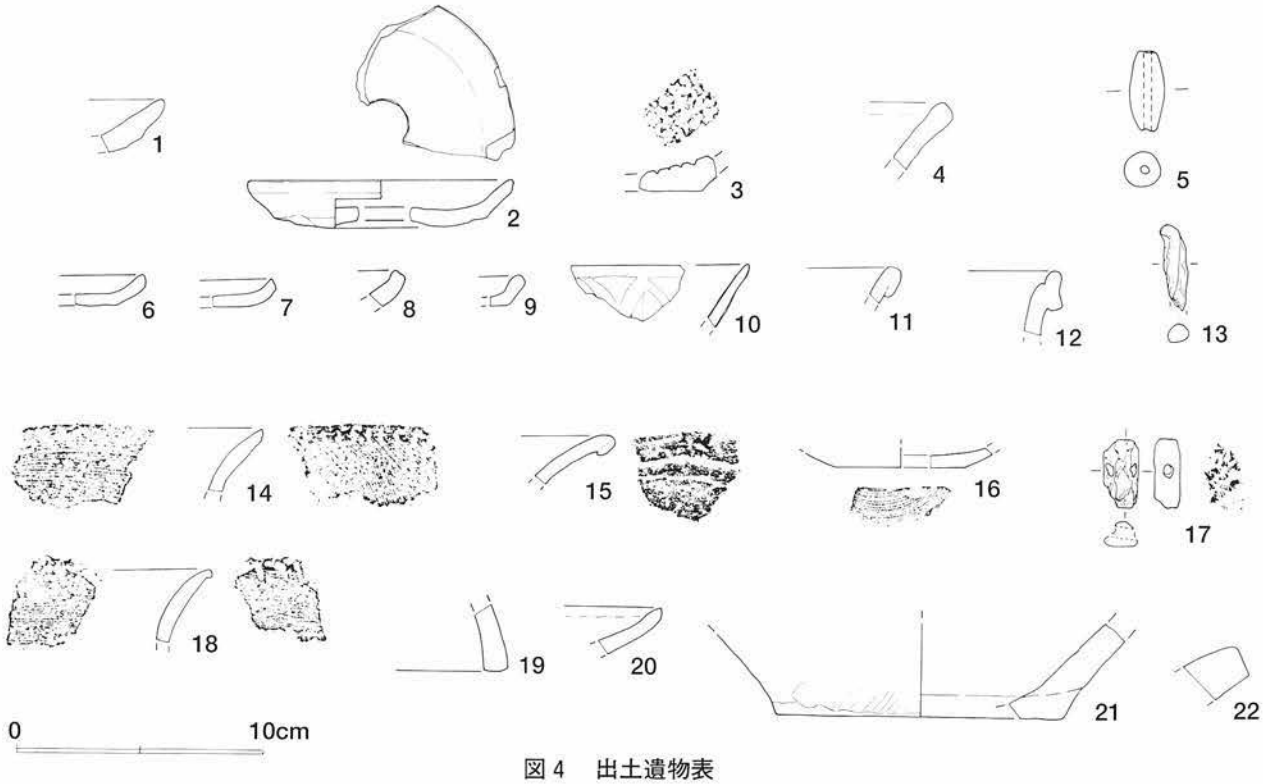


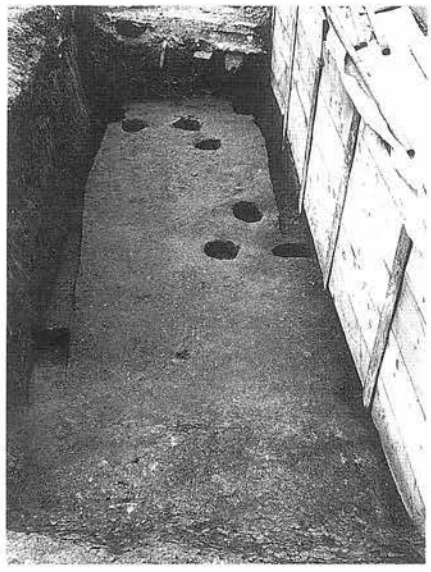
図4　出土遺物表

第三章　まとめ

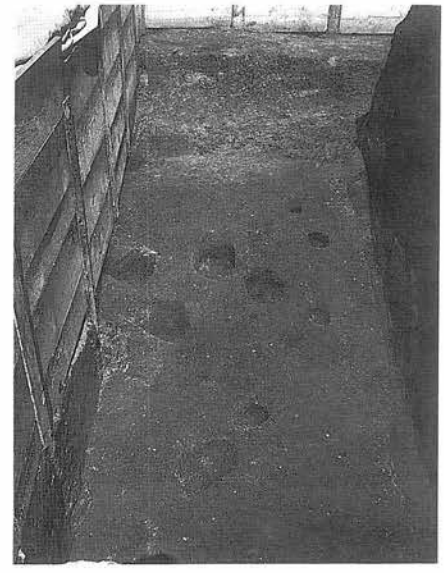
本調査地点は土壙以外に明確な遺構は検出されなかった。これは調査面積が18.00㎡という狭さと調査区の半分が斜面という立地からくるものであろうか。

今回検出された斜面（落ち込み）は基盤層上から近世以降の遺物が含まれないこと、弥生土器が若干出土しているが混入と思われることから概ね中世期と見て良かろう。

写　真　図　版

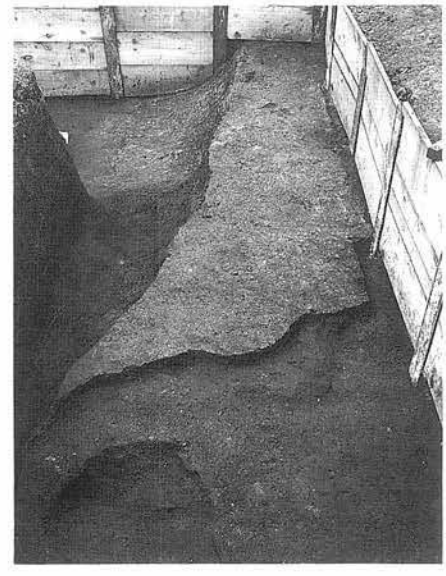


1. 第7層上斜面（北から）



2. 第8層上斜面（南から）

3. 中世基盤層上斜面（南から）



4. 中世基盤層上平場（東から）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成9年度発掘調査報告
巻次	14
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	かながわけんかまくらしゆきのした 神奈川県鎌倉市雪ノ下五丁目557番1	204	No.259	° ′ ″	° ′ ″	19960906 ～ 19960920	18.00	個人専用住宅の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横小路周辺遺跡	中世都市遺跡	中世期	土壙　1基	かわらけ 弥生土器 土師器	

長谷小路周辺遺跡（No.236）

由比ガ浜三丁目228番２の一部外地点

例　　言

1．本報は、長谷小路周辺遺跡内の鎌倉市由比ガ浜三丁目228番２他地点における診療所併用個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、鎌倉市教育委員会が平成８年10月28日より同年11月19日にかけて実施した。発掘調査対象面積は、11.45㎡である。

3．調査にあたっては以下のごとく体制を編成して行なった。

担　当　者　宗臺秀明

調　査　員　宗臺富貴子（鎌倉考古学研究所）、馬瀬直子、真中泰行

調査補助員　小野和代、鍛冶屋勝二、丹　行正

調査協力者　川村四志男、石渡辰男、福本寿夫、高橋　寛（鎌倉市シルバー人材センター）

4．本書の遺構・遺物の縮尺は次のとおりである。

遺構全測図：１／120　個別遺構実測図：１／60　遺構実測合成図：１／360　遺物実測図：１／３

なお、各挿図にはスケールを表示している。

5．遺物実測図に用いた記号の意味は、以下のとおりである。

：原材加工範囲　　：加工範囲　　：使用痕範囲

7．本書の執筆・編集は宗臺秀明が行なった。

8．本発掘調査によって出土した遺物および調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　調査の概要と成果 ……359
　第１節　調査に至る経緯 ……359
　第２節　調査の成果 ……359
第二章　遺跡地の概要 ……361
　第１節　鎌倉の地勢と遺跡の位置 ……361
第三章　発見された遺構と遺物 ……365
　第１節　第１調査壙 ……365
　第２節　第２調査壙 ……369
　第３節　第３調査壙 ……370
　第４節　第４調査壙 ……376
第四章　まとめ ……388

挿　図　目　次

図１　鎌倉市全図と調査地点 ……360
図２　調査地点周辺諸遺跡 ……362
図３　調査範囲と測量方眼設定図 ……363
図４　第１調査壙第３面 ……365
図５　第１調査壙第３面住居址 ……365
図６　第１調査壙第２面 ……365
図７　第１調査壙第２面　土壙409、溝409・410 ……365
図８　第１調査壙出土遺物 ……366
図９　第１調査壙第１ｂ面 ……367
図10　第１調査壙第１ｂ面溝405・411 ……368
図11　第１調査壙第１ｂ面溝407 ……368
図12　第１調査壙第１ｂ面ピット431 ……368
図13　第１調査壙第１ａ面 ……369
図14　第２調査壙 ……369
図15　第３調査壙第２面 ……370
図16　第３調査壙第２面　土壙406・407、溝414・415 ……370
図17　第３調査壙出土遺物（１）……371
図18　第３調査壙第２面溝414内イヌ……372
図19　第３調査壙第１ｂ面 ……372
図20　第３調査壙第１ｂ面方形竪穴建物址401、土壙404 ……373
図21　第３調査壙第１ｂ面土壙402 ……373
図22　第３調査壙第１ｂ面土壙404内かわらけ ……374
図23　第３調査壙出土遺物（２）……374
図24　第３調査壙第１ａ面 ……375
図25　第３調査壙第１ａ面土壙401 ……375
図26　第４調査壙第２面 ……376
図27　第４調査壙第２面土壙410……376
図28　第４調査壙第２面溝412……376
図29　第４調査壙第２面溝413……377
図30　第４調査壙第１ｂ面 ……377
図31　第４調査壙第１ｂ面ピット430 ……377
図32　第４調査壙第１ｂ面溝406 ……377
図33　第４調査壙第１ｂ面溝408 ……378
図34　第４調査壙第１ｂ面井戸401 ……378
図35　第４調査壙第１ａ面 ……378
図36　第４調査壙第１ａ面溝401 ……378
図37　第４調査壙出土遺物 ……379
図38　1991年調査概念図との合成図 ……389

表　目　次

表１　硯石出土地点と点数 ……380
表２　貝類出土地点と点数 ……380
表３　獣骨分類表（１）……381
表３　獣骨分類表（２）……382
表３　獣骨分類表（３）……383
表４　魚骨分類表 ……384
表５　出土遺物観察表 ……385

写真図版目次

図版１　第１調査壙第２面全景（東から）、
第１調査壙北壁土層、第１調査壙
第１調査壙第１ａ面上出土瀬戸天目
茶碗 ……393
図版２　第３調査壙第１ｂ面全景（北から）、
第３調査壙土壙402かわらけ出土
状況、第３調査壙発見のイヌ出土
状況 ……394
図版３　第３調査壙発見イヌ骨の全景、
第３調査壙２面全景（北から）、
第４調査壙２面全景（北から）……395
図版４　出土遺物（１）……396
図版５　出土遺物（２）……397

第一章　調査の概要と成果

第１節　調査に至る経緯

今回発掘調査を行なった鎌倉市由比ガ浜三丁目228番２他は、平成２年に鎌倉市教育委員会と宗臺秀明を団長とする長谷小路周辺遺跡発掘調査団によって320㎡を対象とした発掘調査が行なわれ、その際に13世紀前半から14世紀にかけての工芸職人居住地であった可能性を示唆される濃密な遺構と遺物が発見されている。

今回、同地において個人住宅併用医療事業所の建築許可申請が新たにおこされた。建築申請は平成２年度の調査範囲外を含めるものであったため、建築工事に先だって、その未調査部分について改めて埋蔵文化財の発掘調査を行うことになった。調査対象面積は、34.35㎡。事業所用地と個人住居用地との比率は２：１であったため、22.9㎡を委託事業発掘調査、残りの11.45㎡を国庫負担事業として調査を行なった。

調査は前回調査範囲に接して４箇所に点在する。

これらの点在する調査個所での成果を過不足なく説明するため、依託調査と国庫補助事業成果分の両者を本報告書において掲載し、また前回調査成果をも加味して記述することとする。

現地調査は、重機をもって現況地表土を取り除いた後に、1996年10月28日より始め、同年11月19日をもって終了した。この間、施主である小池　誠氏をはじめ、周辺住民と清興建設株式会社の方々のご理解とご助力を賜り、無事調査を終えることができた。ここにお礼申し上げる。

第２節　調査の成果

調査は平成２年に行なった前回の調査成果に基づいて生活面を順次上面より確認した。また、発見遺構などの測量に際しても前回の測量方眼を拡大して用いた（後掲の測量方眼設定図を参照）。

分散する調査地点はそれぞれ方形ないし、三角形の10㎡内外の小さなものであったため、各調査点を調査壙と称し、第１から第４までの名称をふした。各調査壙では前回調査同様、上層より第１ａ面・１ｂ面・２面の生活面が確認された他、一部の調査壙の最下層において古代の竪穴住居址が発見された。この竪穴住居址を除いては、今回発見された遺構と遺物群の性格は前回に発見されていたものと全く同一であった。すなわち鎌倉中期から室町期にかけての時期に営まれた動物解体を伴った骨細工を中心とする工芸職人居住区内の敷地境を示す溝や土壙、それに方形竪穴建物址である。遺物では、骨細工のほかに硯製作を示す硯石切り落とし残片が多く見られる。

他方、発見された竪穴住居址は、その掘り込み壁の一部のみが確認できたのみで、建物に伴う遺物もなかった。竪穴住居址の作られた時期を判断する材料はほとんどなかったが、前回の調査では、８世紀代に作られた溝跡が確認されている。

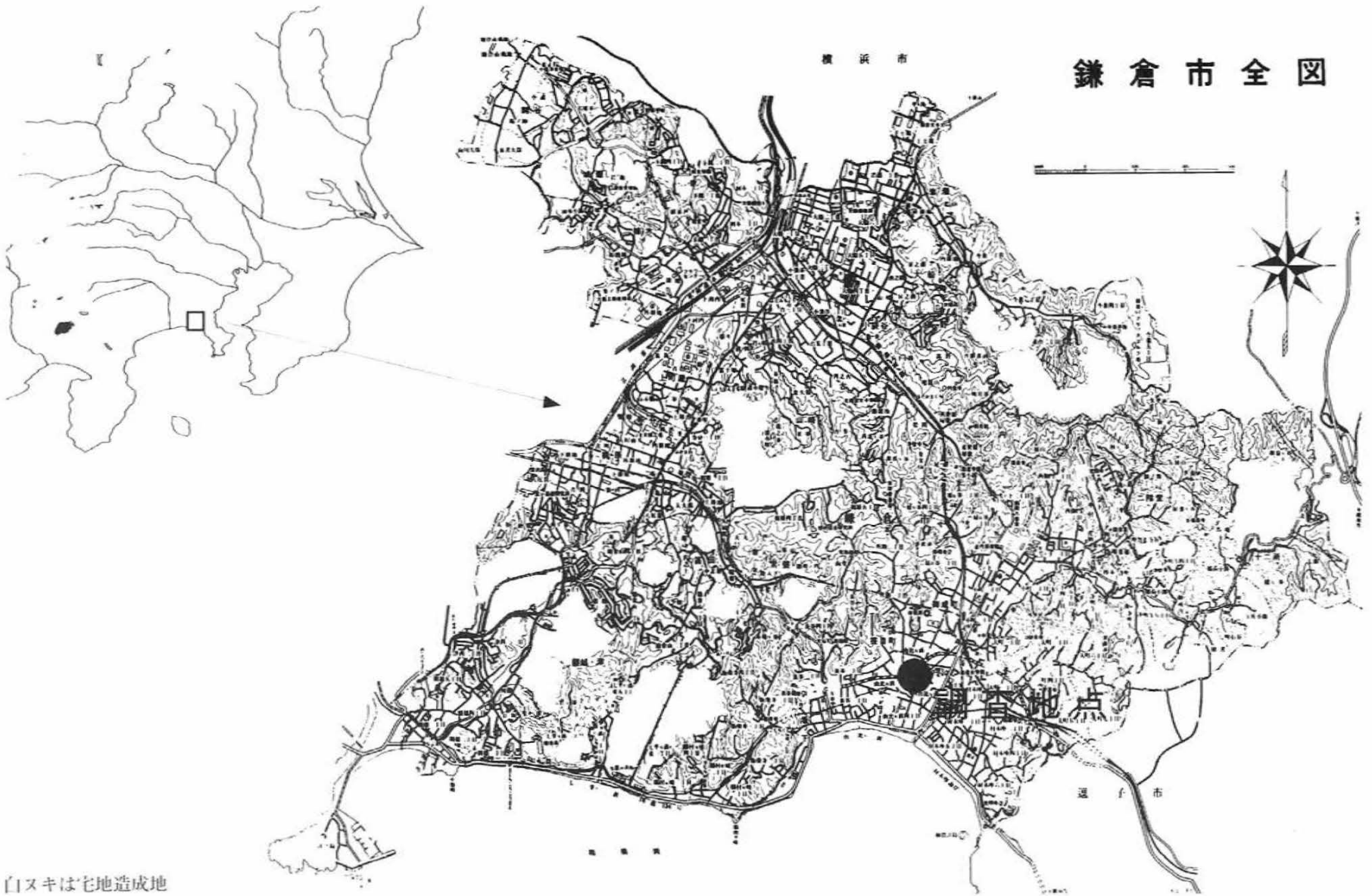


図1　鎌倉市全図と調査地点

第二章　遺跡地の概要

遺跡の所在する神奈川県鎌倉は、1180年秋、源頼朝の入府に始まる鎌倉幕府の創設以後、日本史の中で一躍脚光を浴びる地となり、誰でもが知る古都の一つとなっている。現在の鎌倉市は、そうした古都鎌倉を含めて、周辺の大船、玉縄、七里ケ浜、腰越等の地域をも取り込んでいる。

第1節　鎌倉の地勢と遺跡の位置

鎌倉市は、関東平野の南端に位置する神奈川県の中で、相模湾に面した海浜地域の南東部にある。三浦半島と丹沢・嶺岡隆起帯に囲まれたこの鎌倉市内を北東から南西に流れる滑川が谷を削り、小さな沖積地を造りだしているのが、かつての古都鎌倉と呼ばれる旧鎌倉地域である。

鎌倉市の西方、大刀洗に発する滑川は、南西へむけて河谷と流域平地を形成しながら流れ、やがて相模湾の1キロ手前で流れの向きを南へと変えて下る。この滑川が南へ向きを変える地点から南方に、三角形状の沖積地が広がる。縄文前期海進期には鎌倉湾であったと思われるこの沖積地は、その後の海退に伴い砂泥が堆積する湿地となり、その後次第に陸化した平野である。さらに海岸沿いでは、第四紀に入ってから海岸砂丘帯が発達し、砂丘帯の裏側にはラグーンを形成した。このラグーンが弥生後期以後次第に乾陸化し、鎌倉の地が出来上がる。かつてのラグーン地帯は現在でも旧鎌倉地域にあって、最も標高の低い地帯をなして、東西に広がっている。こうして出来上がった滑川流域と海にむけて開く扇状沖積地の鎌倉は、南の海岸を除いて三方を丘陵に囲まれ、それらの丘陵から流れ落ちる小河川が各地で小開析谷を造りだしている。この小河川の開析谷と、滑川や南方の沖積地との合流地点に、自然堤防の微高地が形成されて、縄文時代中期以降人々が住みつくようになった。

鎌倉の平地の中でも、海にむけて開かれた三角形状の沖積地帯が、現在最も開発が進み、繁華街となっている。三角形状の平地の北の頂点に、源頼朝が勧請した鶴岡八幡宮が位置し、そこから南の海にむけて真っ直ぐに若宮大路が貫通している。また、鶴岡八幡宮の西方には、滑川流域平地が三浦半島の丘陵と丹沢・嶺岡隆起帯の接合地点へと約2キロにわたって延びている。この滑川流域も早くから開発された地域である。鎌倉市の総人口172,240人の内、七ケ浜地区を含めた旧鎌倉地域1422㎢には現在46991人が暮らしている（1994年1月1日現在）。この数は、文献資料や考古学資料などから導きだされた、中世鎌倉幕府のあった時期の総人口とさほど変わらない、もしくは少ない数字である。

今回発掘調査を行なった地点は、海岸砂丘帯の最深部に相当し、鎌倉の南部地域を東西に横切る大町大路もしくは長谷小路である国道134号線が若宮大路を西へとすぎ、鎌倉西方の南北道路今小路との交差点である六地蔵からさらに100メートルほどをすぎた南東20メートルほどに位置する。

また遺跡地は六地蔵から海岸へ向けて走る市道の北西に面してもいるが、この市道は『鎌倉市史』において、采女塚を切り崩した後に作られた道路であって近代の造作であるとされている。

遺跡地周辺における調査に拠れば、海浜より連なる砂丘帯の最深部である長谷小路の南には、砂丘とその後背湿地とが交互に存立し、この後背湿地が乾燥化する過程において古代の生活跡が残されている。茶褐色の湿地堆積土を切り込んで発見される弥生末から古墳時代初頭の祭祀的意味合いを強く示す土器の一括廃棄が見られる後、8世紀代を中心に奈良・平安時代の竪穴住居址が散見されている。遺跡に近接する采女塚付近には、市道建設以前に古墳時代後期の「向原古墳群」が遺存していたという。

1．調査地点
2．今小路西（由比が浜一丁目213番3）
3．長谷小路周辺（由比ガ浜三丁目223番11）
4．長谷小路周辺（由比ガ浜三丁目194番24）
5．長谷小路南
6．若宮大路周辺（由比ガ浜一丁目128番）
7．下馬周辺（由比ガ浜三丁目18番12）
8．今小路西（御成小学校内）
9．由比ガ浜中世集団基地（由比ガ浜四丁目1136番）
10．由比ガ浜中世集団基地（由比ガ浜四丁目1134番）
11．由比ガ浜4－6－9地点

図2　調査地点周辺諸遺跡

遺跡地の北方250メートルほどの今小路西遺跡（御成小学校内遺跡）では、奈良時代の鎌倉郡衙に比定される原因となった遺構群と木簡が発見されている。

采女塚はまた近世においては無常堂塚とも呼ばれ、かつてはこの付近にお堂が存在していた可能性を示唆している。調査地点における1991年の前回の調査においても数多くの鎌倉時代中期以降の軒瓦が出土している。

さて、茶褐色砂層上に厚く黄白色砂が堆積した後に、中世鎌倉時代以降の生活の痕跡が残される。長谷小路付近の砂丘地帯に残される中世の生活痕跡は、方形竪穴建物を中心として、数多くの骨製品未製品、獣骨解体骨片、鞴口、スラグ、鏡鋳型などで職能民の活発な活動が示されている。

このような変遷を示す海岸砂丘地帯の長谷小路周辺には、奈良・平安時代および14世紀末から15世紀にかけて周辺の住民には埋葬地としても考えらえており、埋葬人骨のほかに遺棄されたと思われる人骨も発見されている。とくの遺跡地より南方の中世集団墓地遺跡群とされる海浜地域に顕著である。

こうした職能民居住地と埋葬地との緊密な空間関係は、中世京都の七条・八条地域の職能民居住地域と非常に良くにたものである。

上述のような歴史的環境のもとにある調査地点は、古墳時代の「向原古墳群」や奈良時代の鎌倉郡衙、中世の長谷小路などの施設と深くかかわっているものと考えられる。同地における1991年の前回の調査においても、やはり奈良時代の溝跡のほか、中世では長谷小路に直交するような地割りを伴って骨細工・砚製作・獣骨解体を示す多くの遺物や遺構が発見される。

ただし、調査地点は海浜砂丘帯の中にあっても海抜標高の低い地点にあり、中世直前まで湿地的様相の強い環境にあったことが前回調査で判明している。遺構密度は低いものの奈良時代の遺構が切り込む

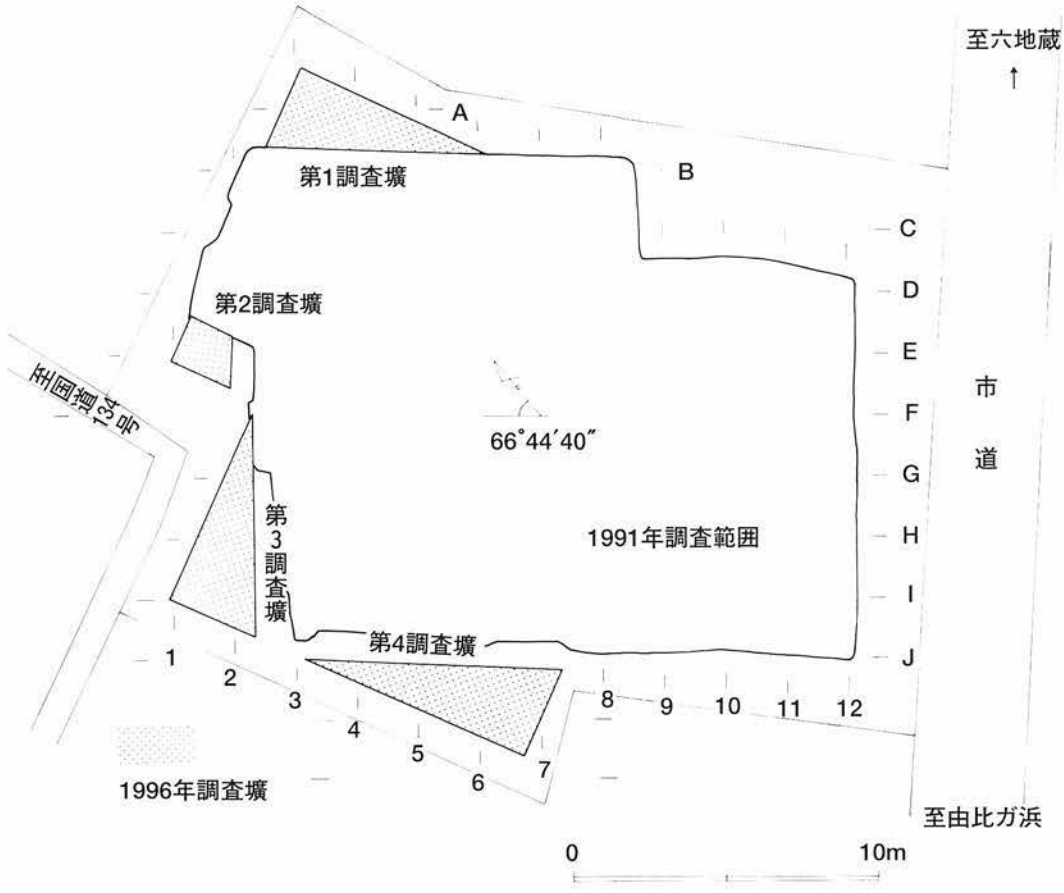


図3　調査範囲と測量方眼設定図

茶褐色砂層上に堆積する泥岩を交えた砂質土上面の第２面に中世の数多くの遺構と遺物が突然濃密に発見される。中世の生活面はこの後も泥岩を交えた砂質土で整地される１ａ、１ｂ面と、生活面が更新されて活発な生活が営まれる。

こうした地勢の調査地の調査にあたっては以上の状況を鑑み、長谷小路などの施設に対応した測量方眼を用いるべきであるが、今回の調査でもやはり前回と同様な成果をえられるものと予想され、図３に示した1991年調査時方眼を援用し、前回発見された遺構と今回発見される遺構の相関関係を明確にする手段を選んだ。

本報告の最後に両者の遺構を合成して示した。

第三章　発見された遺構と遺物

以下では第１調査壙の下層より順次調査結果を説明する。調査壙は前回調査範囲の外側に第１から第４まで逆時計周りに設定したが、第２調査壙は近年まで使われていた鉄製の枠を埋設した井戸の設置部であった。

第１節　第１調査壙

第３面

茶褐色砂層を基盤とする第３面に竪穴住居址の一部が発見された。しかしながら、床面を始めとする住居址本来の形状はほとんど後世の中世遺構によって壊されていた。確認できた壁高は20cmと浅く、その内側にわずかに周溝とピットが浅く残されているのみである。

図４の土層堆積図に見られるように、住居址内の覆土も全くと言ってよいほど残されておらず、竪穴住居址に伴う遺物も出土しなかった。同地における前回の調査と周辺地域の調査成果に鑑み、８世紀から10世紀の住居址であろうと考えられる。

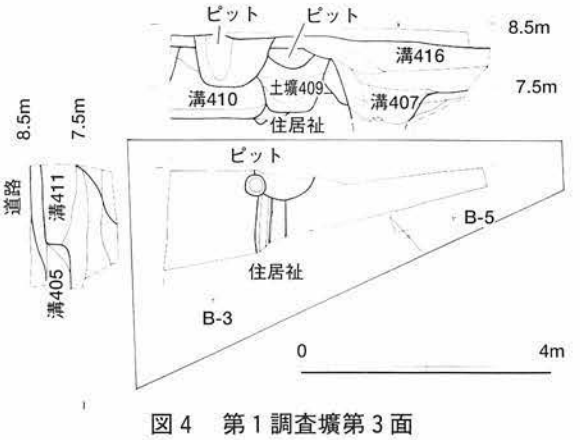


図４　第１調査壙第３面

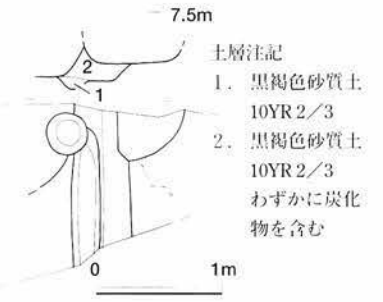


図５　第１調査壙第３面住居址

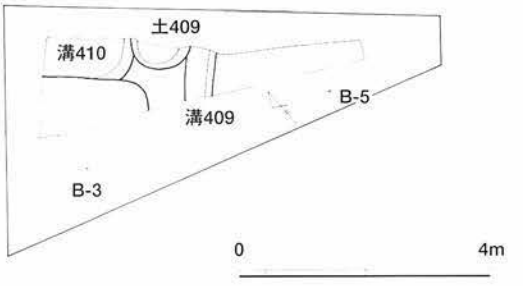
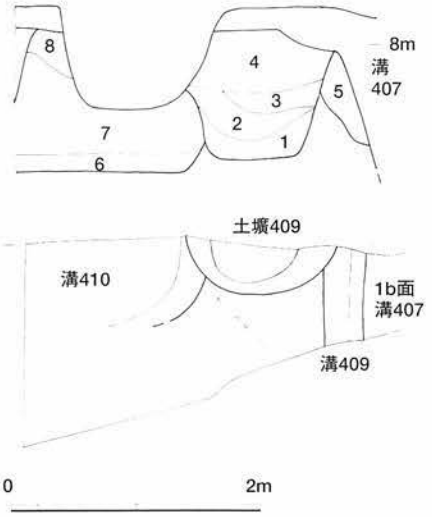


図６　第１調査壙２面



土層注記

1．暗灰色土　N３／０　強粘性
2．黒褐色土　10YR３／１
3．黒褐色土　10YR３／１　上面に貝殻堆積
4．褐灰色土　10YR４／１　部分的に炭層が混入
5．暗灰色土　N３／０　炭化物を多く混入
6．黒褐色土　10YR２／３　茶色砂と貝殻片を混入
7．黒褐色土　10YR３／２　貝殻片とかわらけ片を多く混入
8．灰黄褐色土　10YR４／２

図７　第１調査壙第２面　土壙409、溝409・410

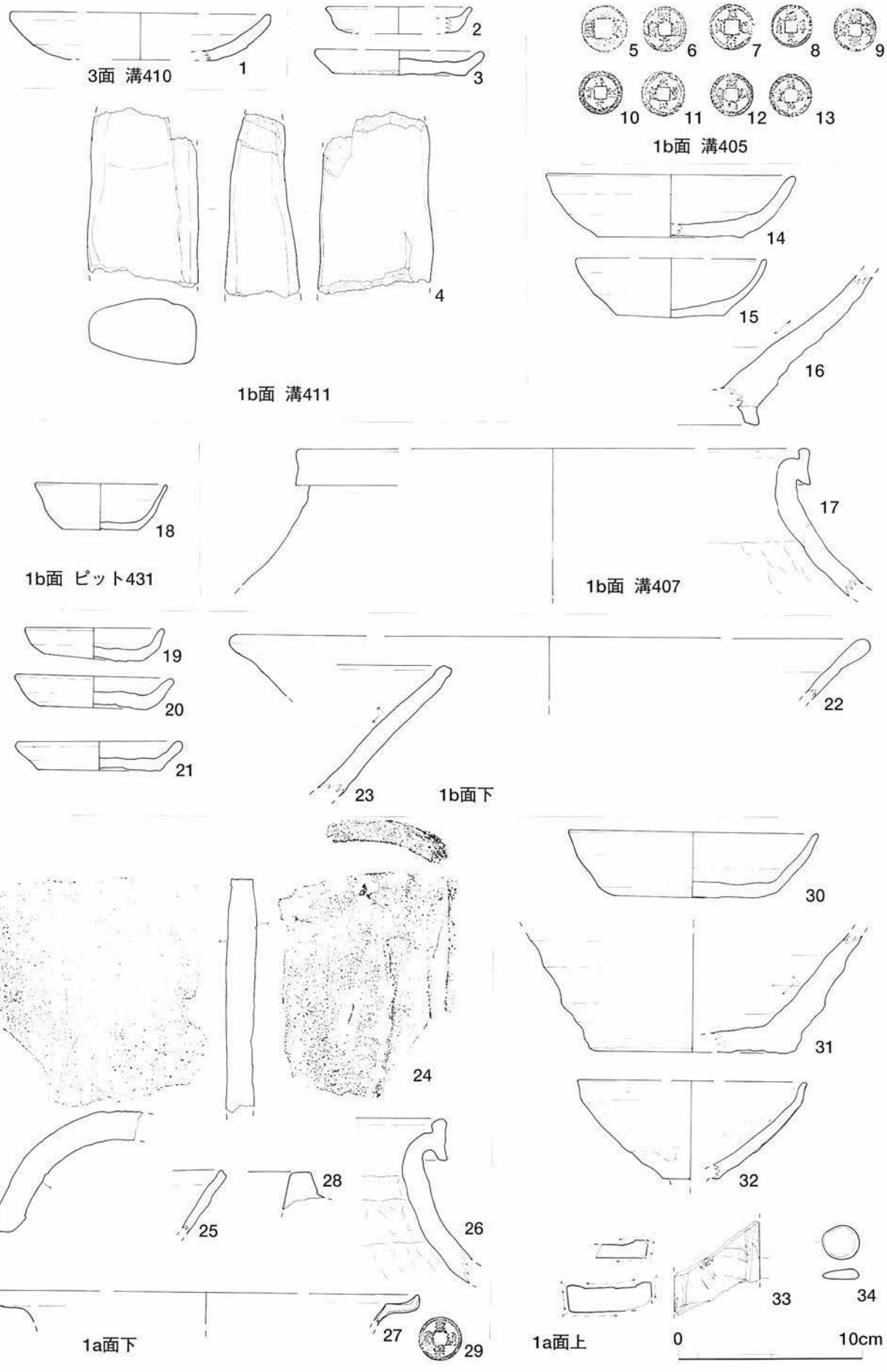


図8　第1調査壙出土遺物

第２面

泥岩を交えた砂質土を生活面とする中世の第２面も、やはり上層の生活面から掘り込まれた遺構に多くが壊されているが、掘り込みは深く、形状は明瞭である。

円形と思われる土壙１基のほかに、溝や土壙状の長軸が比較的短いと考えられる掘り込みが２基、部分的ながらも発見された。

土壙409

調査壙の北壁際に発見された。円形と思われる土壙のほぼ半分ほどを確認した。平らな底面までかなり急に落ち込む。直径１m20cm、深さ55cmを測る。底面には粘性の強い覆土が堆積する。出土遺物はかわらけの細片を除いてなかった。

溝409

調査壙を南北に走るが、土壙409に切られ、さらに１b面の溝407に大方が壊され、西の掘り込み傾斜から底面際までの落ちだけが確認できた。80cmほどの深さだろうか。覆土内からは、手づくねと糸切りのかわらけの細片が出土した。

溝410

調査壙の北西隅にその一部が発見された。土壙409に切られ、また１b面の遺構によって南西部が壊される。東西方向に走る溝と思われる。深さ90cmほどで、平坦な底面を持つ。壁面をなす茶色砂を交えた下層の覆土も平坦に堆積している。

覆土からは、手づくねと糸切りのかわらけ片が出土している。

第１b面

２面上に20cmほどの整地層を挟んだ１b面には最も多くの遺構が発見されている。しかし、発見された遺構の軸方向は２面発見遺構の軸方向を踏襲している。発見された遺構は２面同様に土壙状の地境となる溝405・407・411・416、それにピット431や溝埋没後の小さなピット４口である。

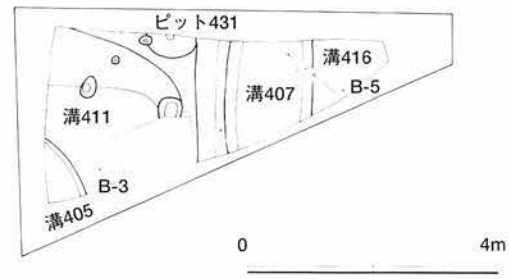


図９　第１調査壙第１b面

溝405

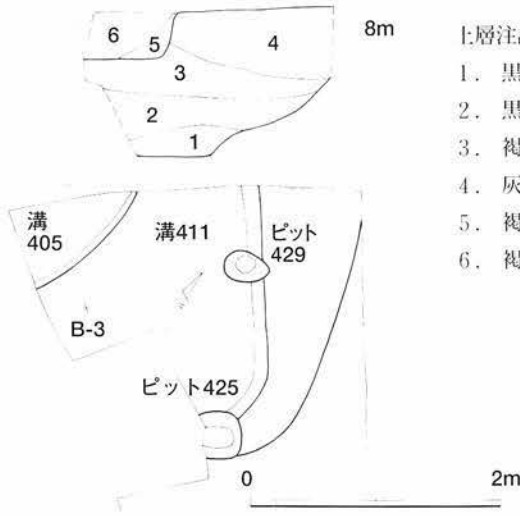
調査壙の南西隅に一部分だけが発見された。平坦な底面までの掘り込みは急で、土壙ではないであろう。深さは37cmと浅い。覆土の６（図10）からは緡の状態で銅銭９枚がまとまって出土している。発見された状態での銭の重ね方は以下のとおりである。

「開元通寶」（裏）－「元祐通寶」（裏）－「元豊通寶」（表）－「五銖」（表）－「皇宋通寶」（裏）－「紹聖元寶」（表）－「淳熙元寶」（表）－「熙寧元寶」（裏）－「熙寧元寶」（裏）。図６には初鋳年代順に掲載したが、北宋銭を中心に古い銭が集められていることを確認できる。

溝411

溝405に切られ、その外側に位置している。上場は調査壙の外にあって確認できず、平坦な底面際にて把握した。調査壙の壁面での土層観察からは、上場から下場底面に向けてゆっくりと落ちている。覆土には、水分を多量に含んだ腐植土である黒褐色土が下層に堆積している。

堆積土中からは、ホルンフェルスの大型石斧のほかに、かわらけ、土師器、獣骨、こね鉢、須恵器、常滑の甕などの細片が出土しているが図示できなかった。



土層注記
1．黒褐色土　10YR 3／1　水分多く、炭化物混入
2．黒褐色土　10YR 3／1　貝殻粒と炭化物混入、水分多し
3．褐灰色土　10YR 4／1　水分多く、泥岩粒を多く混入
4．灰黄褐色土　10YR 4／2
5．褐灰色土　10YR 4／1　泥岩粒を多く混入
6．褐灰色土　10YR 4／1　軟弱、炭化物多く混入

図10　第１調査壙第１b面溝405・411

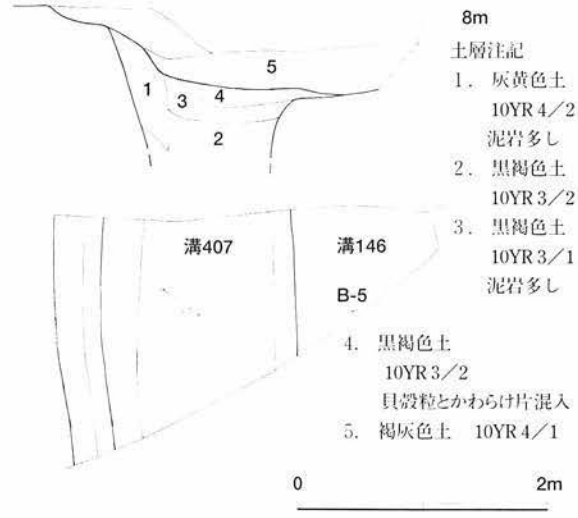
これらの遺物のうち、土師器や須恵器の破片は、溝411が切っている第３面の竪穴住居址に伴うものであったのではないだろうか。他の第３・第４調査壙においても、数は少ないが８から10世紀代の土師器や須恵器の出土がある。図示できた石斧は近隣の低丘陵麓から何らかの土砂の移動によって持ち込まれたものではないだろうか。

溝411を切っているピット429と425は、おそらく第１b面に帰属するものと思われるが、上述のような下層で行なわれた溝411の確認の際にこれらピットも浅い落ち込みとして確認したために判然としない。

溝407・416

共に調査壙の東側に発見され、溝416が溝407を切る。溝407は確認できた上場幅１m42cm、深さ１m20cm以上を測る。南北に軸線を持つ。底面へ向けて調査を進めたが、湧水による調査壙壁面の崩落を危惧し、湧水面にてより下層への調査を断念した。遺構が深く、底面を確認できない状況および覆土の堆積状況は本遺構を井戸のように見せるが、形状と後述の1991年調査成果より溝と考えられる。覆土中からは、薄手丸深（図８－15）を含むかわらけ、山茶碗窯系こね鉢、常滑の甕が出土している。

溝416は、溝407を切って、より幅広く作られる。東側の上場は調査壙内に確認できない。上場幅３m以上、底面幅1.5m以上を測る。掘り込みは緩やかで、底面はほぼ平坦である。深さは60cm前後と浅い。かわらけの細片が出土する。第１a面整地土によって埋められている。



土層注記
1．灰黄色土　10YR 4／2　泥岩多し
2．黒褐色土　10YR 3／2
3．黒褐色土　10YR 3／1　泥岩多し
4．黒褐色土　10YR 3／2　貝殻粒とかわらけ片混入
5．褐灰色土　10YR 4／1

図11　第１調査壙第１b面溝407

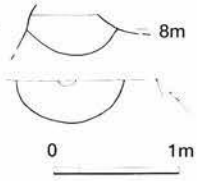


図12　第１調査壙第１b面ピット431

ピット431

調査壙北壁中央付近にほぼ半分が発見された。浅い擂り鉢状の掘り込みで用途は判然としない。直径85cm、深さ32cmを測る。覆土内から瀬戸の入れ子が１点出土している。内側の体部のみに降灰が見られ、重ね焼きの跡を示している。

第1b面下出土遺物

図8－19～23に第1b面を構築した際の整地土層から出土した遺物を掲げた。これ以外にも平瓦、白かわらけ、須恵器、舶載磁器（同安窯系櫛掻文碗、竜泉窯系連弁文碗、口兀白磁皿）、常滑の甕の細片が出土しているが図示できなかった。

19～21は糸切り底かわらけ。共に底径が大きく、口縁は外反する。22は山茶碗窯系こね鉢。23は常滑のこね鉢。体部下半内側は摩滅している。

第1a面

泥岩の細かな粒子を混じえる褐色砂質土による整地面である。第1b面の溝416を埋めて平坦面を作ると同時に、調査壙の西部に10cm大を中心とした泥岩塊を交えた砂質土で盛り上げられた道路面が構築されている。この道路面構築に先だって、調査壙北端に柱痕のあるピットが掘り込まている。覆土は軟弱なふかふかした暗茶色土で、家屋などの柱跡とは思われない。

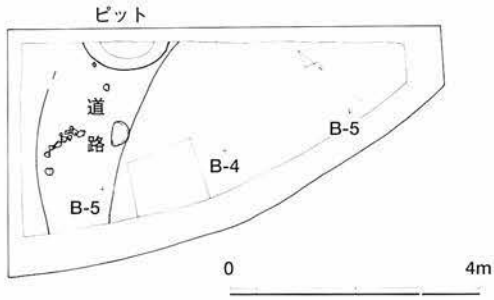


図13　第1調査壙1a面

このほかの遺構は確認できず、道路構築土中やピット内のほか、生活面直上の遺物もなかった。

第1a面下出土遺物

第1a面整地土から出土した遺物を図8－24～29に掲げた。24は凸面縄目叩き、凹面布目跡の残る丸瓦。25は南部系山茶碗。28は滑石石鍋の口縁破片。29は「皇宋通寶」。

第1a面上出土遺物

第1a面の上に乗る土層中から出土した遺物を図8－30～34に掲げた。30は底径・口径共に大きく、体部が強いヨコナデによって屈曲するかわらけ。31は山茶碗窯系こね鉢の底部片。底部脇の体部から内側が摩滅している。32は瀬戸の天目茶碗。全体に錆釉がかかり、そのうえに天目釉が鎬目を出して施釉される。33は赤間石を用いた硯製作途上破損品である。側面には石鋸による擦り切り痕が、上下の面には鑿による整形痕が残される。

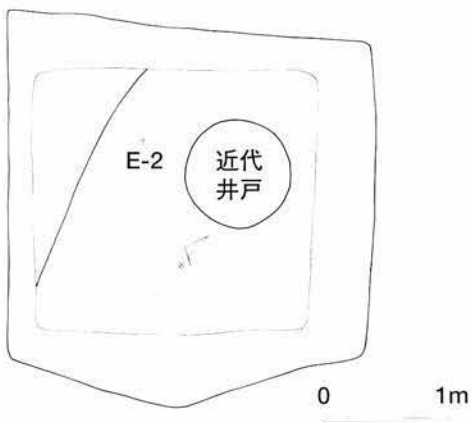


図14　第2調査壙

第2節　第2調査壙

第2調査壙では、近年まで使用されていた鉄製の枠を用いた井戸とその掘り方が調査範囲内ほぼいっぱいに確認され、撹乱の受けていない部分の調査を進めるには危険が伴うと考え、それ以上の調査活動を断念した。

第３節　第３調査壙

第３調査壙では、中世に帰属する第２面、第１ｂ面、第１ａ面の３つの遺構面を発見したが、中世の遺構が調査範囲内いっぱいに展開し、先史から古代にかけての堆積土である茶褐色砂質土を深く掘り込んでいたため、中世以前の遺構は何ら確認できなかった。また、遺構の最も濃密な第２面では、遺構の掘り込みによって、生活面構成土は残されていなかった。

第２面

土壙２基、溝２状、ピット１口が発見された。

土壙406

調査壙中央西壁際に位置する。後世の方形竪穴建物址401に切られ、全体の１／４以下を確認したと思われる。深さ70cm余りを測る。覆土は一時に埋め戻されたような堆積状況である。覆土中から、白磁四耳壺の底部が出土している。

土壙407

調査壙東壁際にほぼ半分ほどを確認できた。長軸２m40cmほどを測る。深さ70cmで壁はゆっくりと落ちる。調査壙東際は、前回の1991年調査範囲と接していたため、堆積土が土留め杭によって壊され、本土壙の土層堆積は確認できなかった。覆土内からは、かわらけをはじめ、常滑、白かわらけ、こね鉢、渥美、須恵器、劃花文青磁碗が出土している。図17－２～４には、かわらけと常滑の甕口縁部を図示できた。２は手づくねの小型かわらけ、３は底部糸切りの中型かわらけである。

溝414

調査壙内に東西に軸線をもって発見された。土壙406と407に壊されている。幅１m50cmほど、深さ95cmを

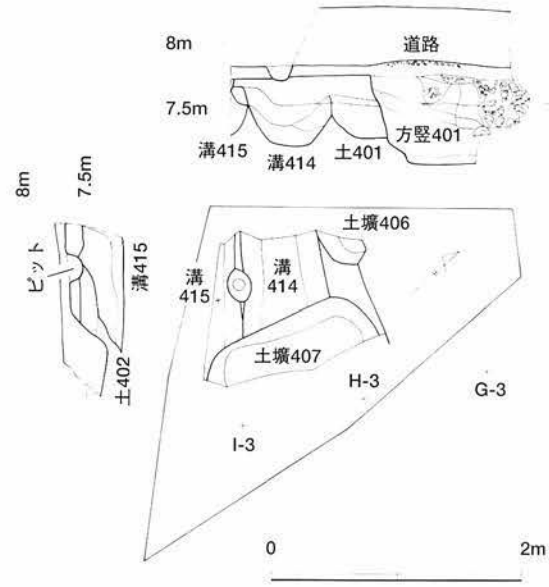


図15　第３調査壙第２面

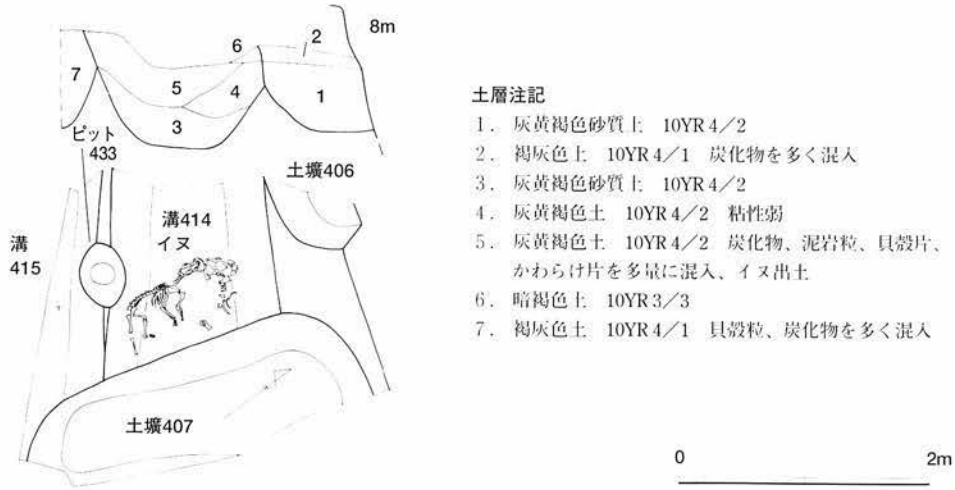


図16　第３調査壙第２面　土壙406・407、溝414・415

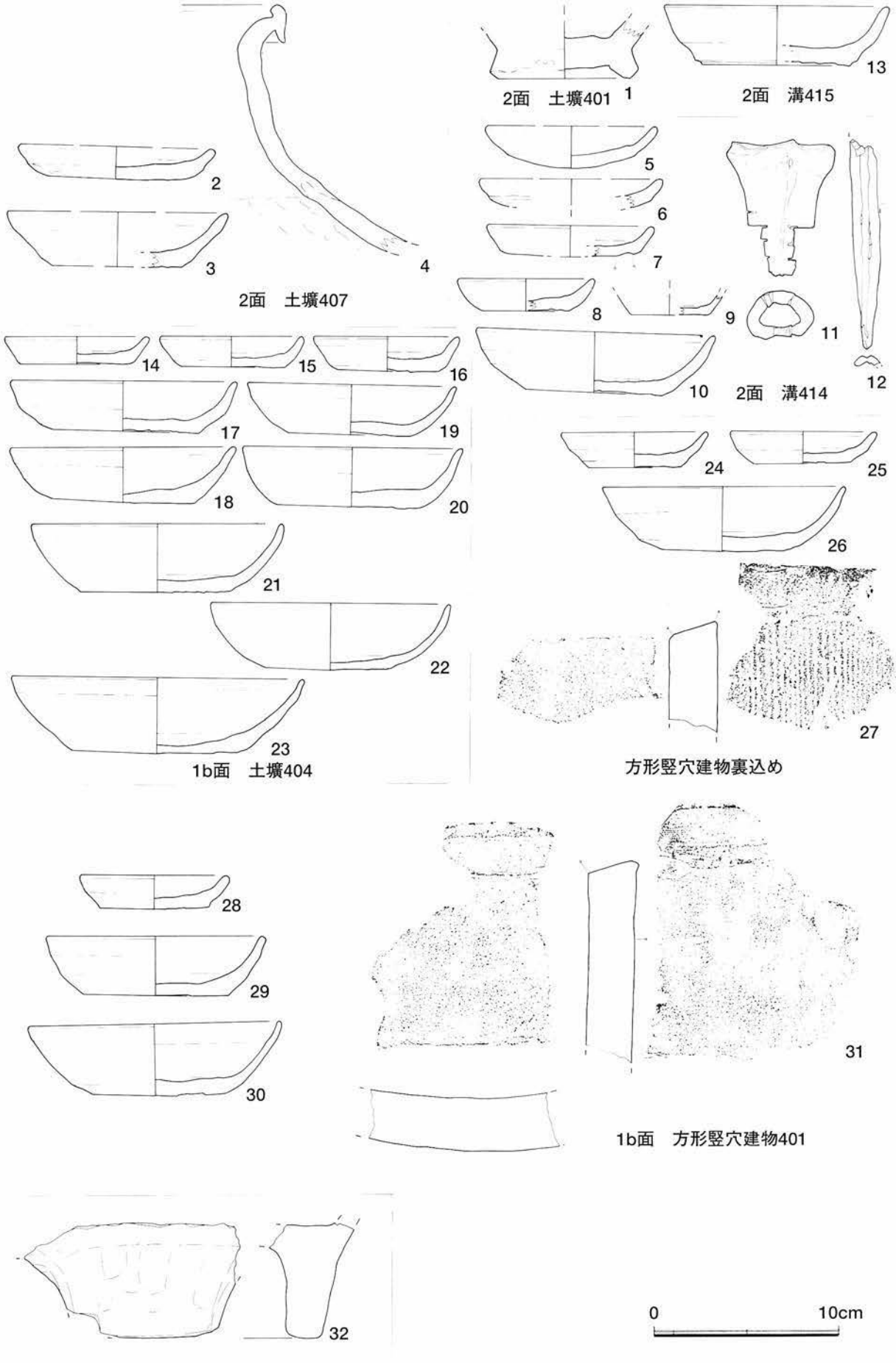


図17　第3調査壙出土遺物（1）

測る。溝の壁はゆっくりと落ち、その断面は開いたU字型を呈する。溝底面に溝壁の崩落土である褐色砂質土を堆積させているものの、水流を示唆するものではない。覆土上層の第5層中には、犬の遺骸が2体葬られていた。

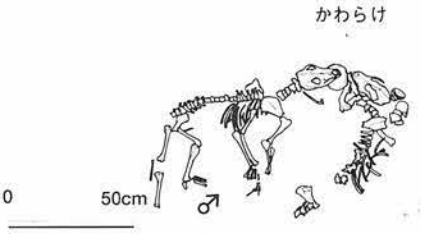


図18　第3調査壙2面溝414内イヌ

イヌの遺存骨は、2体が顔を突き合わせるように位置し、共に解体痕などは残されておらず、関節の位置から肉の付いたまま、ほとんど埋まりかけた溝の中におかれたものと考えられる。2体のうち東に位置するイヌの骨は溝覆土の掘り上げ時に動かされ、実測図・写真図版ともに不完全な骨格となってしまっている。2体のイヌの顔の下には多量のチョーセンハマグリと共にかわらけが発見されている。イヌ骨格は土層堆積状況から掘り込んだ穴の中に埋置されたものではないが、骨格や2体の配置状況などから丁寧に捨て置かれたものと想定できる。

顔の下にあるチョウセンハマグリは、すべて白く変色していため、人間が煮た後に食した残骸がたまたまイヌの下にあった可能性が高い。

覆土内出土遺物は、貝殻とかわらけのほかに、こね鉢、常滑の甕の破片、同安窯系皿、竜泉窯系劃花文碗、土鍋と骨製品切り落とし残片であった。イヌの顔の下にあったかわらけは、図17－10である。11は、前回の調査で多量に出土した刀装具の栗型の部品を採取した残りのウシ中手骨である。かわらけは5と6が手づくね、7～10が底部糸切りで、9にはヘラおこし痕が残されている。

溝415

溝415は調査壙の南端にその一部が発見された。溝414に平行するように位置し、溝414に切られる。深さは80cmを測る。断面形状は溝414と同様と思われる。炭化物と貝殻粒を多く混じえる覆土からは、かわらけ、常滑の甕の破片、土師器と須恵器系陶器、南部系山茶碗が出土し、底部糸きりのかわらけだけが図示できた。

ピット433は溝414・415を切る新しいものであるが、溝の調査が先行してしまい、その下半のみを確認した。深さ38cmが残されている。本来の深さはこれより25cm以上あったものと考えられ、掘立柱建物の柱穴であるかも知れない。

第1b面

第1b面では泥岩の細かな粒子を多く交えた粘性のない砂質土で構築された生活面から、方形竪穴建物址と土壙、掘り込みの浅いピットが数多く発見された。

土壙404

土壙404は方形竪穴建物址の南東に位置し、半分ほどを方形竪穴建物址に切られている。深さ50cmほどを残して、壁は底面へ向け緩やかに落ちていく。覆土の上層では、灰と炭層の上にかわらけが一括して廃棄されている。かわらけは、方形竪穴建物址によって壊された付近に集中して残されており、何枚が廃棄されたのか不明だが、調査では10枚を確認した。炭層に伴ってかわらけが廃棄される状況は、前回の調査でも2基の土壙で確認され、それらは何度にも渡るかわらけの廃棄によって下層から上層まですべて埋め尽くされていた。本土壙も同様の廃棄壙である可能性が

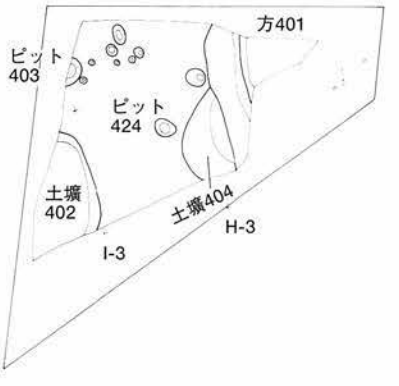


図19　第3調査壙第1b面

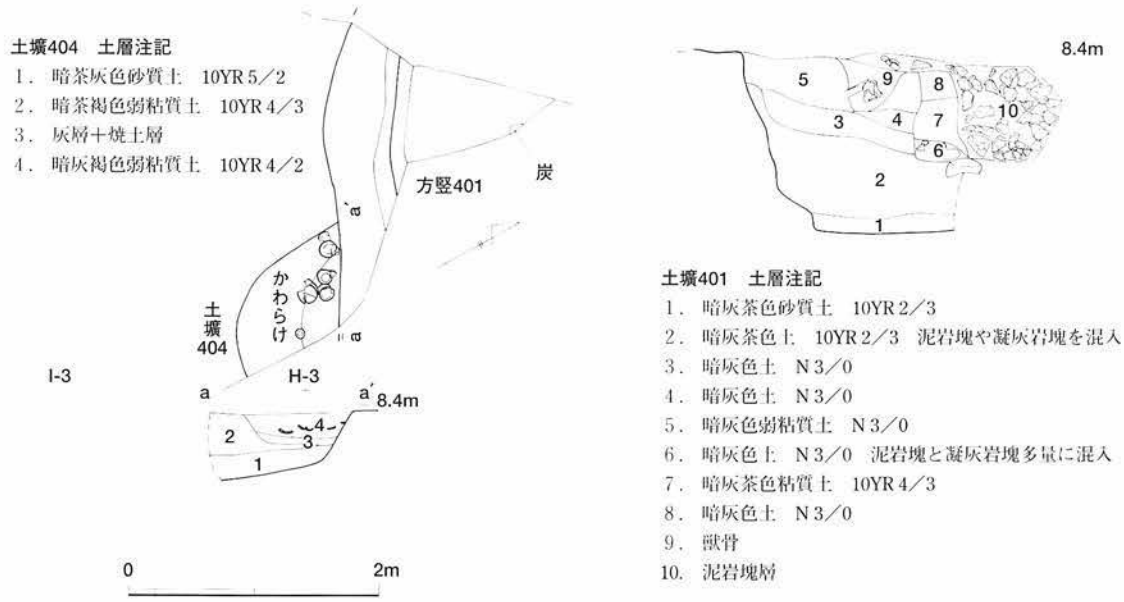


図20　第３調査壙第１b面方形竪穴建物址401、土壙404

高い。

図17－14～23に10点のかわらけを図示した。すべて底部糸きりにより、薄手化への傾向を見て取れる。

方形竪穴建物址401

調査壙の北隅に発見されたが、調査壙内にはそのほんの一部だけが確認でき、半地下式建物である方形竪穴建物址の南側掘り方と本体内部を調査した。深さ１m44cm、南側辺の長さ２m40cmの掘り方内に、深さ95cmの建物本体部が構築されている。１～５層の掘り方覆土は、基本的に掘り上げ土を埋め戻し、最上層を粘質土で固めている。建物内部には、おそらく木組み土台を受けとめていたであろう凝灰岩礫が設置されている。この土台礫の内側（北側）は、底面から掘り込み面レヴェルまですべて泥岩の20～30cm台の礫で埋め尽くされている。建物の廃棄後に一気に埋め戻されたと考えられる。また、掘り方底面の一個所に炭がまとまって認められた。方形竪穴建物址構築の際の何らかの儀礼であるかもしれない。

この方形竪穴建物址使用時にその掘り方部分を一部掘り窪め、ウシの骨が埋められている。この骨は土層番号９（挿図20）に認められたもので、全体を調査できたわけではなく、骨の遺存状況などが解からず、ウシの埋置なのか、解体後の骨を捨てたのか判断しがたい。

覆土内からは、ウシの骨のほかに、かわらけ、平瓦、常滑の甕、青磁劃花文碗、硯石、火鉢、こね鉢などが出土しているが、図示できたものは17－24～31である。縄目の平瓦に、底部糸きりのかわらけである。

図23－１～12に第１b面構成土中から出土した遺物を図示した。かわらけはすべて底部糸切りで、ヨコナデが強く器壁の屈曲が鋭い。４は東播系と思われるこね鉢である。典型的な東播系こね鉢と比べて少し土が粗い。６・７は瀬戸の入れ子。輪花型の７の内面には煤が付着している。８は竜泉窯系青磁蓮弁文碗。10は軒平瓦。連珠文の顎は貼り付けによる。11は黒色粘板岩の硯切り落とし残片を再利用して、小型の硯を作ろうとした加工途上廃棄品である。側面と底面に切り落としの擦り切り痕を残し、上面に細い刻線で硯の陸と海の部分の外形線を描き、内部をのみで削り始めている。12は上野産凝灰岩製砥石。１b面

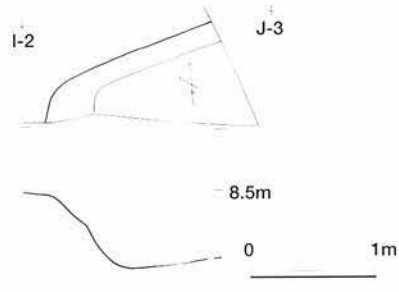


図21　第３調査壙土壙第１b面402

の整地されたのが、13世紀後半以降であることをこれらの遺物は示している。

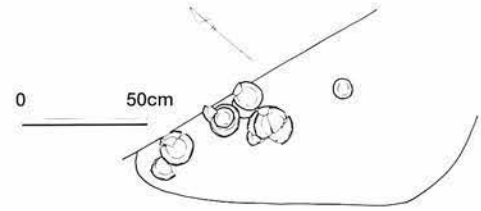


図22　第３調査壙第１ｂ面土壙404内かわらけ

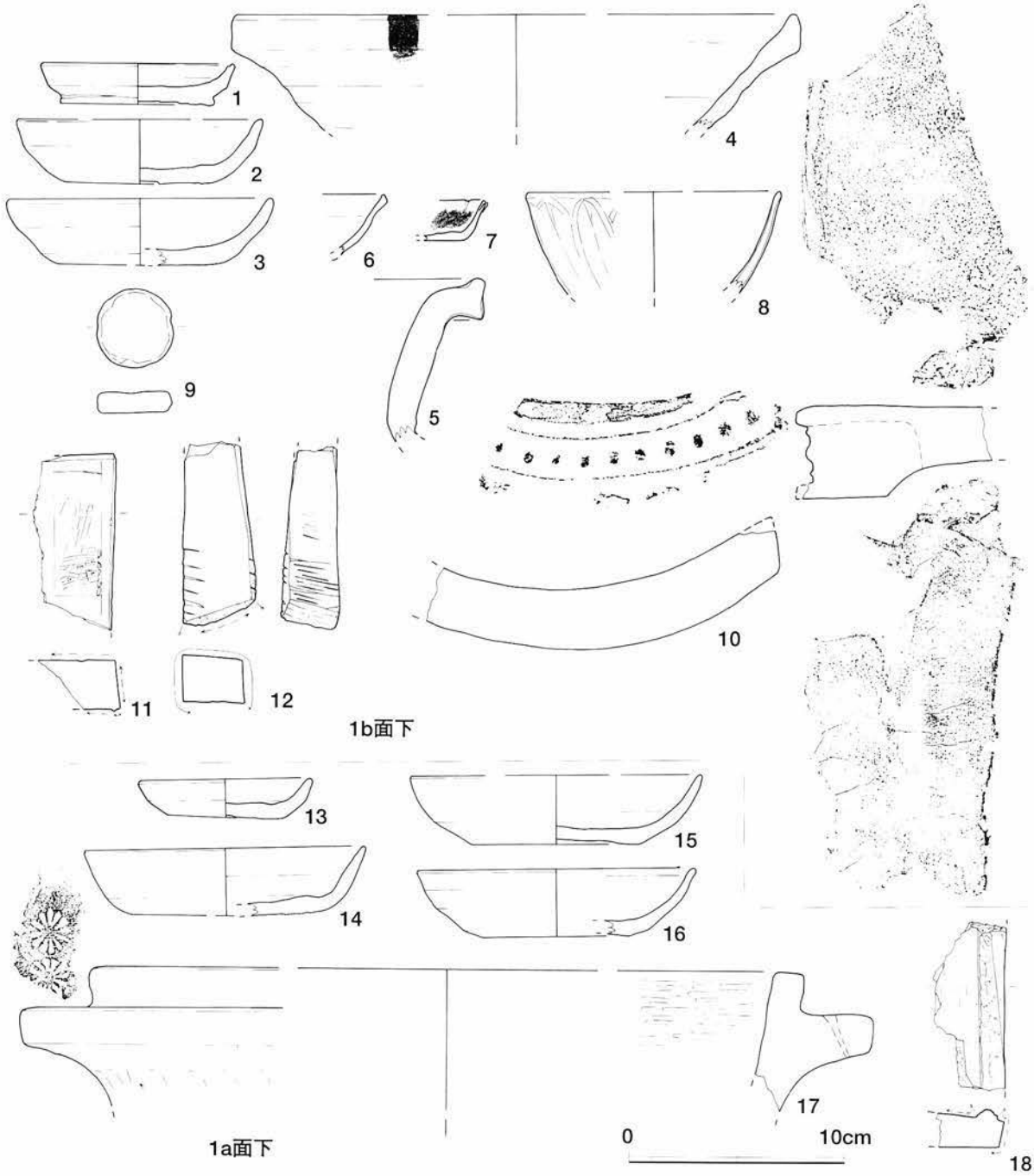


図23　第３調査壙出土遺物（２）

第1a面

発見された最上層の生活面である第1a面には、泥岩礫を薄く版築した道路と小さな土壙が1基発見されたのみであった。道路は幅1m50cmで東西に走る。西の方向には現在の長谷小路が位置する。この道路脇に70×80cm、深さ10cmの小さな土壙401が位置する。土壙内部には、ウシの寛骨が1点埋まっていた。

図23の13～18に、この第1a面を構築した整地土から出土した遺物を図示した。すべて底部糸切りのかわらけの中で、16は13世紀末に現われる薄手丸深の傾向を明確に現している。17は瓦質火鉢。鍔の上面に菊花のスタンプ文がめぐる。18は赤間石の砥きり落とし残片。

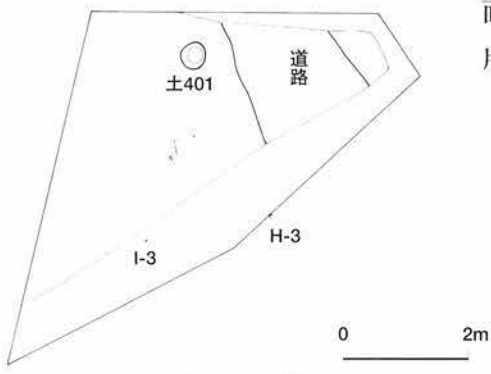


図24　第3調査壙第1a面

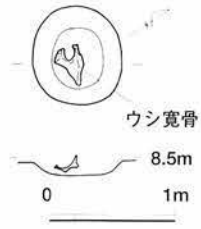


図25　第3調査壙第1a面土壙401

第４節　第４調査壙

前回調査範囲の中央南に接して位置する。中世期の遺構が全面にわたって深く掘り込れていたため、古代の遺構の有無は確認できなかった。

第２面

第２面より新しい第１面の遺構が深く掘り込まれていたため、ほとんど古代の茶褐色砂質土中に発見されたが、調査壙壁面での土層堆積状況観察から中世の第２面に帰属すると確認された遺構群である。土壙１基と溝が２条発見された。

土壙410

調査壙の南東隅に位置する。第１ｂ面の溝に大方が壊されている。深さは80cmほどを測る。覆土最下層には多量の炭化物を混入させる。覆土中からは、手づくねと底部糸切りのかわらけのほかに土師器、須恵器、常滑の甕、獣骨などの細片が出土しているが、図示できなかった。

溝412

溝412は調査壙の中央を東西に走る。調査では溝の南の肩のみを確認し、北側の肩は調査壙の法面の中に位置すると思われる。深さ90cmの断面箱型を呈するものであろう。底面には炭化物を多量に交え、覆土全体も粘質土で覆われてる。覆土中からは、底部糸切りかわらけのほかに、瓦、常滑の甕、南部系山茶碗、摩滅痕の残るこね鉢、獣骨と共に獣骨利用骨細工残片が出土していいる。図29－３は凸面に縄目叩き、凹面に布目と離れ砂痕を残す平瓦である。４は前回の調査でも数多く出土している栗型の素材を切り取ったウシ中手骨残片である。

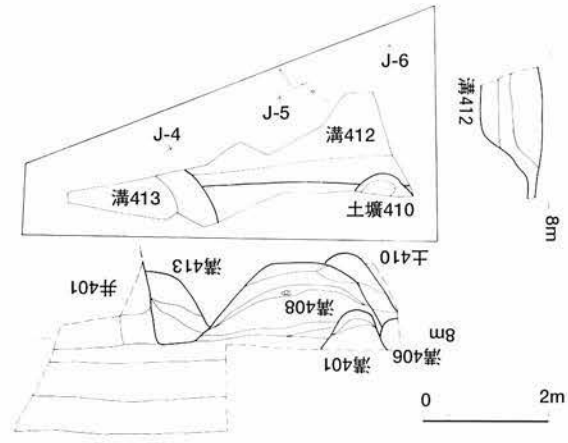


図26　第４調査壙第２面

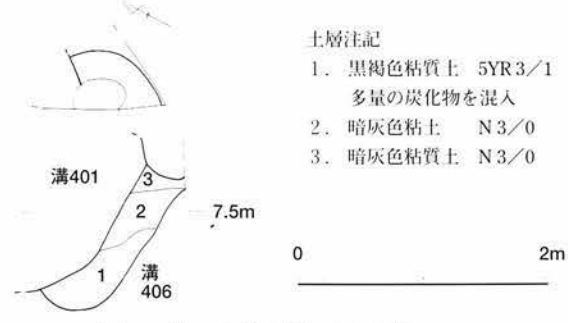


図27　第４調査壙第２面土壙410

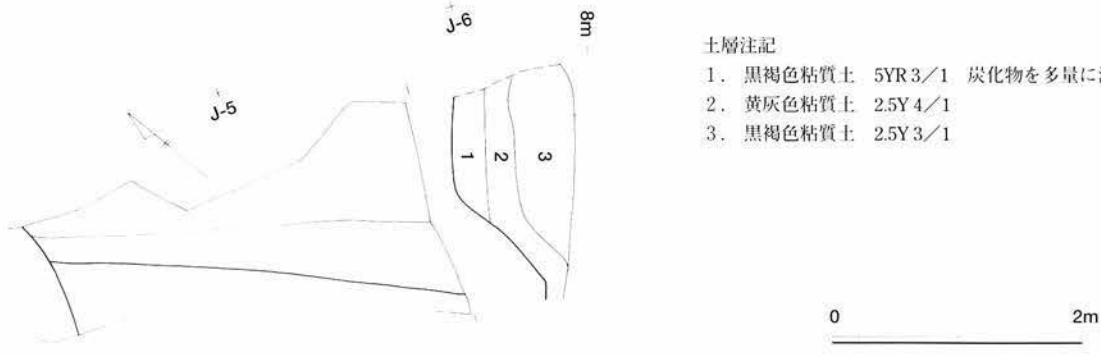


図28　第４調査壙第２面溝412

溝413

調査壙の西端に発見されたが、第1b面の井戸に切られると同時に、調査範囲も狭かったために、ほんの一部が確認されたのみである。溝413は、溝412を切り、412よりも新しい。覆土は粘質土を中心とし、下層には、溝の壁になっている茶褐色砂が崩れて堆積している。覆土中からの出土遺物はなかった。

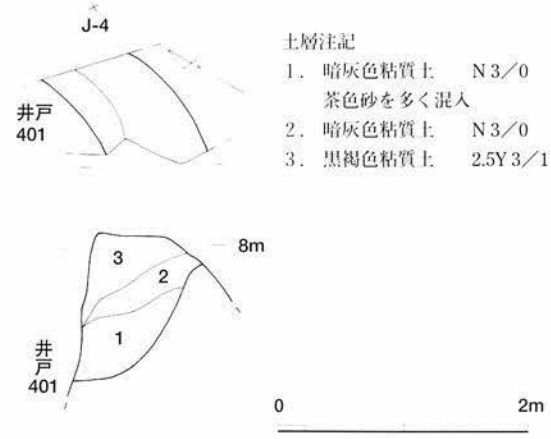


図29　第4調査壙第2面溝413

第1b面

最も多くの遺構が発見されたが、多くの遺構が大きかったため、部分的な確認にとどまってしまった。発見された遺構は、ピットが1口、溝が2条に井戸が1基である。

ピット430

調査壙の東側に位置する。第1a面の溝にほぼ半分ほどが壊され、ピットの西側部分のみが確認された。確認された南北の直径は78cmに、深さ23cmである。柱穴というよりは浅い土壙状の掘り込みかもしれない。覆土内からは、図示できなかった常滑の鉢、渥美製品が出土しているほか、ウシの距骨、貝殻が出土し、後掲の表に掲載しいる。

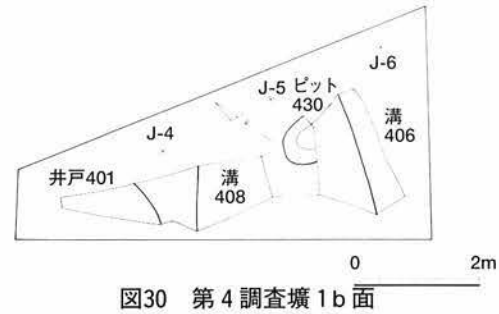


図30　第4調査壙1b面

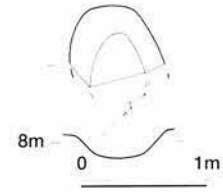


図31　第4調査壙第1b面ピット430

溝406

調査壙の東端に発見されたが、大方は調査壙の外に位置すると思われ、溝の西肩と下場のみが確認された南北に軸線を持つ溝である。上部は第1a面の溝に壊されているため、底部の覆土だけが確認されたが、多くの泥岩粒と炭化物を混入する粘質土である。覆土内からは、底部糸切りかわらけのほかに、常滑の甕・鉢、こね鉢、縄目の平瓦、口兀の白磁皿、ふいごの羽口が出土しているが、図示できなかった。

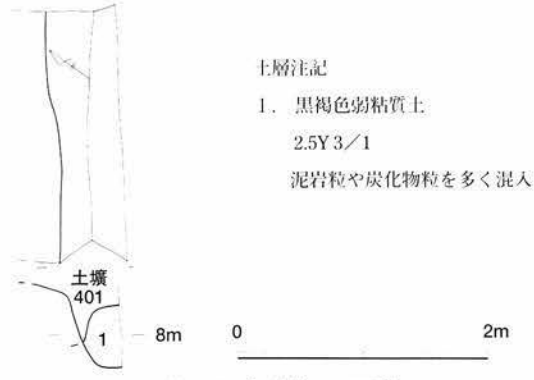
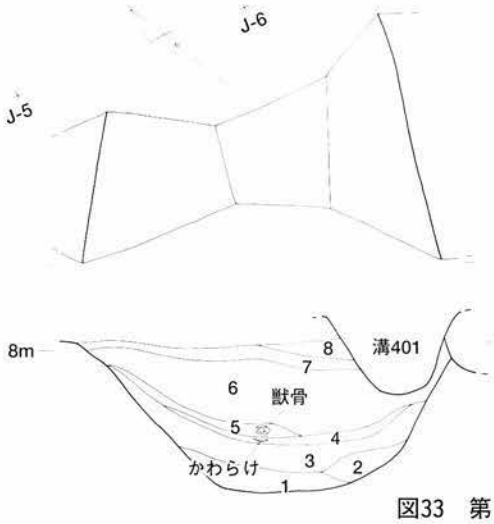


図32　第4調査壙第1b面溝406

溝408

調査壙の中央に南北に軸線をもって発見された。上場幅3m20cm、下場幅1m40cm、深さ1m20cmを測り、断面は開いた「U」字型をなす。覆土は腐植した黒褐色の粘質土を中心とするが、多量の炭化物と焼土を混入する土層が中層と上層の2度に渡って堆積している。中層の炭化物層からは多量の遺物が小さな破片となって発見されているため、これらの炭化物層は付近での火災の後片付けの残土が溝に捨てられたのではないかと考えられる。

中層の炭化物層を境にして、これより先に堆積した土層を下層、後に堆積した土層を上層と分けて、溝408覆土内出土遺物を列記する。まず下層からは、底部糸切りかわらけのほかに、常滑の甕・鉢、瀬



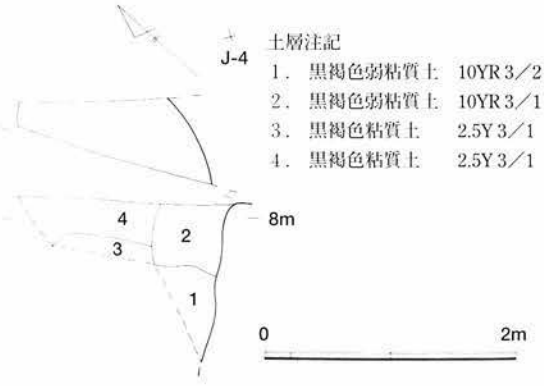
土層注記
1．黒褐色粘質土　5YR3／1　茶色砂を多く混入
2．黄褐色粘質土　5YR3／1
3．暗灰色粘質土　N3／0　炭化物、貝殻粒、かわらけ片を混入
4．黒褐色弱粘質土　2.5Y3／1　多量の炭化物と焼土を混入
5．炭層　獣骨を混入
6．黒褐色弱粘質土　2.5Y3／1
7．黒褐色粘質土　2.5Y3／1　炭化物と焼土を多量に混入
8．黒褐色弱粘質土　2.5Y3／1　泥岩粒、玉砂利、かわらけ片を混入

図33　第4調査壙第1b面溝408

戸、こね鉢、縄目叩の平瓦、櫛掻劃花文と蓮弁文の青磁碗、硯、硯採取残片、獣骨加工品採取残片。上層からは、手づくねと底部糸切りかわらけのほかに、常滑の甕、渥美の甕、こね鉢、瀬戸卸皿、櫛掻文と蓮弁文のそれぞれ青磁碗、青白磁印花皿、白磁壺、火鉢、硯採取残片、それに獣骨である。これらのうち図示できるものを図29－5～16に掲載した。下層出土遺物には、実測図の脇に「下層」と付記した。

井戸401

調査壙の西端に発見された。しかし狭くなっている調査壙の壁面の崩落を恐れ、ほとんど調査を行なえず、裏込めの範囲と井戸枠を示すと思われる土層堆積を確認したのみである。裏込めの覆土内から、底部糸切りかわらけが出土しているが図示できなかった。



土層注記
1．黒褐色弱粘質土　10YR3／2
2．黒褐色弱粘質土　10YR3／1
3．黒褐色粘質土　2.5Y3／1
4．黒褐色粘質土　2.5Y3／1

図34　第4調査壙第1b面井戸401

第1a面

溝401

第1a面では、調査壙の東端にやはり南北に軸線を持つ溝を1条発見した。上場幅1m17cm、下場幅50cm、深さ64cmを測り、断面の形状は「U」字型をなす。第1b面の南北溝408に比べると、規模が大分縮小している。粘質土の覆土中からは、底部糸切りかわらけのほかに、摩滅痕の残るこね鉢、伊勢系土鍋、栗型製作用獣骨加工未製品、常滑の甕・鉢、土器質火鉢、硯採取残片、スラグ、貝殻が出土している。かわらけは深めの大型品を中心にしており、薄手丸深かわらけと同時存在するタイプである。骨製品未製品は、前回の調査でも出土している栗型の素材がウシの中手骨から剥

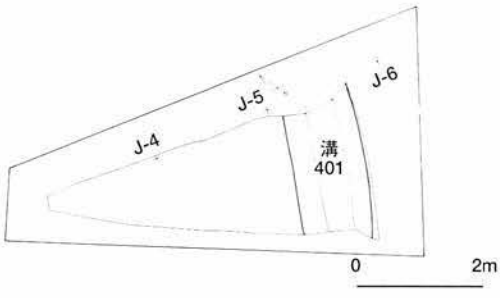
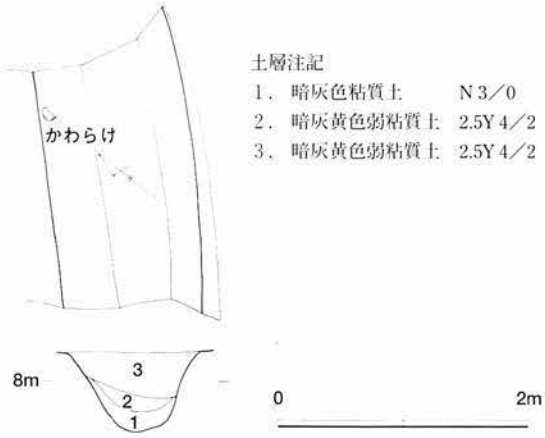


図35　第4調査壙第1a面



土層注記
1．暗灰色粘質土　N3／0
2．暗灰黄色弱粘質土　2.5Y4／2
3．暗灰黄色弱粘質土　2.5Y4／2

図36　第4調査壙第1a面溝401

ぎ取られたものである（図29－17～21）。

また、図29－22に第1a面を構成する整地土層から出土した舶載の白磁口兀碗を示した。

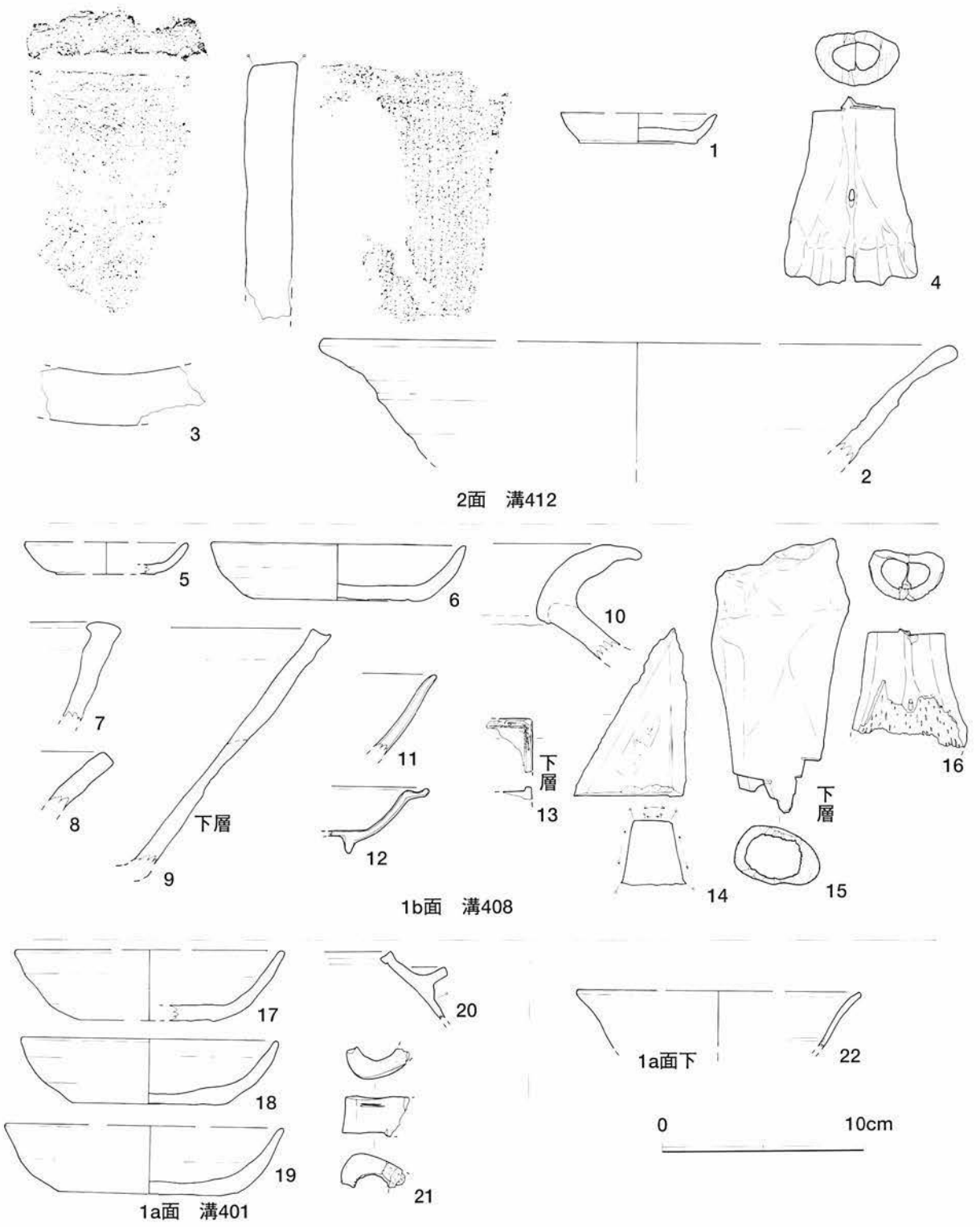


図37　第4調査壙出土遺物

表1　硯石出土地点と点数

出土地点	赤間石硯未製品	黒色粘板岩硯未製品	赤間石加工端材	黒色粘板岩加工端材	合計
第1調査壙1a下			3	1	4
第1調査壙1a上			7		7
第1調査壙試掘			2		2
第3調査壙1a下	1		6	3	10
第3調査壙1b下			3	1	
第3調査壙方形竪穴建物401			5	2	7
第3調査壙方形竪穴建物401裏込め			1		1
第4調査壙1a下			8	1	9
第4調査壙1a上			1		
第4調査壙サブトレ			2		2
第4調査壙溝401			1		1
第4調査壙溝408			6		6
第4調査壙溝408下層		1	1		2
第4調査壙溝412			1		1
					総計
合計	1	1	47	7	56

表2　貝類出土地点と点数

出土地点	干潟群集	内湾泥底群集		内湾砂底群集		湾外砂底群集		岩礁群集
	シオフキガイ	アカニシ	バイガイ	サルボウ	ツメタガイ	チョウセンハマグリ	ダンベイキサゴ	サザエ
第1調査壙溝407		1						
第1調査壙溝411		1						
第3調査壙1a下		3						
第3調査壙1a下		1						
第3調査壙1a上		1			4			
第3調査壙1b下				1				
第3調査壙p411		1						
第3調査壙犬埋葬		5				25		
第3調査壙土壙402		1						
第3調査壙土壙405		1						
第3調査壙土壙407		2						
第3調査壙土壙408		1						
第3調査壙方形竪穴建物401		1						
第4調査壙1a下	1						1	
第4調査壙1a上					1			1
第4調査壙p430					1			1
第4調査壙井戸401		1						
第4調査壙溝401		1	2		2	1		
第4調査壙溝406		1						
合計	1	22	2	1	8	26	1	2

表3　獣骨分類表（1）

出土地	頭骨	環椎	軸椎	頸椎	腰椎	肋骨	寛骨	仙骨	歯	角	上顎骨			下顎骨			切歯骨			肩胛骨			上腕骨		
											r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u
哺乳類																									
ウマEquus caballaus																									
第1調査壙溝401																									
第3調査壙1a上														1s											
第3調査壙1a上壙401							1s																		
第3調査壙1b直上																				1p					
第4調査壙p430																									
第4調査壙溝412																									
ウシBos taurus																									
第3調査壙方形竪穴建物401				1s	8s	7s	1s													1p					
第4調査壙溝408下層														1s											
第4調査壙土層14																								1per	
イヌCanis familiaris																									
第1調査壙1a下																									
第3調査壙犬埋葬2体分																									
第3調査壙土壙405																									
第3調査壙方形竪穴建物401				9		6s	1per							1per											
第4調査壙溝406				1																					
第4調査壙溝408下層																									
第4調査壙溝412																				1s					
イノシシSus scrofa																									
第3調査壙1b下				1s			1s								1s										
第4調査壙1a下											1s														
ネズミMuridae																									
第4調査壙1a下														1per											
イルカDelphinidae (Grapus giseus)																									
第1調査壙溝411			8s																						
第3調査壙1a下																									1s
第4調査壙1a下													1s												
ヒトHomo sapience sapience																									
第3調査壙1b下																									
ヒシクイ属Anser spp.																									
第4調査壙1a下																									

表3　獣骨分類表（2）

出土地	橈骨			尺骨			中手骨			大腿骨			膝蓋骨			脛骨			腓骨			距骨		
	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u
哺乳類																								
ウマEquus caballaus																								
第1調査壙溝401																1p								
第3調査壙1a上																								
第3調査壙1a上壙401																								
第3調査壙1b直上																								
第4調査壙p430																						1per		
第4調査壙溝412										1per														
ウシBos taurus																								
第3調査壙方形竪穴建物401										1p														
第4調査壙溝408下層		1d																						
第4調査壙土層14																								
イヌCanis familiaris																								
第1調査壙1a下																1p	1d							
第3調査壙犬埋葬2体分																								
第3調査壙土壙405																								
第3調査壙方形竪穴建物401		1p																						
第4調査壙溝406																								
第4調査壙溝408下層										1s						1per								
第4調査壙溝412																								
イノシシSus scrofa																								
第3調査壙1b下																								
第4調査壙1a下																								
ネズミMuridae																								
第4調査壙1a下																								
イルカDelphinidae (Grapus giseus)																								
第1調査壙溝411																								
第3調査壙1a下																								
第4調査壙1a下																								
ヒトHomo sapience sapience																								
第3調査壙1b下											1p													
ヒシクイ属Anser spp.																								
第4調査壙1a下			1s																					

表3　獣骨分類表（3）

出土地	踵骨			中足骨			中手・足骨			手・足根骨			基節骨			中節骨			末節骨		
	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u
哺乳類																					
ウマEquus caballaus																					
第1調査壙溝401																					
第3調査壙1a上																					
第3調査壙1a上壙401																					
第3調査壙1b直上																					
第4調査壙p430																					
第4調査壙溝412																					
ウシBos taurus																					
第3調査壙方形竪穴建物401												1s	2per			1per			1per		
第4調査壙溝408下層																					
第4調査壙上層14																					
イヌCanis familiaris																					
第1調査壙1a下								1d													
第3調査壙犬埋葬2体分																					
第3調査壙土壙405				1per																	
第3調査壙方形竪穴建物401																					
第4調査壙溝406																					
第4調査壙溝408下層																					
第4調査壙溝412																					
イノシシSus scrofa																					
第3調査壙1b下																					
第4調査壙1a下																					
ネズミMuridae																					
第4調査壙1a下																					
イルカDelphinidae (Grapus giseus)																					
第1調査壙溝411																					
第3調査壙1a下																					
第4調査壙1a下																					
ヒトHomo sapience sapience																					
第3調査壙1b下																					
ヒシクイ属Anser spp.																					
第4調査壙1a下																					

表4　魚骨分類表

出土地	椎骨	角骨	歯骨			前頭骨			後頭骨			前鰓蓋骨			鰓蓋骨			上顎骨			主上顎骨			主鰓蓋骨			関節骨
			r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	
マグロ類Thunnus sp.																											
第1調査壙1a上																										1s	
第1調査壙1a下	1																										
第4調査壙井戸401	1																										
メジロサメFamilu Carcharhinidae																											
第3調査壙1b下	1																										
第3調査壙p422	1																										
マイワシSadinops melanostictus																											
第3調査壙1b下																									1s		

表5　出土遺物観察表

図版	No.	出土地点	種別	口径	底径	器高	備考
8	1	溝110	かわらけ	14.30	11.30	2.50	底部糸切り。雲母、白色針状物質を混じえる橙色粉質土。
8	2	溝111	かわらけ	8.00	6.60	1.15	底部糸切り。白色砂を混じえる橙色精良粉質土。
8	3	溝111	かわらけ	9.20	7.40	1.10	底部糸切り。白色砂、白色針状物質を多量にまじえる暗橙色＋淡茶色粉質土。
8	4	溝111	磨製石斧				ホルンフェルス
8	5	溝105	銅銭				五銖
8	6	溝105	銅銭				開元通寶
8	7	溝105	銅銭				皇宋通寶
8	8	溝105	銅銭				熙寧元寶
8	9	溝105	銅銭				熙寧元寶
8	10	溝105	銅銭				淳熙元寶
8	11	溝105	銅銭				元豊通寶
8	12	溝105	銅銭				元祐通寶
8	13	溝105	銅銭				紹熙元寶
8	14	溝107	かわらけ	13.50	7.90	3.40	底部糸切り。白色砂、白色針状物質を混じえる橙色粉質土
8	15	溝107	かわらけ	10.40	5.80	3.20	底部糸切り。雲母、白色砂を混じえる明橙色粉質土。
8	16	溝107	こね鉢				山茶碗窯系。白色細石を混じえる灰色緻密土。
8	17	溝107	常滑甕	28.00			長石、白色細石を混じえる灰色土。
8	18	ピット131	瀬戸入れ子	7.20	4.20	2.50	白色微石粒を混じえる灰色緻密土。
8	19	第1調査壙1b面下	かわらけ	7.65	5.40	1.70	底部糸切り。黒色微砂、白色針状物質を混じえる明橙色粉質土。
8	20	第1調査壙1b面下	かわらけ	8.80	5.90	1.85	底部糸切り。黒色砂粒を多く混じえるザラついた濃橙色粉質土。
8	21	第1調査壙1b面下	かわらけ	9.20	6.70	1.55	底部糸切り。雲母を混じえる淡茶色粉質土。
8	22	第1調査壙1b面下	こね鉢	35.00			山茶碗窯系。白色微石を混じえる暗灰色土。
8	23	第1調査壙1b面下	常滑こね鉢				白色小石を多量に混じえる橙褐色土。
8	24	第1調査壙1a面下	丸瓦				凸面縄目叩き、凹面布目。白色微石を混じえる暗黄灰色土。
8	25	第1調査壙1a面下	山茶碗				白色微石粒を混じえる灰色土。
8	26	第1調査壙1a面下	常滑甕				白色小石を混じえる黒色土。
8	27	第1調査壙1a面下	青磁鉢				釉挿厚い暗緑色。素地は白色緻密土。
8	28	第1調査壙1a面下	滑石鍋				紅灰白色。
8	29	第1調査壙1a面下	銅銭				皇宋通寶
8	30	第1調査壙1a面上	かわらけ	13.70	8.50	3.60	底部糸切り。雲母、白色砂を多く混じえる橙色粉質土。
8	31	第1調査壙1a面上	こね鉢		11.20		山茶碗窯系。黒色細石を混じえる灰色土。
8	32	第1調査壙1a面上	瀬戸天目茶碗	12.60			黒色微砂を混じえる淡黄色粉質土。
8	33	第1調査壙1a面上	硯未製品		幅4.7		赤間石。
8	34	第1調査壙1a面上	碁石				粗粒安山岩。
17	1	土壙401	白磁四耳壺		8.00		黒色微砂を小量混じえる白色土。釉は淡灰草色。
17	2	土壙407	かわらけ	10.80	9.60	1.80	手づくね。黒色砂、白色砂と雲母を混じえる暗橙色粉質土。
17	3	土壙407	かわらけ	12.00	7.10	3.00	底部糸切り。白色砂を混じえる暗橙色粉質土。口径不安。
17	4	土壙407	常滑甕				白色小石を混入する灰黒色土。
17	5	溝111	かわらけ	9.40	7.00	2.25	手づくね。雲母を混じえる淡茶色粉質土。
17	6	溝111	かわらけ	10.00	8.70		手づくね。雲母、白色砂を小量混じえる明橙色精良粉質土。
17	7	溝111	かわらけ	9.20	7.70	1.65	手づくね。雲母、白色針状物質を混じえる淡橙色粉質土。
17	8	溝111	かわらけ	7.60	4.70	1.75	底部糸切り。黒色砂、雲母を混じえる淡茶色粉質土。
17	9	溝111	かわらけ		4.20		底部糸切り。雲母を小量混じえる橙色精良緻密土。
17	10	溝111	かわらけ	13.10	7.30	3.20	底部糸切り。雲母、白色針状物質を混じえる橙色粉質土。焼き上がりは重い。
17	11	溝111	骨製品残片				ウシ中手。Lp.
17	12	溝111	骨製品		幅1.15		綱針か
17	13	溝115	かわらけ	12.20	8.80	3.20	底部糸切り。雲母、白色針状物質を混じえる赤褐色粉質土。

表5　出土遺物観察表

図版	No.	出土地点	種別	口径	底径	器高	備考
17	14	土壙401	かわらけ	7.90	5.80	1.50	底部糸切り。雲母、白色針状物質を混じえる淡茶色粉質土。
17	15	土壙401	かわらけ	7.90	5.25	1.65	底部糸切り。黒色砂、白色粗砂、雲母を混じえる淡茶色粉質土。
17	16	土壙401	かわらけ	8.00	5.40	1.90	底部糸切り。黒色粗砂、雲母、白色針状物質を混じえる淡橙色粉質土。
17	17	土壙401	かわらけ	12.30	7.80	2.75	底部糸切り。黒色微砂を混じえる淡茶色粉質土。
17	18	土壙401	かわらけ	12.30	7.70	3.00	底部糸切り。白色小石、雲母を混じえる淡茶色粉質土。
17	19	土壙401	かわらけ	11.30	6.60	2.70	底部糸切り。赤褐色石粒を混じえる橙色粉質土。
17	20	土壙401	かわらけ	12.00	7.70	3.20	底部糸切り。白色微砂、白色針状物質を混じえる淡茶色粉質土。
17	21	土壙401	かわらけ	13.80	8.10	3.70	底部糸切り。白色微砂を混じえる明橙色粉質土。
17	22	土壙401	かわらけ	13.00	6.80	3.60	底部糸切り。淡橙色精良粉質土。
17	23	土壙404	かわらけ	16.00	9.00	4.60	底部糸切り。白色微砂と雲母を混じえる淡橙色粉質土。
17	24	方形竪穴建築址401裏込め	かわらけ	8.00	5.10	1.90	底部糸切り。黒色砂と白色針状物質を混じえる橙色粉質土。
17	25	方形竪穴建築址401裏込め	かわらけ	8.00	5.30	1.75	底部糸切り。黒色砂粒を多量に混じえる橙色粉質土。
17	26	方形竪穴建築址401裏込め	かわらけ	13.10	6.50	3.50	底部糸切り。淡橙色精良粉質土。
17	27	方形竪穴建築址401裏込め	平瓦				凸面：縄目叩き。凹面：離れ砂。
17	28	方形竪穴建築址401	かわらけ	8.20	5.90	1.85	底部糸切り。黒色微砂、白色針状物質を混じえる橙色粉質土。
17	29	方形竪穴建築址401	かわらけ	11.90	7.80	3.20	底部糸切り。赤褐色泥粒、雲母を混じえる濃橙色粉質土。
17	30	方形竪穴建築址401	かわらけ	13.80	7.30	3.90	底部糸切り。黒色微砂白色微砂を混じえる淡茶色粉質土。
17	31	方形竪穴建築址401	平瓦				凸面：縄目叩き。凹面：布目、離れ砂。
17	32	ピット424	火鉢				瓦質。板状脚部のみ。
23	1	第3調査壙1b面下	かわらけ	9.10	7.10	1.90	底部糸切り。黒色微砂と白色針状物質を大量に混じえる淡橙色粉質土。
23	2	第3調査壙1b面下	かわらけ	11.40	6.80	2.95	底部糸切り。雲母、白色針状物質を混じえる暗橙色粉質土。
23	3	第3調査壙1b面下	かわらけ	12.40	7.60	3.05	底部糸切り。黒色微砂、雲母を混じえる暗茶色粉質土。
23	4	第3調査壙1b面下	東播系こね鉢	26.40			白色細石を多量に混じえる暗灰色土。
23	5	第3調査壙1b面下	常滑甕				白色細石を混じえる灰白色土。
23	6	第3調査壙1b面下	瀬戸入れ子				白色微砂を若干混じえる灰色緻密粘質土。
23	7	第3調査壙1b面下	瀬戸入れ子				輪花。白色微石粒を若干混じえる灰色緻密土。内面に煤。底部へら切り。
23	8	第3調査壙1b面下	青磁連弁文碗	11.90			黒色微砂、白色微石粒を混じえる白色緻密土。気泡の浮く、淡緑色。
23	9	第3調査壙1b面下	かわらけ円盤	3.65×3.45×1.0			かわらけ転用品。黒色粗砂を多く混じえる淡橙色砂質土。
23	10	第3調査壙1b面下	軒平瓦				珠文。石粒を多く混じえる灰白色土。
23	11	第3調査壙1b面下	硯未製品	8.05×3.8×2.25			黒色粘板岩。
23	12	第3調査壙1b面下	砥石	8.45×3.35×2.15			上野産。粗粒凝灰岩。
23	13	第3調査壙1a面下	かわらけ	8.10	5.30	1.85	底部糸切り。黒色砂、雲母、白色針状物質を混じえる淡茶色粉質土。
23	14	第3調査壙1a面下	かわらけ	13.10	9.00	3.15	底部糸切り、雲母、白色針状物質を混じえる茶色粉質土。
23	15	第3調査壙1a面下	かわらけ	13.60	7.60	3.20	底部糸切り。雲母、焼成貝殻白色板状物、白色針状物質を混じえる橙色粉質土。
23	16	第3調査壙1a面下	かわらけ	13.00	6.90	3.30	底部糸切り。白色小石、雲母を混じえる明橙色粉質土。
23	17	第3調査壙1a面下	火鉢	33.20			瓦質。鍔に菊花スタンプ。白色小石、黒色微砂を混じえる灰白色土。
23	18	第3調査壙1a面下	硯石残片	7.7×3.35×1.6			赤間石。
29	1	溝412	かわらけ	7.80	5.90	1.50	底部糸切り。黒色砂、雲母、白色針状物質を混じえる淡茶色粉質土。
29	2	溝412	こね鉢	31.80			山茶碗窯系。白色細石・小石を混じえる灰色土。
29	3	溝412	平瓦				凸面：縄目叩き、凹面：布目と離れ砂。白色砂と雲母を混じえる暗灰色土。
29	4	溝412	骨製品残片				ウシ中手。Rd.
29	5	溝408	かわらけ	8.20	5.60	1.60	底部糸切り。黒色砂、雲母を混じえる淡橙色粉質土。
29	6	溝408	かわらけ	12.70	8.30	2.75	底部糸切り。白色砂、雲母を混じえる淡橙色粉質土。
29	7	溝408	火鉢				瓦質鉢型。黒色・白色粗砂を混じえる暗灰色土。傾き不安。
29	8	溝408	常滑こね鉢				白色微石を混じえる淡茶色粉質緻密土。
29	9	溝408下層	常滑こね鉢				白色小石を混じえる黒色土。
29	10	溝408	渥美甕				白色細石を混じえる明灰色緻密土。

表5　出土遺物観察表

図版	No.	出土地点	種別	口径	底径	器高	備考
29	11	溝108	青磁連弁文碗				黒色微砂を多く混じえる灰色土。気泡の多い淡緑色釉。
29	12	溝108	青磁鉢				白色微石粒を混じえる灰色粘質土。暗灰緑色釉。
29	13	溝108下層	硯				黒色粘板岩。
29	14	溝108	硯石残片	8.25×5.5×3.25			赤間石。
29	15	溝108下層	骨加工品残片				ウシ橈骨。Ld.
29	16	溝108	骨加工品残片				ウシ中手。Lp.
29	17	溝101	かわらけ	13.30	6.80	3.50	底部糸切り。雲母、白色針状物質を混じえる橙色粉質土。
29	18	溝101	かわらけ	12.90	7.30	3.25	底部糸切り。白色砂、雲母を混じえる明橙色粉質土。
29	19	溝101	かわらけ	11.00	9.00	3.50	底部糸切り。白色砂、赤褐色泥粒を多く混じえる橙色粉質土。
29	20	溝101	伊勢系土鍋				黒色粗砂を多く混じえる白黄色土。
29	21	溝101	骨加工品	3.2×1.7×1.2			ウシ中手。
29	22	第1調査壙1a面下	白磁口兀碗	11.30			黒色砂を混じえる白色緻密土。

第四章　まとめ

今回、鎌倉市由比ガ浜三丁目228番地点にて行なった発掘調査で発見された遺構と遺物の種類と性格は、1991年に同地において行なった調査成果とほぼ同様の短い溝と泥岩版築道路を地境とした敷地の中で営まれた砚や獣骨製栗型の製作と言った工芸職人居住地の様相を示すものであった。地境遺構による地割りは、1991年調査範囲の更に外側へと広がるものと想定していたが、今回同地での４個所での小規模な発掘で地割りの広がりが再確認できた。ここでは、今回の調査と1991年の前回調査で発見された中世に帰属する遺構群を図38に合成して、調査のまとめとしたい。

中世最下層の第２面は、上層の第１ｂ面の遺構によって多くが壊され、また調査範囲外周の壁が法面となっているため、生活面が深い第２面では今回の調査と前回の調査範囲とが接続せず、遺構の合成でも空間地が広くあき、明確ではない。他方、上層の第１ｂ面と第１ａ面では1991年調査で認められた地割りが更に外周へと広がることを今回の調査成果に確認できる。すなわち、第１調査壙の溝405と溝407はそれぞれは1991年調査の溝31、溝30の延長であり、第４調査壙の溝406・408は溝25・37の延長もしくはそれらに接続する別の溝であることが理解できる。第１ａ面では第４調査壙の溝401が91年の溝４・溝５に連なる新たに発見された溝である。これらの今回発見された溝に対応する‘91年の溝は、遺構図に書き込まれている地割り線を想定するする際の根幹をなした遺構であり、それらとの関連を持つ今回発見された溝は地割り線が更に調査区外へと広がることを確信させるものである。ただし、今回発見された第１ａ面の道路跡は、‘91年調査で発見されている道路跡とは若干位置や方位がずれている。これは、‘91年調査時に発見された道路版築面に比べて、今回の版築面は土層図に見られたように強固なものでなく、調査範囲も狭いために軸線の把握を間違えた可能性が残されるが、全体の地割りを大きく変更させるものではないであろう。なお、井戸401はやはり井戸１と同一遺構である。

今後とも、周辺の調査を継続することで、中世鎌倉期における政治的中心部から離れた長谷小路周辺での町並みを明かにすることができであろう。

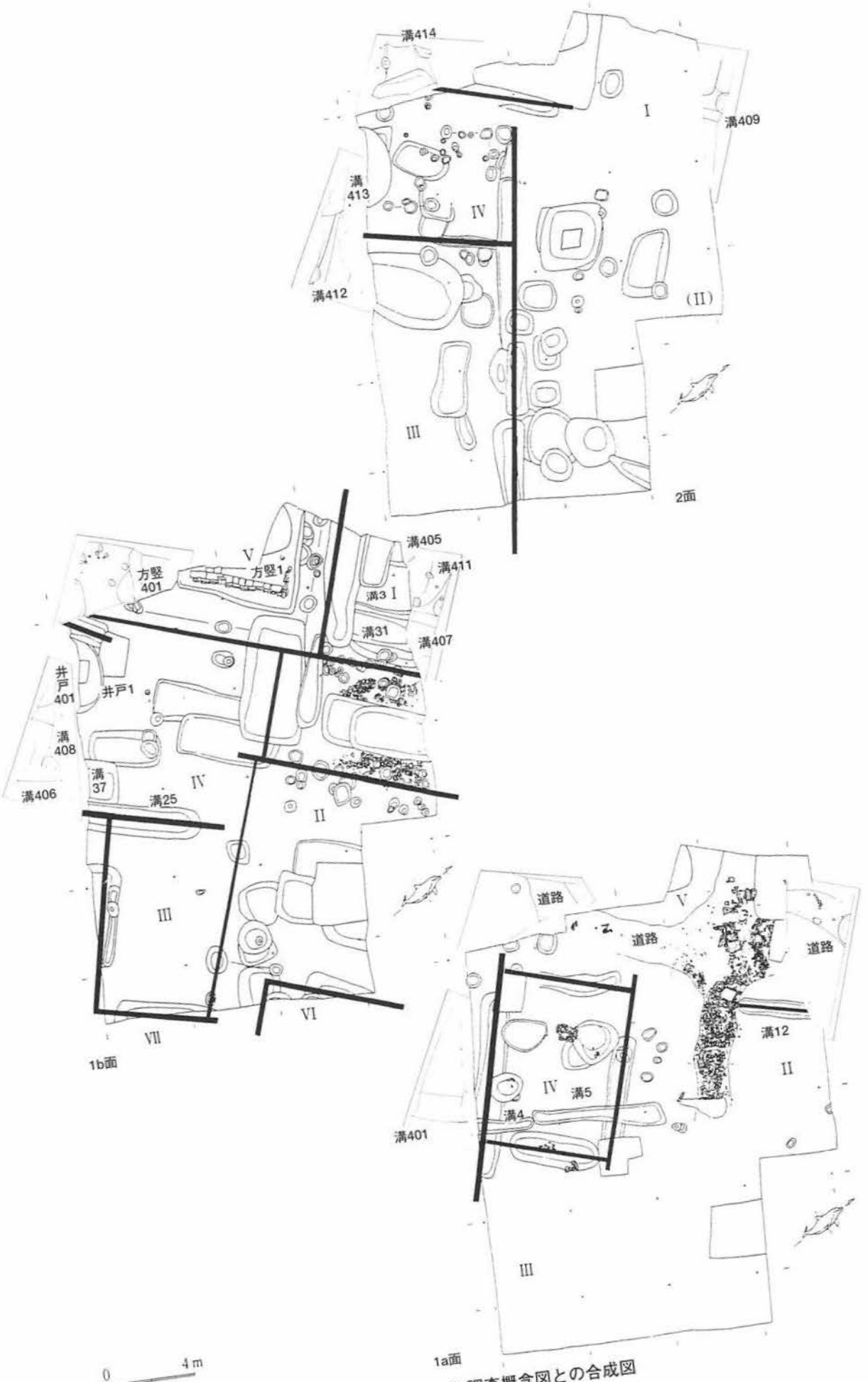


図38　1991年調査概念図との合成図

写　真　図　版

◀第1調査壙第2面全景（東から）

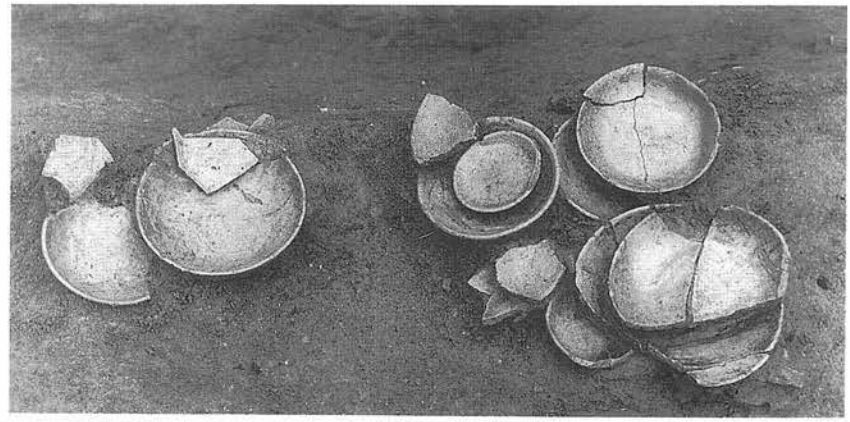
▼第1調査壙北壁土層

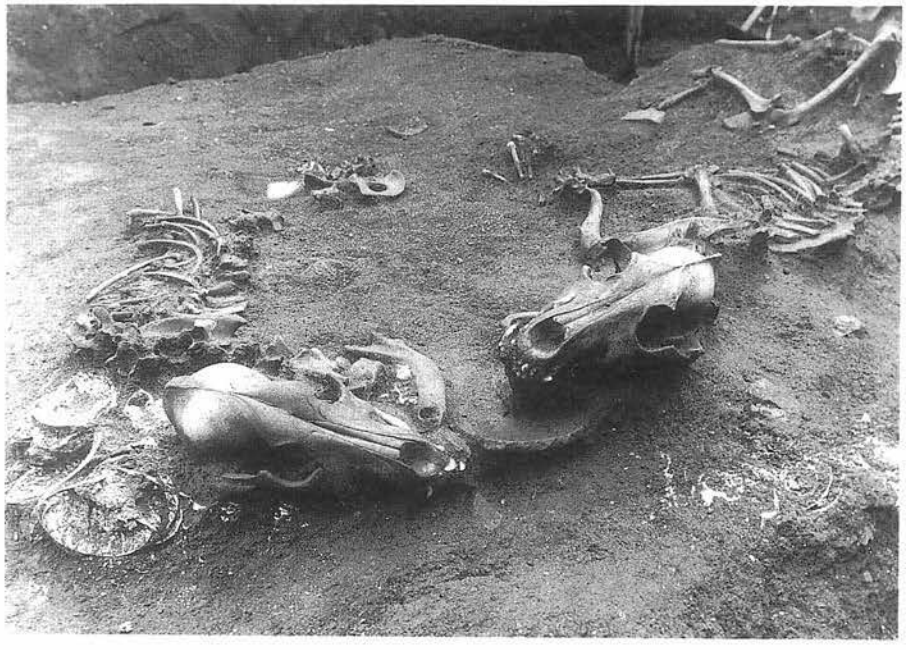
◀第1調査壙第1ａ面上出土瀬戸天目茶碗

図版 2

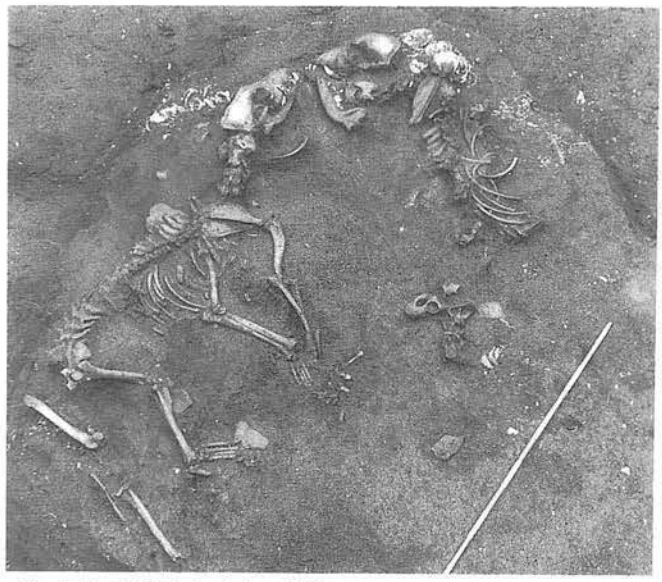
◀第3調査壙第1b面全景（北から）

▼第3調査壙土壙402かわらけ出土状況

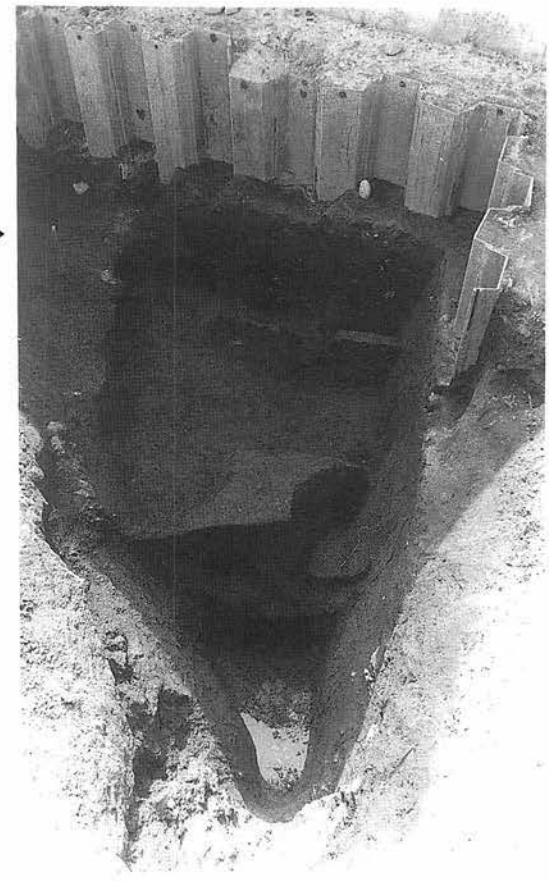




◀第3調査壙発見のイヌ出土状況



▲第3調査壙発見イヌ骨の全景



第3調査壙第2面全景（北から）▶

◀第4調査壙第2面全景（北から）

図版 4

17-16

17-14

17-20

17-26

17-18

17-21

17-30

17-23

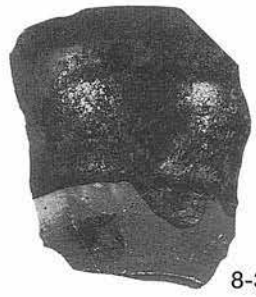
かわらけ

37-10

渥美

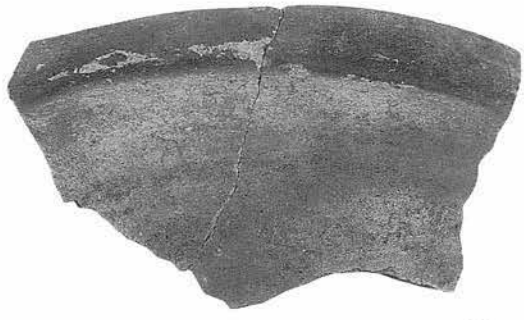
23-8

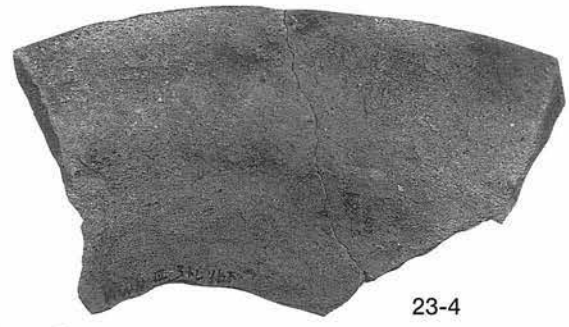
中国青磁


8-32

8-18

瀬戸

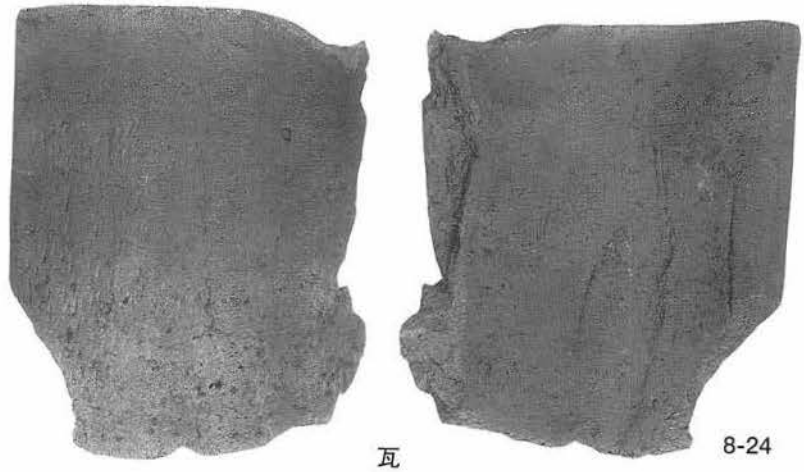



23-4

東播系こね鉢

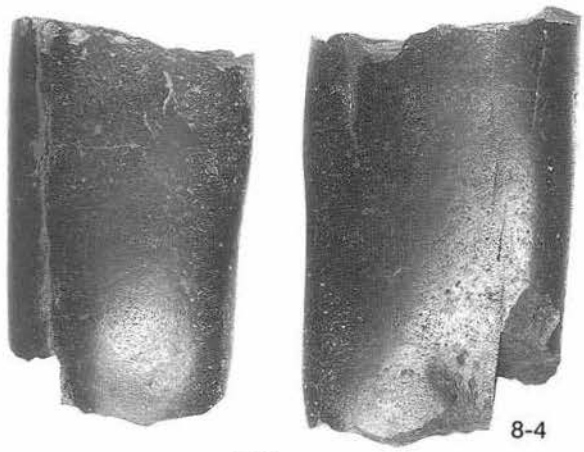
出土遺物（1）

23-10



瓦

8-24



石斧

8-4

23-12

砥石

ウシ中手骨加工残片

17-11

37-4

出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	14
編著者名	
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-0012　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 由比ヶ浜三丁目228番2の一部外	204	No.236			平成8年10月28日 ～ 平成8年11月19日	11.45	診療所併用個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長谷小路周辺遺跡	都市	鎌倉～室町・古代	竪穴住居址1棟、方形竪穴建物1棟、溝10条、土壙4基	磨製石斧 かわらけ 瀬戸 獣骨 獣骨加工未成品	なし

円覚寺門前遺跡（No.287）

鎌倉市山ノ内字藤源治951番２地点

例　　言

1．本書は円覚寺門前遺跡の内、鎌倉市山ノ内951番２地点における緊急発掘調査の報告である。

2．発掘調査は個人専用住宅に係る建築範囲約65㎡を対象とし、平成８年11月６日～11月29日にかけて鎌倉市教育委員会によって実施された。

3．報告書作成メンバーと担当分野

原稿執筆　田代郁夫（第１章）、継実（第２～５章）

資料整理　浜野洋一、松山敬一朗

図版作成　宗臺富貴子、深尾義子、馬瀬直子、笠原さやか、小野和代、本田礼、小川婦美子、小針恵子、武田典子

4．調査体制は以下のとおりである。

調査主体　鎌倉市教育委員会

主任調査員　田代郁夫

調　査　員　梅木信之

調査補助員　本田礼

5．出土遺物は、鎌倉市教育委員会が保管している。

凡　　例

・各図面の縮尺は次のとおりである

遺跡位置図（１）：１／2500

遺跡位置図（２）：１／250

基本土層堆積図：１／40

遺　　構　　図：１／60，１／30

旧河道平面図：１／60

旧河道断面図：１／30

遺物実測図：１／３

・各遺構図中の標高数値はすべて海抜高である

本　文　目　次

第１章　遺跡の歴史的環境 ……402
第２章　調査の概要 ……404
　第１節　調査に至る経緯と経過 ……404
　第２節　基本層序 ……404
第３章　発見した遺構と遺物 ……407
　第１節　発見遺構 ……407
　第２節　発見遺物 ……407
第４章　まとめ ……411
－附編－　鎌倉市円覚寺門前遺跡のテフラ（火山灰）分析結果 ……412

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（１）……403
第２図　遺跡位置図（２）……405
第３図　遺跡内基本土層堆積図 ……406
第４図　遺構図 ……408
第５図　遺構図（井戸）……409
第６図　出土遺物実測図 ……410
第７図　小袋谷川旧河道平面図 ……414
第８図　小袋谷川旧河道土層堆積図
　（火山灰分析資料採取位置図）……415

図　版　目　次

図版１　調査区全景、土層堆積状況 ……419
図版２　井戸址 ……420

第１章　遺跡の歴史的環境

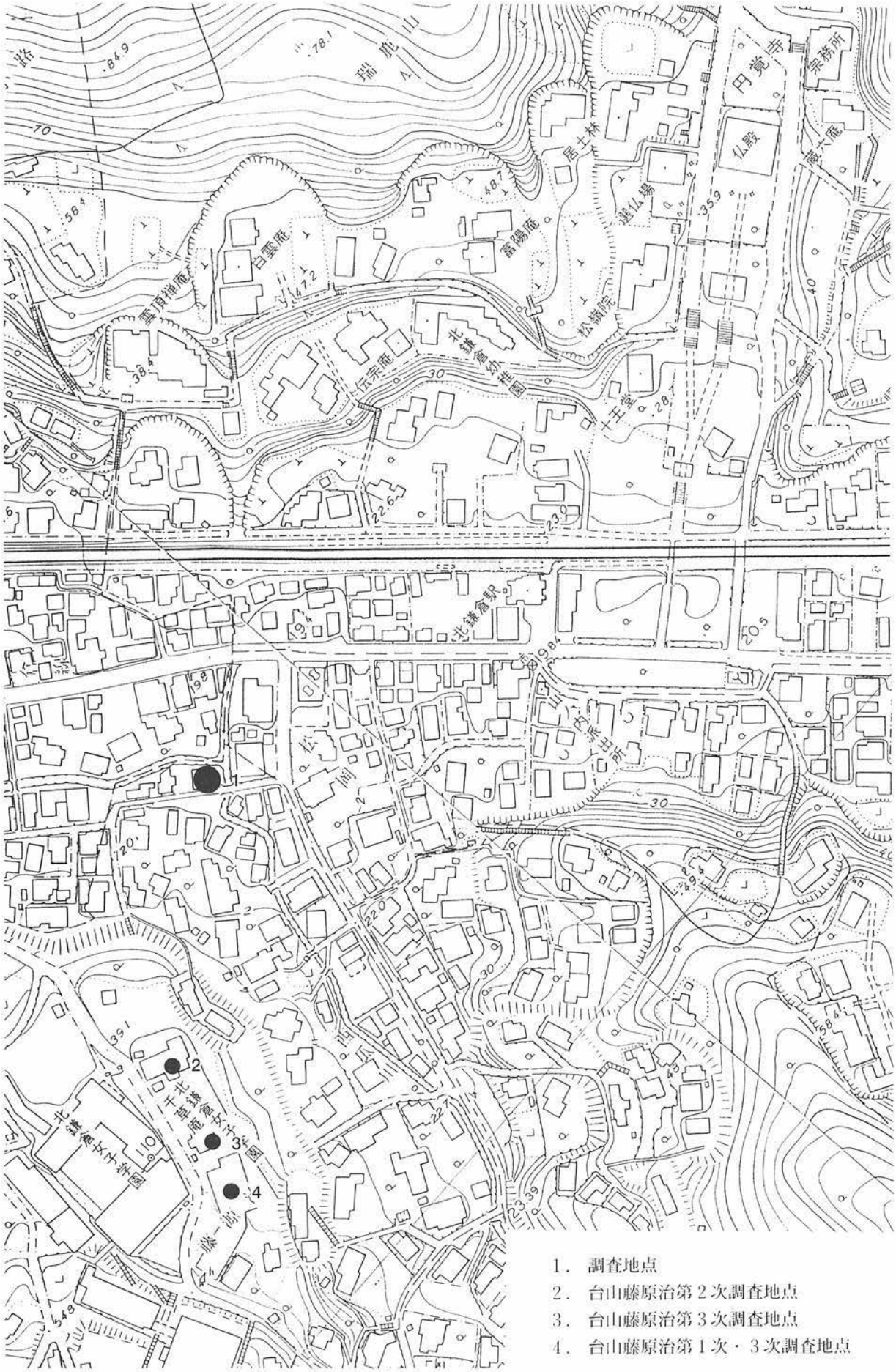
鎌倉七口のひとつといわれる巨福呂坂口から武蔵方面に向かう道は、山ノ内路といわれている。『吾妻鏡』仁治元年十月小十日条に「前武州の御亭において、山内の道路を造らるべきの由、その沙汰あり。安東藤内左衛門尉これを奉す。」とあり、高柳光寿氏はこの記事をもって、巨福呂坂の開通した記事とされている。そして、それまでの山ノ内路は、浄智寺のところから亀ヶ谷坂を越えて武蔵大路に合したものとされる。

山ノ内路はその名のとおり、山ノ内荘内の道であるが、鎌倉・南北朝時代の山ノ内荘の範囲は広大である。現在、北鎌倉あたりを山ノ内と称しているが、かつては柏尾川両岸を藤沢市近くまで占め、南は深沢を取り入れて巨福路坂をもって鎌倉と堺し、西は柏尾川の西岸下郷・長尾台町付近をもって玉繩荘と限り、北は横浜市戸塚区秋葉町のあたりに及び、東はこれから東南の野庭町・上郷町上野に至る線で、武蔵国久良岐郡及び橘樹郡と堺していたようである。山ノ内は古代には尺度郷の地で、現在の岩瀬・公田あたりを中心とする地ではなかったかと想定されている。

頼朝は治承四年（1180）十月七日鎌倉に入り、その後、首藤兼道の山ノ内の家を移して鎌倉の邸とした。『吾妻鏡』によれば、頼朝は治承四年十月、滝口三郎経俊すなわち山内首藤経俊の所領の山ノ内荘を召放して土肥実平に召預けたが、経俊は山ノ内荘の下司であったらしく、この下司職は経俊の先祖と思われる兼道以来相伝していたものと考えられている。『吾妻鏡』文治四年六月の条に八条院領として相模国山ノ内荘を挙げている。文治のころまでは山ノ内荘の本家は八条院であったようである。

健保元年五月、和田義盛が幕府を囲み義時の邸を攻めた、いわゆる和田合戦の賞賜として北条義時に与えられたのが、山ノ内荘である。この時以来、山ノ内は北条氏の所領となったようで、以後、常楽寺・建長寺・円覚寺などが北条氏によって創建され、多くの禅宗寺院の建ち並ぶところとなった。

今回調査した円覚寺門前遺跡は、鎌倉市山ノ内951に所在する。円覚寺の南西に、北に向かって開口する瓜ヶ谷を流れる西瓜川と、山ノ内路に平行して流れる小袋谷川との合流地点の南側に接して位置する。この瓜ヶ谷の最奥部には瓜ヶ谷やぐらがあり、やぐら内部に彫刻された地蔵像や十王像が有名である。調査地点に向かって小袋谷川を渡る橋は十王橋と呼ばれ、このやぐらとの関連が注目される。谷戸内部にはやぐら群が多く散在し、瓜ヶ谷やぐらを含む寺院址の存在も予想されるが、現在のところ廃寺の存在は確認されていない。調査地点南西側の丘陵上部には台山藤源治遺跡があり、縄文時代から近世にかけての遺跡が調査されているが、丘陵上が中世に造成されているようであり、付近一帯が、中世に盛んに開発されていた様子が窺われる。



1．調査地点
2．台山藤原治第２次調査地点
3．台山藤原治第３次調査地点
4．台山藤原治第１次・３次調査地点

第１図　遺跡位置図（１）

第２章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯と経過

今回の調査は、当該地における個人住宅の建築に伴い実施されたものである。本調査に先だって実施した試掘調査では、現地表下約60cmにおいて中世地業面を確認し、この面を対象とする本格調査が決定した。

本格調査は住宅部分約65㎡を対象とし、平成８年11月６日に着手した。現地表下60cmで確認された中世地業面までは重機により掘削を行った。これは近世～現代の地業に伴う盛土や攪乱が中世地業面まで達していることと、この層中に遺構が存在しなかったことによる。地業面上で中世に帰属する遺構を検出して調査を行った。この後、調査区壁際に沿って現地表下120cmまで掘り下げ、下層にある遺構の確認を行った。この結果、埋没した小袋谷川の旧河道を確認し、この部分のみ更に70cm掘り下げた。中世基盤層下まで住居建築による掘削が及ばないことや、中世以前の遺構が河川以外には存在しないことなどから、中世基盤層下の全面調査は行わなかった。最後に河道の埋没時期確認のため、堆積土中から火山灰を採取し11月29日に調査を終了した。

第２節　基本層序

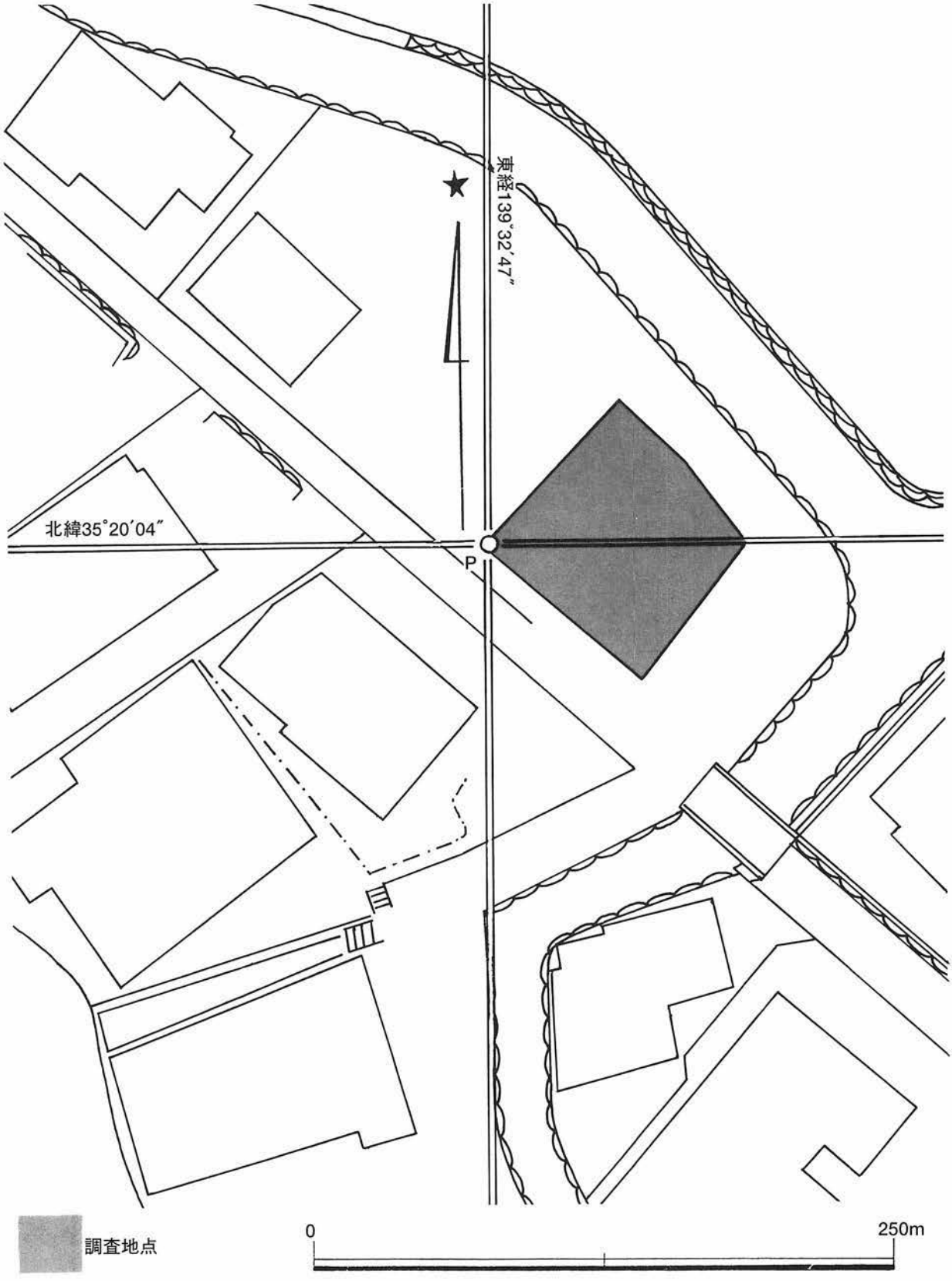
前述したように、本遺跡は谷戸内の沖積地上に立地する。現地形は北側（谷戸の入口）に向かって傾斜するが、これを水平に地業（整地）して中世遺構が構築される。以下、本遺跡における基本的な土層堆積について、調査区北壁で記録した土層堆積図を基に説明を記す。

第１～３層：ガラス片などを包含する近～現代の盛土である。いずれもしまりの強固な粘質土で、凝灰岩ブロック・炭化物・木片などを含む。色調は暗褐色で、下層に行くほど明るくなる。包含遺物としては前述したガラス片の他、かわらけ・貝殻などが混入する。

第４～６層：中世地業土である。しまり・粘性共に強。色調は基本的に黒褐色である。泥岩ブロック・泥岩細粒などを多量に含み、この度合いにより色調が黄褐色を呈する部分がある。木片・土器細片などがやや多く混入する。

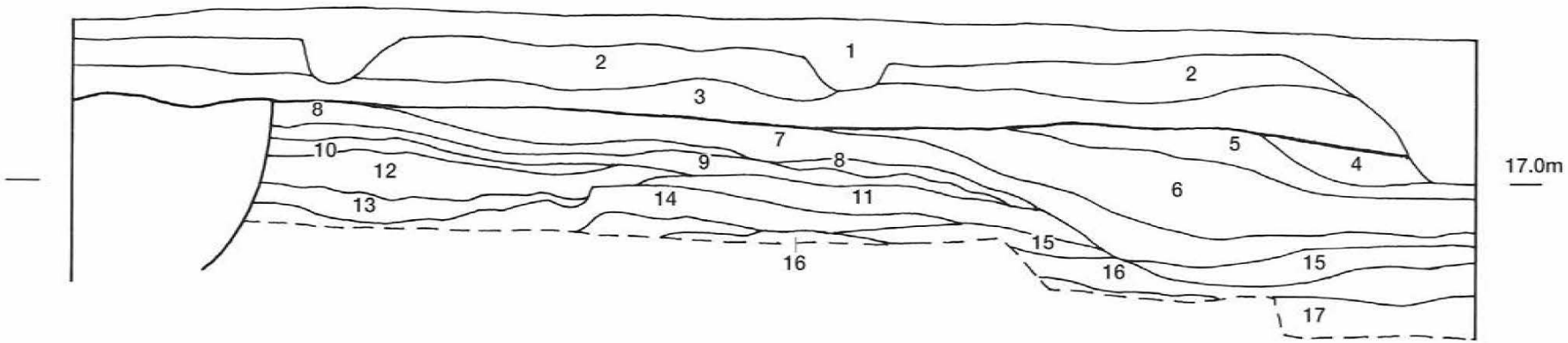
第７～９層：中世基盤層である灰黒褐色粘質土。橙色スコリア・灰白色微粒子・粘土ブロックなど含む。木片が混入。

第10～17層：黄褐色砂質土。第12層以下は、現在でも滞水しており、鉄分が還元された色調である青灰色を呈する。下層に行くほど粘性が増加する。泥岩ブロック・泥岩細粒・木片などをやや多く含む。無遺物層である。



基準点	国土座標値	緯度	経度
P	X－73796.5 Y－26070.62	35°20′04″	139°32′47″

第2図　遺跡位置図（2）



1：表土
2：暗褐色粘質土。炭化物・凝灰岩粒子など含む。ガラス片・貝殻・かわらけなど混入。しまり強。
3：暗褐色粘質土。色調2層より明。凝灰岩粒子・土丹粒子など混入。しまり強。
4：灰黒褐色粘質土。灰白色微粒子・凝灰岩粒子など含む。中世遺物・木片粒子状炭化物など混入。しまり強。中世地業土。
5：灰黒褐色粘質土。土丹粒子・粘土ブロックなど含む。中世遺物・木片・粒子状炭化物など混入。しまり強。中世地業土。
6：黒褐色粘質土。灰白色微粒子・凝灰岩粒子など含む。木片・粒子状炭化物など多量に混入。しまり強。中世地業土。
7：黒色粘質土。橙色スコリア・灰白色微粒子・凝灰岩粒子など含む。木片・粒子状炭化物など少量混入。しまり強。中世基盤層。
8：暗黄褐色粘質土。粘土ブロック・土丹粒子など多量に含む。しまり強。中世基盤層。
9：黒褐色粘質土。基本的には8層と同一。土丹ブロックの含有少なく、色調黒い。中世基盤層。
10：黄褐色砂質土。粘土ブロック・土丹粒子・炭化物粒子など多量に含む。しまりやや弱。
11：黄褐色砂質土。基本的には10層と同一。砂質濃度。しまり弱。
12：青灰色砂質土。粒子状の黒色土を含む。木片やや多く混入。しまりやや弱。
13：青灰色粘土層。しまり弱。
14：黄褐色砂質土。青灰色砂層。しまり弱。
15：青灰色砂質土。粘土ブロック含む。しまりやや弱。
16：青灰色砂質土。砂質希弱。しまりやや強。
17：基本的には16層と同一。色調やや明るい。

第3図　遺跡内基本土層堆積図

第３章　発見した遺構と遺物

第１節　発見遺構

発見した遺構は、井戸址１基のみである。地業の際に、埋没した小袋谷川旧河道の上部と、西瓜川の河岸の一部を埋め立てている。このうち、小袋谷川旧河道については埋没状況を調査できたので、遺構ではないが詳述する。

井　戸（第５図）

井戸は調査区北西隅で発見した。遺構は調査区外に延びているものの、調査区の拡張は物理的に不可能であったため、全体は調査できなかった。また、遺構の上部は近・現代の造作によって破壊されている。構造的には長方形に切り出した凝灰岩ブロックを平面方形に積んで井戸枠とする。掘方は平面隅丸方形を呈し、井戸枠の裏込には青灰色の粘質土を充填する。版築などは行われていない。この掘方の外側には更に掘方が確認されており、井戸が数次にわたり改築された可能性がある。井戸底は平坦で、地山の砂質土が露出する。井戸水の濾過を目的とした砂や砂利といったものは一切確認されなかった。規模的には、直接井戸枠に伴う掘方が直径180cm、確認面からの深さは90cmを測る。井戸枠の内寸は一辺60cm。40～50cm×30cm、厚さ約20cmを基本的なサイズとする凝灰岩ブロックを用いる。ブロックには、井戸枠裏側にあたる面のみ調整が行われていないものが見られる。ブロックの大きさが必ずしも一様ではないことが窺われる。ブロックは、横方向には交互に角をずらして積み、縦方向には表面を垂直にあわせて積む。

小袋谷川（第７・８図）

調査地点は南から流れる西瓜川と、東から流れる小袋谷川との分岐点に位置する。発掘調査では、中世地業面上で西瓜川に向かう落ち込みのみを確認していたが、その後、中世地業面下の遺構確認作業の際、小袋谷川の旧河道を発見し、中世地業面にあっても河岸の落ち込みが残されていたことを確認した。旧河道内に堆積した覆土の上層では中世遺物が出土し、中世の地業に伴って河道の付け替えが行われたものと考えられる。調査深度の関係で、河床を確認し得なかったが、埋没土は細かく分層できるため、ある段階までは徐々に埋没していった状況が窺える。この河川の状況を自然遺物から探るために、河川覆土各層中から合計11箇所の土層資料を採取し、火山灰の分析を行った。分析は神奈川県立旭高校の上本進二氏にお願いした。巻末に附編として、火山灰分析結果と所見を掲載する。

第２節　発見遺物

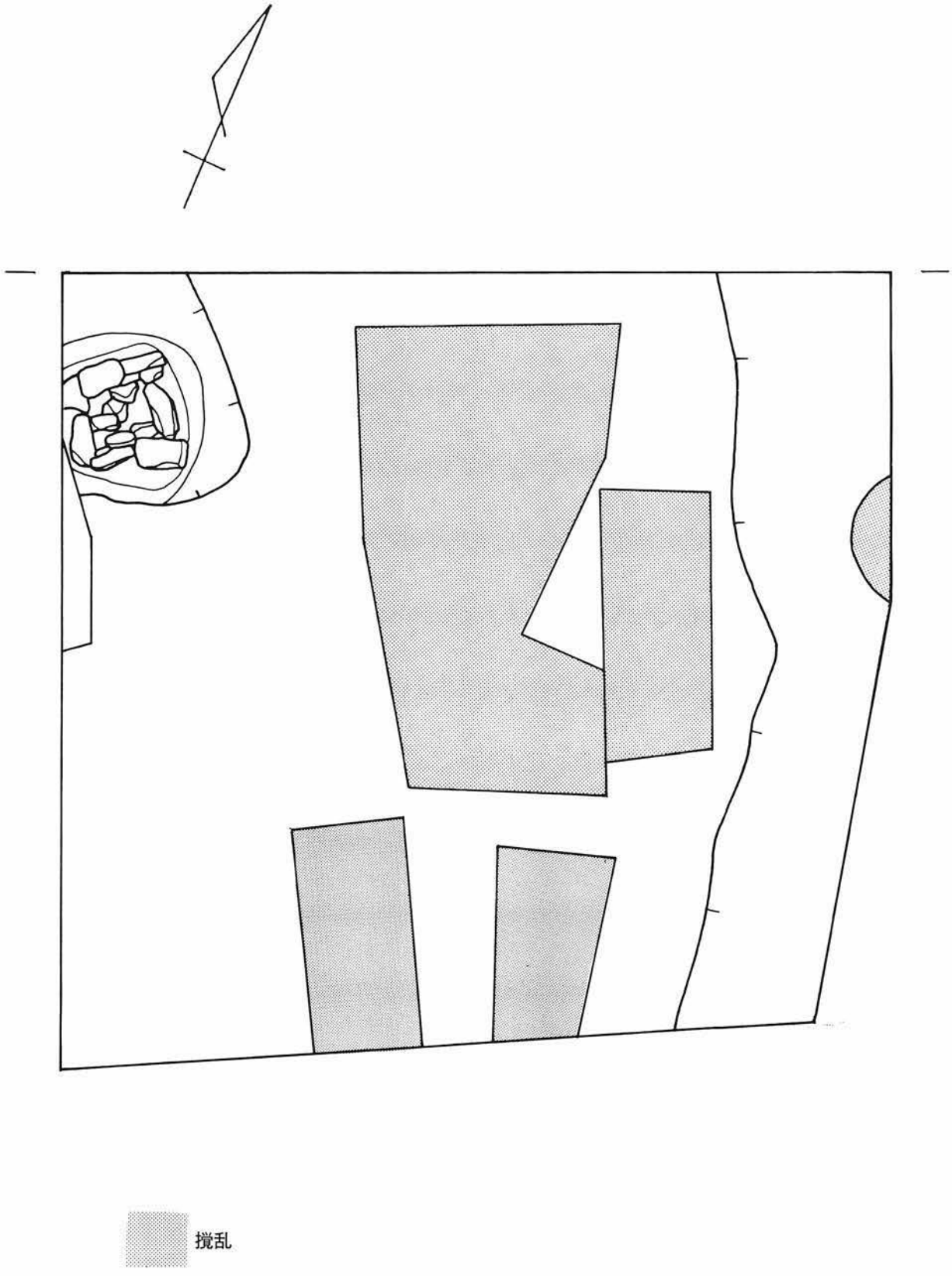
中世地業面上，井戸，小袋谷川旧河道覆土中などから近世・中世・古墳時代・弥生時代の遺物を発見した。量的には全てあわせても、テンバコ１箱弱と少ない。以下、時代別に詳細を記す。

近　世

肥前産染付碗・皿を中世地業面上で数点発見した。中世地業面まで達する盛土の時期を示す遺物であるが、いずれも細片で時期的な詳細は不明である。

中　世（第６図：１～７）

中世遺物は主に中世地業面上，井戸中，小袋谷川旧河道覆土上層で発見した。遺物はかわらけ，常滑，



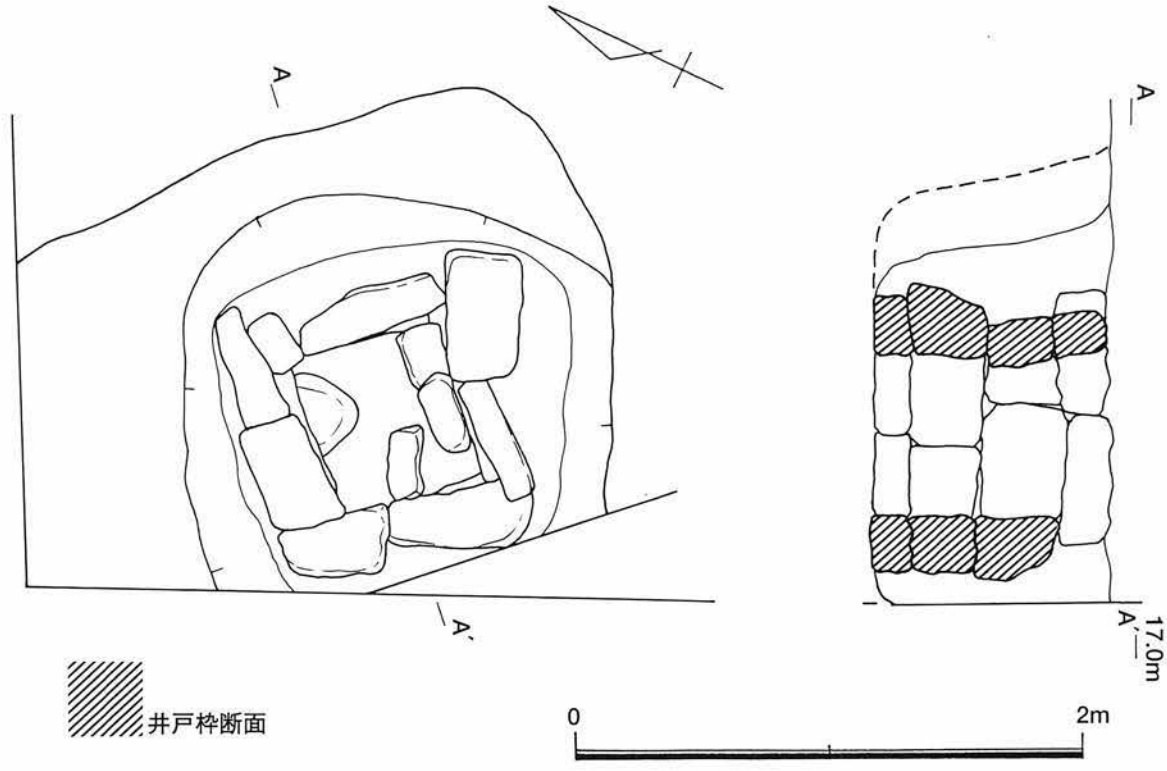
第4図　遺構図

瀬戸，青磁，鉄滓などである。時期的には全てが14世紀代に帰属するものである。殆どが細片で、図示し得たものは７点のみである。

第６図：１は口唇部にタールが付着する、灯明皿として使用されたかわらけである。中世地業面上で発見した。法量は口径7.5cm，底径4.4cm，器高2.3cm。胎土は粉質で、黒色微砂・白色針状物などを含む。底部から外反しながら立ち上がる器壁は体部中位に稜を作り、やや内湾しながら口縁部に至る。口唇部はわずかに外側に引き出される。２～５は常滑窯製品である。胎土には石英細石が多く含まれる。２は中世地業面上で発見したこね鉢底部小片である。法量は不明。内面は磨滅し、ツルツルである。砂底の外底面も磨滅する。３は、井戸枠裏込で発見したこね鉢口縁～体部片である。法量は不明。内面は口縁部を除き磨滅する。外面の調整は、口縁部が指頭によるオサエの後にヨコナデ、体部が指頭によるオサエの後、木口状のハケによる横方向の調整が施される。４は、井戸枠裏込で発見した甕口縁部片である。法量は不明。口縁部は上下に張り出した、いわゆるＮ字状の縁帯を形成する。外面には自然降灰がみられる。５は甕胴部片を転用した、いわゆる磨り常滑である。井戸中で発見した。破片断面の一部が使用され、磨滅する。６，７は、舶載青磁である。６は中世地業面上で発見した蓮弁紋鉢である。法量は口径(12.3cm)のみ明らかで、蓮弁は全体に丸みを帯び退化する。素地は黒色微砂を含む白色緻密土で、強い粘りをもつ。釉は色調暗緑色で、細かい気泡が目立つ。７は井戸枠中で発見した劃花鉢である。法量は高台径(5.05cm)のみ明らかである。素地は白色砂を含む灰色緻密土で、粘りをもつ。釉は灰草緑色で、削出しの高台部分のみ露胎する。

古墳時代

古墳時代後期の土師器を中世基盤面上と井戸枠中で発見した。細片が数点あるのみで、図示できなかった。

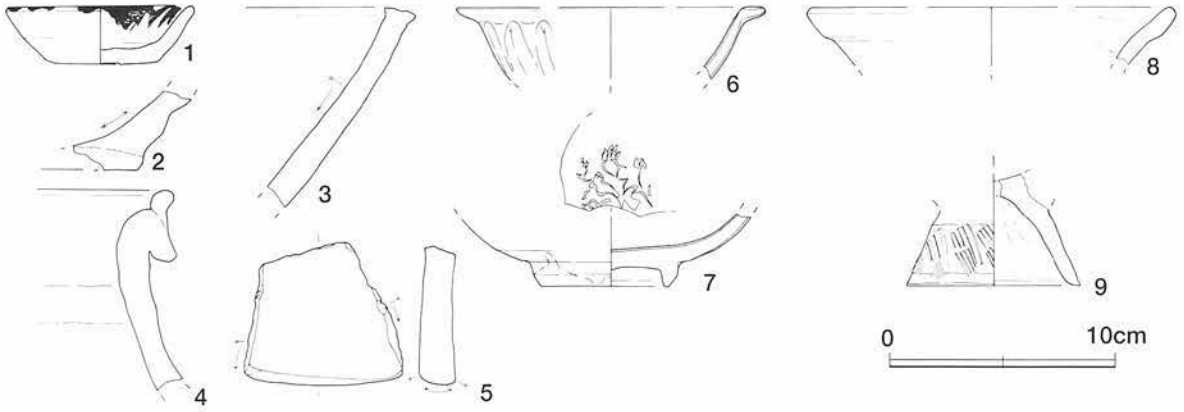


第５図　遺構図（井戸）

弥生時代（第６図：８，９）

中期後半～後期所産の土器片を、中世地業面と小袋谷川旧河道で少量発見した。いずれも細片であり、図示したものは後期所産の２点のみである。

第６図：８，９は、共に中世地業面上で発見した。８は壺口縁部片である。口縁部は折返しによる複合口縁を形成する。法量は口径（14.8cm)のみ明らかである。胎土は黒色微砂，白色微粒子，金雲母などを含む。器面の調整は外面が棒状ヘラによるミガキ、内面が横方向のハケによる。９は台付甕の脚部である。法量は底径7.0cm、脚部高3.0cmである。胎土は黒色微砂と灰白色微粒子を含む。器面の調整は、外面が縦方向の粗いハケ、内面は不明である。



第６図　出土遺物実測図

第4章　まとめ

出土遺物からみる限り、遺跡地及びその周辺では弥生時代中期後半以降、断続的に遺跡が営まれてきたようである。本遺跡の所在する谷戸を見下ろす丘陵上部には台山籐源治遺跡があり、弥生時代中期から平安時代にわたる集落址が発見されているが、本遺跡を含む谷戸内の状況は調査例も少なく明らかではない。

本遺跡では、中世になって初めて本格的な土地利用が開始される。これに伴い、地山の削平や河川の流路変更などの地業が行われる。その時期は出土遺物から14世紀代が適当と思われるが、14世紀のいつなのかは明らかではない。遺跡の性格についても検出遺構が井戸址1基のみであり考究し得ないが、周辺の遺跡環境から寺院址あるいは山ノ内道沿いの民屋などが想定されようか。

本遺跡で唯一の遺構である井戸址は石組構造を採るが、このタイプの井戸は鎌倉市内における当該期の遺跡では発見されていない。担当者がかつて調査にあたった極楽寺中心伽藍遺跡(註1)では、出土遺物から戦国期と考えている同タイプの井戸が検出されている。今回調査した井戸には、改築のあったことを窺わせる古い掘方が確認されており、14世紀代に構築された井戸が戦国期に改築されたものと考えたい。

（註1）極楽寺中心伽藍遺跡（平成4年調査／未報告）：調査では、戦国期のかわらけが出土した石組の井戸の他、鎌倉時代の地業面を4面確認した。

鎌倉市円覚寺門前遺跡のテフラ（火山灰）分析結果

上本　進二

円覚寺門前遺跡は小袋谷川と西瓜川の合流点の西側に位置する。現在、両河川の合流点はＴ字型に合流している。小袋谷川旧河道堆積土は、最下層に腐植質を含む黒色粘土・シルト層があって、縄文時代の湿地性堆積物と思われる。この土層はその後、河川によって浸食を受け、礫・粗砂が堆積している。河川の流路変遷は頻繁であったらしく、土層中には少なくとも２箇所旧河床跡があって堆積相は複雑である。これらの河床堆積物を覆って風成砂層が堆積している。

この旧小袋谷川堆積土中の11箇所で試料採取を行い、洗浄・乾燥後に顕微鏡観察を行った。その際に、風成砂や河川堆積物と共に混入している一次堆積のテフラ（円磨されていないもの）を観察した。テフラの同定は、上杉ほか（1995）に基づいて行った。以下、その結果を表示する。

No.	テフラ番号	推定年代	テフラ構成物質の特徴　BW：バブルウォール　ST：ストライプ　FA：榛名二ツ岳	堆積相
1	S－23 S－24－1	BC200～ AD50年	斜長石付き玄武岩質溶岩片　STガラス	河川堆積物？
2	？	？	ガラス質スコリア　白色岩片　鉱物砂多量	河川堆積物
3	S－24－1	AD0～50年	ガラス質スコリア（黄粉状風化）　白色岩片　鉱物砂多量	河川堆積物
4	S－24－1	AD0～50年	ガラス質スコリア（黄粉状風化）　BWガラス　STガラス	河川堆積物
5	S－24－1	AD0～50年	ガラス質スコリア（黄粉状風化）　玄武岩質溶岩片　BWガラス　STガラス	河川堆積物
6	S－24－1	AD0～50年	ガラス質スコリア（黄粉状風化）　玄武岩質溶岩片　BWガラス　STガラス	河川堆積物
7	？	？	風化鉱物砂（鎌倉石から分離したもの）	河川堆積物
8	S－24－6？	AD500～750年？	玄武岩質溶岩片　薄茶色岩片　FA軽石？　BWガラス　STガラス	河川堆積物？
9	S－24－6？	AD500～750年？	玄武岩質溶岩片　赤色溶岩片　FA軽石？　BWガラス　STガラス	河川堆積物？
10	S－24－ 3～5	AD250～750年？	玄武岩質溶岩片　斜長石　BWガラス　STガラス	河川堆積物
11	S－24－1	AD0～50年	ガラス質スコリア（黄粉状風化）　玄武岩質溶岩片　BWガラス　STガラス	河川堆積物

上記の結果より、堆積土層の堆積環境を時代順に推定すると以下のようになる。

縄文時代後・晩期

縄文時代後期から戸塚入江は海退によって離水し、柏尾川沿いに低湿地が形成される。支流の北鎌倉一帯も湿地となって黒泥砂層が堆積する。

弥生時代

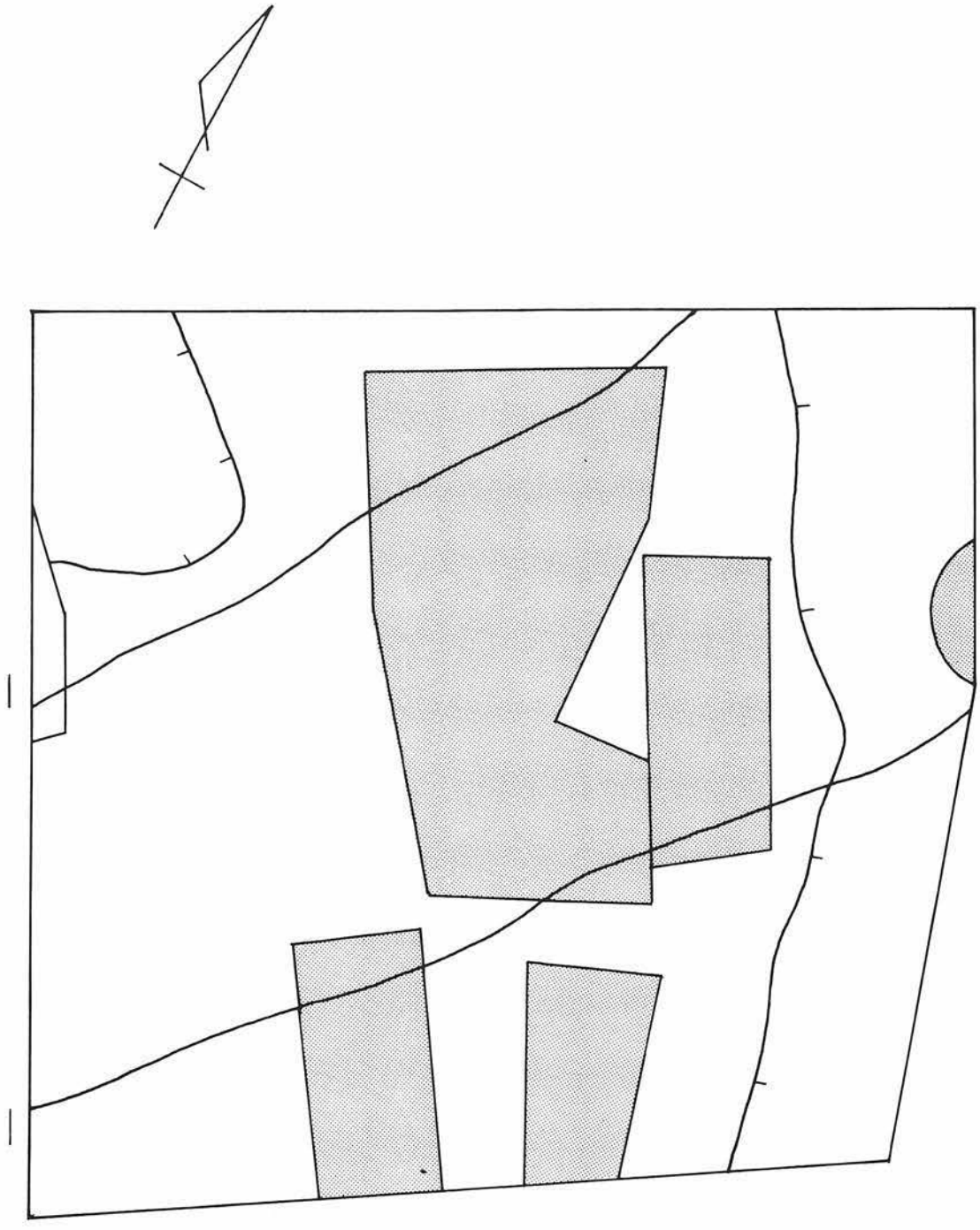
弥生時代の初期頃は低湿地のような環境であったが、その後、小袋川または西瓜川の流路となり、河床堆積物及び河川堆積物(洪水堆積物)が堆積する。川沿いの小規模な自然堤防状の微高地には腐植質を含むシルトが堆積し、土器が廃棄された。流路の変化は著しく、遺跡内では西に向かって流路がシフトして、離水した微高地には生活域が形成された可能性がある。上流で崩壊や土石流が発生していたらしく、基盤岩のブロックが多数堆積している。

古墳時代前・中期（ＡＤ250～500年頃）

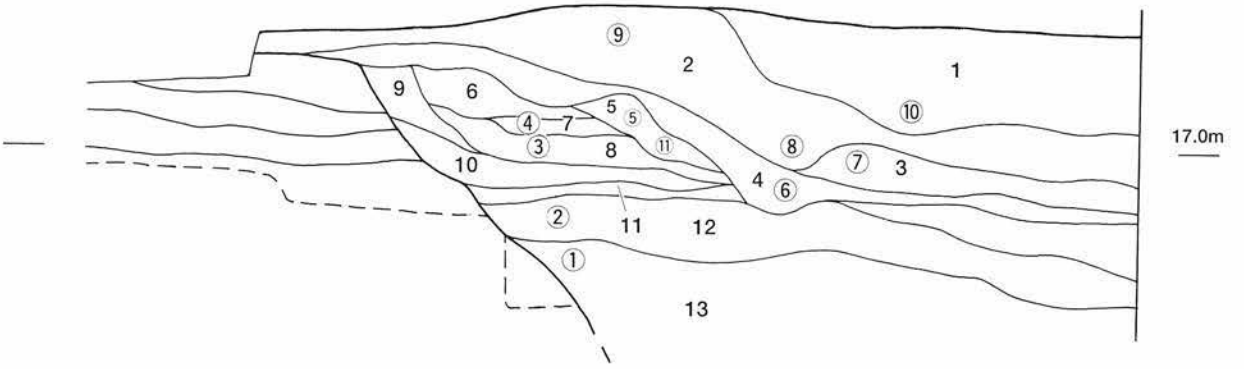
引き続き遺跡は河川の流路となっていたが、上流の崩壊や土石流はなくなって、川は穏やかな流れであった。

古墳時代後期～奈良時代（ＡＤ500～750年）

この時代になると遺跡は河床から離れて完全に陸化するが、河川の氾濫時に水を被る環境であったろう。細砂の堆積が盛んに行われるが、風成砂の可能性もある。奈良時代以後の環境については土層が残っていないので不明である。



第７図　小袋谷川旧河道平面図



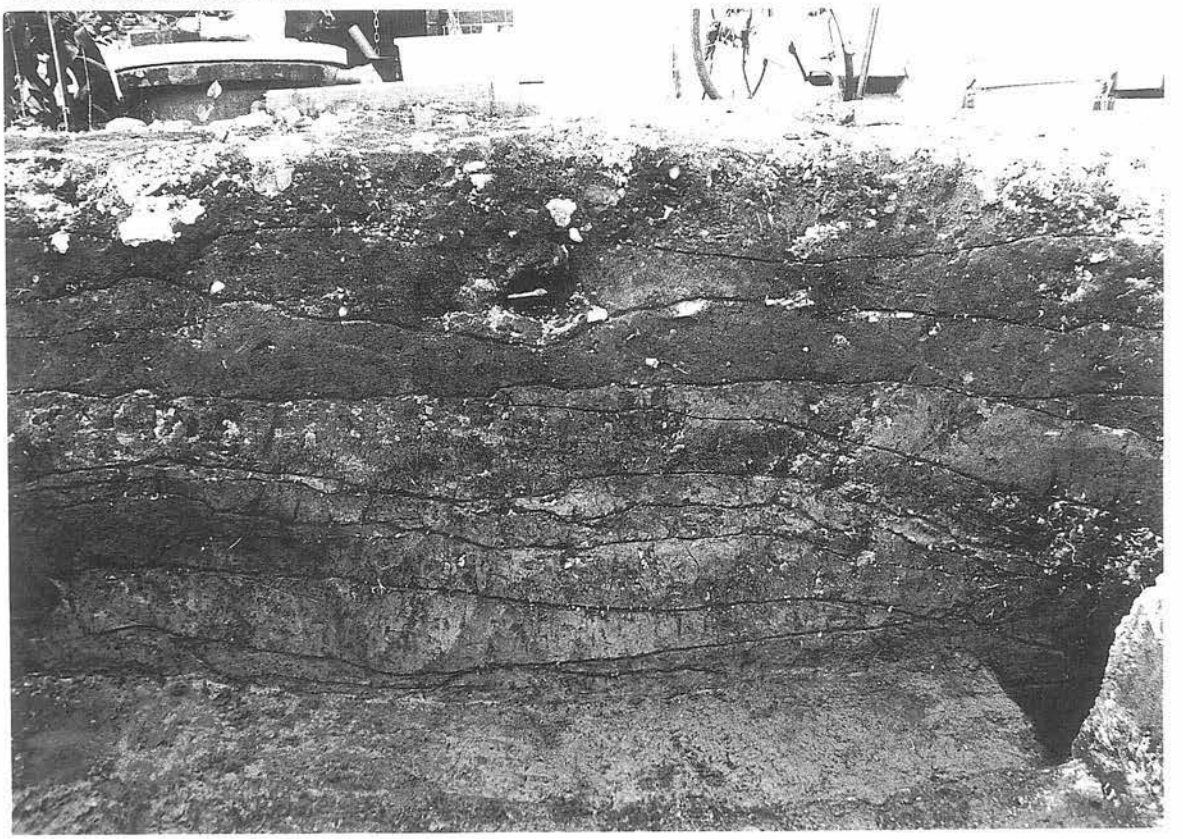
1：灰黒褐色粘質土。土丹粒子・粘土ブロックなど含む。中世遺物・木片・粒子状炭化物など混入。しまり強。中世地業土か。
2：灰黒褐色粘質土。灰白色微粒子・凝灰岩粒子など含む。木片・粒子状炭化物など混入。しまり強。中世地業土か。
3：暗灰色粘質土。橙色スコリア・灰白色微粒子・炭化物粒子など多量に含む。しまり強。
4：暗灰色粘質土。砂質やや濃厚。橙色スコリア・灰白色微粒子・凝灰岩粒子・炭化物粒子など含む。しまり強。
5：暗灰色粘質土。橙色スコリア・灰白色微粒子・凝灰岩粒子・炭化物粒子など含む。しまり強。
6：暗灰色粘質土。砂質やや濃厚。橙色スコリア・灰白色微粒子・凝灰岩粒子・炭化物粒子など含む。しまり強。
7：黒色粘質土。　橙色スコリア・灰白色微粒子・凝灰岩粒子など含む。木片・粒子状炭化物など少量混入。しまり強。中世基盤層。
8：暗灰色粘質土。砂質やや濃厚。橙色スコリア・灰白色微粒子・凝灰岩粒子・炭化物粒子など含む。小石混入。しまり強。
9：黒灰色粘質土。橙色スコリア・灰白色微粒子・凝灰岩粒子・炭化物粒子など多量に含む。しまり強。
10：黒褐色粘質土。橙色スコリア・灰白色微粒子・凝灰岩粒子・炭化物粒子など多量に含む。しまり強。
11：暗灰色砂質土。しまりやや弱。
12：暗灰色砂質土。土丹粒子含む。しまり強。
13：黒褐色粘質土。灰白色微粒子・凝灰岩粒子・小石など含む。しまり強。

第8図　小袋谷川旧河道土層堆積図（火山灰分析資料採取位置図）

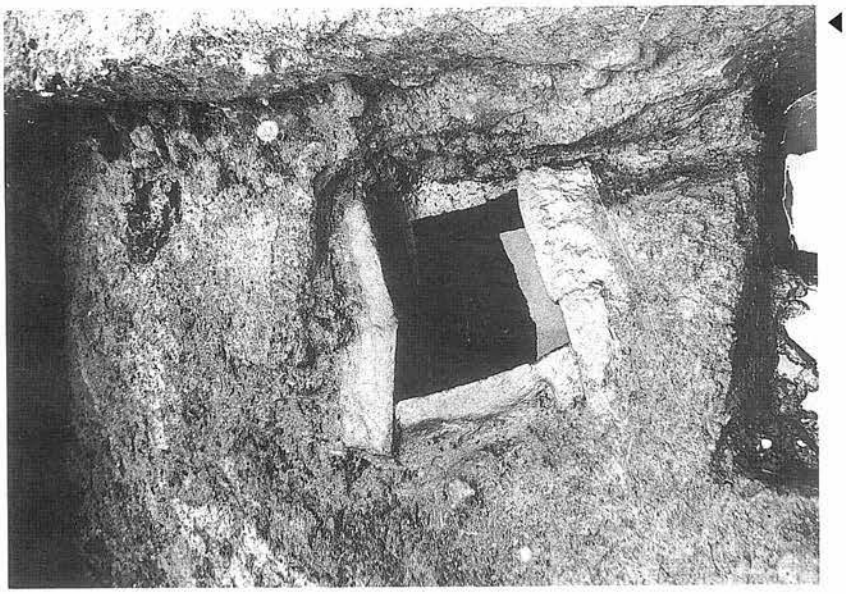
写　真　図　版

▲調査区全景、中世地業面までカクランが及ぶ。

▼土層堆積状況（調査区北壁）

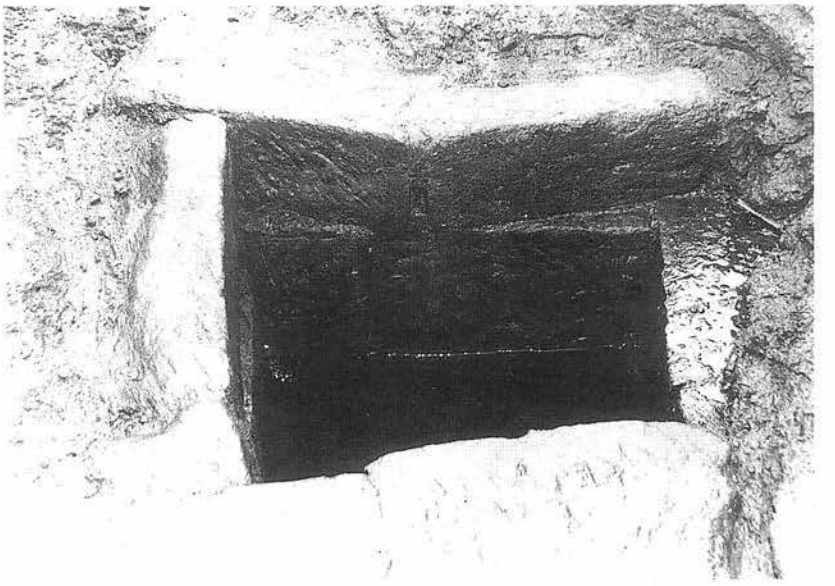


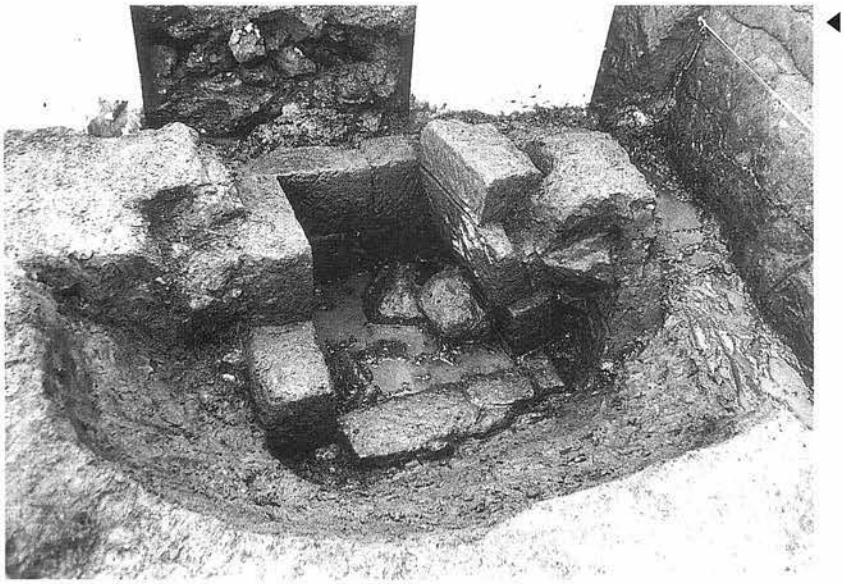
図版 2



◀ 井戸址

井戸は凝灰岩ブロックによる枠をもつ ▶





◀ 同　掘り方

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成9年度発掘調査報告
巻次	14
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	継　実
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
えんかくじもんぜんいせき 円覚寺門前遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市山ノ内951番2	204	No.287	35° 20′ 04″	139° 32′ 47″	19961106 ～ 19961129	63.62	個人専用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
円覚寺門前遺跡	生活址 遺物散布地	中世 古墳時代 弥生時代	中世：地業面 井戸	中世：かわらけ 国産・舶載陶磁器 弥生時代：壺・甕後期	

積善遺跡（せきぜんいせき）（No.440）

十二所字積善952番6地点

例　　言

1．本報は、積善遺跡（No.440）の所在する遺跡内の鎌倉市十二所積善952番６地点における緊急発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、自己用住宅に係る車庫造成に先立ち、平成８年11月28日～平成９年１月10日にかけて調査面積12㎡を対象に実施した。

3．調査体制は、以下の通りである。

調査担当者　原　廣志
調　査　員　須佐直子
調査補助員　秋山哲雄・須佐仁和・早坂伸市
調査参加者　山下俊明・渡辺久夫
協力機関　㈳鎌倉市シルバー人材センター・㈱高橋組・鎌倉考古学研究所

4．本報の執筆は、第一章を秋山、第二章・第四章を原、第三章を須佐（直）・原がそれぞれ分担し、これを原が編集した。資料整理の作業は執筆者の他、須佐（仁）・早坂があたった。

5．本報掲載の写真は、遺構・遺物ともに須佐仁和が撮影した。

6．発掘調査における出土遺物・図面・写真等の資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……426
第二章　調査の経過と層序 ……428
第三章　検出遺構と出土遺物 ……429
第四章　積善遺跡の花粉化石　　鈴木　茂 ……448
第五章　まとめ ……454

挿　図　目　次

図１　遺跡周辺図 ……427
図２　調査地点グリット配置図 ……428
図３　調査区土層堆積図 ……429
図４　Ⅰ面遺構全図 ……430
図５　Ⅰ面出土遺物 ……431
図６　炭層Ａ出土遺物 ……432
図７　炭層Ｂ出土遺物 ……432
図８　Ⅱ面遺構全図 ……433
図９　建物内かわらけ溜り ……434
図10　建物内かわらけ溜り出土遺物 ……435
図11　かわらけ法量 ……437
図12　建物内・北壁トレンチ出土遺物 ……438

表　目　次

表１　かわらけ法量表 ……436
表２　Ⅰ面出土遺物（１）……439
表３　Ⅰ面出土遺物（２）……440
表４　炭層Ａ出土遺物（１）……440
表５　炭層Ａ出土遺物（２）……441
表６　炭層Ｂ出土遺物 ……442
表７　建物内かわらけ溜り出土遺物（１）……442
表８　建物内かわらけ溜り出土遺物（２）……443
表９　建物内かわらけ溜り出土遺物（３）……444
表10　建物内かわらけ溜り出土遺物（４）……445
表11　建物内かわらけ溜り出土遺物（５）……446
表12　建物内・北壁トレンチ出土遺物（１）…446
表13　建物内・北壁トレンチ出土遺物（２）…447

図　版　目　次

図版１　ａ．表土掘削後の状況
　　ｂ．Ⅰａ面全景……457
図版２　ａ．Ⅰｂ面全景
　　ｂ．Ⅱ面全景……458
図版３　ａ．炭層Ａかわらけ溜り
　　ｂ．建物内かわらけ溜り
　　ｃ．同上……459
図版４　ａ．調査区南壁土層……460
図版５　出土遺物（１）……461
図版６　出土遺物（２）……462

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡は鎌倉市街の東方である十二所地区、滑川中流域の左岸に位置し、JR鎌倉駅からほぼ真東に約2200mの距離にある。滑川は南北の低い丘陵の谷間を西に流れ、調査地点の周辺で何度か六浦道（近世は金沢往還路、現在の県道金沢鎌倉線）と交差して鎌倉市内に流れ込み、由比ケ浜に注ぐ。調査地点は六浦道から約30mほど南に位置している。昭和二年の地図には、六浦道から泉水橋を右折して調査地点前を通り、明石山から天台山への尾根道を抜けて逗子の沼間方面に下りる道と、金沢に至る道が描かれている（注１）。

六浦道は文字どおり武蔵国六浦へと通じる道であり、水路で房総半島にまで到るという東海道の一部であった。ここは頼朝入府以前からの鎌倉における主要道路であり、現在の寿福寺にあったとされる頼朝の父義朝の館は、この六浦道と、武蔵国府へと向かう現在の今小路との交差点という要地を占めていたと考えられている（注２）。荏柄天神社、杉本寺など、頼朝以前からの存在が想定される寺社もこの道沿いであり、その重要性を窺わせる。頼朝が鎌倉に入ると御所をおいた大蔵の地もやはり六浦道沿いであり、御家人達の屋敷も周辺に建てられた（注３）。本遺跡周辺にも、梶原景時や大江広元の屋敷跡という伝承の残る地があり、その真偽は措くとしても、御家人クラスの武士が居館を構えていたであろうことは疑いない。嘉禄元年（1225）に将軍の御所が大蔵から若宮大路周辺へと移転したことで、政治的中心はそちらへ移動するというのが通説であるが、平地が貴重な鎌倉において、おそらく当時は人口が増え続けていたであろうから、本遺跡周辺の居館群は、その持ち主は変わりこそすれ、廃棄されて荒野に帰することはなかったであろう。三代将軍の源実朝が大慈寺を、四代将軍の頼経が明王院を当遺跡の北東に建立した（注４）こともその傍証となろう。当遺跡周辺には、この他にも光触寺があり、ここは当時の鎌倉における西の境界と考えられていた（注５）。また、昭和二年の地図では北条高時の寺号である日輪寺の跡、一心院跡などが当遺跡の南東に記されている（注６）。

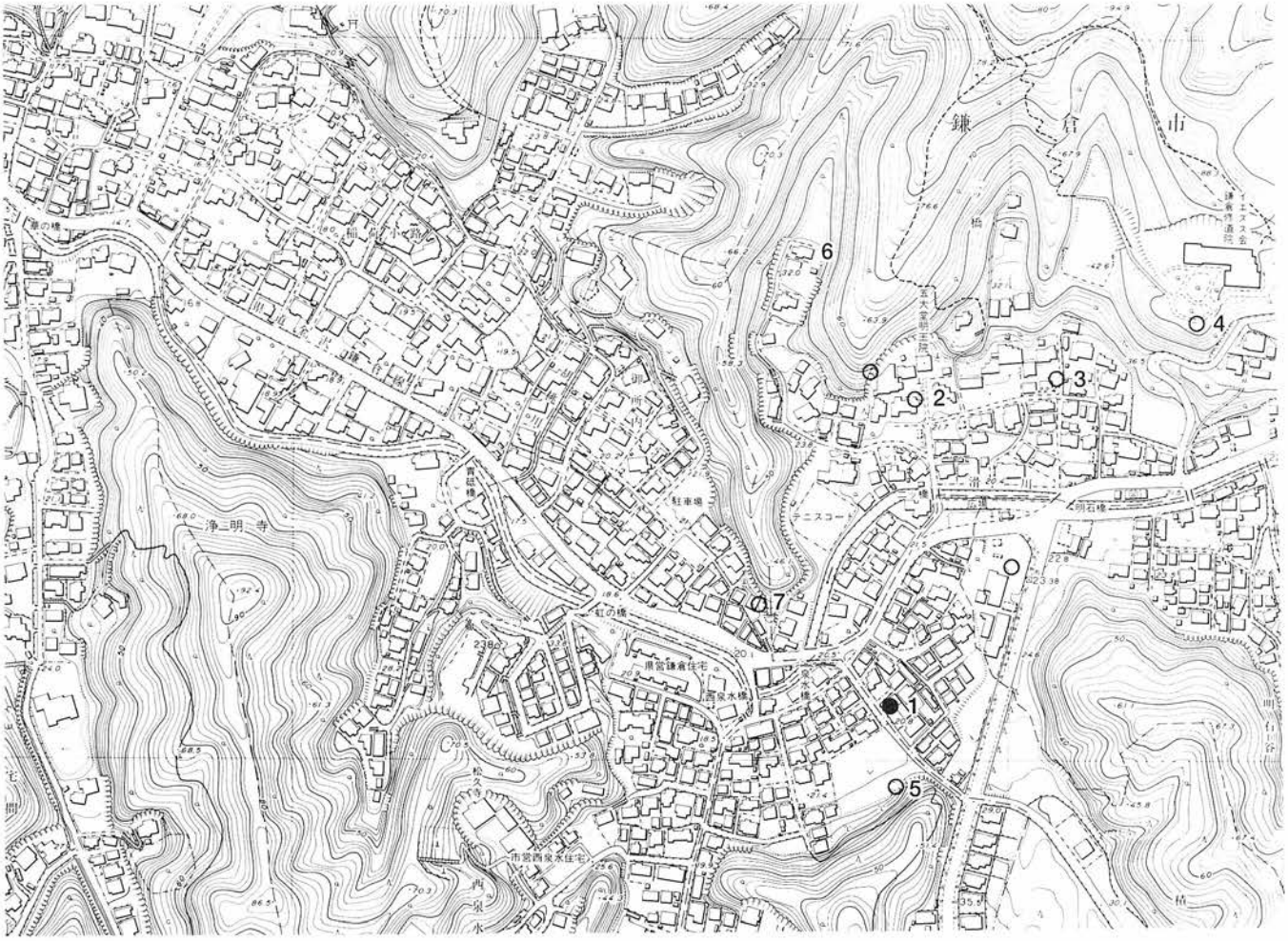
鎌倉幕府が滅び、南北朝時代となって以降も当遺跡周辺には武士が居館を構えていたようで、泉水橋の北側には「公方屋敷」の字が残り、鎌倉公方の屋敷跡と考えられている。当然ながらその周辺には公方に仕える武士達の居館があったことが推定され、政治的な中心が再び六浦道沿いの地域に戻ってきたといえる（注７）。また関東管領の上杉氏は山内にも居館を持っていた。山内は武蔵国府へ向かう道に沿った地域であることを考慮すれば、室町時代の鎌倉における要地が六浦道沿いと武蔵国府に向かう道沿いにあったと考えることができる。この状況が義朝の頃と似ていることから、室町期の鎌倉の構造は義朝の頃のような自然発生的な本来あるべき鎌倉の姿に回帰したものであるといえよう。逆に鎌倉時代の鎌倉は極めて人為的な構造を持つ「都市」だったと考えられよう。

以上のように調査地点周辺は、頼朝以前からの重要路である六浦道に沿っており、鎌倉の境界域に近接し、鎌倉時代を通じて御家人達の邸宅が建ち並ぶ地域であり、その状況は室町時代にまで続く。しかし近世になると農村の様相を呈しているようである。

注

１．鎌倉同人会発行の鎌倉地図。人文社から復刻されている。

２．馬渕和雄　「武士の都鎌倉－その成立と構想をめぐって－」
　網野善彦・石井　進　『中世の風景を読む－２』　新人物往来社　1994　参照。



1．本調査地点
2．明王院
3．大慈寺跡推定地
4．能満寺跡
5．東泉水やぐら群
6．伝梶原景時屋敷跡
7．公方屋敷やぐら群

図1　遺跡周辺図

3．『吾妻鏡』 治承四年（1180）十二月十二日条。

4．大慈寺は『吾妻鏡』建暦二年（1212）四月十八日条、明王院は同寛喜三年（1231）十月六日条以降に建立に関連する記事がある。なお両者の性格については、秋山哲雄 「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史学雑誌』 106編9号　参照。

5．前掲注2。

6．前掲注1。

7．山田邦明 「室町時代の鎌倉」 五味文彦編 『都市の中世』 吉川弘文館　1992　参照。

《参考文献》

高柳光寿 『鎌倉市史』 総説編　吉川弘文館　1959年

赤星直忠 『鎌倉市史』 考古編　吉川弘文館　1959年

貫　達人 『鎌倉市史』 社寺編　吉川弘文館　1959年

貫　達人・川副武胤 『鎌倉廃寺事典』 有隣堂　1980年

神奈川県図書館協会 『神奈川県皇国地誌　相模国鎌倉郡村誌』 1991年

三浦勝男 『鎌倉の古絵図Ⅰ』 鎌倉国宝館図録第十五集　鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館　1992年

第二章　調査の経過と層序

調査の経過

平成８年７月、自己用住宅に係る車庫造成の事前相談をうけて、鎌倉市教育委員会による試掘調査が実施された。試掘調査の結果、地表下50cm以下に遺構面が遺存しているため、車庫範囲の工事深度を対象として発掘調査を実施するはこびとなった。発掘調査は平成８年11月28日に表土層及び耕作土層を人力による掘り下げから開始された。調査地点前道路が狭いため付近住民への配慮と安全を考慮に入れ、調査進行に伴う排土は同敷地内にて処理することになった。途中、正月休みや数日の降雨に見舞われたが、規定の工事深度まで調査して記録保存を行い、平成９年１月10日までに現地調査を終了した。

調査の方法　調査に当たっては、調査区内を２ｍグリットに区割りし、南北方向に西からアルファベットを、東西方向に北から算用数字を付した。各区画の名称は北西隅の交点杭を与えている。グリット設定は当初、鎌倉市４級基準点を周辺から捜し出し、グリットとの位置関係を明らかにする予定でいた。しかし周辺の４級基準点は道路舗装工事等の影響で誤差がかなり認められ、これを断念した。従って、グリットは調査区西側の道路との境界線に位置した２点の地界杭を結んだ直線を基準として、調査区の形に合わせて設定したものである。南北軸方位はＮ－36°20′－Ｗである。レベル原点は鎌倉ハイランド入口に近い鎌倉市１級水準点（Bm.36Ｌ＝23.3825m）を調査区内に移動した。以下の文章中及び挿図のレベル数値はすべてその海抜高で示している。

層　序

調査区内における層序は、道路側に向かって緩やかに傾斜して部分的に厚薄の差はあるが、概ね均等であった。Ⅰ面は撹乱と耕作土よる削平が著しいａ面と、間層を殆んど挟まず表出する土丹地業のｂ面に分けられる。現地表下95cm前後でⅡ面の凝灰質砂岩・土丹粒による地業層が表れる。このⅡ面上層には、薄い間層を挟み上下に炭化物層（炭層Ａ・Ｂ）が認められた。なお、工事の掘削深度以下にも生活面や遺物包含層が続くことを調査区北壁トレンチで確認している（図３）。

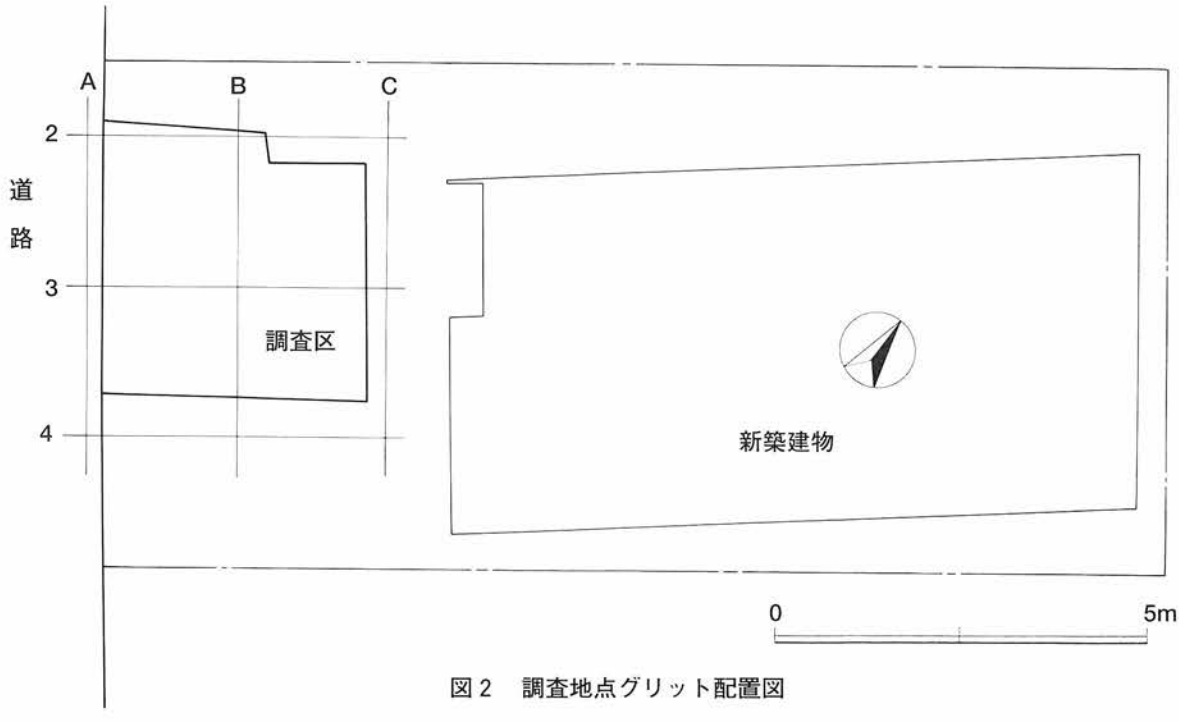


図２　調査地点グリット配置図

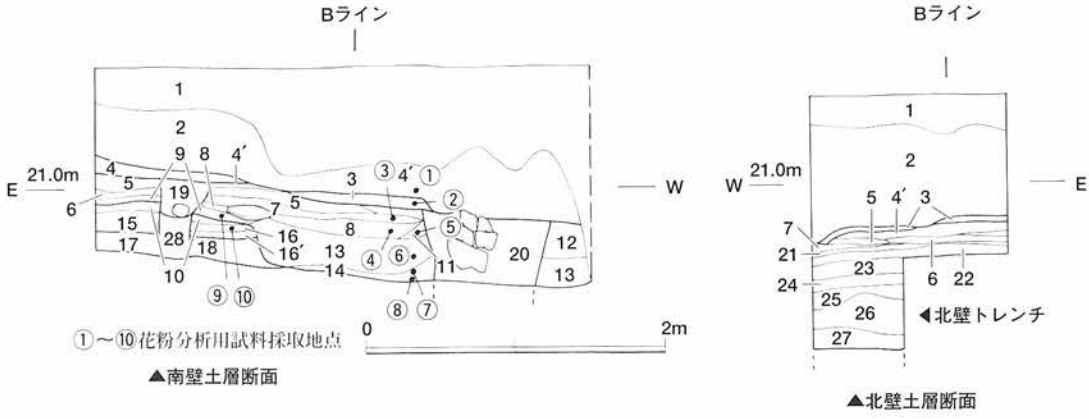
第三章　検出遺構と出土遺物

A．Ⅰ面検出遺構・出土遺物（図4・5、表2・3）

Ⅰａ面は、標高差を有するが上面を耕作土により削平されたり、深い撹乱が及んでいて明瞭な判別ができない部分的に残存した生活面であった。調査区東端部は泥岩と凝灰質砂岩を潰した地業層によりⅠａ・ｂ面が同一の生活面で始まり、西側は遺物包含層などの間層を挟まず、Ⅰｂ面の地業面上にⅠａ面を構成する茶褐色砂質土を貼り増したて構築している。本来層位的には別個のものであろうが、検出の経緯から一連のものと見なし、便宜上、高く残っている部分の生活面をⅠａ面、その直下で全体に拡がる生活面をⅠｂ面として捉えた。調査区西端は近世以降に構築された石積みの擁壁で中世生活面は破壊されており、調査区の西側を走る道路面は現地表より1.5m程低い位置にあたる。

Ⅰａ面

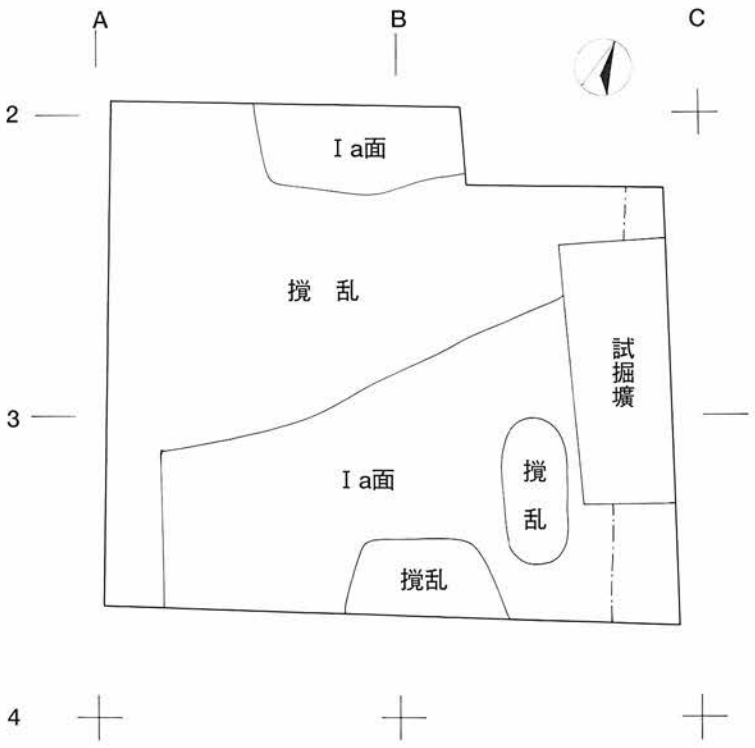
上面レベルは、調査区東端が海抜高20.80m、西端が21.05mで東から西に緩やかな傾斜をもつ弱い地業面である。この面上から明瞭な遺構は検出されていない。出土遺物は図5－1～7である。1～3はロクロ成形のかわらけ小皿、4はかわらけでロクロ成形大皿である。5・6は瀬戸窯の折縁鉢と灰釉碗である。7は滑石製スタンプの破片である。



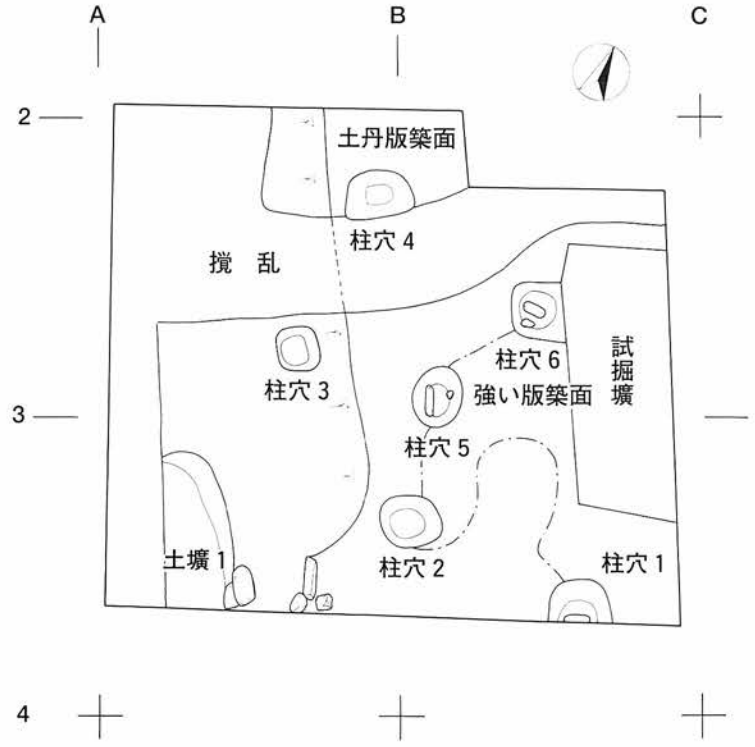
〈土層注記〉

1．表土・撹乱
2．明茶褐色砂質土　炭化物・土丹粒・炭化物・粗い砂が多量
3．茶褐色砂質土　炭化物・土丹粒・凝灰質砂岩粒が多量、締まりやや有
4．茶褐色砂質土　凝灰質砂岩小塊・土丹粒が多量、締まり強し、Ⅰａ面構築地業層
5．茶褐色砂質土　凝灰質砂岩小塊・土丹粒が多量、締まり強し、Ⅰｂ面構築地業層
6．暗茶灰色砂質土　炭化物・凝灰質砂岩粒が多量、締まり無
7．黒灰色砂質土　炭化物・遺物が多量、かわらけ溜りを構成する（炭層A）
8．黒灰色砂質土　炭化物・灰・かわらけ小片が多量、灰褐色土ブロック少量（炭層B）
9．黒灰色砂質土　炭化物・かわらけ小片が多量（炭層B）
10．暗灰褐色砂質土　土丹粒・凝灰質砂岩粒が多量、締まり強し、Ⅱ面構築地業層
11．暗灰褐色砂質土　土丹粒・凝灰質砂岩粒が多量、締まり無
12．明茶褐色砂質土　炭化物・凝灰質砂岩粒が多め、締まり有
13．黒灰色砂質土　炭化物・凝灰質砂岩小塊・遺物が多量、建物址覆土、締まり無
14．暗灰褐色砂質土　炭化物・凝灰質砂岩粒が少量、建物址覆土、締まり無
15．暗灰褐色砂質土　下位に炭化物層が帯状堆積、締まり無、土壙2
16．暗灰褐色砂質土　炭化物・凝灰質砂岩粒が帯状堆積、締まり無
17．暗黄褐色砂質土　土丹・凝灰質砂岩小塊が多量、締まり強し、地業層
18．暗黄褐色砂質土　炭化物・土丹・凝灰質砂岩小塊が多量、締まり強し、地業層
19．茶褐色砂質土　炭化物・凝灰質砂岩粒が少量、締まり無、Ⅰｂ面P1覆土
20．明茶褐色砂質土　凝灰質砂岩大小粒・土丹粒が多量、締まり無、Ⅰｂ面土壙1覆土
21．暗茶灰色砂質土　炭化物が少量、締まり無
22．灰褐色砂質土　土丹・凝灰質砂岩小塊が多量、締まり強し、Ⅱ面構築地業層
23．明茶灰色粘質土　土丹・凝灰質砂岩粒・茶灰色土ブロック、締まり強い地業層
24．暗茶灰色砂質土　凝灰質砂岩粒が多量、部分的に炭化物ブロック、締まり無
25．暗灰褐色粘質土　土丹・凝灰質砂岩小塊が多量、締まり強し、地業層
26．黒灰色砂質土　炭化物・かわらけ小片が多量、締まり無
27．暗茶褐色粘質土　土丹・凝灰質砂岩小塊が多量、締まり強し、地業層か
28．茶褐色砂質土　炭化物・凝灰質砂岩粒が少量、締まり無、P3覆土

図3　調査区土層堆積図



▲Ⅰa面全測図



▲Ⅰb面全測図

図4　Ⅰ面遺構全図

Ⅰb面

この面は海抜高21.0m前後、東から西に緩やかな傾斜をもち、Bライン付近には弱い段差があり、これより西側は地業層がやや弱くなっている。

検出した遺構は、土壙1基の他に不規則な並びで建物を構成しない柱穴6口が見られた。

土壙1

調査区南西に位置し、西側は擁壁で壊されており、南側は調査区外に延びている。形状は楕円形と考えられ、規模は南北径115cm以上、東西径80cm以上で深さは工事の掘削深度まで掘り下げたが底面は確認されておらず、確認面より50cm以上の深さである。覆土は凝灰質砂岩塊や土丹塊を多く含んだ明茶褐色土である。出土遺物はかわらけ・常滑窯甕片が見られたがいずれも小片で図示していない。

柱穴1

形状は隅丸方形で径30cm程、深さ25cmで底面には径20cmの礎石が据えられていた。覆土は茶褐色砂質土で図示できる遺物は出土していない。

柱穴2

形状は隅丸方形で径40cm、深さ35cmである。覆土は凝灰質砂岩粒を多く含んだ茶褐色土である。出土遺物は図5－8がかわらけでロクロ成形大皿、9は瀬戸窯卸皿である。

柱穴3

形状は隅丸方形で径30cm、深さ20cm、底面に礎板痕跡有り、覆土は土丹粒を多く含む茶褐色砂質土

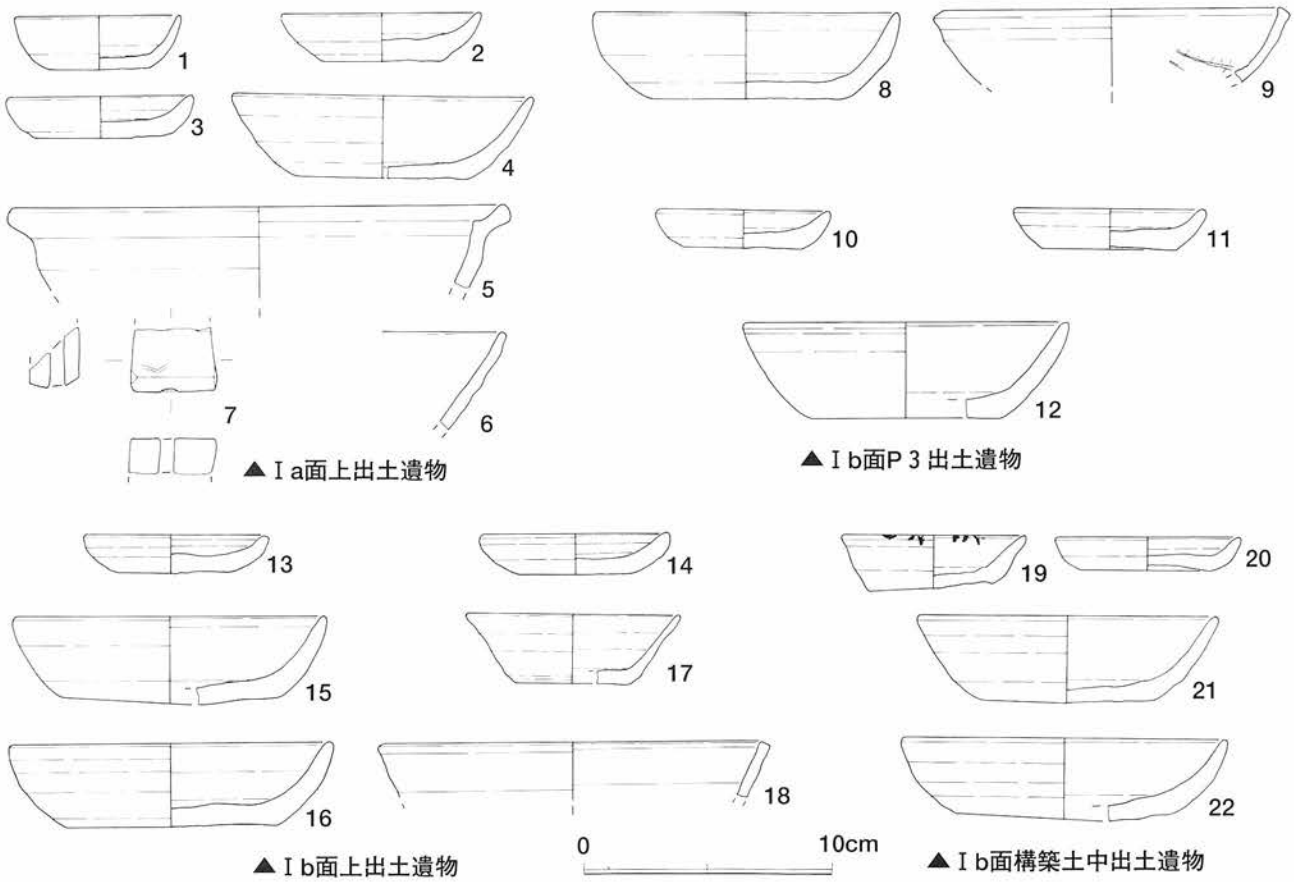


図５　Ⅰ面出土遺物

出土遺物は図５－10～12がかわらけである。

柱穴４

形状は隅丸方形で径45cm、深さ35cmである。覆土は凝灰質砂岩粒・炭化物を含んだ茶褐色砂質土である。遺物は出土していない。

柱穴５

形状は円形で径50cm、深さ35cmで底面に礎石と思われる長方形の土丹塊が据えられていた。覆土は茶褐色砂質土で、遺物は出土していない。

柱穴６

形状は隅丸方形で径45cm、深さ30cmである。底面に２個の大小土丹塊の礎石を据えている。覆土は茶褐色砂質土である。出土遺物はかわらけ小片のみで図示していない。

この他、Ⅰ面に伴う遺物としてはⅠｂ面上（Ⅰａ面構築土中の遺物も含む）から出土した資料が図５－13～18で、13～16はかわらけでロクロ成形の大小皿、17は瀬戸窯入子、18は瀬戸窯碗である。Ⅰｂ面の構築土中から遺物は、同図19～22のロクロ成形の大小かわらけが出土した。

前章の層序でも述べたが、Ⅰｂ面下からⅡ面上にかけて、薄い間層を挟んで拡がる炭層Ａ・Ｂとした炭化物を多量に含んだ黒灰色砂質土層を検出した。このうち、炭層Ａ（図版３・ａ）はＢ－３グリット周辺の海抜高20.75m前後のレベルで、かわらけの完形品を中心にして常滑甕・捏鉢・山茶碗などの破片でかわらけ溜りを構成していたのが、図６の出土遺物である。かわらけ溜りの遺構は掘り込みはなく、炭化物と一緒に遺物を廃棄した状況で出土している。図７の出土遺物は炭層Ｂの８・９層からで、Ⅱ面上に堆積していた灰や焼土、灰褐色土ブロックと共にかわらけ小片が多量に出土している。

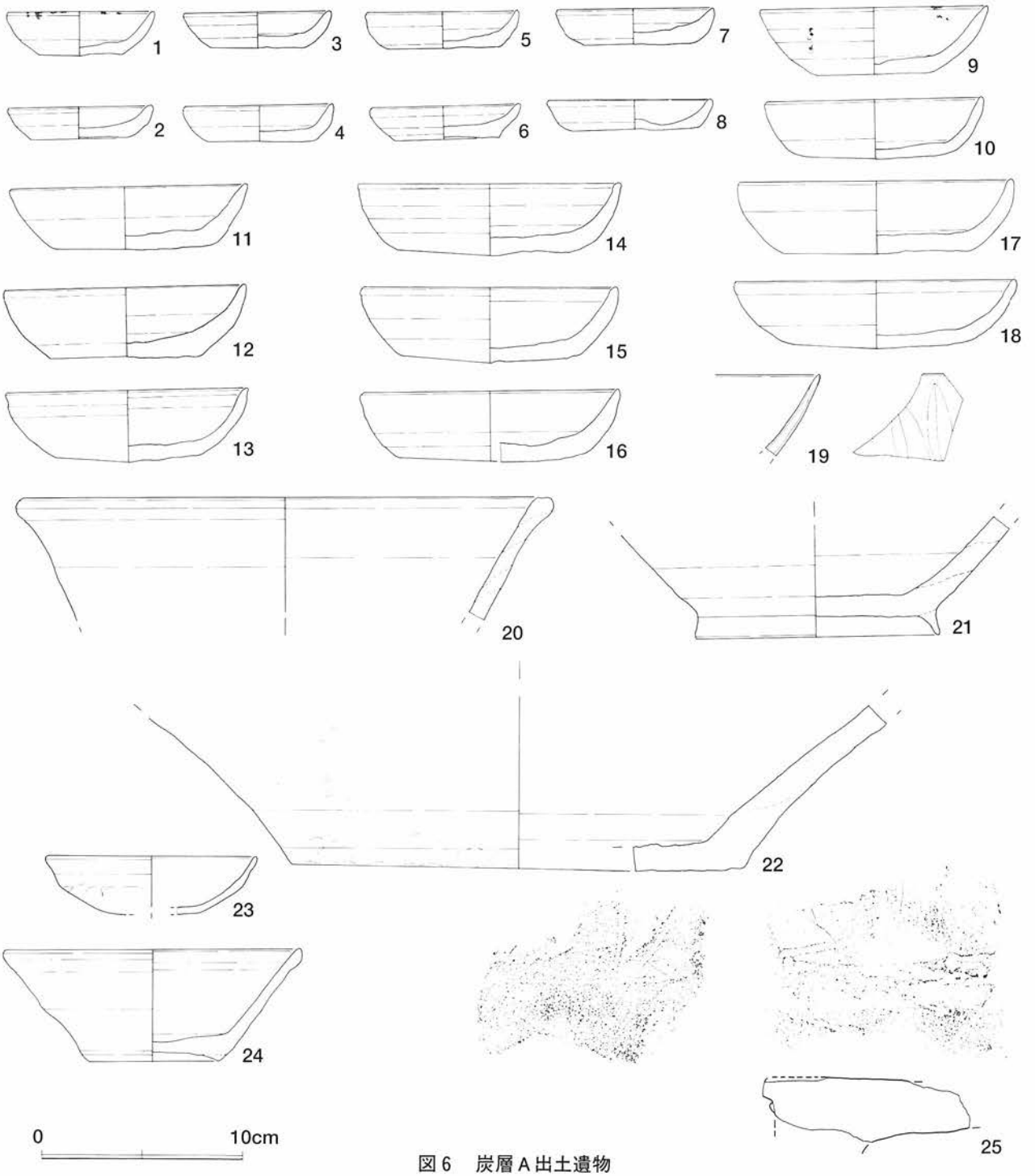


図6　炭層A出土遺物

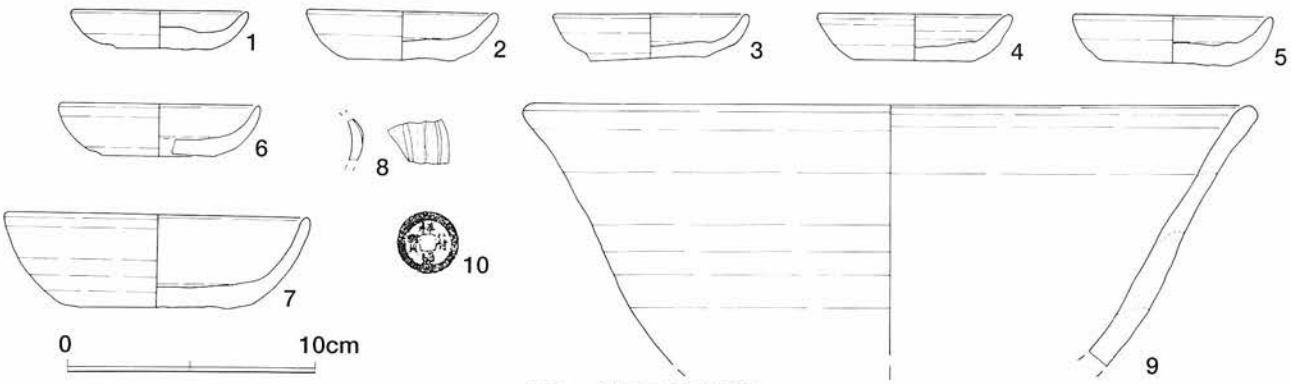


図7　炭層B出土遺物

B．Ⅱ面検出遺構・出土遺物

Ⅰｂ面は厚さ10cm前後で、その下は炭化物層が拡がっていた。この炭化物層を取り除くと、海抜高25.８ｍ程で検出されたのがⅡ面の良好な生活面である。この面は撹乱の掘削時に既に断面で確認されていた。破砕した泥岩や凝灰質砂岩の大小塊の地業に、泥岩を潰したものなどで表面を整地しているが、表面は泥岩が顔を出し凹凸な面となるのが特徴的である。この面からは浅い掘り方をもつ建物と建物内のかわらけ溜り、土壙、ピットなどが検出された。またⅡ面まで掘り下げると掘削深度にほぼ達していたので調査区南壁際に土層堆積図を作成するためのサブトレンチと、浄化槽で遺構面が破壊される北壁際にトレンチを入れてⅡ面以下を探査した。

竪穴状建物（図８～12）

この建物は北側と西側が撹乱で削平され、南側は調査区外に延びているため、全体規模は不明である。東西2.7m以上、南北2.3m以上の範囲が確認できただけで、深さ30ｃｍ程の浅い掘り込みをもち、底面は平坦になっているが締まりが認められない。北・東壁直下の底面には、径25ｃｍ程の安山岩の玉石（伊豆石）や泥岩塊が検出されており、北壁には板壁の一部とみられる横板の圧痕が認められたが、壁直下からは柱穴が確認されていない。覆土は上層が炭化物・凝灰質砂岩粒を多量に含んだ締まりのない黒灰色砂質土、下層は暗灰褐色で炭化物の少ないものである。かわらけ溜りは建物床下にあたる掘り方の底面上もしくは13層下部から多量の炭化物にともなって検出されたものである。建物が廃棄された時にゴミ穴として使用されたものと考えられる。かわらけの検出された海抜高は20.5m前後である。

この遺構は浅い掘り込みを持ち、壁直下に土台材を受けるための玉石や泥岩塊が据えられていて竪穴状の建物と考えられるものであるが、調査では良好な床面は検出されておらず、壁材が腐食して残っていなかった。このような地面を掘り込んだ建物には、この他に板壁掘立柱建物と呼んでいるものがある。基本的な構造は掘立柱式で低い板貼りの床をもつ建物である。普通の掘立柱建物と異なる点は、建物内部を浅く掘り下げて外壁の裾を土中に埋め込んだもので、ちょうど板壁を葺きおろしたような掘立柱建物というものである。今回検出された建物は竪穴建物の範疇に入るものであろうか。

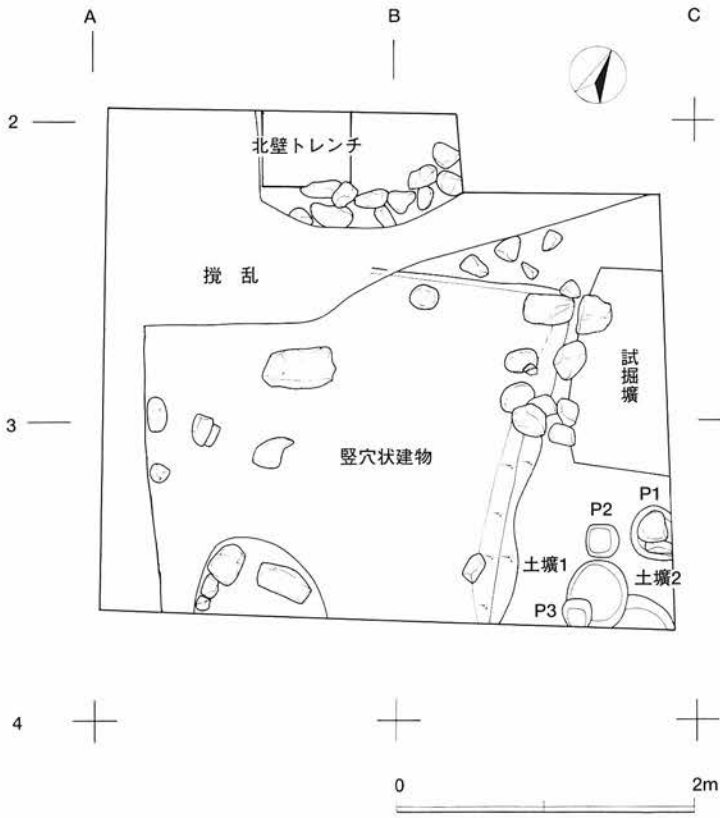


図８　Ⅱ面遺構全図

土壙１

建物の東側、Ｂ－３グリットで検出された。長径45cmの楕円形を呈し、深さ25cmである。覆土は灰褐色砂質土で締まりがなく炭化物や砂を多く含む。遺物はかわらけ小片が出土しただけである。

土壙２

土壙１に西側を壊される形で調査区外に拡がる土壙を検出した。円形で径50cm以上、深さ15cm程である。覆土は暗灰褐色砂質土で底面に炭化物層が帯状に堆積し、上層はⅡ面構築土に覆われている。図示可能な出土遺物はない。

柱穴

柱穴は３口だけで建物を構成するよな検出状況ではない。

柱穴１は径35cm、深さ30cmで、底面に扁平な泥岩を２個据えて礎石としている。

柱穴２は径25cm、深さ20cmのやや方形である。

柱穴３も方形に近い形状で径20cm、深さ40cmを測り、締まりのない茶褐色砂質土が覆土である。いずれの柱穴からも良好な遺物は出土していない。

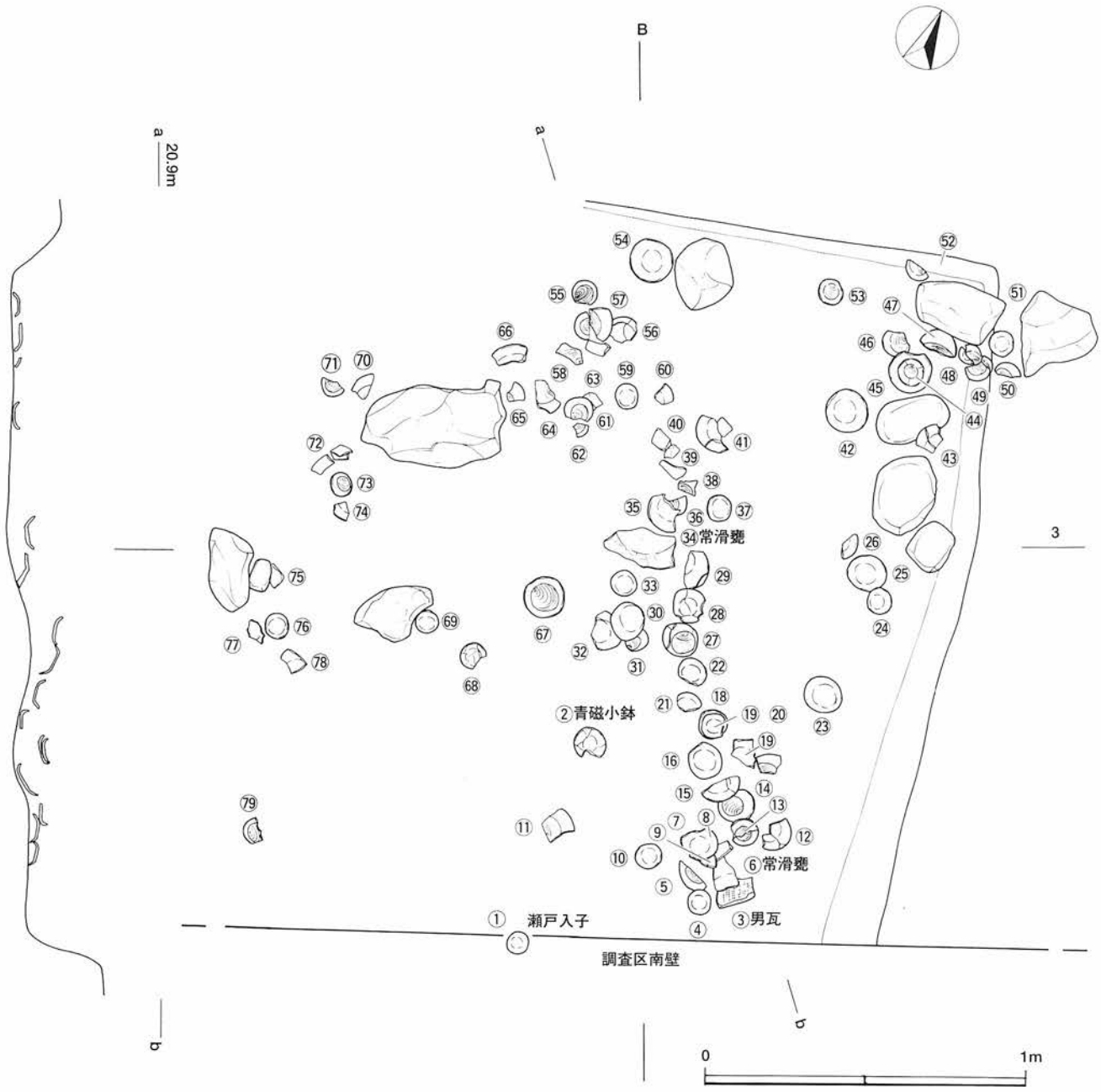
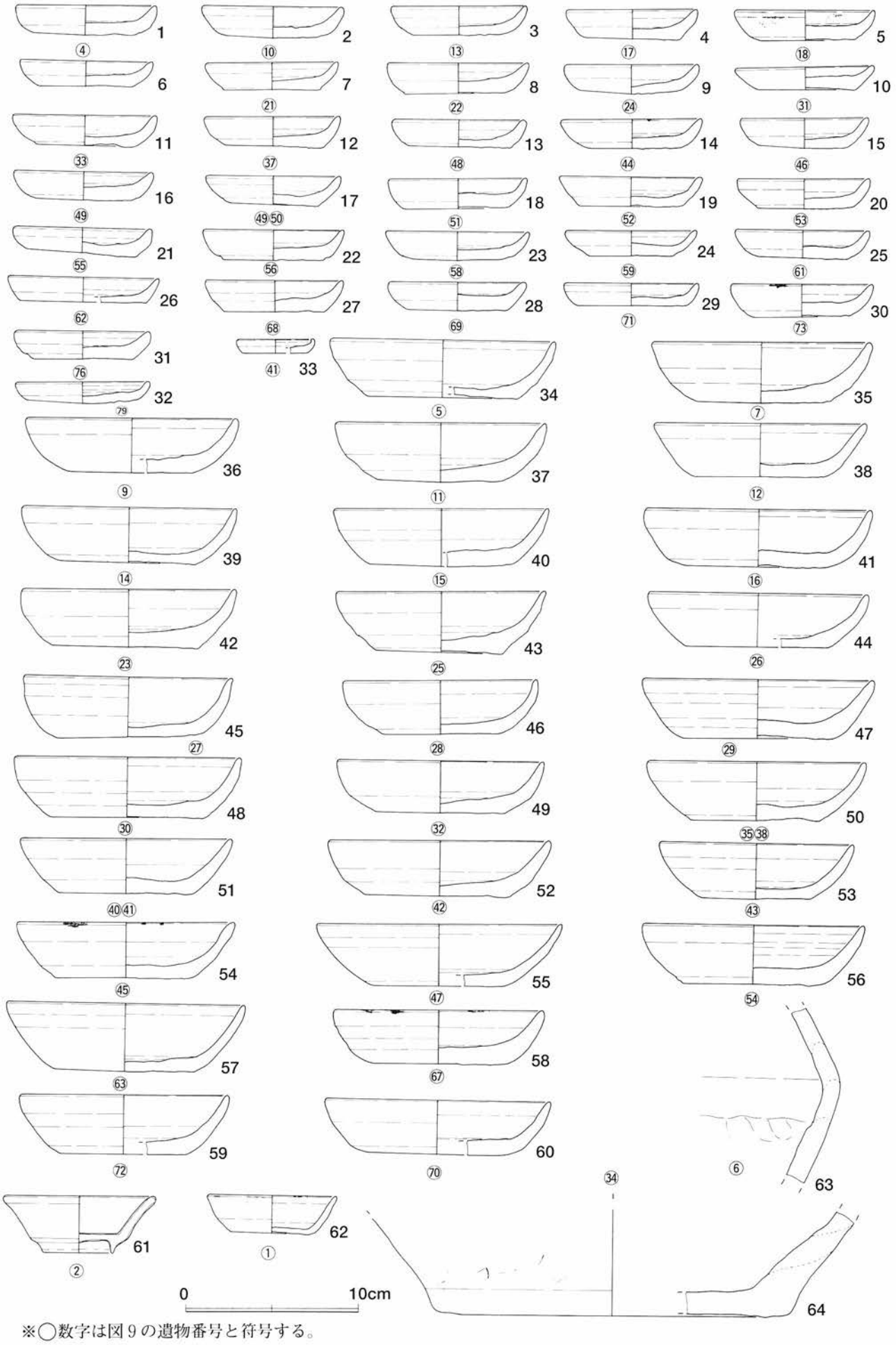


図９　建物内かわらけ溜り



※○数字は図９の遺物番号と符号する。

図10　建物内かわらけ溜り出土遺物

竪穴状建物出土遺物（図10～12）

出土遺物は底面にかわらけが散在していたほか、常滑窯・瀬戸窯などの国産陶器、青磁などの舶載品、瓦などがみられた。また建物の覆土上層からはかわらけ、捏鉢、手焙り、砥石などが出土している（図12－5～17）。先述したとうり、かわらけ溜りは建物を廃棄した後に投げこまれたような状況で検出されている。かわらけ溜りから出土したかわらけについて、表1にかわらけの口径・底径・器高の法量を、図11にかわらけの口径と底径比による法量分布を図にして、それぞれを示した。なお、表1の番号は図10の遺物番号と整合しており、かわらけ実測図の下に記した丸囲い数字は、図9の番号と一致している。

かわらけ溜りのかわらけ法量を概観するならば、小型ロクロ成形の1～33の資料は、33の極小タイプを除くと、口径7.5～8.0cm、底径5.1～5.9cm、器高1.7cm前後に集中していた。46・53は口径11.0cm、底径が6cm台という中型品である。

34～45・47～52・54～60は大型のロクロ成形の資料である。口径は55の14cmを越える資料以外はすべて、12.1～13.5cmの中におさまり、底径は7.2～8.6cmの範囲で、器高は3cm台で3.3cm前後がもっとも多く出土している。これらはすべて回転糸切り底のかわらけであり、法量と出土量は内折れの極小が1点、小型が32点、中型が2点、大型25点である。器型はほぼ同一傾向であり、底部に比べて基底部の器壁が厚くなり、体部が内彎傾向を示したかわらけが主体をなしている。図11は口径・底径比の分布をグラフにしたものである。かわらけを概観するならば、三箇所のグループにほぼ集中する傾向が認められ、

番号	口径	低径	器高	大きさ
1	7.9	5.9	1.7	s
2	7.9	5.0	1.8	s
3	7.6	4.9	1.6	s
4	7.4	5.3	1.7	s
5	7.9	5.4	1.7	s
6	7.5	5.3	1.5	s
7	7.5	5.6	1.6	s
8	8.0	5.8	1.7	s
9	7.5	5.7	1.7	s
10	7.8	5.6	1.3	s
11	8.1	5.4	1.7	s
12	7.6	5.6	1.7	s
13	7.4	5.9	1.6	s
14	7.8	5.1	1.7	s
15	7.4	5.0	1.7	s
16	7.8	5.5	1.6	s
17	7.6	5.0	1.7	s
18	7.8	5.9	1.7	s
19	8.0	5.9	1.7	s
20	7.4	5.5	1.8	s

番号	口径	低径	器高	大きさ
21	7.8	6.2	1.4	s
22	8.0	5.7	1.8	s
23	8.0	4.9	1.7	s
24	7.8	4.9	1.5	s
25	7.8	5.0	1.6	s
26	8.0	7.2	1.4	s
27	7.8	5.8	1.8	s
28	7.8	5.7	1.7	s
29	7.8	6.1	1.3	s
30	8.0	5.5	1.9	s
31	7.5	5.6	1.6	s
32	7.5	6.1	1.3	s
33	4.2	3.7	0.8	s
34	12.8	8.6	3.3	b
35	12.3	7.3	3.5	b
36	12.1	7.2	3.1	b
37	12.1	7.2	3.4	b
38	12.2	7.4	3.1	b
39	12.2	7.6	3.2	b
40	12.2	8.2	3.3	b

番号	口径	低径	器高	大きさ
41	12.8	8.0	3.3	b
42	12.1	8.3	3.3	b
43	12.1	7.2	3.5	b
44	12.4	8.2	3.1	b
45	12.1	8.4	3.5	b
46	11.0	6.6	3.1	m
47	13.1	8.4	3.4	b
48	13.0	8.6	3.5	b
49	12.1	7.3	3.0	b
50	12.4	7.3	3.4	b
51	12.1	7.7	3.2	b
52	12.5	8.3	3.2	b
53	11.0	6.0	3.2	m
54	12.4	7.9	3.2	b
55	14.0	7.4	3.5	b
56	12.6	7.8	3.4	b
57	13.5	8.0	3.9	b
58	12.2	7.5	3.1	b
59	12.1	7.3	3.4	b
60	12.8	8.1	3.1	b

表1　かわらけ法量表　　（単位：cm　s：小型　m：中型　b：大型）

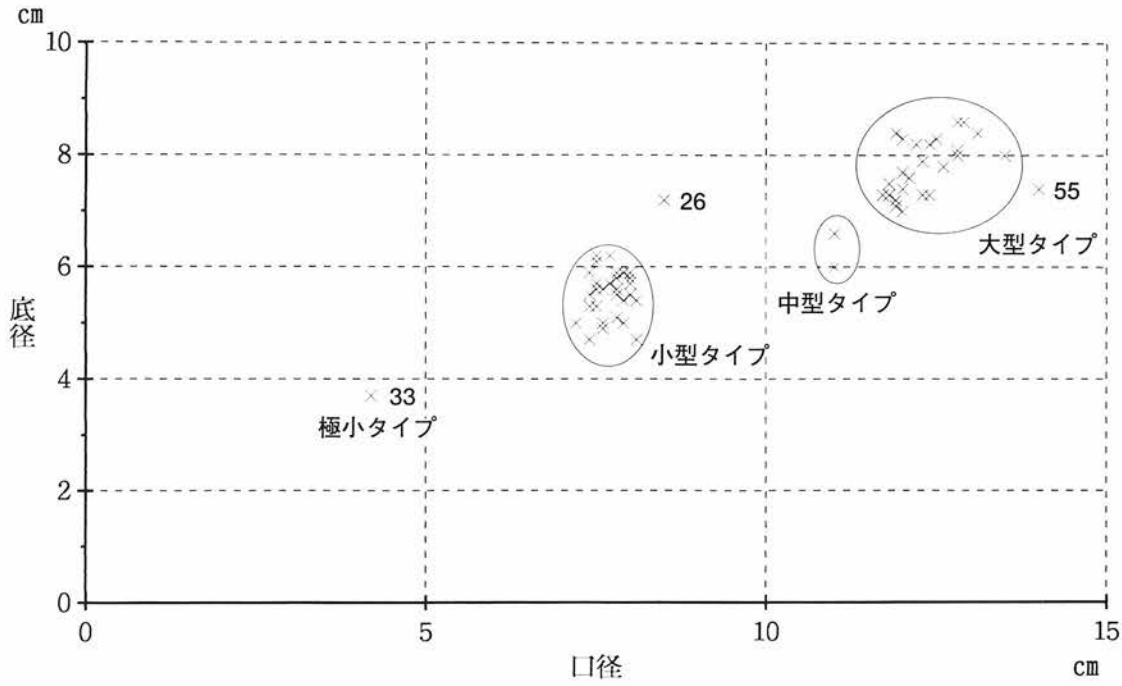


図11　かわらけ法量

これが小型・中型・大型の各タイプに相当しており、55・33の特大と極小のもの、さらに26の小型だが口径・底径比の一周り大きいものなどが外れた位置にある。

北壁トレンチ（図３・８）

北壁際の中央西側に浄化槽を設置するとのことで、60×50cmの範囲を深さ80cmほど掘り下げてⅡ面以下の土層堆積を確認したものである。厚さ10cmほどのⅡ面地業層の直下には、包含層等の間層を挟まず泥岩・凝灰質砂岩粒を含んだ粘性の強い茶灰色土の地業層がみられた。さらにその下は砂岩粒と炭化物を含む薄い包含層があり、これを除くと暗灰褐色粘質土で泥岩・凝灰質砂岩小塊を多量にまじえた厚さ15cm前後の地業層が表出する。この地業層下は15～30cm程の厚さで締まりのない遺物包含層が堆積しているのが確認されている。この層の下にもまだ生活面が続いており、海抜19.85mまで掘り下げたが中世地山は確認できなかった。このようにⅡ面以下も、薄い間層を挟んで連続した地業を繰り返し生活面を構築していた。

トレンチ内からの出土遺物は、図12－２～４ですべて26層より出土したものである。２・３は小型ロクロ成形の製品で、４が駿東系の山茶碗である。

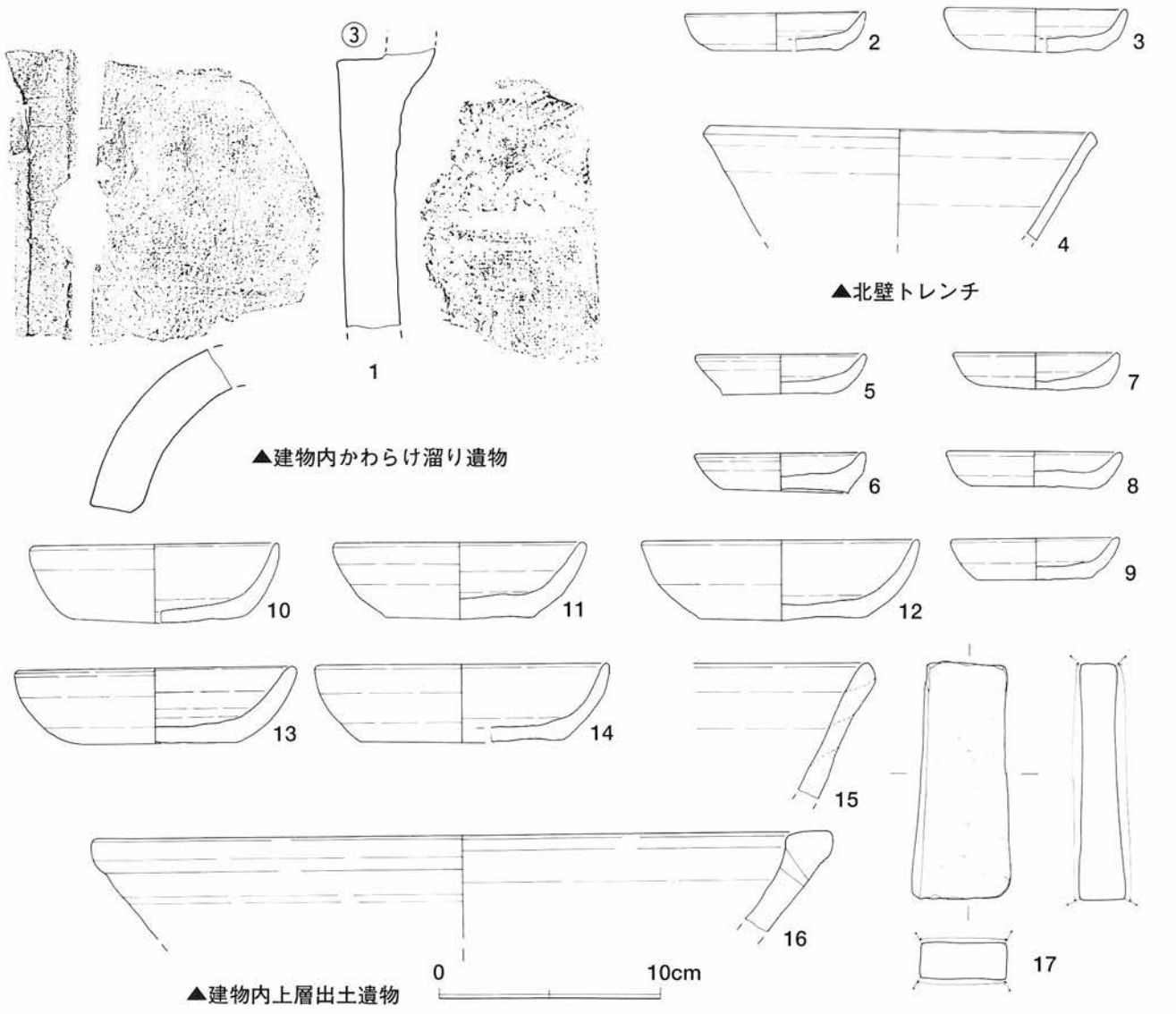


図12　建物内・北壁トレンチ出土遺物

No.	種　別	観　察　項　目
1	かわらけ	法量　口径6.5cm 底径4.0cm 器高2.2cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　淡橙灰色
2	かわらけ	法量　口径7.8cm 底径4.6cm 器高1.9cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　淡黄灰色
3	かわらけ	法量　口径7.3cm 底径5.1cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　淡黄灰色
4	かわらけ	法量　口径11.8cm 底径6.8cm 器高3.3cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒 黒色粒　色調　淡黄灰色
5	瀬戸　折縁皿	法量　口径19.4cm　胎土　暗黄色　きめ細かい　釉薬　淡灰緑色
6	瀬戸　碗	胎土　灰色　きめ細かい　釉薬　灰緑色
7	滑石スタンプ	法量　残存長3.5cm　残存厚2.0cm　備考　側部に穿孔あり
8	かわらけ	法量　口径12.0cm 底径7.6cm 器高3.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　橙色
9	瀬戸　卸皿	法量　口径13.3cm　胎土　淡黄灰色　若干微砂・気孔を含む　きめ細かい　色調　黄灰色
10	かわらけ	法量　口径7.0cm 底径4.8cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　暗橙灰色
11	かわらけ	法量　口径7.6cm 底径5.4cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　淡橙色
12	かわらけ	法量　口径13.0cm 底径7.5cm 器高3.9cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　暗橙灰色
13	かわらけ	法量　口径7.4cm 底径5.0cm 器高1.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　淡橙灰色
14	かわらけ	法量　口径7.6cm 底径4.6cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　暗橙色
15	かわらけ	法量　口径12.2cm 底径8.5cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　淡黄灰色
16	かわらけ	法量　口径13.0cm 底径8.5cm 器高3.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　淡黄灰色
17	瀬戸　入子	法量　口径8.4cm 底径4.5cm 器高2.7cm　胎土　淡黄灰色 ややきめが細かい 釉薬 灰緑色

表2　Ⅰ面出土遺物（1）

No.	種　別	観　察　項　目
18	美濃鉢	法量　口径15.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂　赤色粒　色調　黄土色 釉薬　白　僅かに残る　内面のみ
19	かわらけ	法量　口径7.4cm 底径5.0cm 器高2.0cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　暗橙灰色
20	かわらけ	法量　口径7.4cm 底径5.2cm 器高1.3cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白色粒 色調　淡橙色
21	かわらけ	法量　口径12.0cm 底径6.4cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 黒色粒　色調　淡橙色
22	かわらけ	法量　口径13.0cm 底径8.6cm 器高3.2cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　橙灰色

表３　Ｉ面出土遺物（２）

No.	種　別	観　察　項　目
1	かわらけ	法量　口径7.2cm 底径4.1cm 器高2.2cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　淡黄灰色
2	かわらけ	法量　口径6.8cm 底径4.9cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 黒色粒 色調　淡橙色
3	かわらけ	法量　口径7.2cm 底径4.7cm 器高1.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　淡黄橙色
4	かわらけ	法量　口径7.1cm 底径5.1cm 器高1.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針　赤色粒 色調　淡橙灰色
5	かわらけ	法量　口径7.2cm 底径5.4cm 器高1.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針　赤色粒 色調　淡橙灰色
6	かわらけ	法量　口径7.5cm 底径5.1cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針　黒色粒 色調　淡橙灰色
7	かわらけ	法量　口径7.6cm 底径5.3cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針　赤色粒 色調　淡橙灰色
8	かわらけ	法量　口径7.8cm 底径6.2cm 器高1.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針　黒色粒 色調　淡黄灰色
9	かわらけ	法量　口径11.2cm 底径5.5cm 器高3.2cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白色粒 赤色粒　色調　淡橙色
10	かわらけ	法量　口径10.4cm 底径6.5cm 器高3.0cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　淡橙灰色

表４　炭層Ａ出土遺物（１）

No.	種　別	観　察　項　目
11	かわらけ	法量　口径11.3cm 底径7.5cm 器高3.1cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　淡橙灰色
12	かわらけ	法量　口径11.8cm 底径7.1cm 器高3.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 黒色粒 色調　淡橙灰色
13	かわらけ	法量　口径11.6cm 底径7.1cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　淡橙色
14	かわらけ	法量　口径12.5cm 底径9.0cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 黒色粒　色調　淡橙灰色
15	かわらけ	法量　口径12.2cm 底径8.6cm 器高3.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 黒色粒　色調　淡橙灰色
16	かわらけ	法量　口径12.3cm 底径8.7cm 器高3.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　淡橙灰色
17	かわらけ	法量　口径13.4cm 底径9.1cm 器高3.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　淡橙色
18	かわらけ	法量　口径13.6cm 底径7.8cm 器高3.3cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 黒色粒 色調　淡橙色
19	青磁　碗	素地　灰白色 堅緻　釉薬　暗灰緑色 不透明
20	山茶碗窯捏鉢	法量　口径26.0cm　胎土　長石粒 石英粒 白色粒 小石　色調　灰色
21	山茶碗窯捏鉢	法量　底径12.0cm　胎土　砂粒 長石粒 石英粒 小石　色調　灰色
22	常滑　甕	法量　底径22.4cm　胎土　長石粒 石英粒 砂粒 小石　色調　赤茶褐色
23	かわらけ	法量　口径10.4cm 底径9.7cm　成形　手づくね　胎土　微砂 雲母 白色粒　色調　暗灰色
24	山茶碗窯捏鉢	法量　口径14.4cm 底径9.7cm　成形　手づくね　胎土　微砂 雲母 白色粒　色調　暗灰色
25	宇瓦	胎土　砂を含むが比較的精良　色調　灰黒色 芯部 灰白色

表５　炭層Ａ出土遺物（２）

No.	種　別	観　察　項　目
1	かわらけ	法量　口径7.0cm 底径3.6cm 器高1.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 黒色粒　色調　淡橙灰色
2	かわらけ	法量　口径7.6cm 底径4.3cm 器高2.0cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　暗橙灰色
3	かわらけ	法量　口径7.8cm 底径4.7cm 器高1.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 黒色粒　色調　橙灰色
4	かわらけ	法量　口径7.8cm 底径4.7cm 器高1.9cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　暗橙灰色
5	かわらけ	法量　口径8.0cm 底径5.1cm 器高1.9cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 黒色粒　色調　淡橙色
6	かわらけ	法量　口径8.0cm 底径4.5cm 器高2.1cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　暗橙灰色
7	かわらけ	法量　口径12.2cm 底径6.0cm 器高3.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　暗橙灰色
8	青磁碗　水注	素地　白色　堅緻　釉薬　濃い水色　半透明
9	山茶碗窯捏鉢	法量　口径28.6cm　胎土　微砂 石英粒　長石粒　小石　色調　暗灰色

表6　炭層B出土遺物

No.	種　別	観　察　項　目
1	かわらけ	法量　口径7.9cm 底径5.9cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　淡橙灰色
2	かわらけ	法量　口径7.9cm 底径5.0cm 器高1.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　小石　色調　橙色
3	かわらけ	法量　口径7.6cm 底径4.9cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針　赤色粒 色調　淡橙灰色
4	かわらけ	法量　口径7.4cm 底径5.3cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針　白色粒 色調　黄灰色
5	かわらけ	法量　口径7.9cm 底径5.4cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　橙色
6	かわらけ	法量　口径7.5cm 底径5.3cm 器高1.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　淡黄灰色

表7　建物内かわらけ溜り出土遺物（1）

No.	種　別	観　察　項　目
7	かわらけ	法量　口径7.5cm 底径5.6cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　淡黄灰色
8	かわらけ	法量　口径8.0cm 底径5.8cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　黄灰色
9	かわらけ	法量　口径7.5cm 底径5.7cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　橙色
10	かわらけ	法量　口径7.8cm 底径5.6cm 器高1.3cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　淡黄灰色
11	かわらけ	法量　口径8.1cm 底径5.4cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　淡橙色
12	かわらけ	法量　口径7.6cm 底径5.6cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　黄灰色
13	かわらけ	法量　口径7.4cm 底径5.9cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　黄灰色
14	かわらけ	法量　口径7.8cm 底径5.1cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　淡黄灰色
15	かわらけ	法量　口径7.2cm 底径5.0cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　淡橙灰色
16	かわらけ	法量　口径7.8cm 底径5.5cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　黄灰色
17	かわらけ	法量　口径7.6cm 底径5.0cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　黄灰色
18	かわらけ	法量　口径7.8cm 底径5.9cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　淡橙灰色
19	かわらけ	法量　口径8.0cm 底径5.9cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　黄灰色
20	かわらけ	法量　口径7.4cm 底径5.5cm 器高1.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　暗橙色
21	かわらけ	法量　口径7.7cm 底径6.2cm 器高1.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　黄灰色
22	かわらけ	法量　口径8.0cm 底径5.7cm 器高1.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 小石 色調　淡橙灰色
23	かわらけ	法量　口径8.1cm 底径4.7cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　淡黄灰色

表8　建物内かわらけ溜り出土遺物（2）

No.	種　別	観　察　項　目
24	かわらけ	法量　口径7.4cm 底径4.7cm 器高1.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　淡橙灰色
25	かわらけ	法量　口径7.6cm 底径5.0cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　淡橙灰色
26	かわらけ	法量　口径8.5cm 底径7.2cm 器高1.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　淡橙灰色
27	かわらけ	法量　口径7.8cm 底径5.8cm 器高1.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　橙色
28	かわらけ	法量　口径7.7cm 底径5.7cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　暗黄灰色
29	かわらけ	法量　口径7.5cm 底径6.2cm 器高1.3cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　橙色
30	かわらけ	法量　口径8.0cm 底径5.5cm 器高1.9cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　小石　色調　淡黄灰色
31	かわらけ	法量　口径7.5cm 底径5.6cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　淡橙色
32	かわらけ	法量　口径7.5cm 底径6.1cm 器高1.3cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　橙色
33	かわらけ	法量　口径4.2cm 底径3.7cm 器高0.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 赤色粒 色調　淡黄灰色
34	かわらけ	法量　口径12.8cm 底径8.6cm 器高3.3cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　淡黄灰色
35	かわらけ	法量　口径12.3cm 底径7.3cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　暗橙灰色
36	かわらけ	法量　口径12.0cm 底径7.0cm 器高3.1cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　淡橙色
37	かわらけ	法量　口径11.9cm 底径7.1cm 器高3.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　淡橙灰色
38	かわらけ	法量　口径12.0cm 底径7.4cm 器高3.0cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　淡橙灰色
39	かわらけ	法量　口径12.1cm 底径7.6cm 器高3.2cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　小石　色調　淡橙灰色
40	かわらけ	法量　口径12.2cm 底径8.2cm 器高3.2cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　橙色

表9　建物内かわらけ溜り出土遺物（3）

No.	種　別	観　察　項　目
41	かわらけ	法量　口径12.8cm 底径8.0cm 器高3.3cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　黄灰色
42	かわらけ	法量　口径12.0cm 底径8.3cm 器高3.3cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　暗黄灰色
43	かわらけ	法量　口径11.9cm 底径7.2cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　小石　色調　暗黄灰色
44	かわらけ	法量　口径12.4cm 底径8.2cm 器高3.1cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　橙灰色
45	かわらけ	法量　口径11.9cm 底径8.4cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　橙色
46	かわらけ	法量　口径11.0cm 底径6.6cm 器高3.1cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　淡橙灰色
47	かわらけ	法量　口径13.1cm 底径8.4cm 器高3.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　橙色
48	かわらけ	法量　口径12.9cm 底径8.6cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　淡黄灰色
49	かわらけ	法量　口径11.7cm 底径7.3cm 器高3.0cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　淡橙灰色
50	かわらけ	法量　口径12.4cm 底径7.3cm 器高3.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 小石 色調　暗黄灰色
51	かわらけ	法量　口径12.0cm 底径7.7cm 器高3.2cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　暗橙灰色
52	かわらけ	法量　口径12.5cm 底径8.3cm 器高3.2cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　黄灰色
53	かわらけ	法量　口径11.0cm 底径6.0cm 器高3.2cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　黄灰色
54	かわらけ	法量　口径12.3cm 底径7.9cm 器高3.2cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針　赤色粒 色調　淡橙灰色
55	かわらけ	法量　口径14.0cm 底径7.4cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 色調　淡橙灰色
56	かわらけ	法量　口径12.6cm 底径7.8cm 器高3.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 小石　色調　橙灰色
57	かわらけ	法量　口径13.5cm 底径8.0cm 器高3.9cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 赤色粒 色調　淡橙灰色

表10　建物内かわらけ溜り出土遺物（4）

No.	種　別	観　察　項　目
58	かわらけ	法量　口径11.8cm 底径7.5cm 器高3.1cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　淡橙色
59	かわらけ	法量　口径11.8cm 底径7.3cm 器高3.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　小石　色調　淡橙灰色
60	かわらけ	法量　口径12.8cm 底径8.1cm 器高3.1cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　淡橙灰色
61	青磁　折腰鉢	法量　口径8.5cm 底径4.0cm 器高3.3cm　素地　灰白色　堅緻　釉薬　灰緑色　不透明 厚い
62	瀬戸　入子	法量　口径7.3cm 底径4.5cm 器高2.2cm　胎土　淡灰色　きめ細かい　　色調　淡灰色
63	常滑　甕	胎土　微砂 雲母 長石粒 白色粒　色調　暗當壊色　芯　淡赤灰色
64	常滑　捏鉢	法量　底径20.1cm　胎土　砂粒　石英粒　長石粒　小石　色調　赤褐色　芯　暗灰色 降灰部　緑灰色　備考　外底砂目

表11　建物内かわらけ溜り出土遺物（5）

No.	種　別	観　察　項　目
1	男瓦	法量　厚2.4cm　凸面　横位ナデ　凹面　微砂粒の離れ砂若干付着　布目痕　斜め方向の糸切り痕　胎土　灰色　砂粒・白色粒を多く含む　色調　灰黒色
2	かわらけ	法量　口径8.0cm 底径5.6cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 黒色粒 色調　淡黄灰色
3	山茶碗	法量　口径8.0cm 底径5.8cm 器高1.9cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 赤色粒　色調　淡橙灰色
4	かわらけ	法量　口径16.8cm　胎土　微砂　石英粒　長石粒　小石　色調　灰色
5	かわらけ	法量　口径7.6cm 底径5.0cm 器高1.8cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　暗橙灰色
6	かわらけ	法量　口径7.6cm 底径5.6cm 器高1.7cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　淡橙灰色
7	かわらけ	法量　口径7.4cm 底径5.4cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 黒色粒　色調　暗橙灰色
8	かわらけ	法量　口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　橙灰色

表12　建物内・北壁トレンチ出土遺物（1）

No.	種　別	観　察　項　目
9	かわらけ	法量　口径7.5cm 底径5.2cm 器高1.9cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　暗橙灰色
10	かわらけ	法量　口径11.0cm 底径7.4cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 色調　暗橙灰色
11	かわらけ	法量　口径11.2cm 底径6.7cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 白色粒 色調　暗橙色
12	かわらけ	法量　口径12.4cm 底径7.6cm 器高3.6cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　橙灰色
13	かわらけ	法量　口径12.7cm 底径6.9cm 器高3.4cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針　赤色粒 色調　淡黄灰色
14	かわらけ	法量　口径13.0cm 底径9.0cm 器高3.5cm　成形　ロクロ　胎土　微砂 雲母 白針 色調　暗橙色
15	山茶碗窯捏鉢	胎土　微砂 雲母 白色粒　小石　色調　灰色
16	手焙り	法量　口径33.0cm　胎土　砂粒やや多いが良土　色調　灰黒色　芯　暗灰色
17	砥石	法量　口径10.5cm 幅3.8cm 厚1.6cm　色調　淡黄白色

表13　建物内・北壁トレンチ出土遺物（２）

第四章　積善遺跡の花粉化石

鈴木　　茂（パレオ・ラボ）

積善遺跡は鎌倉市十二所字積善に所在しており、位置的には鎌倉市の東部地域にあたる。検出遺構は13世紀の終わり頃から14世紀初めの住居跡で、堆積層は陸成層とみられ、花粉分析には適した所とは言えない。しかしながら、東部地域における花粉分析はこれまで稲荷小路に所在する公方屋敷跡（鈴木1994）のみであり、その結果も森林植生についてはあまり明確ではなかった。こうしたことから、本遺跡においても花粉分析を行い、遺跡周辺の古植生の検討を試みた。また、土層には灰を主体とした層も観察されたことから植物珪酸体分析を実施し、灰を構成しているイネ科植物および遺跡周辺のイネ科植生についても検討した。

1．試　料

試料は、調査区南壁よりスポットで10点（図１）と、北壁より１点（試料11：26層）の合わせて11点採取した。試料を採取した各層にについて簡単に記すと、試料１（２層）は灰褐色の砂質シルトで、小レキやカワラケ片が散在しており、小さな空隙がみられ土壌的である。試料２（３層）はややシルト質の暗灰褐色砂質粘土で、炭片が散在しており、カワラケ片もみられる。試料３（７層）は黒色の炭化物（灰）主体層、試料４（８層）は黒～黒灰色の砂質粘土で、炭や灰が多量に含まれ、レキが散在している。試料５（11層）は暗黄灰色砂質粘土で、砂岩が散在している。試料６（13層）は黒～黒灰色の砂質粘土で、大形の砂岩が点在しており、カワラケ片が散在し、炭・灰が多量に含まれている。試料７（14層）は暗灰色砂質粘土で、炭片が少し認められる。試料８（住居床面下）は黄色を帯びた暗灰色砂質粘土である。試料９（９層）は黒色の砂質の炭層で、砂岩やカワラケ片が認められる。試料10（16層）は暗灰褐色の砂質粘土で、炭・灰が層状にはいる。調査区北壁より採取された試料11（26層）は黒灰褐色の砂質粘土～シルトで、カワラケ片が散在し、炭片が点在している。

なお、出土遺物などから１ａ面が14世紀後半（試料１）、１ｂ面が14世紀前半（試料２）、２面（試料３～９）が13世紀終わり頃から14世紀初で、試料11（26層）が13世紀終わり頃と考えられている。

2．分析方法

上記した11試料について、次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約４～５ｇ）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリン

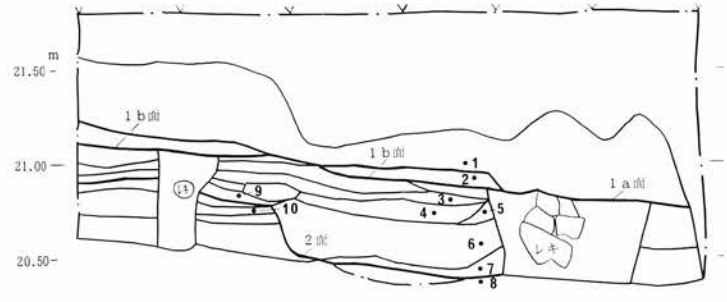


図１　調査区南壁の上層断面と試料採取層準

を加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

3．分析結果および考察

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉が6、草本花粉が9、形態分類で示したシダ植物胞子が2の総計17である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に示したが、各試料とも花粉の検出数が少なく、特に樹木花粉は非常に少なく、分布図として示すことはできなかった。なお、表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート）を作成し、各々にPLC.SS番号を付し、形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属（アカマツ・クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）・マツ属不明（ニヨウマツ類かゴヨウマツ類かの区別がつかなかったもの）・スギ・クマシデ属－アサダ属・コナラ属アカガシ亜属・シイノキ属－マテバシイ属が若干検出されているだけである。草本類ではイネ科が全試料より検出されており、その他、アカザ科－ヒユ科・アブラナ科・ヨモギ属・タンポポ亜科が多くの試料から得られている。

以上のように、検出できた花粉化石が非常に少なく、遺跡周辺の古植生、特に森林植生については述べることができない。これは試料が住居の覆土という性格から、乾陸状態にあり、そこに落下・埋積された花粉の多くは紫外線や土壌微生物などにより分解・消失してしまったと考えられる。

そうしたなか、草本類は多くはないが検出されており、イネ科を主体にアカザ科－ヒユ科・アブラナ科・ヨモギ属・タンポポ亜科などの雑草類とみられる分類群の花粉が得られている。よって、住居周辺ではこれら雑草類が多くみられたと推測される。

表1　積善遺跡の産出花粉分析一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
樹木												
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	3	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
草本												
イネ科	Gramineae	15	1	12	2	7	1	1	1	12	12	17
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	-	-	1	3	3	10	2	2	10
カラマツソウ属	*Thalictrum*	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
アブラナ科	Cruciferae	1	1	-	1	-	1	-	5	1	-	2
ヨモギ属	*Artemisia*	1	-	-	2	2	-	2	1	2	1	8
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	-	3	-	1	1	1	1	-	-	4
シダ植物												
単条型胞子	Monolete spore	38	1	4	1	2	2	2	8	2	-	13
三条型胞子	Trilete spore	3	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	7	0	0	0	0	2	3	1	0	1	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	25	4	15	5	11	6	7	19	17	15	43
シダ植物胞子	Spores	41	1	4	1	2	2	2	9	2	0	13
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	73	5	19	6	13	10	12	29	19	16	57
不明花粉	Unknown pollen	3	2	0	0	1	2	0	2	0	0	2

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

表2　試料1ｇ当りの機動細胞胞珪酸体個数

試料番号	イネ（個／g）	ネザサ節型（個／g）	クマザサ属型（個／g）	他のタケ亜科（個／g）	ヨシ属（個／g）	シバ属（個／g）	キビ族（個／g）	ウシクサ族（個／g）	不明（個／g）
3	40,800	49,900	4,500	9,100	0	4,500	36,300	853,000	118,000
4	92,100	153,400	8,800	0	0	0	13,200	140,300	96,400
7	114,200	201,800	7,600	0	0	0	3,800	53,300	7,600
8	41,000	145,200	11,200	3,700	7,400	0	3,700	7,400	18,600

4．植物珪酸体分析

検出された住居覆土には炭や灰を主体とした土層が観察され、この灰の母植物の検討を主目的に試料3、4、7、8、9について以下の方法で植物珪酸体分析を試みた。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40□m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10□m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

表2に、同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から求められた試料1ｇ当りの各機動細胞珪酸体個数を示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果、試料3（7層）はウシクサ族が非常に多く観察され、7層を構成している灰の主体はウシクサ族（ススキ・チガヤなど）と推測される。他に、イネやキビ族も灰の構成植物とみられるが、キビ族については、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明である。

試料9（9層の灰）にはイネ属型単細胞珪酸体が多量に含まれ、他に、イネの機動細胞珪酸体がやや観察され、イネの穎部破片やウシクサ族機動細胞珪酸体が少し認められる。こうしたことから、9層の灰はイネ、すなわち稲藁が焼かれたものと推測される。

床面直上の試料7にはイネの機動細胞珪酸体が多く、燃料や住居の一部として使用されたものからもたらされたのであろう。また、床面直下の試料8からもイネが検出されており、住居が建てられる前の時期においてもイネの機動細胞珪酸体が供給される環境であったとみられるが、それがどういったものであるのかは不明である。

その他ではネザサ節型（アズマネザサ・ゴキダケなど）が多く検出されており、遺跡周辺に多く生育していたものと推測される。このネザサ節型のササ類は主に日のあたる開けたところにみられ、ウシクサ族とともにササ原・ススキ草原といった草地的景観を形づくっていたのであろう。

5．まとめ

花粉化石の検出数が非常に少なく、遺跡周辺の古植生については不明であるが、住居近辺では雑草類が生育していたと推測される。

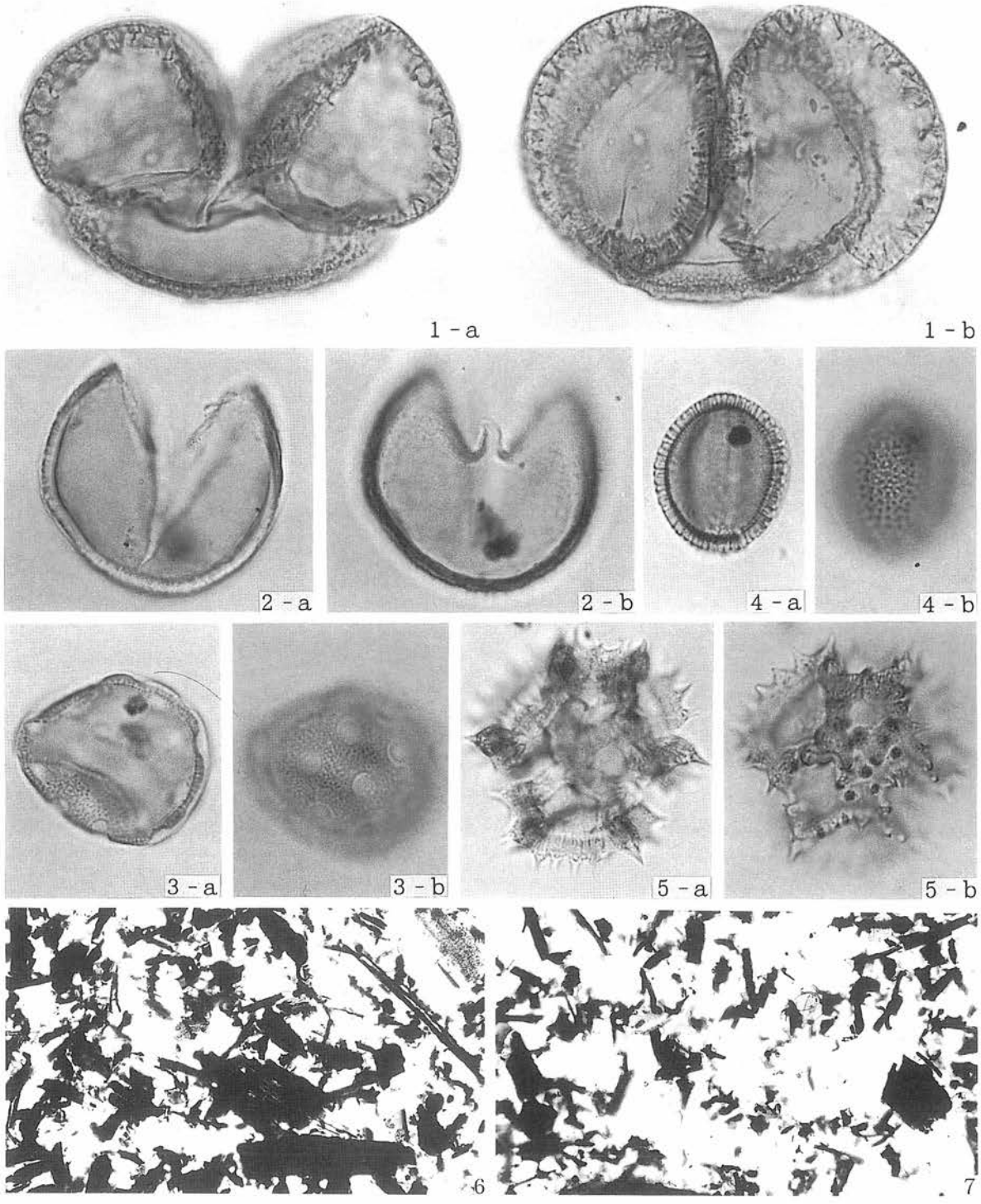
植物珪酸体分析から遺跡周辺においてネザサ節型のササ類やウシクサ族が生育する開けた草地が存在したとみられる。

住居覆土を構成する灰層には、ウシクサ族を主体としたもの（7層）とイネを主体としたもの（9層）が認められた。

引用文献

鈴木　茂　(1994)　公方屋敷跡の花粉化石．鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10平成５年度発掘調査報告（第１文冊)、鎌倉市教育委員会、ｐ.78－92.

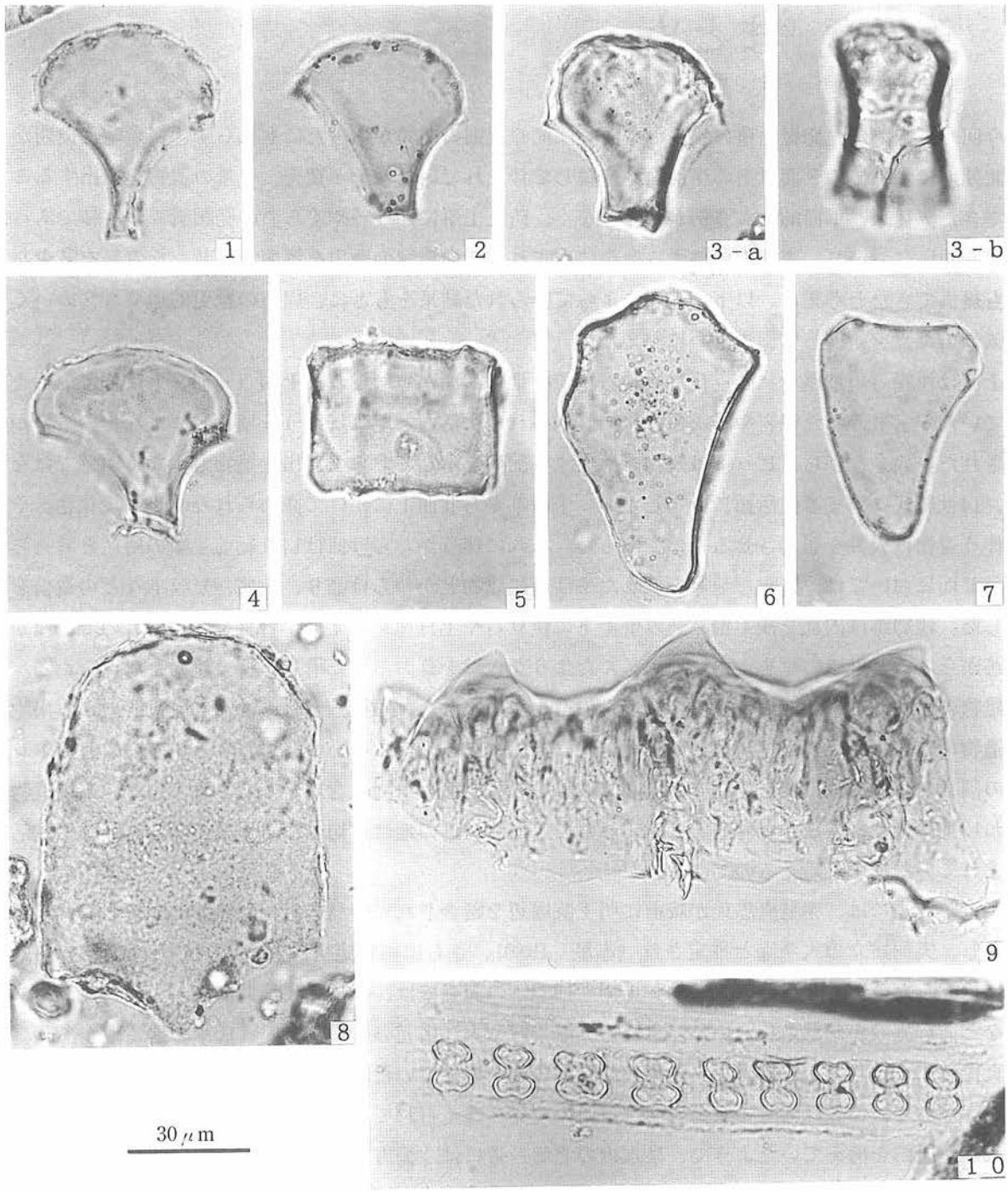
図版１　積善遺跡の酢分化石



1 ～ 5 : 20 μm　　6, 7 : 100 μm

図版1　積善遺跡の花粉化石
1：マツ属複維管束亜属　PLC.SS　1972　試料11
2：スギ　PLC.SS　1969　試料1
3：アカザ科ーヒユ科　PLC.SS　1973　試料11
4：アブラナ科　PLC.SS　1971　試料2
5：タンポポ亜科　PLC.SS　1970　試料1
6、7：プレパラートの状況　6：試料3、7：試料6

図版２　積善遺跡の植物珪酸体



図版2　積善遺跡の植物珪酸体

1～4：イネ（1，2，3—a，4：断面、3—b：側面）
1，2：試料3、3：試料7、4：試料9

5：ネザサ節型（側面）　試料7

6、7：ウシクサ属（断面）試料3

8：ヨシ属（断面）SK9013

9：イネ穎部破片　試料9

10：イネ属型単細胞珪酸体　試料9

第五章　まとめ

今回の調査では、発掘面積の狭少さや調査深度の規則の問題があったにも係らず、鎌倉時代後期から南北朝期にかけての３面以上の生活面が連続して営まれていた様子が窺え、多量の遺物を検出することができた。従来、平面的な調査例が殆んどなく、防災工事に伴う「やぐら」の発掘調査が主体であった十二所地区において、調査を実施する機会に恵まれ、この地域の歴史を解明する新たな資料を多少なりとも提供できたと考える。以下、調査によって得られた結果をもとに、周辺の歴史的環境も含めいくつか気づいた点を指摘して、まとめにかえたい。

Ⅰ面は西端（現道路境）の近代以降の石垣で中世生活面が破壊され、上面（ａ面）も耕作で削平を受けていたが、破砕した泥岩や凝灰質砂岩で整地された生活面とそれに伴う土壙、ピットなどの遺構が検出された。残念ながら、ピットは建物を構成する配列を示しておらず、出土遺物も少なく明確ではないが、14世紀代に治まる生活面に比定したい。Ⅰ面下からⅡ面上にかけて認められた焼土・炭化物、それに伴う遺物は火災を想起させるものであった。これに伴うかわらけ皿は14世紀前半頃の所産と考えられる。Ⅱ面においては、堅牢な地業を施した生活面に建物とかわらけ溜り、土壙、ピットなどの遺構を検出した。建物跡は内部を浅く掘り込み壁直下に伊豆石や土丹塊を据えて土台材を受けるもので、僅かな痕跡からみると外壁の裾を土中に埋め込んだような板壁を葺おろした構造を持つ建物と考えられる。また建物の底面からはかわらけを主体に多くの遺物が出土した。建物内かわらけ溜りや包含層から出土した遺物の時期は概ね13世紀後葉～14世紀前葉に当てはまるのではないかと思われる。さらに北壁トレンチの調査からⅡ面以下にも少なくとも２時期以上の生活面や遺物包含層が確認されている。出土遺物は概ね13世紀後葉を前後した時期と考えられることから、この地は途切れなく地業が繰り返されて生活が営まれていた様子が窺えるのである。

本遺跡周辺には、赤星直忠氏が戦前に明王院周辺を踏査されて中島をもつ園池跡の配石と鎌倉期瓦を採集し、実朝建立の大慈寺と推定され（赤星　1980）、さらに国指定史跡鎌倉七口の一つ朝比奈切通入口に位置した鑢ケ谷北遺跡（大三輪・馬渕　1983）の調査では、鎌倉時代後期前後の土塁状遺構やＶ字溝など防御施設が確認されている。また、梶原景時や大江広元の屋敷跡という伝承の残る地があり、その真偽は措くとしても、御家人クラスの武士が居館を構えていたであろうことは疑いない。この他にも光触寺があり、ここは当時の鎌倉における西の境界と考えられていた。鎌倉幕府滅亡後も本遺跡周辺には武士が居館を構えていたようで、泉水橋の北側一帯には「公方屋敷」の字が残り、鎌倉公方の屋敷跡と考えられている。当然ながらその周辺には公方に仕える武士達の居館があったことが推定され、本調査地点で発見された繰り返し施された地業面や遺構群は、そうした屋敷の一部を予想させるものといえよう。

＜引用・参考文献＞

赤星直忠　1980『中世考古学の研究』有隣堂

貫　達人・川副武胤　1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂

大三輪龍彦・馬渕和雄　1983「鑢ケ谷北遺跡」鑢ケ谷北遺跡発掘調査団

神奈川県図書館協会　1991『神奈川県皇国地誌　相模国鎌倉郡村誌』

三浦勝男　1992『鎌倉の古絵図Ⅰ』鎌倉国宝館図録第十五集　鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館

秋山哲雄　1997「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史学雑誌』第106編９号　史學会

写　真　図　版

a.　表土掘削後の状況

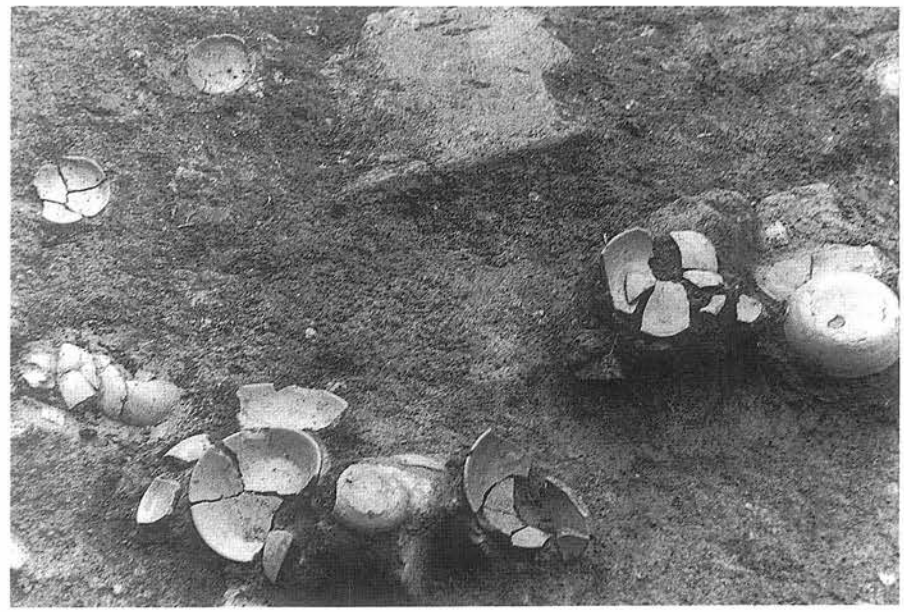
b.　Ⅰa面全景

図版 2

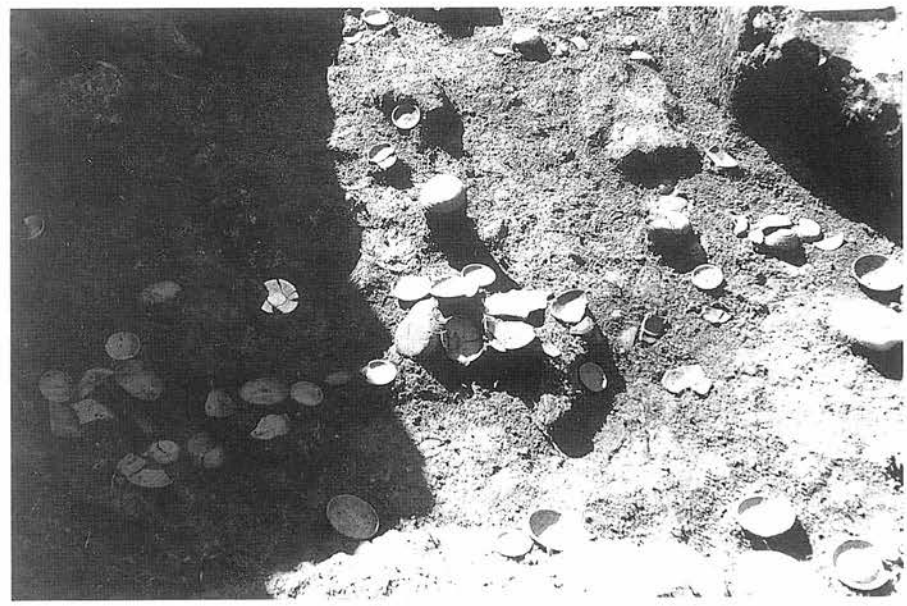
a. Ⅰb面全景

b. Ⅱ面全景

a. 炭層Aかわらけ溜り



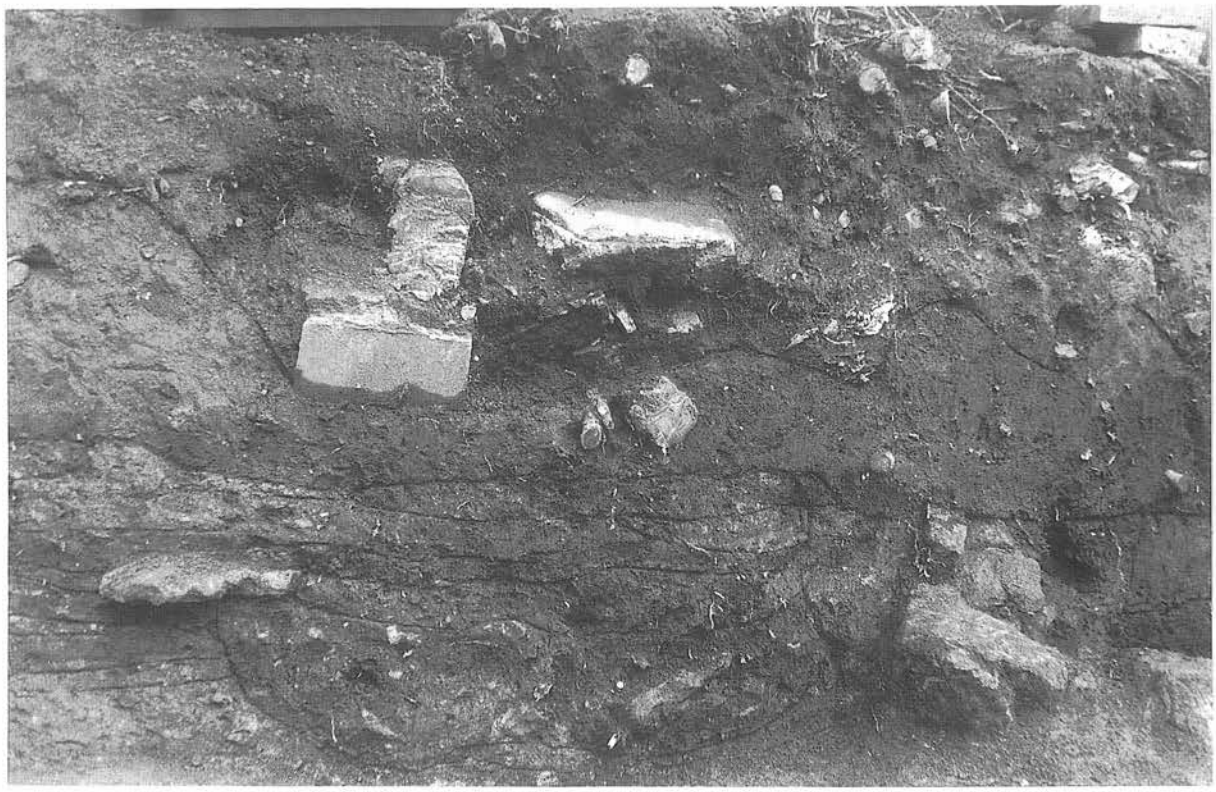
b. 建物内かわらけ溜り



c. 同上

図版 4

a. 調査区南壁土層



b. 調査区北壁土層（左下が北壁トレンチ）

7-5

▲Ⅰa面

7-6

7-9

▲Ⅰb面P2

7-17

▲Ⅰb面

8-2

8-4

8-6

8-7

8-11

▲炭層Aかわらけ溜り

8-15

8-24

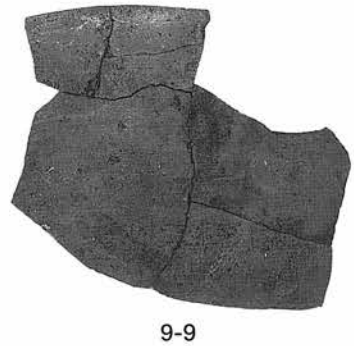
9-3

9-5

9-8

9-7

▲炭層B



9-9

出土遺物（1）

9-10

図版 6

10-10

10-14

10-20

10-24

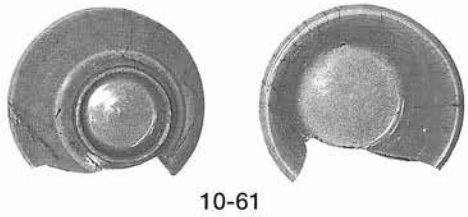
10-31

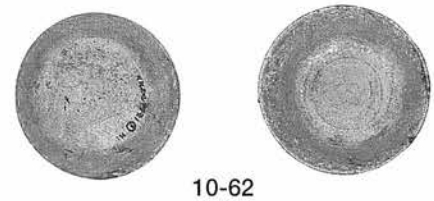
10-43

10-45

10-56

10-58


10-61


10-62

▲建物内かわらけ溜り

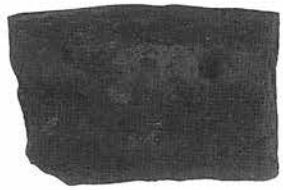
▼建物内上層

11-5

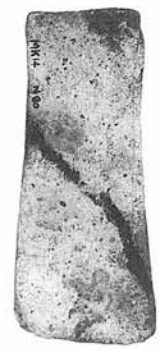
11-6

11-8

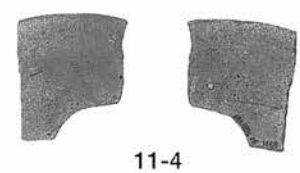
11-9


11-16

11-15


11-17

▼北壁トレンチ


11-4

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	14
編著者名	原　廣志
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
セキゼンイセキ 積善遺跡	カナガワケンカマクラシジュウニソアザセキゼン 神奈川県鎌倉市十二所字積善952番6	204	No.440	35° 18′ 54″	139° 34′ 47″	19961128 ～ 19970110	12.0㎡	個人専用住宅の車庫造成に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
積善遺跡	都市	鎌倉時代後期 ～南北朝時代	建物 土壙 柱穴 かわらけ溜り	・かわらけ ・常滑窯製品 ・瀬戸窯製品 ・青磁 ・白磁 ・土製品 ・瓦 ・銭　その他	

若宮大路周辺遺跡群（No.242）

わかみやおおじしゅうへんいせきぐん

小町二丁目28番３・５地点

例　　言

1．本報は、鎌倉市小町二丁目28番3･5地点における埋蔵文化財発掘調査のうち、国庫補助事業にかかる個人住宅部分の報告である。

2．発掘調査は、平成８年（1996）12月21日から平成９年（1997）１月17日にかけて、店舗建設に伴う原因者負担事業分と並行して実施された。遺跡理解を損なわない為に、本報には出来るかぎりその成果が収められている。

3．調査体制は以下のとうりである。

担　当　者　原　廣志
調　査　員　須佐直子
調査補助員　秋山哲雄・須佐仁和・早坂伸市
調査参加者　萱野輝雄・渡辺久夫・荻野　勲
協力機関　㈳鎌倉市高齢者事業団シルバー人材センター・㈱清興建設・鎌倉考古学研究所

4．本報の執筆は、第一章を秋山、第二章を原、第三章を須佐直子が分担した。第四章は調査員討議のもと、原が文責を負った。遺物実測、挿図及び図版作成は須佐仁和・早坂伸市の協力を受けた。編集は原が行った。

5．本報に掲載した遺構・遺物写真は、須佐仁和・早坂伸市が撮影した。

6．出土遺物・図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7．本報作成に際して、下記の方々から多大なご教示を賜った。（五十音順）

大河内　勉・大三輪龍彦・菊川英政・小林康幸・永井正憲・福田　誠・松尾宣方・馬淵和雄

本　文　目　次

第一章　調査地点の位置と歴史的環境 ……468
第二章　調査の経過と概要 ……470
第三章　検出遺構と出土遺物 ……472
　1．第１トレンチ ……472
　2．第２トレンチ ……475
第四章　まとめ ……480

挿　図　目　次

図１　遺跡周辺図 ……469
図２　グリット設定図 ……471
図３　グリット配置図 ……471
図４　第１トレンチ遺構全図 ……473
図５　第１トレンチ出土遺物（１）……474
図６　第１トレンチ出土遺物（２）……475
図７　第２トレンチ遺構全図 ……476
図８　第２トレンチ出土遺物 ……477

表　目　次

表１　第１トレンチ出土遺物（１）……478
表２　第１トレンチ出土遺物（２）……479
表３　第２トレンチ出土遺物 ……479

写真図版目次

図版１　1．第１トレンチⅠ面全景（北から）
　2．第１トレンチⅠ面土壙１
　（北から）……483
　3．第１トレンチⅠ面全景（南から）
　4．第１トレンチⅠ面切石敷遺構
　（南から）……483
図版２　1．第１トレンチⅡ面全景（北から）
　2．第１トレンチⅡ面全景（南から）
　3．第１トレンチⅡ面遺構（西から）
　……484
図版３　1．第１トレンチⅡ面遺構（西から）
　2．第１トレンチⅡ面建物１－Ｐ３
　（南から）
　3．第１トレンチ西壁端土層堆積
　（東から）……485
図版４　1．第２トレンチⅡ面全景（北から）
　2．第２トレンチⅡ面南端土丹敷面
　（南から）
　3．第２トレンチ東壁北半土層堆積
　（西から）……486
図版５　1．第１トレンチ出土遺物……487
図版６　1．第１トレンチ出土遺物……488
　2．第２トレンチ出土遺物……488

第一章　調査地点の位置と歴史的環境

本調査地点は「若宮大路周辺遺跡群」と呼称される遺跡地内の西北部にあたる。都市鎌倉の基軸である若宮大路からは西に200mほどの地点に位置し、JR鎌倉駅から北に250mの距離にある。この付近は旧市街地の西北域に大きく開析された扇ケ谷の前面にあたり、調査区の西側に接して現在の扇谷川が北から南に向かって流れている。

扇谷川は、その上流と考えられる河川の遺構が「雪ノ下一丁目210番他地点」の調査（注１）で、本地点の対岸に位置する「小町二丁目69番６他地点」の調査（注２）では、旧河道西岸と推定される石積みの護岸施設の一部が検出されている。また「小町一丁目120番１地点」の調査（注３）では、その下流と思われる14世紀代の河川が検出されており、中世から現在に至るまで多少流路を変えながらも、この河川が確実に流れていたことが分かる。ところで、本地点の前面を東西に走る道路は、途中JR横須賀線の線路によって断ち切られているが、西に100mほど進むと現在の今小路に行き当たる。その今小路のさらに西の一帯は、安達泰盛亭跡であるとする説が高橋慎一朗氏によって提示されている（注４）。今小路は北に行けば武蔵国府へと繋がるような、中世における重要路の一つであり、本地点前の道路はそれと若宮大路とをつなぐ貴重な道であったと考えられる。若宮大路の西には、和田義盛が邸宅を構えており（注５）、鎌倉時代後期には、若宮大路の北端西側に金沢氏の赤橋亭があったことが推測されている（注６）が、残念ながらこれらの武家屋敷は現在までのところ確認されていない。おそらく主要な屋敷は敷地の中心部にあり、周囲は庶民が雑居するような町屋的な状態であったのだろうか。周辺の調査事例として、先の雪ノ下一丁目210番他地点では、鎌倉中期～後期頃の下層面から複数の大型掘立柱建物（主屋的なものか）と、それに付随した板壁掘立柱建物（下人・所従住居か）を検出し、逆に上層の南北朝期は板壁掘立柱建物と、その作業場を思わす貧弱な掘立柱建物であり、小町二丁目39番６他地点からも上層の時代に囲炉裏を伴う板壁掘立柱建物が検出されている（注７）。以上のように、本地点周辺は安達、和田、金沢など有力武士の邸宅が時期を前後しながらも営まれる一方で、武家屋敷の裏手に形成される下人・所従の居住区や町屋的な場が雑居しているような、鎌倉の中心地の一つであったと考えられる。

注

（１）馬渕和雄　「若宮大路周辺遺跡群　雪ノ下一丁目210番他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』　鎌倉市教育委員会1990

（２）田代郁夫・原廣志　「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目69番６他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告書７』　鎌倉市教育委員会1991

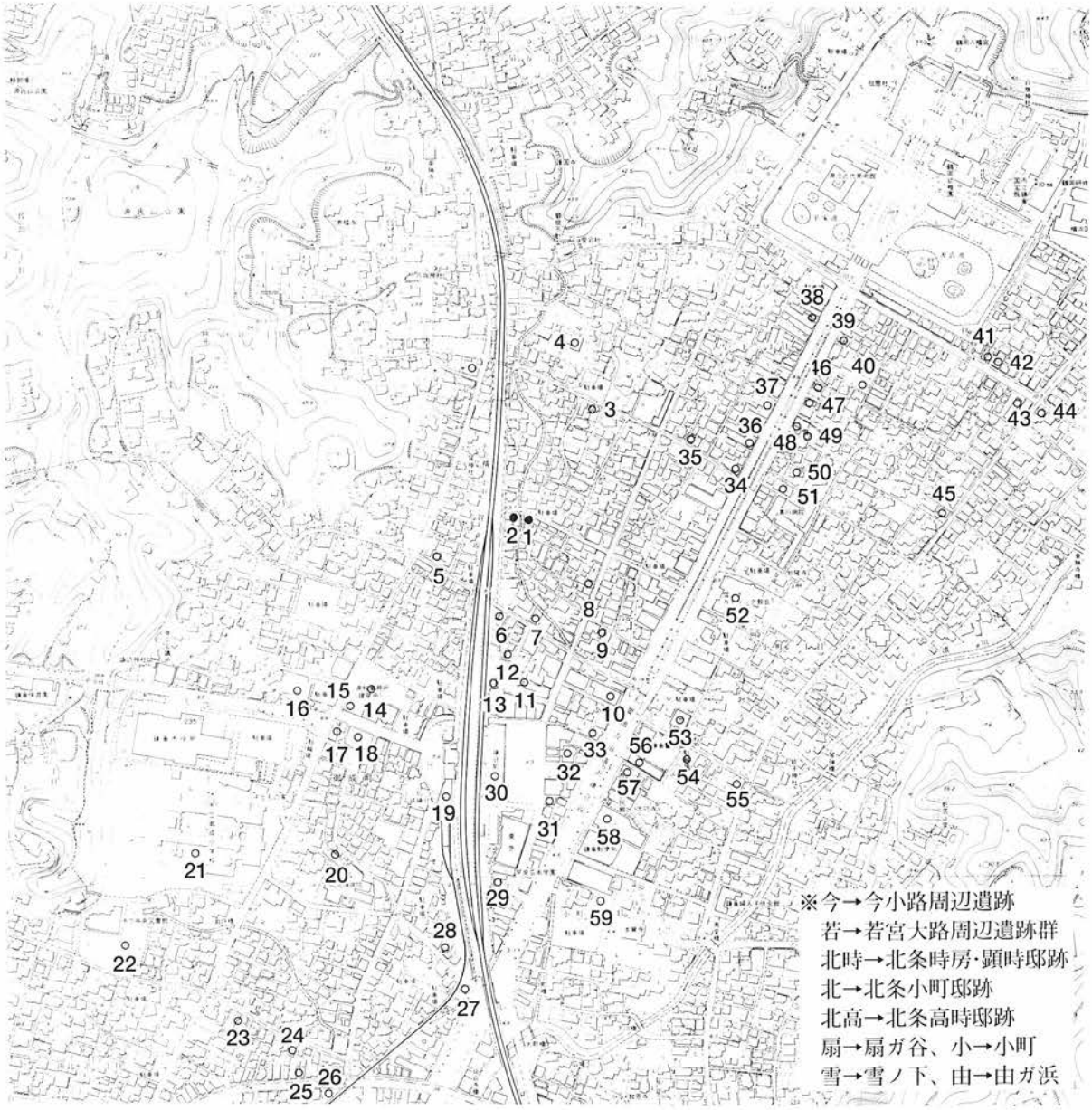
（３）手塚直樹　「若宮大路周辺遺跡群　風門社ビル用地（小町一丁目120番１地点）」　同遺跡発掘調査団　1992

（４）高橋慎一朗　『中世の都市と武士』　吉川弘文館　1996　第二部第二章「鎌倉甘縄にみる武家地と寺院」参照。

（５）『吾妻鏡』　建仁元年（1201）三月十日条に、「若宮大路西頬」の火災で和田義盛亭が焼けたとある。

（６）前掲注２、第二部・第三章「金沢氏と鎌倉および六浦」参照。

（７）田代郁夫　「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目39番６他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』　鎌倉市教育委員会1989



1.調査地点　2.今(扇一丁目131番1)　3.若(小二丁目366番地)
4.若(雪一丁目210番地)　5.若(扇一丁目74番8外)　6.小一丁目120番－1
7.若(小二丁目65番3)　8.若(小二丁目12番18)　9.若(みのビル)
10.日本生命ビル　11.若(小一丁目106番地)　12.若(小一丁目116番地)
13.若(駐輪場)　14.千葉地東　15.千葉地東(御成町228番2)
16.千葉地　17.若(奴田ビル)　18.諏訪東　19.蔵屋敷東
20.今(社会福祉センター)　21.今(御成小学校内)
22.今(社会福祉センター)　23.若（由一丁目123番5外)
24.若(由一丁目118番)　25.若(由一丁目)　26.下馬周辺
27.若(御成町872番14)　28.若(御成町868番)
29.早見芸術学園　30.蔵屋敷　31.若(小一丁目81番8)
32.小一丁目75番地1号　33.若(小一丁目325番イ外)
34.北時(雪一丁目274番2)　35.北時(雪一丁目233番9)
36.北時(雪一丁目273番ロ)　37.北時(雪一丁目271番1)
38.北時(雪一丁目255番3)　39.北（雪一丁目377番7)
40.北(雪一丁目374番地2)　41.政(雪三丁目988番)
42.政(雪三丁目987番1、2)　43.北(雪一丁目395番地)
44.北（小三丁目426番3)　45.北(雪一丁目432番2)
46.北(雪一丁目371番1)　47.北(雪一丁目372番7)
48.北(雪一丁目369番)　49.北(雪一丁目369番地)
50.北(雪一丁目419番3)　51.若(小二丁目366番地)
52.若(雪ノ下カトリック)　53.小一丁目345番2
54.若(駐輪場)　55.若(小一丁目325番イ外)
56.若(スイミングクラブ)　57.小1－309－5
58.(推定)藤内定員邸跡(中央公民館)
59.本覚寺旧境内

図1　遺跡周辺図

第二章　調査の経過と概要

調査経過

本調査地点は、若宮大路周辺遺跡群（県遺跡No.242）の一角、鎌倉市小町二丁目28番3.5に計画された専用住宅建設範囲と一部店舗建設にかかる計28㎡を対象に、平成８年12月21日から平成９年１月17日にかけて鎌倉市教育委員会によって発掘調査を実施した。発掘調査に先立ち鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査のデータに基づいて、建物建築範囲の東西両端に幅２ｍのトレンチ２本を設定した。

調査は、東側を第１トレンチ、西側を第２トレンチとし、敷地面積が狭少で残土置場が確保できない都合上、まず平成８年12月21日から第１トレンチの調査を先行して行った。現地表下120㎝内外まで堆積していた近現代の撹乱・客土層および近世耕作土の一部を重機により除去し、以下を人力によって平成９年１月９日まで調査を行った。ついで西側の第２トレンチに移行した。第２トレンチもまず重機により近現代の土を除いてから始め、設計計画の深度まで人力により掘り下げ・記録の保存を行い、１月17日をもって現地調査を終了した。

グリット設定方法

鎌倉市内では、文化財独自の測量基準杭や点などを設置しておらず、鎌倉市道路管理課が設置した４級基準点を基点にしてグリットを設定した。調査地点近辺の４級基準点は、北側を東西に走る道路際にD01Ｓ173と、D01Ｓ174の２点の基準点がある。グリット設定の測量はまず、４級基準点である２点間の中軸線の延長上で、D01Ｓ174の基準点から西へ20ｍいった距離で、調査区北側外に任意の基準点を設定した。この基準点の中軸線から時計と逆回りの角度90°、直角に振り込んだのがＢ軸にあたる。基準点からＢ軸上で南へ距離４ｍの位置に、軸交点Ｂ－１がある。従って、グリット配置は、図２・３で示したように鎌倉市４級基準点に連結している。なお、グリット設定に使用した鎌倉市４級基準点の２点の国土座標値は以下のとうりで、D01Ｓ173は［Ｘ－75620.991Ｙ－25321.709］、またD01Ｓ174は［Ｘ－75609.340Ｙ－25344.691］である。

Ｂ－１杭を軸交点の基準として、調査区内を４ｍグリットに区画し、南北方向に東からアルファベットを、東西方向に北から算用数字を付した。各区画の名称には北西隅の交点を与えている。方位はすべて真北を使用しており、南北軸方位はＮ－26°57′50″－Ｅである。

堆積土層

土層観察は、第１トレンチが調査区西壁、第２トレンチが調査区東壁のそれぞれで行ったが、第１トレンチでは排水管埋設の撹乱と涌水が原因で壁の崩落があり、北端部分の柱状図のみにとどまった。また第２トレンチ東壁にも同じ排水管の撹乱があり、この部分を除いて土層堆積図を作成した。建築深度は北側の道路面から約180㎝下（海抜6.2ｍ）が設定されているので、それ以下の調査はしていない。

両トレンチとも１・２層は近現代の整地層で、その下には水田の耕作土と、細かく粘性に富んだ床土が堆積している。この耕作土中の海抜6.6～6.9ｍで、宝永年間（18世紀初頭）の富士山スコリアを検出した。第１トレンチは耕作土下からⅠ面の粗く砕いた凝灰岩質砂岩の地業層、遺物包含層を挟んで海抜6.3ｍ前後で粗い土丹塊地業のⅡ面を検出した。第２トレンチでは壁面の土層観察からⅠ面が消失しており、第１トレンチのⅡ面と対応関係にある地業面が耕作土下から表出した。両トレンチの壁直下にあけた排水溝の土層観察によると、Ⅱ面構築土下には有機物腐食土のやや厚い堆積が確認されている。

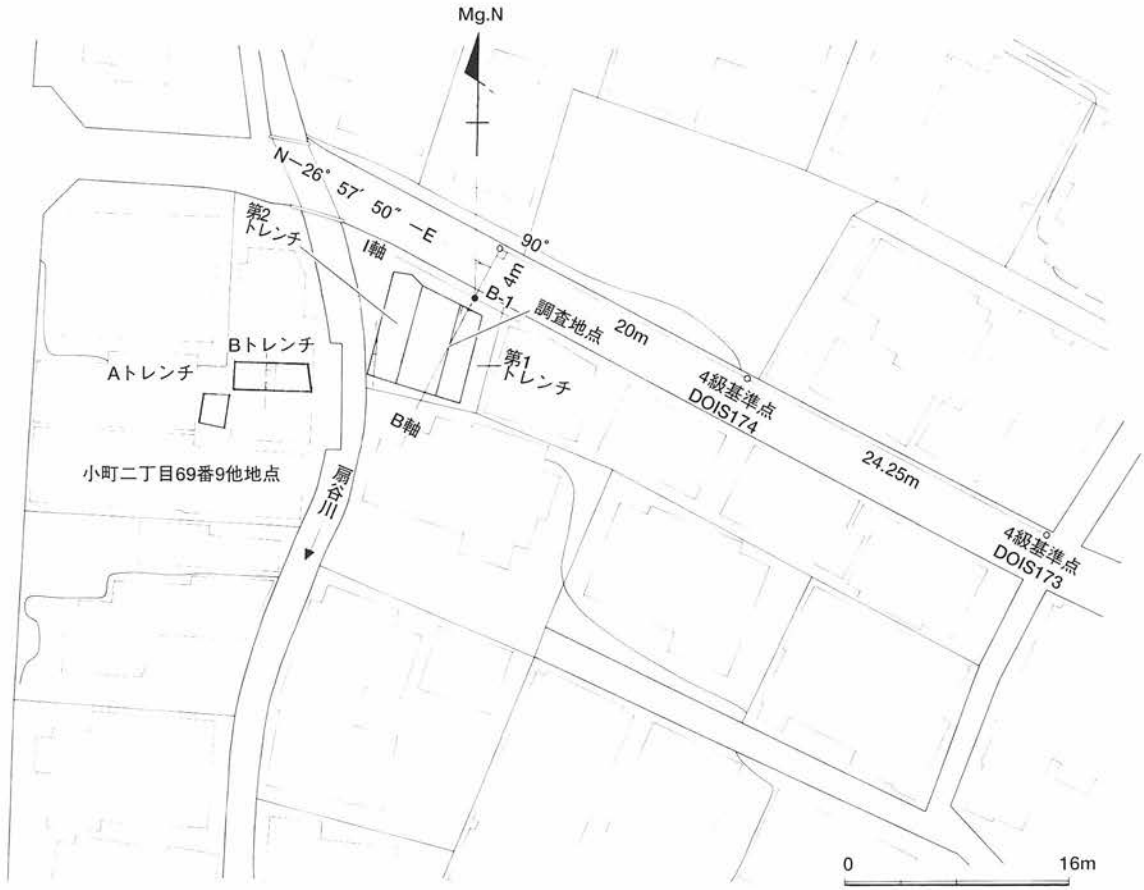


図2　グリット設定図

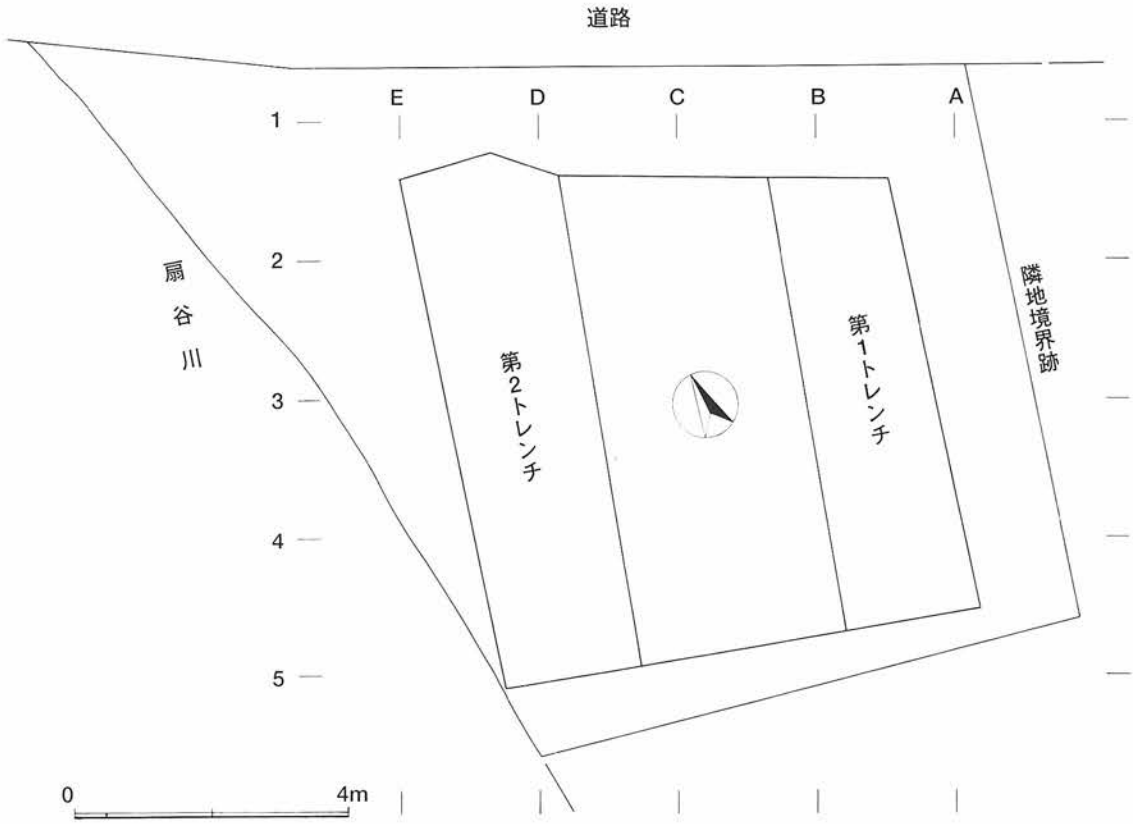


図3　グリット配置図

第三章　検出遺構と出土遺物

1．第1トレンチ

前章で触れたとおり、近現代の整地層と宝永年間の富士山スコリアを含んだ水田耕作土を剥がすと、すぐに中世期の最初の生活面が現れることから、中世後期以降の生活面は水田耕作により削平されたものと見られる。この生活面をⅠ面とした。この面は凝灰岩質砂岩や泥岩を粗く破砕した、厚さ20cm前後の地業層で構成されており、トレンチ北端だけを除き、ほぼ全域で認められた。Ⅰ面で検出された遺構は、土壙3基・石敷遺構などである。

Ⅰ面下には、暗茶褐色で締まりのない砂質土の包含層が厚さ15～20cm程であり、その下には粗く砕いた大小の泥岩塊と、細かな砂利を敷いた生活面で、表面は凹凸が目立ちきれいな整地面ではない。これがⅡ面で、ここからは掘立柱建物と思われるもの1棟、土壙3基、この他に建物を復原するには至らない柱穴6口（P－1～6）が検出された。

a．Ⅰ面の遺構・遺物（図4・5、表1・2）

土壙1

トレンチ北側に掘り込まれた大形の土壙で、東壁外に拡がっている。規模は南北1.2m、東西1.4m以上の長方形に近い形状と推定される。やや強い立ち上がりの壁面と概ね平坦な底面をもち、確認面からの深さ30～40cmである。覆土は暗茶褐色を基調とした砂質土層を主体とし、粗い砂がブロックで入り込んだ締まりのないものである。

出土遺物は図5－10・11である。10は瀬戸窯の卸し皿、11は常滑窯の捏鉢、この他に図化していないがかわらけ・常滑窯甕の小片がみられた。

土壙2

南壁の一部が鎌倉石の方柱状切石に壊される。規模は南北長95cm、東西幅60cm、深さ50cmで隅丸の長方形を呈し、緩やかに立ち上がる壁面で摺鉢状の底面である。北側の基底部近くには2本の小杭（3cm角材）が認められたが、何に対するものであるのかは明確にできなかった。覆土の状態は砂利や砂の多い暗灰褐色砂質土である。

図示できた出土遺物は、12・13の糸切り底でロクロ成形のかわらけ小皿のみである。

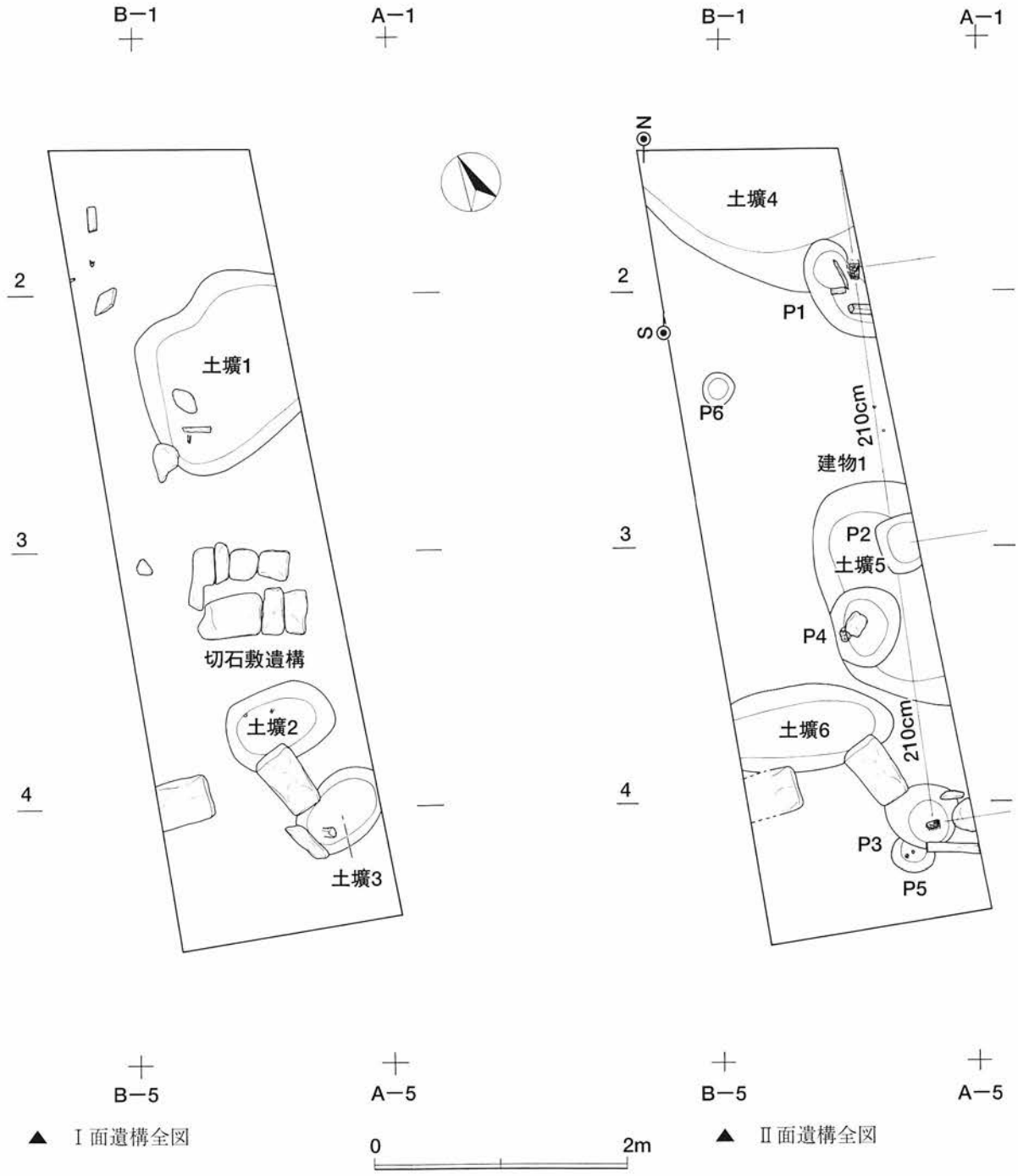
土壙3

鎌倉石切石が西壁上にみられる。規模は長径90cm、短径50cm、深さ45cmで長円形を呈する。覆土は土壙2と類似した砂質土で、木片が多く混じる。図示できる遺物は出土していない。

敷石遺構

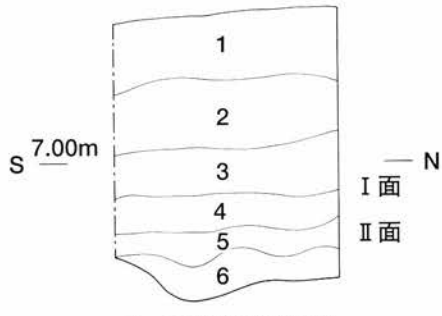
トレンチ中央で鎌倉石の敷石遺構を検出した。敷石の範囲は東西1m、南北70cm程で、東西方向に二列に並べた組み合わせで構成され、平らな状態で地業中に据えられている。石材は大きさにばらつきがみられるが、ほぼ同じ厚さの扁平に整形されたもので鎌倉石切石を転用したものであろう。この敷石遺構は、建物の土台といったような建物基礎にかかわる遺構や、溝の護岸ともみられなくもないが、狭い範囲の検出にとどまり確証は得られていない。1m程南にも鎌倉石の方柱状切石を検出している。

図5－1～9は近世耕作土中やⅠ面上で出土した遺構に伴わない遺物である。1～4はロクロ成形の



▲ Ⅰ面遺構全図

▲ Ⅱ面遺構全図

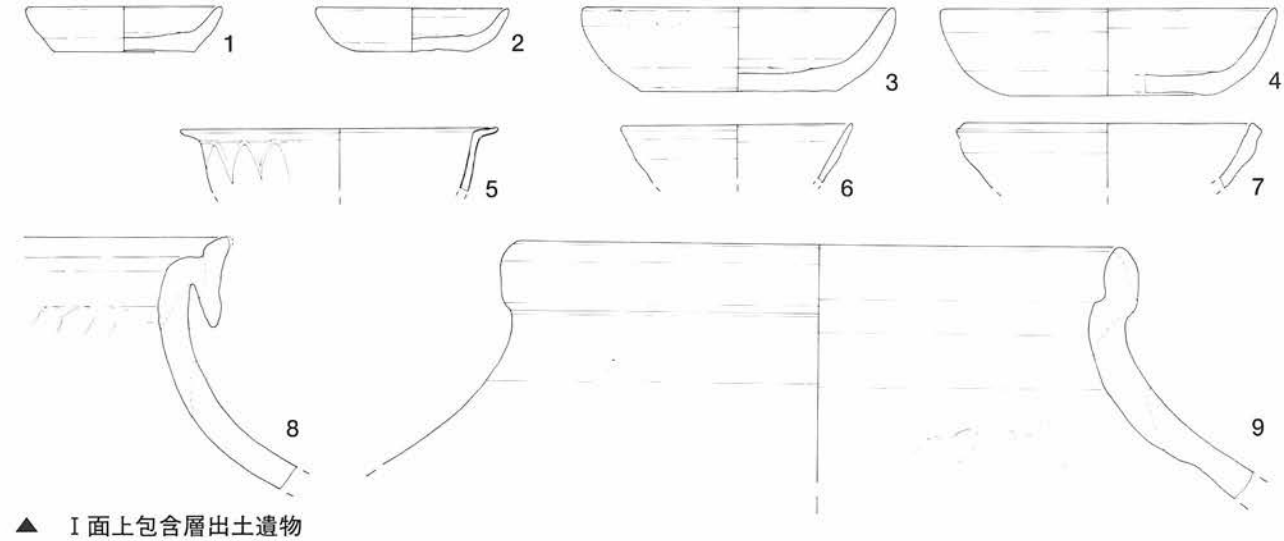


▲ 西壁部分断面図

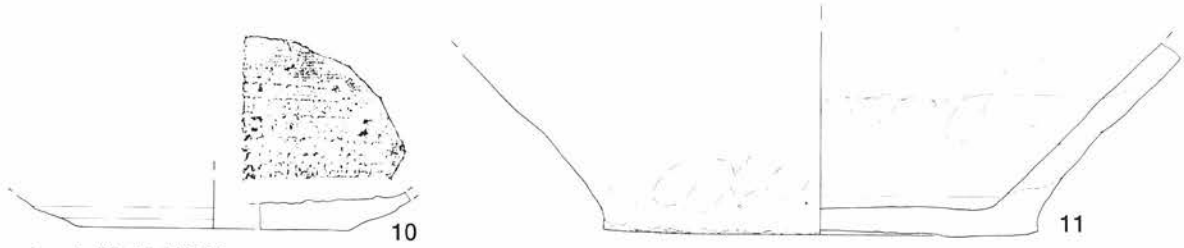
〈土層注記〉

1．表土
2．近代客土　大小土円塊による埋立土
3．灰褐色粘質土　粗砂･砂利･かわらけ片･宝永火山灰ブロックを含む　粘性強し　近世水田耕土
4．暗灰褐色砂質土　大小土円塊が多量　かわらけ片･砂利が少量　締り強し　Ⅰ面地業層(構築土)
5．暗茶褐色砂質土　木片・炭化物・土円角やや多し　締りなし　Ⅱ面上包含層
6．茶褐色粘質土　大小土円塊･土円粒･かわらけ片やや多し　締り強し　Ⅱ面地業層(構築土)

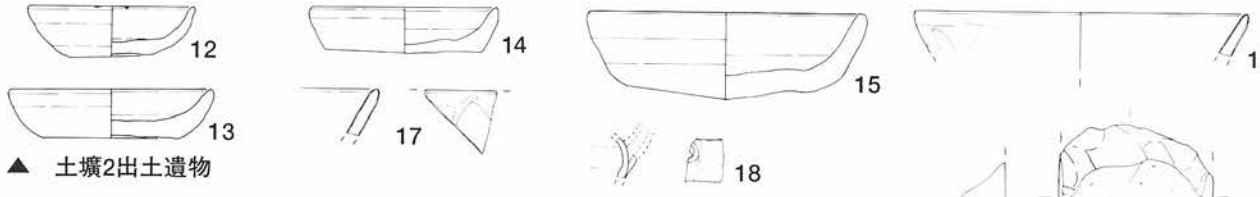
図4　第1トレンチ遺構全図



▲ Ⅰ面上包含層出土遺物

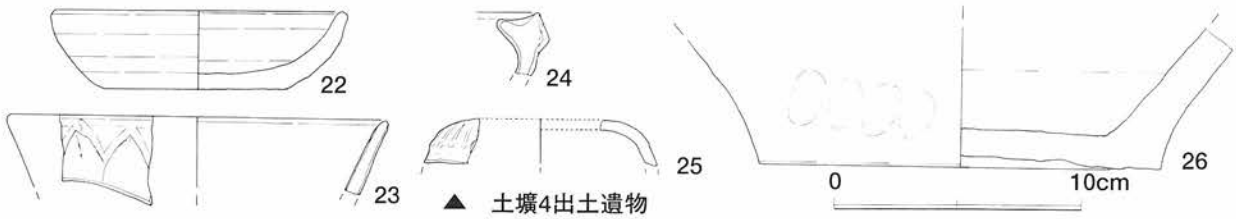


▲ 土壙1出土遺物



▲ 土壙2出土遺物

▲ Ⅱ面上包含層出土遺物



▲ 土壙4出土遺物

図5　第1トレンチ出土遺物（1）

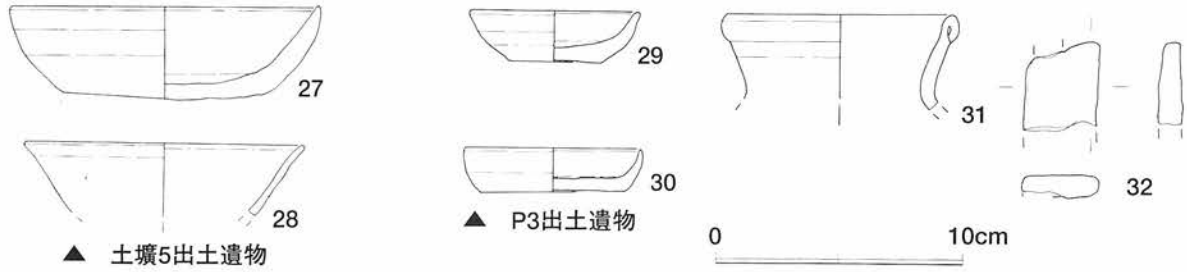


図６　第１トレンチ出土遺物（２）

大小かわらけ、５は青磁蓮弁文折縁鉢、６・７は瀬戸窯の入子と卸皿、８・９は常滑窯甕、９のみ近世所産である。

ｂ．Ⅱ面の遺構・遺物（図４～６、表１・２）

建物１

トレンチ東壁沿いである。調査区の関係上、西側の側柱列しか検出されていないが、柱穴の中に角柱と礎板が遺存しており、北側・東側壁外に拡がりをみせる掘立柱建物の可能性が高い。柱穴は径50cm前後、確認面からの深さ35～45cmで、柱間はほぼ210cmの間隔で配している。Ｐ１とＰ３の柱穴中には、頂部が炭化した角柱（寸法12×７cm）が残る。出土遺物は図化し得たものが、図６－29～32でＰ３から出土した。29・30はかわらけでロクロ成形の小皿、31は瀬戸窯四耳壷、32は滑石製品である。

土壙４

トレンチ北端で確認された大形の土壙で、主体は調査区外に拡がっている。建物１の柱穴（Ｐ１）に一部を壊されている。規模は東西２ｍ・南北１ｍ以上、深さは25cmと浅い掘り方である。覆土は茶褐色の有機物腐食土と、底面に粗い砂層がレンズ状に堆積している。出土遺物のうち、図５－22～26が図示できたものである。22はロクロ成形のかわらけ、23・24は青磁の蓮弁文碗と鉢、25は青白磁合子の蓋、26は常滑窯甕である。

土壙５

トレンチ中央の東壁際、建物１の柱穴（Ｐ２）を壊して掘られた土壙である。規模は東西1.8m、南北80cm以上、深さ20cmの浅い皿形を呈する。覆土は土壙４と類似した有機物腐食土である。出土遺物は図６－27・28で、27はかわらけでロクロ成形の大皿、28は白磁口兀皿である。

土壙６

残存する規模は東西径125cm以上、南北径70cm、深さ35cm程の長楕円形である。覆土は締まりにかける暗褐色土で最下層に薄く炭化物層が認められた。覆土中からは藁状の植物繊維や木屑、かわらけ小片のみで図示できる遺物は出土していない。

２．第２トレンチ

ａ．遺構・遺物（図７・８、表３）

先述したように、調査地点の西側を南北に流れる扇谷川の氾濫や水田耕作の影響により、現地表下170cm前後の深さまで中世以降の堆積土に覆われ、Ⅱ面上の包含層にまで宝永年間のスコリアが入り込んでいた。従って、第２トレンチでは第１トレンチで検出されたⅠ面地業層や中世遺物を含むⅡ面上の包含層が削平もしくは流失しており確認できなかった。

検出された生活面は、泥岩塊を粗い砂と共に突き固めたような地業面であるが、この地業面は西に向かって緩やかに下がっている。トレンチ南側の西壁際に沿った範囲は砂利を主体とした軟弱な地業に変わり消滅してしまう、地業の切れるラインに沿って丸太材の杭が打ち込まれ、南端では大小の泥岩塊・鎌倉石切石片などが不規則に並べられた状況が認められた。

東壁際に入れたサブトレンチでは、第1トレンチ同様にⅡ面地業層下から木片や植物繊維を含んだ有機物腐食土の堆積が確認できた。しかし、西壁直下の排水溝や南西隅の排水ポンプ穴の土層観察では有

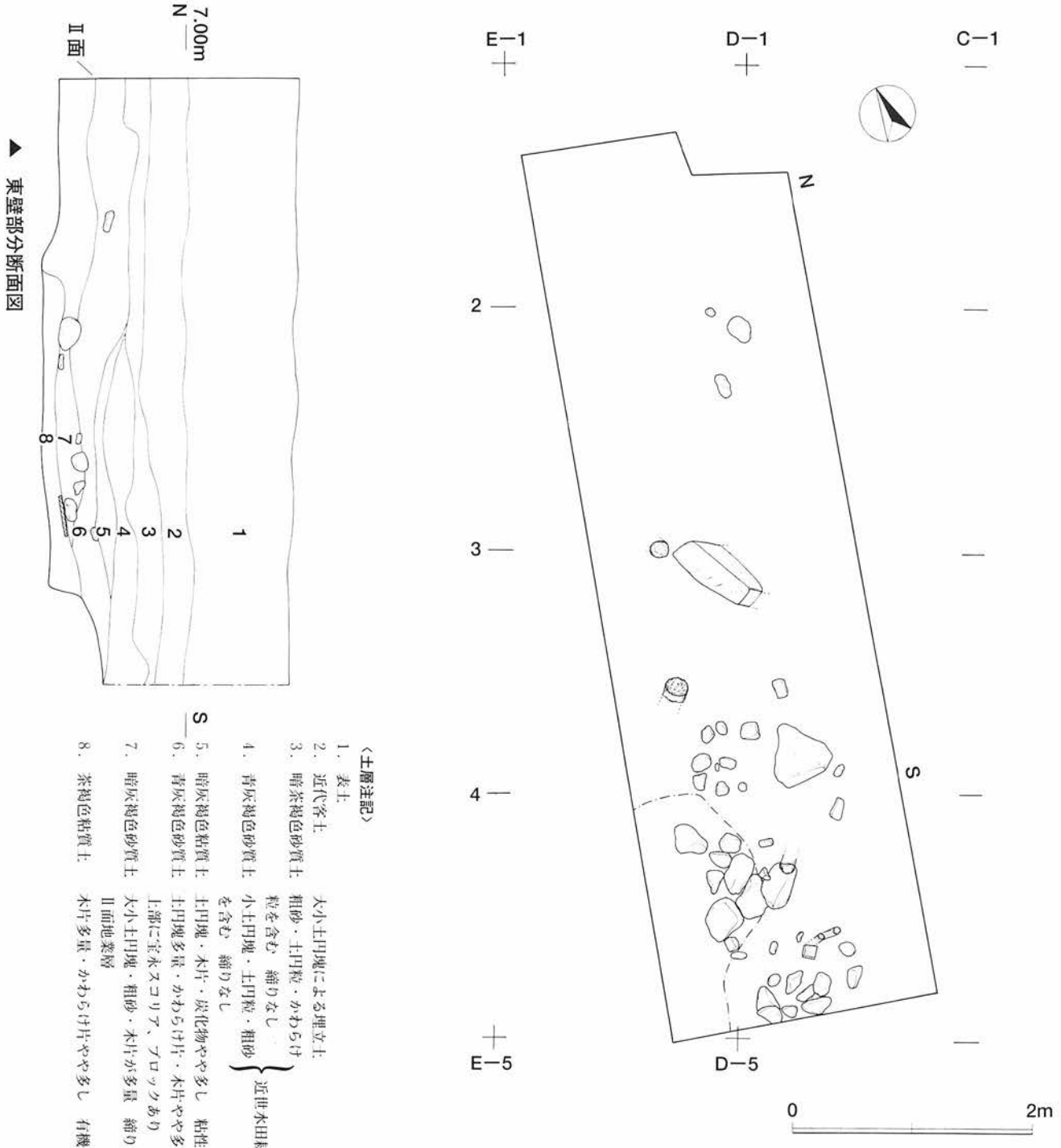


図7　第2トレンチ遺構全図

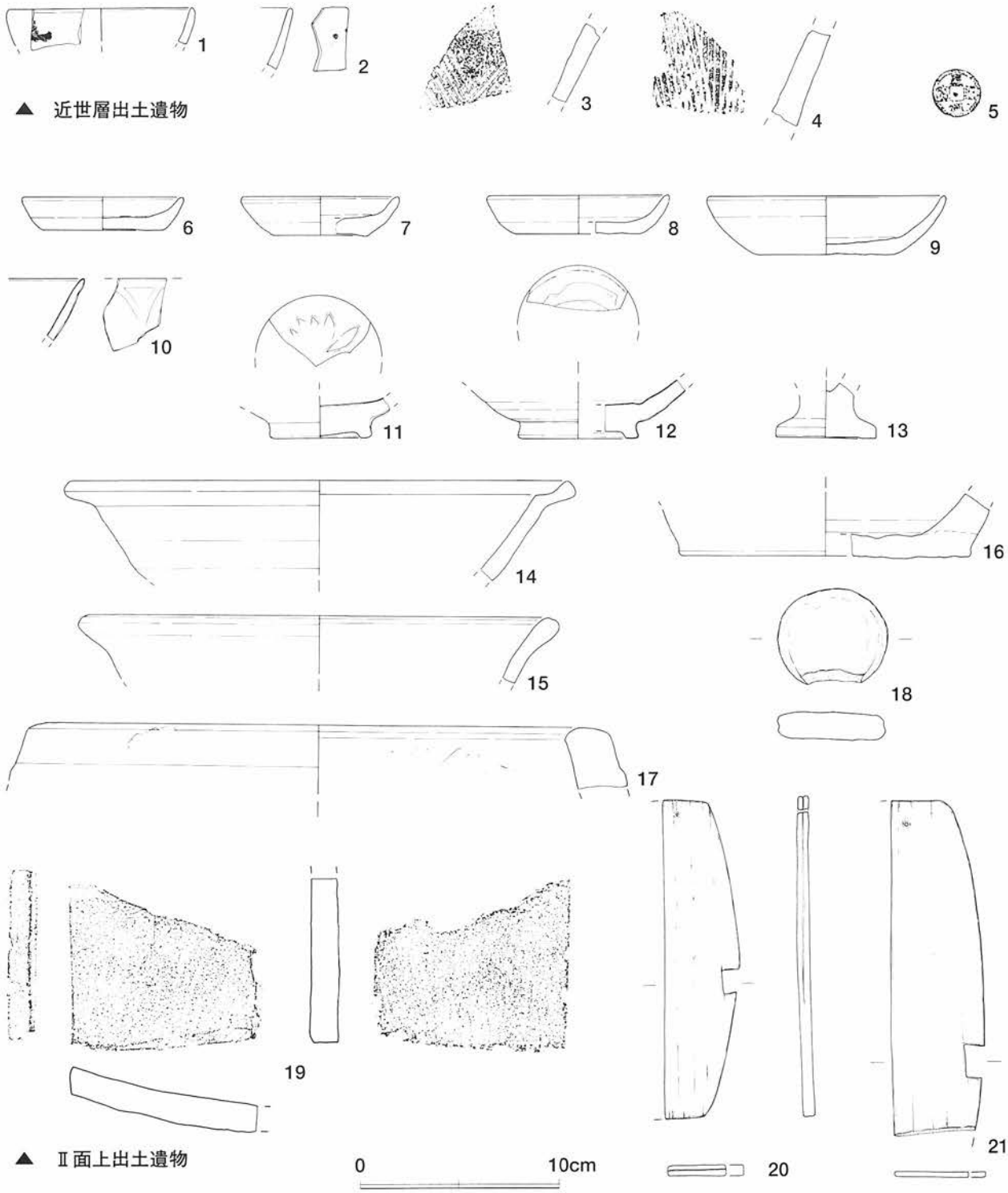


図8　第2トレンチ出土遺物

機物腐食土の堆積はなく、流水を窺わせる水磨した泥岩や砂礫の土層が認められた。従って検出された丸杭や石材は、調査区西側を流れる近世扇谷川西岸の護岸施設に関係するものと推測される。

出土遺物は1～5が近世層、6～21がⅡ面上からである。1・2は肥前系染付碗、3・4は瀬戸・美濃窯摺鉢、5は銭で「皇宋通宝」である。6～9はかわらけでロクロ成形の大小皿、10～12は青磁碗、13・14は瀬戸窯の仏華瓶・折縁鉢、15は捏鉢、16は常滑窯甕、17は滑石鍋、18は土製円盤、19女瓦、20・21は板草履である。

図5		
1	かわらけ	法量　口径7.6cm　底径5.6cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　赤色粒　小石　色調　淡黄灰白色
2	かわらけ	法量　口径7.5cm　底径4.5cm　器高1.75cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　小石　色調　淡黄灰白色
3	かわらけ	法量　口径12.25cm　底径7.8cm　器高3.3cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　赤色粒　色調　淡橙灰白色
4	かわらけ	法量　口径13.2cm　底径7.9cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　小石　色調　淡黄灰白色
5	青磁　鉢	法量　口径12.6cm　素地　灰白色　緻密　釉薬　灰緑色半透明　文様　蓮弁文
6	瀬戸　入子	法量　口径9.1cm　胎土　淡黄灰色　きめ細かい　釉薬　灰白色
7	瀬戸卸皿	法量　口径11.4cm　胎土　灰色　きめ細かい　釉薬　灰緑色　ごく薄く施釉
8	常滑　甕	法量　緑帯幅3.6cm　胎土　暗灰色　砂粒　長石粒　石英粒　小石　色調　暗茶灰色　降灰部　暗灰緑色
9	常滑　甕	法量　口径24.0cm　緑帯幅2.8cm　胎土　暗灰色　砂粒　長石粒　石英粒　黒色粒　色調　暗灰褐色　降灰部　灰緑色
10	瀬戸卸皿	法量　口径10.6cm　胎土　灰色　砂粒　白色粒　若干気孔を含むがきめ細かい　釉薬　灰緑色
11	常滑　捏鉢	法量　底径17.3cm　胎土　淡橙灰色　砂粒　長石粒　石英粒　赤色粒　小石　色調　橙灰色　降灰部　灰緑色　備考　外面タテヘラナデ　外底砂目
12	かわらけ	法量　口径6.6cm　底径3.3cm　器高2.0cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白色粒　赤色粒　色調　灰白色
13	かわらけ	法量　口径8.0cm　底径5.5cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　色調　灰白色
14	かわらけ	法量　口径7.4cm　底径6.2cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　色調　灰色
15	かわらけ	法量　口径10.7cm　底径7.8cm　器高3.5cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　黒色粒　色調　暗橙色
16	青磁　碗	法量　口径13.1cm　素地　白色　気孔を含む　緻密　釉薬　淡草緑色半透明　文様　蓮弁文
17	青磁　碗	素地　暗灰色　若干気孔を含む　緻密　釉薬　灰緑色透明　文様　蓮弁文
18	青白磁	素地　白色　緻密　釉薬　水青色透明　内面露胎　備考　瓜形の水注の把手部分？
19	女　瓦	法量　厚1.9cm　凹面　やや粗い離れ砂多量に付着　斜め方向の糸切り痕　凸面　離れ砂多量に付着　縦位ナデ　胎土　砂粒　白色粒　精良土　色調　淡橙灰色　芯部　灰色
20	砥　石	法量　残存長5.7cm　幅6.2cm　残存厚3.6cm　色調　乳白色
21	滑石製 温　石	法量　残存長5.0cm　残存幅7.4cm　厚1.6cm　孔径0.7cm　鍋の時の推定口径26.3cm　色調　灰黒色　備考　鍔と体部を削り落している　全面に細かい擦痕あり
22	かわらけ	法量　口径10.5cm　底径7.3cm　器高3.1cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　黒色粒　色調　暗橙色
23	青磁　碗	法量　口径15.4cm　素地　灰色　黒色粒含む　釉薬　暗緑色半透明
24	青磁　鉢	素地　灰白色　堅緻　釉薬　灰緑色半透明　貫入あり　備考　口縁下に菊座はりつけ
25	青白磁　合子	素地　白色　堅緻　釉薬　淡水色半透明
26	常滑　甕	法量　底径16.0cm　胎土　暗灰色　砂粒　長石粒　石英粒　小石　色調　暗橙褐色

表1　第1トレンチ出土遺物（1）

図6		
27	かわらけ	法量　口径12.1cm　底径8.1cm　器高3.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針赤色粒　黒色粒　色調　暗橙色
28	白磁　口兀皿	法量　口径11.0cm　素地　白色　若干気孔を含むが緻密　釉薬　灰白色透明
29	かわらけ	法量　口径6.8cm　底径3.7cm　器高2.0cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針赤色粒　色調　橙白色
30	かわらけ	法量　口径7.0cm　底径5.8cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針赤色粒　色調　暗橙白色
31	瀬戸　四耳壷	法量　口径9.0cm　緑帯幅1.1cm　胎土　灰色　きめ細かい　釉薬　暗灰緑色　ごく薄くハケ塗り
32	滑　石	法量　残存長3.3cm　幅2.9cm　厚0.9cm

表2　第1トレンチ出土遺物（2）

図8		
1	肥前染付	法量　口径9.0cm　素地　白色　堅緻　釉薬　淡青灰色透明
2	肥前染付	素地　白色　堅緻　釉薬　淡青白色透明
3	瀬戸・美濃摺鉢	胎土　砂粒　石英粒　雲母　色調　内面　暗茶褐色　外面　暗褐色　備考　条線　9条
4	瀬戸・美濃摺鉢	胎土　砂粒　石英粒　雲母　色調　暗灰褐色　備考　条線　11条
5	銭	皇栄通宝　篆書　北栄　初鋳1039年
6	かわらけ	法量　口径8.0cm　底径6.0cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針白色粒　赤色粒　色調　淡橙灰色
7	かわらけ	法量　口径7.8cm　底径4.8cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針白色粒　色調　淡橙灰色
8	かわらけ	法量　口径9.0cm　底径6.2cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針赤色粒　色調　橙白色
9	かわらけ	法量　口径11.8cm　底径6.8cm　器高2.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　淡橙灰色
10	青磁　碗	素地　灰色　若干気孔を含む　緻密　釉薬　淡灰青色失透　貫入あり　文様　蓮弁文
11	青磁　碗	法量　高台径5.0cm　素地　灰色　気孔を含む　緻密　釉薬　淡灰緑色半透明　文様　劃花文
12	青磁　碗	法量　高台径5.9cm　素地　暗黄灰色　緻密　釉薬　暗灰黄緑色半透明　文様　劃花文
13	瀬戸　仏華瓶	法量　底径5.0cm　胎土　灰白色　きめ細かい　釉薬　暗灰緑色
14	瀬戸　折縁皿	法量　口径25.0cm　胎土　灰白色　きめ細かい　釉薬　暗緑黄色　薄くハケ塗り
15	山茶碗窯摺鉢	法量　口径23.0cm　胎土　砂粒　長石粒　石英粒　小石　色調　暗灰色
16	常滑　甕	法量　底径14.4cm　胎土　暗灰色　砂粒　長石粒　石英粒　小石　色調　淡橙褐色
17	滑石鍋	法量　口径26.0cm　色調　灰褐色
18	円盤状土製品	法量　径5.5cm　厚1.3cm　色調　淡橙白色　備考　用途不明
19	女　瓦	法量　厚1.5cm　凹面　縦位ナデ　離れ砂若干付着　凸面　斜格子の叩き目　離れ砂多量に付着　胎土　小石　白色粒　色調　灰褐色
20	板草履	法量　長15.9cm　残存幅3.8cm　厚0.5cm
21	板草履	法量　残存長16.6cm　残存幅4.5cm　厚0.3cm

表3　第2トレンチ出土遺物

第四章　まとめ

今回の調査は、２本のトレンチ調査ということで極めて限定された狭い範囲ではあったが、鎌倉時代後期から南北朝時代頃の二次期の生活面に伴い掘立柱建物・土壙・石敷遺構などを検出することができた。また第２トレンチでは、扇谷川の氾濫や近世水田耕作の影響によりⅠ面が消失していたが、南端から丸太杭列とともに、大小泥岩塊や鎌倉石片を乱雑に組んだような状況が確認され、掘り下げてはいないがこれは旧扇谷川の東肩護岸の可能性が高い。

ところで、本地点前面を東西に走る道路は、現在JR横須賀線に切られているが西に行くと今小路につき当たる。その今小路の西一帯は安達泰盛邸跡に比定されており、この道を北に行けば武蔵国府へと繋がる中世の重要路の一つであった。また本地点東側あたる若宮大路の西一帯には、和田義盛の邸宅があり、さらに鎌倉時代後期には大路西側の鶴岡八幡宮寄りに金沢氏赤橋邸が所在していたと推定されている。本地点周辺は、有力武士の邸宅が時期を前後して営まれた地域であることが知られる一方、周辺の調査成果をみると、「雪ノ下一丁目210番他地点」（馬渕　1990）では、鎌倉時代後半期に主屋的な大型掘立柱建物と、それに付随した下人や所従住居を思わす板壁掘立柱建物、上層の南北朝期は板壁建物に作業場のような貧弱な掘立柱建物が検出され、「小町二丁目39番６他地点」（田代・佐藤　1989）でも囲炉裏を持つ板壁掘立柱建物が検出されており、本地点を含めて武家屋敷の中枢部は現在までのところ確認されていない。

本地点と扇谷川を隔てた対岸に位置する「小町二丁目69番６他地点」（田代・原　1991）では、図２に示したとおり敷地南側にＡ・Ｂ２本のトレンチを設定して調査を実施した。両トレンチからは本地点Ⅱ面に相当する生活面がみられ、Ａトレンチではほぼ同じ海抜レベルで宝永火山灰も検出されている。さらにＢトレンチでは、旧扇谷川の西岸と推定される石積みの護岸施設の一部を検出しており、本地点と同様の状況にある。旧川道の東西両肩が類似した護岸施設によって構築されている点からみて対応関係にあることは明らかであろう。両者の間隔は８ｍ程で現在よりもかなり川幅が広かったことになる。一方、扇谷川はその上流と考えられる石組を持つ中世前期河川の流路遺構が「雪ノ下一丁目210番他地点」（馬渕　1990）の調査で、また「小町一丁目120番１地点」（手塚　1992）の調査では、その下流と思われる14世紀代の河川が検出されており、中世から現在に到るまで多少流路や川幅を変移しながらも、この河川が確実に流れていたことが窺えよう。

＜引用文献＞

１．田代郁夫・佐藤　泉「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目39番６他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』鎌倉市教育委員会　1989年

２．馬渕和雄「若宮大路周辺遺跡群　雪ノ下一丁目210番他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』鎌倉市教育委員会　1990年

３．田代郁夫・原　廣志「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目69番６他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７』鎌倉市教育委員会　1991年

４．手塚直樹「若宮大路周辺遺跡群　風門社ビル用地　－小町一丁目120番１地点－」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団　1992年

写　真　図　版

▲1.　第1トレンチⅠ面全景（北から）

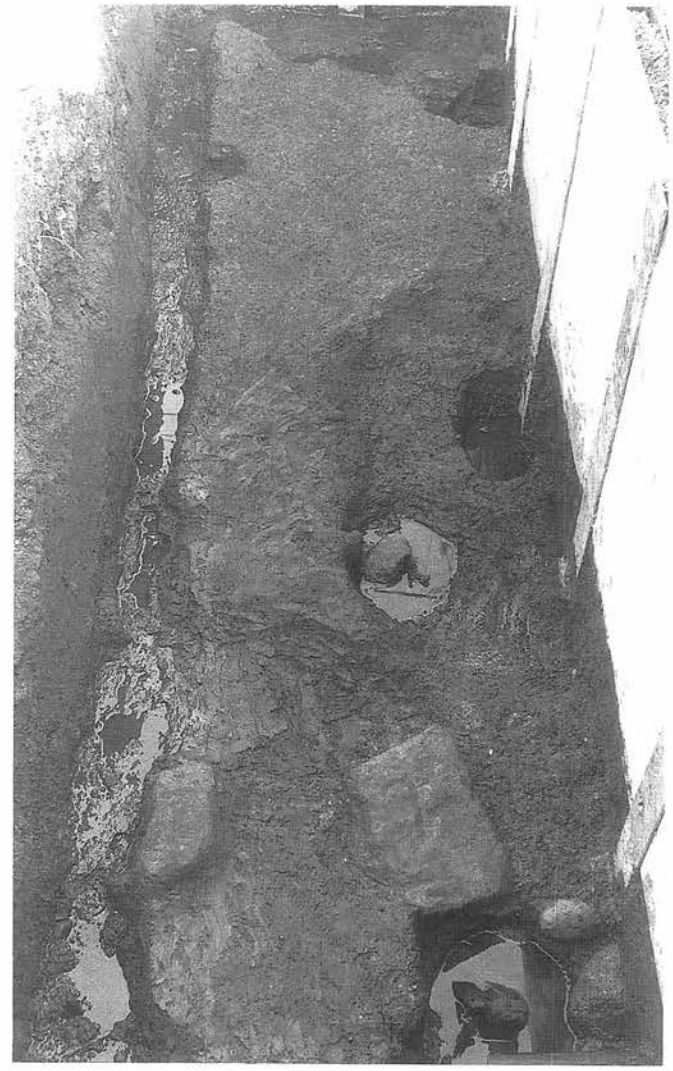
▲2.　第1トレンチⅠ面土壙1（北から）

▲3.　第1トレンチⅠ面全景（南から）

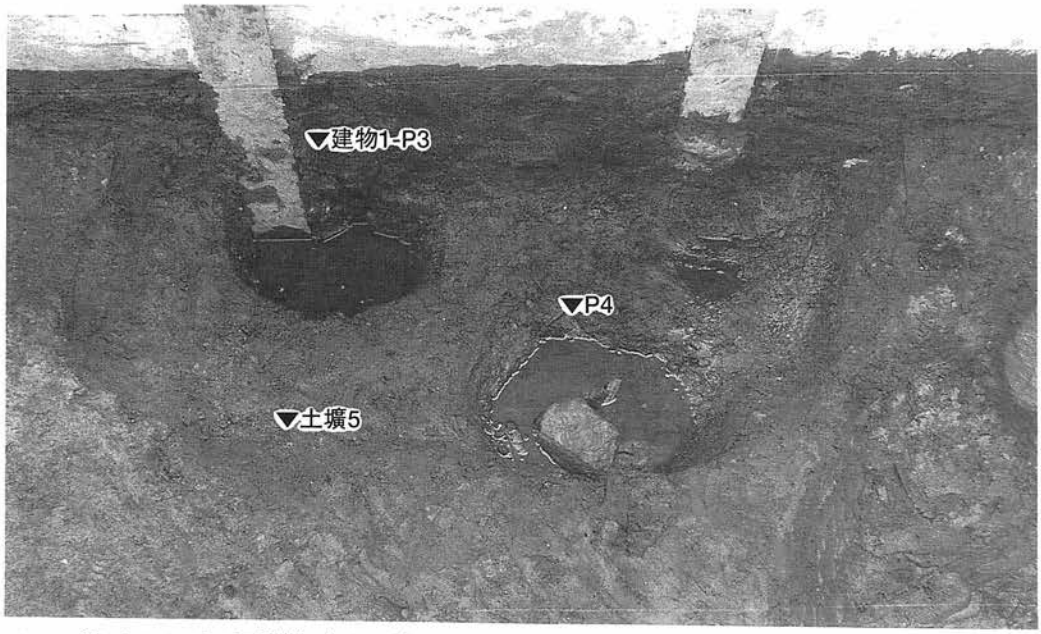
▲4.　第1トレンチⅠ面切石敷遺構（南から）

図版 2

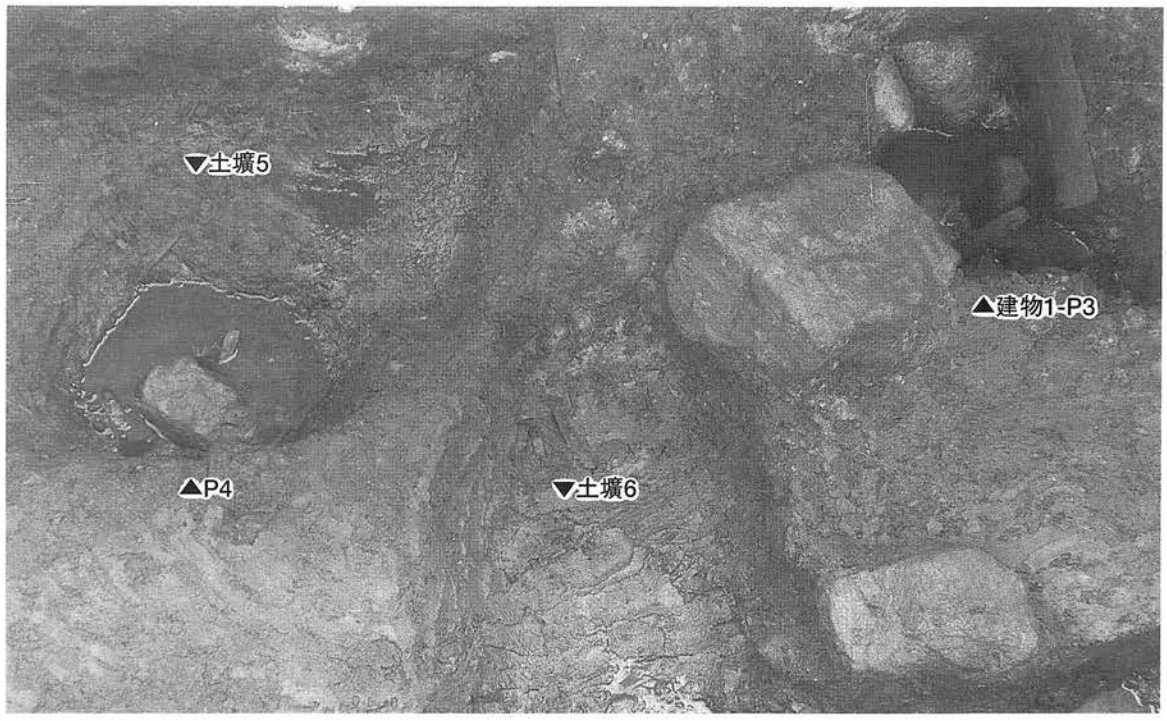
▲1. 第1トレンチⅡ面全景（北から）



▲2. 第1トレンチⅡ面全景（南から）

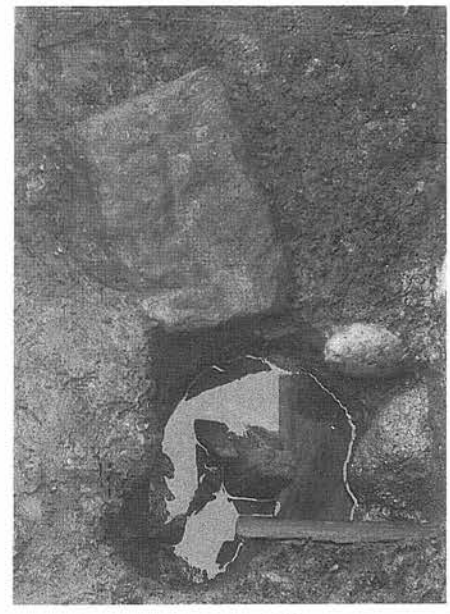


▲3. 第1トレンチⅡ面遺構（西から）



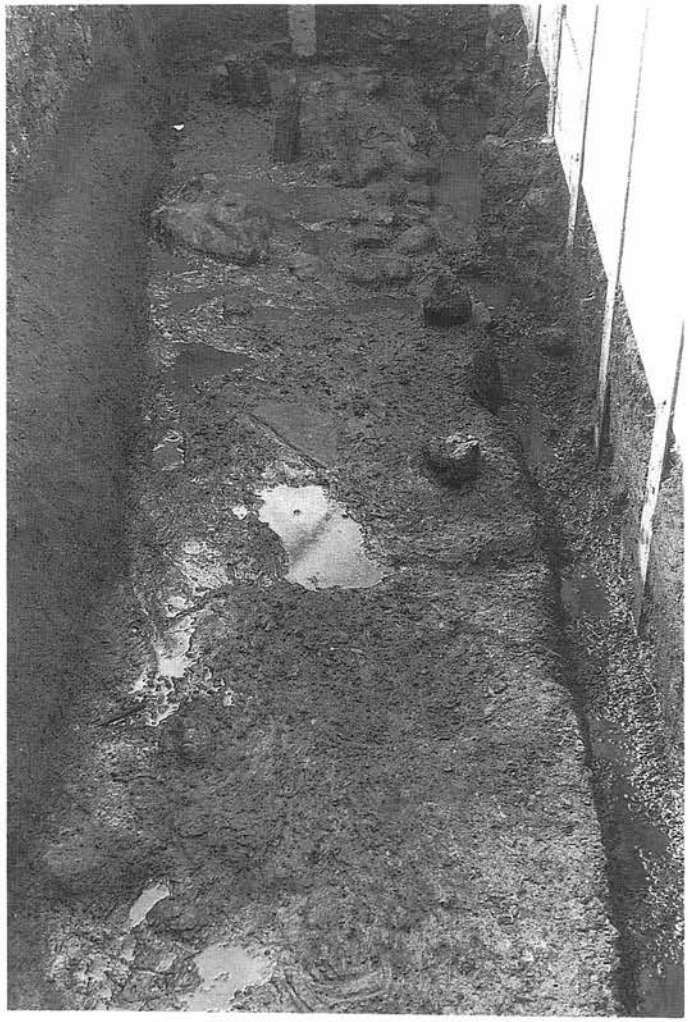
◀1. 第1トレンチⅡ面遺構（西から）

▲3. 第1トレンチ西壁端土層堆積（東から）



▲2. 第1トレンチⅡ面建物1-P3（南から）

図版 4



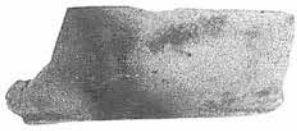
▲1.　第2トレンチⅡ面全景（北から）

▼2.　第2トレンチⅡ面南端土丹敷面（南から）

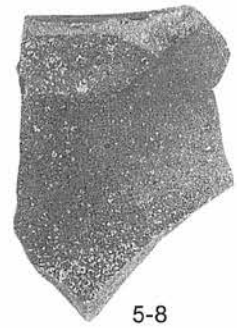
▲3.　第2トレンチ東北半土層堆積（西から）

5-1

5-2


5-3

5-4


5-8

5-9

5-5

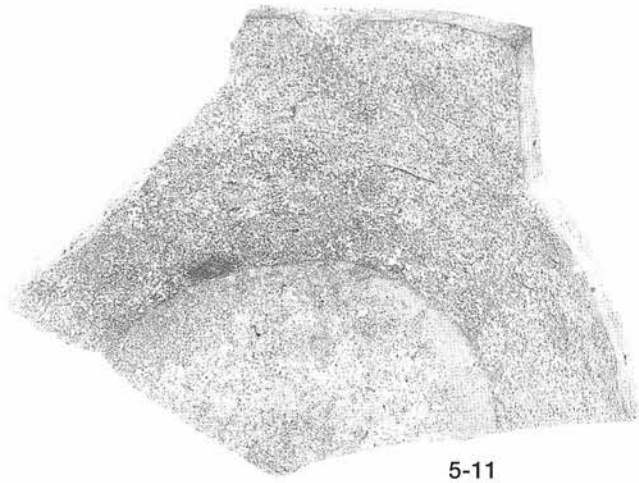
5-6

5-7

▲Ⅰ面上包含層

▼土壙1

5-10


5-11

5-12

5-14

▲土壙2

▼土壙4

▼Ⅱ面上包含層

5-13

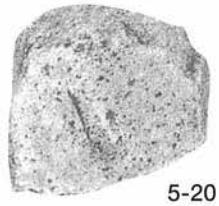
5-15

5-22

5-16

5-17

5-18


5-20

5-21

5-19

5-23

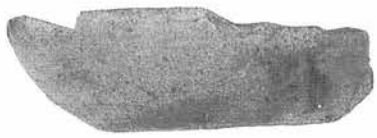
5-24

5-25

5-26

▲1. 第1トレンチ出土遺物

図版 6



6-27

6-28

▲土壙5

6-29

6-30

6-31

6-32

▲P3

▲1. 第1トレンチ出土遺物

8-1

8-2

▲近世層

8-3

8-4

8-5

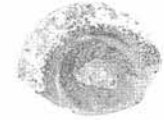
▼Ⅱ面上

8-6

8-10

8-11

8-12



8-13

8-7

8-8

8-14

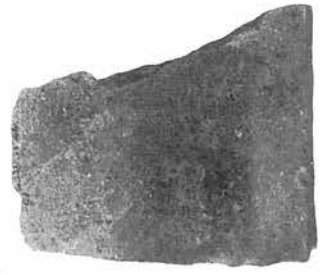
8-15

8-16

8-9

8-17

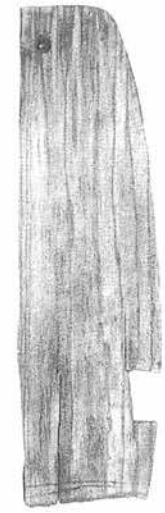
8-18



8-19

▲2. 第2トレンチ出土遺物

8-20



8-21

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	14
編著者名	原　廣志
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-0012　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ワカミヤオオジシュウヘンイセキグン 若宮大路周辺遺跡群	カナガワケンカマクラシコマチ 神奈川県鎌倉市小町二丁目28番3、5	204	No.242	35° 19′ 05″	139° 33′ 15″	19961221 ～ 19970110	9.13㎡	店舗併用住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮大路周辺遺跡群	都市	鎌倉時代 南北朝時代	土壙 建物 柱穴列 柱穴 旧河川	・かわらけ ・常滑窯製品 ・瀬戸窯製品 ・青磁 ・白磁 ・土製 ・木製品 ・鉄製品	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　14

平成９年度　発掘調査報告（第２分冊）

発 行 日　平成10年３月31日

編　　集
発　　行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　朝日オフセット印刷株式会社